
七神創話

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七神創話

【Nコード】

N9922C

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【シリアスめファンタジー/全61話】 主人公・松波勇気が異世界で頑張る長編冒険ファンタジー。伝説と、七神と、精霊と。何もない所から手探りで始まって、集めて、導かれて。旅を続けたその先に待っている……真実って何。

第1話（新天地）（前書き）

初めての長期連載でした。よろしく願います。

シリアスあり、コメディ要素ありとなっていますが作品中、今後の経過により残酷な描写があるかもしれません。同意した上で、お読み下さい。

携帯版（本文超分割版）があります。長文苦手な方にもお試しに
<http://ncode.syosetu.com/n3678e/1.html>

ご自分のスタイルに合わせてお選び下さい。

それでは、『七神創話』の世界へどうぞ。

第1話（新天地）

この世に四神甦るとき

千年に一度 救世主ここに来たれり

『七神創話伝 第一章』より

……

……

……暗闇の中で音がする。何の音かはわからない。
いや、ココが何処なのかさえわからない。

……でも、確かに音が聞こえる。ポタツ……ポタツ……水音のよ
うな音だ。

一体ココは何処で、私は何をしているんだっ たっけなあ……？

……

……

試しに一步、一步と歩いてみる。

不思議だな……足音もしないなんて。というか……まるで地に足
がついていないような感覚がするんだよね。

ポチャン。

音がした方へ振り返る。……何かが飛び込んだ音……？

そのうちに、私は堪らなくなって叫びたくなる。

……あー！ もう！ 何なのよ！？ この異空間はー！？
そんな風に。

……

「あれは……」

ハッと、目を凝らして向こうを見る。ココから30メートルくらい行った所に、『何か』が居る事に気がついた。最初、ウヨウヨっとしたものが動いているように見えたのに、段々と『それ』は姿を現してきて、ハッキリと見えてくる。それは。その正体は。

「りゅ、りゅ、りゅ、……」

私は口の形を『りゅ』の形にしたまま、その場で凍りついてしまった。そう、目の前にいるのはまさしく『龍』そのものだったんだもの！

巨大で、長い体に規則正しくウロコが並んでいる。タテガミが美しくユラユラと揺れていて、突き出ている角が鋭い。そして何より、こつちを睨んでいるかのようなギョロギョロとした目が……。

こ、怖い……。

「……は！ いかん、早く逃げなきゃ食べられる!？」

と。私はまるで鬼ごっこで逃げる子どものように、クルリと背を向けてバタバタと逃げ走り出してみた。

……が、行けども行けども。その場から一步も進む事はなかった。
えええ！？

「な、な、何でええー！？」

どうなっているんだ！？ と、半狂乱で叫びながら、手を平泳ぎのように懸命にかく。凄くブザマな姿だわ……とほほ。

15分経過したくらいで、頑張った私はハアハアと息をつき、とうとう諦めてしまった。そしてこの目の前の龍に喰われる覚悟をした。胸前で十字を描いてみる。

アーメン……。

覚悟を決めたので、もう一度この龍を正面からマジマジと見つめてみた。さっきは、いきなりで怖そうに思えたけれど。落ち着いてよく見ると、穏やかで優しそうな瞳をしている……。

それから今になって気がついたけれど。体が全体、青色だ。青龍なんだ。光沢が、キラツ、キラツと光っている。

「綺麗……」

思わずウツトリとしてしまった。その時。

私は突如、誰かにドンツ！ と。背中を押された。何とか踏みとどまってサツと振り返る。

「お、お兄ちゃん……？」

私の背中を押したのは、10歳違いの兄だった。背は高めで、いつもの格好であるクリーム色のトレーナーにジーパン。黒の運動靴で、腰には白いエプロン。右手にオタマ、左手に菜箸を握っている。

実は、事故で死んだ両親の跡を継ぎ、兄はひとりで自営のラーメン屋をしているんだ。私も手伝おうかと言った事があるんだけど、「邪魔だ」と邪険に扱われてしまったという。

兄は私に普通の中学生でいてほしいのだろう。いつもそう。こつちが言っても、何でもひとりでやっちゃうんだから……。

……。で。その兄に背中を押された私は、兄を見た。しかし兄は何も言っではくれなかった。

どうしてココに居るの？ と聞こうとしたが、やめた。だって何で私がココにいるのかさえわかってないんだものね。

「お兄ちゃん……？」
と、再度呼びかけた時。

なんと、お兄ちゃんが持っていたオタマで襲いかかって来た！

ふりかかってきたオタマを、私は間一髪でサッと横に避ける。一体何だ何だともう一度お兄ちゃんを見ると、いつの間にか死んだはずのお父さんとお母さんまでその隣に居るではないか！ あと、学校の友達や先生も……皆、大きな定規やらトンカチやら包丁やら口ープやらと。凶器を持っている。視線は私を捉えながらだ。

「ちょ、ちょっと。嘘でしょ」と、後ずさり。

けれど後ろには青龍が居るわけだし。後ろに行ったって無駄だって事はわかりきっている。

でもどつちかというところ……こつちの皆の方がコワイ、か、も……？

逃げよう！ 思ったった私は横へ逃げようとした……ら。誰

かに、ぶつかってしまった。イタタと顔を手で押さえながら、ぶつかったその人の顔を見上げた途端。

突き飛ばされた。全てが一瞬の事だったので、訳がわからなくなつた。混乱する。

背中もしくは頭が地面にぶつかる、と思ったのに。変な事に着くはずの地面がなくなつて……消えて。

……私はまるで『穴』の中へと、落ちて行った……………。

……

ドスン。

思いきり腰を打った。「アタタ……………」

パチツと目を開けると、見慣れた天井があった。ココは、あの暗闇じゃない。正真正銘、私の家の私の部屋だった。

「夢か……………」

何だ、とホツとした。

そりゃそうよねと納得する。訳がわかんない空間だったもの。それにしても、あの夢って……………。

ようく、ハッキリとしない頭でボンヤリとさっきの夢を思い出す。半分以上、忘れてしまった。思い出せるのは、青龍と、最後に私を突き飛ばした……………あの人。全てが一瞬の出来事だったけれど。確かその一瞬で覚えているのは、金髪で赤い瞳の、女の人……………だったって事。

年は私と同じか……………上だと思う。

あんな人、私は知らない。知り合いに外国人なんて居ないし。

「……………ま、いつか」

根が脳天気な私。さっきベッドから落ちた衝撃で打った腰を手でさすりながら、立ち上がった。そして部屋のカーテンをシャツ！と勢いよく開け、窓から注ぐ朝日を浴びる。実にさわやか人間じゃないかあ、と思いきや……………。「しまった！」と叫ぶ。

時計を見ると朝の8時10分。中学生は登校する時間じゃないか！ ぼおっとして暇はない。学校に行かなきゃ！

超急ぎで制服に着替える。赤のセーラー、前には2つのボタンが縦に並んでいる。形としては少し変わったデザイン。でも結構可愛いと思ってるんだ、自分ではね。

ブツカブカのソックスを履き終え、部屋を飛び出す。もちろん、昨日のうちに用意したカバンも忘れずに持って。

黒の学生カバンを抱えて、一階の方へおりた。店では、お兄ちゃんが開店の準備をしている。厨房で大きな鍋を前に腕を組んで、ジツと何かを考えている様子で……。

「お、起きたのか」

私に気がついて振り向いた。

「一回起こしに呼んだんだけど。返事がなかったし……やっぱり寝てたんだな」

と言って、どんぶりに鍋のスープを入れ、麺を加える。そして刻んだばかりのネギとか、あとチャーシューやモヤシなんかを入れた。

「へいお待ち。まあ、食べてみる」

と、少し微笑みを浮かべてカウンターに出す。箸をどんぶりの上に置き、「さあ」と促した。

あのお……遅刻しそうですね……。

そう思いながらも、手は箸を持ち、スープをすすり出した。しかしすぐにだ。私はむせる。

「ほ、うげ。」

……激辛！ 何だこれ。

「か、辛い……」

私は急いでコップに水を入れて、喉に流し込んだ。

「そりゃそうだろ。俺が3ヶ月かけて研究し開発した、名づけて『特製！ 勇ちゃんラーメン』だ！ ……見た目は普通のラーメン。しかしその実体は……超激辛！ 辛子たっぷりラーメンときた！」

兄は張り切っていた。目を生き生きと、とても輝かせている。

な、なるほど……確かに見た目は赤くも黒くもない、普通のラーメンだ。こりゃまあ、確かにびっくりだわ。ふむふむ。

……じゃ、なくて。

「ごちそうさま。私、もう行かないと」

スープを残し、カバンを手にした。いつもはもつとお兄ちゃん特製ラーメンをゆっくりご賞味してから学校へ行くだけだよね。とても今はそんな時間的余裕はないわけ。

「そうか。ま、気をつけてな」

と、お兄ちゃんは言って仕事に戻って行った。

さつきもチラツと言ったけれど。私は、7歳の時に事故で両親をいっぺんに亡くしている。その時の兄はまだ17歳。高校2年生で、優等生だった。でも事故の後、まだ小学一年生である私を養うために……また、家の家業を継ぐために。まず高校を辞めて、ラーメン修行をしながら自分で家を守る事になったんだ。

私を養いながら、たったひとりだね。

私も高校に行かず、お兄ちゃんと一緒に働くよ、と言った事があるんだ。でもお兄ちゃんは、それを頑かたくなに拒んでしまった……。

「何言ってる。俺の分まで、お前は学校に行け。俺はひとりで充分だ」

そんな風に言っ、私を仕事場に入れてくれた事はほとんどない。経済上では今ようやく安定してきたらしく、余裕が出来たのか、バイトの女の人がひとり入ってきたみたいで。

黙々とラーメンを作るお兄ちゃんと、出来上がったラーメンを運んだり、お客さんから注文をとったりするそのバイトの人……。

その光景を見て、私はつまらないな、と感じたんだった。

仕事に戻り私の方を見なくなった兄を見てそんな事を思い返しなから。私は横引きのガラス戸を開けて、「行ってきまーす」と言っ、て走り出した。

昔はよくゲームの相手とかをしてくれていたのに、ラーメンに夢中になってからは、とつても素っ気なくなってしまった。でも私は仕方ないさと。割り切っているんだ、一応は。そんでいいや別に、つてね……。

色々と考えながら走って行くと、道すがら近所のおばちゃん居てニッコリ笑って、挨拶をしてくれたのが目に入った。

「勇気ちゃん。今日はちょっと遅いわねえ。そうだコレ、持っておいきなさいな」

おばちゃんがそう言っ、て私に渡してくれたのは、みかん一個だつた。ちょうど今買っ、てきたばかりらしい。

「この前の町内のゴミ拾いで参加してくれたお礼よ。たいしたものじゃないけど、とつといてね」

「そんなあ……すみません」

「いいのよ。勇気ちゃんは、いつも頑張っているから……」

そうなんだ。私はあちこちで色んな人の世話を焼いている。時々しんどくなる事も、しばしばあったりする。昨日だって、放課後に友達が掃除当番を代わってくれと、頼まれたしね。断らなかつたんだ。ま、特に昨日は用事もなかつたから、いいんだけれど。

もし嫌だつたなら、断ればいいじゃん……と思うだろうけれど。私には、基本的にそれが出来ない。甘いんだよねって、つくづく思う。全く……。

私が手を振ってその場を去った後。おばちゃんは呟いていた。

「あの子は頑張り屋さんだね。ウチの子にも見習わせたいもんだわ……」

……

ええと。紹介がかなり遅れました。私、松波勇氣。中学一年生。髪はショートカットで、少し伸びてボサボサです……ははは。

元気いっぱい。どっかって言うのと優等生(?)で、放送部ではお昼のお姉さんを演じているんだ。歌も好きで、よく歌う。

私の通っている港中学校は、県内ではサッカー部と弓道部が強いつつてんで地元では有名。羨ましい。いいよねえ、放送部なんていつも努力賞だよ。そんな愚痴もたまにこぼしながら。まあいいじゃん、つとね。ふふふ。

学校に関して他に自慢できるものは何もない。平凡な校舎に平凡な授業があるだけ……あ。

そういえば。

今に気がついたけれど、自慢できるものがあつたじゃないか。とりあえず。

それは、課外授業。

普通の学校なら、家庭科とか社会とかいった教科の『授業』の中で校外に出たりするでしょ……ちよつと違うんだよね、ウチは。

『課外授業』という教科関係なしの授業だ。週に一度、校外に出て色んな事をするのが主。川へ行ったり、花の観察をしたり……そうそう前、パン工場の中を見学しに行ったっけな。パンの出来ていく過程が見れて、とても面白かった。お腹がすいちゃってすいちゃってもう。たまんなかったよ。

とにかく、外へ出て何かをするんだ。大抵は先生が行き先を決めるけれど、生徒の意見から行き先を決める事もある……とは言っても、いきなり イズニーシーに行こう！ とか、そんなこたあ言わない。例えば、雪が降り積もった日は雪合戦をしようとか、暑いし外へ行くのが面倒だから図書館で休もうとか。その程度なわけね。うん。

もちろん生徒は皆この授業が大好きなんだ。だって誰一人として休まないもんねー。

そしてその授業のある日は週末。今日は月明けの週末だ。給食を食べた後に、この『課外授業』があるってわけ。

「この前、港市に遺跡が発見されたのは知っているな？」

今回になって。教室の教壇にて先生が話を切り出した。この事を聞いた時、クラスの誰もが予想したと思う。そしてその通りに、先生は言葉を続けていった。

「今日は、そこへ行って発掘の手伝いをしようと思う。まだ発掘されきっていないから、ひよつとしたらひよつこり何かお宝が見つかるかもしれないぞ……もし珍しい物だったら、歴史に名を残せるチ

ヤンスだ！ ようし、全員！ 校庭に自転車で集合！ 徒歩の奴は、付き添いの校長先生の車に乗るんだぞ！」

先生が言い終わらないうちに。すでにクラスの皆は席を立って廊下へ出ようとして騒ぎ出していた。

……

自転車で、10分位行った所だった。あと100メートル位行ったら海が見えるかもって所。自転車を各自で決められた場所に停めて。先生が収集をかけた所へ皆、集まった。

それから、発掘に詳しいという人が何処からともなく現れて。発掘するにあたっての注意を淡々と語り出したじゃないか。ただ掘ればいいってもんではない、下に埋まっている物を壊さないように確かめながら掘るんだとか、あちこちドタバタ走りまわるなおんどりやあとか、根気と忍耐が大事で勝者だとか……。どうでもいいけれど、話が長すぎる。眠くなってきていた。

さあ掘るぞと意気込んでいた私達だったのに、段々と疲れてきた。そしてやっと、30分位の話の後。各自バラバラになって発掘を始める事になった。

「話が長すぎるのよね。あと一時間位しかないよ。……あーあ、せっかくな来たのになあ」

と、私の仲の良い友達、アッコがぼやいていた。

「ねー。私、寝ちやいそうだったよ」

返事を返すと、アッコがスコップを取りに行ってくれて、私に渡してくれた。そして。

「どこ掘る？」

「うーん……そうだなあ……」

と、辺りを見渡した。もう掘り始めている人がたくさん居る。早く決めて、掘り始めなくっちゃ。時間が勿体なくて焦っちゃうよ。

「もうちょっと、あっちへ行ってみようかな」

と私は自分の勘を信じて、海の方角へと進み出した。ぽつかりと穴が空いている遺跡より、少し離れた所へと向かって行った。

「ねえー。そんなに離れたって何にもないんじゃないのー？」

「うーん……でも、こっちのような気がするからさあ〜」

呼んでいるアッコの意見に逆らい、ずんずん皆が居る遺跡から離れた所へ行った私だった。足は止まらず、ずんずんずん。

「もう……勇気ったら。私、この辺を掘ってるからね」

アッコはその場に座り込み。セッセと掘り出したみたいだった。

私は、なあんにも気にせず、ただこっちにある気がすると思いながら、そちらへと進んで行っていた。

そしてだいぶ離れた所で、ピンと頭で何かが閃いた感覚に見舞われる。

「ココかなあ……」

と、その場にうずくまって地面を見た。何の変哲もないただの土だった。土は土で、ただの地面だ。うん。

「まあいいや。掘ってみよ！」

私はザクザクと掘り出した。傍目では何かにとり憑かれたように見えるだろう、無我夢中で。そうして何十分経った後、少しバテてきた時だったんだ。キンという変な音がしたので、覗いてみたら……。

「何だ、コレ……？」

『それ』を取り出した。形ある掘り当てた物を取り出し懸命に土を払う……何百年？ も土の中にあつたからか、サビてるし、土も湿っぽくて、払っても払ってもくっついていて、なかなか取れないよ。板かな、と思つたけれど。形は丸いし片側だけキラキラしているようだった。あ、これってひよつとして。

「鏡だ……」

うん。これは鏡だ。だって、よく見ると自分の顔が映っているもんね。

ひっくり返したり触って冷たさを確認しながら……私はニヤリと笑ってしまった。

だって、私はたった少しの時間でこんな珍しい物……を、掘りあてたんだもの。きっと皆、驚くに違いなあい！ そうよ！ うん！
思つて私はさっそく先生の所へ持つて行こうとした。立つて方向を変える。

すると、突然。全身に電流が走った……。

「きゃあー！」

私は悲鳴を上げて、鏡を落とす！ ……鏡は、地面に落ちて見事にパリンと音を立てて、割れてしまったのだ！

「…………げげ！」

今、自分がした事に対して真っ青になった。

鏡は割れて2つになってしまつている……その2つの破片を見つめながら、破片の入つていた額縁の方を持つ手が、ワナワナと……

震えている。

「ど、どうしよう……」

ひょっとしたら、これってまずいんでないの……？ もしかして何百年前の大事な産物かもしれないのに。割ってしまった……。

事の重大さに焦る。歴史に名を残すどころか、恥を残すのでは……。

……とにかくだった。その時はパニックってしまつて。素直に先生に申し出ればいいのに、私は土にもう一度それを埋め直し、なかつた事になると決めた。はあ、鏡？ 何の事、としらを切る姿勢だった。もう決めた。

大丈夫……バレないバレない、と自分に何度も言い聞かせた。呪文のように。いつまでも。大丈夫大丈夫……。

直後。先生が集合の笛を鳴らしたのが、遠くから聞こえてきた。

……

週明けの国語の時間は、作文の発表だ。先週の課外授業での感想を宿題で書いてきて、読んで発表する。作文といっても原稿用紙一枚程度だし。そんなに辛くはない。適当に書きちゃう。

「……で、……だったから、……でした」

しかし誰かが発表しているのを私は全く聞かず……耳の中を素通

りし、『鏡割っちゃったよ事件』を教室の窓外を見ながら思い出し、ふけていた。

どうしよう……私、とんでもない事しちゃったなあ……。

何ですぐ先生に言いに行かなかったんだろう、と。後で後悔した。そしてそれは数日経った今でも消えない。良心がうずいているんだ。「はああ……」

ため息は、一日中ずっと消える事はなかった……はあ。

放課後。

教室で。帰ろうと用意していたら、その容姿から『お嬢』と呼ばれている、峰山さんが私に話しかけてきた。お嬢はこう言う。

「私、見ちゃったのよね」

と。「え？」私は間の抜けた声を発してしまった。

言いながら私は、ドキン！と、心臓が飛び跳ねるのを感じていた。でも顔には出さず、あくまでも冷静にお嬢……もとい、峰山さんを見る。

「何の事？」

「またまた。とぼけちゃって。あんた、遺跡で鏡を割っちゃったでしょ。私、トイレ行った帰りにたまたま見ちゃったんだから」

背筋が凍った。

げ。

嘘でしょ……まさか見られていたなんて。

ドキドキが激しくなって、苦しくなってくる。まずい。

「黙っててあげるからさ。ひとつお願い聞いてくれる？」

お嬢が何故か甘えた声で私に優しい声をかけてきた。んんん？

「お願い？」

「そうそう。これをさ、新島さんに渡してほしいんだよね」

一通の手紙を私に渡した。白い、表には何も書いていない封筒を。

「それだけで……いいわけ？」

「そうよ」

何だか、わかんない。……まあいつか？

とりあえず……これを新島さんに渡せばいいわけね。ふん、お安
いごようじゃない。これで口を封じられるんならさ。単にそう思っ
た。

新島さんていうのは素直で大人しくて、クラスじゃとっても可愛
い女の子なんだ。だから結構、男子の間でもモテている。目がパツ
チリしていていいだの、髪が長くて腰まであってキレイだの。容姿
の面では女子からでもベタ褒めだ。羨ましい、その可愛らしさ。そ
れはそんで別にねたみはしないけれどさ。いいなあーって。ただそ
んだけ。

私はその足で、すぐにその封筒を彼女に渡しに行った。

でも彼女に渡す前に、中身を確認しておけば良かったのよねえっ
て後で思う。安請け合にしちゃってさ。バカよねえ、ほんとに。

そうすれば、封筒の中には新島さんを中傷するような内容の手紙
が入ってたんだって事に、もっと早く気が付けたってものに……。

それが判明したのは、次の日。

朝、教室でクラス中の皆が、ある人物を中心に集まっていた。その人物とは、新島さん。泣きながら、たった今登校してきた私を見る。そして何も言わず、また泣き出したという。

私は「え？ 何？」と言って、そばのクラスメイトに聞いた。クラスメイトは、まるで私を邪険にするかのように「自分の胸に聞いてみたら？」と言って、新島さんの元へと駆け寄って行ってしまったのだ。

気がつけば、私だけポツンとひとりでそこに居る。

しばらく変だなと様子を見ていたらお嬢がやって来て、手紙を私の前に広げて見せた。もちろん、昨日私がお嬢に頼まれて渡した手紙だった。私は広げられたその手紙の内容を読み、愕然として色を失った。

ひどい悪口がツラツラツラと連ねられていた。ちよつとモテるか
らつていい気になんなよとか、男の前ではイイ子ぶっているとか、
あんたの頭には十円ハゲがあるとかないとか、いやあるはずだとか
……。

「な、なな……」

言葉がまるでない。その隙に、お嬢が声を張り上げて私に言った。

「ひどいわね。松波さん。こんな手で人をバカにするなんて、卑怯
だよ」

この手紙を書いたのは私だとも言っているような言い方をした。
書いたのは紛れもなくあんたでしょーが！ と叫びたかった。で
も、叫ぶ前にお嬢の口攻撃が続いてしまう。

「新島さんが可哀そう。謝りなさいよ！……」

カチンときた。

「ちよつと待つてよ！ これ書いたの、あなたじゃない！」

と言った途端だった。お嬢はワツ！ と泣き出した。そして精一杯

の同情を誘う目で皆に言ったんだ。

「ひ、ひどい……！ 私のせいにするなんて……松波さんで、そんな人だったんだ。ご両親を亡くされて、お兄さんと一緒に頑張っているなって尊敬してたのに……失望したわ。私、あなたとは金輪際、口きかないんだからあ！」

そして大げさに、わああと泣き出す始末。

な、何よ それー！

私は頭にきているが、それよりも私達を取り囲むクラスメイト達の視線の方が気になってしまった。皆、私の方を嫌な顔つきで見ているように思えた。私は驚いて、大声を張り上げる。

「そんな……私じゃない！ 違うってば！」

クラス対私という構図。皆、状況からして私を悪者だと思っているみたいなんだ。何で人って、泣く子の味方になるのかなあ。大概は……。

……そんな事を考えている場合で、ない。何とかしないと……。

でも、私が何を言っても空しく。見事に私はクラスの中で孤立してしまっていた。

後で気がついた。

みーんな、お嬢の策略だったのだ。

きつとお嬢の性格からして。新島さんがあんまりモテるもんだから、ちょっとこらしめてやろうと思ったんだろうな。そしてちょうど、私が鏡を割って隠すなんてのを見てしまって、いいように利用してやろうと思ったんだわ。そうに違いない。

うつん。もしかしたら、最初から私の事が気に食わなかったのかも！

もつどつちでもいい。私は完璧にクラス中から無視され、友達のアッコさえ私から離れていってしまった。

いつの間にか、絶望とか……未来もへったくれもないとか、思うようになってしまっている。

お嬢はといえば、毎日相変わらずだし。……ったくもー、何なのよ、アイツ。

前にお兄ちゃんが、「バカな奴に対して怒りや憎しみで返す奴もバカだな」と言っていた事を思い出した。それって、この事だろうか。この事を言っているの？ お兄ちゃん。怒っちゃダメでバカなの？ 教えてよ。私にはわからない。

にしたって……何で私がこんな目に遭うんだろうか。

重苦しいまま、一週間が過ぎた頃。私は過度のストレスからか、腹痛で学校を休むまでになっていたんだ。どうしようもなく。

夢の中で、悲しい事ばかり浮かんでくる。こんなに沈んだのは、両親が死んで以来だと思い出す。

自分の部屋で暗い天井を見つめながら、ポタリと涙が勝手に……流れて落ちていく涙を拭う事もしないで、ただぼうつとしていた。「泣いてたつて、仕方ないじゃない……」

と、誰かに聞こえるかのように言った。部屋では、私がひとりぼっちで寝ているだけだったけれど。

悲しい事があると、他の悲しい事まで連鎖して浮かんでくるらしい。

こんな状態は、はつきりいつて苦しいよ……。

……

やっと落ち着いて眠りかけた時、下の店の方からガラスの割れる音がした。

何だろう？ と。そつと階段をおりて行く。すると、お兄ちゃん

と女の人の声がした。

「何で急にそんな事を言い出すんだ！」

「だって……！ もう、耐えられないのよ！ 私と妹と、どっちが大事なのよ！？」

ケンカだった。にしても、まるで2人は恋人同士のようだった。もしかして、お兄ちゃんと誰かが付き合っているんだろうか？ 相手の人は……と。そつと陰から見ると、その女の人はバイトで来ている女の人だった。両肩の前に垂らした茶色い髪で、耳には水色のピアスをしている。普通の、大人の女性といった感じがした。

「どうせ妹だって言うんでしょ。妹が何だってんのよ！ あんな厄介な子、居なくなっつてしまえば……！」

その時、パシッと叩く音がした。そして数秒後「もういいわよ！」と言って、女の方は店先から出て走り去って行った。後に残されたお兄ちゃんは、下に散らばったガラスを片づけ始める……その顔は……とても暗く寂しそうで、悲しそうだった。

(私のせいでケンカを……？ そんな……)

私は階段の手すりに掴まるようにして、うずくまった。

どうしてこうなってしまうの？ お腹が痛い……うっん、それ以上心痛い。

(私のせいで……お兄ちゃんは幸せに、なれない……)

それを考えると、いったんは止まっていた涙が急にどつと溢れ出してきた。

私、一体何で生まれてきたんだろう？ どうして お兄ちゃんを不幸にするんだろう……？ 連鎖は続いた。

次の瞬間、私はパジャマのまま裏口から走って外へ飛び出していた。

居場所がない。もう何処にも。

学校にも行きたくない。家にも居たくない。痛い……。痛くつて、何だか自分を切り刻みそうになる。この行き場のない思いは、一体何処へ行けばいいんだろう……？

雨が降っている。パジャマはビショビショだ。でもなお私は走り続けた。近所を抜けて、商店街を通り抜けて。交差点を何度も曲がり、気がつけばそこは、かつての遺跡の前だった。一体いつの間にか……何処をどう来たのかは忘れたけれど、めいっばい走ったのは確かだった。

ハアハアと息をつき、ゆっくりとロープの張られた遺跡の中へ入る。雨のために中止したのかもしれない。発掘に関わってそんな人は、誰も居なかった。それを見て、とても安心する。

「あ……」

歩いて行くと目の前に、ポツカリ空いた横穴を見つけた。大人ひとりは、軽く入れるだろう。前に来た時はなかったと思うんだけどな。いや、あつたんだろうか。覚えていない。

「ちょうどいいや。雨宿り……」
と横穴に入った。グツチヨリ濡れているのに、今さら雨宿りって……とも思いつつ。中で座り込んだ。ヒンヤリとしていて、凄く寒くなる。このままじゃ、凍死してしまうんじゃないか。ちょっとまじいなと思った。

周囲を見回してみる。何かないか……ライターとかあったら、まあ最高なんだけど。でも燃やす物がないか。うーん。

すると、奥で何かが光った。

ソロソロと近寄ってみると、足元に落ちていたのは鏡だった。何処かで見たとはいきや、この前私が割った鏡だと思ふ。額縁の装飾の特徴を覚えていたから。確信している。

何でココに……と首を傾げたけれど、たぶんあの後に調査の人が誰かが見つけたんだらうと、勝手に解釈をしておいた。

真つぶたつに真ん中が割れた鏡。それを胸に握り締め……俯き加減で、呟いた。

「戻せるなら、戻したい……」

この割れた鏡のように。私の心も割れてしまった……私は、そんな風に考えた。

何て悲しい呟きだらう。

私は今、ひとりぼっちだ。何故だらう。

もし戻せるなら、過去に戻って何もかもやり直したい……。

そう思った直後だった。

突然、地響きが起こり、地面が揺れる。

「地震!？」

ゴゴゴゴゴ……凄いい轟音だった。私は小さくうずくまり、必死で自分の身を護るようになつて固くなつた。一瞬、フワツと浮き上がった感覚がしてドスン! と落ちたような体の感触や、衝撃を感じた。私はココで死ぬのかなんて考えていた。

そして、物凄い音はやがてピタリと止む……静かになつた。

「治まつた……良かった……」

恐る恐る目を開けると、さっきまでそこにあった出口が消えてしまっていた。

私はえっ!?! えっ!?! と、壁となった出口を触る。最初、この横穴の上の岩が崩れてきて、出口が塞がれたと思ったのに、どうやら違うらしい。私の居た場所……その下は実は空洞になっていた、突然足場が崩れて。下の空洞の中へと落ちてしまったらしいのだ。つまり、巨大な落とし穴へハマッてしまったという事。

「うっそ……ココから、どうやって出るわけえ!?!」

ポツカリ空いているはるか上を見つめ、落胆した。とても今の自分じゃ這い上がって登れそうではないじゃないか! ……嘘でしょ?!

こんなに深い穴に私が落ちたの? ……そんな感覚ではなかったように感じたのに……ううん、気のせいかもしれないけれど。でもそんな事より現実、もしかして一生ココからは出られないんじゃない……という長々と不安が、後押しして徐々に徐々に押し寄せてきていた。

「誰か……誰かあー!」

叫ぶ。誰も居ないとは思う。でも、誰かが通りがかるかもしれないとも思ったから。叫んでみる。

しかし、やはり声が空しくこだまするだけ……だった。

「まずい……どうしよう? 寒いし、暗いし……」
と、半分、泣きかけの状態の時だった。

壁自体が、鏡になっている事に気がついたんだ。いや、ココだけではない。よく見ると、縦に長い全身映る鏡が並んで何枚か壁にはり付いていたんだ。上から見て円状にはり付けてある。つまり、私を取り囲むようになってわけ。

「凄い……鏡ばっかりだなあ……」

暗がりで気がつかなかった。よく光沢を見ると、色がついているように見えた。赤、黒、緑、黄、青、紫、茶……七色に分かれている。七色の鏡がはり付けてあるようだった。

……そうよね。泣くだけエネルギーの無駄だし、どうせ、お兄ちゃんか私を捜してくれるだろうし。ココは落ち着いて、鏡を観察しようっと。そうしよう。あはは、これが根っからの脳天気！ うん、何だか元気出てきた。元気もつと出そう。うんうん。

そうやって気持ち直った私。改めて鏡を見まして。

七色の鏡の前で私の目を一番に惹いたのは、何故か紫色の鏡だった。薄紫色で、何処か神秘に満ちている。

綺麗だなー、なんてウツトリしてしまった。ウツトリしっとり、またウツトリ。飽きない。

つい、手で触れてみた。そうしたらだった。

スポット（！）、体がその鏡を通り抜けてしまった！

……

最初、感触はなかった、というのに。

私の体は、何かに弾かれたように……パンツ！ と、通り抜けた後に衝撃を受けて、地面に倒れた。

そして、少しの痛みが全身に伝わった。

「痛あ……」

どうやら、また何処かに落ちたようだった。右ヒジを押さえて、

目を開ける。

「……」

森だ。

そう思って、すぐにガバツと起き上がった。見回すと、ココはさつき居た穴の中なんかではない。木があっちもこっちもボウボウに生えた、森の中で倒れていた。

「ココは一体……？」

と、立ち上がるうとすると、突然何か生温かいものがピチャリと飛んできて頬についた。

えっ？ と、はるか前方を見ると、巨大な動物？ ……が、ズン……！ と砂埃を立てて倒れた所だった。

さっぱり要領を得ず、その光景をただひたすらに眺めていると。ひとりの人間の男らしき人物が、こちらへと近づいてきていた。私はジーツと目を細めて、恐らくは彼 を、観察する。相手も私を見ているようだった。暗がりにも目が慣れていった。

髪が割と長く、サラリとストレートな毛質で、色がたぶん薄紫色だった。何処か色気のあるような容貌。女顔らしい、まつ毛が長めで整っている顔立ち。上下とも黒い格好で、白い上着。足が長く、これまた細い理想体型で。かっこいい。

キラリと光る、耳のピアス。右腕の箇所箇所に2つ、左腕にも2つ……か3つ、銀の装飾の腕輪を しているみたい。指輪を……指に何個も着けている？ 黒っぽく見えるけれど、そこまではよく見えない。

何だ、ビジュアル系のライブにでも行くのかという格好の、その若い男。私の顔を見て。

「お前は何者だ」

済んだ声を発した。
しかし私には、何かなんだか……いつかの夢の続きでも見ている
のかと、思った。

《第2話へ続く》

第1話（新天地）（後書き）

【あとがき】

昔に書いて途中で放置され眠っていたのを掘り起こしてきた作品です。なので、現代と違う部分などを直しながら書き進めています。土曜日って前、月2休だったんだなあ……（時バレ）。感想など、いつでもお待ちしております。

ブログでも公開しております（挿絵入りです）。

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-29.html>

ブログでは第1話だけお試し版で全文を掲載していますが、2話以降からは本文一部のみ挿絵入りで掲載しています。お暇つぶしに気軽にどうぞ。

それでは、第2話へ……お邪魔いたしました（礼）。

第2話（救世主、降臨）

お前は何者だ。

私に言わせてみちゃ、あんたこそ何者だといুকらいだ。さつきまでゴツゴツとした岩が、たくさん、なんたらいう遺跡の中だった。鏡張りの部屋へ落ちて、鏡の一つに触った途端。なんと通り抜けて、気がつけば、こんな森の中に来てしまった。

で、今。私の目の前に居るイイ男。サラサラの、薄紫色の長い毛をサラリと動かしながら、私に近づいて来た。私はというと、ただキョトンとして彼……たぶん、を見つめるばかり。まるで子供のように……いや、子供なただけどね、まだ私は。

しばらくの沈黙を破って、彼は右手の人指し指で自分の右頬を指しながら、

「ここ。血が ついてる」
と私に言った。

は……と、ポカンと口を開く。そしてハッと気づき、私は自分の右ほつぺたを、こする。さっき触れた生温かいものは、血だったのだ。

彼……の後ろには、巨大な動物が横たわっている。血だらけで、状況から察するに、彼 が、この動物を倒したのだろう。よく見ると、彼の服にも少し血が付いている。

「あなたこそ、血が ついてるわよ」

と私が言うと、彼は「ああコレか」と言って服を払った。

「俺の血じゃない」

やっぱり男だ。自分の事を俺……って言ったから。だって本当に綺麗な顔なんだもの。女でも通用しますぜ、旦那。

「あ、あの……ここ、何処ですか？」

と、私は ときまぎししながら聞いた。すると その男は不思議そう

に、

「何処つて……サークの森だが……。ひよつとして、お前、迷子か？」

と、彼は綺麗な瞳で私を品定めするかのように見た。私はといえば、すっかりウロたえてしまふ。

「迷子……のようなもんなのかな。とにかく、私、こつちの世界の住人じゃ……」

と夢マボロシかと半疑で言いかけた時。

彼の後ろで転がっていた暗闇の中の巨大な動物……見た目ゾウのようでコウモリの翼らしきものが生えている、動物。目は赤く血走つて、こつちを睨んでいた。長い鼻を挟むように2つの巨大な角が生え、そして……巨大な口が。口からウオオ……と、これまた大きな叫び声で、そして彼に今また襲いかかろうとしていた。

私はといえば、ただ目を見開き震えるばかり。

だが、彼は一步も引く事もなく、両手を前に構え、何か紫色の淡い光の塊を作り出し、ブツブツと何かを唱えていた。そして、巨大な動物の前足が彼を踏みつぶそうと、迫って来た。

「危ない！」と叫んだ。しかし彼は動じる事もせず、両手を その動物の前に突き出した。

「かまいたち
“鎌鼬”！！！」

と彼が叫ぶと、淡い光の塊は、動物へ向かって大きくなっていった。放たれた。

光の塊が動物の全体を包み込むようにして覆うと、曲刀のような刃が次々と現れ、次々と動物の体を切り刻んでいった。そして血が飛び出し、また その場に倒れた。しばらくピクピクとしていたが、やがて それも なくなつた。完全に息絶えてしまつたようだ。

「ひ、ひどい……」

と私が言うと、彼は髪を風に なびかせ、吐き捨てるように言った。

「そうだな。でも やらなきゃ、こつちが やられる」
背筋がゾクゾクした。私は腰が抜けて立てない。

しかし彼は、そんな私を置いてサツサと行こうとしたではないか。
「ま、待つて。置いていかないで」

と私は這うようにして彼を引き止めた。良いように利用されたあげく、捨てられてしまったカミさんのような心境だ。「あんた待つて、いかんといて」とでも口に出てきそうだ。

「何だ。何か用か。……早く そいつから離れた方がいいぜ。野鳥の……そうだな、ここいらならルビーカラスでも血の匂いを嗅ぎつけて、群がってくるぜ」

と……そいつとは、さっき倒した巨大生物だ……を、視線で指した。「そんな事言われたって……腰が抜けて、立てないの」と、精一杯の同情を誘う目で見つめた。

彼は、やれやれと いった表情で私を おんぶして その場から離れた。

ひゃー……。何かドキドキしたね。男の人の背中に おんぶしてもらうなんて。しかも、こんな綺麗な お方。たぶん一生で一度きりかも。

香水のような香りがした。それで心臓の高鳴りは激しくなって、気がつきやしないかとビクビクしていた。

さっきの場所から数百メートル行った所で、彼は私を下ろした。

「あ、ありがとう」

と私は とりあえず お礼を言った。

「あんた軽いな。体重いくつ？」

と真顔で聞くから、こつちは超しかめ面で「女の子に それはタブーでしょ」と言ってやった。彼は「それもそうだな」と言いながら、また 何処かへ行こうとした。私は慌てて「何処に行くの」と聞くと、彼は振り向いて右手を振りながら、

「焚き木集めてくる。今日中に森を抜けるのは無理だしな。あんだ、そこで待ってる」

と言って、彼は自分の白い上着を脱いで、私に放り投げた。そしてサツサとどこかへ行ってしまった。

ぼつんと取り残された私。何か異様に寒いな、と思ったら、私の服はびっしょりと濡れていた。そう、さつき こつちに来る前、雨の中を走ったからだ。しかも服はパジャマだ。つまり、薄着。寒いはずじゃないか……。

こつちの世界？の方が、少し暖かい気は、する。でも、やっぱり寒いや。

一回寒いと思うと、何だか どんどん寒くなってきた。彼……焚き木集めてくるって言うってたな。焚き火するって、事なのね。もしかしたら私、濡れてたし、暖めてやろうって思ってくれたのかも。

あの人……いい人だな。

そう思いながら、私は さつき彼が投げた上着を着て、少し顔を赤らめた。

……遅い。

さつきから30分くらいは経ったような気がする。いやでも、時計は無いし、ひよっとしたら まだ10分くらいしか経ってないのかも。

でも やつぱり、遅い気がする……。

私は やあゝな事ばかり考え出した。もし、このまま帰って来なかったら？……私一人この森に取り残されて、こんな訳がわからない世界で怯えて、そして……さつきみたいな変な動物に喰い殺されたりして。

さ……っ……つと、血の気が引いた。嘘でしょ嘘でしょと、パニくってしまう。そしてついに私は、さつきの彼の後を追いかけて、立ち上がって動いた。その時。ちょうど戻って来た彼とぶ

つかった。

「何だ。何処へ行く。待つてろって言っただろっ」

と、両手いっぱい焚き木を下へ全部置きながら、私の顔を見た。

「だって……怖かったんだもん」

と、私はシユンとして小さくなった。彼はフーっとして少しため息をついて、私を「座れ」と言っただけ促した。

彼が鮮やかに火をつけた後。

「服が濡れているだろ。しかも、すごい薄着だな。俺の服、貸してやる。早く着替える」

と言っただけ、彼は左の上ひじにつけた腕輪から、服を取り出した。何かこう……ドラ もんの四次元ポケットからみたい。私が物珍しそうに見るもんで、彼は ちよつと首を傾げた。

「縮小自在ポケット……知らないのか？ 変わった奴だな」と。服を私に渡す。

私は それを持って、木陰へ移動した。着替えるために。ちらりと横目で彼を見て、「覗かないでね」と言っただけ、「子供にや興味ないよ」と言っただけ、さも面白そうに私を見た。「ああそうですか。すみませんねえ、まなイタで！」と、私は怒り顔。

ちよつとブカブカの赤いトレーナーと、黒いスパッツ。結構 暖かい。トレーナーの裏の毛は、手触りが違う。何の毛なんだろう？ 私が着替えて戻ると、彼は夕飯の用意をしていた。焚き火の横に、どこから捕ってきたのか、鳥を丸裸にしたものを、2羽程、こんがり焼いていた。それと、隣には鍋だ。鍋でスープを炊いている。たった あれだけの時間で、なんて素早いんだろうと感心した。しかも鍋なんて……例の“縮小自在ポケット”ってやつから取り出したの？

「服貸せ。乾かすから」

と、手を さしのべたので、私はパジャマを渡した。彼は また素早く、立てた木の棒に広げてかけた。

彼が用意した夕飯を ご馳走になって、2人とも ぼおっとして

いた時。

ふいに彼が自己紹介をした。

「俺はセナ。理由^{わけ}あって旅をしている。あんたは？」
と私に聞いたのだが……。

「私は松波勇氣。勇氣って呼んで。私は……」

と行き詰まった。こっちの世界に来た、違う世界の人間だと言って信じてもらえるだろうか？ いや、たぶん信じてくれない。だって私だって半信半疑なんだから。

でも明らかに、私の知っている世界とは違う。さっきの巨大な動物なんて見た事も無いし、縮小自在ポケットなんてドラ もんの世界でないか。

これは、あの遺跡の中の鏡を通り抜けたせいで、こっちのワンダールドへ来てしまったと解釈するのが普通だろう。

としたら一体、どうやって帰るんだっ！？

「勇氣。お前……何で あそこに 居たんだ？ というか、何で現れたんだ？」

と、セナは よくわからない事を言い出した。

「俺が戦っている最中、ものすごい光が現れたんだ。まぶしくて目を閉じて、開けたら お前が ちょこんと倒れてた。一体あの光は何だ？ どうやって あの場所へ現れた？」

言われても……と、私は困ってしまった。

ううん。話すべきだ。

だって彼以外、私には誰も いないんだもん。事情を全部説明して、味方についてくれた方がいい。

私は そう納得して、彼に洗いざらい全部を説明した。

家を寝巻き姿のまま飛び出して、遺跡へ着いて、変な鏡の部屋を通り抜けて こっちの世界へ来ちゃった事。

この事を できるだけ詳しく、真剣に話した。彼は何の反応も示

さなかつた。黙って、最後まで私の話を聞いていた。

そして話し終えた後、ちよつと考えた風に口を開いた。

「そんな事が、現実にあるんだな……」

それを聞いて、私は驚いてセナを見た。

「信じてくれるの!？」

「え…… ああ。光の中から現れたし。しかも あんな格好で。

この世界の事、何も知らねえみたいだし。信じるだろ、これ」

と、セナは頭をかく。何かを思い出そうとしているみたいだ。

「ありがとう! 私…… 信じてくれなかったら、どうしようかと思つちやつた!」

胸を撫で下ろす。その顔を見て、セナは何かピンと来たようだ。

「そうか…… お前、『救世主^{メシア}』だろ!？」

「は……?」

セナが変な事を言い出したので、私は目が点になった。

「なによお。普通の女の子よ! まだ13歳なんだから! しかも

家はラーメン屋! 『めしや』なんかじゃないわよ!」

「違う違う。『めしや』じゃなくて『救世主^{メシア}』! …… そうか……

何か この条件、どこかで聞いた事があると思った」

と、ブツブツと一人言を言い始める。

「何の事? それ……」

「この世界の神話だ。伝説だよ。えつ……と。確か……。『この世

に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主ここに来たれり』って冒

頭から始まる、確か……あの書は、そう。“七神創話伝”っていつ

たっけ。うん。そうだ。そうそう」

と、一人で納得しちやっている。私は ついていけない。

「とにかく、こつちの世界にある神話の話に、状況がソックリなんだよ。話には、続きがあつて、確か……んと、よく覚えてないけ

ど。その救世主って奴は、ある時 突然 光の中から現れて、この世界の あちこちに存在する七人の精霊使いを集めて復活した……朱雀、白虎、玄武、青龍の いずれかを封印したって話だ」

「その封印する救世主ってのが、私だとでも？」

と、自分を指さす。んな あほなあ、という顔をした。

「だって私。普通の中学生なんだよ？ そんな事、できる力なんて持ってないもん」

「でも、光の中から現れたじゃないか。世界の次元の壁を超えてさ」とセナは じつと こちらを見た。私は ますます自信を失くす。

「とにかく……。勇気が それかは置いといて。帰りたいんだろ、元の世界にさ」

と優しく見つめられ、最初はドキツとしたが、その言葉の おかげで私は思い悩んだ。

帰る？ あの世界へ……。私の居場所なんてもう無いのに。学校では汚名を着せられ、家では お兄ちゃんに合わせる顔が無し。

中学生という半端な私には、家と学校しか居場所は無かった。趣味とか特技なんて特に無いし。そりゃあね、ダンスが大好きで大好きで、毎日ダンス教室へ通っているんだ！ なんて生きがいがあれば、まだ良かったのに。

私は ただの生きがいの無い一般中学生だっていう事。

……。それを思ったら、悲しくなってきた。雨の中で走った時の心の痛みが、今にも復活しそうだった。

私、一人なんだ。

「……もういいよ。もう寝よう。俺が火の番してるからさ。ゆっくり休め。明日は早起きして この森出るぞ」

セナが そう言い出した。

この人、本当に いい人だ。きっと私の顔が曇ったのを見て、察してくれたのだろう。私が嬉しかったのは、私の顔が曇った理由を

聞かなかった事。きつと、わざと聞かなかったんだ。

……いや、ただ単に、関わりたくないからなのかも。

うづん、きつと正解は前者だよ。彼、すつごく根は優しいんだ。だって今までの行動から見ても、そうとしか考えられない。

という事を考えて、私は言葉に甘えて先に横になった。

「ありがとう。じゃ、おやすみ」

「ああ。おやすみ」

1・2・3……グウと私は深い眠りに ついた。

夢うつつ、私は目を覚ました。

というか、起こされた。どこかで子供の泣き声があったからだ。最初は気のせいかと思っていたんだけど、どうやら本当に どこかで子供が泣いているらしかった。

私は起きて、立ち上がった。そして耳を澄ます。横で寝ているセナの寝息と、木が風にさらされている音と。そしてシクシクという子供の声だ。

とにかく、その声の方へ行ってみる。セナは火の番をしていて私より遅くに寝たはずだ。疲れているかもしれない。起こさない事にした。

で、行ってみると。奥の方で子供が一人、うずくまって泣いていた。まだ7・8歳位の少女。髪を横2つに束ねている。私が近づくと、顔を上げてこちらを見た。

「君、どうしたの。何でこんな所に？」

と私が聞くと、私にしがみついた。そして、

「マザーの熱……下げる薬草が、残り尽きてしまったの。もう夜遅くで薬屋さんは開いてないし。仕方がないから、森に薬草を探りに来て、そのまま道が……」

と、事情を説明した。

マザーって、ママの事かな？

とにかく私は、その子を抱きしめて頭をポンポンと叩いた。

「大丈夫。お姉ちゃんも、もう一人お兄ちゃんが居るから。一緒に森を出よう。薬草は、見つかったの？」

すると、少女の手に固く握られた一本の草を見せられた。

「これを すり潰して飲むの。本当はね、お医者のお薬の方がよく効くんだけど。でも、ウチ、そんな お金無いし。第一、お医者所へは ここから何キロも離れているから」と、しよぼんとした。

お医者さんが近くに無いと不便だろうな……。もしもの時は、手遅れだつてあり得る。でも今は そんな事言つても仕方ないか……。

私は その少女を連れて、セナの所へ戻ろうとした。すると。

一匹の虎が、こちらを見ていた。その目は、完全に食欲の目だった。一体、いつの間に近づかれていたのか！

「キライオンだよ！ お姉ちゃん！」

「キライオン！？」

「気配を殺して忍び寄つて、肉を食べちゃうのー！！」

に、に、にくっ！？ 肉食っ！？ いや、言われずとも たぶんそーだろーと思つただけど！

やばい……私たち、食べられるっ！？

(ど、ど、どうしよう……。セナがいるのは あの虎の向こう側だし。でも、反対側の こつちへ逃げたら、完璧に森に迷つてしまう可能性大。でも、そんな事言つてらんないか！?)

森に迷つて餓死するか、こいつに食べられて死ぬか。

しかし、そんな事を考えている間に、足は すくんでしまつていゝる。もはや絶望的かつ！?と ぎゅつと目をつぶつた。

「セ、セナあつ！！ 助けてツ！！ お兄ちゃん……！！」
と、少女を固く抱きしめて祈つた。

キライオンが、こちらに飛びかかろうとした時。

「“疾風”！！」

という声のもと、強風が竜巻のように螺旋状になり、キライオンを包み込んだ。そして、その風は強靱の刃にでも化したように、キライオンの体を鋭く切り刻んだ。

「ギャウー！！」

と、キライオンの呻きが聞こえた時、その体は何ヶ所にも切り刻まれ、内臓やらも飛び出した。そして辺りの木が、血に染まった。

最後に、キライオンの首が　なんと降ってきた！

「……………！！」

声が無い。あまりの恐怖に、失われてしまったようだ。

その後、キライオンを　そんな風に切り刻んだ男……彼、セナが駆け寄った。

「大丈夫そうだな。ああ　びつくりした。気がついたら　居ねえし。すぐ見つかって良かったぜ。……………ん……………？　その子は？」

と、平気な顔で少女の顔を見下ろした。が、少女は　すでに気を失っていたようだった。

「ちょ、ちよつと！　大丈夫！？」

と、その少女の体を揺らすと、パチツと目を開けた　その子。そしてセナを見た途端、私に抱きついた。

「怖かったよおお！！」

と私に　すがりついて　わんわん泣いた。するとつい、私も　もらい泣きして、わんわん泣き出してしまった。

「私も怖かったあ……！！」

と、まるで子供のように（だから、子供なんだって！）泣きじゃくった。

2人で　そんな風に泣くもんだから、セナは　うんざりした表情で呟いた。

「何か、俺が泣かしてるみてーじゃねえか！」

朝日が、見え隠れしていた。

一方……その頃。

ある闇の部屋に、ある男が一人、何かを一心に見つめていた。

その何かとは、青白い光に包まれた、水槽の中の一本の刀だった。水槽は大型の機械の上に備えつけられていて、何十本もの赤や白や青のパイプやコードが取り付けられていた。

刀が水中で、つながれていたコードに何十本も絡まれて、何百個もの水泡が発生していた。ブクブクブク……まるで、刀を再生しているようであった。

刀は約一メートルちょい程で、スラリとした曲線美。柄は白い封印の布で巻かれていて、どこか威厳さを感じさせる。

一体この刀は何なのか。

それは後々 解明される事になるのだけれど。

この、威厳と神秘に満ちた刀を一心に見つめる、一人の男が居た。ただ突っ立って、刀を見守るように。刀に魅入られるかのように。そして、フツと つい笑みを こぼす。

邪悪な歓び。そして口から、悪魔の声が こだま する 。

……というのは、ちよつと大袈裟なだけだね。

「もう少しだ……」

刀を見つめる邪悪な者は、そう言って今もなお刀から目を離さない。

刀に魅入られている。邪悪に満ちた部屋。

誰も、この空間に立ち入る事は できない。

《第3話へ続く》

第2話（救世主、降臨）（後書き）

【あとがき】

セナの腕輪ですが、着ける箇所は適当です（はははー！）。気分によっちゃあ3つだったり、4つだったり……日替わり。ええ、そんなもんです。そんな感じですが、でも いつも同じ服……？

ブログ第2話（挿絵入りで一部のみ）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-31.html>

ありがとうございました。

第3話（森の訪問者）

森で、迷子に なっていた少女の名は、ミキータ。どうやら この子のママが病氣らしく、薬草を採りに森へ入り、そのまま迷い込んでしまったようだ。泣いていた所を私が見つけ、保護した。

いきなりキライオンとかいう化け物と遭遇し、絶体絶命！ と思っただけど、なんと彼……今の私の頼り所、セナが助けてくれた。セナを見て、わんわんと……ミキータと一緒に泣きまくったけど、その後キャンプしていた場所へ戻り、疲れ寝をってしまった。おかげで目が覚めると、お日様は あんなに高くなっていた。

「……ったく。何で俺が子供2人の お守りなんかっ！！」

と、ブツブツ文句を言いながら、私とミキータの後ろを歩いているセナ。でも、私は そんな憎まれ口を叩かれても、怒りはしない。セナが私たちの後ろに居るのは、私たちが後ろだと、はぐれちゃう可能性があるわけで。こうやって後ろで私たちの歩調に合わせながら、まるで保護者のように歩いているわけなんだ。そういう事、私ちゃんと分かってるんだ。

セナって、思いやりがあるのよね。私たちがグース力寝てても、無理矢理 起こそうとか しなかったし。……まあ、ただ単に面倒くさかっただけ、かもしんないけど。

「お、村が見えたぜ」

とセナが手をかざして見た方角に、ぼつんという感じで、村が1つあった。本当に小さな村で、家がチラホラ。人もチラホラ。中へ入って進んで行くと、村の中央に大きな家があった。

ミキータは、そこへ入っていった。私たちも後に続く。

中へ入ると、もやあつとした温かい空気がした。外からは想像しなかったが、中には ごまんと人が大勢いるではないか。……と言っ
うより、ここは、どうやら飲食店のようだった。表に看板があっ

たのかも。ちょうど今 夕飯の時間帯だから、混み合っているのだろくな。

ワイワイガヤガヤ。

賑やかな音の中で、一人の女の人が こっちに向かって突進してきた。そして「いらっしやい。何にする？」と私たちに聞いてきた。

チャイナ・ドレス

中華服に身を包み、後ろに1つに縛った細く長い三つ編みが腰まである。顔は美人系で、目はパツチリとして、まつ毛が長く、口唇も何だか色っぽい。意志の強そうな眉。きゅっ、きゅっと くびれたウエストと足首がスラリ。

うっひゃー、この人すごい美人だ……。

「いや、飯を食いに来たわけじゃ……」

とセナが言いかけたのを遮って、私は提案した。

「ねえいいじゃない。まだ夕飯食べてないし。ついでだし、済ませちゃおうよ」

するとセナは、細い目で私を見る。

「いいけどさ。どうせ金払うのは俺なんだろう？ お前、金持ってないじゃん」

「あ……そっか」

と、自分の馬鹿さに気づく。

そうだった。どこの世界にも、お金というものは大体 存在するわよね。私、ここに来た時パジャマだったし、第一、あっちの硬貨や お札が こっちで使えるのかどうか。

私が黙ってしまつと、美人の彼女、略して美女は言った。

そういえば、ミキータは何処へ行ってしまったんだろう？

「ごめんね。ミキータが世話になつちやっみたいで……。ミキータが居なくなつた事に気がついたの、今朝だったんだ。村中、大騒ぎでさ。森の中へは入れないし。探索隊の派遣を頼んでいるけど、そんなに待ってられないし……。いつそ私が行こうかどうしようかって迷つてた所だったんだ」

「え？ 何で森の中に入れなの？」
と聞くと、美女は「うーんとねえ……」と少し考え込んで、
「まっ、とにかくさっ。あんたら、ウチに泊まりなよ。ミキータを
助けてもらった お礼をしなきゃ。また後で色々話すからさ。とに
かく、座って座って。そこ、空いたから」
と私とセナを、右隅の空席へと押し込んだ。

見事なまでの中華料理を、残さず2人で平らげた。

ラーメン、チャーハン、天津飯、ギョーザ、肉まん、フカヒレス
ープ……何でもござれだ。どうして こっちの世界に そんな中華
なんて料理が？ って思う事は無しにして。とにかく、どれも味は
斬新だった。思わず、中国三千年だか四千年だかの歴史を感じさせ
た。深いようで浅く、沈むようで浮き上がる……そんな味だ（どな
いやねん）。

で、食べ終わった後。美女が やって来て、奥の部屋へ招き入れ
た。そして「お風呂が沸いているから、入ってね」と言っ、サッ
サと店へと戻った。

彼女は ここではキャリアが上なのか。他のウェイトレスや従業
員が一目置いているって感じなんだもの。

でも、ま、後で色々話さるうから、先に ゆっくりでもして
おこつかという事で。

お風呂に入る事にした。

びっくりしたね。お風呂っていうから、もつと普通の家の お風
呂……って思っていたのに。男子には男子、女子には女子と、ちゃ
んと専用に別れているわけ。つまり、大浴場なんだよ。銭湯だと思
ってくれればいい。

道理で、ちよつとアレ？ って思ったのよ。だって、さっきの美
女は「入ってね」と言っただけだ。「どっちか先に……」とは、言
っていない。細かい事だけだ。

普通の お風呂を想像していた私は、セナと一緒に入ってたの？
なんて一瞬思ってしまった。

……そんなわけ ないじゃんねー（たはは……）。

客間に通された私たち。お風呂でサツパリして、熱い お茶を頂
いていた。すると、美女は やつて来た。だいぶ、お疲れの様子。

「だーっ！今日は混んでいたわねえ。……お待たせして、ごめん
ね」

と彼女は、テーブルを挟んで私の前に座った。すると、向こうの部
屋から障子を開けて、ある中年くらいの女性……おばちゃんが出来た。
白髪で、優しそうな雰囲気を持つ。この美女と同じ髪型で、長い白
髪を三つ編みにし、前に垂らしていた。今まで寝ていたような格好
をしていた。

「マザー。もう、だいぶいいの？」

「ああ。ミキータが飲ましてくれた薬草が効いたみたい。だいぶラ
クになったよ」

マザー？

マザーと呼ばれた、この おばちゃん……。もしかしてミキータ
が言っていた“マザー”って……？

「紹介するわ。っと、その前に、私はマフィア。マフィア・レイク・
オクトーヴア。マフィアでいいわ。この店の店主です。そしてここ
らが私たちのお母さん。みんな“マザー”って呼んでいるの」

マザーは、ペコリと お辞儀した。

「あ、あの。私は、松波勇気っていいいます。」私は正座に座り直し
て言った。「あ、俺はセナ。セナ・ジュライです。よろしく」セナ
も座り直して自己紹介をした。

そして沈黙。美女「マフィアは……私たちの顔色を読んで、言っ
た。

「……ここはね、表向きは飲食店なんだけど……。実は、孤児院な
の」

と、マフィアは フ……と顔を曇らせ、声のトーンを若干下げ、説明する。

「親が戦争や何かで亡くなってしまったり、親に捨てられたり……そんな子たちを引き取って、マザーは皆の世話をしているの。私もその一人で……ミキータも、そう。孤児なの」

私とセナは しんみりとしてマフィアを見ていた。

そうか……ここ、孤児院なんだ。だから あんなに お風呂は広いし（私、こだわってる？）、皆、この人の事を“マザー”って呼ぶのね。

私も現実、両親を いっぺんに失っている。幸い、働ける兄がいて私は だいぶ救われたのだ。でも、もし兄が いなかったら……？ 私も、孤児院か遠い親戚か。どこかへ行っていたかもしれない。「ごめん、暗くしちゃって。もう疲れたでしょ？ 泊まってって。お布団、敷くわ」

と、マフィアが立ち上がった時、私は忘れかけていた疑問を聞いた。「ああ、森の中に入れない理由？ それはね、あの森の精霊が迷い込んだ人たちを誘って、色んなイタズラをするのよね。特に最近は、度を越えているわ。頭を燃やされたり、落とす穴に はまらせたり……。危険だから、絶対立ち入り禁止になっているの」

「へ……。森の精霊？ そんなもの、いたっけ？ セナ」と、セナに聞くが、セナも訳わからんって顔をしている。

「気まぐれな精霊だし……。それとも あなたたち、何か“力”を身につけているんじゃない？」

マフィアは私とセナを、交互に見た。

「まあいいや。ゆっつくり休んでね。私、後仕事があるから」と言い残してマフィアは何処かへ行ってしまった。すると、行き違いにミキータが やって来た。

「マザー！ 起きて大丈夫？」

と、マザーの顔を窺^{うかが}う。マザーは「大丈夫よ」と言いながらニッコリ笑った。すると、ミキータはホッと一息ついた。その後、一杯

の お茶をミキータは運んできて、マザーに勧めた。熱い お茶を、ゆっくりと飲むマザー。

(ミキータって……。ううん、きっとここに住んでいる、皆。マザーの事、本当に大事なんだな……)

私は そんな事を思った。私に もし お母さんがいたなら……そして病気だったりしたら……。きっと私もミキータと同じ。危ない森だろうが何だろうが、平気で行っちゃうだろうな……。

「勇気、どうした？」

ふいに、セナが うつむく私の顔を下から覗き込んだ。私は慌てて笑う。

「え？ ……ううん。何でもないよ？」

そうそう。しんみりしている場合でない。マザーなら きっと、前にセナが言っていた神話について何か知っているかもしれない。マザーに聞いてみた。

「七神創話伝？ ……ああ、救世主伝説ね。ええ、少しだけなら……」

「その話、詳しく知りませんか？」

「そうですね……。あまり存じませんが……。聞いた事があるのは、第一章ぐらいなものですけど……」

第一章！ ……二、三と続くの？

「この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主ここに来たれり 光の中より出で来て 七人の精霊の力 使ひて これを封印す」 ……これが、第一章。私も昔、母に聞いただけでして……。

あまり詳しくは……」

私はゴクリと唾を飲み込んだ。

「私、救世主かも しれないんです」

と、私が言うと、マザーは目を大きく開けて私を見た。だが、すぐに冷静に私を見つめ直した。

「それは、どういう経緯いきさつです？」

「ええと……。私もその、話と同じように光の中から現れて……。いや、あの……。私……。こっちの世界の住人じゃないんです！」

私は言い放った。マザーは微動だにせず、優しく首を傾けた。

「そう……。本当のようね」

とても温かい眼差しだった。

「わからないけど……。それなら、“目の泉”へ、お行きなさい」

私はへ？ とセナの方を振り返った。「目の……？ ……って？？」セナは、何かピンときたようで、マザーの方に身を乗り出した。

「あそこは……。！ そうか、そうだよ！！ うん」

と一人で納得しちゃっている。私を置いて行かないでよー。

「目の泉はさ、昔、白虎を封印したとされる所なんだ」

「白虎……？」

「四神獣の一つ。前にも言っただろ？ 言い伝えだけど、確かに、そこに行けば何かがわかるかも。目の泉の場所は……」

セナが考え込むと、マザーが教えてくれた。

「ここ、ノイゼ村から東南に行った所に“無人の砂漠”があるの。砂漠の中央にあるのよ。周りは砂漠だけど、何処からか水が沸いているのかしらね。とにかく、そこに行ってみたらいかかしら。そこに何もなくても、近辺の人なら何か知っているのかもしれない。その砂漠に行く途中にライホーン村があるし、砂漠の北にはタカマノ村が、北東にはマイラ港町があるわ。きっと、何か手がかりがつかめるはず」

私は急にときどきしてきた。前にTVゲームでプレイした、RPGのようだ。まるで勇者か王子にでもなった気分。

「よしっ、明日、早速行ってみるか」

セナの声に、これまたどきりと反応する。だって、セナとは会ったばかりで。なのに、私なんかにつき合ってくれるというのだ？

「ね、ねえ、セナ……。自分の、その……。旅は、いいの？」

と、私が聞いても。彼は軽く首を振るだけで。

「いいよ。急ぎじゃないから。それに今は、お前を 放つたらかしにしとけねえもん」

続けて、セナは何かを言いかける。「実は、俺……」

言いかけた所で。ガチャンッ！！ とテーブルの上の湯のみが倒れ、残っていた中の お茶が こぼれた。コロコロと湯のみが転がっていく。そして床に落ちた。

マザーが苦しそうに、胸のあたりを押さえ、うずくまった。

「ど、どうしたんですかつ！？ マ、マフィア……ッ！！」

と、私は声を上げてマフィアを呼んだ。するとマフィアは すぐに駆けつけて、事態を飲み込んだ。マフィアの後で、何人かの子供も やって来た。きつと、この子たちも孤児なんだろうけど……今は そんな事を考えてられない。

マザーを一目見て、マフィアはゴクリと唾を飲み込む。

「これは……ミキータ、あなた、マザーに何を飲ませたの？」

マフィアが聞くと、ミキータはビクツとなつて、震えだした。

「ね、熱下げの薬草……」

と、すぐに台所から薬草の一部を取って来て見せた。マフィアは、目の色を変える。

「何、これ……。魔力が、かかっている……。！ 一体、誰が こんな事を……」

「そ、そんな……。さっきはマザー、元気になつたと思って……」

「後から効くように魔法が かけられていたのかも。とにかく……」
そして、突然立ち上がった。

「きつと、森の精霊の仕業だね。私、ちょっと行って来る！ ミキータ、マザーを床へ！ それからカルー！ 隣のミルダおじさんに頼んで、医者連れてきて！」

「でもマフィアお姉ちゃん、お医者のお金は……っ！？」

「後で私が何とかするから！ 早くっ！！」

と促され、ミキータとカルーらしき少年は慌てて走り出す。マフィ

アは奥へ行くと、コートを羽織ってとつと駆け出した。
私とセナは互いに顔を見合わせると、うん！と頷いてマフィアの後を追った。

マザーが病気。あそこにいた子供の顔は、はっきり覚えている。子供たちは皆、顔に不安を浮かべ、どうすればいいかもわからずただうろたえるばかり。

マフィアの顔も、彼らと同じ。切羽詰まった、緊迫に満ちた表情。マザーの存在の重さを感じた。

森に着いた。さっきまで私たちがいた森だ。まさかまたここへ戻ってくるとは。細くなってる道を構わず突き進む。マフィアの進む足に、迷いは無かった。私たちも後に続く。

奥へしばらく進んだ後、マフィアはサツと屈み、ある草を引っこ抜いた。見た目 雑草で、葉の先が少し白かった。

「これが熱下げの草なんだけど……」
と、マフィアは、考え込んだ。

「ミキータが採ってきた草には、魔力が かかっていたって言うってたわよね。この草は大丈夫？」
と私が その草を見ると、突然 何処からか声がした。

「殺せ。救世主を。その草は、渡さない！」

すると、さっきまでマフィアが持っていた草は、シナシナと萎れてしまった。

「誰！？ 誰なの！？」

と私が叫ぶが、返ってくる声は一定の場所からじゃなかった。森のあちこちから聞こえてくる。「殺せ……殺せ……」や「救世主。お前を生かしておけない」とかが聞こえてくる。

次第に その声は範囲が広がり、森中が“救世主を殺せ”と言いつ出した。

耳を塞いでも、声は聞こえてくる。一体私が何をしたっていうんだろう？ 何故？ 何で そんな事を言われなければ？

……段々、たまらない……！

セナの方を見ると、セナは突然、ある方向に向けて石を投げた。それは大木に当たった。大木は「キャツ！」という音を放った。

目を丸くして驚いていると、大木の前に、ある少女が現れた。何と その少女は、空中に浮いていてではないか！ 黒髪を上で2つに束ね、上から下まで服は黒に統一し、女の子らしいけれど顔はどこか意地悪そう。真つ黒い瞳をしていた。年は9、10くらいかな。

「痛いわね！ 何すんのよ！」

と、その少女は私たちを睨みつけた。

「ふん……。まあいいわ。私は四師衆の一人。幻遊師、^{ホタル}蛸よ。救世主が現れたっていうから、ちょっと見ておこうと思つてね。あんたが その救世主？ ……キャハハッ！ やつだ！！ こんな ちんちくりんがっ！？」

と、私を見て馬鹿にしているよう。その時の私ときたら。チンプンカンプンだった。新しい言葉が色々出てきたからだ。

四師衆？ 幻遊師？ 蛸……は名前でしょうけど。一体何なわけ？ それって。

「なーんも わかつていないようね？ レイ様の言う通り。『ただ何にも知らない虫ケラ同然の人間どもだ。あんな奴らに構っている暇は無い。』だつてえ！」

と、その少女……蛸は高らかな声で笑う。よく笑うんだけど、その笑いは物凄く嫌味つたらしい。見ていると、ムカついてくる。

私が何か言い返そうか、という時にセナが一步先に前に出た。

「おい！ 今……レイ、つて言つたかつ！？」

セナが蛸に聞いた。蛸は最初「はあ？」という表情だったのだが、

セナの顔をマジマジと見つめ、何かピンときたようだった。

「あんだ……。レイ様が、いつか言ってた……。風神？」
と言い出した。

ますます訳が わからない私。セナの袖を引っ張って、「ねえ、
どういう事？」と聞くが、セナの耳には入っていないみたい。

やがて ゆっくりと落ち着いて、返事をするセナ。

「……そうだ」

と。聞いた蛭は、さも面白そうに笑い出した。

「へええ……。救世主と一緒に いたんだ。早い展開ね。レイ様は
この事を知っておいでなのかしら？ どう思う？」 紫
と、誰もいないはずの蛭の右隣に話かけた。

確かに そこには誰も居なかったはずなのに。いつの間にか、人
が そこに立っていたのだ。

紫と呼ばれた男の子。

まだ、少年だ。15歳くらいか。黒のランニングシャツに、だら
しなく長い黒のズボン。蛭と同じく漆黒の瞳で、髪は短いが、顔の
右半分だけが長く伸び、目を隠している。

私たちにとっては、いきなり現れたように感じた。だが蛭は、さ
つきから ずっと そこに 居たような素振り。

蛭に話かけられ、静かに口を開いた。

「きつと、何もかも知っておいででしょう」

「そう？ やっぱり そうかあ。でもたぶん、そのうち救世主を殺
すつもりなんでしょ？」

「おそろくは」

「じゃ、今 殺しちゃおうよ。まだ芽のうちにさあ」

と、蛭は、微かに口元を歪ませた。そして、私たちの方に振り返る。
「やっちゃって、紫。救世主を殺すのよ！」

私を指さした。子供なのに、それが逆に怖い。

紫は、まるで蛭の奴隷か人形のように、指さされた私の方へ降り
てきた。しかし私の前にはマフィアと、セナが立ちはだかった。

「ちょっと。よくわかんないけど。この人たちはウチの子の命の恩人。死なすわけにはいかないわ」

マフィアは そう言っただけを睨んだ。ウチの子とは、ミキータの事だろう。

「おい。お前ら……。無力な人間を殺して、楽しいのかよ？」と、セナも。

私は少し感動していた。何をこんな時にノンキな……と思うかもしれないだろうけど。だって、まだ会って間もない人たちがこんな事を言ってくれるなんて……。私、すっごく嬉しかったんだもん。

でも、やっぱりダメよね。お命頂戴、って言われているのに、まるで王女様気取りでは。私も、できるだけの抵抗はしないと。自分の命は、自分で守らなきゃ。

私も彼らを睨み、場はジリジリとした雰囲気になった。

「邪魔するなら、いくら風神といえども構わないわ。やっちやえ！」と、蛭は紫の背中を口で押した。紫は躊躇^{ためら}わず、前に進み出た。

セナがまず、強烈なパンチを繰り出した！ しかし、音も無く紫はサツと横にそれをかわし、

(こ、こいつ、速っ……)

とセナが体勢を立て直すよりも先に紫は、セナの足を自分の足でペーン！ と払った。当然、セナは前のめりになって倒れてしまう。紫は、セナが倒れている事などもう眼中にはない、という様な感じで私の方へ近寄って来た。

「はああッ……！」とマフィアが……。何と隠し持っていたムチを振り回し始めた。

私は危ないのでマフィアから離れた。マフィアは、見事な技を色々と繰り出していく。が、それを軽々とかわすのだ、この男は。どんな動体視力をしているのだろう……。

痺れを きたしたのか、蛭が叫んだ。

「紫！」

すると、さらに口で背中を押されたように彼は攻撃体勢へ。ムチを腕で受け止め、全然痛みを感じないのか表情はあくまでも「無」で、マフィアをブツ飛ばした。

何か、気合いのようなものかもしれない。

私は「マフィア！ セナ！」と叫びながら、マフィアの方、そしてセナの方を見た。

「気をつけて……そいつ、強いわ」

「くそっ……。おい勇氣。……逃げる！」

と、セナは再び立ち上がって、紫に鋭い蹴りを。蹴り、蹴り、蹴り、蹴り……しかし、どれも軽くかわされてしまう。

私は、ハツとしてセナに叫んだ。

「セナ！ あれよ、あれ！ 何かこう……、風で切り刻むようなやつ」

前に見た、セナが起こした風。怪物たちは、血みどろの最期を遂げた。

「ダメなんだ！ 何か、誰かに邪魔されて風が起こせない。ついこの前は、出来たのに！」

と、苦しそうに見せた。

状況は、どう見たってセナが不利。

こうなったら、私も見てないで戦いに参加しなくちゃ！

私は辺りを見渡す。まあ、こんな深い森の中、変わったものは落ちてないけど……。

ふいに、そばの木に触れた。すると、何かが私の心の中にすつと入り込んできたのだ。

一方、セナがまた紫に足払いをかけられ、前に倒れた時。紫はセナの両腕を もぎ取りそうな程に引っ張り、セナを苦しめた。

チラリとセナが紫を見る。紫はあくまでも冷静で、何を考えているのか わからない。ある意味、ゾツとした。

そんな時、私はセナに……。

「今よ、セナ！ 風を使ってみて！！」

と言った。セナは まさか、という顔で言われた通り、風を出して攻撃してみた。

「かざぐるま風車”！！」

と言つと同時に、紫は突然出現した強風に、10メートル程飛ばされた。セナは信じられない、と口をパクパクさせた。

紫が体勢を戻そうとするより先に、セナがパンチを一発！ 紫はバタリと倒れた。

「紫！！」

と顔面蒼白の蛭。すると……。

『何をしてる。蛭、紫』

と、何処からか声が聞こえた。

セナも私もマフィアも、そして蛭も「え？」と たじろぐ。

すると蛭が後ろの大木に向かって「レイ様！」と叫んだ。

大木に、段々と「顔」が浮かび上がってきた！ ……木に、顔が出来たのだ。

その顔を見て、今度はセナが叫んだ。

「レイ！」

と……。

この2人は、知り合いなのか？ 私の疑問は、2人の間には入り込めなかった。

「レイ……。お前だったのか……。何故……勇気を……。救世主を、殺そうとする？」

すると大木の顔は口を開いた。

『お前には関係の無い事だ』

と言つと、今度は蛭に向かって しゃべり出した。

『蛭。勝手な行動をとるんじゃない』

さっきの じゃじゃ馬ぶりは何処へやら。蛭はオドオドしながら、その大木の顔に思い切つて言う。

「しかしっ、レイ様！ 救世主なんて危険なものを……今が倒すチャンスです！ まだ、ヒヨッコのうちに倒しておけば……」

『馬鹿がっ!!』

と、エンマ様のお叱りの如く、威厳のある声が響き渡った。ピクリッ！ となった蛭は、そのまま黙ってしまった。

『今は そんな雑魚を相手にしている時間など無い。早く戻れ!!』
蛭は、しぶしぶと……サッと消えた。いつの間にか、紫も もう
いなかった。

「レイ……。何を企んでいるんだ！ 今、何処にいるんだ!？」

『ふん……風神か……。久しいな。いや、そんな事は どうでもいい。我々の計画の邪魔をするな、セナ』

「計画……?」

『復活させるのさ。四神獣の一つ……』

“ 青 龍 ” を な ! ! 』

……

語尾の語に、エコーが付かんばかりの迫力で、私たちを見えない力で圧倒させた。

私の脳裏に、“七神創話伝”の第一章が浮かんだ。

この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主 ここに來たれり

今まさに、この伝説トシエンを繰り返そうとしているのか。

伝説が まさに今、現実になろうと足踏み状態で近づいているのか。

(青龍の復活……? 一体そうになったら、どうなるっていつの?)
と私の疑問は増えるばかり。

セナが怖い顔でレイを訴えた。

「何故だ!?! レイ!」

『止めても無駄だ。もう遅い。せいぜい抵抗できるものならしてみろ。旧友といえど、容赦はしない。長生きする事だな。セナ』
と、アハハハ……と笑いながら、大木の顔はスウッと引っ込んで消えて、元の大木へと戻った。

しばしの沈黙の後、セナはガツクリと膝を落とした。そして、右の拳を地面へと突き立てた。「ちくしょう……」と呟いたのが印象的だった。

どうやら、セナと彼……レイとは さっきの話から、かつての友達……旧友だったようだ。そのレイとかいう男が、四神獣の一つ、青龍を復活させようと計画している。四神獣の復活……それが何を意味するのか。

「勇気……」

と、ふいにセナが口を開いた。セナを見ると、まだ何か落ち込み気味なのか、下を向いている。

「さっきの風……何で わかった？ 今なら使えるって事が」

「え？ あー……、えっと。実はね、さっき……」

と、私は さっき起こった事を説明し始めた。

セナと紫の すさまじい戦いの時、私は そばの木に触れた。その時、その木の心が私の中に入ってきたのだった。木は、私にアドバイスを くれた。

『この森、悪い奴、操られている。そのせいで、仲間、薬草を毒草に変えたり、この森に来る人、襲ったり、する。おかげで、この森、すっかり衰えた』……

……なるほど。悪い奴……蛭って子か、紫か。そのバツクにいる誰か……が、森の精霊を操って色々悪い事をしてるってわけだ。

でも、私やミキータが変な怪物に襲われた時、セナは風が使えたわ。あれは、何故？

『森の精霊、全部が悪い奴になったわけじゃ、ない。僕のように、前と変わらない奴も、まだ、いる。きつとその時、森の精霊の誰かが、助けてくれたんだ、きつと』

「はあ……。じゃ、今は？ 今は、助けてくれないの？」

「僕らには元々、直接、助ける事は、禁じられて、いる。でも、風の精霊、呼ぶ事なら、できる……」

「風の精霊！ ……セナが風のあの技を使えるのは、それのおかげよね！？ だったら、早く呼んで！ お願い！！」

「うん！ わかった！ すぐ呼ぶ……」

そして私は森の精霊に風の精霊を呼んでもらい、セナに風の技が使えるよ、と呼びかけたのだった。

とりあえず説明し終えた所で、セナはなるほど、と小さく呟いた。そして、顔を上げる。その顔は少し落ち着き払ったようで、晴れ晴れつとしていた。

「ありがとうな！ 森の精霊！！」

と、少し微笑んだ。森は、まるで お礼を言っているかのようにザワザワと騒いだ。

「あなたたち、何者なの……？」

と、声のした方を振り向くと、マファイアが真剣に こっちを見ていた。さっきまで、紫に 吹っ飛ばされ動けなかった足で、しっかりと立っていた。

「マファイア……！ ケガはっ！？」

「大丈夫よ。それより、答えて。あなたたち、一体……」

「私は……救世主、みたいなんです……」

「ええッ!？」

マファイアは手で口を覆い、見開いた目で足の先から頭の てっぺんまで、私をジロジロと見た。信じられない、といった顔だ。

自分は救世主、だなんて言ったものの。まだ半信半疑。だって別に何の力も持たない、ただの中学生だったんだもん(だった……って、今もだけどね)。

でも前にセナが言っていた通り、私は光の中から現れたし……うーん、どうなんだろうね??

「そう……。わかったわ。あなたが“七神創話伝”に出てくる、救

世主なのね。最近、風の噂で耳にしたの。今、この世に……四神
獣 復活の兆しが見えると。その噂が本当だったのならば、頷ける。
救世主が 現れた、と」

そう言つてマフィアは、大木の そばにある雑草を引っこ抜いた。
「……まだ聞きたい事が、たくさんあるけど。とにかく今は急ぎた
いの。早く、このマトモな熱下げの薬草を煎じて、飲ませなきゃ」

マフィアが馬のように駆けだした その背中を懸命に追いながら、
店へと戻った。店が見えた頃には、私たちは完全にマフィアの姿を
見失っていた。それほど、速い足を もっていたのだ。

息を切らし、店へ入ると、マフィアは一生懸命すり鉢で さつき
採ってきた薬草を すりつぶしていた。顔は、まさに真剣そのもの。
額に汗し、息も少し荒かった。

「私も手伝うよ。お湯、沸かすね」

と、私は台所（店とは別の）に置いてある物を手探りで探し、やつ
とヤカンを見つけ、水を入れて火に かけた。この台所は、あまり
使われていないらしい。孤児の子供たちの食事は、店で とつてい
るようだ。

そうやって、薬草を煎じたものをマザーに飲ませた。マザーは眠
りにつき、私たちは やつと安心できた。

まさか薬草一つで、こんな騒ぎになるなんて……。

気がつけば、夜は深まっていた。居間で お茶を飲んでいると、
マフィアが さっきの続きの話を持ち出してきた。

「救世主が現れたとなると、当然、七人の精霊を集めるんでしょう
？」

「七人の精霊？」

「伝説の第一章に、そう書かれているじゃない。『七人の精霊の力
使ひて ……』って」

「うん……。でも、まだ私が本当に救世主かは、謎だし。とりあえ

ずね、マザーが昔、白虎を封印したとされる、“目の泉”へ行ってみたらって……仰ってくださいったの」

「え、じゃあ、明日もう出発するの?」

「うん」

「そう……もう、行っちゃうのか。そんなに急がなくてもいいのに……」

「うん……。ごめんね。でも私、セナみたいな力無いし。早く自分がここに来た訳、知りたいから」

「力が無い? 嘘よ。あなたには誰にも無い力があるわ」

「え……?」

と、キョトンとしてマフィアを見た。マフィアは何を言いたいの……?

「さっきの戦いの時。あなた、森の精霊と会話をした、でしょう?」

「え、う、うん。だけど?」

「森の精霊と会話なんて、普通できっこないわ。私ぐらいかと思っ
てた」

マフィアが奇妙な事を言い出した。

「え……それ、どういう事?」

するとマフィアは、服の奥の首にぶら下げていた、小さな鏡を見せた。

「この鏡は……“七神鏡”よ」

「“七神鏡”? それは?」

「これと同じようなものを、あと六人が持っているはず。そう……
七人の、精霊の神が」

七人の精霊の神……? それは一体? え、マフィアが その一
つの鏡を持っているっていうのは? 「マフィア、あなた まさか

……」

マフィアを指さすと、コクンと頷いた。

「ええ……。私は七人のうちの一人。森の精霊の神、マフィア。も
し伝説の通りなら、私は あなたに力を貸さなくちゃいけないわ……」

…」

私は、ただただ呆然としていた。
すると、先に寝たはずのセナが起きてきて、黙って私の横に座った。

「あんたもか。木神の鏡……産まれた時、持って産まれてきたんだな？」

と、落ち着いた声でマフィアに聞いた。マフィアは動じる事もなく黙って頷いた。動じていたのは私だ。何なの この2人、と顔をしかめた。

「勇氣……。俺のこの風の力は、ある日 突然 目覚めたものなんだ。こんな変な力を持っているのは、世界中で七人だけ。俺は、風の精霊の神なんだ」

ダブルパンチ？ ……この2人が影で相談して、私を騙しているのかと思つた。だって すでに、世界で七人と言われている精霊の神のうちの2人が、ここに居るだなんて。

「鏡！ 鏡は！？ セナも鏡を持って産まれてきたの！？」

セナは、サツと両手の指を見せた。指には指輪が……えっ！？

「あんた……七神鏡を指輪に変えたのっ！？」

「ああ」

「私、昔、鏡に傷をつけた事があるわ。その時の全身にくる痛みといつたら……信じられない！！ この鏡は その人自身と繋がっている。そんな大事な鏡を……！？」

と、マフィアはセナの指輪に触れた。セナは、フツと笑つて、何も言わず黙っていた。

「何で そんな事したのか、知りたい気もするけど。今は やめとくわ。とにかく、今私たち……木神と風神が揃ったわけよね。あと五人……。救世主であるというなら、七人を まず集めましょう。旅の途中、きつと わかつてくるわ。色んな事が……」

というマフィアの見解には、もちろん賛成なだけ……。何か、こつ、モヤモヤとしたものが引つかかる。マフィアの顔は穏やか

なんだけど、どこか不安が見え隠れしている。

「マフィア……どうかしたの？」

と聞いてみたが、マフィアは首を横に振って、「ううん。別に」と答えるだけ。

大丈夫なのかな？ マフィア。

……って、ちょっと待って？ セナは付き合ってくれって言うていたけれど。マフィアも、私の旅に同行するの？ そんな事して、この店は一体どうなるの？

そう、さっき引つかかったのはコレだ。

店を放っぽって旅だなんて。ダメダメ。

私はマフィアに それを言った。

「ありがとう。気持ちは嬉しいけど……」

と断りそうだったので、私は もっと強気で出た。

「マザーの体がまた急変したら……どうすんのさー！」

と……これにはマフィアも効いたみたい。結局、明朝は私とセナで目の泉へ向かう事になった。

《第4話へ続く》

第3話（森の訪問者）（後書き）

【あとがき】

昔の友達に「ドえらい名前つけたな……」と言われたマフィア登場。

私「あ、ほんまや」

……気づかないノカ？ 自分……。

ブログ第3話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-33.html>

ありがとうございました。

第4話（旅立ち）

この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主ここに来たれり
光の中より出で来て 七人の精霊の力 使ひて これを封印す

完璧に覚えてしまった文だった。もし暗記テストだったら、一字一句間違える事はないだろう。

この文の意味……この四神獣つちゅうもんが現れる時には、千年に一度現れるって言われている救世主が光の中から やって来て、七人の精霊の神……風神だの木神だのを七人揃えて、そのそれぞれの力を借りて、復活した四神獣を封印する……と。

まあ、そういうわけ。で、何が何やら わからないまま、私はこの神話通り光の中から出現し、救世主なんじゃないかって自分でも半信半疑に思いながら、こっちの世界に居る。

途中、セナっていう風神とマフィアっていう木神と出会った。

マフィアは自分の立場上、村から出るわけにもいかない為、結局またセナと2人旅を する事に。

セナは美顔で女顔。とつても綺麗な男の人。ちよつと ひねくれたな所もあるけど、結構優しい。今の私の頼りになる唯一の人。さつきも言ったけど風神といって風を操る力がある。この力のおかげで私は何度か助かった。

そして。

森で私たちが襲ってきた人たち……蛭っていう意地悪っぽそうな女の子と、その お付きって感じの暗い男の子・紫。森の精霊を操ったりして、性格悪いつたら！ だったんだけど。その黒幕というか、陰の人というか……2人のバックには、意外な人が居たんだ。私にとつても、セナにとつても……ね。

セナの旧友・レイ。とつても冷たいっていうイメージがあった。2人の会話の様子からして、何だか ただ事じゃなさそう……。一

体、レイの身に何があつたんだろう、って思う。

そういえば、セナの旅の目的って、何だっただろう。私と出会ってからは自分のその旅は放っぼっているし。急ぎじゃないから、って言っているけど……。

……きつと そのうち、明かされていくんだろうな。

うーん……ははは。あらずじ がてら まとめようとしたのに。余計に、こんがらがっちゃった。

馬鹿よねー。

「おい。どした？ 変な笑いして」

と、セナが私の顔を覗きこんだ。私は つい焦ってしまつて、ますます変な顔に……。

「えっ？ いやあ、別に。ねえ……」

セナは、眉を ひそめた。“何だ こいつ……”とでも、思っているんだらう。

仕切り直して。セナは、

「目の泉^まって、結構 遠いよな。地図だと近そうだけど……。沙漠のド真ん中だろお？ 水、多く持つて行かなきゃなあ」

と、ブツブツ言いながらメモしている。

メモには、水、食料、服、油、薬……と書かれている。

「油？ あー、灯りつて事ね。え、じゃあ、この服つてのは？」

「お前の服だよ。それと俺の服も。いつまでも2人とも、この服を着っぱなしっていうのはなあ。この、俺の服はまだいいけど。お前、女のくせに男もののトレーナーに そんなスパッツ履いて。夜は冷えるし、もっとマシなの買ってやるよ」

それを聞いて ジーン……輝く瞳 攻撃で、セナを見た。セナは、気がついていないけど。

……そうよね、いつも この服じゃ……っていうか。寒いもんね、この格好。パジャマよりは あつたかいと思つて我慢してたけど。

セナって、ほーんと、いい奴だなあ……。

しみじみとしてしまふ。

ちなみに、ここはマフィアの店の居間。朝に起きて食事をした後、この村で最低限必要なものを揃えてから目の泉とやらへ向かおう、という事で。今セナが その買うものをメモっているのだ。

お金を出すのはセナである。だって私は一文無し。

大丈夫、いつか働いて返すわ……と、内心、思ってはいるんだけど、ねえ。その“いつか”は、あまりアテにはならない。

「よしと。こんなもんか。じゃ、行ってくる。お前、ここで待ってるよ」

と、セナがメモを持って立ち上がった。

「えっ、何でっ!?! 私も行くっ!?!」

と私が立ち上がると、セナは声を張り上げて言った。

「ダ・メ・だ!?!」

「なんでよおーっ!?!」

「余計なもん買いそうだからだつ。言っとくけど、俺だつて金無いのっ!?! そうそうアテにされちゃ困るっ」

と、よく わからん事を言い残して、パイと行ってしまった。

彼の言う事も、もっともかもしれないけどさ……。私、そんなに物を欲しがったりしないもん。昔っから欲しい おもちゃがあつても買つてつて ねだつたりしなかった。

何よ何よ……私だつて、好きで一文無ししているわけじゃないわつ。と、ヤケクソな事を考えながら、縁側の廊下へ出て、庭を前にして座つた。今日は いい天気で、ポカポカしていた。

目を閉じると、色んな事を思い出した。

お兄ちゃん……お父さんとお母さんが死んで、一人で働いているお兄ちゃん。私の事は そっちのけに なってしまった。私だつて、力に なりたかつたのに。邪魔だつて言つて、手伝わしてくんなかつた。私が、普通の中学生で いられるように。普通の女の子で いられるように……。

きつと、お兄ちゃんは そう思っているんだ。

何で そうやっていつも自分だけで全部を しよいこむの……。

私は、あの日の事も思い出した。こつちの世界に来る前に、お兄ちゃんと その彼女らしき人と、口論になっていた事……。 「私と妹と、どっちが大事なのよ」と……。確か、そう言ってた。お兄ちゃんは、何も答えられずにいた。

……………あれ？

変……………その後の事が、思い返せない。何か、すごく印象に残るような事、言っていたと思うんだけど……。 だめ……………思い出せない……………ま、いつか。

ついウトウトとしていると、トタトタと廊下の向こうから誰かが駆けて来た。

ミキータだった。

「お姉ちゃん。ヒマなら、遊ぼうよ」

「……………ただいま。おい、勇氣」

「ん……………？ あれ、セナ。おかえり」

目を こすって起きた。どうやら縁側で寝こけちゃったようだ。

「こんなところで。風邪ひくぞ」

「あは。ごめんごめん。ミキータとママゴトとか色んな遊びしてたら、眠くなっちゃってさあ……………」

「まあいい。ほら」

と、セナが私に一抱えほどのブ厚い大きい袋を渡す。何だろうと中を見た。そして、私は目を疑った。袋を落とす……………ポトツ。

「何だ？ 気に 入らなかったのか？ 服屋で、勇氣に一番似合ってると思うやつ買ったんだ」

と、セナは言うものの。私が驚いているのは気に入るか入らないかという問題じゃない。その服が問題だった。

「これ……………私の学校の制服……………」

そう。袋から取り出した その服とは。まさしく我が港中学校の赤いセーラー服であった……………。

セナが買ってきてくれた その服を身に まとい、私は奇妙な感じが抜けなかった。

(一体、この世界は どういう世界なのよ……)

何故、こんな所に こんな服が。こんな偶然があるのだろうか。でも現に ここにあるし。

見慣れたボタン。赤いミニスカート。セーラーだけど少し形は変わっている。

そうそう。奇妙な事が さらに一つ。セナは何と、ルーズソックスを買ってきた。

私、しばし固まる。買ってきた理由というのは特になく、ただ勇気に似合いそうだから……と。……何だか、それを店で選んでいるセナのさまを思い……私は「ブルセラショップ？」が脳裏に浮かんだ。

いやいや、セナはモチロン変な意味で買ってきたわけじゃ……ないだろうけど、この奇妙な偶然は、本当に気味が悪い。

このまま、学校に行きそうだよな。

とにかく、制服に着替えた私はセナたちが休憩している居間へ向かった。マフィアが いれて

くれた お茶を飲んでいたセナは、私の姿を見て「うんうん」と頷いた。

「サイズもバツチリだな。よく似合っているよ。結構、高かったんだぜ、その服。生地が少し変わってっからなあ」

とセナの言葉を聞いて(そりゃそうでしょ……こんな服、こっちの世界にあるなんて思ってもみなかったもんねっ)とツツコミを心の中に入れて。

「あれ？ セナは服、買わなかったの？」

「え？ あー、うん。お前の その服に使っちゃまったんだ。これから先の分も、残しておかなきゃなんねーし。まあいいよ。そのうち、

どっかの お宝発掘か、バイトかで働いて貯めて買っしさ」

セナは、そう言って立ち上がった。

「さあ行くか。マフィアに聞いたら、目の泉までは徒歩で行くしかない。水とか食料とかも分けてもらったし。……用意は できたか？ さっさと行こうぜ」

と玄関から出てった。私も それに ついて行く。そして、森の方へ向かった。

……いよいよ、旅の再開なのね。

急に寂しくなった。たった一日しか居なかったはずなのに。きっと、色んな事が次々と起こった後、のんびりしちゃったせいかな。もっと居たかったかも。

でもすぐに、今度はワクワクしてきた。

こつちの世界に来る前までは普通の中学生で、何時間も椅子に座りっぱなしで勉強、勉強、帰っても予習、復習と勉強、勉強で座りっぱなし。特に趣味も特技も無い私にとって飽き飽きしていた毎日……。

そんな平凡な私が、この世界では仮救世主(?)として存在し、旅をして、色んな事を知った。見るものは すべて新鮮。まるでゲームの世界に居る様な感覚。

私、今なら正直に言える。元の世界に、帰りたくない。

「勇気。見る」

と、セナが私に声をかけた。私 が え？ として前を見ると、森の方から風がザワツと勢いよく吹いてきた。目を瞬間的に閉じて、そっと開けた。

「わあっ……」

イリュージョン

まるで、花の幻想。ピンクの花弁が、風に踊るように散っていた。高くなつた太陽の光に反射して、キラキラと光っていた。その花弁舞う中心に、私たちは居た。何だか、祝福されているよう。

「勇気！ 待って!!」

と背後から声が聞こえてきた。振り返ると、息を切らしたマフィア

が居た。

「マフィア……お店は？ 今時分、混んでるんじゃない？」

「ハアハア……勇氣。店の中から……あなたたちの姿を見て……ハア……追いかけたの。昼食 食べて行くんだと思っていただけ。黙って行かないでよねっ」

「ご、ごめん。忙しいだろうと思って。一応、マザーに言ってからは出たんだけど……」

「それより、これ！」

と、マフィアは手で持っていた、小さな可愛らしい女の子の人形を私に渡した。

「これは……？」

「これ、小さい頃にマザーが私に くれたものなの」

「そんな大事なものを！」

と躊躇ちゆうしゆすると、マフィアは首を振った。

「私は小さい頃、よく あの森で迷子になった。その度にマザーは大慌てで私を捜してくれたの。そんな時、この人形を くれた。私を悪い奴や深い闇から守ってくれますようにっ」

「マフィア……」

「私はもう、十分守ってもらったわ。だから今度は、あなたたちの番よ。受け取って。そして、これを見て私を思い出して」

マフィアの目に、少しキラッと光るものが あった。それを見てしまつて、私はマフィアの手を握りしめてウンウンと頷いた。

「行ってくるね。頑張ってくる。また、会おうね。六人揃えたら、また来るから……」

「うん。気をつけて！ セナも、しっかりねっ！！」

と私は去りながら手を振り続けた。マフィアも、振り続けていた。

感動の別れだった。

「臭えー！ 奴ら……」

とセナは ため息を一つ。

地図を広げ、現在地を確認するセナが「あっ」と自分の頭を叩いた。

「えっ！？ 何っ！？」

「こいつあしまった。目の泉は村の反対側の出口から出ないと行けねえ」

……この後、スゴスゴとマフィアの元へリターンしたのは、言うまでもない。

村を出て、テクテクと歩き続けた。

一本道がずーっと地平線まで続き、奥にはポツポツと建物が見えた。道の側には雑草がポツリポツリとあるのみで、とにかくなーんにも無かった。

歩いてても歩いてても道は途切れない。……少し疲れてきた。

「ふう……。少し疲れたな。昼飯にするか」というセナの提案に、即座に賛成した。

昼食といっても軽いもの。携帯パンと、マフィアがいれてくれた紅茶。パンには たっぷりバターが塗られ、今まで食べた事のない甘みと、少し辛味もあった。美味しかった。紅茶に よく合う。パンは一つが手の平サイズで、袋に いっぱい詰め込んであり、計10個ほどであった。

荷物は全部セナが所有している。前にも言ったけど 左腕のひじ上に（いつも付けている所が違うけど）付けた腕輪は、縮小自在ポケットだ。何でも入る。どんな大きいものでも。しかし一応、30品までと決まっているらしい……。一体どういう構造なんだか。

そして昼食を終えた後、また歩き始めた。

テクテクテク。

こりゃあ結構キツイな……。しかも2人とも無言だから、余計にそう感じるのかも。

私はセナと会話を し始めた。

「前々から聞こうと思っていただけ」

「何？」

「セナの旅の目的って、何？」

するとセナは少し驚いた風に顔を つくったが、やがてポツリと
呟くように言った。

「……人を捜しているんだ」

「人……？」

旅の目的が、人捜し？ 一体何故にっ！？ 興味が沸いた。

「誰を？ セナの彼女？ なんつって」

と、冗談で言ったが、何だかセナはノツてくれない。あくまでも冷
静で、無表情。

「……さあね」

と、少し口元でフツと笑った。

何それ、どういう意味！？ 凶星だったの！？

気になる気になる、ぶ~~~~……。。

「勇気の居た世界って、どんな世界なんだ？」

と、セナは急に話題を変えた。「ごまかさないですよ」って言いそ
うなのを、堪えた。だって、きつと話したくない理由があるだろうか
ら。無理には、聞かない方がいい……。少し、寂しいけどさ。まあ
いいや……。気を取り直して、私は はしゃぎ出した。

「うーんとねえ……。どうしよう、何から話そうかな……」

私は、学校の事を中心に話し出した。まず学校というものの説明
と、友達の事、先生の事、授業の事……。課外授業の内容も色々話
した。お寺に遊びに行つて蜂に追いかけられたO君の事や、その他
……。うーん、ノリノリで歌うT君の事とか理科の実験で顔に火がつ
いたK君とか、水道のところでノート落としてベチャベチャのグチャ
グチャにしたNさんとか。体育祭の横断幕を作るのに燃えていたO
さんとか、顔が丸くて有名なM君とか……。はは、何か人の事ばかり。
そう思つて、自分の体験談も色々と話す。でも、やっぱり失敗談

が多いんだよね、圧倒的に。小学校の頃、キレて椅子持って暴れまわった事とか、裏山のガケから滑っておりようとして つまずいてゴロゴロと転がっちゃったりとか、横断歩道を飛び出そうとして友達に手を引つ張られたおかげで危うく車に轢かれる所を助けてもらったりとか、男子と教室で野球をしていて先生に怒られたりとか、ただ単にハデに こけたりとか…… ああ、何か悲しくなってきた。自分で自分を恥で追い詰めてるよな、これって……。 ははは……。でも、セナは笑いながら話を聞いてくれていた。話している時、俺も似たような事があつたーって言ってくれた。思いつきり人を追い抜かした後、目の前で滑って転んじやつたりとかね。

笑いは絶えなかった。ずっと笑っていた。
しかし、気がつくと村が もう そこに見えていた。

村の入り口に一人の おばあさんが立っていた。こつちを見て、話しかけて来た。

「お前さん方、旅の人かね？」

口をモゴモゴとさせ、しわがれた声で そう言ったので、私は「はい」と返事をした。

「疲れたじゃろつて。あの泉の水は疲れに効くと言つよ。飲んでみなさい……」

振り返ると、確かにポツンと小さな泉が あつた。草木が少し繁り、真ん中に。

「本当だ。透き通つていて、綺麗ね」

と、その泉の水を手で すくう。そして、口にした。すつごく美味しいっ！

「へえ。どれどれ……」

とセナも飲む。2人して、のどの渴きを潤した。

すると突然背後から大きな叫び声。

「おい！ お前ら……！！」

と同時に、金物が地面に落ちる音がした。空の両手鍋のフタがコロコロと転がって私の足元まで来た。

格好からして村人A。少しハゲた、おっさんだった。

「その水を無断で飲んだなっ!?!」

と、血相変えて私たちに詰め寄る。

私たちが曖昧な表情を浮かべると、村人Aは他の村人たちをすぐに呼んできた。

静かだった空気は一変し、話し声で いっぱいになって。村人たちが大騒ぎする中、私とセナは顔を見合わせる。

何が何やら わからない……。一体、この水が何だっていうわけ？
すると そのうち、村の長らしき人が私たちの前に歩み出た。声を張り上げ、

「あんたら、大変な事をしてくれたな!」

と怒り出した。私たちが びっくりして何か言おうとする前に、村人たちが私たちの手を捕まえ、後ろにやった。

何っ!?! これえ!?!

「何するのよ!」

と私が怒ると、村長? は、あれよあれよという間に村人たちを従えて、私たちを何処かの家へ連れて行った。そして長い地下への階段を下りた後、私たちを牢屋に放りこんだ。

「何でおっ!?! ここから出してっ!」

牢屋には、ごっつい鍵が かけられた。鉄格子をつかみ、訴える。村人を2・3人後ろに率いて、村長は威厳のある声で叫ぶ。

「お前らの処分は、おって報告する!! 以上!」

そして足早にサッサと何処かへ行ってしまった。

後に残された私とセナ。ただただ、啞然としていただけだった。

第4話（旅立ちて）（後書き）

【あとがき】

やっぱ、制服でしょう！ ラクだし（笑）。

昔に書いたノートを見て現代に直しながら書いているわけですが、「ルーズソックス」と書いてあるのを見た瞬間。

「……今は？」と……

……ものすごく不安になりました……。

ま、まだいいか。ルー君、死んでない（たぶん）という事で。

ブログ第4話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-36.html>

ありがとうございました。

第5話（レイの罠）

「知らなかったんです。この村の前に居た おばあさんに勧められて。本当ですっ！」

牢屋の鉄格子を握りしめて、必死に言い訳をした。村長は黙っていたが、

「そんな奴は知らんっ！ わしの村では、あそこの水を使うのは村人だけだと決まっている。雨の降らない この村では、あのト口の泉はワシらの命を繋ぐ大切なものなのだ」

と言つて、頑として聞かなかつた。

「そんなあ……」

私はペタリと座り込んだ。見かねたセナが口を開いた。

「ちよつと待てよ。俺らには する事が あるんだ。どうしても俺らを処刑なんかするって言うんなら……俺は、黙っちゃいねえぞ」と、睨みをきかせて言った。さすがの村長も気迫に押され少しビビッたようだ。

「ふ……ふん！ 知った事か。そうだな……一つだけ、処刑なんかせずに済む方法があるがな」と言つと、そつぽを向いた。

「そ、それって何っ!？」

私が興奮して尋ねると、村長は横目で私を見ながら言った。

「ここより西南の、シリカナ山の山頂から流れ出る、聖水があると聞く。その聖水を一滴たらずだけで清水が沸くという話だ。それをとって来てト口の泉を元の清い水に戻す事だ。そうしたら、処刑など やめてやるっ」

水を汚すも何も……少し飲んだだけじゃない、とも思ったが、引つ込めた。

頷いた私とセナ。早速その山へ行くと言った。

何で こんな事に なっちゃうんだろう。一晚この村で滞在して、明日に目的地・目の泉へ向かうはずだったのに。もう目と鼻の先にあるっていうのに。こんな事に なっちゃうなんて。

「しかしまあ、愚痴ってても仕方ねーだろ。とつとと、とつて来ようぜ」

とセナは私の怒りを抑えた。

そりゃそうか。過ぎた事を言っても仕方ない。とにかくとつとと片付けなきゃね、この騒動。

私とセナが支度を済ませ、山の入り口まで行った時。背後から声がした。

「あんたらでしょ？ ト口の泉を汚した奴って。あたし、村長の娘で かえて 楓っていうの。よろしく」

と言い出した少女。女忍者みたいな格好をして、髪を横で一つ上に くくっている。オテンバなイメージ。私と同年ぐらいかなあ。

「よろしく……あ、えつと。私は松波勇氣」

「ユウキ？」

「あ、うん。そんで、こっちはセナ」

「よろしく、セナさん」

「え、はあ。どうも」

と、ひとしきり自己紹介は終えたけど。一体この子、何しに来たんだろう？

それを聞こうとしたよりも先に、ぱっぱかと説明した。

「うちのオヤジら、頭古くてさあ。やってらんないのよねえー。あんならも運が悪いわよ。水 飲んだとこ、見られちゃうなんてさ。

でさあ結局、あんたらオヤジに言われて聖水とりに行くんでしょ？

あたし、この山は自分の庭みたいなもんでさ。結構 詳しいし、あんたらに付き合っつてやろうと思っつて。見張りついでに」

この子……ノリが軽いし、口が悪い。“オヤジ”だなんて……いやいや、それはそれで。

私たちに ついてきてくれるって!？

「えっ、いいの!？」

「いいつてば。さつさと行く。夜 深いと魔物出やすいしさ」

と決めて山に入ろうとした。なんて素早い……マイペースなんだ？

はっつ……も、も、魔物っ!？

軽く聞き流しかけたけど、それって結構怖いんじゃない……嘘でしょう!？

「早く来なよ。走るよ」

と、さささと走り出した。私たちは「えっ!？」って感じのままだったから、いきなりで驚いた。

楓って子、走り出したんだけど。すごく速い!

マフィア以上だ。

私は懸命に走ったけど、どうやっても追いつくはずがない!

しかも、セナも速いもんだから……完全に足引っ張ってる役だった。ハアハアと、全速疾走を続けて いい加減バテてきた。あゝ、もう、ダメッ!

……と、いう所で。100メートルほど先を走っていたセナが気がついてくれて私の所に戻って来た。私と言えば、木にすがって息を整えていた。苦しい息は なかなか落ち着かない。

「勇気、大丈夫か？」

とセナは心配そうに聞く。楓ちゃんの姿は、暗くなって見えにくくなった森の中で小さくなっていた。

このままじゃ、はぐれてしまう。

「セナ、ごめん。先に行つてよ。私、足遅いから……」

と苦笑いする私を見て、セナは「バーカ」と囁いた。

「普通の人間の足じゃ、あの楓って奴には追いつけないのは当たり前だつて。あいつ、ただ者じゃないから」

と慰める。そんな事言ってる間に、楓ちゃんの姿は見えなくなってしまった。

「ダメだよ、早く行って! 見失っちゃう。私、ここで待ってるし……」

「何言ってる。楓が言ってる、魔物が出るって。それにレイたちがまた来るかもしれない。一人にさせられるかよ」

そんな事言ったって、仕方無いじゃない……という顔をした。

するとセナはいきなり私を持ち上げ、抱えてしまった。キョトンとする私。いきなり体が軽くなったと思ったら……私の体、軽々と抱き上げられている。

ええええええー……っつ！！？ ……

「しっかり つかまってる」

とセナは、走り出した。楓ちゃんも速いが、さすが男というのかセナもなかなか速い。

しかも私みたいな お荷物を……。

私は しっつかりとセナに つかまった。ちらりと彼の顔を見た途端、ドキリとしてしまった。慌てて視線を外したがドキドキが鳴り止まない。

(カ、カツコイイ……)

と、今度は赤面してしまう。なんだか脈も速いし。

うひゃあ〜、どうしよう。気づかれたら……。

考えたら、すごい事だ。こんなカツコイイお兄さんに抱えられているなんて。

カツコイイお兄さん……言つなれば王子様ってとこね。

なんて、何考えてんだか……。

自分を叱りつける。やだあ、思考回路がおかしくなってくるよ。

「見えたぞ、山頂だ」

セナが突然言ったので、私は「はっ……」と腑抜けた声を出してしまった。

山頂には、小さな川みたいなものがあつた。何メートルもの大きな石がデン！と置いてあり、そのてっぺんから上で溜まった水が落ちてきて川となり流れて来ているのだろう。そしてこれが、村長の言っていた「聖水」……？

セナに下ろしてもらい、上から落ちてくる水を見上げた。上で、湧き出ているのだろうか？ 下からだと思えないので、わからない。「ほら。これに入れなよ」

と、楓ちゃんが小さなビンを渡してくれた。早速そのビンに入れようとフタを開けようとした。その時。

カツンッ。

持っていたビンが、飛んできた「何か」によって弾かれたように飛ぶ。3メートルくらい横に飛んで行ったビン。

びっくりして見ると、飛んできたのは1枚のトランプ。スペードの4のカードだった。それを拾う。

「な……っ!？」

トランプの裏には、“救世主の死”と描かれた絵柄。

飛んできた方向をキツ！と睨む。確信があった。レイたちの誰かの仕業だと。

「聖水は、とらせてやんない」

と、まるで何もかも知ったような口をきく、その姿が木の枝の上立っていた。

見ると、あれは村の入り口で私たちに泉の水を勧めた、おばあさんだったではないか。

私が あんぐりと口を開けると、おばあさんは優雅に羽織っていたマントを翻し、下に降りた。不気味な顔で私を見た。

「あなたも………蛭とかいう子の仲間ね？」

と私が聞くと、相手は訂正した。

「『仲間』だって？ まっさか。僕は僕なりにレイに協力してやっているだけさ」

え？ ……“僕”……？

と、首を ひねった。

何にせよ、レイの関係者もしくは敵ってわけね。

セナは攻撃体勢。楓ちゃんも、黙って様子を見ている。

「僕は……」

と言いかけた所で、マントをバツ！と勢いよく脱いだ。まるでマジックのように姿がおばあさんからある少年の姿に早変わりした。頭以外が全身タイツで、黒づくめ。首にジャラジャラと首飾りをつけている。年は私より少し年上つてとこ。ぱつちりと開いた光の無い黒い目が怖い。しかも たえず薄笑いを浮かべている。

「僕は、業師、わざ、ひたき。おもに作戦を考えたりするんだけどさ、ほとんどレイが やってるし。ま、助手って感じかな」

と紹介した後、私をジロジロと見る。

「へえ〜。これが救世主。ふーん……頼りなさそ」

と、グサリとくる事を言う。楓ちゃんより よっぽど口が悪いんじゃないの!?

「おい。鵜とやらよ。何しに来たんだ？ まさか、また勇気の命を狙いに来たのか」

と すかさずセナがツッコんだ。鵜は さも面白そうに、こっちを見る。

「そうだって言ったら？ 君は救世主を お守りする騎士ナイトかい？」と せせら笑った。セナも負けずに笑みを浮かべ、「そうだよ」と言った。

「ふふ。面白いね、君。でもね、僕、別に救世主を殺しに来たわけじゃないんだ、実は」

「何？」

「レイの命令でね。君らを ここに引き止めておけって言われたんだよ。で、あんなババアの格好して、この村の掟を利用したってわけ。君ら、簡単に ひっかかっちゃって。結構 面白かったよ」と、鵜が とんでもない事を言い出した。セナが詰め寄る。

「な……レイの奴、俺らを引き止めてどうするってんだ!? 何を……」

と言いかけた所で、セナはハツとした。

「まさか……」

「あたしの村に、何するつもり!？」

代わりに楓ちゃんが聞いた。

「そうだ。レイが私たちを引き止めておく理由……ひよっとしたら、村の皆に何か!？」

「さーあね。なんせ僕、レイの命令で　ここで君らを引き止めておけって言われただけだし」

と鷓は両手を天秤のように掲げ、首を振った。「僕の知ったこつちやない」素振り。皮肉っぽく笑う　その顔が何だか腹立たしい。

でも、そんな事言ってるらない。一刻も早く、村へ帰らなきゃ。

村の安否が心配だ。

私たち3人が後ろを向いて後退を始めると、木から木へ飛び移った鷓が私たちの行く手を防ぐように目の前に降り立った。

「言っただろう?　僕の役目は時間稼ぎ。気の済むまで相手をしてもらうよ」

「邪魔だ!　どけ!」

「やーだよ」

セナと鷓の言い合いは続く。すると、鷓の目前でボンツ!　と白い煙が何発か立った。

爆弾っ!?　……にしては威力に乏しい。

そうしたら、セナが　またも私を抱え上げ楓ちゃんと共に　ダダダと村へ向かって走り出した。恥ずかしい……けど、グズな私だし、仕方ない。

「何何っ!?!　何が起こったのっ!?!」

とセナを聞くと、

「あたしが隠し持っていた　こけらおどしの煙玉を2・3発放っただけ。あいつ強いよ、かなり。相手にしてる暇も無いでしょ。逃げが勝ち、ってね」

代わりに楓ちゃんが説明してくれた。セナが息苦しそうだったからだろう。無理もない……楓ちゃんのスピードについていっている

んだもの、苦しいはずだ。しかも さつきと同様、私みたいな お荷物が、ねえ……。

はあ……。

私って、情けないや。セナの優しさに甘えるだけ甘えて、何もできない役立たずなんだもの。自分で自分の身を守る事もできないなんて。

どうしよう……悲しく、なってきた。

そんなこんなで、やっと山を出た。どうやら鶉は追って来ない。

山を出た所で私を下ろす。セナは しばらく呼吸を整えているが、疲れきった顔だった。

ごめん……セナ。山道を往復、全速で走ったんだもんね……。

一方、楓ちゃんの方は涼しい顔。息一つ乱れていなかった。んー、すごいよね。体、鍛えてあるって感じがするよ。

一分くらい休憩した後、また再び村へ向かって走り出した。村はすぐそこ。あつという間に着いた……が。

信じられない光景を目にする事になる。

人・人・人……が、地面に横たわっていた。血だらけで。

一刀でブスリと やられた者、一太刀で切り刻まれた者、まだ微かに動いている者……まるでこれは 何処かで観た映画のワンシーンではないか。

いや、しかし。そんな血の海の中……一人だけ立っている者がいた。

真つ黒な闇の中で満月の光を浴びて、浮かびあがった その顔は……この前見た、あの大木の顔と そっくりであった。ただ、あの顔に細縁の丸い眼鏡をかけたただけだ。

恐らく、彼は……。

「レイ……！」

と、セナが呼んだ。

そう、セナの旧友、レイだ。

そのレイがゆっくりとこちらを向き、ジッと見ている。セナと同じ年か年上か。髪の色は青っぽい気が。白のロングコート。肩に赤いマフラー。よく見ると、細縁の丸眼鏡の両端から銀の鎖が。鎖の先は、耳のピアスに繋がっている。

長身の彼の手には、一刀の刀が握られていた。赤い液体がポタリ、ポタリと刃先から滴り落ちていく。紛れもなく、血だ。

その手の刀で、村人たちを斬ったに違いない。しかも、たった一人だね。

「レイ……どうして……お前、そんな奴じゃ無かった。どうして、こんな事を……」

呆けている私と楓ちゃんをそのままにして、セナはレイに哀れみのような怒りのような、悲しい声を出した。彼も どうしていいか困惑しているらしい。

この光景に実感が沸かなかつた。3人とも。

「オヤジ！ みんなア！」

楓ちゃんが やつとの事で叫び出した。そして段々と感情が沸き起こってきたのか、震えた声を絞り出してレイを睨んだ。

「よくも あたしの村を……！」
と……怒りに身を任せて、楓ちゃんは空をきつた。レイに飛びかかろうとした。わずか その間、1秒も無い。

瞬速の技だったのに。レイはさらにその上を行く速さで前から来る攻撃をかわした。楓ちゃんが よろめいた隙を狙って、レイは持っていた刀を振り下ろす！ ……

刀は、楓ちゃんの背中を斬った。見事な さばき……切れ味。一本の「線」が刻まれる。楓ちゃんの背中中の切り筋から、血が勢いよく噴き出した。

私は悲鳴をあげた。

「いやああああああっっ！」

何もできず、ただ目の前の光景を見て声をあげるだけ。

ゆっくりと、倒れた楓ちゃん。すぐに駆け寄れと思った……けど、

足がガクガクと震えて思うように動いてくれないのだ。

レイが、チラリと私を見た。途端、ビクンッ！ と金縛りにあった。足のガクガクは止まったけれど。

何て冷たい目 ！

その目に、吸い込まれそう。

すると いきなり、ガシッ！ っと私の足をつかんだ人がいた。ゾクッと身の毛が立って、心臓も跳ね上がる。

足元を見ると、村長だった。ここまで這ってきたのか頭と背中から血を流し、横たわっていた。私に何か伝えたいのか、冷たい手で私の足首を震えながら つかんでいた。

村長はカクカクした口で こう叫ぶ。

「この……疫病神めがッッ！
……」

怒りと苦しみと……悲しみと。顔が、訴えていた。ただ私は……言葉が胸に突き刺さっただけだった。

《第6話へ続く》

第5話（レイの罫）（後書き）

【あとがき】

「鷓」という漢字なのですが、普通に字変換してくれません……。だから嫌いだ。

ブログ第5話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-37.html>

ありがとうございました。

第6話（魔神具の力）（前書き）

シリアスあり、コメディー要素ありとなっていていますが作品中、今後の経過により残酷な描写があるかもしれません。今回あたりからあります（汗）。

同意した上で お読みください。

第6話（魔神具の力）

お前らは疫病神だ

こんなひどい言い方って無いと思う。一本の矢が、胸を突き刺したような痛みが走る。

その痛みが私の緊張を緩めた。同時に、涙が溢れてきた。とめどなく涙が流れ、その場に立ち尽くした。手で顔を覆う事もせず、ただぼうつと、突っ立っていた。

視線が、斬殺された村人たちに移る。

一体この人たちが何をしたっていうのだろう……。

色々と考えていると、私の足首をつかんでいた村長がいきなり誰かに殴られた。

「ジジイ！ 何て事 言うんだよ！」

口の悪い女の子……さつきレイに背中を斬られたはずの、楓ちゃんだった。

「たかが泉一つで あーだこーだと。うざいんだよ！ 泉の水くらい、あたしが とってきてやるよ！ それでいいだろ！？ こいつらには全然関係ねーじゃんか！」

と、口攻撃が続く。村長はといえば、さつき楓ちゃんの一撃でびていた。しかし構わず、楓ちゃんは責めるのを止めない。

突然、楓ちゃんが私の方を くるりと向いた。

「勇気！」

「はいい！」

と、思わず返事をしてしまった。迫力のある人だ。ケガは浅かったのか？

「何しよげてんだ！ あたしの村を、こんなにした あの男……絶対に殺してやる！」

と勇ましく言い切った。

あの男……レイ。

何のために、こんな事をするのか。

不気味な表情……薄笑いさえ浮かべているようだった。いや、そう見えるのは ただの錯覚かもしれない。彼は無表情だから。

「レイ！ このまま……このまま、この村から出て行けっ！」
と、セナが思い詰めた声で言った。

「俺はお前を憎みたくない。殺したくもないし、殺されるのを見たくもない。お願いだから、黙って出て行ってくれ！」
「殺されるだと？ この俺が？」

と、レイが口を開いた。そして持っていた刀に いっぱいと付いた血を、ぺろりと舐めた。

「この刀は、何だと思う？」

とレイが問うが、私たち一同は さっぱり わからない。というか、わかるはずがない。

「ついに完成したんだよ……この、魔神具、“邪尾刀”が！」

魔神具……“邪尾刀”……？

一見、ただの曲刀にしか見えないんだけど。彼の言ってる青龍の復活と何か関係があるのだろうか。

「教えてやる。四神獣の復活には、世界の中の人間の体内に持つ“四神鏡”が必要なのだ」

“四神鏡”……セナたちが持っている、“七神鏡”とは違うのかな。

「この刀で、人間の体内にそれが眠っているかどうかを調べる事ができるのさ……」

と、不気味に目を光らせた。冷たい……凍てついた顔。恐怖を感じさせる。

「青龍の召喚のために、こんな斬殺なんて事をしたってのか。一体何で……何で お前は変わっちゃまったんだ！」

セナが言い詰めても、眉一つ動かさない。

「そうさ。俺は変わった……愛だの情だのと、ほざく人間どもを俺の手で従えるのさ。人間は虫だ。害虫だ！ この世の万物以下だ！ 害虫には、ふさわしい生き方、もしくは死に方が必要だとは思わんか！？ なあ、セナ！ ……どうだ？ 俺と手を組め！ 2人で、この世を破壊しようじゃないか！」

と、セナに手を さしのべるレイ。セナは、当然のように それを拒否した。

「ふざけるなっ！」

と言った途端、セナはレイの眼光から放たれた気のようなもので、後ろに数十メートル吹っ飛ばされた。不意を突かれてしまい、セナは少し壁に叩きつけられて肩を打ち、激しく痛めたようだ。

「フン……。また会おう、セナ。今度は ゆっくりと話し合おうじゃないか」

とレイに見下され、セナは何とか起き上がって攻撃に出た。

「レイイイイイイッ！」

と、自ら起こした風で切り刻もうとする……ところが、それより強烈な風が現れ それを押し返し、いきなりでセナが驚いていると、誰かが、セナの胸あたりを風の刃のようなものでザクツと斬った。

セナは深手を負い……倒れた。

「セナあっ！」

と、私が駆け寄る。

私の背後で、レイと ある人物の会話が なされた。

「レイ様、おケガは？」

「大丈夫だ。行くぞ」

私が振り返って見ると、レイの側に女の人が一人。見た目、巫女のような格好。とても長いストレートの黒髪が、たなびいていた。

レイはフツと消えてしまった。私は「待って！」と叫んだが、完全に無視される。しかし、その女の人がレイにも劣らぬ不気味な顔

で私に話しかけた。

「今夜は月が綺麗よ……救世主」

と……。それを言い残しレイの後を追って消えた。

セナは重傷……村人たちも。楓ちゃんは……と見ると、必死に村人たちの手当てをしていた。

そうだ。こんなぼうつとしている場合じゃない。私も、手伝わなきゃ。

暗雲が立ちこめ、雨が降ってきた。

ケガの手当てより先に、皆を家の中へと引つ張り込む作業から始めた。

楓ちゃんと2人で、村人たちを家の中へと運び、止血の作業を繰り返した。セナの体の傷もすごい。綺麗な曲線カーブでズバリツとやられている。出血は何とか止まり、安堵のタメ息。

止血の作業は……何とか終えた。

疲れた顔で楓ちゃんを見ると、楓ちゃんは ちょうど その場で バタリと倒れてしまった。

あれだけ動きまわっていたのに……よく見ると、レイに斬られた背中の傷からドクドクと出血しているではないか。無理して動いていたんだ。

「楓ちゃん！ しっかりして！」

と、私は大急ぎで止血を。村中から さつきかき集めた布を包帯代わりに、傷をふさぐ。顔色が真っ青……やばい、出血多量だ。このままじゃ……。お願い、止まって！

私は固く、傷口を押さえ続けた。何十分か何時間かと思ってしまうような長い時間をかけ、何とか血は止まってくれた。

村人たちが倒れているを見て、レイに襲いかかった楓ちゃん。とっても勇敢だ。私なんかとは大違い。こんな傷をつけられても、きつと根性で立っていたのね。

ピンピンしているのは、私一人……。

とにかく、村人たちの様子を一人一人と見回った。傷の深い者、浅い者、死んだ者、また死んでいく者……私は少しの間、胸のムカつきを覚えた。

しかし、グツと堪える。

私、仮だろうが何だろうが、この世界では救世主なんだから！

村人一人、村一つ守れないでどうするっていうのよ！

だるい足にムチ打つ。パンパンになった足を引きずってでも、私は走りまくった。村中の家から足りない薬や布、水なんかも取りに走る。

一人 対 村人全員なんて決してラクではないけれど。捨てるわけにはいかない。

私が走りまわっていると、ある子供が私に微かな声で話しかけた。

「お姉ちゃん…… 『エンジュリール』 みたいだね……」

聞いた事もない名前だったので、子供に それは誰かと聞いた。

顔と体中を包帯で ぐるぐる巻きになっている、その子は答えてくれた。

「昔の人でね……戦場の跡に現れて、敵味方関係なく手当てしてくれるんだ。僕の ひいじいちゃんも……その人のおかげで手遅れにならずに済んだんだよ」

と、ポツポツと語り出した。息は少し乱れている。でも その子のおかげで『エンジュリール』という、こっちの世界の人の事が わかった。私の世界で言う、ナイチンゲールの様なものなんだわ。

「そっか……でもね、お姉ちゃんはね、その……エンジュリールさんみたいに偉くは無いよ」

と言うと、子供はニッコリと笑った。その愛しさといったら。私は、思わず抱きしめた。村人の中でも、その子は重傷だった。レイはこんな幼い生命まで、手にかけてたというの。

なんて……なんてヒドイ奴よ。

私、絶対に許さない。

私は、少し休憩をした。

私に出来る事は やったつもり。後は村人たちの生命力と天命に任せるしかない。

村人全員がいる大きな集会所のような建物の玄関前の石段に座りこみ、ジッと考えこんでいた。

段々、青龍の復活というものがレイのおかげで わかりかけてきた。

青龍の復活……想像は、し難いんだけど。それは どうやら この世の終わりを意味するも同じなんだわ。それを、あのレイがやるうとしてている。

この世界にいる、四人の人間の体内にある“四神鏡”……四枚集めてしまったら、青龍……四神獣を復活させてしまう。

なんとしても、阻止しなければならぬ。

犠牲は増えるばかりだろう。あの……四神鏡を探すという目的で使われていた、“邪尾刀”で斬り刻まれて。

きつと、ここにいる村人よりも もっと多人数の犠牲が生まれるんだわ……。

とにかく、「復活の阻止」のためにまず、四神鏡を集めさせない事よ。もし青龍が復活してしまつたら取り返しのつかない事になるかもしれないし。うん、そうよね。

四神鏡……どんなものか、見てみたい気もするけど。けっして見つけてはいけない、禁断の道具……。

神様、私が本当に救世主だと言うのなら、力を ください。せめて、自分の身は守れるくらいの力を。そうすれば、セナの肩の荷が下りる。

足手まといに なんか……なりたくないから。

それは、私の お兄ちゃんにも向けて言った言葉でもあった。今

頃、どうしているのだろう。もう何日か日が空いてる。ひよつとしたら、私は行方不明者として大搜索してるのかも。

でもね、お兄ちゃん。私、帰れない。こんな村を見捨てては。

斬殺された人たちを目の前にして、逃げれるわけないよ。だから見守ってて、私を。

救世主としての、私を。

気がつくとも雨は止み、白い満月が暗雲から姿を現した。

「さてと……」

と一呼吸置いて。村人たちの様子を見に戻ろうと、重い腰を上げた直後。

私の前に、楓ちゃんが立ちはだかった。

「楓ちゃん。ケガは大丈夫！？ もう少し休んでいた方が……」

と私が話しかけても、何の返答も無かった。

首を傾げる私。何の疑いもなく見ていた。だから、次の行動なんて予測不可能だったのだ。

いきなり楓ちゃんが鎌のような武器を持って襲いかかってくるなんて、夢にも思わなかったのよ。

……一方。

レイの現在の根城である、とある島では。

血で、錆びないようにと。レイの側にいた女が邪尾刀を、不思議な模様の魔法陣の中央に置き、結界を張っていた。結界の中には蒸気のようなものが立ちこめていて、刀を隠していた。

結界を張っている女の横で、レイはその光景を眺めていた。

「素晴らしい刀ですわね。さすがレイ様ですわ」

と、女は刀を褒めた。しかしレイは動じない。いやむしろ、当然と云った顔だ。

「この刀は……俺が作ったわけじゃないが。しかし、素晴らしい芸

術作品とも言える」

と、刀をまるで自分の子供か玩具のように見つめている。女はそれを見て少し微笑んだ。

「この刀を大事にしてくれ、さくら」

レイは そう言い残して一人その部屋を去った。

さくらと呼ばれた女……は、引き続き結界を張り続けた。

「もちろんですわ、レイ様。私の力^{わたくし}で、必ず」

と、さくらはレイが去った後に話しかけた。

（レイ様は今、何を考えていらっしやるのかしら……。ううん、きっと私の考えでは、とても及ばぬ所にあるのよ。そういう方だから……）

と少し寂しそうな表情を見せた。彼女にとってレイは、絶対の君主であった。とても慕っていた。とはいっても、レイの方は どのようなかは知らないが。

レイが さくらの事をただの下の者としか見ていなくても、それはわかりきった事だと思っている。さくらの一方通行であると知っていても、彼女は それでも よかった。

（私は いつでもレイ様のお側に居ます……。そして、命にかえてでも、レイ様を守りぬいてみせますわ）

彼女の決心や覚悟は固かった。

（でも……）

と、少し、首を捻った。さくらは、レイに対して ある疑問を抱いた。

（レイ様は なぜ邪尾刀の試し斬りを兼ねた四神鏡の探索に、あの村を選んだのかしら。あの村に救世主たちがいると、私の探知能力で わかっていらっしやっただけなのに。わざわざ鷲を使って救世主たちを村から引き離して……。一体 何故？ そんな事までして、あの村を狙った理由は？ それとも、何かもつと観点の違った考えがレイ様には おありなのかしら？）

そこまで考えて、フツと笑った。

(……私なんかに、レイ様のお考えがわかるはずがありませんわ)
寂しい自分を掘り起こす。そして力を休む間もなく、レイの芸術作品であるという邪尾刀に向ける。それが今 彼女にできるレイへの忠誠の証でもあるのだった。

不気味に光輝く月。

その光に照らされた楓ちゃんの顔は、正気じゃなかった。片手で鎌を、私に向かって振り下ろした！

間一髪……で、私は それをかわす。

「か、楓ちゃん……危ないよ」

と、まだノンキな事を言っている私。目の前の殺気が いまだ信じられず、戸惑う。

体勢を整え、また襲いかかろうとしている。

ジリジリと追い詰められ、私は ついに その場から背を向けて走り出した。

とりあえず、逃げよう。

と、私は思った……矢先、足が止まる。

なぜなら、前には重傷を負い止血して寝ていたはずの村人たちがごった返していたからだ！

楓ちゃんと同じく、手には鎌の他、クワや包丁を持ってね。

なんか、この光景って見た事がある……そうだ、こっちの世界へ来る前に見た夢の中の光景と似てるんだ！

忘れたはずの夢を思い出して少し感激……どころじゃないよ、コシ。

後ろには楓ちゃん、前には村人たち。

当然、横に逃げるでしょ。

ここまでは、あの夢の通りよね……なんて思いながら。

しかし横に動いた瞬間、やっぱり夢の通り誰かに ぶつかった。

だけど、金髪でも赤い瞳でも女でも無かった。横にいたのは、よく知っているセナだった。

「セ、セナ……。皆が……」

と言いかけて、ハツとした。

セナの手が、私の首にかかる。顔は やっぱり正気じゃ、ない！
何コレ、何なのコレ！？ 集団催眠！？

私は慌ててセナの手を振りほどいた。危うく、首を絞められるところだった。私は反対側へ走った。

しかし不運で奴あ、重なるもんだ。走った途端、ぬかるんだ地面で滑って転んでしまう。

しかも、足を くじいてしまつて動けない。

その間、確実に村人＋楓ちゃん＋セナの集団が私に近寄ってくる。その顔といつたら！

「や、やだああ！」

と私は“殺さないで！”の体勢をとった。

万事休すう！

……と目を固くつぶつたのに。何も起きなかった……。

恐る恐る目を開けると、村人たちの姿が 何処にも無かった。代わりに、視界いっぱいにもスモークが立ち込めていた。

何だろう、一体何が起こつたのだろうと考えているうちに、何故か眠気が突然に襲ってきた。クラツと体が傾いた時。

突然、誰かが私の口に後ろから白い布を押し当てた。

びっくりして、目が覚めた。そしてもがく。しかし、私の抵抗力よりも私の後ろで私の手を押さえこんでいる相手の方が力が強かった。

ひよっとして、レイの刺客！？

だとしたら、私は殺されてしまうの！？

助けて！

《第7話へ続く》

第6話（魔神具の力）（後書き）

【あとがき】

レイのセリフ「人間は万物以下」は、今度気晴らしに誰も居ない所でこっそり言ってみようかと思えます。きっと盛り上がるに違いない。

……見られたら沈もう……。

ブログ第6話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-39.html>

ありがとうございました。

第7話（目の泉にて）

一体誰なの！？ 私の後ろで私を押さえこんでいる奴……！
なすすべもなく捕まったまま、少し時が経つ。

さっきまで立ちこめていた白い煙が段々と薄くなって消えていった。すると村人たちの姿が見えてくる。

セナも楓ちゃんも……皆 倒れて眠っていた。

スモークで見えなかった……一体何、これは？

私の口と手を押さえていた相手の手が緩んだ。振り返ってみる。

そこに居たのは、黒い布を全身に纏った人。見える部分は、足の先と、顔の目の部分のみ。

「あ、あなたは……」

「何よ、まだわかんない？」

と、その人は纏っていた黒い布を脱いだ。意外な人物が現れた。

「マフィア！」

指をさして叫んだ。口をあぐりさせて、ギョツとして見る。

紛れもない、ノイゼ村で別れた七神の一人、マフィア。その人だったのだ！

「な、何でココに……？」

「良かった、間に合って。今、皆には眠ってもらっているの。“雲雀”でね」

「“雲雀”……？」

「私の技の一つなの。一定時間、眠らすだけ」

ああそうか。マフィアが……セナの“鎌鼬”かまいたちみたいな、自分の技で助けてくれたんだ。それで私が一緒に眠ってしまわないように、私の口を塞いで……。なるほどね。マフィアは黒い布で顔半分を覆

つっていたし、眠らずに済んだわけか。いきなりで、びっくりしちゃうた。

「あなたたちが行ってしまった後、ミキータやマザーが『行きなさい』って言うてくれたの。自分達で店は守れるからって……だから決心して、追いかけてきたんだけど……」

ミキータやマザーが……。

「……これは一体、何事なの？」

と、マフィアは周囲を見渡して言った。セナや楓ちゃん、村人達が倒れている。

「たぶん……あのレイの側に居た、女の人の術か何かだと思う」

と、私はマフィアに事情を詳しく説明した。レイが来て、村人達を斬殺した事。できる限り詳しく。マフィアは、それを一つ一つ飲み込んでいった。

「なるほど……“邪尾刀”ね……。厄介な物を作り出したわね、奴ら。でも、どうして そんな刀で四神鏡の あるなしが わかるのかしら」

「さあ……そこまでは。とにかく、手当てで手も頭の中も いっぱい いっぱいだったし」

「ふーむ。さて、どうしたものか……」

とマフィアは懸命に考え込む。

あのレイの側に居た女の人…… 『今夜は月が綺麗よ、救世主』と
言い残した。一体どういう意味だろうと思っただけ、きつと
この事だったんだ。

皆を操って、私を殺そうとして……たぶん、そういう事だ。

あ、ちよつと待って？

『今夜は月が綺麗よ』……？

そうよ、さつきは月が出ていなかった。月が出た途端に皆が変わ
っちゃったんだもの！

という事は、月が出ていない間は大丈夫って事なんじゃ。

今は月がキラキラと輝いて出ているけれど、皆は眠っている。マ

ファイアの技の方が強力のようね。

「そうね……それしかないかも」

と、マファイアが一人で何事か呟いた。

「何？」

「“目の泉”へ行きましょう。あそこの水は、どんな病も たちまち治ると言われているの。病……とは少し違うかも、だけど。もしかしたら……」

「へえ、そうなんだ。ちょうどいいじゃん！ 始めから そこに行くつもりだったんだから。さっそく行こうよ！」

「ええ……そうね。でも、本当に効くのかしら……ただの噂だし……。“雲雀”の効力は、あと24時間くらいだけど、きれた途端にまた、襲いかかってくるのかしら」

「いいじゃん、とにかく行こう！ 何もしないよりは ずっといいよ。ダメだったらダメで、また その時に考えよ！」

と、脳天気な私を見てマファイアは少し笑っていた。呆れたように。

「これはカケね」

マファイアはウィンクした。

村人達をこのまま、ぬかるんだ地面の上に放つたらかしにするわけにもいかないの、とりあえず皆を元居た大きな建物へと運んだ。セナを寝かせた後、寝顔を見て呟いた。

「……行ってくるから。絶対助けてみせるから」

ふいに涙が こみ上げてくるのを我慢して、その場から離れた。実はさつき、セナに首を絞められそうになった時……このまま死んでもいいかな、なんて一瞬思ったんだ。セナは優しいけど、もしかしたら厄介者だっと思って思っているのかもしれない。足を引っ張るくらいなら いっそ……と思った。

でも次に、セナが言った事を思い出した。この村の人達に捕まった時、牢屋で。

『俺らには する事があるんだ。どうしても俺らを処刑なんかする
って言うんなら……俺は黙っちゃいねえぞ』

って。正真正銘、本気で言ってくれた。それが嬉しかった。

する事……私が救世主かどうか、確かめる事。レイの野望を阻止
する事。

それが、私の今の する事なんだ。

だから、こんな事で負けてらんない。私は進む人間になるんだ。
決意新たに歩く足。迷いなんて無かった。

目の泉まで徒歩だったが気持ちの焦りもあつたし、だいぶ予想よ
り早く着けた。

“無人の砂漠”を走り、途中 砂に足をとられながらも何とか走っ
た。

何か、走ってばっかり。でも、疲れなんて気にならなかった。だ
って事が事だから、さ。

「あれよ、勇氣。光ってる」

とマフィアが指した方を見ると、こんな砂漠に ぼっかりと泉が
あつたのだ。下から水が湧き出ているんでしょうけど……にしたつ
て、奇妙な光景ね。草とかは一本も生えていないのに。

月の光に照らされて輝く泉、これがマザーの言ってた“目の泉”
だ。

「白虎が封印された……って、この底に沈んでもいるのかなあ」
と、地に手をつけて上から かがんで泉を見た。その時。

「！」

水面には私の顔ではなく、全く違う、長い髪の女の人の顔が映っ
た。

「お化けえ！」

私は驚き慌てふためいて、後ろ向きに這うように逃げた。するとどうだろう。泉の水面が輝き出し、ブクブクと音を立てた。そして私とマフィアが あんぐりとそれを見てみると、何と泉から さっき映っていた髪の長い女の人がユルリと出現したのだ。

一体、どうやって立っているのか？ ……いや、立っているって問題じゃない。人間の姿をしているけど、この人は幽霊だ。……たぶん。

美人で、長いストレートの髪が腰まであり、上で ちょこんと髪飾りをつけている。白い着物を着ている。肌は青白い。そして気の強そうな瞳で真っ直ぐ私を見た。

「救世主よ、初めまして」

と、口を開いた。

「ココに来た事を歓迎する。我が名は氷上^{ひかみ}。500年前、白虎をココへ封印した者である」

「あなたが！」

私は少し近づいてよく見た。確かに幽霊のようだけれど……あまり怖くなくなった。だって私にはつきりと語りかけてるんだもの。その存在感は すごい。

「ココには元々、泉など無かった。私が封印した後、勝手に湧いた泉だ。……私がこの地を封印の場としたのは、^{ひとけ}人氣が少ないからだった」

白虎を封印した500年前の救世主……か。私と同じように、違う世界から来たという事ね。もしかしたら、私と同じ世界から来た人なのかも。ひよっとしたら、私の世界の昔の人かなあ？

しかし私の疑問など よそに、氷上は淡々と語る口を止めなかつ

た。

「見えないが、泉の奥底に石碑がある。ちょうど泉が隠しているから封印を解く法など簡単にはわからないだろうが……今、四神獣の一つ、青龍を復活させようとしている者がいる。青龍の封印の場所は、ココよりずっと東のベルト大陸よりも もう少し東へ行った、小さな島だ。無人島で、霧が深く、入った者は2度と帰って来られないという」

おおお……！ 何て親切な人！？ 大ヒントを教えてくださいや
ったあ。

「その島の名前は？」

「名は無い。誰も普通の人間は行った事も無い。千年ほど前に私と同じように救世主が来て封印したはずだが。詳しい事は私は知らぬだが……あの方なら知っておられるはずだ」

「あの方？」

「この世界全体を管理している、天神殿あまがみだ。私も あの方に聞いたのだ。救世主よ、七神を集めたら、天神の居る神殿へ赴け。そして青龍の封印方法を学び、実行せよ。今の お前の使命だ。いや……きつと、天神からの使いが そのうちやって来るはずだ。とにかく、今は七神を集める事。それが先決だ」

七神……七人の精霊の神。セナとマフィアの他に、あと五人だ。それが世界の何処かに居る……。

「でも……私が七神の残り五人を捜すよりも先に、レイ……達が探している四神鏡を集めてしまったら……」

青龍が復活。そしたら何が、どうなるの？

「……救世主。お前はまた この世界の事が よくわかっていないらしいな」

「だってノーヒントで こっちの世界に来ちゃったし」

ゲームじゃ、説明書やオープニングといった、ちゃんと先に筋書きがあつたりするのに。何かこう、プロローグみたいなのがあつてさあ……魔王の復活！ この世は暗黒の世になってしまっていた。

しかしその時、剣と盾を持った少年が魔王を倒すために立ち上がる！少年は父親の形見であるムーンストーンを持って冒険へ。ムーンストーンから産み出た妖精に導かれ、少年は仲間と共に大陸を……。

……おっと いけない。何か別のストーリーを作っちゃっていた。つまり……冒険には、ちゃんとした理由があるって事よ。この話の場合、魔王が復活して世の中が暗黒の世界になっちゃったから少年は勇者を目指して旅立つんだもんね。

なのに私の場合は どうよ？ いっきなり こっちに来てさあ。七神だとか四神鏡だとか青龍だとか……訳わかんないもん。まるで夢の中みたいじゃないの。

「ゲーム感覚でいてもらうのは困る」

と、氷上は変えない表情で また話し出した。結構しゃべるわね。幽霊もどきなのに。

「この世界は、お前の居た世界とは異なる、お前にとって『異世界』だ。いきなりで ついていけないかもしれないが、でも ココでも元の世界と同じ、人は傷つき、悲しみ、苦しんでいる。そして恐ろしいのが、四神獣……もとい『青龍の復活』なのだ」

「どうなるの？」

と、ゴクリと唾を飲み込む。

「青龍の復活の波動は、この世界全体を包み込み、おとなしい魔物は凶暴化し、人間の人格さえもそれに変えてしまう」

「え……？」

「青龍だけではない。四神獣の復活の際は皆そうなる。魔物も人間も互いを攻撃し合うようになり、死んでいった者達を喰い合い、結局 最後は世界上の者 全てが滅ぶ。四神獣の復活とは即ち、世界滅亡を意味する。それを阻止すべく復活の兆しが見えた時、救世主が呼ばれるのだ」

救世主の意味……こうして改めて聞くと、私自身プレッシャーを受ける。

「レイが青龍を復活させようとしている……だから復活する前に、私が呼ばれたんだ」

四神獣の復活は世界の滅亡。過去の氷上のような救世主達は立派に封印という仕事を成し遂げたのだ。だから今この世界は存続している。

なのに私は……。

「本当に、救世主なんでしょうか」

実感が無い。

だから聞いてみた。氷上は、一瞬の沈黙を置いて言った。

「そうだ。伝説の通りだ。この世に四神獣 蘇るとき、千年に一度 救世主 ここに来たれり。光の中より出で来て七人の精霊の力使ひて これを封印す。精霊の力とは即ち転生されし七神鏡。これを集め救世主、光へと導かれたり。……まだ続くが、伝説に一寸の狂いも無い。……お前は真正正銘、青龍封印に呼ばれた救世主だ」

緊張が少し緩んだ。

私は れっきとした救世主…… 『仮』なんかじゃないんだ。

「……わかったわ。七神を集めて、天神っていう人の所に行く。それが今の私に出来る事なのね？」

と、自分に確かめているかのように氷上を見た。

「ああ。そうだ。絶対に復活を食い止めてくれ。それが私の願いだ。私に言える事は全部話したつもりだ。健闘を祈る」

と言いながら、少しずつだが姿が薄くなっていた。なので私は慌てて最後に聞いた。

「あなたも違う世界から来たんですよね？ 白虎を封印して……そして元の世界へ帰ったんですか!？」

果たして帰れるのかどうか。最も、今は帰る気分には なれないのだけだ。

しかし氷上の姿は答えを言わずに、元の泉へと戻ってしまった。

一瞬、冷静だった氷上の表情が悲しげになったようなのが……気になった。

「“雲雀”の効力が きれるまでには、何とか帰れそうね」と、マフィアは言った。

「でも、効力が きれた時にもう一度その技を かけちゃいけないの？」

ふと思った。

そうだ。そうすれば効力が きれても安心。また、かけ直せばいいだけだ。

「そうはいかないのよ。一回“雲雀”を かけられた人間は、そうね……最初2・3日は免疫のせいで かからなくなってしまうの。連続して かける事は できないのよ。しかも、そう何回も かけていくとね、免疫はどんどん強くできてしまって、最初は2・3日だった期間が一週間、一ヶ月、半年、一生……って、かかりにくくなっちゃうのね」

ふうむ……そういうもんなのか。

「だいたい、私あまり技を使いたくないのよね」

「え？ 何で？」

「精霊だって、意思を持っているのよ。力を使うという事は、精霊の力を借りるって事。私、精霊の力ばかりに頼りたくないのよね」と少し申し訳なさそうな顔になった。

マフィアって……強いなって心底思った。普通、そんな事はあんまり思わないよ。私から見たら、すごくうらやましいのに。私にそういう特殊な力が あったら、どんどん使っちゃうのに。

あ、実は今、早歩きで砂漠を歩いている。でなきゃ、こんなおしゃべりなんてできるわけがない。さっき少し速く走って、バテた所で走りから歩きになった。“雲雀”の効力は あと13時間弱。大丈夫、後で走れば十分間に合う距離だ。

さっき汲んできた このビンの中の水を皆に飲ませれば、きっと正気に戻る。

もし戻らなかつたら？

…………… どうしよう。月が出たら、また襲われちゃう？

ああ、本当に私って脳天気！ 考えなし！

マフィアの言ってた通り、これはカケだっ……………。

……………なんて考えていると、砂漠は終わって普通の草道に出た。村まで、もう少し。

空にはもう朝日が とうに出て、地面が温まり出していた。

徹夜で走って、体力は限界だった。でも、バテてらんない。

ビンの水を2つに分け、マフィアと私で それぞれ村人達に水を飲ませた。何十人も居るし、結構 大変。パンパンになった足をヨイシヨと動かす。

その作業を何度も繰り返しているうち、やっと最後の一人に飲ませた、その後。

村人たちは目を覚ましていった。

「ココは……………」

「俺ら、どうしたんだっけ？」

という声が、あちこちで起こる。

どうやら、泉の水が効いたようで。村人達も、セナも、楓ちゃんも、目を覚ました。様子を見ていても、正気に戻っている。

「あれ……………？ 俺……………」

と、ボケた顔をしたセナに、私は飛んで抱きついた。

「セナ！ 良かったあっ！」

セナは「はあ？」という感じで、疑問符が頭の上に いっぱい付いていた。

カケは見事に私の勝ちってか？ はっはっはっ。

んー、すごい威力！ “目の泉”の水の力！

何と何と、レイに斬られた傷も、通常の倍ぐらいの速さで治りかかったのだ！

もう絶対 大丈夫でしょう！

感激！ 歓喜！

嬉しさいっぱいマフィアを振り返ると、マフィアもニコリ笑って嬉しそうにしていた。

私達は昨日の村人達の態度とは うって変わり、無罪放免。村人達に次々に お礼を言われ、めっちゃめっちゃ歓迎されまくった。

しかも何と、滞在費をタダにしてくれるって！

わーい。

英雄きどりだあつ！

そうよねえ、村人達の方から見たら、私たちは命の恩人よね。死にかけて所を水の力で救っちゃったんだし。ただの偶然じゃん、って言われたら終いだけど……。

私とセナ、マフィアは、有難く昼食を ご馳走になる事になった。村一番の（とはいっても小さい村なただけ）食堂『幸福亭』へ入り、カウンターへ横一列に並んだ。

「お、救世主様ご一行じゃねえか。どんどん食ってくんな。体力つけねえとな！」

とカウンターの前で、この店の主人らしき おじさんが水を持ってきてくれた。

今の時間は忙しいのに、私たちだけ特別扱いだっただようだ。

「わーい。いただきまーす！」

と、この店の名物料理（想像に お任せ）を頂く。もう、ほっぺたが落ちそうなほど おいしかった。おかげで眠気も吹っ飛びそう。

せっかく料理が おいしいというのに。マフィアもセナも あまり箸が進んでいない。時々ぼーっとしている。特にセナだ。左ヒジをつけて、箸の先をジツと見つめて考え込んでいた。

そうか……。

きつとレイの事を考えているんだ。

レイのした事……レイの考えてる事……。

忘れられない あの光景。……そうよね、あんなの見た後、こんなに もりもり食事している神経ってズ太い。脳天気とか、のんきとか、言ってるんじゃないんじゃないの？

きっと私、さっきの事は全部 夢だーなんて心の何処かで思い込んでるんだわ。『ゲーム感覚で いてもらうのは困る』……氷上に言われたばかりじゃないの。

私は箸を置いた。

すると それを きっかけのようにして、マフィアがセナに詰め寄った。

「……話してもらいましょうか。そろそろ。 あんたとレイの事を」

瞬間、私はドキリとしたが、セナは もっとドキリとしたようだった。少し動揺していた。

セナとレイの事……あまり触れないでいた事だ。2人は旧友らしいという事が わかった時点で聞きたかったけど、聞かないでいた。「敵の事は よく知っておかないとね。これから色々衝突していくでしょうし。知っている事、全部 話して。でないと、私も勇気も口々に戦えない」

きつい口調でマフィアは言った。セナは、ふう、とため息をついた後、顔を上げて空を見た。目は、何処か遠く天井の向こうを見ているかの如く。

「俺は昔 ……監獄に居たんだ」

レイの事はイコール自分の過去の事も話す羽目になる。セナは今その時が来たんだと思っただけらしい。

重々しい口どりで、レイと自分の事を話し始めた。

《第8話へ続く》

第7話（目の泉にて）（後書き）

【あとがき】

移動時間って、加減を考えるのが非常に難しい……。いつそワー
プしちやえよと何度ツツコんだ事か……。

ブログ第7話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-40.html>

ありがとうございました。

第8話（月夜祭）

時は12年前。その頃は ちょうど、世界の あちこちでは海賊、山賊、強盗団といった集団が現れ、犯罪の溢れる時代であった。今は警備が厳重にこそなつたが。

その混乱のさなか……セナ・ジュライ。年は5。

両親は窃盗団の一味であった。

幼いセナは両親と共に窃盗を しばしば行っていた。月の無い夜、迅速かつ あつさりと村一つ、村中の金品を盗みまくり、朝日が昇る前に姿を くらます。これの繰り返しであった。その窃盗団の名は『赤いバラ』で あつたらしいが……さだかではない。

隠れ家が一つあつた。とても大きな家で、外から見ると ただの村の集会所か何かに見える。お金が無いホームレスなどは、ここに住み着いている事もあつた。そしてオボロゲながら覚えているのは、そこで寝泊まりした際に聞いた、両親のヒソヒソ話で あつた。

「ねえ あんた……お頭、次は何処へ行くって言つてた？」

「アサバ村だ。南の。ちよつと遠いがな」

そんな会話を、寝たフリをしながら横で幼いセナは聞いていた。

アサバ村かあ……行つた事無いなあ……。

と、そんな事を考えながら。

そして次の日の朝。目が覚めると、両親も仲間たちの姿も何処にも無かつた。

きつと、遠いからすぐに行つてしまったのだらうと思つた。思つた瞬間、両親の元へと走り出していた。隠れ家の秘密の倉庫に あつた金を少し持ち出し、村への切符を手に入れて馬車に乗り込んだ。仲間たちは それぞれ一人一頭の馬を持っているので、こんな荷馬車じゃ追いつけないだらうとは思つたが。

数日かかつて。村に着いたのが朝方。朝日が少し顔を現した頃。

正確に言うと、荷馬車は昨夕この村より もつと離れたタミダナの街に着いていた。そこから徒歩で、夜中いっぱいかかって子供の足で この村へ辿り着いたのだった。

しかし。

着いた時分には、村は襲われた後で。なんと警察員で いっぱいであつた。一人の警察員がセナを見つけてしまふ。セナは目が合った瞬間、逃げ出してしまった。

それが不信任を抱かせてしまい、結局セナは捕まり、嚴重な取り調べによりセナは窃盗団の一味だとバレ、監獄に放りこまれてしまった。

小耳に挟んだが、今回アサバ村を襲つた『赤いバラ』は、村の近くの海から現れたそうだ。

大船を一隻買い、馬を乗せて。

アサバ村へは陸路ほぼ一本道だったのに すれ違いにならなかつたのは、そのためであつた。

運悪く、セナは捕まってしまった。隠れ家もバレってしまったが、警察が踏みこんだ時には宝も人も居ない、もぬけのカラだったといふ。

窃盗団の お頭は、セナが捕まつた事で隠れ家を早々に移転し、足がつかないようにしたのだろう。頭のキれる人だった。

一方、ドジを踏んだセナは、監獄生活を送る事になった。窃盗団の一味……とは言つてもまだほんの子供だったセナは、5・6年でここから出る事ができるのだった。

セナは、親に見捨てられていた。子供が捕まつたというのに、迎えにも来なかつた。

政府側として、このような子供は孤児として処理されている。とはいつても、設備も体制も何も無い時代だったから、放つたらかしの好きに生きる状態で他には何もしてはくれない。

運の良い者は養子として何処かに引き取られ育てられる。それ以外の者は……独力で生きるしか、ない。

死ぬか生きるか2つに1つ。その結果が、窃盗団なんてものを生むのだが。政府が本格的に改革に乗り出すには、もう少し時間が経ってからであった。

セナは監獄で、一室与えられた。ここは監獄とはいっても ある意味、学校や寮のような雰囲気であった。少年収容所、という所にセナは居た。

セナと同じような境遇である子供ばかりが集められ、食事などを規則正しく共にする。起床、朝礼、本日の仕事、入浴、就寝……といった事が全部決められている。本日の仕事とは、雑用など。草むしりや掃除などだ。

自由時間は あっても、部屋から出てはいけなかった。また、集合時間に遅れたりすると厳しい罰が下される。食事抜き、一日反省室、ひどい看守などが居る時は隠れて拷問を受ける。

さつき学校や寮のような雰囲気と言ったが……それは規則正しさなどを例えて言っただけで、そんなワイワイといったものではない。言葉などは あまり交わす事も無いのだ。

監獄の周囲は厳かに有刺鉄線が張られた高いフェンス。もっと昔、それでもそこを上り、外へ出ようとした子供が居たらしいが、高いフェンスの てっぺんには強い電流が流れており、知らずに焼死してしまっただけらしい。

それ以来、ここを抜け出そうと思う者は居ても思わなくなってしまうた。

まさに地獄の収容所。セナは そんな所に放りこまれてしまったのだ。

一室を与えられたのだが、実は2人部屋でセナよりも先に もう一人そこに子供が居た。

レイ・シエアー・エイル……当時6歳で あった。2人は、ここ

で会おう。

2つの勉強机と2段ベッドと、一つの窓があるだけの部屋で、彼らは何年間かを過ごした。

驚いた事に、セナとレイは仲良くなっていた。周りからは親友だろうと思われていたぐらいだった。セナがレイと仲良くなれた理由は特には……無い。ただ……レイの神秘的な強さを秘めた瞳にセナは魅せられた、とても言っておこう。

たった一歳の年の差なのに、レイは世界中の事をよく知っていた。レイの実親は普通の人だったらしいのだが、ある日家に置き去りにされて、それから外を迷いながらも、どうにか生き抜き、ツテで盗賊団のボスに気に入られたのだという。

盗賊団に入り、世界中に渡る盗みをしまくった。せいぜい大陸一つか二つぐらいしか行った事の無いセナにとって、レイの話す世界の事はとても興味がいった。

世界の真ん中あたりにある火の島は、島全体が消える事の無い炎に包まれているんだとか、東の方の大陸は民族間でトラブルが絶えないんだとか、北極の方では氷で出来た島がいくつもあるんだとか。

そういった話の中で、『七神創話伝』の話も出てきた。四神獣……朱雀、白虎、玄武、青龍についての話が何章かあって一つにまとまったもので、名は売れているが実際に全部を知っているものは少ないらしい。

レイはこの話に出てくる青龍というものが特に好きで、一目見たいと漏らしていた事がある。四神獣の復活の意味……それはレイもよく知っていた。今から思えば、その頃から野望を抱いていたのかもしれない。

レイは、天才とも言えるかもしれない頭脳を持っていた。普段の生活の中でもそれは窺うかがえた。冷静で、やる事は徹底し、粗が無い。

大人でさえも言葉巧みに言いくるめる。セナがミスをした時、レイは自分が やったと申し出た事が あった。

「俺が やりました。責任をとって、今日の夕食は抜きで お願いします」

と言い出し、看守は その通りレイに夕食抜きの罰を与えた。レイは後で こっそり、セナに、

「今日の夕食知ってるか？ あのクソまずい さや菜のバター蒸しだけ。あんなの食べさせられるくらいなら抜きの方がマシだぜ」

と舌をペロツと出した。おかげでセナは まずい食事を とる事が出来たが やはり申し訳なく、セナは こっそり夕食のパンを一つ隠し持ち、後で こっそりレイに あげた。

レイは受け取って嬉しそうに食べてはいたが。後で考えると、それも策略の一つだったと思う。セナの性格を見抜き、夕食を少し残して持つてくるだろうと……。

それを計算に入れ、行動をとったのではないかと。

でも、セナは あえて探るような真似はしないでおこうという事にした。

また、レイは魔法も少し知っていた。軽く、人をコカす程度ではあったが。

その技は、窃盗団のボスに教えこまれたんだという。

世界の事、伝説の事なども、全部そのボスから教えこまれたのだといい、セナが来る一年前、やはり5歳の時ドジを踏んで逃げ遅れて捕まってしまったらしい。

セナと違って、レイは そのボスを尊敬し、実の親のように思っていた。セナが自分を捨てた親を激しく憎んでいるのに対し、レイは実親の事など頭からも感情からも まるで無視し、始めから居なかつたという事になっていた。

レイは ここから出たら、世界の何処かに居る^{あまがみ}天神という人を訪

れてみると言っていた。そして2人が別れた日……即ち、この監獄から出所した時。簡単な挨拶だけをして、サッサと別れてしまった……それきり音沙汰無しであった。

「出所してから、6年になる。俺は17、あいつは18になった。別れたきり……レイの事は何一つわからない。あいつに何があったのか……それに……」

とセナは言葉を詰まらせた。

「少なくとも、別れる時までには普通の人間だったわけね」

「どうして……？ どうしてなんだろう」

とマフィアと私は悩んだ。

セナの話は、私にとって衝撃であった。まさかセナが窃盗団の一味だったとは。それに、囚人生活も経験済みだとは。そしてそんな所でレイと出会うとは。

セナは苦しんでいる。

今の表情から わかる。

胸が、その顔を見ているとチクチクしていた。とにかく何か、励ましの言葉をかけようとした時。背後で呼ばれた声があったので見ると、楓ちゃんが居た。

楓ちゃんは私たちに外へ来いと言った。

言う通り ここ『幸福亭』を出ると。店の前で村長及び5・6人の村人がズラリと横に並んで待ち構えていた。びっくりして見ると、村長はいきなりペコリと頭を下げた。

「わしらが馬鹿だったのだ。楓の言う通り、泉一つで あーだこーだと……。それに、操られていたとはいえ、あんたらに危害を加えて……すまんかった」

村人たちも後に続いて頭を下げた。私はセナとマフィアと顔を見合わせ、村長に言った。

「ううん。もういいんです。そんなに謝らないで下さい」

さつきは有頂天だったけど、今は そんな気に ならない。だいたいレイが この村を襲ったのも、きつと私を殺すためだし。村長さんが私に疫病神と言った、あれは正解だと思う。

だから、本当なら謝るのは こっちの方なんだよね。

でも あえて言わない。卑怯かなと思うけど……。

「村人を助けてくださった お礼に、祭を開こうと思います。毎年、一年に一回 月夜祭というものをするんですよ。満月はもう過ぎましたがね。遅いですが、歓迎も込めての祭です」

村中で、祭が開かれた。

灯りが蛍のように灯され、神秘的な感じを出している。ドンドンと村の広場では、いくつもの太鼓が叩かれ、出店も出回っていた。

人は ごったがえしていて、気を抜くとフラツと迷子になりそうだった。私の居た世界と同じ。カラオケ大会もあるし、夜店もあるし。ヤグラもあって、何やら楽しく懐かしい感じた。

わたあめ、イカ焼き、たこ焼き、射的、輪投げ……に似たようなものが たくさんあった。私たちは顔を知られているので、全部タダであった！（やりー！）

私ったら大はしゃぎで店をまわり、カラオケでは飛び入り参加で『おぼろ月夜』を歌った。なのはーな ばたけえーに、いいりーひ うすれー……

割と評判で。こんな歌は聞いた事が無いと言われまくった。そりゃそうでしょう、私の世界の歌なんだから。ハイになっていた私は、アンコール、と言われ今度は『インライト伝説』も付けて熱唱しまくった。

ごめんねえー素直じゃーなくーてー……

カラオケで大喝采を受けた後、マフィアとセナの所へ戻るとセナの姿だけ無かった。

「あれ？ セナは？」

と、スルメ……のようなものを食べながらマフィアに聞くが、マフィアは知らない、と答えた。

捜してくるよと言いつつ残り、私は人ごみに紛れながら歩いた。途中、村人たちに名を呼ばれながら。出店の主人から食べ物ももらいながら。

村の外れの、人気の無い所。巨大な岩がいくつか重なり高く積んであり、置いてあった。その一番大きな岩のてっぺんに、セナがちょこんと座っていた。

セナを見つけて、私は岩を登る。割とゴツゴツと足場があったから、すぐに登れた。でも出店の主人たちにもらいまくった食べ物などは持ちきれない分、下に置いてきた。

そうやってセナの居る所に辿り着くと、セナが振り向いた。

「何してるの？」

と私がハアハアと息を整えながら聞くと、セナは「いや、考え事」と言いつつ顔を背けた。

「ふーん……」

と私は、セナの横に座った。足は放り出しブラブラと空に浮かし、岩の上に2人並んで座っていた。高いので、森が上からよく見える。ポツポツとした、明かりも見える。風はそよ風。すぐく気持ちいい。何より、少し欠けた月がすごく近くて明るいのに驚く。

ちよつと重い空気の中、私は持っていたたこ焼きもどきを「食べる？」と言いつつ差し出す。だがセナは「いや。いい」と言いつつ断った。昼食もろくに食べてないし。店の食べ物も全然手をつけなかった。これじゃ、体の方が心配だ。

ふいに、セナが口を開いた。

「俺……まだ信じらんねーんだよな。レイが、あんな風になつちまった事」

前髪を手で上げ、頭を抱えた。そして足にひじをつき、片手であごをついた。

「昔から やる事なす事 完璧な奴で、頭も良くて……ほんつと、
すげー仲良かったんだぜ、俺ら……それが、何で あんな……」
下を向いて、一人言のように呟いた。

泣いているのかと思っただが、よく見えない。いや、泣いてはい
ないようだけど……。

私は、たまらずセナに叫んだ。

「きつと何か理由があつたに決まっているよ！ 昔が どーとかよ
り、今これからの事を考えようよ！ ね!？」
と一生懸命 訴えた。

思いつきで言った割には結構 良い事を言つてると思っただけ
ど。セナに どうかしら？ という顔を試してみた。セナはフツと笑
い、「……そうだな」と私を見た。

月の光に さらにされたセナの顔は、いつそう綺麗さが増した。ド
キドキした。

「お前も不思議な人間だよなあ」

と、セナは急に変な事を言い出した。え？ と顔をしかめると、セ
ナは さも面白そうに私を見た。

「こんなトコいきなり来て、帰りたいなんて言わねーじゃん。今ま
で一言も」

「あ……」

そう言えば、言った事が無いねー。

「お前は救世主が どうとかより、元々普通じゃないんだろ」

一瞬、はあ？ と思っただが、すぐにピンときた。つまり何？ 私
が変人って事？

「うるっさあい！ セナだって男には見えないもん！」

と、その場でスツクと立ち上がり、セナを指さした。

セナは思いつつきり傷ついたよう。カチンときて同じように
立ち上がり、私よりも上から罵声を浴びせる。

「余計な お世話だ！ 俺は女顔だって言われんのが嫌いなんだよ
！ そつちこそ女に見えねー！」

「何ですってえ！？ 放つといてよ！ 男女！ オカマのカメさん
！」
「うるさい！ 子供！ まなイタ！ 短足！ 馬鹿！ マヌケ！
ドジ！ トンマのトンちゃん！」

ト………！

………はーはーと、息をつく2人。

何よ何よお、あんた ちよつと口が悪いんじゃないのお！？

………つて、こんな所でケンカして どうするんだか！？ せつか
くセナを励ましに来たってのに、これじゃ逆効果じゃない！

でも、セナの馬鹿！ 何も「まなイタ」は無いでしょ、「まなイ
タ」は！

それに「短足」つて！ 何よ、自分が ちよーつとスタイルい
いからつて………くそお、言い返せない自分が すつごく情けない
つたら。

しばらく睨み合っていたら、セナの方が先にプツと吹き出した。

そしてアハハハ………と しばらく笑っていた。拍子抜けした私の
顔を見て、また笑い出す。………やだなあ、私の顔、そんなに面白い？

プーと顔を膨らませていると、セナがポンポンと私の頭を叩いた。

「はっはっはっ。普通じゃないつていうのは、褒めてんだぜ。一応」
嘘つけ！ と私は ますますムーッとした。

「普通の女なら、いや人間なら、逃げ出さず、救世主なんて使命。
お前は偉いよ。前向きで。俺も見習わないとな」

と、少し真剣な顔をした。そして叩いていた手を私から離すと、そ
の手で右手の中指から一つ、指輪を抜いた。そして、私に それを
渡す。

私 が え？ としてセナを見上げると、セナは優しく微笑みかけ
た。

「お前に、コレやるよ。お前は魔法も使えねーし。ヒヨヒヨだしな

「！」

「うっ……」

と、私はタジタジ。

「ごめんねー、役立たずで……という意味で私は受け取った。

「でも……コレ、確か七神鏡でしょ？ 大事なものなんじゃないの？」

「まあいいじゃん」

「だって……そうよ。もし、失くしたら。私ドジだし。やっぱりもらえない！」

と、つつかえそうとしたが、セナはそれを拒んだ。

「失くしたっていいよ。これは ほんの お守りだから」

と、また笑った。

「でも……」

「いいって。俺がやるって言っただから。俺だって、格好つきたいんだよ」

と、少し照れてる。私も少し顔が熱くなってしまった。

思いがけないセナからのプレゼント。しかも、こんな大事なもの。

私は極上の笑顔で言った。

「ありがとう！」

と。セナは満足そうだった。

その夜。村の宿で、ゆっくり休んだ。マフィアとの2人部屋。隣のベッドでマフィアはぐっすりと眠っている。よっぽど疲れているんだろっな。

私はというと。私も よっぽど疲れているはずなのに、なかなか寝つけないでいた。それもこれもこの指輪のせい。右手の中指に、セナのくれた指輪が輝いている。

指輪を見るたび、エへへ……とつい顔がニヤけてしまう。

この部屋の隣で寝ている、セナからのプレゼント……あー、もう。興奮しちゃって眠れないよー。

(何か守られているみたいだね)

前にマフィアからもらった人形も、窓の側に置いて飾っている。マフィアもセナも、すつごく優しくしてくれる。だから、幸せ。指輪をつけたまま、私は そのままようやく深い眠りへと陥っていった。

その一方。

隣の部屋で身支度を終え、セナは物音立てずに部屋を出た。立ち止まって、勇気とマフィアの居る部屋をチラリと見る。

そして、

「じゃあな。マフィア、勇気」

と擦れたような声で言い残し、彼は一人で宿を出た。

そんな事は全然知りもしないで、勇気もマフィアも ぐっすりと眠っていた。

夢の中で、さっきのセナの微笑がまた出てきた。そして、指輪を渡す……そんな甘い夢を見ながら、またニヤける勇気。

だが、その後……トンマのトンちゃん。豚が勇気に短足、まなイタ、ずん胴もつけて悪口を言うという、悪夢へと変わってしまった。いた。

《第9話へ続く》

第8話（月夜祭）（後書き）

【あとがき】

昨日は満月で、月の周りに薄っすらとリングが見えました。月のそばに明るく光っているのは火星だって？ だとしたら……ひじょーに見られてラッキー……。……でした。

ブログ第8話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-41.html>

ありがとうございました。

第9話（時の門番・巻）

ライホーン村に暖かな朝が訪れる。雲一つ無い晴天。窓から降り注ぐ日差しが眩しい。

マフィアより一足お先に起きた私は うーん、と伸びをして、パジャマから服に着替えた。

昨夜は、本当にグツスリ寝たなあ。何か すっごい久しぶりって感じ。今、何時頃だろ？ まだ昼前だとは思っただけだね。

何て考えた後、部屋を出た。宿の主人の所へ行く前に、セナに一声かけておこうかな、と思って私の部屋の隣部屋のドアを、ノックしてみた。

ところが、返事が無い。

まだ寝ているのかな……とも思っ、とりあえず宿の主人の所へ行こうと下の階へ降りた。すると階段を下りる途中、ちょうど宿の主人と出くわした。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「あ……ハイ」

まだ ちょっとボケた頭で そう言うと、宿の主人はニッコリ笑った。そして、

「下に朝食が来てますよ。どうぞ食べて下さい」

と、感じよく言った。

「あの……」

と私が ためらいながら言うと、主人は すぐ「ああ」と思い出して言った。

「洗濯物なら庭に干しておきましたよ。今日は良い天気ですからね。すぐ乾くと思っ。お連れのお一人は先に出かけなさったようですよけど、あなた方2人は しばらくココに いらっしやるんでしょっ？」

「え？ 出かけた？」

「男の方ですよ。まだ夜明け前くらいでしたかね」

それって、セナの事！？

私は急いでセナの部屋に行き、ドアをノックする。ウンともスンとも言わないので、ノブを捻るとドアが開いた。鍵は かかっていなかった。

見ると布団が綺麗に たたんであって、荷物ごとセナは居なかった。ただあったのは、ベッドの側の小机の上にあった置き手紙らしき物だけ。

嘘……セナ、何処に行っちゃったの！？

私は その手紙を掴むように持って、マフィアを叩き起こした。

マフィアは びっくりして飛び起きて、手紙の内容を読んでくれた。

『 “時の門番” の所へ行ってくる。用事が済んだら帰る。 セ

ナ
』

こっちの文字で、そう書かれていた。

「 “時の門番” ？」

「 知らないわ。一体、何処に…… 」

と私とマフィアが首を捻っていると、部屋の入り口の開けっ放しだったドアに もたれかかって こっちを見ていた楓ちゃんが教えてくれた。

「タル島のスペリッタ山にあるよ。今朝一番の船で行ったみたい。あんたたちに よろしくってさ」

「セナと会ったの？」

「私ん家、ジイちゃんが早起きだからね。私も早起きして、村中ラッピングしてるの。今日も その途中、村の入り口ントコで会った」
ちっとも気がつかなかった。私もマフィアも、グッスリ眠ってい

だから。

「どうして急に……」

とマフィアが考え込む。そんな事、いくら考えたって わからない。「さあね。でもそこって、確か人の過去を見る所よ。レイって人の事でも、調べに行っただんじやないの？」

と楓ちゃんに言われて、私とマフィアは顔を見合わせた。それは十分考えられる事だったからだ。

「そうか……あの出来事の後だものね。きっと昨晚、フツと思い出したんじゃないかしら。それで、すぐ行ってみようと思ったのね。でも、どうして私達に黙って……」

「きっと……」

と、マフィアの言葉を遮った。

「きっと、七神捜しには、あんまり関係無いからじゃないかな。私用の事だからって気を使って……」

そう。セナって、そういう事を考えそう。これまでも、私の事をよく考えてくれていた。きっと、これは俺とレイとの問題だからなんて今回も考えたんだろう。私には今マフィアが側に居てくれるわけだし、大丈夫だろうって思ったんだわ。

「それにしても、水くさいわね」

「ああ、さっき水仕事してたもんで」

「いや、そうじゃなくて」

と、マフィアと楓ちゃんの小漫才など笑っていられる余裕は無かった。ただ、ただ悲しかった。何だか、のけ者にされた感じがしたからだ。

(どうして一人で行っちゃうのよ……)

と怒りもしたが、空しいだけであった。そんな風に、しよげている私に、マフィアは尋ねた。

「どうする？ 勇気」

マフィアは心配そうに私の顔を覗きこんだ。

どうするも、こうするも、一つしか無いでしょう？ と私は自分

で自分に言った。

「セナを……追いかける！」

マフィアも楓ちゃんも、さも当然というように頷いた。

私たちは船に乗った。ライホーン村は大陸のド真ん中にある村なので、まず村の人の馬車に乗せてもらい、マイラ港町で降りて、そこから定期船に乗り込んだ。

タル島は、こっちの大陸と、その東南にあるコンサイド大陸との間にある、小さな島らしい。森しかないし、魔物も出るので人は全然居ない。その森の木には、リンカラという実が生る。その実を採りにチラホラと人が来る程度だ。

リンカラはココでしか採れないし、街では結構高く売れるんだという。

定期船はあるが、一日一往復しかない。もう今日は出てしまった。だが、港の人に頼みこんで交渉し、何とかその島まで寄り道がてら連れて行ってもらえる事になった。

タル島の森は、ミールの森という。

その森の真ん中に、セナが居る“時の門番”があるのだそう。 “時の門番”とは、人の過去や記憶を探る所。それには大金がいるらしい。たまに何処ぞの王族なんか兵士だの何だのを引き連れてやって来るんだとか。さつきも言ったが、森には魔物が出るのだ。そんな所に“時の門番”なんてあるもんだから、普通の人は近寄らない。しかも大金がいるというのだから。訪れるのは、豪商や王族くらいなものだった。

私達はタル島に着き、森を歩き出した。

途中、魔物にも何匹か出くわしたが、マフィアが魔法の技を使って倒してくれた。

「ごめんね……マフィア。力、使わしちゃって……」

「いいのよ。この前は偉そうな事を言っちゃったけど、そうも言ってるんじゃないもんね。しっかり技を磨いて、勇気や皆を守らなくちゃ。精霊達も、わかってくれる」

精霊達には意思がある。精霊達の力を借りたくないんだと言っていた。

でも、レイやら蚩やら鷓ひたひやらが色々と仕掛けてくるし、人間の力にも限界がある。精霊の力を借りずに戦う事はやはり無理だ。奴らは強いし、なおさらだ。

私はマフィアに申し訳ない気持ちで いっぱいだった。

夕日が沈む頃、私達は森でキャンプをし、横になった。焚き火をしているけれど、向こうは森の闇。その闇の中に、セナの幻影を見た。

今頃何をしているのだろう、一人で何を考えているのだろうと思った。右手の中指に はめ込んだ指輪を見る。触れると、冷たい。セナの気持ちが伝わってくるよう。

(セナ……)

セナが居ないだけで、すごく寂しい。いつからこうなったんだろう。いつも側で守ってくれていたのに……。

初めて会った時から……セナは、とつてもとつても優しくかった。

今はそれが心に しみる。私の頭の中はセナの事で いっぱいだった。こつちの世界に来る前までは、お兄ちゃんの事をよく考えていたのに。

それなのに。

こみ上げてきた苦しい胸の痛みを抑えながら、そつと……目を閉じた。

……

早朝。森を突き進む。

スペリッタ山は もうすぐそこだった。だが、目の前には崖の絶壁がある。

人が登ったような跡があるな……と、私が うなだれていると。

マフィアが技を使おうかと言い出した。

「技って……空を飛べるの？」

「飛べるってほどじゃないけど……まあ、見てて」

と、精神統一をし始め、足元に手を かざし、

「“草鞋”！」

と唱えた。

すると、あたりの落ち葉や草がザワザワと急に各、意思を持つように集まり出し、やがて ひと塊になった。マフィアは同じ事をしてもう一つそれを作って、その上に乗った。私も真似をして塊の上に乗ると、まるでエレベーターみたいにサーツ……と、ゆっくり垂直に進んだ。しっかり安定しているので大丈夫。バランスは崩れない。

「すごいー！」

と私はキヤーキヤーと喜んだ。

「もつと練習すれば、自由自在に何処へでも行けるようになるわ。

今の私には、上下左右が精一杯。でもちよつとした水の上とかでも たぶん行けるし、結構便利なのよね」

「だったら、これで海も渡れない？」

だなんて、無茶苦茶な事を言つと、マフィアは笑った。

「無理無理。力尽きてドボンだよ。海の上は森の精霊は少ないしねなるほど。マフィアは木神だものね。」

「うーん……でも、他の七神の力と併用させれば出来るかもね」

とか何とか言っている間に、絶壁を昇り終えた。すぐ、高さ5・6メートルほどの土の山があり、見ると山に埋め込まれるように木で

出来たシンプルな門があつて、その先は暗い。

他に変わった所も無いし、周囲には何も無い……きっと、ココがその“時の門番”だ。間違いない。

「入る？」

とマフィアが聞いたので、私はウン、と頷いた。

門をくぐり、一步を踏み出した時。その先の暗闇の中から声が聞こえた。

『ココより先、一人ずつしか入れぬ。用のある者は一人で入れ』

重々しいおばあさんの声だった。

「私行つてくる」

と、私はマフィアをそこで待たせて、先へ進んだ。マフィアは最初渋ったが、何とか「大丈夫大丈夫！何かあつたらすぐ逃げるから！逃げ足には自信が……」と適当な事を言つて（ノンキ？）強引に説得した。

先へ進んで行く。

道には何も無い、ただ暗闇の中を歩くだけ。

段々目が慣れてきても、やっぱり先は道が続くだけ。一体何処まで続くのだろうと思つた途端……壁になった。

石造りの壁。触るとヒンヤリする。すると……。

ゴゴゴゴゴゴ……！

壁が動き出した。どうやら、隠し扉？

光が急に目に飛び込んできた。いきなりで眩しくて目を閉じてしまったが、そつと開けると……。

部屋が現れていた。

何とそこは！

「ココは……あの時の遺跡と同じ!？」
そつ。

その部屋とは。この世界に来る直前に居た、あの遺跡の落とし穴

！鏡が壁に七枚、ぐるっと囲むように円状になって貼り付けてある。まさに『鏡の間』！

よく見ると、鏡にはそれぞれ光の加減で色がついているように見えるのだ。これも同じ。

そっくりだ。その場に立ちすくんでしまった。

違う事といえば。あの部屋には、こんな今入ってきた出入り口は無かったって事だけ。あの遺跡の部屋が上から見て七角形なのに、対しココは八角形だという事だ。

そして私が入った出入り口の真正面の鏡……そこから。ある女の人が突然！にゆつと出てきたからギョツとした。

「私は^{わたくし}1623代目の時の門番、トキ・メイラル・エド。どうぞ、トキとお呼び下さい」……

綺麗な声だった。あれ？ さっきのおばあさんみたいな声じゃない……けれど、まあいいか。

見た目は普通のお姉さんだ。後ろで一つに髪を縛りハネさせ、手には魔法の杖みたいなものを持っていた。先端に付いた金具のようなものが時々、鈴のようでシャン、シャンと鳴る。

首から紐でぶら下げている飾り。星を型どったような造りのもので、真ん中に『目』がこしらえてある。

そして……どうやら、彼女は『盲目』らしい、という事。目が、会ってからずっと閉じられたまま……。

「ようこそ、“時の門番”へ。あなたが、青龍の年の救世主ですね？」

「えっ……どうして知っているんですか？」

「さっきの男の方が見ていらした中にあなたの姿があったものですから」

さっきの男の方。きっとセナに違いない。

「ご覧の通り、私は盲目ですが……この首飾りの『目』が、私の目

の代わりなのです。この飾りの『目』で見たものが、私の脳の中に送られるんですわ」

「あ、あの……」

と、私は ためらいがちに聞いた。

「はい？」

トキさんは首を傾げた。

「ココに来た男の人……何処に行きました？」

「用を済ませ帰りましたが」

と あっさり答えた。私は……かなりガツクリきてしまった。

せっかくココまで来たのに……すれ違ってしまったんだ。

……せっかくココまで来たのよ？ このまま帰るだけだなんて。

セナがココで見たもの。何を見たのか知りたい。

「あ、あの……」

と私は また尋ねた。トキさんは同じように「はい？」と また首を傾げる。

「その用って……一体、彼は何を見たんですか？ 見せてもらえますか？」

と言うと、トキさんは落ち着いた声で、だが、厳しさをも込めた声で言った。

「それは申し上げられません。ですが、100万G頂けるなら少しだけ お見せしましょう」

ひゃ……100万G!？ ……って、どれぐらいなわけ？

こっちの世界の1Gは、日本円で いくらぐらいなのかしら……。

……っていうか。1円も1Gも持って無いじゃない。払えるわけ、ない。

「お金が いるんですか？ どうしても」

「ええ。お金の無い方は、お帰り下さい」

何で？ 何で人の過去を見るのに お金がいるの？ それって おかしいじゃない。

「どうして過去を売り物にするんですか、あなたは」

と、私は詰め寄った。私の口は止まらない。

「なら、大金があれば何処の誰でも簡単に過去が覗けちゃうって事ですよ？ それって、ある意味 犯罪のような気が しませんか？ 自分の知らない所で自分の知らない人が自分の過去を何もかも知っているだなんて……不気味です。プライバシーの侵害なんじゃないですか？」

もし、ストーカーだったら最悪だ。筒抜けって事になる。

「……」

トキさんは黙ったままだった。私は なおも続ける。

「確かに、私が彼の見たものを見たいって言うのは、ワガママかもしれないけど……」

途中、自分の意見の矛盾さに気がついた。過去の覗き見がダメだなんて言いながら、自分はセナの過去を見ようとしている。

私って……馬鹿だなあ。

「もういいです。ごめんなさい。私、ちょっと言ってる事が おかしかった」

「いいえ。あなたは正しいですわ。人の過去を売り物にする事は、確かに いけない事です」

と、トキさんは言った。

「じゃ、どうして お金をとるんですか？」

「人の過去というものは、お金なんかで買えませんよ。元々ココは迷い人のための。自分の過去を清算したりするキツカケを与える場なのです。本当なら、お金なんて頂きません。ですが……ココ数年。見栄や好奇心や、くだらない事に この場を訪れる方が増えつつあるのです。ですから、法外な お金などを請求して、帰って頂いているんですわ」

なるほど……それですか。

だから私にも、お金を請求したのね。

「いつかの国王には、100兆Gを請求しましたわ。もちろん、引き下がりましたけどね」

国王ともあろう人が、100兆Gにビビって帰る……うーん、なら、100万Gって比較的安いのかな？ ……そんな事は無いか。でも この人結構怖い人だ。

「え、じゃあ、セナには過去を見せたんですか？」

「うっかり名前を言ってしまったけれど、意味は通じたようだ。」

「ええ。さつきも申しました通り、迷い人の方にはタダですわ」

「そうか……セナはちゃんと見られたのね。でも、もう帰っちゃったけれど。」

「そうですね……それじゃ、私も帰ります。私には、お金も迷いも無いですから」

と、言つて そそくさと立ち去ろうとした。すると、

「あなたにも、かすかな迷いが感じられますわ。少しだけなら、お見せしますけど？」

と……トキさんは言った。私は びつくり。

「え……い、いいんですか？ 1Gも無いですけど」

「その代わり。代償として、あなたの過去を見せて頂きます。よろしいですね？」

取り引きは成立した。私の過去を見せる代わりに、セナが見たものを見せてくれるという。

私は鏡の部屋の中央に立った。トキさんは何処かへ姿を消し、声だけが暗い中で聞こえた。

「それでは。お見せ致します」

トキさんの声が出た途端、それぞれの鏡 全七面を使って、一つの『映像』が映し出された。私は映し出された映像に囲まれ、目移りする。音声は一切無い。

そこにはハッキリと……レイ 少し若い頃と思われる が、居た。

セナと別れたすぐなのかな……これは。

その内容とは。

レイが居た場所は……ココは……神殿……？ 聖書にでも出てきそうな白い石造りの壁で出来た、辺りに人気の無い地だった。レイはまず、その建物を前に ひざまずいた格好で居た。まるで誰かに忠誠を誓っているかのような。よくは、わからないけれど。

レイは見た所で普通の人だ。何処も おかしい所は無い。誰かに仕え、賢明に仕事や雑務を こなしているといった風を感じられた。パツ、パツ、パツと映像の中の月日が、早送りされたように時間が経過していつている。

その流れに沿って、ある日ある時の光景。

レイは、誰なんだか わからない 背中だけしか現れていない人物の前で、何か……？ に、驚いていた。そして すごい顔で人物を睨みつけ、吐くように何かを言った後……走り去った。

そんな内容。

音は全く無いし、レイ以外の人物は居るんだけども一人として誰もよく見えなかった。

「コレが、レイの過去の一部です」

と、画面は いきなり真っ白に変わった。コレで終わりのようだ。

「え？ たったコレだけですか？」

「セナという人が見たのは、コレだけです。どうやらココは、『あま天神の神殿』のようですね。レイという人はココで天神に仕えていらつしゃったのでしょうか」

セナは これだけで満足したの？ だって全然 訳が わからないじゃない、コレだけじゃ。

はっ……もしかして。セナ、まだ何か隠し事が あつたりして。

「あつ、あのつ。セナの子供の時も見せてもらえませんか！？」
と、私はトキさんに頼んでみた。

セナの子供の頃に、何か あつたのかもしれない。セナが隠したがつている何か……。

「ダ、ダメでしょうか？」

黙ったまま反応の無いトキさん。やっぱり、図々しかったのかな……。こつこついう事言うの。でも、知りたいんだ。セナの事を。

やがてトキさんは「いいでしょう」と返事をくれた。たぶん断られるだろうな、と思っていたのに予想外だった。

真っ白な画面にパツと映像が再び流れ出した。中央に居る、少年。髪の色が薄紫色だ。きつとセナに違いない。

年は5〜7歳くらいだ。きつと周りの背景とセナのかつての話から、そこは監獄の中に違いない。有刺鉄線の張られたフェンスの向こうにセナと、もう一人。少し、大人びた顔をしている少年……きつと、この子がレイだ。

2人は本当に仲良く、草むしりをしていた。時々一方が話しかけては、笑っていた。これがあのレイだなんて、確かに信じられない。微かに、暗さがある。でも笑っている時にはそんなもの無い。2人とも、本当に窃盗団や盗賊だったの？ と疑わずにはいられない。

あどけない笑顔……2人とも、本当に可愛らしい少年であった。私はフォーム、と腕組みをして唸った。

これまでに不審な点は無い。セナの供述通りだ（犯罪者みたいね）。

（あれ……？）

フェンスの側に、ふと、ある影が映った。その人影が段々と有刺鉄線の張られたフェンスに近づいて来る。

セナとレイは気がついたようだ。こつこつへ走り寄って来た。

その人影が背姿を現す。後ろ姿だったが……髪が肩までの金髪の少女だった。子供ドレスを着ている。その歩き方、髪の毛をかき撫でる仕草などには、気品があった。何処かの王族か貴族の娘かと思っ

ピンクのフワフワドレスに赤い靴を履いた少女は、フェンス越しにレイやセナと一緒に何かしゃべり出し、時々談笑していた。「誰、この子……」

この少女は 一体 誰？

すると少女がこちらに振り向いた。その顔に、見覚えがある気がした。何処かで……。
「ええと、何処でだっけ？」

整った顔立ち。キリツとしている眉や口元。子供のようで子供らしくない感じだ。瞳が赤色だった。

首には銀の飾り付きの黒いチョーカー。金髪の髪が、振り返った途端サララン、と音を立てそうなほど。美しかった。

見た事があるような、無いような。

とにかく……その少女の登場で、私は胸に不安がよぎった。

(まさかセナの隠している事って、この子の事なんじゃ……?)

それは確信にも近い感情だった。何故ならセナは自分とレイの事を話す時に、少女の事など一言も言わなかった。もしかしたら、セナが故意に隠していたのかもしれない。

セナとレイと この少女が笑っているさまを見て、私は胸がチクチクと痛んだ。

《第10話へ続く》

第9話（時の門番・杏）（後書き）

【あとがき】

あけましておめでとつございます（今日は正月）。
目標、継続。これだけ……。。

ブログ第9話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-42.html>

ありがとうございました。

第10話（時の門番・貳）

私、知らない。セナ達の子供の頃に、こんな子が居ただなんて。しかも、それを隠して。一体、誰なのよ、この子。何で、そんなに楽しそうなの？

……私はココ、“時の門番”でトキさんに、お願いし、セナの過去を見ている。見ていた中に、気になる少女が一人。その子の存在を今、初めて知った。

セナが前に語ってくれた話の中には登場しなかった、謎の少女の出現に私は戸惑いを隠せずにいる。

何で、この子とセナ達が。何で

……って、私ってば。何で、こんなヤキモキしているんだろう？別にセナに女の子の知り合いが居たっていいじゃない。隠す、だなんて大げさじゃないの？ 隠す事のほどでも無い事かもしれないのに。

と、というような事を考えていたわけだけれど。

なーんか、スッキリしない。最初レイの過去を探るはずだったのがセナの過去の方に興味が行ってしまって。全く、もう……。

私が、そんな風に悲しんだり怒ったりしている間に、映像はいつの間にか終わってしまっていた。

「以上です」

トキさんのアナウンスが聞こえた。

「あれ？ もう？ せめて、あの子の正体が、わかんないかなあ」「私がブツブツ言っていると、トキさんが言った。

「人の過去は、あまり興味本位で見るものではありませんよ。それに、あまり見過ぎると代金は、どんどん値上がりしますよ？」

「代金……あ、そか。私の過去を見せなきゃいけないんだっけ」
そうだった。トキさんとは、そういう契約をしたのだ。

セナ達の過去を見せてくれる代わりに、私の過去を見せるという。
金髪少女のおかげで、コロッと忘れていた。

「見てもいいけど……お笑いだよ？ コケたり転がったり落ちたり
踏んだり踏まれたり。……ちょっと恥ずかしい」

「では、代金として あなたの過去を見せて頂きます」
と、また鏡のスクリーンに ある場面が映る。

私はまだ小さい時のものだ。小さい私が、居る。

お兄ちゃんも ずっと幼い。

そして……。

「お父さんお母さん……」

視線の先には、両親の姿が映っていた。

両親が事故で死んだのは、私が7歳の時。記憶が薄れ、両親の顔
はオボロゲで、全然覚えていなかった。

目の前で優しそうな女の人「お母さんと、やはり優しそうで た
くましい、ラーメンを作っている人「お父さんが、居る。

店のカウンターに座っている お兄ちゃんと私は2人の作ったラ
ーメンを食べている。ありやりや、私ったら水をこぼしているよ。

お椀のラーメンを綺麗に食べた。すごく嬉しそうに、幸せそうに
していた。

次に、パッと画面が切り替わった。

あれは……まだ朝方だ。お兄ちゃんが電話越しに何かをしゃべっ
ている。そして電話を切った後、私の肩に手を置いて、下を向いて
しまった。

私はというと、いきなり泣き出している。

この状況は……。

……両親が、事故に遭った朝だ。遠出へ出かけた両親が、帰って来る途中に交通事故に遭ったんだ。それで病院から連絡が来て……。病院へ行つて。両親と別れの挨拶をして……。その日の夜、親戚内で お通夜。次の日の昼。お葬式。

それが終わると……。親族会議。私と お兄ちゃんの引き取りについて、話し合いがあったんだ。

この時の親戚中の顔つたら。誰もが迷惑そうにしている。

ウチは狭いよ、とか、ウチは兄弟も多いし、とか、互いのなすりつけ合い。

そんな中、お兄ちゃんは確か こう言った。

「伯父さん伯母さんたち。安心して下さい。僕は高校をやめて、家業を継ぎます。勇気も僕が面倒みます」と。

しかし心配した伯母さんが少し反論をする。

「家業を継ぐ……ってね。ラーメン屋でしょう。そう簡単にすぐ出来るってものでないでしょう？ それにあなた一人ならまだしも、勇気ちゃんは まだ小さいじゃないの。男手一つで育てていくのは、思ったより大変な事よ。それが出来るの？」

お兄ちゃんは ひるまない。

「確かに、両親の味を出すのは難しいかもしれませんが……でも僕は小さい頃から父の側でラーメン作りを見て来ましたし、味も舌でしっかりと覚えています。何年かコツコツと積み上げてやっていくつもりです。幸い、両親の保険があるんです。僕の力が及ぶまで、やっていけると思えます。それに、勇気も僕が面倒をみます。ですから、安心して下さい」

そう言うお兄ちゃんに、反対する人は居なかった。ココから、私達は始まったのだった。

ラーメン修行に明け暮れるお兄ちゃん。それを見ながら、私は育

った。お兄ちゃんの中は好きだった。でも、少し寂しかった。そして……。

パツと、映像がまた変わった。

その状況は。

まだ記憶に新しい、あの日の出来事。

お兄ちゃんと、その彼女らしき人との、口論の場面。陰でこっそり私が見ている。

交わしている言葉の内容は音声が無いからわからないけど、私は徐々に思い出してきた。

こつちの世界に来る直前の、出来事……。

「何で急に そんな事を言い出すんだ！」

「だって……！ もう、耐えられないのよ！ 私と妹と、どっちが大事なのよ！？ どうせ妹だって言うんでしょ。妹が何だってんのよ！ あんな厄介な子、

いなくなっ てしまえば …… ！」

(……………！)

……お兄ちゃんが頬を叩く。女の人が去って行く。一人残ったお兄ちゃんが割れたガラスを片付け始める。それを見た私はパジャマのまま外へと飛び出す。

あの日の一連の光景だ。鮮明に思い出していた。

どうして忘れてしまっていたんだろう。あの時の女の人が言った言葉を。

“ あんな厄介な 子 ”

……嫌だ。

絶対、思い出したくなかった。

“居なくなっ てしまえば ”

「もういいっ！ 止めてっ！ ……」

……………。

瞬間。

私の居た部屋は、映像が消え元の鏡張りの部屋になった。鏡には、頭を抱えてる私の姿が小さく映っている……。

少し震えが止まらず、ガタガタいわせていた。

「思い出したくない。思い出したくなかったのに……！」

心の奥に しまっていた事が、今 全部を吐き出されようとしていた。目から、とめどなく涙が溢れていた。

胸が しめつけられるように苦しい。呼吸も正常じゃない。そして……嘔吐を催した。

気持ち悪い。すごく、気持ち悪い……！

吐き出した後、ふいに顔を上げると正面の鏡に自分が居た。ボロボロの、自分が居た。

私、救世主？

何の救世主？

誰を？ 守るの？

だって自分だって守れないじゃないの？

このまま世界を渡るの？

「私……私、家にも帰れない。ココにも居られない。どうすればいいの？ ねえ、どうすればいいの？ ……お兄ちゃん、お父さん、お母さん、セナ、マフィア……」

鏡に すがりついた。

誰も答えなんてくれるわけが無いのに。泣くしかなくて……。

「勇気」

と、声をかけられ、鏡を見ると私の後ろにトキさんが居た。

「……トキさん。……ごめんね私、自分の過去なんて見る必要も無いし、他人の過去なんて見ちゃいけなかったんだ。好奇心なんかで見ようとして……本当に、ごめんなさい……」

私は鏡の中のトキさんに謝った。トキさんには、正面から顔向けができなかった。

「いいんですよ。謝らないで。それよりも……あなたの中の心の闇は蓄積された分、治るのに時間が かりそうですね……」

トキさんの優しい眼差しが心に染みた。

「あなた一人で この世界を背負い込まないで。この世界の事は、この世界の人達が何とかするのですから。あなたは、それにほんの少しの力を貸すだけなのです」

「力を……?」

「あなたの周囲の人も、あなたに力を貸してくれるはずですよ」

そうか……私、一人で色々な事、いつきに背負い込みすぎたんだ。救世主としての使命の様々を。

私の悪いクセかもね。頼まれたら、イヤって言えない……そこ。

「私……ね。ずっと、お兄ちゃんに迷惑かけていたの。私のせいで、お兄ちゃんは苦しい思いばかりしているよ、そう思っていて……」

私が もし居なかったら、きっとお兄ちゃんは自分の好きな事をし
て幸せだったのに……」

私の脳裏にお兄ちゃんの背中が浮かんだ。

「そつでしようか」

「え?」

「あなたという妹が居たからこそ、お兄さんは頑張れたのではないですか？ あなたと、家を守るといふ使命感を持っていて。……あなたも、お兄さんのように頑張ってみたらどうですか」

お兄ちゃんも今の私と同じ気持ちになった事があるかもしれない？ 逃げ場の無い悲しみと苦しみと。

……でも、お兄ちゃんは、逃げなかった。

「私……戦わなくちゃ、自分と」

私は立ち上がって、トキさんを見た。

涙を拭いて、手に力を込めた。

「さあお行きなさい。外で、あなたを待っている人が居ますよ……」

“時の門番”を出ると、マフィアが待ちくたびれた様子で迎えた。

「遅い遅い。……で、どう？ セナは？」

「先に帰ったって。私達も帰ろ」

と呼びかけた。

私達は行きしと同じ やり方で森の方へ降り、森へ入った。そして夜中まで歩き続け、やっと森を抜け出した。その頃には もう朝になっていた。

早朝に一本しか出ない船に乗り込んだ。すると、バツタリ セナに会った。

「セナ！」

「勇気！？ マフィアも！」

と、お互い呼び合った後、船室で これまでの事を話した。セナが“時の門番”を出たのは私が来るより2時間ほど前だったそうだ。森の何処かで行き違いになったのだらう、という事になった。

「勇気も そこへ行ったのか。……で、何か見てきたのか？」

「え？ ……ううん、何にも。ちょっと そのトキって言う女の

人と話をして、それだけ」

と、私は2人に嘘をついた。

本当はこっちこそ あの金髪少女の事が知りたかったけれど、それを言う……セナの過去を見たって事が きっとバレちゃうわけ……それはマズイので、黙っておく事にした。

きっと いつか、セナが自分から言ってくれる日が来る。その日を待っている事にした。

勇気は船で出たサービスのパンを食べた後、甲板へ出た。セナとマフィアは まだ船室に居て、小さな丸い窓から見える勇気の姿を見ていた。

「あの子の顔……見た？」

と、マフィアは自分の目を指さした。

「ああ。ありや、大泣きしてきましたって感じの顔だったよな。何か知ってる？」

確かに、勇気の間を見ると目が少しだけハレている。それは“時の門番”で大泣きしてしまったから。まだハレは ひいては いない。

マフィアは、首を振るだけだった。

「きつと……あの子にも あの子なりの悩みとか そういうの……あるのよね。あっちの世界の事かもしれないけど。とりあえず、しっかり守んなきゃいけないわね。あんたも私も」

マフィアは腕を組みながら、甲板で一人、海を見ている勇気を見て言った。

「そうだな」

と、セナは一言。

セナとマフィアの そんな会話が なされているのも知らず、ただ ぼうつと朝日を眺める勇気。

（お兄ちゃん……元気ですか？ 勇気は今、海を見えています。海の

広さは そつちと変わりません。見せてあげたいな……）
朝日に、この便りが兄の元へ届く事を祈りながら。

ほぼ同時刻。

暗い部屋で、レイが一人。アンティークな椅子に座って何やら考え事をしていた。足と腕は組み、目を閉じて。

すると、フツと目を開けた。

目の前には、氷づけになった人物が居た。少し輝いているようにも見える。

「ハルカ……」

レイが擦れた声で呟いた。謎の人名を。

氷づけの人物、とは……女で、金髪で、両耳に赤いピアスをしていた。

《第11話へ続く》

第10話（時の門番・弐）（後書き）

【あとがき】

ここの後書きって必要ないでしょうか（今さらですが）。
1話が長いので、休憩がてらに……にもならないか）・（ふ。

ブログ第10話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-44.html>

ありがとうございました。

第11話（人形の館）

「ったく。戻って来る……って言ったる。何で俺の後 追って来たんだよ」

……だなんて。絶対、セナは言うと思っていたのに。セナは、私達が後を追っかけて来た事を責めなかった。ただ、いつも通り愛想よくしているだけ。

セナは あの“時の門番”でレイの過去を見て、何を思ったんだろう。

私には あれだけじゃ、ちつとも わからない。ヒントと言えば？……

レイはセナと別れた後、天神という人の所へ行って、そこで仕えて？……ある日誰かとケンカして出て行った……ような、それだけ。

セナに聞いてみたかった。でも、聞けない。だってこれは2人の問題だし……部外者の私が入っては いけないような、そんな気がした。もちろんマフィアも。

特にマフィアったら、気が強いし結構ズベツと物を言うタイプだ。きつと この事を言ったら即セナに尋ね倒すに違いない。そんな事になって、もし方が3人の関係を崩す事になってしまうのは嫌だ……まだまだこれから先、旅の道のりは遠いつていうんだからさ。

私は このまま黙っておこうと思う。

レイの過去もセナのそれも、私は何も見なかった。そういう事にする。

あの金髪の少女も……。

「あつ、見えたよ！ あれがコンサイド大陸だ！」

「えっ!?!」

ぼおくと、この客船のオープンテラスで ゆっくりと午後のひとときを楽しんでいた私達。テーブルに突っ伏していた私をマフィアが揺さぶった。

マフィアの視線を追うと、確かに遠く うっすらと向こうに陸が見え出していた。あれが私達の目的地、コンサイド大陸に違いない。

「……あのバルーン、何……?」

と、私がマフィアに尋ねる。陸の上空にチラリと……ココの距離から計算しても とても大きいようなバルーンがフワフワと……空を泳いでいた。風に、揺れている。

「百貨店だよ、お嬢ちゃん」

たまたま そばを通りがかった船員さんが教えてくれた。どうやら積荷を運んでいる途中。

「港から出るとノジタ国っていつてなあ、大陸の3分の1をも占める王国…… 大国があるんだ。商業の盛んな所で、あのバルーンは国一番の百貨店『ル・アーゼ』の広告用バルーンだ。ま、お前さん方も武器防具を揃えるなら、試しに行ってみな」

へえー。百貨店かあ。

ココの世界にもあるのね。日曜とか祝日になると混んじやったりとか、イベントがあると値段が安くなったりとか、そういうのもあるのかな。

「ライホーン村の村長から もらった補助金もあるし。ちょっと行ってみるか?」

と、セナが言い出した。

もちろん、私もマフィアも賛成。これからレイヤ その刺客達ともビシバシ戦う事になるだろうしねー。

コンサイド大陸に第一歩を踏み出した。思えば長い道のりだった。“時の門番”からライホーン村へ帰って来て、村長さんや村人達に別れの挨拶をした後、再び村を出た。そして荷馬車に乗っけてもらいながら、マイラ港町から大陸行きの定期船へ。……結構な日にちがかかった。

船は やつとこさ次の目的地へ着く。

コンサイド大陸はラジェータ大陸の東南あたりにある。何でも、温泉が湧いたために始め弱小だったノジタ村は稼ぎに稼いでノジタ国へと急成長したんだとか。王様が城に住んでいて、その王様は商業を大切にし国は大いに発展しているという。チラホラとあった村や町を吸収して、今や大陸の3分の1にも広がった。

……なんていう話を、港に居た洋服屋が話してくれた。そこでも買い物をし、軽く食事をとりながら、私達はノジタ国へ入った。閑所で簡単な身体検査をした後でね。

港も活気 溢れていたけれど、こっちはもつと活気づいていた。ちゃんと整備されたピンクの煉瓦道。所どころ木とかが植えてある。

道の両端までズラリと店・店・店が並んでいる。

そして人・人・人だった。

進みたいのに なかなか滞っていて進めず。私はマフィアを見失わないように しつかり後ろをついて行った。こんな所で迷子になつてたらシャレにならない。

数時間後。

せつかく……百貨店『ル・アーゼ』の前まで来たっていうのに。

私達は……そこへ入る気を失くす。

……だって、比べられないほど、ココもまた混みあっているんだもの……。

おばさん達の戦場の場だよ……。

「どーするう……？ 何か、大変そうだよ」

と、私が困り果てる。2人とも こりゃダメだ他を行こう、とお手
上げ状態。

「はいはい。押さないで下さい」

ワイワイガヤガヤ。

「すみませーん。タオルとかって、何処に ありますかあ？」

「これ、カード払いでお願いします」

「プレゼント用に包んで下さい」

ワイワイガヤガヤ。

「ただ今、全品5%引きです！」

ワイワイガヤガヤ。

「きゃ、買っわ買っわ。そのキナコ餅」

「このマフラーとの色違い ありませんこと？」

「サイズが合わないんですけどー」

ワイワイガヤガヤ。

「はい。すみませーん！ 押さないで押さないで！ 順番にお願
いしますー！」

息が詰まりそうで苦しい感じた。店員さん達も頑張っているけれ
ど、やはり相当キツイわな。

私達は『ル・アーゼ』を諦めて、道中の店で欲しい物を買う事に
した。夕方近くなって道いっぱいに近いほどの人混みが、少し減っ
てきた。私達はホツと胸を撫で下ろす。とにかく、買い物 買い物
「考えてたんだけど。武器いるか？」

セナが聞いた。私はウーン、と腕を組んで考える。マフィアが先
に答えた。

「薬は十分にあるし。食料も水もちよつと買い足せば大丈夫……武
器、か。私のムチはまだ新しいからいいし。セナは？ いらな
いの？」

「俺は軽装主義だから。荷物もココ（縮小自在ポケット）に入れて
るし。風の力で弓とか作れるし……必要ねえな、俺は。……じゃ、

「勇氣は？」

私は まだウーン、と唸っていた。

「武器、持ちたい、かな」

私もあんまり重いのは嫌だけど、と付け加えた。

「んじゃ、勇氣の物 何か見に行こう」

そうして、私達は順調に買い物をごなして行った。

まさに ごなす……そんな感じ。買い物に費やす労力が通常より何倍にも感じた……行く前に、もう見るだけで疲れてくるな……んにゃ、まだ若いっ！

無理矢理テンションを上げた。

ある古い武器屋に入って……私は女性用のアーミーナイフを買った。柄に龍の絵が彫つてある。これから青龍を相手にしていくんだもの。ちょうどいいよね。

私はそのナイフをスカートと腰の間に挟んで、上の服に隠れて見えないようにした。いざっていう時のための武器。料理にも使えるかもしれない。

んふんふん。買い物って楽しい。買うつもりは無くても、見るだけでも結構楽しい。変わった物が多いからなあ。……混んでなければもつといいんだけどね。

「お嬢サン。風船ヲ、ドウゾ」

と、言われ振り返ると、ピエロが居て私に赤い風船をくれた。

「わあ、ありがとう」

私は大喜びで風船をもらう。チラつと横を見ると、小さな古ぼけた造りの建物があった。見た目、ドールハウスみたい。木造りで、色んな柄が彫られている。どうやら店のようだ。

入り口の上を見ると、『人形の館』としっかり書いてあった。

じゃあ、やつぱりドールハウスなのね。って事はこのピエロさん、客寄せしてるんだ。店の前で。

「面白そう。入ってみよつとー！」

と私はセナとマフィアを呼び、一足お先にそのドールハウスの中へ。

中には色んな西洋人形、日本人形？、からくり人形、くるみ割り人形……などが、並んでいた。店内の照明が、ちよつと暗めな具合がいい。人形の存在感がアピールされている感じがする。

私は人形を見ながら、奥へ奥へと入って行つた。すると、行き止まりになってしまった。行き止まりに、特別大きい人形が置いてあった。

「人形……？」

にしては……と、私は目の前の人形に他とは別の、違和感を感じた。椅子に座つて、西洋風のドレスを着て、白い大きな帽子を被っている。そのせいで顔は下を向いてよく見えない。

手足はダランとしている。黒い髪が少し長い。赤い靴を履いている。人形だと思つたけれど、よく見たら人間の子供じゃないのかなあ……？

「どうした？ 勇気」

と、セナとマフィアが後から来た。

「この人形だけ、まるで本物みたい。本当に作り物なのかな？」
と、私が指さす。マフィアが近づいて行って、下から顔を覗き込んでみた。

「作り物……にしては、精巧に出来すぎてる。目の膜とかも。でも、死体ならこんな状態なわけがないわ。腐つてもいないし、臭いも無い。やつぱり人形よ、これ」

そう言いながら手を持つて離すと、ブランと力無く下がった。

「脈も無ければ心臓も動いてないし。まばたき一つしていない。息もしてない。人間じゃないわ、完璧」

と、マフィアが、その人形をくまなく調べ、結論を出した。

「そう……かあ。じゃ、気のせいね」

私はポリポリと頭を掻く。そうよね……こんな所で他の人形に紛れて、死体なんて置いとくわけがない。私の思い過ごしだったみた

いね。

私達3人は店を出た。私を先頭に、真っ先に店を出た。すると。

誰かにドンと思いきり ぶつかってしまい、後ろに入った。

「大丈夫!? 勇気!」

マフィアが慌てて駆け寄る。

「だ、大丈夫。ちょっと腰打ったけど」

と私が腰をさすっていると、腰にさしておいたはずのナイフが無くなっている事に気がついた。

「ナイフが無い!」

「ええっ!? ……まさか、さっきぶつかった奴が!?!」

とマフィアが言った瞬間、セナが瞬時に走り出した。何て素早い。

「セナ!」

「あっちだ!」

マフィアも追いかけた。私はいえればボーゼンとして、座りっぱなし。やがて、ハッと気がついた。

しかしその時すでに2人の姿は無い。

私は一人、そこに取り残されてしまっていた。

「いつけない。私もスリを追っかけなくちゃ」

と、立ち上がった時だった。

誰かが後ろから、私の腕の片方を掴み、そしてサッと私の体を軽々と何処かの馬車か何かの荷台へと放り込んだ。

そして上体を起こす前に、扉は閉められる。

ガシャンッ。

突然の衝撃と暗闇。

私は またボーゼンとしてしまった。

その間、馬車は動き出した。

我に気がついてどうにか出ようとするが、出口はビクともしない。

……どうなっちゃうんだろう？ ……

「まさか、レイの手下？ あのスリは わざと？」

スリに目を行かせておいて、その隙に私を誘拐して……目的は何だ。何のために。

考えたってわからない。

セナとマフィアは今頃 私を捜しているんだろうなあ……。

いよいよ馬車は、ワイワイガヤガヤと さっきまで騒がしかった道を抜け、商店街から遠ざかったらしい。少しずつ周囲の音が小さくなっていった。

……どうやら私って、筋金入りの脳天気らしい。誘拐されたなんという緊迫した時でさえ、寝こけちゃうんだから……。しかも、すっかり夢付きでね。

さっきの特大人形が同じように椅子に座っている夢。その人形は、ゆっくりと上を向いて、真っ黒の瞳をこちらに向ける。そしてニッコリと笑って見せた。

まさに人間そのものだった。

（あなたは人間？ それとも人形？）

と、私が手を伸ばす。だが、その少女には届かない。

少女から笑みが消えた。

私が たじろぐ。すると少女は何やら悲しげな顔をしたのだ。

（私、メノウ。アナタ、救世主？）

と……カタコトの口ぶりで、私に尋ねた。というか、口は動かせてはいない。テレパシーのように、言葉だけが聞こえるのだ。
(そうよ。私は勇気っていうの。あなたはメノウっていうのね。どうしてそこに居るの?)

私が聞き返すと、ふいに沈黙が私達を包んだ。

無言でいると、やがて少女の目から涙が……こぼれ落ちた。ポロポロと、清らかな宝石のような涙。真つ黒な瞳と、固く閉ざされた口。

この少女が、私に何か訴えかけているように思えた。それは何か？
わからない。

ただ……夢は、段々と薄れていってしまった。

目を開けると、部屋が横向きだった。つまり、私が横に倒れていたという事。

「ココは……何処？」

と起き上がって、ぼんやり考える。どうやら私は無傷で、両手両足は縛られていない。牢屋のような殺風景な部屋に閉じ込められているのは確かなようだ。たった一つの鉄製のドアはノブをいくらかまわしてもガチャガチャいうだけで、ビクともしない。きっと外から鍵をかけてあるんだろう。

ゆっくり後ろを見渡すと、部屋の奥、ドアの向かいにある小さな窓にはしっかりと鉄格子。四方にはヒンヤリとしたコンクリートの壁。時々隅にクモの巣。冷たいベッドが一つ。丸い粗末なイスが一つ……。

……そこで初めて気がついた。誰かが座っていた。

「あ、あなたは」

おっかなびつくりと声を上げた。私とその人は目が合う。

ちっとも気配を感じなかった。こんなに近くに居たのに。

女の人だったのだけれど。見た目 白人ぼくて、髪はウェーブが

かった金髪。肩まである。キリリとつり上がった端整な眉と、強固そうな瞳。ナイスボディで軽装。ジーパンを履いているけれど、骨だけなんじゃないかと思われるスラリと伸びた足を組み、先には赤いハイヒール。つい観察してしまう。

気配を感じなかったので怖い。綺麗なんだけど、どこか……見ていて寒くなる。

まつ毛はクルッとカールがかかっている、目はガラス玉のようでの瞳はスカイブルー。さっき人形の館で会った、人形なんだけれど人間みたいなのに比べ、こっちは人間なんだけれど。まるで人形を前にしているかのように感じるよ。何でだろう？

すると、その人は立ち上がった。音も無く。そしてこっちに近づいて来る。

私はゴクリと空気を飲む。私と相手のその人とは距離が縮まった。ドキドキする。

真っ直ぐに、そのスカイブルーの目に見つめられて。私は身動きできない。

ドクンドクンドクン。

私の真正面に来た。

ドクンドクンドクン。

立ち止まる。

ドクン。

ついに、口を開いた。

「あなた、救世主なんやってなあ？」

……………。

え？

「手荒なマネしてスマンかったなあ。実は、極秘プロジェクトやっ

てん、これ。あ、わてはシノル、いいますねん。よろしゅうに」

……。

……言葉が……。

私は、その場でズッコけた。

何で関西弁なんだあーっ!?

「……な、何で言葉が、じゃなくてえーと、何で私が救世主だって事を」

私が体勢を立て直しながら聞くと、シノルとかいう その人は手を振って笑った。

「言つたやん、極秘プロジェクトやて」

「だから何なの!?! その極秘何やらって!」

「極秘プロジェクト。わてら仲間うちでは、『トツシー』言つて愛称で呼んでんねんか」

トツシー……?!

な、何か わからないけれど……そ、そうね。極秘極秘なんて人前では そうは言えない。別名をつけてそれで呼んだ方がいい……でも何でトツシー?

「で、そのトツシーの中身なんやけど。……ズバリ、“青龍復活阻止計画”や!」

目を丸くした。

「“青龍復活阻止”っ!?!」

と、声を大にして言ってしまった。シノルがポカリと私の頭を叩く。「極秘言つとるやろーが!?! 叫ぶなっちゅうてんねん!」

さっきの私の声より大きい声で怒鳴るシノル。

コレがツッコミですな師匠……なんてボケは あとあと。で、そのトツシーの中身って!?!?

「わてら5人組……あ、あと4人居るんやけどな。わてらは、ずっと救世主を捜しとったんや。そしたら、赤い服着た変わった格好の女がある、女顔の兄ちゃんと長い三つ編みの女を引き連れてこっちに向かっとする情報があったんや。ウチらの一人に、そういう情報屋みたいなんおるねんけど、街を捜しとったら、ちょうど見つけたっちゅうわけや」

「何で私だけを連れて来たん!？」

と、言葉が うつつてしまった私。

「知らんわ。あとの2人、勝手にどっか行ってもうたんやんか。でもなあ、わてらに必要なのは あんただけやしな。それにあんな所でトツシーの事なんて説明できひん。何たって極秘やしな。何処で誰が聞いとるかしらん。しょーがないでえ、仲間ウチで相談して、とりあえずさらってまおかつちゅう事で。ココに連れて来たんや」

「そこまで隠す必要があるわけ？」

シノルは顔を近づけ、「ドアホッ」と私のオデコをペシッと叩いた。

「親にも周りにも迷惑かけたあないねん。あくまでも極秘や。わてら5人だけの」

好奇心で関わってきているんだろうか？ だとしたら勝手だなあ。こっちは青龍の封印なんていう大仕事、好きでやろうとしているわけでもなく。あんまり他人は好奇心なんかで関わってほしくないよ。うな気がするんだけれど。

「青龍が復活しそやって情報が入ったんや。でも、封印には ある道具が要るんやって？」

「道具？」

え、何それ。初耳。

私は首を傾げた。道具って、あの邪尾刀とか？ いやでもあれは封印のためにあるものじゃないし。じゃあ一体何の事だろう？

「“魔道経”や。どんなんか知らんけど、封印の呪文が書かれた巻き物や。あんたが持つてるんやろ？ わてらに渡してくれへんか」

と、手を出した。

……と、言われましても。私には何の事だか。とりあえず、その手に握手。

すると、バシッ！ と頬を叩かれた。すつごく痛かった。私はいきなりで、倒れてしまう。

シノルは私の襟首を掴んで睨みながら、笑いながら言った。

「あんたがココに来た理由はな、その“魔道経”とやらを頂くためなんや。サツサと渡せば、あの2人んトコに返したるで。カワイイ顔をボコボコにされたいん？」

さつきまでのムードは何処へ。いつきに凍りついてしまった。

これは脅し？ ……やつぱり誘拐じゃないの！

「し、知らないわ。本当よ！」

と私が言っていると、シノルは私を突き飛ばした。

「嘘ついたって無駄やで。あんたの連れの2人のどつちか、『水神』なんやろ！？」

2人つてセナとマフィアの事よね？ セナは風神でマフィアは木

神……え？ 水神？

「“魔道経”はトツシーみたいな愛称や。本当の名は、“水神の秘宝”言っんやで。代々、水神が それを守ってるんやって。あんた、持ってんねんろ？ “魔道経”！」

水神の秘宝！？

代々、水神が守ってきているもの！？

しかも、封印のための道具だあ！？

「持ってません！」

私はキツと睨み返した。

「セナは風神、マフィアは木神！ 私は救世主だけど、ただの人間！ 七神っていつて、全部で7人いるんです！ 水神にはまだ会っていません！ そんな道具なんて、今初めて聞いたんだから！」

私は精一杯訴えた。

しかしシノルには全然信じてもらえない。私を思いきり今度は蹴

飛ばした。

「きゃあ！」

ゴロゴロと転がり、壁にぶつかった。蹴られた所がひどく痛む。

さらにもう一蹴り、という所で。誰かがドアを開けて入って来た。

「これ。シノル。やめなされ」

老人の声がした。

カツカツ、と杖をつく音がする。

「総裁。でもこいつ、なかなかしぶといねんか」

総裁……？ 5人いると言った、そのボス？

「こついうのはな、信頼じゃよ」

痛みを堪えて目を開けて人物を見ると普通の、ハゲた頭で細身のおじいさんに見える。

「最初は優しーしてやってんで。でもこいつ、段々腹立ってきてん」

私を指さした。私が倒れたまま顔を上げて老人を見ると、ニコニコ顔の老人は話しかけた。

「救世主さんな、わしらはトツシーを進めてきたんじゃ。世界には青龍復活の兆しが見えて、すでに苦しんでいる所がある。わしの故郷もその一つ。トツシーを企てている若者達があと3人おつてな……わしもそこに混ぜて色々調べてきたんじゃ。その中で“魔道経”……それがあれば復活は止められる。代々水神が守つとるそのなんじゃが、あんた七神を従えておるんじやる？ その水神とやらを、ココに呼んでくれんかね」

……だから水神も何も知らないっての！ どうして私がこんな目に遭わなきゃいけないの？ 腹が立つてくるじゃない、いい加減！

「知りません！」

と、私はその老人を真っ向から否定した。老人はヤレヤレといった感じで、

「シノル、仕方ない。また かわいがつておあげなさい」
と言って去ろうとした。

シノルが私をもう一蹴りした。今度はお腹に。うづくまる……。
「知らないとは言わせませんよ。情報は確かなんですからね」
「じゃあ、その情報が間違っているわよ！ と言いたい所だが蹴られたお腹が痛くて声が出ない。」

老人は出て行った。そして行き違いに違う男が入って来たようだ。
「シノル。そのへんにしておけよ。そいつ死んじまう。マイナも帰って来たし、トウヤも もうすぐ帰るだろ。ココいったん引き上げて、来い。作戦会議だ。新しい情報が入った」

「何か わかつたんか？」

「ああ。どうやら、この近くに水を使う不思議な力を持った奴が居るってさ。そいつが水神である可能性が高いぜ」

それを聞くと、シノルは私の足を踏んづけて、

「お仲間が迎えに来たんやろうよ。ええ仲間 持ったやんか、救世主はん」

と言って唾を吐いた。私の頬に かかる。

そして2人とも、ボロボロになった私を置いて何処かへ行ってしまった。もちろん、嚴重な鍵をかけるのを忘れずに。

電気も灯りも無い真っ黒な中で、横たわったまま体中に伝わる痛みを必死に堪えた。頬もジンジンするし、お腹も両足も動かない。

私は一生懸命、シノル達が言っていた事を思い出した。

確か この近くに水神が居るって言ってたなあ……。七神の一人が……。

ウトウトと、そのうち眠りにつけた。

……。鉄格子の窓から、木の上で。さっきの部屋での一部始終を見ていた者には、全然 気がつかずに。

《第12話へ続く》

第11話（人形の館）（後書き）

【あとがき】

服と食品の売り場が同じかという疑問。
まあいいんじゃないですか（遠い目）。

ブログ第11話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-45.html>

ありがとうございました。

第12話（水神の秘宝）

セナ、マファイア、今頃どうしているだろうなあ……。

目を開けるのは5回目。外は もう朝になっていた。チュン、チユンと鳥が さえずる。昨夜のシノルとかいう女にボッコボコに されて痛みと怒りで苦しかったけれど、どうにか冷たいベッドの上で眠っていた。何度も目を開けては自分の現在状況を確認していた。

実は夢だったんじゃないか……？ なんて期待もあつたけれど、全ては現実だった。

ついに助けも来ないまま、こんな所で夜を明かしてしまった。

セナ、マファイア、誰でもいい。助けて……私は、祈り続ける。

「お兄ちゃん……」

と声に出した時。表が急に騒がしくなった。そして変な臭いも。

私が重い足取りで鉄格子の窓から外を見た時。驚く。

この建物の前に立っていた木があるんだけど、ゴウゴウと火が見えた。

木が、燃えている！

「大変！ ……ゴホホッ」

煙が立ち昇って、部屋にまで入ってくる。私は口を押さえ、後ずさりした。

外では事態に気がついた誰かが声を上げていた。「何やってんだ、早く消せ！」

聞き覚えのある男の声。昨日、部屋に入って来ていた男の声じゃないかなあ？ 他にも、数人の声が聞こえた。皆、パニックになっている。

私がドアの方まで下がると、突然ガチャリとドアが開いた。外から誰かが開けたのだ。

びっくりして振り返ると、何とそこに居たのは。

「あなたは……ピエロさん！」

昨日『人形の館』の前で風船を配っていた、客引きのピエロだった。

何で!?

もしや、これも罠!

私が一步 後退すると、ピエロは手をさしのべた。

まるで、「逃げよう」と誘っているかのように……。

私は一瞬迷った。もしかしてまた罠じゃという考えが何度でも頭の中にチラつく。

でも。

私は首を振って、ピエロの手をとった。だって、ココに居たって煙に巻き込まれてしまうだけ。

なら、とにかく脱出した方がいい。

それに もしかしたら、火はピエロが つけたのかもしれない……!

私はピエロに手を引かれたまま通路を走って行くと、途中シノルにバツタリ出くわした。シノルは すごい怒りをあらわにして金切り声を上げた。

「あんた何モンや!? 混乱に応じて逃げよう思たかて、そうは行かへんで!」

どうする!?! 逃げられない!

すると どうだろう。ピエロは私を軽々と抱え上げ、そばの大窓

ガラスを足で派手に蹴り割り、割れたガラスの穴をスルリと抜け外へ……そんなバカな。でも出来た。

咄嗟の判断で素早かった。シノルもびっくりしていたのが小さく視界に入った。

(もしかして このピエロ……セナ??)

と抱えられたままピエロの顔を見ても、仮面が邪魔でよくわからない。

ピエロは見事に2階から飛びおり、体勢崩す事なく地面へ着地した後 私を下ろした。

「あ、ありがとう……」

と、ただ言うだけの私……。

華麗だった。

この一言のみ。

ピエロは人差し指を口元に立て、「話はあとあと」とでも言っている風に見せた後、クルッと一回転した。

何そのアクション……私はクスクス笑う。変なピエロ！

しかし直後、シノルが同じように上から降って来た！ 私とピエロは急いで走り出す。

「そこまでや！ 止まれ！」

着地したシノルは銃を持っていた。銃口をこちらに向ける。

カチャリ！

私とピエロは立ち止まる。

すると今度は横から、

「かまいたち鎌鼬」！！

と声が。そして同時にクルクルと渦巻く風が起こり、やがて風が曲刀のようになってシノルにぶつかっていった。

シノルは衝撃で2・3メートルは吹っ飛ばす。

「セナ！」

毎度おなじみのセナの風の攻撃だ。私は声のした方を探して駆け寄った。

セナが居た。嬉しいやら泣きたいやら。

「心配した。捜しても全然 見当つかなくて。どうしようかと思っ
た」

心底ホツとした顔をする。だが すぐにピエロに向かって「こいつが」と視線を私から変えた。

「宿をとってマフィアと相談していた時……手紙付きの風船をよこしたんだ。手紙にはココの場所が……あんだ、誰だ？ 敵なのか味方なのか……勇気を助けてくれたから、敵じゃないと信じてるけど」
セナはピエロに詰め寄った。私はポン！ と手を叩きセナに思い出した事を言った。

「それよりセナ！ 近くに、水神が居るかもしれないの！」

「何だつて!？」

「とにかく、ココを突破して、それから……」

と言いかけたら。いきなりセナが「危ない！」と私の手を掴もうとしました。

……より素早く。ピエロが先に私の手を引つ張って体を寄せた。

そして、

「小波^{さざなみ}」！

と、叫んだ。

え？ さざなみ？

「きゃあああ！」

ピエロの手の平からシノルに向かって、水鉄砲のように水が発射された。シノルは私やセナが よそ見している間に、銃で私を狙っていたらしい。

しかし勢いよく発射された水の攻撃が銃を弾いた。またシノルは

勢いに負けて倒れてしまう。

今度は倒れたシノルの向こうからマフィアが息せきかけてやって来た。

「ハアハア……上手くいった!? 言われた通り、表の木に火を……どうしたの?」

突っ立ったままの私達と倒れているシノルを見て、不思議そうな顔をした。

火をつけたのはマフィア……それは そうと。

ピエロは、仮面を取り外した。

そして私達に素顔を初公開。

……男。

隠していた髪も あらわにした。銀髪。オールバックに なっている。

年はセナと同じくらい?

目はパツチリと子供みたいにクリクリし、口が大きめだ。……1

0段くらいのバーガーも軽く かぶりつけそうだと思った。

その大きな口で自己紹介を始めた。

「俺は七神の一人。水の精霊を司る者……水神、らしい、よつと」
明るかった。

「名はカイト。カイト・オーガ・ルウ。呼び捨てで もちろん結構。ちゃん付けは勘弁な」

両手を上げて広げる。

やっぱり……さっきの技といい、そうじゃないかと思ったんだ。

チラチラと、噂だつて すでに あつた。セナがピエロじゃない時点で、その可能性は強くなっていたわよ。

でも いつから……いつから私に気がついていたんだろう。

「私を助けてくれて、どうもありがとう!」

聞きたい事は山ほどあるけれど、まずはお礼を言わないとね。
そんな私の笑顔をよそに、カイト（さっそく呼び捨て）は顔を曇らせた。

私が「へっ？」と戸惑うと「懲りないなあ」と呟き私をどかせた。後ろを見ると、また銃を構えて立ち上がるうと必死なシノルが……。

「そう……お前が　そうやったんか。なら、渡せ！　渡すんや！

“水神の秘宝”！」

と、胸を片手で苦しそうに押さえ　もう片方の手で銃を構えていた。手が、震えている。シノル、最後の悪あがきといった所か。この人数で適うはずが無い。

「さあ早く！　水神の秘宝を渡せ！」

もはや強がりにはしか聞こえない。あの怖かった瞳は、今は力が無くなっている。

銃口をカイトに向けているみたいだが、ガタガタと大きく震え적이が絞れていない。

私は　こいつにボコボコにされた恨みはあるけれど、見ているうちに哀れになってきた。2人の自分が騒いでいる。弱っている今がチャンスやで！　やつつけたらんかい！　と罵っている自分と、何言つてまんがな、こんなんになってもうて　かわいそうですやん……と嘆いている自分。

タコとイカ。ボケとツツコミ。たこ焼きとお好み焼き……

……ちよつと自分だけ脱線しているような……。

「……もうやめよう………メノウ」

カイトは、悲しく声を出した。

空気が止まる。「え？」

……カイトは、歩み出た。そしてヒザをつくシノルの前まで進み出て、^{うれ}愁いを帯びた瞳で見下ろしていた。

銃口の先はピツタリとカイトの左胸に押し当てつく形になっていたけれど、カイトは動揺する気配なんて無いし、シノルも撃つ気は無さそうだった。

ポカんと、シノルはカイトを見上げるばかり。

カイトは優しく手を肩に置いた。「銃は下ろせ。どうせ湿ってんだろ、使えない」

そして……。

……温めるかの如く。カイトはシノルを抱きしめた。

「帰ろう、メノウ」

メノウ、とは。

「館に あった、人形の名前！」

私は大声で指さして叫んだ。セナとマフィアが びっくりする。

「何で そんな事 勇気が知ってたんだ!？」

とセナが奇妙そうな顔をした。私は「あ」と小さく声を出した。

そう言えば、あれは夢の中の話だったっけ。メノウっていう名前、どこかで聞いたなーと頑張っと思いついてみたら。

「夢の中で、あの子が……人形が そう言ってたんだよ!」
と私が説明した。

「でも何で どうしてシノルがメノウなのよ。何で わかるの、あの男」

マフィアがカイトを見つめる。私たち3人はカイト達を見守るしかないけど……。

カイトはメノウ? を抱いたまま、ポツポツと語り出した。

「お前が さらにわかれて……一週間、ずっと捜してたぞ。姿が変わっ

ていても、俺には わかった。だってお前は俺の妹だもんな」
カイトの妹？

一週間前に さらわれた？

えっ？ でもトツシーは……私は訳が わからなくなった。

「お、お兄ちゃんなの……？ お兄ちゃん……」

明らかにシノルの様子が違った。だって関西弁じゃない。

シノル「メノウ？ は、すがりつくようにカイトを見つめた。

こ、これは感動の再会？ そうなのね！？」

もう そういう事にしておこう、と認めた時。またシノルの人格
が現れた。

「ち、違う……、違うんや！ わてはメノウなんかと ちゃう……
！」

カイトを退け、頭を抱えた。とても苦しそうに前髪を掻きむしっ
た。カイトは見るも堪えきれずにシノルの体を押さえようとす。

シノルと押し問答している。

「離せ、離すんや！」

「こつちへ戻つて来い、メノウ！」

どうやら『メノウ』という名前に敏感に反応しているようだけど、
なかなかシノルが粘る。

「離せ、離して、助けて！ お兄ちゃん、……やめえ！」

私はコブシに力を入れて2人を背後から応援していた。エイ、エ
イ、頑張れメノウちゃん！ そしてカイトオ！ ……と。

だって、私達には他に できそうな事が思いつかない。

「誰！？」

いきなり、横でマフィアが叫んでムチを取り出した。そして何か
を標的に振り回して攻撃する。

バシッ！

鋭いムチを腕一本でブロックしてみせた、人影……は。

シノルに総裁と言われていた老人だった。

「いきなり乱暴な方ですねえ。しかし見事なムチさばきだ。容姿もお美しい事で……」

片手で受けた向こうで、ニコニコとその老人は笑っている。やせ我慢してるんじゃないでしょうね？

「そんな殺気むき出しでよく言うわね。あんた何者、正体を現せ」マフィアは睨みつけた。

ジジジジ……と、ムチが腕に絡めとられたまま、両者引かない。しかしパツと、老人の方からムチを外してマフィアに返した。

ムチを回収したマフィアより先に、私が聞いた。

「あんたがメノウちゃんをさらったの!？」

老人は私に視線を移した。

「そうですよ。ちよつと魂をガラクタ人形に移したのがシノルです。ほら、その。もがいてる……惜しいですねえ、せつかく手間暇かけてセッティングしてみせましたのに。余興にもなりませんでしたか。残念、それはそれは」

何言ってるだろう、この人。ニヤニヤして。まるで……。

「こつちの目的が果たせれば、どうでもいいんですけどね」

私はゾクツと寒気が走った。この人を見てると変な気分になる。

「目的って何よ」

私も睨みつけた。

「魔道経です、もちろん。シノルには愛称だなんて言っとききましたけどね。こつちの愛称の方が大事なんですよ。どうです、カイトさん？ 水神の秘宝と妹さんと、交換しませんか？ 妹さんの魂はこつちで握っているもんで」

……。

……だなんて事を言い出したよ、このジジイ……。

私の怒りは頂点に達した。でも抑える。

「メノウちゃんを人質にして、秘宝を奪う事が目的だったのね。でも、それを手に入れて、あんたに何の得があるの？ 他の人達と一

緒に、青龍を封印しに行くとか？」

私も気が変になって一緒に笑いそうだった。

「ククククク……」

「！？」

「アハハハハハ！ もー、ダメ！」

老人が前屈みになって、堪えきれないといった風に笑い出した。空にまで響きそう。

何だ何だ！？

「ヒー、おかし。そっかそっか、教えてあげなきゃ不親切だよね。うんうん。わかった わかった。じゃあ教える。ってか、訂正？ 魔道経、は青龍の復活を止めるモンじゃなくて、むしろ青龍を呼び出すために必要なモンだよ」

……！

何ですって。

「呼び出……す？」

体が凍りついた。一瞬だったけれど。

「早く気がついて欲しかったな、救世主」

老人は そのまま、見もせず後ろの扉の上にピヨンと飛び乗った。

その軽い身のこなし。「あんたまさか……」私の額に汗が。

雰囲気じゃ覚えがあった。

「鷓鴣ひたきか！」

セナが呼んだ。と同時に、老人は変装を解いて正体をあらわにした。そして姿を現したのはセナの言った通り、レイの部下・業師わざしの鷓鴣だった。

「水神の秘宝と呼ばれる魔神具の一つ、魔道経。それは青龍の復活に必要な四神鏡……古いにしえに よって錆ついたその力を蘇らせるための

呪文なのさ。実際どんなものかは知らないけど」

と、鵜は塀の上で屈み込み、私を見下した。

「一週間かけて用意したんだけどなあ、この舞台。どう？ 楽しかった？ 救世主」

不適に笑う……憎らしい奴。

しかも、ナイフを取り出し持つていてホイホイ投げて手に遊んでいた。

見覚えのあるナイフ……あ！ 私が買ってスリに盗られたアーミンナイフじゃないの！

「老人に化けてメノウの魂をさらい、シノルにして部下に加え、シノルを操って仲間を作って、水神の秘宝の在りかを探させた……つてわけだ。最も、水神の秘宝の在りかは すでに知っていたのかも shouldn't it be……直接奪いに来なかったのは、さっき言った余興のためか？」

カイトは、ブーツとして動かなくなっていたシノルの体を抱いて、そう聞いた。

「救世主が絡まないと、面白くないじゃない。結局どうなるかは見てのお楽しみだったけどねー。それに僕は あんまり自分が表立って動きたくないし。何たって、考える担当ですんで」

ナイフをスツたのもアンタねえ！

どこまでも ふざけた奴だ。あー憎らしい！

「それより、そいつ死んじゃうよ？ 魂と体が拒否反応起こしてる。放っておいたら死ぬね」

と、付け加えて さも楽しげに言った。

(ど、どうするの……？ 魔道経は渡せない。でも、メノウちゃんが)

私が悩んでいるというのに。

「いいだろう。……その代わり、メノウの魂を元の体に返すんだ」

と……カイトはアツサリと決断した。

「でも！ そんな事をしたら……」

と私はカイトに詰め寄ろうとした。だが、脇で動かないシノルを見るとグツと思いつまんだ。

……そうよ、悩む事なんかない。

結論は一つしかないじゃないの。

「……いいわ」

私は要求の決断を飲み込んだ。

「勇氣！ いいのか！？ レイが それを手に入れてしまったら、復活までの時間が……」

とセナが言い出したが、私の顔を見て引つ込んだ。

「……そうね、人の命には代えられない」

とマフィアも諦めたよう。セナも頷いた。

「その代わり、約束は守つてよね！」

私は鵜を上目づかいに睨んだ。鵜は、ニッコリ笑った。本当に憎たらしい。

カイトは自分の胸の前に手を出し、ブツブツと何かを唱え始めた。すると、水色の光のモヤが浮かび上がり、しゃぼん玉が一つ、大きいのが現れた。

「開玉”！」

と唱えると、しゃぼん玉がパン！ と割れ小さな巻き物が現れた。

きつとあれが……魔道経。青龍復活のための……。

小さな巻き物だったのが、徐々に大きくなった。両の手の平にのるくらいになった。

「親父から預かったもんだ。代々伝わってきた。受け取れ！」
と、カイトは放り投げた。

それをキャッチし、確かめる鵜。

薄笑いが、段々と大きくなっていった。

「ふ……はははは！ これで魔神具が2つか！ 邪尾刀と魔道経！
レイも大喜びだよ！ 後は……」
と、鵜の目が突然光った。不気味だ。

「邪魔者を消すだけだね！」

突然 鵜は立ち上がり、手をこっちへかざした。

ボン！ ボン！

ボン！

3発の爆発。

私はセナのおかげで すんで避けた。マフィアも、カイトもシ
ノルを抱えて。

「約束が違うわ！ メノウちゃんを元に戻して！」

私は無我夢中で叫んだ。

「危ないぞ、勇氣！」

とセナが私の手を引つ張った。

私は、あの夢を思い出した。メノウちゃんが流した涙の理由を。
あれは私への忠告とSOS。本当は伝えたかったんだ。色んな事
を。でも伝えられなかった。

私ったら、気がつきもしないで。メノウちゃんが せつかく会い
に来てくれたつてのに！

「逃げるなよ。一緒に遊んで！」

鵜はピョンピョン堀の上を飛び跳ねる。とても楽しげだ。

何なのよ こいつーっ！

主に作戦担当だーって言ってなかったっけ、前に。こいつにと
って、メノウちゃんなんて利用価値の一端でしか無いんだ。人が苦
しもうが泣こうが怒ろうが、何をしても面白いんだ！ ……約束な
んで、守る気も ない！

「メノウちゃんを戻してよ！」

私はセナの手を振り払って、前へ駆け出した。セナが慌てて私を
後ろから羽交い絞めにする。「何やってんだバカ、死にてーのか！」
セナが叱っても、私の腹の虫は おさまらない。だって、だって

……！

こっちは要求通りにしたじゃないの！

「救世主サン、それからそっちの風神くん。覚えておきなよね、レイが本気を出したら、君らは もうすでにこの世に居ないんだから。僕が こうやって遊んでるだけなのは、レイの命令が無いからだしね」

「何よ それ！ まるで私達がレイや あんたらに生かされてるみたいじゃない！」
と吠える私。

くやしい！

ただ、くやしいわ！

……その時。

鷓の背後やや上空で、何とも神々しい光が現れた。

「！」

全員が固唾を呑んだ。

鷓も驚いて後ろを振り返る。

「あ、あれは、何……？」

と私が声を出して指をさしても、誰も何も言わない。

ただ一心に、前に輝く光を見つめるだけ……。

この突然の光は。

……何？

第12話（水神の秘宝）（後書き）

【あとがき】

関西弁になると、妙にウキウキしてくるのは何故だろう……。

ブログ第12話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot.com/blog/entry-48.html>

ありがとうございました。

第13話（魔の根源）

メノウちゃん、カイト、マフィア、セナ、鵜うたぎ、そして私。その場に居た6人は全員、鵜の背後の神々しい光に驚いて目を伏せた。一体、この光は何なのか。

人影があった。

レイ？ それとも……さくらとかいう手下の援護とか？

いや、鵜も驚いているみたいだし、違っただろう。だとしたら一体……。

「天神あまがみの……付き人……天神てんじんの神子みこか！」
と、鵜が叫んだ。

天神！？

もしかして前、目の泉で氷上さんが言っていた、あの……！？
確か、そのうち天神の使いが来るだろうって言っていた覚えがある。それが この人なの！？

……とは言っても。あまりに眩しくて見られないんですけれど。

「光り過ぎなんだよ、クソババア」

と、鵜が悪態をついた。……天神の神子って、高い身分では？ ……それをクソババアって……。

鵜の愚痴を受け入れたかのように、光は段々おさまり人の形が見えてきた。

姿を現す。

40〜50代くらいでカールがかつた白髪の、何処か厳しさを持つふつくらとした女の人だ。白い布を身に纏い、空に浮かんでいる。見た目、普通のおばちゃんにも見える。

「初めまして救世主。風神、木神、水神 ……それから閻神あんじんの使い

の者よ」

神子は奇妙な事を言った。

「あ、あの。閻神の使いの者……って？」

「僕の事だよ。救世主」

私の疑問に即座に鵜が答えた。へ？

え？ え？ ……要領が よく わかんないんですけれど。

「レイが…… 閻神 だ とでもいうのか!？」

セナが大きな声を出す……一番 反応を示したのはセナだ。後のメンバーは、事の成りゆきを見守っている。

鵜をもう一度見ると、彼は神子をうざったいように見た。

「バラしてくれてどうも。でも まあ いいけど。いつかバレるし。その力がレイの一生を台無しにしてくれたみたいなものなんだけどもね。それじゃあ神子サン、天神に言っついてよ。あなたがレイに閻神の鏡を転生してくれたおかげで、今のレイがありますよってね」

皮肉っぽく笑った。

「レイは最初、あんたらを信じてたのに」

少し、真剣な顔になった。

「裏切ったよね」

鵜……？

いつもと、雰囲気が違う。

レイの過去をベラベラと話し始めた。……

時は6年前に遡る。レイが まだ12の時だ。監獄を出所し、セナと別れた すぐ後の事。

レイは その足で、天神の居る神殿へと向かった。

神殿に行くのは、た易い事ではない。数々の困難があった。まず、神殿の場所。そして四神獣ほどではないにしろ、世にも恐ろしい人獣魔物。厚いベールにでも包まれたように深く濃い霧。また、近づくにつれ気温の変化が著しく、時には灼熱、時には冷凍世界。まだまだあるが、とりあえず普通の人間が行ける所ではなかった。

レイには元々少し魔力があった。監獄に居て彼はコツソリと鍛錬を積んでいた。

その成果あつて、魔力は膨らみコントロールが可能になっていったのだった。

魔力を自由に使い、何とか無事に神殿に辿り着く事が出来た。辿り着いた神殿の周りだけが、それまでの地獄が嘘かのように楽園に思えた。

木々が生い茂り、小鳥が可愛らしく さえずっている。

ココだけが……楽園。

レイがココに来た理由 好奇心、そして決心。

天神という存在と魅力に、引力のように引つ張られた。スケールの大きい事が好きだった幼きレイ。監獄に入所する前、盗賊団のボスによく、せかして教えてもらったのが“七神創話伝”だった。

レイは この話がとても大好きで……そして自分も いつかは、世界を創ったという天神に仕えて一生を過ごしてみたいと夢思うように なっていった。

その気持ちは、消えるどころか大きく膨らんでいく。

生まれながらに持つ、魔力と共に……。

神殿に辿り着いたレイをまず迎えたのは、天神の神子。

天神の付き人である神子はレイを受け入れた。ただし天神と会う事は絶対に許されなかった。

レイは別に それでも よく……いつか、ココに居れば会えると、信じる事にした。

自分は天神に認めてもらえる日が やがて来る、と。自信がタツプリと あった。

過信。そうだろう。

レイは何も怖くは なかった。……

レイは持ち前の頭脳と力で、神子から与えられた雑務を難なくこなしていく。

そして暇があれば、魔力を磨く。力をつけていく。

自分を鍛える。

いつかきつと役に立たせる。

天神様をお助けする。

そう、純粹に信じて………時は過ぎた。

ある日。座禅を組み精神統一をはかるレイ。自分は空気と一体だ、息つく音など聞こえない、周りの音も耳に入って来ない……と。

気を集中させていた。

こつやって気をコントロールする。

……すると誰かが近づく気配が した。

天神の神子だった。

「その力は、決して使わないように」と、変な事を。

「……わかりました」

レイは返事をした。神子は それだけを言うと、クルリと元来た

方へ向き直り帰って行った。

それだけを言うために、わざわざ？ と。

(きつと……むやみに使うなという意味だ。時と場所と、状況で使い分けると仰っているんだらう……)

使わないのに、使えるように修行する。おかしな話だったがレイはさほど気にしては いなかった。

(見てる。コントロールできれば、問題は無い)

もうココに来て一年になる。もうだいぶ力をコントロールできるようには なった。

ああ早く、天神様に会いたい。

会って……そして……。

自分も、天神と同じ高みの位置へ。

さて。また数日後。

レイが仕事を終え、空いた時間をまた修行のために使おうと神殿の前に広がる森へ行った時の事。森の奥の水深浅い川のそばの川原で、レイは顔を洗っていた。

すると川上から、パシャパシャと騒がしい音がした。見ると誰かがこつちへ向かって駆けてくる。

時々転びそうに なりながら、慌てた様子で やって来た。

それは若い少女だった。ボロボロになった みすばらしい衣服の。

川の中を走ったり、つまずきそうに なりながらも、レイの元に辿り着いた。「何だ どうした？ 追われているのか？」

と、レイは少女の肩を掴んだ。少女はガツクリと項垂れ、レイに

もたれかかるようにして その場に へたり込んだ。

はあはあと息を切らし…… レイを見上げた。

瞬間、レイは釘を刺されたかようにギクリとした。

少女の髪は金髪……なのは わかっている。それより、それと……

…目が赤色の瞳。

似ている。

「ハル……」 「え？」

「いや、何でもない」

レイは視線を逸らした。

少女は気にせず、レイに しがみつく。

「あたし、男達に追われてるんです。 奴隷船が難破して……あ、あたし、奴隷として他国に売られる所だったんです！ 道中、嵐に遭って。生きて この島に漂着できたは いいけど、迷ってたら船の男達とバツタリ。あいつらも あたしと同じみたいで、漂着して……見つかって追いかけてられるんです！ 戻ったら何されるか……あ、あたしを、助けて下さい、どうか！」

と、一気に事情を説明する少女の名は、サリナといった。

「……俺は他人なんかと付き合っている暇は無い」

レイは眉間に皺を寄せた。

迷惑だ、そのように。

「そ、そんな。 お願いです！ 助けて下さい！」

アレコレと粘るサリナ…… やがてサリナの来た方向から、ゴツイ男が2人近づいてきていた。 あつという間に追いつかれた。

「見つけたぞ」

「おいガーベル。 奴隷なんだから、殺すな。 大事な金ヅルだ」

2人の男がレイとサリナを挟みうちにした。

一人は縄を、もう一人は大きな刀を構えた。 見るからに悪人面の男達を見てレイは心中、

(醜い……)

と思った。そして汚い。 この女もと。

サリナはレイに しがみついたままだった。ガクガクと全身が震えている。

「おい男。こんな島に住んでやがるのか？ 奥に、何かあるのか？」と、ガールと呼べられた方の男が聞いた。レイは「別に」と どうでもいいような返事をする。

そしてレイはズカズカと堂々、男達を無視して去ろうと進み出た。サリナが慌ててレイを追う。男達は「お」と一歩ずつ下がった。

レイがサリナをも無視して歩き出した時、サリナが何かを思い出したように叫んだ。

「待って下さい！ 思い出しました！ ココの辺りって…… 天神様が住んでらっしゃる場所があるって、聞いた事があります！ もしやココでは！？ だとしたら…… あなたが天神様ですか！？ それとも関係者の方！？ どちらでもいい、お願いです、その力で！ 助けて下さい！」

サリナがレイを制した。それを聞いて反応したのは男達の方だった。

「おい…… 聞いたか。この島に天神が？」

「ひよつとしたら。天神とやらを襲っちまえば、世界を手にとできるとか??」

……。

……レイはピクリ、と反応する。

(天神様を襲う、だと……?)

聞き捨てならない。レイの顔が強張る。

(バカ女め。話をややこしくしゃがって)

と、舌打ちした。それを見た男の一人が、ニヤニヤしながらレイに言った。

「おい兄ちゃんよ。そうだなあ、その女をこっちに渡せば、このまま俺らはココを出て行くぜ」

「俺は女とは関係無い。好きに すればいいが…… 信用できないな。」

お前ら、島で暴れるつもりなんじゃないか、どうせ」

レイはケンカを売った。

そして男達は それを買った。

「ひでえなあ、信用してくれなくて。ホント、ひでえ、なあ！」

と、男がレイに向けて、大きな刀を振り落とす！

しかしレイは軽く避けた。

「邪魔だ。下がっている」

レイは仕方無く、サリナを横へと突き飛ばす。

（全く……成りゆきとはいえ面倒臭い。ココは一気に魔法でカタをつけるか）

と考えながら、レイは男達の攻撃をヒョイヒョイと避けていく。

男達に隙ができた時、レイはドでかい魔法を使おうと手を男達の方に向けた。しかしレイは天神の神子の言葉を思い出したのだ。

『決して使わないように』……と。

「ちっ……！」

と、またもや舌打ち。と同時に、レイは見事なバツク転で間合いをとった。

（でも、神子様。今使わないで、いつ使うんですか！）

と、心の中だけで叫ぶ。

男達の攻撃が続いた。最初は軽く避けていたレイだが、魔力を使うが使わないかで迷っているうちに隙が できてきた。男達は段々とコンビプレーが慣れてきたようで、さらにレイを苦しめていった。

そしてついに、男の投げた縄がレイの足をとらえレイは転んでしまふ。そこをすかさず男2人は蹴りの嵐で……。

（神子様……！ 天神様……！）

と、祈りながら体に くる衝撃に必死で堪える。やがて身がボロボロになったレイ。蹴りまくってスッキリした男達はサリナの手を掴み、

「行くぞ。天神退治だ。へへへ」
と森へ進んで行こうとしていた。

レイは、必死で立ち上がろうと重い体を起こす。顔を上げると、男達の去り際。サリナは手を掴まれて引っ張って行かれようとしている。

「ハ……ルカ……」

……まただ。何故あの女がハルカに見えるんだ……。

レイは目をこすり、

「待て！」

と叫んだ。

男達が振り返る。「ああ？」という顔つきでレイを見た。

「……そいつを置いていけ。この島から出るんだ！」
と……怒りの形相で睨みつけた。

「まだ懲りねえのか。生意気なツラしやがって」

と、男達は2人とも、一斉にレイに殴りかかるうとした。

レイの鼓動が高くなる。

そして体中の血が騒ぎ出す。次の瞬間、レイは無意識のうちに、

「“飛礫”^{つばし}”！」

と唱えた。

すると、川原の無数の小石が宙に浮き上がり。高速のスピードで男達にぶつかっていった。

「ぎゃああー！」

「うわあああ！」

石は、弾丸ほどの威力を発揮し男達の体を突き抜け、あまりに数が多いために体の肉が飛び散り……2人は無残に撃ち抜かれて千切れた肉片と共にそこら辺へと転がった。

「！」

……しかし その石は、男達だけでなくサリナの体も貫いてしまった。

血が……飛び散った。

レイはハッと我に返る。

「な……何だ……！？ 今のこの……この力は……俺は いつの間……」

自分の両手を見る。汗でベツトリとなった手の平を。

サリナは……バタリと倒れる。貫かれたのは、2・3発。それでも致命傷である……。

もう虫の息で あった。

レイの見ている自分の手が、やがてガクガクと大きく震え出してきた。

「そんな……そんなバカな。いつの間に俺はこんな力を……技を！ 最初小さかった震えは ひどく大げさに大きくなっていった。」

神子の言った言葉の意味 絶対に使うなと言ったのは、この技、

この力で人を皆殺しにしてしまう可能性があったからだということのか！？

「あ……天神の側近の方……」

と、うつ伏せに倒れ込んでいたサリナが言った。苦しそうにレイを呼んだ。レイは、呆然とサリナを見下ろすだけ。サリナはレイに何かを伝えようと必死に口をパクパクと動かしている。

「あなたの力は恐ろしい……助けてくれと頼んでおきながらだけ……ど……その……ち、ちから、は」

片目を失い、もう片方の目でレイを見ていた。

「普通じゃない……もう2度と使わな……い……で……」

石が貫いたため、左足と片腕と片目が千切れてしまっていた。出

血が後から後からドクドクと止まらずに。もう助からないのはわかっていた。

「あたし……奴隷になんてなりたく……な……かった……の……に……」

サリナは目を閉じた……

眠るように……静かに息を引き取った。

2人の男の肉片がバラ撒かれ、一人の少女が息絶えたこの場所
で一人。レイは衝動に さらされた。

「うっ……がああああ！」

頭を抱え、へたり込んだ。ガツクリと膝をつき、下を見る。髪に付いていた男達の血がポタリポタリと地面に落ちた……真つ赤に染まった石……。

(人を殺した……！ 3人、も……！)

半ば自暴自棄。レイは自分を何処までも責め続けた。

「俺の この力は……」

何 なんだ アアアッ！」

……

黒い鳥が一斉に森から はばたく。

天に向かって叫んだ救いの声は空中に響き、遠くまで駆け走った。

……その足で神殿へと帰ったレイ。神殿の前には神子が、待っていたかのように立っていた。

「神子様」

ヨレヨレになった重い足取りで、神子の前に。神子の顔は無表情。固く厳しく重々しい いつもの顔が、今は やけに怖かった。

「神子様……俺……俺……」

と、今にも泣き出しそうな……絞り出した声を出した。

「力を使いましたね」

と、神子はピシヤリと言った。

レイは俯いた。

「そしてやはり、人間を殺してしまった……だから言ったのに。力は使うなと……レイ、お前のその力は『閻神』の力だ」

「『閻神』……?」

真つ白な頭の中に、言葉がグルグルと回り出す。

「お前は精霊使い……七神のうち、閻の精霊を司る者。即ち閻神。産まれた時から、お前の体の中には鏡が埋め込まれているはずだ。

昔、天神殿が埋め込ませ力を使えなくした。それなのに お前は閻の力を呼び戻してしまった……」

「何故……? 俺は そんなに、危険なのですか……?」

「ああ。七神の中でも一番危険な存在。閻、とは即ち“死”を招く。本当なら……その力には気が つかずに、一生を過ごして欲しかった」

神子はレイの目の前に歩み出た。そしてレイの頬に触れた。

レイの目から とめどなく涙が流れ出た。涙を流すのは……久しいと。

「俺は こんな力は要らない……人を殺す力なんて要らない」と、その目で神子を見て、訴えた。

運命。

そんな言葉が、何処かで。

「俺は天神様を守る力が欲しかっただけ。それなのに、何故ですか。どうして こんな事態に」

神子に しがみつくように。膝をついた。そして神子の両腕を掴む。汗が。怒りが。悲しさが。

震える。怖、い。

俺が あの“七神創話伝”の中の七神のうちの一つ、閻神の力を
受け継いだ者ですか。

そして俺はそれに気がつかずに自らの魔力を磨いていたというの
ですか。

それが人間を殺す結果になったというのですか。

俺は……。

「レイ。落ち着きなさい」

神子は自分自身を滅茶苦茶にしているレイに、いつも通りの冷静
な口ぶりで なだめた。

「はい……すみません、俺とした事が……」

レイは深呼吸をした。

レイが こんなに動揺するのを見るのは、恐らく神子が初めてだ
つただろう。いつもなら感情など表に出さず、クールに過ごしてい
るのに。

初めて知った自分に隠された、奥底の力。今、彼の心を侵してい
る。

だが信じているものが あった。

天神様。

こんな俺でも、構わない。俺にはココ以外、行く所など無い。

全てを置いてきた。俺はココに全てを賭けた。

天神様なら、こんな俺でもココに置いて下さるはずだ。

そう、信じていた。

……

「あんたは、弱りきつたレイに、さらに追い討ちをかけたんだよ」と鵜は神子の顔を睨んだ。そしてフンと鼻を鳴らす。

しかし神子の顔は崩れなかった。

……

「レイ」

神子はレイを呼ぶ。呼ばれて顔を上げたレイが見たものは。

「今すぐココを出て行きなさい。天神殿の神殿には、殺人者は要りません」

冷たく凍った顔……レイを見下す嘲笑に見えた顔だった。

いや、凍りついたのはレイの方だったのかもしれない。嘲笑に見えたのも……錯覚かもしれないなかった。

「神子様……？」

と、信じられないような顔をしたレイ。

「私達が何故あなたをココに置いたと思う。その力を外界へ出さぬよう、閉じ込めておくためだ」

神子は言うと、レイの前に手をかざし、呪文を唱えた。すると少し眩しい光が現れ、その中から手の平サイズの鏡が出てきた。

黒い鏡……不気味な光沢を放つ縁。これがセナ達もそれぞれが持っていた……七神鏡。

闇を司る者が持つ、七神鏡のうちの一枚、『闇神の鏡』である。「さつきも言ったように、天神殿が七神鏡をそれぞれ転生なさった時、七神のうちの最も邪悪で危険に満ちたこの鏡を転生なさる時……力に気がつかないように、充分に出ないようにと、体内に埋め込ませたのだ。この鏡は、お前の命と繋がってもいる。従って壊す事は出来ないが……こうなった以上、私が預かっておく。普通の人

間として残った人生を過ごすがいい。とつと立ち去れ」

レイの中で、パチンと音がした。

レイの頭の中では様々な思いが駆け巡り、その理性と感情の情報が全てコンピュータ処理されていていつているかのようであった。

その間 神子は鏡を持ち、レイに背を向けて神殿へ戻る所。整理されていく思い。

天神様も神子様も俺の事なんか どうでもよかった。
人を殺したから見捨てた。

俺をココへ置いたのは『危険』だったからだけ。
『閻神の力』を持った鏡は とられた。俺の命は天神様の手中に？
それに これで俺は魔力を失い普通の人間とほぼ同じに。普通の人間が、ココから無事に外界に行けるかどうかは わからないじゃないか。神子様は俺に のたれ死ねと言っている？ ……
これが天神か？ 世界を治める神なのか？
ならば俺は 。

レイは、神子を追いかけた。

そして、

「天神の神子！」

と、叫んだ。髪が激しい怒りで全部 逆立っていた。

「お前らを神とは認めない！」

そして、ものすごいスピードで神子の手から鏡を奪い取ってやった。

「何をするのだ！」

「うるさい！」

レイから冷静さが消え失せた。

業火の如く怒り狂うレイ。激しく憎み神子を射抜くほど睨んだ。
「俺が邪魔だというのなら、お望み通りお前らの悪になってやる。」

せつかくの この力をフルに使ってな！」
狂い遊ぶ笑いをしながら立ち去った。

その後、彼を見た者は居ない。

「レイは僕ら四師衆を作り、着々と青龍の復活の準備を進めてきたのさ。天神と神子の あんた2人に、精一杯の復讐の贈物プレゼントをしよう
と思っ
てね」

「……やはりレイの仕業だったのか。白虎が封印されてからまだ約500年。次の四神獣が復活するまでは まだあと500年ほどあったはず。しかも、四神獣は玄武・朱雀・青龍・白虎と順番通りに1000年に一度目覚めるはずだというのに、とんで青龍が先に復活するということ おかしな事態。これは裏で、誰かが企てているとしか考えられなかった。その誰かとは、十中八九レイだろうと思っ
て
いましたよ」

鷓の挑発にも動じず ため息交じりで嘆く神子。

私達は黙って2人を見ていただけだった。

「レイが どんな気持ちだったか わかる？ 想像できる？ まあ
とにかく、あんたがレイを止める資格なんか無いね。せいぜい苦しんでよ。僕らも楽しみにしているんだからさ」

すると、ずっと私達の存在を無視していた鷓が、最後に私の方を
向いた。

「救世主。わかつたろう？ さっきの話通り、レイは立派な閻神なのさ。だから結局、あんたらは青龍復活を止める事なんて出来ないんだよね。七神のうち一人が欠けているんだからさ」

少し自分を取り戻した調子で話しかけた。

「おっと。2人かな」

と、何やらブツブツ言っている。

「じゃあね。また遊びに来るからさ」

そう言つと、鶉はサツと空気に混じって消えた。いつものように、皮肉っぽく愉快に笑いながら。

「レイが……七神の一人……」

「闇神……」

「天神への復讐……」

と、オウムのようにさっきの話を繰り返す私達。

（そうだったんだ……レイは天神様への復讐のために青龍を呼び出そうとしてるんだ。この世界を治めているのは神である天神。きつと青龍を呼び出して、この世界を滅茶苦茶にしようとしてるのね。さっきの鶉の話が本当なら、私がココへ来る事になったのも、全部この人達が蒔いた種だったんだ）

私が出来事を整理して まとめてみると、セナが一步前へ出た。

「レイを変えたのは あなたですか」

しかし尋ねられた天神の神子は、無言。セナを無表情に見下ろすだけ。

「しかし、何故ですか？ 何故レイを見捨てましたか。何故レイを突き放したんですか。確かにレイは人を殺した……でも、それはいわば事故、だったのでしょうか？」

セナの問いに、神子の表情が急変した。

「事故だと！？ あれが事故だとでもいうのか！？」

と、手で空をかく。

「……どういう事ですか？」

「私は見た。あの日あの時、神殿の透視玉で。私が見たのは ただの偶然だった……レイの“飛礫”が、男達を貫く瞬間……笑っていたんだよ。さも楽しげにな」

神子は、その時の光景を思い出したくないばかりに、手で顔を隠した。

「笑っていた？ レイが、殺しを楽しんでいたとでも？」

「ああそうだ。あいつはあの時だけ、我を忘れて魔力に心奪われ……あれは悪の前兆だ。私はあの時、そう思った。あの日まで私はあそこに あいつを閉じ込めて力を使えなくすればいいと思って……いた。でも違った！ 危険に代わりなど、無かったのだ！」
セナが興奮して言い返す。

「あなたが あそこでレイを見守っていてやれば、こんな事にはならなかった！ 青龍復活は、あなたが蒔いた種じゃないか！ そのために伝説の筋も秩序も乱され、本来なら来るはずのない救世主まで来てしまった！ 俺らの生活まで狂わされて……どう責任とるつもりなんだ！」

「セナ、落ち着いて！」

マフィアがセナを止めた。

言われっ放しの神子は、悲しげな顔をする。

「……すまない。私は天神の使い……天神殿を守るのが宿命なのだ。あのままレイを神殿に置くと、いつかあの暴君じみた連中のように天神殿を襲い、世界を手に入れようとするやもしれない。それが、怖かったのだ……レイの秘めた力は、恐らく私以上。私の力では天神殿をとて守りきれない」

「だったら、そう言えば よかったじゃないか！」

「お前に私の気持ち が わかるか！ いや、わかるはずがない。あの時のレイの顔を見た事が無い奴らにはな」

天神の神子は そう言うと、サツと垂れ下がった布の裾を払いのけた。

「勇気……救世主よ」

「は、はい！」

急に呼ばれたので、私は気をつけ！ の姿勢に なった。

「連絡が遅くなって済まなかった。本当なら もっと早く来てこちらの世界の詳しい事情を教えるべきだったのに。いや……少しお前を試していたのだ。ノーヒントで、何処まで やれるのか、力量を見たかったのだが」

は、はあ……そうだったんですかあ。

私がポリポリと頭を搔くと神子は また無表情に戻り、説明し始めた。

「七神のうち、3人をこんな短時間で集めたのは、すごい強運としか言いようがないが」

え？ そう？

「しかし」

へ？ 何か問題が？

「さつき鷓が言ったように、残りの4人のうちの一人が青龍復活を企てている。これによって、青龍復活は止められない。伝説のようにはな」

「伝説って、“七神創話伝”ですよ？ えーっと、『この世に四神獣蘇るとき 救世主ここに来たれり 光の中より出で来て 七人の精霊の力使ひて これを封印す 精霊の力とは即ち 転生されし七神鏡 これを集め 救世主 光へと導かれたり』……だったっけかな。つまり、四神獣のうち一つでも復活するような時には必ずどっかから救世主となる人物が光の中から現れて、えーっと、七神を集めて、七神の力を使って封印するんでしょ？ 神獣を。でも最後の光へと導かれるっていうのはなあ……どういう意味なんだろう？ やっぱり元の世界に帰るっていう事かな。 たぶん」

「まだ続きがある。『満たされし四神獣は また千年の眠りにつく』と、私の斜め後ろに居たカイトが言った。

「ふーん……満たされし……かあ。やっぱり よく わかんないや」私がブツブツ言っているのを、黙って神子は見ていた。

「とにかく、七人揃っていないために封印は出来ない」神子は付け加えた。

「じゃあ、どうするんですか？ ムダだとわかっているのに、集めるの？」

と、言ってしまった後に、しまった！　と思った。だって、ちょっと意地悪っぽい言い方だったんだもの。

「ムダにはしないよ」

と、セナは神子を見た。

「残りの 3 人 を見つけて、レイの所へ行く。説得するだけでもしてみるさ」

「説得できなかったら？　世界は終わりよ。いい加減な事を言わないで」

マフィアがセナの言葉に釘をさした。セナは　それきり黙ってしまった。

私はキツ！　と神子を見上げた。

「それでいい。それで行こう。残りの 3 人を見つけて、レイの所へ行く。レイは今、四神鏡を集めるために世界中を渡り歩いてるんでしょ！？　そんな作業、かなりの時間が　かかるはず。レイが四神鏡を集めるのが先か、私達が残りの 3 人を見つるのが先か……単純に考えると、私達の方が有利じゃない？　人間を見つucker方が」

チラリとセナを横目で見ると、セナはウンと頷いた。

「とにかく私達、必死に 3 人を捜します。それでいいですよ。他に方法が浮かばないんだから」

神子は何も言わなかった。

私のノンキさに呆れているのかも。

それでもいい。だって、本当に他に方法が思い浮かばないんだもんね。何もしないよりはマシ。

救世主だからって、考えつめたって仕方無い。

「方法なら、あるかもしれないぜ」

と、カイトが　とんでもない事を言い出した。

「ええっ!？」

と私達は目の色を変えてカイトを一斉に見た。

「な、何だ落ち着けて。それより天神の神子とやら。メノウの魂を元の体に戻してくれ」

カイトが脇に抱えているのは、メノウちゃんの魂が宿ったシノルとかいう女。昨日、散々痛めつけられたんだよね、全く。まだ本当は体のあちこちが痛いんだから。我慢して立っているんだからね私。

シノルは薄目で死にかけているよう。鵜が言っていた。魂が体と拒否反応起こしているって。放っておいたら、死んじゃうって。

……のんびりしている暇 無いんじゃないの？

「わかった。元に戻す。ただし、丸2日は目が覚めない」

と、手をかざした。天からの光が一筋、シノルを包み込んだ。すると、シノルの体から白い煙のようなものが出てきた。

出てきたと思ったら、ピュン！ と何処かへ飛んで行ってしまった。

「……あるべき所に戻ったようだ。もう大丈夫だろう」

と、神子は見事にシノルの体からメノウちゃんの魂を取り出して元に戻したんだ。……

ただの人形となったシノル。カイトは「……良かった」とため息をついた。

カイトって、妹思いなんだな。

「……せつかくの安堵の所、悪いんだけどね。で、その方法って何？」

マフィアは仕切り直した。

気のせいかな、マフィア何だかイライラしてない？ さっきから。

「ああ。いや、別に。チラツと耳にしたらただけなんだけどさ。確か、何ていったか。“七神創話伝”だっけ」

ポリポリと耳を掻いた。

「うん、そっだよ」

私が返事をする。カイトは続けた。

「あれ……呪文だって噂があるんだ」

「呪文!？」

“七神創話伝”が……呪文だっていうの? 一体何の? 封印の?

「ただ単に噂だからさ……でも、この伝説が何か関係してくると思うんだ。なあ神子サン、そうだろ?」

と、神子の方を見たが。

いつの間にか、神子の姿は消えて何処にも無かった。

《第14話へ続く》

第13話（魔の根源）（後書き）

【あとがき】

呪文が恋の呪文だったというオチはどうでしょう？

……………ないか。

ブログ第13話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-49.html>

ありがとうございました。

第14話（幻遊の間）

暗闇の部屋には、背もたれの出来る大きめの椅子と……氷づけの少女。美しい金髪と整った気品あふれる顔立ち。例えるなら、フランス人形だった。

名を、ハルカという。

たまにレイは この部屋を訪れ、どっかりと椅子に腰かける。そして目の前のガラス細工の如き人間……氷づけのハルカを見つめるのだ。それから、ゆっくりと仮眠をとる。

今日も いつもと同じ、少しだけ仮眠をとった後。部屋を静かに出て行った。

（レイ……）

と、ハルカは心の中から語りかけた。氷づけのため、目も口も手も足も動かさないでいる。しかし心の目で見ているのだ。

（そばに居て……あなたが そばに居てくれるなら、私、このままでも構わないから……）

心の中に ある景色が映る。

レイとハルカと……楽しげに おしゃべりをしている姿が。レイが監獄に居た頃の2人の姿だった。

「これで青龍復活に一步また近づいたわけね。ふふっ、救世主……サークの森では とんだ恥さらしちゃったけど。一体あれから どううしたのかしら？」

と、王座の前の台に飾られた魔神具の一つ……水神の秘宝と呼ばれ、メノウの魂を使い奪った……『魔道経』を見ながら、螢は横に居る

紫に話しかけた。

ボロボロの巻き物……中身は固く封印され、結ばれた藍色の紐の上に札が貼られている。コレには四神鏡の力を復活させるための呪文が書かれているのだという。

しかし、青龍復活に必要な四神鏡は、まだ一つも見つからないでいた。

それもそのはず。四神鏡は一枚ずつ世界中に散らばっているし、しかも鏡があるのは人間の体の中なのだ。即ち、世界中の人間の中から鏡を持つ人間を見つけねばならないのだ。非常に見つけるのが難しい。

そこでレイは、四神鏡を持っているか持っていないのかを判別するための道具を何処からか持ってきた……これがあのライホーン村人を斬り刻みまくった もう一つの魔神具、『邪尾刀』である。

コレのおかげで。わざわざ死体を心臓から内臓からバラバラにして調べる必要が なくなったのだった。

だが一つ欠点がある。

あまりに長時間使い続けると、すぐ錆びてしまう。そのため村一つ、街一つずつが限界だった。使い終わったら後は四師衆の一人レイの側近、さくらの術を使い錆びないようにする。コレを繰り返し行うのだから、相当な時間を用するのだ。

レイはイラついていた。そのイラつきを抑えるため、ハルカの居る部屋へ行き落ち着かせるのだ。不思議と、騒ぐ心はハルカの前では おさまるからと……。

「救世主は、ノジタ国に居たと さつき鷓様が漏らしていました。どうやら七神を集める旅に出ているようです」と、紫は蛩に返した。

「だーかーらっ！ 紫ってば。あんな奴、鷓様なんて呼ばなくてもいいわよ。呼び捨てで充分でしょ。ああムシズが走る……」

蛩は そういつて腕をさする。鳥肌を撫でた。

「救世主はノジタ国か……」

と呟くと、背後からコツコツと足音が聞こえてきた。振り返って見るとレイだった。

「救世主……さアどう動く？ たつぷりと楽しませてもらうぜ」

と言ったかと思うとクツクツと笑い出した。やがて その声は段々と大きくなり、しまいには高らかに笑い出した。

「ハハハハハ！」

と、笑い続けるレイに蛭は尋ねた。

「レイ様、あいつらを放っておくんですか？ 今のうちに殺してしまった方が……」

するとレイは、ピタリと笑うのを止めた。そして『魔道経』にそっと触れる。

「いや。四神復活は確実に近づいている。もがく ねずみを見ているというのも面白い」

「しかし！ ねずみでも猫を噛むという事は あります！」

蛭が なおも意見し続けると、レイはチラリと蛭を見た。メガネのズレをカチャリと直して、

「……安心しろ。噛まれたら……百倍にして返す」

と……不気味に目を光らせた。言った後、蛭は口唇を噛んでギョツとスカートを握り締めた。

（レイ様は狂っておられるわ……）

俯いた。床に自分の歪んだ顔が浮かんだ。

レイの表情は明らかに前とは違っていた。前は あんなに気味の悪い……蛭さえも脅かすような顔は しなかった。青龍復活が近づいてくる事で、どんどんと天神への復讐心が蘇ってきたのか。

それとも、青龍復活の欲望に心奪われているのか……。

（やはり出る芽は摘んでおくべきなのよ。砂利や雑草といえど少しでも危険な存在なら……）

と蛭は考え込み、

「紫……」

と紫を呼んだ。

「はい」

と紫は呼ばれて返事をした。

天神の神子騒動から2日後。

神子様の言った通り、魂の戻ったメノウちゃんは目を覚ました。

鷓の策略で罠にハマったメノウちゃん。何と七神の一人・水神であるカイトの たった一人の妹。代々家に伝わってきた『水神の秘宝』。実はコレ青龍復活に必要なアイテムだったのだ！

それを狙って、鷓が やって来たというわけ。

「ん……」

と、ベッドに寝かされたメノウちゃんが目を覚ました時。カイトは笑顔で それを迎え入れた。

「おはよう、メノウ！」

メノウちゃんはパチクリとカイトを見た。

「……メノウ、何か長い夢を見ていたの。悪い奴が居てね……」

とメノウちゃんは目をこすって大あくびをした。カイトは頭をポンポンと叩く。

「そうか。でも それは全部夢だよ。さ、朝食出来てるぞ」

カイトの言葉に、「うん！」と反応し、ベッドから飛び出して走り出したメノウちゃん。すると ちょうど部屋に入ってきた私とぶつかった。

「……？ お姉ちゃん、だあれ？」

とメノウちゃんは私を見上げた。目が輝き、元気で生命力 溢れる普通の子供の顔だった。

「お兄ちゃんの友達。遊びに来てるんだよ」

と、後ろでカイトは説明した。メノウちゃんは「フウン……」と首を傾げて、

「お姉ちゃんの お名前は？」

と聞いてきた。

もちろん私はニツコリとして「勇氣。勇氣って呼んでね」と言う。
「勇氣お姉ちゃん！ ご飯食べた？ お兄ちゃんの料理、おいしー
んだよ。いい奥さんに なれるよね」

「……」

「……」

私もカイトも、後で大爆笑してしまった。

「君らには すごく感謝しているよ！ どーぞ この家に泊まっ
てっってくれ。メノウもあんなに喜んでたし！」

というカイトの強い希望もあり、私達は お言葉に甘えココで何泊
かする事に。

あ、ココは『人形の館』の奥の部屋。ココはカイトの店なんだっ
て。人形作りが好きで、店にある人形は全部 彼が作ったそうだ。
富豪の家に生まれ、生活は とっても裕福なんだって。だから自
分の好きな仕事に就いて、こうやって人形を飾って売ってるんだと
か。あまり売れないけれど、生活に支障は ない。自分の好きな事
をやっているんだって。

要するに、金持ちの道楽？

「そうだなあ……確かに、何不自由なく暮らしていたから他人から
見たら すごく嫌な感じかもしれない。でもさあ、俺 人形作りに
手は抜かない。一応苦労も してるつもりだ」

カイトは毎日一体ずつ人形を作っているらしい。でも一日一体の
ペースに なるまで、様々な苦労や修業が あったという。

人形を作る……そんな簡単に出来るもので ないんだね。

店に飾られている人形達を見る。

フランス人形、ほか西洋人形、民族衣装を着た人形、日本人形、
ネジ巻き人形。目が動いたり、口が開いたり。からくり人形なんて
のものもある。ぬいぐるみもある。ふわふわ、だぶだぶ、ふにゃふ

にや。

コレを全部 一人で作ったんだね。

まだ18歳だっというし……まだ若いのに すごいや（私の方が年下だけどさ）。

『人形の館』の そばにあるプレハブ小屋のような建物の中で、カイトは今日もカーンカーンと音をさせながら人形を作っている。横で ちょこんと座って様子を見ていた私。

「私が居て気が散ったりしない？」

「別にい。俺、集中したら周りの事 見えないし。あんたの事は石像だとも思ってるから。あ、石像というよりタヌキの置き物って感じかな」

「たっ……」

……悪かったわね、と小さな声で呟いた。

「あんた、救世主なんだよなあ」

「え？ うん、そうだけど」

「やっぱし、俺も旅に参加するんだろうね。あの伝説どーりに 会話をしているもなお、人形を作る手は休めない。

「……嫌だったら、ココに居てもいいよ。残りを集めて、またここに帰って来るしさ。その時に協力してくれたらそれで……」

「誰が行かないって言ったよ」

カイトは そう言うと、ハー……と ため息をついた。

「ココの人形達も、そろそろ増え過ぎたなって思ってたんだ。でも捨てない。旅のついでにさ。人形を売るぜ、世界中に」

辺りを見回した。人形達が皆、カイトを見ているような気がした。「人形は、作った人の思いや魂が込められているんだ。俺には聞こえる。こいつらの声が」

その中の一体をとる。両手サイズの可愛らしい男の子の人形だった。

「コレやるよ。ほら」

と、カイトは私に それを渡した。

「……私も、声が聞こえるようになるのかなあ」
私は その人形をスカートの中のポケットの中に そっと入れた。

セナとマフィアは買い物。カイトも人形作りに精を出している。暇だったので、私はメノウちゃんの遊び相手に なっていた。いい天気なので近くの丘へ行って、ゆっくり寝そべって ひなたぼっこ。メノウちゃんは蝶を追っかけたりして走り回っている。時折 吹く風が気持ちいい。

(一生こんな幸せな気分で いられたら……)
なんて思わせる気持ち良さ。

(今までの辛い事とかも ゼーんぶ忘れて……ゆっくり できたら)

サワサワと草木が揺れる。風を感じる。

まるでセナの優しさのようだ、なんちって。

ついウトウトと眠りに入る。花畑の中、私が一人、そこに居る……。

「俺はセナ・ジュライ。年は17。風神だ」

振り返ると、少年が私を見つめて立っている。どう見ても5・6歳くらいの男の子。

あ……知ってる。『時の門番』で覗き見た、昔のセナの姿だ。

「セナ」

と、少年の後ろに もう一人少年が。青い髪の毛、いかにも賢そうな少年だ。この子も知っている。

レイだ。レイ・シエアー・エイル。年は18。闇神だった。

2人は肩を叩き合って笑いながら走って行った。その先に、ある少女が立っていた。この子も知っている……けれど、何者かはわ

からない。金髪で赤い瞳。幼くても気品のある振る舞い……。

「レイ。セナ」

と、少女の口から そんな言葉が出た。綺麗な澄んだ声。だけれど、何処か寂しさの満ちた声。

「ハルカ。一緒に遊ぼう」

とセナが言う。

3人は仲良く手を繋いで去って行く。

(ハ……ル、カ?)

セナとレイと一緒に居た少女は、ハルカという。

(何……? ハルカさんって……レイやセナと どういう関係? 今、何処に居るの?)

謎の少女……夢は、次の声でブツリと切れた。

「久しぶりね。救世主」

何処かで聞いた声だと思った。

ガバツと起き上がる私。目の前には違う少女が立っていた。

「あなたは……」

「今日こそ あなたの首をとりに来たの」

意地悪っぽく笑う黒ずくめの少女……確か、幻遊師・蛭。初めてマフィアと出会った時、森で出会ったレイの手下だ。レイの手下には四師衆とかいう奴らが居る。鵜も蛭も それだ。

「あれをご覧なさい」

蛭は斜め右後ろを指さした。すると。

蛭の付き人っぽい少年・紫が居てメノウちゃんを捕まえていたのだ。

「お、お姉ちゃん……」

メノウちゃんはガタガタ震えて私に助けを求めていた……今の私

には、頼りとなるセナ、マフィア、カイトの どれも、居ない。
うづん、人に頼らないで自分で何とかしなくちゃ……。

私は とにかくドキドキしている心臓を落ち着かせた。あくまでも冷静に、蛭に話しかけた。

「その子は関係無いでしょ。離してよッ」
と。とにかく言ってみた。

「いやあよ。紫、救世主をやっちゃって！」
蛭が私を指さしたのと同時に、紫は掴んでいたメノウちゃんの手を離した。

「メノウちゃん……逃げて」
一歩一歩と近づいて来る紫を睨みながら、チラリとメノウちゃんの方を見たが、メノウちゃんは まるで石にでもなったかのように首から下が固まってしまっていた。

「逃げて！」
と私は叫んだ。しかし どうもメノウちゃんの様子が おかしかった。

「お姉ちゃん！ ……ダメなの、体が……動かないの。おかしいよ！」
と、苦しんでいた。

一体どうして？
そんな顔をしていると、蛭が高らかに笑い出した。

「あら、あの子は大事な人質だもの。仲間を呼んで来られちゃ厄介よ。逃がすわけないわ。あはははは。おあいにくさまね。私は幻遊師。モノに魂を吹き込んだり形造ったり、人をああやって操る事が可能なの……ま、人を操るのは人間2人分が やつとってトコだけどね。でもあんたを殺すには充分よ」

そう言つと、蛭は真剣な顔つきになり精神統一をした。そして二ヤリと笑う。

途端、私の体も動かなくなった。まるで金縛りにでも あったか

のよう。目や口は動かせるけれど、肝心の手足は動かない。蛭の言った人間2人分の術……メノウちゃんと私にかかっているんだ。「くっ……卑怯者！」

あの子は関係ないじゃない、と思った。このままじゃ。

「紫！ 早く殺して！」

術に余裕が無いのか、いつもの皮肉ぶった顔も顔じゃなくなっている。

紫の手が私の首を掴んだ。そして もう片方の手を構えた。

「やっちゃんえ！」

「お姉ちゃん！」

後ろで蛭とメノウちゃんの声がする。私は覚悟を決めていた。

(セナ、お兄ちゃん……皆、ごめん！)
ギョツと、目をつぶった。

思えば、何の取り柄も無かった私。

家でも学校でも邪魔者扱い されてた私。

この世界に来て、セナやマフィア達と出会って、自分が必要とされている事が すごく嬉しかった。結局私、レイの説得も青龍の復活の阻止も、元の世界に帰る事も出来ないままココで死んじゃうんだ。思えば13年間というホントに短い人生だった。トホホホ。

今、終わっちゃうんだ。

「セナ……！」

と、本当に小さく呟いた。

紫の手が私を襲う！

……！

……

……しかし、その時だった。

いつの間にか空に暗雲が。いや雷雲だった。

そこから、勢いよく光がココへ落ちてきた！

「！」

「きゃあ！」

「紫！」

「お姉ちゃん！」

ドンガラピシャン！

ゴロゴロゴロ……。

……一瞬、何が何だかわからなくなった。

気がつくと、私も紫も倒れていた。ただし、私は無傷で紫は重傷。

紫は焼き焦げていた……。

「む、紫！ 紫！」

と、蛍の悲鳴。

私とメノウちゃんの呪縛は解かれていた。

自由に なった体から、ポトリと何かが落ちた。

よく見るとカイトが くれた男の子の人形……だった。まるで身

代わりにでも なってくれていたかのように真っ黒に焦げていた。

まだプスプスと、中の詰め物が燃えているのか焦げつく臭いがした

……。

あの雷は……ただの偶然？ それとも……君が雷を呼んでくれたの？

人形の顔に そつと触れた。よく見ると、面影が何だかセナに似ている気がした。

セナが私を守ってくれたの？

すると人形がしゃべり出した。

「ユウキ、死ンジャ、ダメ。コノヨ、スクウ……」

……それだけだった。でも、私の心を打つには充分だった。
涙がポタリと人形の顔に落ちた。

そして、カイトが言った言葉を思い出した。

『俺には聞こえる。こいつらの声が……』

私にも聞こえるようになるのかな。そんな事を言っていた気がする。

今、確かに聞こえたね。

人形の思い……人形の言葉……私を守ってくれて、励ましてくれたね。

「ごめんね……」

私は涙を拭いた。

フツフツと体の中で何かが湧いてきた。……

「幻遊師！」

と私は大声で叫ぶ。

蛍は「ヒッ！」と驚いていた。私を見て、さらに顔色を変えた。

「む……紫！」

なおも紫を呼び続ける。だが紫は倒れたままでピクリとも動かなかった。さっきの雷が相当効いたようだ。

「な……何よ！……何なのよ！め、目の色が違うわよ！」

蛭は そう言つて、負けじと私に立ち向かった。

「覚えておく事ね。私は、本物の救世主だつていう事！」

と、言つた後。内から膨らんでくる力と精神に身を任せ、何と手から すさまじい光の塊を生み出した。そして それを……。

「死ね！」

と、……ぶつ放した！

そこにあるものを、全て吹っ飛ばすくらいの勢い！

ゴオオオオオ……

「きゃあああああ！」

と、蛭の悲鳴も、光のエネルギーの中に 吹き消された。

攻撃を放つた瞬間、全身の力が一気に抜けた。

そして、気絶した。

気がついたのは、その日の夜だった。けれど意識は はっきりと
しているというのに体が動かないし まぶたも動かせられない。ま
だ蛭の術に かかっているのか？ ……いや、違う。これは ただ
の疲労だ。

あの、訳の わかんない力のせいで手を動かす力さえ失つてしま
つたのだ。

意識がある中、そばに居る人の会話が聞こえる。

「蛭に捕まつて……それで？」

と、マフィアの声がする。

「うんつとね。どかあん！ つて、雷が落ちたの。そしたら、お姉
ちゃんは大丈夫なの。でも、お姉ちゃんをやっつけようとした男の
人はね、真っ黒になって倒れちゃつて……」

このしゃべり方はメノウちゃんね。

それから……？

「それで？」

今度はセナ。

「んとね……メノウの体、動けるようになったから、お兄ちゃんたちを呼びに行つてね……んと……」

「わかった。とにかく、メノウは 最後の事は何にも知らないんだな？」

と、優しい言葉をかけているのはカイト。

何だ、皆ココに居るのね。

「うん」

とメノウちゃんは返事をした。

フウツと、誰かの ため息が聞こえた。

「そっか……やっぱり、勇気本人に聞かなきゃわかんないわね。最後の事」

そう言うとマフィアは、私の寝ているベッドに座った。

「そうだけど……聞くのも怖い気がするんだよな。あんな跡見ちゃ」

「うん……確かにね。あの戦いの跡を見てゾツとしたわ。明らかに強大な力を持った誰かの仕業ね。あの丘一つ消せるくらいの」

え……？

何、マフィア、セナ。丘一つ消せるくらいの力って？

つまり……あの丘、私のヘンテコな力のせいで 消しちゃったわけ！？

うそお……。

「でも勇気のカじゃねえよ。やっぱり あの幻遊師とかいう子供^{ガキ}んちよが やったんだろ」

「でも、セナ。それは一体何のため？ 勇気を攻撃するためじゃないの？ でも現に勇気は無傷よ。コレって一体どういう事だと思っ？」

というマフィアの尋問にセナは黙ってしまった。

「お姉ちゃん、泣いてたよ。お人形見て」

メノウちゃんは、バタバタと足音を立て去ったと思ったら また戻って来た。

「ほら、コレ。真っ黒 焦げの お人形」

「コレは……俺が渡したやつだ」

「泣いてた？」

「この人形、どうして こんなに なったの？ 雷のせい？ あ、もしかして。人形が勇気の代わりに……？ まさか、ね」

「でも、そのせいで泣いてたって事なら、あり得るぜ」

と、そこまで会話が続いた時。急に変な沈黙が……。

「勇気の……力なのか？ あれが。救世主の……本当のセナが言った。

瞬間、私の胸がズキンと音を立てた。

(丘一つ消し去る強大な力……あれが私の力。救世主の力？)

徐々に胸の痛みは広がっていった。

(私が蛭に攻撃する瞬間……)

少しづつ思い出してきた。

蛭は私を見て、目の色が違っって言ってた。私、確かその後……。

『覚えておく事ね。私は、本物の救世主だっという事！』

そう。そんで次に『死ぬ』って言っただ。

ドキドキが大きくなってきた。

(『死ぬ』……？ 私が？ 何で そんな事 言っただらう？)

ダメね……自分の事なのに、訳が わからない。

わからないまま、再び眠りに陥った。

その頃。

救世主の攻撃をすんで避け、逃げ帰った蛍。そして その蛍に
支えられ運び込まれる紫。紫をベッドに寝かせる。

そして、その部屋から走り去った。

(悔しい……悔しいわ！)

と、ほんのり目に涙を浮かべ、冷たい廊下を走る。

(あんな奴に……あんな奴に！)

するとドンと誰かに ぶつかった。

びっくりして見上げると……レイだった。

「レ、レイ様……」

レイの顔は冷たかった。ギラリとした目を向け言葉で圧力をかけた。

「役立たずは……去れ」

《第15話へ続く》

第14話（幻遊の間）（後書き）

【あとがき】

この時にもう1本の連載をしていますが、こっちがシリアスなものに対し、もう一本がコメディなんで……このギャップがまた何とも宇宙とミルクキーウェイ星人に興味のある方はどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n4440d/novel.html>

ブログ第14話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-50.html>

ありがとうございました。

第15話（蛍の逃亡）

「救世主を甘く見たな。慌てて逃げ帰って来たわけか」

と、レイはピシヤリと言った。その視線の冷たさは、怒りか、悲しみか。それとも絶望か嘲笑か。

どん底の蛍に、レイは詰め寄った。しかし蛍も持ち前の強さで言い返した。

「甘く見ているのはレイ様の方です！ 救世主の力、とくと見て来ました。初めて見た時は何も出来ない。ただの小娘だったくせに…

…」

と親指を噛む。パツと顔色を変えた。

「レイ様！ チャンスを！ 私に救世主の始末を！」

もはや蛍に余裕のよの字も見えなかった。切羽 詰まった人の顔で あった。

「……いいだろう。だが もしまた失敗したなら……役立たずは去れ」

と、蛍の横を通りすぎた瞬間、鋭いモノでスパツと切られたような傷が蛍の頬に できた。血は、出ないが……。

その傷を押さえ、目の前を睨んだ。

（救世主、殺す！）

レイは、いつもの暗室へ来た。氷づけのハルカの居る部屋だ。

いつものように部屋の中央の椅子に もたれかけた。目の前の氷の作品を眺めて。

そつと、誰かが現れる。

四師衆の一人。レイの世話兼付き人である、さくらだった。

「さくら……」

と、レイが呼んだ。

「レイ様。だいぶ お疲れのようですわね」

さくらがレイの横に立つと、レイは さくらの手をとり寄り添った。

さくらは、それを愛おしそうに見た。

「救世主は……成長していますわ。レイ様、いかがいたしますの？」

「……放っておけ」

と、ただ一言 言うだけであった。

さくらは、レイの考えを理解したかった。だが、どうしてもわからなかった。

（もしやレイ様……救世主を倒しに行かない理由……救世主のそばに、セナ様が居るから……？）
とも考えた。

しかし、普段のレイの態度から見ても それは何だか信じられない。氷の性格に そんな情があるのか。

愚問である。

「メノウも一緒に行く！」

「だからダメなんだって！ お願いだから、ちゃんと隣の家のおばちゃんの言う事 聞いて おとなしくしていてくれ。絶対そのうち帰ってくるから」

「嘘！ メノウ、知ってるもん！ お兄ちゃんセイリュウ倒しに行くって！ すごく危険なんだって！ 隣の おばちゃん言ってたもん！」

「メノウ！ ワガママ言うな！」

「やだあ！ お兄ちゃんと もう二度と会えなくなったらやだあ！ メノウも連れてって！ ちゃんと言う事 聞くもん……」

終いにはビービー泣き出した。それを見てOH！ NO！ 状態

のカイト。頭を抱えて「弱ったなあ」とか呟いている。

明朝、私達は旅立つ事にした。七神捜しの旅の再開だった。残りの三神を見つげるために。

で、そんなハードな旅にメノウちゃんみたいな小さい子を連れて歩くわけにもいかない、というカイトの意見により、メノウちゃんは隣の親切なおばちゃんに預ける事にした。で、さっきその事を話した所……言い合いになっちゃったってわけ。

メノウちゃんは一応、状況は把握できているようだ。青龍は倒しに行くんでなくて封印または復活を止めに行くだけだ。危険に変わりはない。だから、こんなについて行きたがるのだろう。

カイト達には身寄りは無いらしい。たった一人の肉親が危険とわかってる所に行こうとしていたら、普通は大人でも引き止めたりするわよね……。

「絶対行く！ 青龍倒しに行く！」

と、泣きながら連呼した。

カイトはヤレヤレと肩をガツクリ落としている。

2人の言い合いを黙って見ていた私達。するとふいにセナが私の腕をつついた。

「何か言ってやれ。ガッーン、とさ」

と、コソコソと言った。

……とは言っても。泣きじゃくる子に何言えってるの？ 何か何を言っても泣きがますますひどくなるような気がするんですけど……。

ま、仕方ない。

救世主として。やってみよう。

私はメノウちゃんの前へ来て しゃがみ込んだ。

「ちゃんと言う事 聞かって言ったよね？ 今」

と言うと、メノウちゃんはコクリと頷いた。

「じゃ、お兄ちゃんの言う事を聞こうよ。お兄ちゃんだって、仕方ないんだよ?」

「……」

「大丈夫。本当に すぐ帰って来る。それまで いい子で待ってて。お土産も買ってくる。世界中の話も いっぱい聞かしたげる」

「……」

メノウちゃんは何も言わず ただ黙って下を向いていた。

説得できたんだろうか。

すると、メノウちゃんはポツリと こぼした。

「……メノウは、邪魔なんだね」

と、自分自身に言い聞かせるように。下を向いたまま。

私の胸が痛む。

メノウちゃんの言葉が突き刺さる。

本当に これで いいの?

メノウちゃんを置いて旅して……メノウちゃんは、どんな女の子に成長するんだろう?

何だかまるで私と同じ立場なんじゃないか……?

お兄ちゃんに邪険にされ、懸命に生きてきた私……この子にも、

私と同じツライ目にあわせても、いいっていうの?

「邪魔なんかじゃ、ないよ……ゼツタイ」

と、私が言うと、「勇氣、どうした?」とセナが私の様子を聞いた。私がセナに言う。

「メノウちゃんも連れてっっちゃ、ダメ?」

世界地図で、南に位置する大陸・コンサイド大陸。その西南に、シウル村という村がある。

とりあえずココに行ってみる事にした。

ノジタ国を出てすぐだし、なんせ七神捜しは容易ではない。こんな広い中、ちっぽけな人間をあと3人見つけろっていうんだから。ノジタ国を南口から出てシウル村へ行く。それから東のタミダナの街へ行く……という行程。

シウル村で2手に分かれ、東南のアサバ村へ行く班を決めれば一応大陸中は行った事になり、見つけりゃ儲けもん、居なけりゃ残念……ってな感じ。

あは、ノンキだなあ……と我ながら思っちゃう言い方だけれど。根は真剣で焦ってます、ハイ。え？ そうはやっぱ見ええないって？ あ、そう……。

「……うなよ。わかったか？ 勇気」
「え？」

と、ハッと我に返る。

どうやら考え事をしていてセナの言う事を聞いてなかったみたい。だから、一応 地図はあるんだから、迷うなよって
と、セナは私のオデコにデコピンした。

「ああ……はいはい。ごめんごめん。えーっと、ココは……」
とセナに言われ地図で確認。さっき買ったばかりの新品で、とって
も色彩 豊かで見やすい。セナが持っていた地図は白黒で見えにく
かったからねー。

「ねえ、何処行くの？ 勇気お姉ちゃん」
と、私の横にメノウちゃんが寄って来た。

昨夜、私はメノウちゃんに味方しちゃって。メノウちゃんも旅に
参加する事になったのだ。

「「ごういつのを、』ミイラとりがゾンビになる』って言うんだよな」
……それを言うのなら『ミイラとりがミイラに』だが。
わざとらしくセナがボケたのを、誰も何もツツコまなかった。
どうやら、その一件でメノウちゃんになつかれちゃったみたい。
「んとね。シウル村。すぐそこだよ」

そう。

絶対 迷うはずがない……そう自信を持っていた。

地図は前より見やすいし、シウル村へは ほとんど一本道だ。だから。迷うはずはない……。

でも……あるはずのない森に、迷い込んだのよね……。

気がつけば、日は高くなっていた。

お腹も すいてきた……。

「なあ。ココ、ルツダの森じゃないか？」

と、最初に切り出したのは、カイト。

実は皆、薄々思っていたんだけど……私を信じて声に出さずにいたようだ。

でも、私の次の一言で皆「は？」という顔になった。

「あ、やつぱり？」

と、頭を掻いた。

皆、コケた。

セナは すぐ起き上がって私に詰め寄る。

「ルツダの森って……全然 行き先の方向と違うじゃねえか!？」

地図貸してみる、地図!」

と、私の手から地図をぶんどった。

最初 冷静に見ていたけれど。次第に持つ手がワナワナと震え出した。

「ぜんっぜん違う……」

セナはガツクリ！ と肩を落とした。ついでに地図も落とした。マファイアが それを拾って見る。

「アラ？ ほんとだ。ノジタ国の南口から出て南へ歩いてたのに… ！いつの間に東へ なんてたんだろ？ コンサイド大陸に森は一つだけよね。って事は どう見ても、この『ルツダの森』ね」と、見ながら現在位置の確認。

キヨロキヨロと辺りを見回し始め、何処かを指さした。

「あ……あれが塔ね。『摩利支天の塔』まりしてんか。あれを目印にして、方向と距離を推測すると……」

「推測すると？」

と、身を乗り出した私に後ろからポカツとセナのゲンコツが きた。「迷ったって事だ！」

と怒っている。

ひーん。

「大丈夫よ。あの塔を目印にしてココから真っ直ぐ右へ行けばタミダナの街に着くと思うわ」

と、正しいルートを指示するマファイア。

「ったくもー」

なおもブチブチ言うセナ。

「イヤな予感だ あったんだよな」

うつつ……カイトも私を責める。

「お姉ちゃんのドジ」

とメノウちゃんまで。

皆から責められ、小さくなる私。もちろん地図は取り上げられ先頭はマファイアが進む事に。マファイア、私、セナ、それからメノウちゃんとかイト。再び森の中を歩き出した。

何て情けないんだらう……ちゃんと地図を見てたっていうのに。先頭に立って歩くんじゃないかな……。

後悔あとをにごさず……あれ？ 違う。まあいいや。

森の茂みをかき分け歩いているもんだから、あちこち擦り傷だらけ。

「あ。川だ」

と、先頭のマフィアが言った。

後に続いてそこへ行くと、確かに小さな川があった。幅は5メートルくらいかな。キラキラと日の光に輝きながら流れている。

「ちょうどいいわね。この辺りでひと休みしましょ」

というマフィアの提案により、ランチする事にした。

マフィアはセナの持っていた鍋（例の『縮小自在ポケット』から取り出した）で、山菜鍋を作り始めた。セナやカイト達は他に食べられそうなものを探しに。ついでに焚き木も。

私は水くみ係になって、入れ物を持って川へ行った。

川の水の冷たさが疲れた手足をヒンヤリとさせて、癒してくれる。アクシデントあり、だったけれど。何とか先へ進めそうだったのでホッとした。

マフィアみたいにもっとしっかりしなきゃね……トホホホホ。

「よし、っと」

バケツ位の大きさの器に いっぱいの水をくんで、来た道に戻るうとした、その時。

「あれは……」

と、水の流れてくる川上の方を見た。バシャ、バシャと音がする。

誰かが近づいて来る？

よくハッキリと見えないんだけど。誰かが川沿いに歩いて来るようだ。

しばらく様子を見ていると……段々と姿がわかってきた。

誰かと思えば！

「げ、幻遊師、蛭!？」

私はびっくりして大口を開けた。よくよく見たら、体の至る所

にカスリ傷。血は出ていないけれど、一体何が あったんだ!？
しかも、一人だけ。連れの紫は居ない。

私の元まで辿り着き、そのままヨロヨロと倒れそうに。思わず私は蛍の体を受け止めてしまった。

ただ事じゃない。

誰かに襲われてもしたのだろうか。

「私……レイ様の元から逃げてきたの。この前の失敗で、殺されそうになって……」

そう言った後、パツタリと気絶してしまった。

セナ達を呼びに行つて、とにかくマフィアが昼ご飯を用意している場まで蛍を運んだ。

見るからに蛍は衣服ごとボロボロだったけれど、一つ一つは軽傷だ。たいしたケガでは なかった。

私達はこの展開をどうすべきなのか、話し合っていた。するとやがて、蛍は目を覚ます。

「あ、起きたみたいね」

と、マフィアは起き上がった蛍に山菜の入った鍋から具をよそい、お椀に入れてハイどうぞと渡してあげた。

お腹は すいていたみたいね。

蛍は黙つて。お椀を受け取つて ゆっくりと温かそうに食べ始めた。

もちろん私達も一緒に食べている。そしてキレイに鍋の中はカラッポ。さすがマフィアの料理だと、いつも感心する。

「あんた達つてノンキね。敵が そばに居るっていうのに」

と、蛍は食べ終わった後。いつもの意地悪っぽい調子で笑う。

「こいつが伝染うつったんだろ」

とセナは箸で私をさした。私は何も言えません。

「そういえば紫は？ いつも一緒に居るじゃん」

というセナの質問に、グツと詰まる蚩。そしてポツポツと語り出した。

「紫は……レイ様に殺されたわ」

「……！」

「レイ様は……狂ってしまったわ。私達 四師衆をお作りになった時は、あんなにお優しくかったのに……」

私達は静かに聞いていた。皆、どうやって答えたらいいのか迷っていると思う。

私は。始め紫の事を聞いて衝撃も受けたが。そういえばレイはどうやって蚩を含む四師衆を作ったんだろうかと。ちよつと横道にそれて考えていた。

まあレイは閻神だし魔力も強いから。何とか どうやってかして作ったんだろうけれど。まさか ただの趣味じゃあるまい……ダメだ、そんな風に考えちゃ。いかんいかん。

「私は最後に作られたんだけど……最初は、まだ何も。何の力も満身に無かった。失敗作なんだって思ってたわ……でも。レイ様は。そんな私に色々な術を教えて下さったの。私が こうして術を使えるようになったら……レイ様は とても喜んで下さっていたわ。なのに……なのになのに！」

顔を伏せて うずくまった。

信じられないものを見ているような顔をしていた私達だけれど。徐々に じんわりと胸が熱くなってきていた。

（そうか……まだ この子は子供だったんだっけ。まだ小さいのに

……レイのために、頑張つてたんだろ？なあ)

蛍の親はレイなんだ、いわば。そのレイの元から逃げてきたんだ。大事な紫を亡くして……。

私には蛍が身寄りのない孤独な少女に見えた。

うん……敵とか味方とか、この際 関係 無いよね！

「私達と一緒にいこうよ！ そしていつかレイの所へ説得しに行こう！」

という私の意見に、皆は驚いたが、すぐに賛成してくれた。

「レイは悪い奴じゃない。本当は悪い奴じゃ無いんだ……きっと気がつくさ。自分のしている事に」

と、セナ。

「……話せば わかる奴かもしれないしね」

と、マフィア。

「よく わかんないけど。とりあえず そうしたら？」

と、カイト。

「むにやむにや……ローストチキン……」

と、そばで昼寝をしていたメノウちゃん。

あんまりタイミングがいいもんだから、どつと笑いが起こる。蛍もいつもの意地悪っぽさは無く。普通の子供みたいに笑っていた。

日が暮れた頃。

まだ私達は森の中に居た。

地図で確認しながら、なおかつ あの目立つ塔を目印にしながらい進んでいるのに。いつこうに森の終わる気配が なかった。

「変ね……何だか、同じ所をグルグルと回っているみたい。塔と逆方向に ちゃんと進んでいるっていうのに。これは、もしかしたら……」

「魔物の仕業か？」

「……かもね。あるいはこの森全体に魔力がかかっているのかも」

と、マフィアは考える。

マフィアとセナの会話を黙って聞いていた私は、ちよっぴりホツとした。

だって私が方向音痴じゃなかったって事になるもんねー。

そうよ、魔物よ。この森で迷ったのは、魔の力なのよー！

「とにかく今日中に抜け出すのは無理そうね。ココいらで野宿だわさっそく、夕飯の準備を始める私達だった。

夕飯を終え、皆は寝入った。グツスリ朝まで眠れるだろうと思っていたが、少し眠った後に私は何故だかパツチリ目が覚めてしまう。変な時間に目が覚めちゃったなーと、横をチラリと見ると、一番向こう端で寝ていたはずのセナの姿が無かった。

(あれ……？ セナ？)

起き上がって、少し辺りを捜してみた。すると向こうで人影が見えたので行ってみると。やっぱりセナだった。

大きな岩があり、その上に座禅を組み。精神統一でもしているのか、静かに目を閉じていた。

「こんな夜中に……修行？」

私は普通に近づいていって、正面から話しかけた。

「魔法を考案中なんだ。少しでも力つけねえと」

と、目を閉じたまま答える。

何だ、近づいたのが私だって事がわかってたみたい。

ふーん……と頷く私の真正面で、微動だにしないセナ。

……顔に落書きしちゃおっかな……。

あれば油性のマジックで、と思った後で。いやいやいや、彼は真

面目に やっているんだから邪魔しちゃダメよねと思直した。

「何だよ お前。ニタニタ笑ったり急にマトモになったり。気が散るっつーの」

とセナに叱られた。

アラ、目をいつの間にか開けて見ていましたか。

「いやあね、セナの顔に落書きでもしちゃおーかなああ、なーんてね。ふふふ」

と、またニタニタ笑う。

「何だそれ」

と呆れたセナ。

そして、私に ある閃きが起こる。

「ね。私にも できないかな!」

「は?」

「魔法だよ。私にも できないかな?」

一瞬 黙ってしまったセナだったけれど。すぐに首を横に振った。

「……無理。魔力がないと。お前、救世主だけど普通の人間だろ? 自分で そう言ってたし。第一、魔力を持っているのは七神だけだ。蛭や鵠は例外だけだな」

私にも魔法が使えないか……と思ったのは。

数日前の出来事のせいだった。

そう、蛭と紫が私をやっつけようと、やって来た時。私が「もうダメだ!」と思った時に突如 降ってきた雷。

私には その雷が偶然なのか、それとも私が呼んだ(?)のかが、わからなかった。

でも雷に打たれてしまったのは紫と……身代わりになってくれたのかスカートに入っていたカイト手作りの人形。

そして……怒った私は無意識に……? 丘を一つ。消してしまっ

たらしいと……。

……。

私は目を覚ました後、セナ達に聞かれても何にも答えられなかった。丘だった所を後で見に行っても、何にも。

わからない、何で そうなったのが……と。考える事はもう、止めてしまったけれど。

救世主って、特別なんだろうか。それも わからない。

わからない事だらけだ。せめて魔法とか使えたり はつきりしてくれないだろうかと思う。

「そつかあ…… 厳しいね。じゃあさ。剣とかナイフの使い方とか！ 格闘技とかは？」

私は気を取り直して聞いた。

「そりゃ頑張り次第だと思うけど。鍛えれば、それなりに。でも何で そう いきなり？」

「まあいいじゃん。私だつて戦いに参加したい。ね、教えてよ！」
セナはヤレヤレといった感じで腰を上げた。

「教えてあげてやってもいいけど、真剣にやれよ。それじゃあまずパンチだ」

と、私の右手を指さした。

「パンチ？ えー、もっとカツコイイのやろーよ。何か ない？

ヤケに大げさな名前がついている技とかってあるじゃない。しょうりゆうけん！ たつまきせんぶうきけん！」

何か間違えたような気がしたけれどまあいいや。どうせ わかんない。

私は言いながら片手を上に突き出して その場でクルクル回つてみせた。

しかしセナのノリは悪く、デコピンで返ってきた。

「ばーか基本をスつ飛ばすな。基本も ろくに できない奴が何を言う」

私はシュツ！ と自分の前に右手ストレートをおみまいしてみた。「ダメだな。全然ダメ。話に ならない。遅すぎだし。隙だらけだ」ハッキリ言ってくれるセナ。ううう。

「ええ？ 嘘お、これ以上速くなんて無理だよ」

するとセナは私の3倍……かは知らないけれど倍以上の速さで、

シュビツ

と、パンチを繰り出した。そしてピタツ！ と私の顔の前で止めた。私、固まる。

……お見事。

「……つくりしたあ。全然見えなかった……」

と、おっかなびっくりな私に、そのままセナはデコピンを放った。

パチンツ！

「だから。お前にでもできるように簡単なの教えてやる。技の名前は……そうだな。『大砲パンチ』だ」

大砲パンチ。

だ、ださい。

「速さは置いといて。普通のパンチだ。ただ殴れりゃいいってもんでない。いいか。受け身のパンチをするんだ」

「受け身？」

「相手が自分の範囲内に来るまでジツと待つ。んで、相手が飛び込んできた所をガツーン！ とな。相手が速く来れば来るほどダメーシはデカくなる。仕方は こうだ。できるだけ相手に対して真っ直

「く」

と、お手本を見せた。

「この技は反応が大事」

と、延々とセナのコーチは続く。

たかがパンチ。されどパンチ。

どうやっても上手くいかずで、セナから何撃もデコピンをくらうハメに。

痛い。

楽しい。……顔に出すと、怒られちゃうけれどね。

「うーん。まあ、そんなもんか。今日はココまで。あとは実践という事で……頑張れよ」

「お、おお」

と……ヒザをついてゼーゼーと、息をついた。

……厳しい。ちょっと、甘かったかもいけない。

「無理すんなよ。お前は黙って俺らに護られてりゃいいの」

セナが言いながら仁王立ちで私を見下ろす。その顔を見上げるととても意地が悪そうな。しかも笑っていた。

あはははは……と私は引きつった笑いを。

何かこの人、楽しんでるわね。完璧に。

まあいいさあ……私も汗かいて、しんどくても楽しいと感じたし。と、そんな風にイイ顔をしている時だった。

向こうで、鳥が騒がしく鳴き出し飛んでいった。

あっちはマフィア達が寝ている方向だ。「な、何？」と胸騒ぎがする。

急にセナが険しい顔になってグイと私の腕を引っ張った。

「戻るぞ。嫌な予感がする」

セナの予感は当たっていた。

戻ってきてみると、寝ていたはずのマフィア、カイト、メノウちゃん、蛭。皆、居なくなっていた。荷物は置きっぱなしだ。

「やられた……」

と、セナが それを見て呟いた。

「ど、どうして」

まさか魔物の仕業なの!?

「やっぱりマフィアが言つてた魔力を持つ……」

と私がオロオロして周辺を捜すと、

「いや、違うな。あれ見ろよ」

セナが前を指さした。

セナが指さした方向。その先の木には。

枝で一枚の紙を刺し、留めてあったのだった。

「『摩利支天の塔で待つ』……人間の言葉だぜ。魔物じゃねえよ」

だと……したら。

私は一つ、心の奥の方で押ししまつておいた可能性を掘り起こす。

まさか蛭……が？

《第16話へ続く》

第15話（蛭の逃亡）（後書き）

【あとがき】

後悔先に立たず。身に染みます（うぎょー）。

ブログ第15話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-51.html>

ありがとうございました。

第16話（摩利支天の塔・壱）

『摩利支天の塔で待つ』

その手紙だけを残して何処かへ消えてしまったマフィア達。

「畜生！ やっぱり罠だったんだ！」

と、悔しがるセナ。

「まさか やっぱり蛭が？ でも、どうやって？ 3人の人間をいっぺんに？」

「知るか！ 協力者が居たんだろ。紫とか鶺とかが！」

「そんな……」

昼間の事を思い出す。

レイから逃げてきたと言っていた蛭。体中ボロボロで。たった一人で。

蛭が言ってくれた話は、全部でうちあげだったんだろうか。

「とにかく行くぞ！ 摩利支店の塔。あの やけに目立つ塔だ」とセナは私の手を引っ張っていった。

「ま、待ってよ」

慌てて ついていく私。

行き先は あの白い高く長い塔。森の何処からでも見えるし、マフィアが あれを目印にして進んでいたんだ。

「やっぱり罠だったのかな」

と小さな声で言ってみたが、セナの耳には入っていないらしい。ズンズンと、私の手を引っ張って塔に向かった。あ、もちろん荷物はサッサとセナが片付けてね。

ものすごい早歩きで進んだものだから、夜明けには着いてしまった。

息を整え、深呼吸一つ。

摩利支店の塔。誰も住んでいないようだ。ヒツソリと森の中に建っていた。よく見ると、ボロボロだ。外壁は剥げ、錆び、固めた土の部分は触ると砂のように崩れそう。鉄鋼のようなカタイ金属の枠組みと格子で出来た入り口の開き戸は、壊れて傾いていた。

入り口からは ずっと、グルリと螺旋をかくように上に向かって階段が続いているみたいだ。

「ココは廃塔だ。ご覧の通り。昔、追放された者が連れてこられたと聞く。今は使われていないし無人のはずだが……」

「が？」

私が聞く。何となく嫌あな予感はしていた。

「ゴーストタイプの魔物なんかがいるって噂。できれば来たくはなかったぜ」

と、セナは ため息。

魔物か……。お化け、でなくて魔物なわけね……。その境がアイマイなんだけれど。

「畏でも、行くしかないのよね」

と私が言うと、セナはニツと笑っていった。

「行くぞ。心の準備OK？」

私はコクンと頷いた。

「……ごめんね。紫苑しおん。協力させちゃって……」

ココは塔の最上階。外を見渡せる窓と、持ってきた背もたれ付きの椅子以外は、ガレキの山である。その椅子には、ある人物がどっかりと座っていた。

紫苑と呼ばれた男。

照明が無いため暗くて顔は見えないが、物静かな男で あった。

「いや構わない」

一言 言った後は、再び黙り込んだ。声の質から年のいった男だ

とわかる。しゃべってばかりの鵓と比べると、とても対照的である。寡黙な、落ち着いた気質の持ち主で あった。

「今、救世主達が やって来たみたいよ。……ふふ。バカな女。ちよつと私が芝居したくらいで、簡単に信じちゃうんだから。見てなさい。絶対、殺してやるんだから。レイ様のためにも私のためにもね。……もちろん、紫苑もよ」

そう言って笑ってみせる蛸では あったが、内心ドキドキしていた。今度失敗したら……そう思うとゾツとした。

レイの脅し。役立たずは……。

それと、前に くらった救世主の力。あれは何だったのか。

もしまたあれをくらったら、私達は今度こそ死ぬのかも……と。

今の蛸には少しの余裕も無かった。油断も許されない。必ず救世主を……それだけだった。

「……」

そんな蛸の心境を見透かしているのか。黙って蛸を見守る紫苑。やがてゆっくりと、紫苑は部屋に一つしかない割れたガラスの窓から降り注ぐ朝日を眺め、空の中で さえずり飛び回る小鳥達の姿を見ていた。

中はまるで迷路のようだった。塔をグルリと一周するかのようには階段を上ったかと思うと、通路が2つ3つも分かれていたり、真っ直ぐに下に続く階段が現れたり。部屋が幾つかあったけれど、各々の大きさは統一されておらず、小さい部屋だったり、やけに広い部屋だったり、天井が低い部屋だったり。

何なんだろう。私達を迷わせたいのだろうか。

これでは さすがに自称・方向音痴ではない私も迷ってしまう。

何かムシムシするし……そのせいでイライラもしてきた。上の階へ行くこうとしているつもりが、本当に思うように進んで行っている

のかどうかも怪しい。

所どころガレキの山だし。壁をウツカリ触ってしまったら、崩れてしまうかも。細かい砂が触っただけでパラパラと落ちた。ひえー。臭い、湿気を含んだ臭いが ずっとする。本当、こんな気味の悪い所になんて好き好んで居たくはないや。

セナは私の前をズンズカ先に行くんだけど……私は必死に それについて行くんだけれど。

道、知ってるのかな？ セナ。

別れ道が あったとして。「こっちだ」とか言って進んで行く。

一体、何を頼りに進んで行っているんだろう？

「ねえ。もしかしてヤミクモに行ってない？ ひょっとして迷った りしてない？」

と私が心配して後ろから声をかけても、セナは振り返らず足も止め なかった。

「地図とか、マッピングしなくても大丈夫？」

私が なおも言うと、やっと口を開いた。

「いや。必要ない。邪気の臭いが上から途切れる事なく続いている から、辿って進んでいるだけだ。この邪気は蛍だ。覚えてる」

に・お・い……？

犬か、アンタは……と言いそうになったのを、堪えた。

「帰りは どうするの？」

「何とかなる。壁をブツ壊して外へ出ればいい」

と、冷ややかなセナ。しっかし乱暴だなあー、それって。

この塔の持ち主っていないのかな。ま、廃塔っていうくらいだし ね。

しかし今日のセナ。何だか怒っているような。

やっぱり、蛍の事を怒っているのだろうか……ま、騙されたんだ し。無理もないよね。蛍の話聞いた後、「レイは本当は悪い奴じ ゃないんだ」……って言っていたんだから。きっと蛍に心底 同情

とか、したんだろうな。蛭と同じく、セナはレイの事をよく知っていて、信じて……例え裏切られても。いつかきっとレイが元のレイに戻ってくれる。そう信じているんだ。

……でも蛭の言った事は たぶん嘘っぱちというか罠で。気持ちを利用されたみたいで、すごく怒っているんだ。

こんな時に私、セナに どう言っただければいいんだろうか……。何て考え悩んでいた時。

私はコケた。

「きゃ！」

セナも少しヨロけたが、私の方を見るなり、

「かまいたち鎌鼬”！」

と呪文を唱え、何と私の足首を掴んでいた『何か』に小さく鎌の先のような形状をした風の刃攻撃。よく見ると『何か』とは、ボロボロの肉がついた人間の……手エーツ！

「きゃあああああッ！」

ガレキの中に埋まっていたみたい。そう、こいつは……ゾンビだああ！

這い出るようにしてそいつは隠れていたガレキから出てくる……ゾンビだゾンビだ……肉も見えてる、骨も見えてる！

衣服ごとボロボロの体、ほとんど抜け落ちている髪……片目しかないけれど飛び出ている目。パクパクさせた黒っぽく紫に変色した口……体をグラグラさせ、首を90度近く傾け、時々カクカクいわせている。

しかも しかも！

さっきのセナの攻撃のせいで私の足首を離した『手』は、皮一枚で繋がっている状態。ブラブラさせ、手招きしている！？

イヤアアアッ！ 怖い、怖い、すごく怖いよ！

アガガガガ……と両手を握り体ごとガタガタ震えていると、セナが私の背後に近寄った。

スウツ……と息を吸って、ブツブツと呪文を唱え始める。

しかし、ゾンビは悠長に待っていてはくれない。やがて、頼りない足でペタペタとこっちに直進してきたあツ！

「きゃああツ！ 来るうっ！」

と、私は絶叫。目をつぶった。

「刺青^{いれずみ}」！

セナが そう言った瞬間……突如 私の真ん前で風がクルクルと巻き起こった。

「え？」と薄目で開けると、何と風が物質化して鎖みたいになった。で、向かって来たゾンビにグルグルと巻きついていく！ ……

セナの人差し指が、字を描いた。

「斬^{ざん}」！

と唱えると、その鎖は みるみる細くなつて糸のように変化しゾンビの体を締めつけた。

やがて肉も骨も……糸で締め切り刻まれた。

「ゴガアツ！」

と、悲鳴を上げてバラバラになった体。

うえっ……気持ち悪い……私は慌てて手で目を隠そうとすると、「今だ！ 早く！」とセナに急に腕を引っ張られた。

そして その場からササササと走り去る。ゾンビから遠ざかっていった。

私は「え？ 何で？」と頭の中がグルグル。

「ゴーストタイプの敵は、やっつけられない。元が死んでいるからな。聖魔法や火魔法が使えりゃいいんだけど。あいにく、風神なも

んで」

と、ペロつと舌を出した。

「はあ、なるほど……」

と、私は走りながら感心していたんだけど。何だろう……？ セナの機嫌が良くなったような気が。

ある程度 走った後、やっと立ち止まった。

はーはーと息をつかせていると、セナがこっちをチラッと見た。

「な、何よ？」

と見ると、突然セナは二カツ！ と笑ったではないか。そして今度は、くつくくくつとお腹を抱えて笑い出す。

なっ、何！？

「お前、本っ当に変な奴」

「はああ！？」

セナの言いたい事が わからない。

でも何か、すっごいやな感じ！

「何よっ、私、何かした！？ あ……もしかして私、絶叫しまくったから？ そうよねー、今まで色んな魔物とか死体とか見てきているのに今さらキヤーキヤー言っただらガタ震えちゃって情けなかつたよねー。でも、本当に怖かったんだからっ！ ゾンビなんて見たの初めてで、しかも あの手で足 掴まれたんだよ！？ あゝ、気持ち悪いッ！ 思い出したくないッ！」

と、一人でペチャクチャしゃべりまくり、その場で飛んだり跳ねたり。

しかしセナは まだ堪えきれずに笑っている。時々、私の方を見てはブツ、と吹き出す。

何か訳わかんない。私の言った事、違うの？ じゃあ何よー！？

「ちよつと……いい加減に不愉快よ！ 教えなさいよ！」

と、私はキレてセナの胸ぐらを掴んだ。

まだ ちよつと笑っているセナは、やがてこう言い放った。

「まだ、クマさんとかゾウさんとかなら わかるけど……ブタさんは ねーだろ、ブタさんはっ！」

……そう言つと、またお腹を抱えて笑い出した。

「ブタさん……？」

何の事が わからなかったけれど。ハッと気がついて、スカートを隠した。

「ばっ……！ ぱ、ぱんっ！ 見たでしょおーっ!？」

と、超赤面で叫ぶと、セナは今度は壁を叩いて笑い続けた。

信じらんないっ。

こんの くそばかっ！

「なあ。悪かったって。機嫌直せよ」

「知らないっ！」

と、前を先に歩きながら そっぱを向く私。セナはヤレヤレと頭を掻いた。

「言つとくけど。あれは事故だぜ？ 事・故！ たまたま風が起きた時に、お前のスカートがめくれちゃったv だけ」

「めくれちゃったv じゃ、ないっての！ そーいうのって、見て見ぬふりするもんでしょー！」

「だって、まさかブタの絵が描いてあるとは思わねえじゃねーか。

第一、そんな短いスカート履いてっから悪い」

「この服 買ったのアンタでしょ!？」

「それもそうだな」

「まったく！ 信じらんない！ 何であんな技、使ったのよー！」

「おいおい。“刺青”は初めて使った技だけど、あのくらいの規模じゃねーと大変だぞ」

「他に“鎌鼬”とか“疾風”とか……“風車”なんてのもあつたじゃない！」

「こんな狭い所で そんな強力な風 起こせねーの！ “鎌鼬”な

んかバンバン使ってみいつ。ゾンビの肉片が あっちこつちに飛んで来るぜ？ しかもピクピク動いて、再生 始めやがんの」

そう言われて、またさっきの恐怖が蘇ってきた。掴まれた足首の感触……。

「気持ち悪い……」

「だろ？ “刺青”は小規模で、また実用価値のある技なんだ。いや、実はコレ森で一晩 考えてたやつで。思ったよりも上手くいつてよかった」

ああ、座禅組んで考えていたやつか。そっか。そうだったんだ。ちよつと悲しかったけれど（ダメージ5万くらい）上手くいつてよかったね……。

「……ちよつと待って。さっき、初めて使った、つて言わなかった？」

私が聞く。セナは「言った」と素直に答えた。

「つて事は、つまり？ ……成功するかも わからない、賭け攻撃だったつてわけ!？」

「ま、そういう事だな」

「……！信じらんない……！もし失敗したら、どうするつもり!？」

「何とかなるつて」
「……」

死ぬと思う。

ゾンビに抱きつかれて血を吸われるさまを思い描いた。あ、そりゃ吸血鬼かあ。

あれ、そういえば。ゾンビばんつ事件が きっかけで、セナの機嫌が すこぶる よくなったような。それまでは あんなにピリピリしていたのにさ。

ま、いっか。ショックだったけれど、不幸中の幸いっていうの？

セナが元気になってくれてよかった。そう思っておけば、私の心の傷も癒されるわ……はは。

「ねえ。ちゃんと道あつてるよね？」

と、元気を取り戻してバツと振り向いた。
すると。

セナではなく。別の顔が あつた。

「きつ……」

魚人。魚を正面から見たような顔。体は古代人みたいな格好の服を着た人間だ。裂けた口とギョロ目。ニヤ、っと笑ったから たまらない。

「きゃあああああ！」

「勇気！」

と、セナが魚人の背後から、組んだ両手を振り下ろし思いきりブン殴った。

不意を突かれて私の方へと倒れてきた魚人。慌てて私は避ける。
壁際で魚人は うつ伏せになって動かなくなった。

「びつ、びつ、びつ、びつくりしたああ！」

高鳴る胸の鼓動を抑える。

「いやあ、危なかったな。こっちの横道から来たみたいだったぜ。
なんせ、お前 怒ってズカズカ行っちまうんだもん。わかつてる？

ココが どれだけ危険なダンジョンか」

「わかつてるわよつ。セナは風で護ってくれたらいいでしょつ」
何て言い草だろうかと思しながら。

「んな事言つたつて。誰かさんは怒るじゃないか」

「うつ……。と、時と場合によるじゃない」
言い合いが続く。

すると、倒れていたはずのさっきの魚人がムクリと起きた。

しかし、私もセナも横の魚人には気がついていない。

構わず、言い合いは続いている。

「あのなあ。事故だつて言つたろ。忘れるよもつ」

「うるさあい！　こんの、女顔！」

と、私は言っではいけない禁句を。爆弾のスイッチを押してしまっ
たようだ。

セナは怒った。

「うるせー！　ブタのぱんつ！」

「な、なんですってえ！？　放つといてよ、女男！」

「ブタのぱんつ！　ブタのぱんつ！　ブタのぱんつ！　ブタのぱん
つ顔！　ブタぱん！」

私の血管がブチブチと音を立てた。

「な、な、な、何よオーーーーーッ！」

と、私は鋭いパンチを壁に向かって叩きつけたつもりだった。しか
し、ブニツと柔らかい感触が伝わった。

ドゴッ。

「へっ!？」

と、目をパチクリさせて見ると。壁に叩きつけられていたのは。

倒れていたはずの、魚人。

私の　たまたま突き出したパンチが彼の顔に見事ヒットし　その
まま　のびちゃった。

「ヒュー　やるう」

と……セナがパチパチと拍手していた。

……セナに教えられた大砲パンチが、こんな所で役に立つとは。

そんな2人のやりとりを、水晶玉で見ていた蛭達。

「……ふん。やるじゃない。これなら、ココまで来るわね」

と、面白くなさそうに呟き少し元気を失くす蛭。すると黙っていた

紫苑が口を開いた。

「蚩。あの救世主が している指輪…… あれを壊しなさい」

驚いて、紫苑の顔を見る。

「指輪ですって!？」

蚩は考えた。

(そう言えば、あの丘での一戦……。あのエネルギーは、手の方へ集まっていた気がするわ。だとしたら……あの指輪のせいってわけ!? 救世主の力だと思ってたけど……)

少し身震いした。

本当に恐ろしかった。思い出すたびに こうだった。

「一体 何なわけ、あの指輪」

「恐らくあれは……七神鏡の一部。憶測だが……きっと あれは風神のものだ。風神が救世主に与えたんだろう。彼の指のものと救世主のしている指輪が同じに見えるからな」

と、水晶玉を見て言った。

「七神鏡? そんな。あれは そう簡単に姿を変えられる代物じゃないってレイ様が。何でも、傷一つつけるだけで すごい痛みが走るって」

だがセナの指を見て。紫苑の言った事が確信に変わる蚩。

「まあいいわ。あれが七神鏡だとすると……そっか。救世主が している指輪……あれを壊せば、風神も痛みで のたうちまわるわ。指輪を失くした救世主も、ただの人間になる」

勝利の道が切り開かれた気分だった。

「聞いた? 紫。救世主の指輪を狙うのよ。そして壊しなさい!

苦しんでる風神にトドメをさして、救世主を殺すのよ!」

蚩は水晶玉を通して紫に呼びかけた。

一方……死んだと言われていた紫は。違う部屋に一人で立ちほだかっていた。最上階へ続く階段のある部屋の、一つ手前の部屋で。

「……」

彼は黙って、足音の大きくなる向こう側を見ていた。

やがてその通りに、2人の影が姿を現す……。

「やっぱり生きてやがった。……こいつを倒せてか。面白れー。2度目だな」

フンと笑った……セナが登場。

待ち構えていた紫を見て、鼻を鳴らす。「セナ……」と背後から心配する勇気を見て、

「隅に行ってる」

と促した。

「格闘戦と いこうぜ。なあ？ 幻遊師の人形め！」

思えば、紫とは2度目のバトル。前は圧倒的に紫の方が強かった。セナも、それはよくわかっている。

《第17話へ続く》

第16話（摩利支天の塔・壺）（後書き）

【あとがき】

こんな話を暴露してもいいものかわかりませんが、以前勇氣達が
買い物をした時にカットした文があります。

「勇氣は、下着を買った」……だって困るじゃないか実際。
……そんな裏話……。

ブログ第16話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-52.html>

ありがとうございました。

第17話（摩利支天の塔・武）

セナの攻撃が繰り返される。手を突き出し、回し、払い、槍の如く俊敏な刺し蹴りで紫を攻めていく。

紫の目の前でサツと突如セナが屈みこみ、相手の腹めがけて衝撃のかかったはずの拳をお見舞いした。

……が、難なく紫はセナの突き出した腕を軸として、ヒョイと体ごと回転しセナの頭上を跳び越して背後に回り込んだ。全く、お見事としか言いようがない。セナが軽く あしらわれている。

しかし。

奇妙な事に、無傷な紫はセナの息をも つかせぬほどの攻撃に対しては。いつさい反撃しなかった。セナの背後に回り込んでキレイに着地した後、セナが振り返ってくれるまで待つてくれている。

何でああ！？

「何だ！ 逃げるだけかよ！」

当然、セナも不思議に思う。挑発にも全然応じる気配は なかった。

表情も変わらなければ声も出す事のない紫。やはりバトル前にセナが鼻で笑った通り、人形のような。意思が。感情が、行動に感じられない……。

なおも続く蹴りや突きの連続攻撃のフルコースを、サツサツサツと風をきって避けるだけだった。

……どういっつもりなんだろ、紫って。何で攻撃しないわけえ！？

私は この、ガレキの山が壁際の至る所に ある部屋で。隅で、

2人の攻防戦を見ていた。部屋の角隅には私達が入ってきたのとは別の入り口が等身大サイズでポツカリ開いている。ドアも何もついてはいない。奥には上に続く石階段のような造りのものが見えている。

あそこに行くためには、立ちほだかっていた紫を倒せばいいんだろうけれど……。

私は視線を紫の方へ戻した。すると。

「？」

紫と目が一瞬だけカチツと合った……気がした。

気のせいだったんだろうか。

しばらくジーツとセナの攻撃をかわす紫を目で追っていたんだけど。どうも、紫が私の方をチラチラ気にしているようではない。何なんだあ!?

「紫！ 指輪よ！ 救世主の指輪！ 奪え！ 壊せ！ 壊すのよ！」

……

別室で。蛸は粗末な台に置かれた大きな水晶玉を前に、叫んでいた。

狙いは そう……救世主の勇気の指に一つだけ光る、セナにもらった指輪。

黒っぽく見えるが、光加減で薄紫色にも光り見える、元はセナの『七神鏡』だった指輪。

セナが勇気に くれた物である。月の見える晩だった。

鏡に ほんの ちよつとでも傷をつけたなら、セナは つけた傷以上の痛みを感じるはずだった。

鏡自体を指輪に変えた経緯は以前 謎だが、その一部を持った勇気の指輪を、紫は狙っていた……。

「指輪を破壊して、風神をとつと始末して。ただの人間以下になつた救世主を、殺す！」

息巻く蚩。漆黒だが、血走る目。
そんな興奮気味の蚩を、後ろで大椅子に座り黙って見ている男、
紫苑。

指輪を破壊せよと助言したのも彼だった。

「……………」
事の成り行きを見守る。

攻防が続く。セナと紫。状況は同じ。

セナが一方的に攻め続け、柔軟に鮮やかに、しなるように攻めを
かわすだけの紫。

だが、チラチラと何故か私の方を気にしていたせいか、少しずつ
セナは紫の間を見つけてきていた。

セナの足払いに引っかかり、前に転びそうになった紫の所へ。セ
ナが紫の背後から上半身をねじらせヒジ鉄攻撃。

「くたばれ！」

ヒジを振り下ろした！

ヒュンッ！

セナのヒジは、空をかく。

紫は すんでの所で前方へ手の平を地面につき、そのまま前へ体
を転回させた。

お見事 再びだわ。

さらに、紫は転回するついでといった感じで、大きく振り上げた
足でセナのアゴを……

ガッ！

と、下から直撃した。

舌は噛んでは いないセナ。しかしダメージは音より予想以上に大きく、セナは後ろに倒れた。

「セナ！」

私は叫ぶ。駆け寄りたい衝動に かられる。だがすぐ起き上がるうとしたセナは、「来るな！」と叫びビシリと私を声で威圧し制した。

「痛い……」

と、少し切れて口から血が出ていた。指で それをこすりながらフラフラと頭を片手で支えた。

「！」

そしてセナが見たものとは。

私に忍び寄る紫。

私と真っ直ぐに見つめ合った。

(セ、セナ……)

迫ってくる。スタスタと……普通に。私だけを見つめて。

やがて真正面、近距離で立ち止まった。

「勇気に近づくな！」

と、セナの声は遅し。紫は私の右手を掴み上げた……あの丘での対面を思い出す。

「ひっ！……」

声を上げる。歯を食いしばる。足首から、ガタガタと震えがのぼってきた。

セナが勝てない相手。到底、私には倒す事など できは しない。

「指輪を壊す。蛭様の命令だ」

少年めいた声質の紫の言葉……その質が内容には合っておらず、

私には怖くて たまらなかつた。

(何て冷たい手なの……うつん、冷たいと私が思い込んでいるだけ？ ……怖い、怖いよ……セナあ！)

しばらく見つめ合っただけだった。

しかし私は段々と、怖さとは違う感情が芽生え始めた。それは、紫の漆黒の闇色の瞳を覗き込んで生まれた思い。

(人形、……なの？)

言葉が頭をよぎった時。私は激しく彼に同情していった。

蛍の命令でしか動けない紫……。

彼は本当は、何を考え思っているのだろう。

「こ、これはセナがくれた大事なものよ！ 誰が あんたなんかに！」

おかげで私は虚勢を張る事が できた。震えが止まり、掴まれている手を振りほどこうと あがく。

しかし振りほどけない。掴んだ手の方が強かった。

「紫！ 相手は俺だ！」

と、セナが走り来て背後から殴りかかった！ ……

紫はフ…… ツと顔を音も なくセナに向け、私の手を掴んでいない方の片手で気合いのようなものを放った。

驚き、衝撃波で吹っ飛ぶセナ。 …… ドガッ！ ……

セナは部屋の隅まで飛ばされ壁に激しくぶつかってしまった。パラパラ……と、天井から その振動で、細かい砂が落ちてきた。

「セナあつ！」

私は泣きそうちに また叫ぶ。

「勇……」

と、セナの返事は途絶えた。どうやら、背中を壁に強く打ちつけて頭がクラクラしているらしい…… 立とうと壁に寄りながら頑張るが、足も おぼつかなく時々頭を振っては焦点を定めようとしているさまが見られる。

ガクツ、とヒザが崩れた。ろくに立てない。

そんな事に時間をかけている間に、紫は私の手を指輪ごと破壊もしくは潰そうと、手を上げ構えた。

「いやあー！」

泣きそうな声。

私は目を閉じて覚悟した。

するとその時。

ビュウウウウウッ……！

……！

……

……あたたかく……次に冷たい風が……入り混じった　ぬるい風が、『私』を包み込んだ。
『私』を……。

ウウウウウウ……

「……！」

紫が後ろに下がる。

私の周囲に発生した風。いきなり……だった。

(指輪……が……)

私には　わかる。これは私なんかの力じゃないって事。

セナのくれた指輪……あの時　蚩達と交えた一戦の時も。この指輪の……。

指輪の力だ。

セナが、私を遠くからでも守ってくれている。

ほんわりと温かいような風のバリアーに、私は包まれた。

紫が そのバリアーに触れようとすると、バキッ！ つと鈍いとも砕けたとも とれる音がした。

「！」

私はギョツとして目を見開く。何と、紫の腕の先が折れている！
「ひっ……………」

私から悲鳴が漏れた。思わず目をふさぐ。でもまた、恐る恐る紫の様子を窺うように目を開けて……………。

バキッ、バキバキバキッ……………メキッ……………

耳障りな音が連続した。残響音が いつまでも耳に ついていた。見ると、指の関節は全て曲がるはずのない方向へ曲がり……………腕は折れて玩具おもちゃみたいに滑稽こっけいだった。「……………！」

私は声が声にならぬ。

そんな片腕の状態だというのに。紫は なおも、この私を取り巻く風の壁を突破でもしようと攻めてくる。

パキッ……………

もう、やめて！

私は懇願した。頭をブンブン振って堪えた涙を飲み込んだ。

「やめてっ！ 来ないでっ！」

紫は私の言う事なんて聞かない。全く聞かない。

人形だから？

ビリッ……バキベキベ……キ。

紫の衣服が　みるみるうちにボロボロと。風に遊ばれていった。体が、触れる箇所箇所　全て壊され傷だらけになっていく。

まるでココで会ったゾンビに　なっていくみたいじゃないの！

「やめて……こっち来ないで！　あなたもうボロボロじゃない！」

私は何度でも叫んだ。例え言う事を聞いてくれなくても。構わないと言わんばかりに絶叫し続けた。

とにかく叫んだ。

コントロールが　きかない風の刃は止まらない。

「蛩様の命令、だ……」

紫の声のトーンは　さっきと同じ。

「指輪を奪う……そして壊す……」

奪う。壊す。

以上。ただ、そののみ。

せつかくの整った顔も、皮がめくれ木に材質の似たようなものが
下地に見え出している。

いやだ……もう……もう……。

セナ、たすけて……。

すると、ずっと風を受けていた紫の体が、やがてガクンと姿勢を崩した。

私も、紫本人もびっくりして下を見る。

何と、紫の足首後ろに。別の風の物質化した刃が刺さっていたのだった。

別の……。

飛んできた方向の数メートル先には、セナが やっと立ち上がってハアハアと。肩で息をついている。

「セナ！」

私は喜びとも悲しみとも言えない顔をした。

セナが風で小さな刃を作って、紫の足元に攻撃したんだ！

そのせいで体勢を崩した紫は……ガクリと倒れてしばらく動けなくなった。

「へっ……」

軽く、セナは笑った。ざまあみろ、と。

そして今度は私に向かって目を閉じ言った。

「やっぱ お前すげー変な奴。……魔法、使えねーくせに……」
変、て。

私は そんな事 言ってる場合かと言おうかと思っただが止めた。

途端、私のバリアーはシュルシュルと小さく、風は おさまって消えてしまった。

私はホッ……と安堵の ため息をつく。

「セナ！」

と今度は私、セナの元へと駆け出した。セナの そばまで行くと、

「待て」と私を払いのけた。

「トドメをさす」

私の方を見ず紫を見ていた。まだ体の何処かが痛むのか、猫背になって片手を自分の前に出す。

そして倒れて あまり動けない紫に魔法で、攻撃を開始しようとした時だった。

「やめてッ！ それ以上、傷つけないで！」

と声がしたと同時に、ズタボロの紫が倒れている前に両手を広げて

立ちほだかった。急にその場にフツと現れ姿を見せたのは、何とも悲しげな表情をした蛍……。

しかも意外や意外。黒い目からは涙を流していた。

「……蛍……」

私もセナも息を呑んだ。

世界で最も珍しいものを見ている気分だった。

「確かに、紫は人形よ。ご覧の通り。でも……でも……」

蛍は自分のスカートをクシャツと握りしめ俯いた。そしてカクツ、と。ヒザを落とし床についた。両手で顔を覆う。

「紫が壊れる所なんて見たくないッ……！」

……。

辺りがシンと静まり返る。蛍の声は部屋中に響いた。……

「蛍様……」

紫の、微かな声が聞こえた。

私の胸に熱いものがこみ上げてきていた。蛍は……この蛍に嘘偽りは、ない。

蛍は……レイの事も……本当に、本当は……。

私達の願いはレイとの和解。

蛍は……。

私達と……ひよっとしたら……。

……。

……私の考えなんて、おしるこみたいに甘ったるいかもしれない。でも。でもでも。

言ってみようと思った。

救世主として。

「一緒に……行こう、旅に……蛍」

少し笑顔が こぼれた。

「!？」

「勇気……」

当たり前前だけれど、蛍もセナも驚いた。私は紫と蛍と交互に見て、声が擦れないよう気を配って言葉を続けた。

「あの話……蛍が一人で川を歩いてきた時に言ってた話……レイとの、これまでの思い出の事……それは、本当なんですよ？」

「……」

蛍は「どういふつもり？」という顔をずっと し続けたまま私の方をジッと睨んでいた。

無理もないけれど。

私は続ける。

「本当はレイの事、大好きなんだよね？」

「なんつ……」

カアツ！ と。蛍は顔を赤らめた。眉をひそめて。

「私には、蛍の言っていた事が まるまる全部嘘だったとは信じられなかった。何となく、だったけどさ……でも、蛍が元のレイに戻ってって願うなら」

「……」

徐々に紐をといたように顔を緩ませていく蛍。

私の一言一言を落ちこぼす事なく拾ってくれているのか。

私は それが少し嬉しかった。

「私達と一緒に、行動を共にする事が できると思うんだ。レイの

説得。本当のレイを、取り戻すため」

「レイ様を裏切れって言うの？」

蛭が食ってかかる。私は気にしない。

「違うって。裏切る、っていうのはさ。気持ち180度変えちゃうって事で……気持ちが変わらなくなっただっていいじゃない。レイを好きならまんまでさ。ね？ そうじゃない？」

私は蛭に近づいた。

そして、片手を出して蛭を誘う。

手をとって、と言いたげに。

「一緒に行こう。ね？」

私はニコツと笑った。「……」

蛭は無言だ。迷っているのかもしれない。少し視線を落とし背後の負傷した紫をチラリと見て。無言のまま力なく黙っていた。

私は さらに『お願いビーム』でもかけちゃおか、と思った時。

遠くからバタバタ……と足音めいた音が近くなって聞こえてきた。

見ると階段の見た、先行く道の部屋の入り口から。

まずはマフィア、メノウちゃん、カイト……と、階段を下ってやって来た！

「マフィア達！ 無事だったのね！？」

と、私が びつくりして声を上げると、3人とも急いで こっちに駆けつけて来た。

「しばらく密室で私達3人も閉じ込められていたの。で、気がついたらドアの鍵が開いてて……それより、どうしたの？」

マフィアが蛭達を見て言った。

言われた蛭はペタリと床に座り込んで、そばの紫の めくれ上がった皮膚に優しく触れていた。紫と蛭は見つめ合い、言葉なく目だ

けで会話をしているかのように……お互いに触れ合った。

やがてキュツと下口唇を噛み、触っていた指を引っ込めた。蛭は紫から関心を離して、何処でもない下方の宙を見ていた。

怯えているの……？

どうしたらいいのかわからなくて……。

すると。天井からある『声』が降り注ぐ。

『蛭。行きなさい』

……え？ 誰？

私達は首を傾げた。聞いた事のない声の主だったからだ。

少し年のいった、貫禄があつて重みのある声だった。

「紫苑……」

蛭が『紫苑』と呼んだ。仲間？

天井を見上げ、蛭は弱った顔をする。

『レイ殿には上手く言っておこう。お前は まだ子供だ。救世主の言う通り、気持ちそのままで成長し いずれまた帰ってくるがい

い。お前には まだ、行動の是非が判断できない』

「……」

蛭は素直に聞いている。

それも そうだけれど、この紫苑と呼ばれた男の言う事に私は驚いていた。

え、いいんですか、紫苑さん。

敵を、味方に しちゃっても。

本当に？ 畏じゃない？

何か自分で誘つといてアレなんですけれどね。

『紫。蛭を頼んだぞ』

それを最後にプツリと……天からの声は途絶えた。

「……」

しばらく皆 静かにしていたんだけど。

やがて、紫が沈黙を破って言った。

「わかりました、紫苑様……命を懸けて」
倒れたまま、天井を見て　そう誓う紫の言葉。

「紫……」

蛭は涙目に　なりながら、少し口元が　ほころんでいた。

そして蛭はパタ……と、紫の胸元に頭を乗せるようにして、座ったまま倒れた。

「……」

無残な体になつた紫の上で眠る蛭……の左右束ねた片方の髪の毛を、絹を扱つるように滑らせながら撫でた紫。……」

錯覚かもしれないけれど、口元が微笑んでいた気がした。

「……よっぽど、緊張の糸が張り詰めてたんだろつなあ……」
セナが光景を見て自分の髪をかき上げる。

こんな　ちつぽけな体で私達に挑戦してきた蛭。思えば、塔に来る前は一人で来たんだつた。それは　さすがに不安で仕方なかっただろつな。

私も子供だけけれど……だからかな、蛭の頑張ろつという姿勢には、とつても共感しちゃうんだ。私も　やらなきゃ、つていう気に　させられる。

何を？……救世主って名前の、お仕事。

レイの説得だ。……全然アテも自信も　ないけれど。

改めて、やろつという気になつたよ。

寄り添い眠る2人の姿を見つめて。

蛭はスヤスヤと安心しきつた顔で本物の子供らしく……眠っていた。

《第18話へ続く》

第17話（摩利支天の塔・弐）（後書き）

【あとがき】

「おしるこみたいに甘ったるい」発言の後に申し訳ないんですが次話は、しよっぱなからメツタ斬りです（ワー）。
……斬ります。

ブログ第17話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-53.html>

ありがとうございました。

第18話（虐殺の街）（前書き）

シリアスあり、コメディー要素ありとなっていますが作品中、今後の経過により残酷な描写があるかもしれません。今回いきなり最初からあります（ぐはっ）。

同意した上で お読みください。

第18話（虐殺の街）

「ふ……… ついに見つけたぞ」

不敵な笑みを浮かべ男は、その手に持つ刀の先をまだ幼き少女へと向ける。血の滴り落ちる、その刀を。

少女は悲鳴を上げる。頭を抱え、そして、後ずさる。

しかし後ろに転がっていた血だらけの黒い塊に つまずき、その場で転んでしまう。死んでいるのは一人だけではない……数十数百という死体が、そこら辺に転がっている。

空中には黒い鳥が羽を飛ばし散らしながら舞っている。そして、腐った血肉を貪^{むさ}ぼり、腹を満たすと あの真^まつ赤な血のような夕焼けに向かつて真^まつ直ぐに去って行くのだ。

少女の目には、目の前の男の不気味な顔色だけしか見えなかった。

本当は、ついさっき この男にブスリと斬られたはずだった。なのに気がつくと、斬られたはずの胸の傷は きれいさっぱり なくなり、服にベツトリとついた血の量から見ても、おかしいという事に気が ついた。

絶対に自分は死んだはずだった。なのに、生きている……？

そう思って黙って自分の両の手の平を交互に見ながら首を傾げていると、さつき自分を斬った男が前へと立ちふさがった。

そして「見つけた」と言い出したのだ。

整った顔立ち、怖いくらいに光る瞳、青い髪と、肩には少し不似合いの赤いマフラー。銀縁のメガネの両端から耳のピアスへと繋がっている、銀の鎖。青く全身を包み込むようなロングコート。

そして手には、少し古めかしい刀。ボロボロの紙か包帯かが、柄に巻かれている。刃に付着している血は全て、この街の人々のものである。

「や……やめて。来ないで……」
と、震える声で訴えた。

その男は急に少女の胸ぐらを掴み、グイと体を軽々と上へ持ち上げる。

「これが……これが四神鏡か……」

目を煌々キラキラと光らせた……かに見えた。少女は最初、掴まれた男の手を引つ掻きむしり足を空でバタつかせ、抵抗を試みたが。微動だにできないとわかると……途端に手も足もブランと垂らし。涙さえも重力に逆らえず落ちていった。

なすがままの状態。少女は幼いながらも、自分の死を覚悟した。
自分も あの、黒い塊になるのだ……と。

……

男は、胸ぐらを掴んでいない方の手で少女の体内に手を えぐり入れた……ズブ、もしくはズボツ、という音と共に。気持ちの悪い音が断続的に響く。少女は手を入れられた瞬間、絶命した。

男は体の中をさぐり、やがて ソレ を取り出す。
抜け殻となった少女の肉体は、ポイと捨てられた。

ソレ、とは……。

白い、卵のようなもの。大きさはテニスの軟球ほど。

男が力をこめて握ると、その卵のような丸い物体はグチャリと割れた。中には、小さなガラス……いや、鏡のカケラが入っていた。それだけをかざしてみても、ただの鏡のカケラ。

「ふん……」

と、男はチラリと地に捨てられて転がった少女の姿を見る。

「入れ物は用なしだ……ふふ……ふふふふ……八八八八八八！」
思い切り笑い飛ばした。

……その一部始終を見ていた若者の男が居た。元々体が丈夫なのが幸いし、さつき男に斬られてもそれが致命傷にならずに済んだようだ。

とはいっても倒れており、立てない状態だったのだが。
狂ったように笑う男の姿を見て、小さく呻うめいた。

「畜生……！」

と……。

そして、高らかに笑う男の元へ一人の女性が突然 何も ない所から現れた。

「レイ様。救世主達が今、こちらに向かっていますわ」と報告し、レイの表情を窺うかがう。

「遅かったようだな。……なんてな。まあいい。四神鏡が一枚、見つかった。今日の俺は すこぶる気分が いい」

手に持っていた鏡のカケラを、女性に渡す。

それを受け取ると、呪符のような……経文の書かれた紙で巻かれた箱の中へコトリと入れた。

「この中に入れておけば、錆びる事なく保存できますわね。私わたくしの術を使わずとも」

「ああ。その経は『魔道経』……特別なんだからな」

「ふふ。手間が かからず次へいけますわね。いい物を手に入れましたわ……それはそうとレイ様。如何いたします？ この後は。この街の人どもは皆、お斬りになったようですけど。先ほど申しました通り、救世主が こちらに向かっていますけれど？」

レイは冷ややかに言う。

「ふ。救世主か……来ればいい。もはや俺には、小ねずみどもの相手をしているヒマはない」

「名ばかりの救世主ですものね。放っておいたらいいですわ」

「なあに。まだ利用価値は あるさ」

会話をしながら、彼らは去っていった。

空には黒鳥がまだ、うるさく楽しそうに踊っていた。

……

摩利支天の塔をあとにし、私達は予定通りに進んだ。

え？ ……どうやって塔の最上階から出たんだって？

そりゃあ、ちゃんと来た道を辿って出会った魔物とバトルしながら脱出した……

……はず、ない。

実は、セナがこの塔に入って来た時に言っていた方法で、塔から外へ出たんだ。

つまり、最上階の壁をセナの風の技でぶち壊し。その穴からマフィアの“草鞋”でエレベーターに乗ったみたいに降下し脱出したのだった。

とんでもない事に、私達が脱出して数十歩進んだ後。ガラガラとすさまじい音を立てて塔が崩れた。

見る影も ない。

塔を目印に森を進んでいたけれど。その目印は もはや なくなってしまった。

「ははは。面白い面白い」

と、カイトは楽しそうに笑っていたけれど……塔の中に居た魔物達は、悲惨だよなあ。

ま、いつか。

とりあえず私達は正しいルートで、タミダナの街へと向かう。

ああそうだ……あの、森で迷った理由。ほら、私が勇み足で進んでいたけれど結局迷っちゃったーっていうやつ。実はアレ、蛍の罠。というより、蛍の奴ったら。紫苑に協力してもらって……んで、私達を森の中へ引き止めて自分はレイを裏切って逃げてきた風に偽って。そして私達の気が緩んだ隙に、一気にバツサリと やろうとしたみたい。寝込みを狙っていたんだって。

でも私とセナが少し離れた所へ行っちゃって。二手に分かれてしまったでしょ。で、急きよ作戦変更。マフィア達を紫苑の協力のもと、さらっちゃったんだってさ。

マフィア達は自分達が さらわれたって事、全然 気がつかなかったらしい。普通にスヤスヤと眠っていて、目が覚めたら知らない場所に居た、と。

で、部屋の たった一つのドアは開かないし。ココは何処かもわからない。しばらくジツとしていて話し合っていたんだけど、とりあえず あのドアをぶち破ろう、という事になった。

しかし いざさうしようとした時。いつの間にか鍵が外されている事に気が ついた。で、ドアを開けて、私達と鉢合わせした……と。そういう事らしい。

その鍵を外したのは、紫苑。

声しか聞かなかったけれど、少し年いった おじさんの落ち着き払った声だった。

四師衆の一人らしいけれど……なーんか、それらしくないわよね。やっぱさ、鶺鴒ひたきとか さくらとか蛍とか。3人とも、意地悪っぽい性格だったからだろうけれど。

「紫苑は私に技を教えてくれて、紫を作る手伝いをしてくれたのよ」と、蛭が言った。

実は、蛭達と一緒に旅をする事になってしまったのだった。

一応、説得じみた事を言った結果だった。なんっつか変な感じだけれど。段々とそれは慣れてきた。

体がボロボロだった紫は、何とか蛭の術やカイトの人形師としての技術で修復され、まだ包帯を巻かれていたりするけれど。時間が経てば治る（直る？）もんらしい。人間のような肉や骨で体が出来ているわけでは ないとか。よくわからないけれど。

「私達 四師衆を造ったのはレイ様。さくら、紫苑、鶉、私っていう順で。ところが私は ちよつと失敗作。子供になっちゃった。技も最初ろくに使えなかつたわ。でもレイ様と紫苑のおかげで、だいぶ技が使えるようになった……そして、紫を造ったの。紫、っていう名前は紫苑から とったの。ま、紫っていう白い花もあるしね。そういうえば知ってた？ さくらは春の木、私 蛭は夏の虫。紫苑は秋の花、鶉は冬の鳥。ちゃんと意味があるのよ」

と……ペラペラと話す蛭。何だかもうフレンドリーだ。かつての敵も変わったもんね。

「また、畏なんじゃねえの？ 俺達を油断させといて……っっていう」と、セナが ふいに口を挟むと、フンと蛭は鼻を鳴らした。

「冗談。もう何の力も ないわよ、私は。疑ってらっしゃるんなら、どーぞ。始末しなさいよ」

そんな2人を見て、まあまあと止めに入る私。

セナと蛭って すっごくごく相性悪いんだな！。先が思いやられるわ、全く。

そんな こんなで。

私達は その後スピーディーに予定通りの行程で進んだ。まずタミダナの街へ行き、情報収集。しかし収穫ナシ。それから西の方のシウル村へ行って南東のアサバ村へ行くが、ココでも収穫ゼロ。

「妙な力を持っている人 知りませんか？」って聞きまわったけれど、全つ然ダメ。まるで雲を掴む感覚だ。

「これでコンサイド大陸は一通り行ったよな。次の大陸へ行くかあ」というセナの意見のもと、私達は またグルツと一回りしてトルベイ港へと行き、そこから船へと乗り込んだ。

この時すでに、私の足は限界。相当お疲れだった。

メノウちゃんですらピンピンしているっていうのに、私だけすつごいだるく。筋肉痛が「休んでくれ」と懇願していた。

「大丈夫？ 疲れたでしょ。次のマイ大陸まで丸2日だし、ゆっくり休みなよ」

「うん……そだね。でも、大丈夫よ」

と、私はガッツポーズ。マフィアの言葉は嬉しかったけれどさ。ココで氣イ抜いちゃダメだよな。これから また色んな事あるんだろうしさ。

しっかし、私以外の皆って。本当に鍛えてあるというか、体力があるというか。元気だ。私の居た世界……日本人ってやっぱり運動しなくなってしまったのかなあ……いや待てよ、私だけかも。そうよね、私、体育以外は全然動かないし……うう、自業自得ってやつ？

船の外に出て甲板通路で一人。手すりに もたれて風に当たりながら、去り行く水面を見ていた。

この船に乗り込んで まだ3時間足らず。朝焼けがキレイだった。でも……はつきり言って、ヒマなのよね……。同じ船に乗っている人って、ほんの何人しか居ないんだもの。しかも居る人に限って絶対に話が合わなさそうな人達ばかりだ。白いヒゲの年の いったおじいさんとか、頑がんとした おばさんとか。

年の近い人って居ない……。

よくよく考えてみると。セナは17歳。マフィアやカイトはも

う少し上くらいかな。で、蛍やメノウちゃんは10歳くらいでしょ。紫は……セナより少し若いくらい。

同じ10代だけどこさ……何か皆、年齢が かたまってるない？
唯一年が近いかなって言う紫とは、絶対に気が合いそうにない……。

うつうつ、寂しいなあ。

寂しい？ ううん、全然。

気が合う合わないって、年なんかじゃ決まれないよねっ。

と、自分に言い聞かせて。私は皆が くつろいでいる、船室へと戻った。

船の通路奥から2番目にある船室……中へ入ると、セナとマフィアとカイトが居た。セナは部屋の奥に あぐらをかいて地べたに座り、マフィアは角隅の丸イスに座り。カイトは円形の窓から外の海の景色を見ていた。

静かで、ちょっと重い空気。

私があると、3人も こつちを見た。

戸惑ったけれど、とにかくドアは閉めて。マフィアの横にあるもう一つのイスに座った。

「皆、何してんの？」

と、私が聞くとセナが まず答えた。

「俺は魔法考案中。たまにイメトレ」

と、素っ気なく。

イメトレとはイメージトレーニングの事だ、もちろん。

「俺も海 見て考えてる」

「私も、頭の中で想像トレーニングしてるの」
と、後から残りの2人も答えてくれた。

なるほど……だから、こんなに黙りこくって静かなのね。

でも、何か嫌よね。こんな空気……息が詰まるっていうか。

私はマファイアの横顔を見て、ピンと何かが閃いた。

「そういえばさ。マファイア、前にチラツと言ってたなあ」

「何？ 何の事？」

私の突然の言葉にマファイアが不思議がる。

「ホラ。セナを追っかけて、『時の門番』に行く途中。“草鞋”で海の上を渡れないか……って私が言っただけさ。マファイア、『他の七神の力と併用させれば出来るかも』って……言っただけじゃない？ あれ、今、考えられないかな？」

するとマファイアは「うーん……」と考え込んだ。

「例えば、どんな？」

と、聞いてきたのはカイト。

「えー！？ えつと……うん、ホラ。さっき言ったようにさ。マファイアの“草鞋”って森の精霊が居る所でしか使えないんでしょう？」

この技バージョンアップさせてさ……そうだな。マファイアが作り出した“草鞋”をカイトの水神の力で水面海面をスイスイとか！ ……あとそうだなあ、セナの“鎌鼬”かまいたちにマファイアの木神の力を加えて……そう、名づけて！ “木の葉の舞い”！」

と、握りしめた両手をブルブルと振りかざし興奮気味に力んだ私だった。はっ！ ……と我に返ると、皆キョートンと……私を見ていた。

うげっ。

私はそのポーズのまま、硬直した。

汗もタラタラ。

やっぱりマズツタ……か……な……？

そうよねそうよね技の併用なんてそう簡単に出来るような代物じゃないしわああどうしようどうしよう言っくんじゃなかった言っくんじゃなかったワオーン、っと。

そんな風に一気に思いながら私の顔が お猿のおケツ並みに真っ赤になるのを見てから、セナがプツと噴き出した。

あら？ らららら？

すると今度は他の2人も。クスクスと笑い出した。

頭を掻きながら汗を手で拭く。ずっと私は しばらく笑われていた。

ひとしきり笑い終えたセナが言う。

「……変な奴」

があん！

「……でも、なかなか素晴らしい発想だ」とパンパンパン……と拍手するカイト。

「木の葉の舞い」……ね。なかなか いいじゃない」

ウンウン、と頷くマフィア。

おや？ 何だかいい雰囲気。やったね！

「んじゃ、やってみるか。お前の言う、“水面海面スイスイ”と“木の葉の舞い”ってやつ。……って言っても、両方ココじゃ出来ねえか」

セナが言うと、マフィアが立ち上がった。

「アラ大丈夫よ。難しいのは両神の力のバランスでしょ。何もいきなり実践じゃなくても できるわよ。ちょっと待ってて。考えたから」

とマフィアは部屋から出て行った。

残された私達。するとセナが話し出した。

「なあカイト。俺の風で お前の水を凍らせてさ、攻撃できないか？」

「凍らす！？ へえっ……いいね、それ。面白いよ。やってみようか」

という2人の会話に入り込む私。

「ねえっ、名づけてナニ!? その技っ!」

内心ワクワクしながら聞くが、2人とも考え込んだまま黙ってしまっただ。

「どうやら一番の難問は『名前』みたいね……。」

「ようし、私も考えようっ。」

マフィアがトタトタと通路を軽く駆けて部屋に戻って来た。手には水の入ったガラスコップと、小さな紙の束を持っていた。

「どうしたの? コレ……。」

「ちよつと借りてきたのよ。さ、やってみましょうか。カイト」

と、マフィアは部屋の中央の床に そのコップを置いた。

「何するつもりなんだ?」

カイトが首を傾げてマフィアとコップを交互に見る。

「さつきも言ったように、難しいのは両神のバランス。力の加減よ」
マフィアは紙の束から一枚を取り、コップの水面に対して平行に持った。

「私が手を離れた時、この紙を水面ストレスで浮かべるのよ。私とカイト両方の力で」

「なるほど……確かにバランスよくしないと紙は水に落ちてしまう。あるいは、見当違いの方向に飛んでいくか。簡単そうに見えて意外と力 使いそうだな」

と、2人は熱心に この『紙を浮かばせよう』訓練を開始した。

やはり、最初は全然 上手く出来なかった。紙がペラペラと震えたり、水に落ちたり。よほどの神経を使うのだろう。2人とも、何回も何回も やり直した。

私とセナは、黙って それを見ていた。

「あの紙が木の葉の代わりなのかな?」

「ああ。紙は一応木から出来てるしな。あれぐらいが できないと、実践なんて とんでもないと思うぜ。まだ基本っつー事だ」

という私達の会話なんて、全然耳に入っていない。すごい集中力だ

った。

しばらく2人を見ていると、何やら表の方が騒がしくなった。人がバタバタと……足音をけたたましく立てて部屋の前を通って行く様子が何回も。

「? 何か あったのかな?」

「行ってみるか」

と、私とセナは真剣にコップを見つめている2人を置いて、甲板へと出てみる事にした。

船尾へ出る。

見ると、大ダルの中に子供が一人 入っていて、それを取り囲むように船員が何やらワアワアと話し合っていた。

「何か…… あったんですか?」

と……私が その場に近寄ってみると、いつせいに船員 皆の視線が私に集まった。注目を浴びて私は一歩 引きかけたけれど、船員の一人が声をかけてくれたおかげで私は気に しなくなった。

「こいつ、無断で船に乗り込んだんですよ」

はあヤレヤレという顔をして。その船員は親指だけを立ててタルに入っている子供を指さした。

無断で!?

この子が!?

と……子供の顔を見る。

髪は肩で切り揃えられ、真っ黒。眉もキリツとしていて太め。男の子みたいな格好しているけれど。男の子かな? 年は10か、ちよっと下ぐらい。

「全く…… ふてえガキだ。荷物の中に紛れ込みやがって。港の奴らもお前らも、しっかりチェックしねえか!」

と、船員の中で一番しっかり していそいで太っている男が、他の

船員達に声を張り上げ叱りつけた。

……シユンとなる一同……。

「罰として、お前ら この後ずっと甲板の掃除！ 休憩も無しだ！
働け！」

と言つと、船員達は「げー……」という顔をする。

「頭かしら。こいつ、どうすんでスカ？」

出っ歯で細身の船員が聞いた。

「う、うむ。子供といえど、無断で船に乗り込んだんだ。そうだな

……よし、おいガキ。名は？」

と、太くたくましい両腕を組み、鼻息 荒く子供に聞いた。

「リカル」

とだけ子供は答えた。ムスツとしている。

「よし、リカル。お前は港に着くまでの間、船でタダ働きしてもら
う。まずは こいつらと一緒に甲板の掃除。それから厨房へ行つて
皿洗いだ！ しっかりやれよ！」

と、タルから頭だけを出していたリカルという子の頭の髪をガシガ
シと かき混ぜた。

頭と呼ばれた男が手をどけると、リカルは髪を乱したままフン、
と そつぽを向いた。船員の一人が癪かんに障ったのか、食つてかかる。
「お前つ、自分が どういう立場か わかつてんのかよ！？ 本当
なら こんなタルごと海に放りこむ所なんだぜ！？ なのに頭が寛
大に許してやつてんだ！ 礼ぐらい言えよ！」

勢いよく唾を飛ばしながら今にも飛びかかりそうな男を、別の船
員が取り押さえた。

リカルは なおも不服そうなまま、プイとしていた。

「……やればいいんだろ。わかつたよ。やるよ。それでいいんだろ
？」

と言つと、船員達の表情は ますます曇った。

「何だよ その態度はアアアッ！」

さっきの男が取り押さえられたままで、さらに興奮して暴れ出

していた。

「場は騒然だ。何だか とんでもない事になっちゃってるみたいね
！」。

一瞬、リカルと私の目が合ったけれど。すぐに無視されてしまっ
た。

リカルは忙しくバタバタと落ち着きの ない船員達に交じって、
ポツンと隅っこで。甲板の床を本人の身長よりも長めの柄のモップ
で拭いていた。時々船員が声をかけると、ただただ頷いて返事をし
ているようだ。

しばらく その様子を見ていた私だけれど。セナは とつと船
室へと戻ってマフィア達と魔法の修業だ。ヒマだった私は、そばに
立てかけてあった一つのモップを手に取り、リカルに近づいた。

「手伝わせて。どうせヒマだから」

と話しかけるが、リカルは私の方をチラッと見ただけで。また無言
で床を拭き始めた。

構わず、リカルの隣で床をモップで拭き始めてみた。そんな様子
を見たリカルが、しかめっ面で言った。

「俺、あんたみたいな偽善者 大っ嫌いだ。鬱陶うっとうしいから、やめろ
よ」

私の方を邪険に。最初、キョトンとして「偽善者ですって？」と
繰り返した。

「俺はこの船に無断潜入した。その罰を受けた。俺が今やっている
事は、当たり前前の事だ。何もあんたが手伝わなくなっただっていい。こ
れは俺の罰だ。邪魔だから、あっち行ってろ」

目を伏せて私から顔を背けた。私に背を向けて、掃除を黙々とす
るリカル。私はモップ片手に まだ突っ立ったままだった。

そっかー……。言われてみれば、そうよね。何も私が手伝う事は

ない……。無断で船に乗った罰を受けているんだもの。私がかれと思っただけの事は、ただの同情とかになっちゃうんだ。

「……ごめん」

謝ると、リカルは「もういい」とだけ、言い返してくれた。

「でもさ。何で無断潜入したの？」

と私が聞くと、

「金が無かったからに決まってるんだろ」

と返ってきた。

「そっか。なるほど。じゃあさ この船で、何処へ行くつもりだったの？」

「この船はマイ大陸アカナ港行きだろ」

「そうじゃなくて。そこの何処へ行って何をするつもりだったのって事よ」

するとリカルは手を止めて、しばらく黙った後。

「……妹に会いに行くんだ」

と呟いた。

急に素直になつたもんだから、少しだけ驚いてしまう。「妹！？」と聞き返すと、リカルは続けた。

「俺の双子の妹で、ミクって名前。半年前、両親が別居しちまって俺らは離れ離れになつた。キースの街にミクと母さんが住んでる。まあ、隣の家知り合いの兄ちゃんが住んでいるから大丈夫だろうけど……ミクの奴、俺が居なきゃ何にもできやしないんだ。だから心配で、様子を見てくるんだ」

と……一気に話し終えると、また手を動かし始める。

「……およ？」

少し、顔が赤くなっているのは、気のせいか……？

もしかして……この子。実はすっごい照れ屋なんじゃあないの？

妹思い……なんだろうけれど。

『俺が居なきゃ何にも できやしないんだ』って……実は、自分の事だったりしない？ だから船に黙って乗り込んだんじゃないのかな？

と……そこまで考えると、何だかりカルが すっごく可愛らしく見えてきた。

「俺はりカル。あんたは？」

「え？ あ、勇氣よ」

「フン、変な名前」

がんつ。

……口悪いんだから……。

「勇氣。言つとくけど」

「……………何？」

「俺、女だから。こんな格好で こんな言葉遣いだから、よく間違われるんだけど」

「ふうん……両神の力の併用、ねえ……。本当に できたらいいわね」

と、いつも通りに皮肉っぽく笑う蛭。後ろに紫、横隣にメノウちゃん。3人とも、遊戯室で遊んで来たそう。遊ぶ……って言っても、カードゲームくらいなものだけ。そこで淋しそうにしているお年寄りの人とかが数人居て、相手していてあげたい。

ココは さっきの船室。メンバーが全員揃った。

でも、相変わらずマフィアとカイトは『紙を浮かばせよう』の修行中。2人とも超真剣だから、近寄り難い。

「えっと。救世主……じゃなくて」

「え？ 私？ 勇氣よ」

「勇氣」

と、蛭が言い直して問いかけた。

「ずっと前から聞きたかったんだけど」

「何？」

「あなたには、魔力とかは ないわけ？」

……。

突然 言われ、私は「は？」という顔で蛍を見た。

「ないけど……？ 普通の人間。……でも」

サツと、右手の中指に はめている指輪を見た。

「セナが くれた この指輪……時々、私を守ってくれているの。

不思議な力で……」

そう。

私自身には、何の力も ない。

だけれど この指輪は。いつも私を護ってくれている。落雷や、紫の攻撃から。辛い時は、コレを見たら元気が出た。

不思議な…… 大事な指輪だ……。薄紫色で光沢が ある。

「……気持ちワル」

蛍がケツ、と うんざりした顔で悪態をついた。

何よ それ……どういう意味イ？

「じゃあ……あの、丘一つ消すほどの力は、本当に それのせいなわけね？」

「え……う、うん」

「そうか……七神鏡も四神鏡も、同じ鏡のくせに すごいパワー」
「……」

蛍の言いたい事が今一つわからないけれど……でも、共感できる。それは。

この世界には、色んな鏡が ある。七神鏡、四神鏡 『時の門番』でも、鏡張りの部屋だったし。

そういえばさ。私、こつちに来る前に鏡を割っちゃったっけなあ。でもあれ、確かに埋めたはずなのにヒョッコリって感じでポツンと置いてあったわよね。その時は きつと調査員か誰かが置いておい

たんだらうと勝手に思ったんだけれど。

でも、何か おかしいわよね。普通、年代物の物なんて そこら
辺に置いておくのかしら。

……。

……何か まるで、私が鏡に引き寄せられたみたいじゃないの。
それって、怖っ。

意味ありげー！

……でも、ちょっとワクワク。

って、ダメダメ。この前、目の泉の白虎の救世主だった氷上って
人に言われたじゃないの。ゲーム感覚でいちゃ困るって！

第一、私は絶対 心の中に余裕があるんだ。だから、目の前で
人が死んでいてもきつと ああこれは夢だテレビだ現実じゃないっ
て思っちゃうんだ。……頭で わかっている、どうにもならない。
(大丈夫よね……うん)

もし またレイの犠牲者が出たら……そんな事、考えないでおこ
う。きつと私は私じゃなくなって、自分を責め続けてしまうから。

しばらくジツとしていたけれど。私は再び外の甲板へ出た。する
と、蛍や紫も ついてきた。

「あーあ。タイクツ」

と、大あくびする蛍。

「あ」

通路に行く私の前に、リカルが やって来た。「勇気。見せてや
るよ」

リカルは胸元から一枚の写真を取り出した。

「何この紙きれ？ 人が写っているけど」

と、蛍も覗きこんだ。

「シャシンっていうんだ。高かったけど、頼み込んで撮ってもらっ
た。こいつ、俺の双子の妹のミク！ 俺と全然 似ていないのが特

「徴！」

リカルが指さす写真の中には。白黒で見えにくいけれど……中央にポツンと一人、正面を向いて微笑んでいる少女の姿があった。リカルと似ていないって言うけれど、そうかな？ 結構 似てると思うんだけど。リカルをもう少し女の子っぽくしたような、そんな感じ。

「可愛いね。この子がミク？」

「おう。俺の大事なモンだ。今まで肌身 離さず持ってたんだぜ」とリカルは嬉しそうに また写真を胸の奥ポケットに しまい込んだ。

「いよいよミクに会えるんだよなあ……あいつ、俺 見たらびっくりして、泣いちゃうかもな」

なんて言って笑っている。さっきまでのブアイソさは何処へやら。よっぽど、ミクって子が大好きなんだね！ ま、双子の妹だって言うんだしね。

夕焼けが眩しい。赤い、地平のもの全て燃やし尽くすような炎の色。

大陸へ着くのは明後日の朝、早朝予定。しばしの休息だった。

でも、私の胸の中で。何だか嫌な予感が していた。

何だろう。何だか……もう二度と、セナや皆と会えないような……変な感じ。

嫌な予感は消えないまま、私達はマイ島の北西、アカナ港に近づいていった。

もう陸が すぐそこで、到着 間近に迫った頃合い。私や お客は皆、首を傾げて しばらく様子を窺^{うかが}っていた。

「……なーんか、妙に静かじゃないかえ？」

と、船首の場で お客の一人が呟いたのを聞く。

私達が不思議がっていると、もっと おかしな事に気がつく。

見えてきた港には、人が人っ子一人として見えないのだ。野犬のような動物が一匹、居たのが見えたが……。

どんよりとした雲が空の中を流れてくる。

「ルビーカラスだ……」

冷たさを持った風が、私達を叩いて駆け去っていった。

「セナ？ どうしたの。ルビー……からす？」

セナは突っ立って手すり側で、遠くから私達を出迎えているはずの陸の上空あたりを眺めていた。まだ少し離れているが、黒いポツポツとした点が陸の上空を飛んでまわっているように見える。

「あつちは……街の方向だ。キースの街の」

セナの顔が見えないが、声に重みが あった。私も陸を見つめて目を凝らす。

「ルビーカラスは、肉食の鳥だ。目がルビーのように輝いているから、そう呼ばれる……よく死体の周りに集まって……くるんだけど……」

胸騒ぎ。言葉が、頭の中をよぎる。

そんな まさか。

まさか、そんな。

「……やべえな」

最後に、カイトが来て そう言った。

船は、港に着く。

着いただけ。船員が何人か私達の所に やって来て、「そのままココで待機して下さい！」と大声で怒鳴った。

危機迫る。ピリピリした空気が伝わってきた。

バタバタバタと、船中を人が駆けずりまわる。走っているのは船員だけだ。お客は黙って見守るか、オロオロするばかり。

どうしていいか わからず、待つしか なかった。

「勇気。行く」

言ったのはマフィア。ハツとして見ると、セナもカイトも私を見ていた。私の出方を窺っているようだった。「そ、そうだね。私達は、行かなくちゃ」

慌てるような言い方に なってしまったけれど。言った通りだ。

私達は特別。救世主ご一行様なんだから！

「蚩達はココに居て。私とセナとマフィアとカイトだけ、行こう」と私が言うと、皆 頷いて動き出した。

私の中には、不安の渦がグルグルと渦巻いて。それは一向に治まる気配は なかった。

キースの街。マイ島最大の街と言われる。最大という事は、それだけ そこに住む人が多いという事。

目の前の状況が、信じられなかった。

人がハンパじゃないほど倒れている。大人？ 子供？ 老人？

判別が困難だ。石や木造りの家屋は無残に壊され、門も木々も柱も破壊され……ガレキと化した物体に もたれかかったり すがったりにしている人型の……人だ。

あれらは人だ。皆 人間だ。

所どころ煙が上がっている。灰が空中を飛びまわっている。肉の焦げた臭いがする。温度が、気温が、熱いのか冷たいのか痛いのかぬるいのか。

視界が赤い。いつから視界は赤とを感じるようになったの。人が、赤と黒と。色彩が水の流るるように……あれが血だと、気がついても知らないふりをするしかないほど。

私は混乱した。

目が光景に釘付けになる。
訳が、わからなくなる。

「ぐっ……」

吐きそうになって、口を押さえて必死に我慢をした。
転がっている死体の幾つかに、これが そうなのカルビーカラス
…… 全身を黒に包まれた鳥が、それぞれ楽しそうに群がっている。
まるで獲物を見つけたと、喜んでいるかのように。

死体の肉を啄ばみ、貪り、私達をチラツと睨んで飛び去っていく。
空高く羽を伸ばし転回したかと思うと、近くの木の子に とまり体
を休ませているようだ。

誰が こんな事を。

…… 知っている。私は知っている。

見たくもない死体の傷は皆、鋭利なもので斬られた痕だ。

一人しか、思い浮かばない……。

「レイ……！」

嗚咽のように漏れた。

ライホーン村の次だ。ココだ。ココを襲ったんだ。あの、邪尾刀
とかいう刀で。

私に激しく後悔という念が押し寄せる。何でレイの説得を後回し
にしたのか。

遅れれば遅れるほど、死体の山は増えるだけじゃないのか？

私は……。

「勇気……大丈夫？」

私の体をマフィアが揺すった。私は呆然としたままで。

「俺、だめ。ちょっとゴメンよ」

カイトが　そう言って、光景から背を向け私の横を通り抜けて行った。

彼は　こんな場面　自体が初めてだろうから、仕方は　ない。私は……

2度目だ。

「私は大丈夫よ。それより、早く何とかしなきゃ！」

私は　やっと声をハッキリ出して、セナやマフィアを安心させた。すでに街では、立てる人が救助活動を行っているさまが見られる。船員なんかも駆けつけて、大声で指示したり人が集まってガレキをどけようとして格闘していた。

セナやマフィアが、そんな人達に手を貸しに走って行く。

私も、一番近くに倒れている人を見つけて駆け出して行った。

家屋が壊され石や木板などでメチャメチャに　なっているのを下敷きに、仰向けで寝ているような格好で胸元をスッパリ斬られ、ドクドクと血が流れ倒れていた男の人。頭に白いハチマキを。体格よさげだったが斬られた傷からの血の量からしても重傷だと　わかる。

「大丈夫ですか！」

私が寄って聞いた。すると彼は　そんな私より、私の背後を指さす。持ち上げるのも　やっとという腕で。

「そこに倒れている女の子……生きている……か？」

そう聞こえた。

私は指をさされた方へ行って、大の字　片足だけを折り曲げて倒れていた女の子に近づき呼吸を確かめたが……息は　なく、心臓も……というより、胸をえぐったような痕がある。

私は首を振った。

男の人の所へ戻って伝えると「そうか……」と言った。

「手当てします……立てますか？」

と言った時だった。背後で、大きな声が響いた。

「ミク！」

え……？

私は振り返った。

リカル。

船で知り合った、男の子のような、女の子。双子の妹に会いに…

…。

双子の……

ミク？

「そんな。そんな まさか あの子が」私は見入った。さっき私が死亡を確認した女の子を抱え、懸命に呼びかけている。私は全然気が つけなかった。あの子がミクちゃんだなんて……。

何故リカルがココに。船で待機してたんじゃ。

待ちきれなくて来たっていうの。そして……。

「冷たい……嘘だろ、何で」

大きく見開いた目。リカルの様相が段々と変わっていく。声に力が加わっていった。

「何で！」

涙が。

声が、震えて耳に つく。

「ミクっ……ミクっ……！」

何でだよおおおおおッ！」

うずくまって……泣き、叫ぶ。

私は頭の中が ぼつっと、モヤのようなものが視界に覆い被さってきた感覚が してきた。

涙は乾いて出ていない。それより……

これは……何？

私は自分の存在さえ信じられなくなっていきそうだった。

「男だ……レイ、とか、言ってた。そいつ。もう一人の……巫女みてえな格好をした女と、一緒に……消えた」

「サイガ兄ちゃん！」

リカルがこちらを見て呼びかける。私はわかった。リカルが言っていた事が蘇る。ああこの人が知り合いと言っていたお兄さん……ミクちゃんの家のお隣に住んでいるって。

「レイって奴に皆……？ ミクも、やられたの！？」

擦れも気にせず、吠えるようにリカルは聞いた。「ああ……街の奴らも俺も皆……妙な刀で斬られて。でも、ミクは……ミクだけは

……」

変な沈黙がおりた。サイガと呼ばれた男の人は続ける。

「ミクは……一回、斬られて重傷を負ったはずだったんだ。なのに……まるで、生き返ったみたい……」

変な事を言った。

リカルは、ミクの服を前だけベロリとめくった。穴のような痕以外は、傷一つついていないと言う。

「斬られた傷なんてないよ？ サイガ兄ちゃん」

「確かに斬られたんだ……俺より先に、俺の目の前で……でも、そのレイとかいう奴は。また戻ってきてミクの胸ぐらを掴んだかと思ったら。何か、白い物を取り出したように見えた。ミクの体内からアレは何だったんだ。巫女の女と……『シジンキョウの一枚が見つかった』とかどうとか……」

私は立ち上がって下を見る。愕然と、地面を見下ろした。

「四神鏡が見つかった……」

嫌な汗が背中を滑った。やがて全身を熱い血液が駆け巡る。

「あんた……救世主、か？ 噂の……」

私はハツとしてサイガを見た。ドキリと、心臓が鳴る……！

サイガは私の動揺を見逃さなかった。確信したのか怒りを誰でもいいからぶつけたかったのか……怒号を私に浴びせた。

「あんた……何で もっと早く来てくれなかった？ レイとかいう奴らが言っていた……名ばかりの救世主だと。奴らの言う通りなのか……名ばかりの小ねずみ……いいや そんな事より。何で俺らが……何で あんな いい子を……俺が代わりたかった……なのに……」

胸板の傷からは まだ血が止まりきらずに流れている。涙のように。

「なのになのになのに！」

私は後ずさりした。しかし背後からは別の、苦しい叫び声が私を刺すように突き抜けた。

「お前の……お前のせいだ！ お前のせいでっ、ミクがっ！」リカルの声。

………！

もう、何処へも行けない。

逃げる場所はない。

「勇気！」

何処か遠くで、私の名前を呼ぶ声が する。

私は勇気よ、救世主なんかじゃない。一体誰が。誰が救世主………？

………

私は倒れた。

闇の底へと。もう立ち上がれないと……知りながら。

《第19話へ続く》

第18話（虐殺の街）（後書き）

【あとがき】

タルを見た時の勇気のセリフでカットした一文。

「勇気は、『勇気』を出して話しかけ……」
意味わからん。

ブログ第18話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-55.html>

ありがとうございました。

第19話（「ハルカ」という名の少女）

（私、頑張るよ。お兄ちゃんのためにも。私一人で）

……これは誰の感情？ 私の過去の想い？

（大丈夫だよ。お兄ちゃんが居てくれる。お兄ちゃんが頑張るから、私も頑張るの。私は不幸せなんかじゃないんだよ）

ああ……ずっと昔、考えていた事だよ。そうか、私あの頃……いつか一人で生きて行こうって、決めたんだよ。

何でだろう？ たった6・7年前の事じゃない？ どうして今こんなに不安で いっぱいな？ どうして『決めた』って過去形になっっているの？

私は どっちに行くの？

（だって仕方ないじゃん？ 親は両親とも死んじゃって、お兄ちゃんしか居ないんだもの。頼りにするのもいいけどさあ。やっぱり自立するべきでしょ？）

自立？ 自分で立って歩くの？

（当たり前でしょ？ 誰の手も借りちゃダメでしょ？ 自分の事はホレ、自分で やんないと！）

わかってても……淋しいな。

（淋しい？ どうして？ あんたには周りに人が居てくれるじゃない？）

そうだけど……でも。

（まだ13歳で、自立は早いかもしないけどさ。自立って言葉は前向きじゃん？）

前向き……いい言葉よね。

わからない。何も考えられない。

こんなのもって……初めて。

誰か……私を たすけて。

「クソツ……レイの奴……」

と、下を向いて唸っているのはセナである。

ココは、キースの街 診療所の裏にある家の小部屋。大被害を受けたキースの街人達は、街のあちこちの病院や診療所、やがてそれも足りなくなり、民家にも運ばれた。勇気が倒れ、セナ達一行は勇気を担いでココの診療所を尋ねた。

しかし やはり満員で、所内には入れず、その所長が親切にも診療所 裏にある自分の家のベッドを貸してくれたのだった。

少し呼吸が乱れ、高い熱を出す勇気。

「疲労……かな」

と、勇気を横目で見下ろし様子を窺ったのはカイト。すぐ後に続いてマフィアやセナが言った。

「セナ……落ち着いて。冷静になるのよ。今は、勇気の事だけを考えて……」

「わかってる！」

と、セナは勇気から背を向けた。

「勇気、衰弱しきつてみたいね。そりゃそうよね……慣れない環境の中に居るんだもの……。それに まだ13歳だったっけな。あんな死体の山 見せつけられて。きつと前の時は、『助けなきや』って気を張っていたんでしょね。まだまだ勇気は子供よ。辛かったでしょう……」

マフィアは そう言って涙ぐんだ。

カイトは自分の水の力で、勇気のおデコに水を含ませ絞った夕オ

ルをたたんで そつと置いた。

精霊の力は、こんな所で役に立つ。

セナ、マフィア、カイトの他に後ろで蛭達も黙って そこに居た。「勇気が この状態にいる以上、この街から離れられない。とにかく、宿を探しましょうか」

というマフィアの発言のもと、それぞれは思い思いに行動し出した。勇気が こうなったおかげで皆、少なからず動揺していた。

……

勇気は自問自答ともいふべき会話を誰かとする。 まだ続いている。

(なあんだ。 疲れてんの？ なっさけな！)

……そう言われたって、仕方ないでしょ。 こっちの世界に来て色々あって。 元々私、体力がないのよ。 部活だって文化部でしょ。

(あんたって よく頑張るよねえ。 訳の わかんない救世主なんて 使命 背負わされてさあ……。 本っ当、人がいいというかノンキと いうか……)

何が言いたいわけ？

(あんたの短・所！ やってっって言われたら断れない)

……………いいじゃない。 別に。

(よくないでしょ。 その短所のせいで あんた疲れすぎて倒れたじやん?)

反省してる。

(嘘でしょ。 あんたは起きたらまた、助けるんだとか言っちゃって 走り出すでしょ。 自分、こんなにボロボロのくせに)

ボロボロ？ そんなに？

(ひどいもんよ。 自覚ないんだ？ はっきし言って重傷)

そ……う？

(精神的に あんた、相当まいってる)

私の心の中に2人の心が住んでいる。2人とも私であって、お互いを挑発し合っているみたい。

一体いつまで、これが続くのだろう。

「ばつかみたい。倒れちゃうなんて」
と、部屋の隅で文句を言う蛍。それを聞いて怒ったのはメノウだった。

「ばかじゃないもん！ 勇気お姉ちゃんは ばかじゃない！」

「だあーって！ 疲れてるのは こつちも同じよ。私だけじゃない、紫も あんたらも！ なのに勝手に倒れちゃって！ あんな光景、見慣れてるんでしょ！？ これからだって ずっと見る事に なるわ！」

あんな光景とは、もちろん街での惨劇の事。蛍側に見れば、何度も似た光景は見た事があつた。

「第一、勇気の奴 甘すぎんよ。救世主のくせに、何にも できないんだから」

「言い過ぎよ！ 蛍！ 勇気は勇気なりに頑張っているのよ」
と、抑えたのはマフィア。セナは相変わらず勇気には背を向けたまま、皆の方を向いてはいるが下一点を見て無言だった。

「それにしても、何で救世主は異世界から来た者なんだろうねえ？」

どういつつもりなのか、カイトが急に言い出した。

「だってそうだろ？ 別に違う世界の人間じゃなくてもさ。こつちの世界の間でも いいじゃん。何で わざわざ？ これ、素朴な

疑問」

と、ハイイ、と手を上げる。

「変な奴……」

ツッコんだのは蚩。

「お兄ちゃんは、そういう人なんだよ」

と、微笑むメノウ。

「でも その通りね。何で天神様は…… 勇気を選んだんだろう……」

そして救世主は何故 異世界から来るのか？ …… 考えた所でわからなかった。

「ま、天神が どーとか勇気が どーとか言うよりまさ。勇気がこうなっている以上、俺らどうすりゃいいんだろ。街は ご覧の通りだし、明日まで船も出ないらしいよ。船員達が救助してるけど、やっぱ俺らも手を貸すべきだよな。うん。じゃ、そゆ事で」

「は？ カイト…… ちよつと？」

と、目が点になる一同。しかしカイトはサッサとドアから出て行ってしまった。

後に残された者は、呆然とするばかり。

「勝手な奴ねー。勇気、放つたらかしい？」
とグチる蚩。

「さあ……。でも、私らがココで あーだこーだと言っても始まらないのは確かね。とりあえず当番制で勇気の そばに居てあげて残りは街で働きましょっか。じゃ、まず……」

言いながら、辺りを見渡しセナの所で目をとめた。

「セナ。あんた、お願いね」

ポン、と肩を叩く。肩を叩かれたセナはマフィアの顔を見て「ああ」と返事をした。

「昼過ぎに全員 集合ね。それまで よろしく。あ、メノウちゃん はココに居てね」

「ううん。メノウ、手伝いするよ！ ケガの手当てなら任せて！ よくお兄ちゃんのケガの手当てしてたの！」

「カイトの……?」

と、少し顔をしかめるマフィアだったが。

「まあいいや。じゃ、お願いしようかな。私に ついてきて。蛍と紫くんも よろしくね」

「はいはい。行こ、紫」

「はい」

部屋に勇気とセナを置き、4人とも出て行った。残されたセナは黙ったまま、勇気の寝ているベッドの横へ椅子を引き置き、座った。少し ため息をつき考え込んだ。

(レイを止める方法……ダメだ、何も思いつかない。第一、レイの説得は無理だ。レイの過去を知ってしまったなら なおさらだ。レイは……もう、昔のような奴じゃない。昔は……今とは逆で、天神を尊敬して……力だ! 閻神の力! あの力の せいだ……あの力を失えば! ……そんな事は できるわけがない。ちつきしょー、やっぱり どうしても、レイを倒す以外の方法は ないのか!)

このままだと、レイは四神鏡を集めて青龍を呼び出し、世界を破壊へと導く。この悪状況を失くすためには諸悪の根源ともなるべきレイを倒す他ない。

(待てよ……天神を倒すっていうのは どうだ? 天神が居なくなればレイの復讐の意味が失われる……いや、ダメか。天神は全知全能の神。居なくなれば、結局は破滅か……)

そうやって頭を抱え込む。

(俺って怖い奴か? 神よりも旧友が大事なんて……な)

「ふっ……」

と、少し笑みを浮かべるが、それも悲しいだけだった。

(レイを倒す……それしか、ないんだよな? 勇気……悪いな。お前はお前なりに、考えてくれてたんだろ? レイを倒す事以外方法がない事をとうに知って……でも、俺の前では言い出せなくて……目の前で人が死んでも……良い方法は見つからなくて……。きつと、途方に暮れちまったんだよな。救世主なんて使命、本当だ、

何も お前じゃなくなつて よかつたんだ。カイトの言う通り、こ
っちの人間に……俺にしてくれりゃよかつたんだよ)

勇気の寝顔を見ながら あれこれと考えているうちに、眠くなっ
てきた。朝も早かつたし、色んな事が あつたからだつた。

目を閉じてても、思考は加速するばかりで止まらない。

「レイの説得…… できたらいいな。できる人間が居るとしたら……」
と言つておいて。すぐに またパチツと、目を開けた。

「ハルカ……か？」

……勇氣の中で。会話は続いている。音だけが存在する世界の中
で。

(あーあ。早く元の世界に帰りたいなあー)

帰る？ 帰りたいの？ 私。

(そうよ。だって、こんなキツツイ所より、元の世界の方が平和で
しょ)

平和…… そうかな。だって私、家じゃ一人で、学校 行つても
いじめられて……さ。

(でも人が死んだり、世界の破滅なんて話とか ないでしょ？ コ
コと比べたら平和よー?)

…… そう、ね。元の世界の方が、まだ……。

(帰る帰る。私、方法知ってるから)

は？ …… 何で知ってるの??

(うふふ。私、何でも知ってるわよ？ 教えてあげる)

あつ…… そう。へえ？ 何でも知ってるの？ 本当に？

(何でも聞いて)

そうね…… じゃあ…… うーんと……。

(ハルカって知ってる？ レイヤセナとの関係、教えてあげよつか

?)

ハルカ……?)

(教えてあ・げ・る！ それっ！)

え、『それ』って……う、わあああ！

凄まじい閃光のもと、暗闇だったのが急に とある場面へと変わった。

私の視点から周囲が見渡せるようになった。声だけの世界から、抜け出せて。今さらながら……これは夢なんだと やつと理解できたように思う。

私の目に飛び込んで来たもの。景色は。

あそこ……知ってる。『時の門番』で見た、監獄だわ。有刺鉄線の張られた高いフェンス。監獄の建物の窓から中の様子がチラチラ見える。少年少女の数。姿。皆、色が ついているのかわからないのかはつきりとせず、無声 映画のフィルムの中のエキストラのような感覚世界の中で、自分達の好き勝手に手を伸ばしたり走ったりして行動し。何の音を発しているのかが識別困難なんだけれど、彼らは場面の中で『生活』を行っているんだわ。

あ……あれ。

部屋の窓から垂れ落としたロープを伝って下りてきた少年達が居た。一人、また一人と。……2人だ。

レイとセナだ……。

知っている。私は。まだ幼い2人を。

確かめるように左右前を探り、隠れながら慎重に。この私のすぐ前にあるフェンスへと近づいて来た。私の目というカメラアングルは、動かせるのだろうかなんてちょっと思ったりしたけれど。

すると、私の視界一面に突如『影』が覆い、一瞬 全てが真っ暗になった。

(?)

それは本当に一瞬の事で。すぐに視界は開けた。

どうやら、私という存在を通り抜けて。誰かが彼らに近寄って来たようだ。

誰かって……誰。

それは、少女。流れる金色を肩の手前で切り揃えられた、ストリート髪。

後ろ姿しか見えないんだけど……格好は、王女様みたいだ。

金髪……この子、『ハルカ』？

以前、夢でセナが「ハルカ」って呼んでいた気がする。きっと

この子の事だ。

この子が……『ハルカ』！ 私はドキドキしてきた。

「ハルカ！ おはよう！」

ハツとして幼いセナを見た。屈託なく自然に笑いかけるセナの顔。そして その後ろからは「はよ」と、今度はレイが声をかける。

フェンスを挟んで、3人は集まった。

「大丈夫か？ また部屋を抜け出したりして」

恐らくハルカの澄んだ気品 溢れる声。ただし口調が男の子っぽい。

「平気。レイが調べたんだ。この時間は看守達の朝メシの時間だつて」

肩をすくませ首を傾げながら、セナは愛嬌を振りまく。レイは目を伏せ静かに頷く。

「そうか……なら、よかった。これ、やる」

ハルカがホッとして手に握っていた物を広げて見せた。お菓子だ。黒っぽい小さな塊の方は……。

「チョコレートといって、何処かの国のお菓子だ。昨日の おやつを残して持ってきた」

フェンスの穴から、小さな お菓子が手渡される。「ふうん……」
受け取った2人は、興味津々で早速 包みを広げて口の中へ。

「名前だけは聞いた事あつたけどな。サンキュ、ハルカ」

お礼を言われたハルカは、恥ずかしがっているのか黙っていた。
顔は私からでは わからないけれど。

……

……そこまでを見ていて。この『場面』とは別の。さっき私と声だけで対談していた声が再びやってきた。

（説明したげよつか？ 『ハルカ』。ハルカ・ティーン・ヴァリア。当時9歳、現15歳ってトコ。ある国の国王の15番目の子供。つまり、王女ね）

勝手に話し始める……え？

王女？

……やっぱり。そんな感じだもん。

（王女だけど、育った環境は恵まれているとは言い難いわね。部屋に閉じ込められているからなあ。異常に）

異常に？ 何で？

（金髪で、赤い目をしているの）

赤い目……そういえば そうだった……っけ。

（赤目で金髪……そんな容姿の おかげで、王宮内では忌み嫌われ ていたってわけ。母親は早くに病死し、国王は そんなハルカを大事にしてくれたんでしょうけどね）

そうなの……異常、って。可哀想……。

（で、ハルカは秘密の抜け穴から抜け出して、ココに来たの。レイとセナとの関係は……友達って奴よ）

友達……セナやレイは知ってたの？ ハルカさんの身の上。

(まあねえ。国王の娘だし、監内で知ってた奴とか居たんじゃない。本人も言ってるさだしね。セナやレイは知った上で、ハルカとこうして会って。んで、遊んだり……とは言ってもフェンス越しに監獄からは出られないしね。入る事も。わかった?)

うん……そっかあ……。ハルカさんは、セナやレイの……友達、か。

何だろ……すごく、安心しちゃった。変ね。

(安心、ね。だといいんだけどね)
え？

(自分の目で確かめてみたら。見なさいな、3人とも誰をそれぞれ見ているのか)

そう言われ、じつくりと観察してみる。それぞれが……。

……そういえば。ハルカさん、レイの方ばかり見ているような。気のせいかな？

セナはレイもハルカさんも両方見ているし……うーん。とにかく3人とも、とっても楽しそうなんだけれどな。

私に語りかける謎の声の言いたい事がよくわからない。一体何が言いたいんだろうか。

(しゃーないなあ。んじゃ、とっておきは!?)

(ほいなつと)
へっ……。

再び暗闇。「きゃああ! またっ!?!」私は悲鳴を上げる。遊ばれてやしないだろうか。誰に? 神様? 天神様? そして同じく閃光。気がつくと、今度は何処かの野っ原だった。

(見てごらんなさいな。わかるでしょ?)

そう言われて。いきなり場面が変わったもんだから戸惑ったけれど。すぐに状況を頭に入れた。

平野で、辺りには建物など何もなくて、遠くに あるのは森の入り口。入り口へと続く一本の道が、こちらにまで長く続いている。そして道の真ん中に2人。人が立ち止まっている。立ち話でもしているのかと思ったら。

2人とは……セナとレイだった。まだ今よりちょっと幼げな。

ココは、いつの、何処なんだろう。

相変わらず色彩のはっきりしない世界だ。映画かと思ってしまっ

う。

(ま、過去だしね。昔の映画を観ている感じじゃない)

昔……えっと、じゃあココは、どの場面？ 監獄で、ないって事は、たぶん……？

(お察しかしら。そ、監獄から出所した日。セナとレイが、お互いバイバイするトコよ)

……。

時々思うんだけど、この謎の声のノリ。何だかなあ……。

(何よ。せっかく親切にしてあげてるのに。ホラホラ、ちゃんとよく聞いて。セナ達の会話)

ええと ああ、うん。

私が気を取り直して関心をセナ達に向ける。すると、ちょうど、セナがレイに呼びかけた声がハッキリと聞こえてきた。

「じゃあ……ココでお別れだな。元気で、レイ」

「ああ。元気で……」

と、2人とも軽く笑い、簡単に済ませようとした。しかし余計にそれが名残惜しそうにも見える。

やがて、2人は、それぞれ逆の道先をめざし歩き出した。振り返る事なく、真っ直ぐ道なりに。足は止めなかった。

このまま2人は別れ……と思ったが。レイが突然、何かを思い出

したかのように振り向く。

セナの方を。そして呼ぶ。

「セナ！ それから」

セナはレイの方を。沈黙が少し2人を包んだ。

レイが間を置いて言葉を続ける。

「ハルカの事……よろしくな」

同時に、またレイは自分が進む方へと歩き出す。言葉はセナに届いても届かなくても どちらでもよかったのかもしれない。

セナは しばらく そんなレイを見つめていたが、表情も変えず向き直り。自分も決めた方角へと。顔を上げて歩き出した。

2人が出所した日。

私は、レイを見ていて。一つの答えに辿り着いた予感がした。

レイは……ハルカさんの事が……。

確かではない。だから『予感』止まりだ。
でも本当かも。

だって さっきの場面で。そういえばレイもハルカさんを見ていた気が。

2人つて、ラブラブ？ やっぱり もしかして。

あつらア〜……。

(だと いいんだけどね)

へっ……またソレ？ 何よ、違うのお!?

(まだ続きがある)

言われて、黙って前を見る私。

レイの方へ、勝手に私というカメラマンは追いかける。

あ。

気が ついた。レイの進む先で。
森の入り口に さしかかる所に、誰かが居る！

それは成長したハルカさんだった。

「ココに来ると思ってて。待つちゃった。……見て？ 家、出てきたの」

ハルカさんが言う通り。ハルカさんの足元には大きな荷物が。ひとまとめにされて置いてあった。

「今日2人出所するって、セナが教えてくれて……それで」
楽しそうな、でも ためらっているようなハルカさんの顔。私はあれ変だなと思った。

まるでレイの前だと小さな子供みたい。無邪気さというか あどけなさというか……。ついていた男の子っぽい王女イメージとは違ったので、そう感じてしまった。

こっちが本当のハルカさんなんだろうか。貴重なものでも見た気分。

「私……」

小さく呟いて下を見ていたかと思ったら、急に顔を上げてレイを一心に見つめた。

「レイ……！ 私、あなたに ついて行きたい！ 連れてって！」
そんな事を叫んだ。

……！

私は驚く。

こんな展開が あったなんて。

しかしレイの答えは素っ気なかった。

「ダメだ。家に戻れ」

ハルカさんから顔を逸らす。レイの冷たさは そのまんまだ。今の彼と……。

しかしハルカさんは粘る。

「嫌よ！ あんな家……私に ずっと あんな所に居るって？ 王も王宮の下女も臣下も皆。私を忌み嫌って……私は……ずっと部屋で一人。話し相手も ろくに居ない。ずっと、ずっと一人。あなた達だけ。あなた達だけよ。普通に人間扱いしてくれたのは。私には、セナとレイが。あなた達が必要なの」

ポロポロと、涙まで こぼれながらハルカさんはレイに訴えかけたが、レイは聞く耳持たないと。逸らした視線を戻そうとはしない。「だったらセナと行けばいい」

ハルカさんの想いなんて斬って捨てるように。

「セナには悪いけど……私はレイと行きたいの！」
なおも粘る。

レイはハツ……と肩を大げさに動かし、疲れた吐息を出してハルカさんを邪魔にドンと横へと どかした。「いいから、どいてくれ」
そんなレイの腕を引っ張ったハルカさんは想いすぎる。

「お願い、連れてって！ 一生ついて行きたいの！」
腕を掴んだ手は邪険にされ振りほどかれた。

「役立たずは いらない」
「！」

ハルカさんの動きが止まった。ただ呆然と……去り行くレイの背中を、涙を流しながら。でも、ハルカさんは追いかけた。

「絶対、役立たずなんかには ならない。だから……」
グイと、レイの腕をまた。レイは怖い顔になり威圧的に声を発した。

「ダメだったらダメだ！ 邪魔なんだ！」

……

ゴクリ。息を呑む私。

レイが あんな顔でハルカさんを。私は両手に力が入った。どっちを応援するかというほどでもなく。成り行きを見守るだけだった。どうなってしまうの2人……どうしてレイは あんなにもハルカ

さんを拒否するの？

好きなんじゃないの？

私には複雑過ぎるのか、理解が できない。

ただ、見ているばかり。

私が ゆっくりと考えられるほどの間が空き、沈黙を破ってハルカさんは……。

相当、レイの言葉にショックを受けたみたいだ。声が震えている。「いつも そうよ……私は邪魔だ いらないつて。昔にも言ったよね？ それ。邪魔だって……冗談だと思ってたけど……本気だったのね。どうして？」

核心を突く事を言う。続けて一気にハルカさんは想いのたけをぶつけ浴びせた。

「私は今まで あなたのために頑張ってきたわ。あなたに追いつくために、知力も体力も容姿も完璧に備えてきた。なのに、どうして！？ 私じゃダメだというの！？ レイ！」

レイは答えなかった。

「答えて！ レイ！」

やはりレイは答えない。表情も ない。

「レイ……聞かせて……」

と、絞るようにハルカさんは声を漏らした後、両手で顔を覆い隠し泣く。

泣く。

……ハルカさん……。

私の目にも、涙が流れてきそうだった。残念ながら それは ないのだけれど。今の私には。

もし今の私に体が存在していたら、2人の前に飛び出して行って

いたかもしれない。

「いない」

レイは やはり道を再び歩き出した。ハルカさんを無視して。「レイ……！」

いつまでも泣き叫び、追いかけるハルカさん。見てられない切迫感。

「行かないで！ レイ！」

もう、諦めて……私に そんな気持ちが生えた所だった。

ハルカさんがレイに近寄った瞬間。今まで全く見向きも なかったレイに変化があった。

「^{がく}萼”！」

レイはハルカさんに向けて そう言って手をかざした。

ハルカさんは驚く……体が ねじれた空間と一緒にぐにやりと歪み、ハルカさんを中心に周りに円を描いて『何か』が走り出したかと思えば、『何か』は氷だったのか、大きな槍の先のように尖った氷が発生した。

メキメキ、メキ……

氷は生長しているみたいに長くなり、ハルカさんを閉じ込めていった。「……！」

ハルカさんは身をかばおうとして一瞬 身構えた風だったが、ハルカさんの両腕は……呪縛から解かれていったような素振り

……いや。

氷を形成していく、壁は受け入れるのが自然なように。
ハルカさんは氷づけになった。

(……！)

私は目が釘付けになる。

《第20話へ続く》

第19話（「ハルカ」という名の少女）（後書き）

【あとがき】

“萼”って何だよレイッ！（無いよー！；）

……もう少し字変換しやすい漢字がいいなあ（泣）。

ブログ第19話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-60.html>

ありがとうございました。

第20話（白い月の夜）

「ハルカ……」

そう囁いて、氷に そつと手を触れる。優しく、撫でるように、そつと。

これは ただの氷では ない。闇の魔法で作られた、決して溶ける事のない氷。しかし氷の中には ちゃんと時間が流れているため、一年経てば一歳年をとる。成長も している。

呪縛、監禁、幽閉……とも言える。

ハルカは ただ黙って目を閉じているだけ。声を発せられなければ、表情を変えたり動く事も一切できない。

レイが何故ハルカをこんな氷に閉じ込めたのか。

ハルカへの情が そうさせたのか……わからない。

レイも ただ、とても優しい目でハルカを見ているだけだった。

「ハルカさんは……レイの所に……？」

わからない。わかるようで、わからない。

何故……ハルカさんを連れて行く事を拒否したレイが、ハルカさんを氷づけにして連れて行ったのか。

「ハルカさんを……愛しているから？」

だから……だから連れて行った？ わざわざ術を使って？

（ハルカに会ってみる？ 何か わかるかもよ）

「！」

私と謎の声との会話は まだ続いている。姿はない。声と声だけの……これは本当に『夢』なの？ あなたは……。

「そんな事、できるの!？」

私が謎の声に反応して叫ぶと、やはり声で返ってきた。

(できるよお……私は誰？ なんちゃってね)

……気がつくと、また変な空間に投げ出された。

それは奇妙な空間だった。景色というものが……ない。ただの真つ暗闇。そして不思議だけれど……周囲に光は何処にも ないというのに、自分の体は見えている。

両手も、足の つま先まで しっかりと見えている。さっきまでの無声映画に近いような所に居た時は、私という体は その場には なかった……要するに、『意識』しか なかったんだ。

でも今は。

自分の顔を叩けば、パチパチと音がする……気が する。痛みも感じると思う。

私の『体』は存在しているんだ。

「ひゃ！」

下を見て声を上げてしまった。何と、足元は水びたし。真つ平らな地面の一面、流れる事も なく水が まかれて……。

「……」

違う。

これは水じゃない。

手で地面を触れてみても、水を『感じ』ないのだ。よって濡れない。ただ……。

ただ、触れた所を中心に波紋が広がるだけで。つまりは見せかけ？
「ココは……何処に連れて来られたんだろ……?」

いい加減、嫌になってくる。本当に神様に遊ばれているんじゃないだろうか。

「あ……」

振り返る。

私だけしか居ないのかと思っていたら。少し離れて5・6メートル先に人が……現れた。それは突然に出現したのかと思われた。

「あなたは……」

少女……金髪。赤い瞳。可愛らしい青のワンピースから、スラリと伸びた足が出ている。肉はあまりついていない、非常に細身だ。立ち方が優雅で、モデルのよう。目を引くのがチョーカーから垂れ下がっている首元のシルバー飾り。変わった造形をしている。

ハルカさん。彼女だ。私の方を真っ直ぐ見ている。表情は ない。

レイの前で頑張っていた彼女のままだ。服装も同じ。

あんな場面を見た後では、すごく声をかけづらいなだけ……。。

私が黙っていると、やがてハルカさんの方から歩み寄ってきて声をかけた。歩きたびに やはり水紋が広がっている。音は ないけれど。

「ハルカ・ティーン・ヴァリア、15歳だ。よろしく」

私の前まで来て、そして いきなり自己紹介？

「ええと……あ、松波勇氣です。13歳です……よろしく」

私はポリポリと頭を掻きながら ひとまずハルカさんに習って自己紹介で返す。何だ、緊張して ぎこちない。

「救世主とはお前の事らしいな。レイが言っていた。異世界から来た、何の力も ない小娘だと」

ぐさっ。

……そ、そんなんですけどね。皆、はっきり言ってくれるなあホント。ちよつとは加減か遠慮してほしかったりして。

「何故 神は、お前を選んだのだろう……まあいい。私やレイには関係のない事だしな」

「あつ、あのつ」

私は一番 聞いてみたかった事を聞こうとした。

「何だ」

「ハルカ……さん。レイの所に居るんですよね？ 氷づけみたいに なって。あなたは それでいいんですか？ 満足なの？」

普通、抵抗すると思うんだけど。私はそう思って。でもハルカさんは。

「ああ」

と……尋常では ない答えが返ってきた。

そんな素っ気ない……。

「レイの そばに居られる……それだけで満足だ。触れる事も会話する事も できないが……いい。だから、邪魔するな」

う、ううーん？

「邪魔するなって……あなた、それで本当に満足なの！？ 本当に！？ ……レイの事、全部知っているのよね。レイが、何を企んでいるのか！」

「知っているが」

「なら！ あなたは止めるべきだわ！ 青龍復活を！ 世界滅亡を！ このままじゃ、何もかも終わってしまっ！」

ハルカさんは しれっと、「知った事か」と言い放った。

……！

冷たい……。

「私は、レイさえ そばに居てくれればいい。レイのやる事に邪魔はしない。レイが望むなら。世界が どうなるうと どうでも。

レイさえ……居てくれれば」

何て頑固なんだ。私は そう思った。

あんまりだ。世界が どうでもいいなんて。そんな事が平気で。

「お前は」

顔を上げてハルカさんを見ると、私から目を離さずに今度は そ
つちから迫ってきた。

「何故ココに居る？ 何故 救世主になつたのだ？ お前なしで
も、世界は動く。お前が世界を動かすわけじゃないだろう。元ある
べき世界の方へ帰ったらどうなんだ。とつとと」

「私なしでも……」

世界は…… 変わらない……？

「レイも私も意志は変わらない。変えるつもりなどない。どつちみ
ち、世界は滅びる傾向なのだ。滅びる前に、死ぬ前に、帰ったらど
うなんだ。足手まといになる前に」

滅びる……レイが、滅ぼす。

どう あがいても。

レイの意志は、変わらない……。

私は気持ちが段々と しぼんでいった。全て、悪い方へと導かれ
て。

私は どうして救世主になつたの？

何でだっけ？ ……

……

……何の ために……。

……気がつくと、ハルカさんは居なかった。そして、やっと夢は
消えた。

「お兄ちゃん……」

寝言で、そう呟く勇氣。

「勇氣……」

そばで寝言を聞いたセナは、優しく勇氣の頭を撫でてあげた。勇氣は汗もソコソコ、落ち着いてはいるが、まだ苦しそうに呼吸をしている。熱はまだあまり下がらない。

少し隙間の開いたドアから、メノウと蛭は勇氣を見守っていたが。「（あの2人って……恋人同士とか、そんな感じなのかな？）」
と、コソコソとメノウは好奇心旺盛に隣の蛭に聞いた。

「（そお？ 兄と妹ってカンジだと思ってたけどー？）」
馬鹿らしい、と蛭は手を振った。

すると背後からカイトが やって来て声をかける。

「こら。何やってんだ2人とも」

「わっ！」「ひゃあ！」

驚いた蛭とメノウは慌てて その場から立ち去った。

2人が去った後……開いたままのドアの隙間から、今度はカイトが覗き見る。チラリと数秒見入った後、そっと離れた。

はあ……と、廊下を歩きながら、ため息をつく。そしてピタリと立ち止まったかと思うと。バンッ！ と手の平を自分の横の壁へと突くように叩きつけた。

「……どうすりゃいいんだよ」

下口唇を噛みながら。カイトは悔しそうに怒りを目の前の空間にぶつけた。

夜も更けて。私は目をやっと覚ます。

ムクリとベッドで上半身を起こして、腕を上げてみて思い切り伸

びをしてみた。周囲には誰も……誰も居なかった。ちょっと内心ホツとする。

「皆、何処 行っちゃったんだろ？」

と言った後で すぐ「あ……そっか」と全てを思い出した。

そうだった。皆、街の救助活動と修復作業に行っているんだわ。

私ったら……何、忘れてんだ。全く……自分のノンキさに呆れる！

私はポカリと自分の頭をこづいた後で、「私も行かなきゃ」とベツドから出ようとした。

フツと、言葉が思い出される。

『何故ココに居る？』

ハルカさんの言葉。「あ……」

体が すくんだ。再び動き出す事が できない。

ハルカさんの槍で刺すような言葉の数々が、私の動きにブレーキをかけている。

行ったって……仕方ないのだから。

と……。

「……」

私の表情は暗かった。誰にも見せられないほど。

何だかもう、どうでも良かった。

「私……元の世界に帰らなくちゃ……ココに居ても、役に立たないもんね……。セナやマフィアみたいに強くないしカイトみたいに技術を持っているわけでもない。魔力もない。ミクちゃん……一人、街一つも助けられないんだもんね」

言いながら、声が震えてきた。ああ本当に今、誰も居なくてよかった。

「ごめんね……」

誰に謝っているのかは わからないけれど謝った。ミクちゃん？
リカル？ セナ？ それとも？

「ごめん……」

視界が段々と滲にじんで何も見えなくなってきた。

帰る用意を、とはいつても特に何も ない。食料と水だけを持ち、
部屋を後にした。

セナ達 皆に黙って、居ない隙に船乗り場へ行く……が。

途中で、重要な事を思い出した。

ああ……私って何てバカなの。今さらかもしれないけれど。

とりあえず、夜で あつても船着き場で忙しそうに積荷を運んだ
り船員に指示したりしている船長さんに、相談しに行った。

「あ……」

と、背中を突つくと、船長さんのゴツイ体がクルリとこちらを向
いて小さな私を見下ろした。

「オヤ何だ。今日は一人か、救世主さんとやらよ」

どんな時でも明るく陽気な船長さん。気軽に私に笑いかける。

「じ、実はその……船に乗せて頂きたいんですけれども」

「おうよ。いいぜ。本当は明日の朝に出すつもりだったんだが、薬
とか食料がとも足りない上に時間も無駄にしたくないしよ。今す
ぐ出港しようとしてたんだ。あんたラッキーだねえ」

「はあ……それが……その。実は問題が……」

「問題？」

片方の眉を船長さんは吊り上げた。両手を腰に つける。私の顔
色を窺った。

私は親指と人差し指でワツカを作り、見せた。そして口元を引き

つらせて、ニツカリと笑う。

すぐに察しが ついてくれたようだ。

「なんでえ……金か」

あゝあと、船長さんは鼻息 荒く大きな鼻穴から息を吸い込んだ。船長さんのポリウムあるお腹が激しく伸縮する。

私は申し訳なさ気に、コクリと頷いた。だって無いものは無い。ダメ元で……と思ったんだ。

すると船長さんは自分の頭をブオリブオリと掻きながら、少し考えた後。「……しゃーないなあ」と声を漏らしてくれた。

「！」

私、両手をグーにし、キラキラとした目で船長さんを見つめた。

「わかった わかった。じゃ、甲板の掃除と諸々雑用付きだ。いいな？ 厳しいぞ、覚悟しとけ」

太い腕の手で、私の頭をこづいた。私ってば嬉しくて大興奮だ。

「はい！」

私はニツコリ笑って大きな返事をした。

お優しい船長さんのおかげで、船に乗る手はずが整えられた。すごく感謝しつつ、私は船にさあ乗るぞと船着き場まで近づいて行きたさな。

呼び止められる。

「勇気！」

そして振り返る。

その声の主を知っていた。私は激しくドキリとして、恐る恐る見る。

蛍だ。そして隣には紫が。

ついに見つかってしまった……。

怖い顔をした蛭と、さつぱり表情わからない紫の顔。居るのは2人だけで、少しホツとしたものの。とても和やかとは ほど遠い雰囲気私達を襲った。

私の そばまで近づいて、蛭が吠えるように叫ぶ。

「何処 行く気！？ ……まさか、逃げるんじゃないでしょうね？」
睨みをきかせて私に詰め寄る。

「……………」

私は返事が できなかつた。

どう言い繕っても、私の今やろうとしている事は蛭達から見れば……“逃げ”の行為だ。言い訳するだけ空しいって事が よくわかつていた。

「そうだと思う……………」

何とか返事をするもの。はつきりしない。

「はあ？ ……あんた、どーゆうつもり！？ 逃げて何処 行くつてえの！？」

うつ、大きな声だから余計に胸に突き刺さる。仕方ないけれど。

「……………元の世界へ。私、帰ろうって思ったの」

「元の…………？ 帰る、って。方法、わかつたわけ？」

私は黙って頷いた。

「……………」

蛭も黙ってしまった。

そう。私は夢の中で。もう一人の私なんだかどうだかわからない謎の『声』のおかげで、元の世界への帰り方が わかつた。わかつてしまったのだった。

まだ、半信半疑なんだけれど（なんせ『夢』だしねー）。教えてもらった場所、というのがあって。そして そこはココから さほど遠くもない場所だったんだ。偶然な事に。

とにかく行ってみる価値は ありそうだった。それで。

帰りたい、っていう気持ちがあつたし……私は行く事にした。もう、決めた。

「何で……？ 風神は？ 木神は？ 水神は、私達は？ 置いて、サツサと帰っちゃうなんて。あんた言ったじゃない。レイ様を説得しに行くって。それは どうなるの？ 救世主なしで、青龍復活を阻止しろって？ ううん、そんな事は どうでもいい。あんた、どうして黙って一人で決めて行っちゃうのよ！？」

蛍の言葉の一つ一つが私に とって とげとげしく聞こえる。聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない、けれど……。

私の顔色を見てか、紫が蛍を抑えた。蛍の両肩を軽く掴んだ。

「紫……」

蛍が紫の顔を見上げる。紫は ただ首を振った。「……」何も言わずに。

「でも、こいつ勝手に……」

言いかけたが、遠く高い船上の所から船長さんの声が響き遮った。

「おーい！ 出発するぞ！ 別れの挨拶は もういいか！」

それを聞いて私は慌てて蛍達に背を向け、『逃げる』ように船の中へ。蛍は すぐ私を追いかけようとしたみたいだが、紫がそれも止めてくれたようだ。そして、

「ご無事で……」

と……ポツリと言った。

逃げた私に声は届かなかったけれど。紫は私の気持ちを察してくれていた。

船はボオ〜……ツと音を立て、港から遠ざかる。

「バカアアアアツ……！！」

蛍の怒り狂った叫びが聞こえてくる。

(すぐ……帰って来るから……)

私は船室の壁に もたれて座り込んで、ヒザを抱え込んだ。
何の保障もない。帰って来るのか どうかなんて。もしかしたら
もう2度と、こちらには戻って来ないかもしれないっていうのに
。

(でも……それでも。私は あそこに居たくなかったの)

顔を上げられない。

そんな資格も根性も無い。

私は帰るために。教えられた地へと。

帰るために。

《第21話へ続く》

第20話（白い月の夜）（後書き）

【あとがき】

『白い月の…』？ 一体何処に月が、と作者、過去の自分に悩む。恐らく抽象的なイメージで決めたんだと……変えようかとも考えましたが他に思いつかなかった今回。

次回、『勇氣、グレル』とかだったら新展開ですか（有り得ない笑）。

ブログ第20話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-61.html>

ありがとうございました。

第21話（精神不安定）

昔々、ある所に。

マイ大陸の やや北北東にはリカイ海が広がっているのだが。その海には魔の三角地帯トライアングルと呼ばれるものが あるらしい。だからその海はリカイ海とかではなく、悪魔の海…… “魔窟の海” と言われ、恐れられている。

過去、何隻もの船や飛行艇が そこへ知らずに入り込み、行方不明に なったか しれない。

「へえ」。怖い所ですね」

「まあな。しかし今となっちゃ、昔の話じゃ」

「というと？」

「昔、勇敢な冒険者がな。そこを探索したんじゃよ。すると どうじゃ。悪魔の海に、島が一つ あったというじゃないか」

「それがラグダッド……バサラ村が ある島なんですね！」

私は興奮して、目の前に居る白いヒゲを長々と垂れ生やした おじいさんの方へ身を乗り出す。

ココは まだ船の中で、目的地には着いていない。船室で一緒になった おじいさんと、仲良く こうやって おしゃべりしているんだ。さっきまで落ち込んでいて部屋の隅っこでヒゲを抱えていたんだけれど……私の具合を心配して、声をかけてくれた。

「そういう事じゃな。しかし、皮肉な事に」

「え？」

「平穏だったらしいバサラ村を観光客やら冒険者やらが聞きつけて集まって見に来よった」

おじいさんは、白いヒゲをいじる。

「そうですね……珍しいもの」

私はウンウン、と頷いてみせる。

「そこでだ。バサラ村のオババとやらが、“光の護円陣”というものを作った。おかげで島へと近づく大船は、めっきり少なくなってしまったそうじゃよ」

船よけの光の護円陣って事かな？ 少なく、って事は行けないわけでは ないみたいよね……それを作ったバサラ村のオババさん。きつと、すごい魔力を持っているに違いない。そして その人こそ、カギを握っているんだわ。

私が元の世界に帰るその方法の。

夢の中の『私』は言った。

『バサラ村の魔女が知っている。そこへ行けば わかる』

と……。

半信半疑では あるけれど、とにかく行ってみるつもりだった。

でもたぶん……。

私は ただ、セナ達の所には もう……居たくなかったただけなのかもしれない。

逃げたかった。それだけ。

それだけ……。

「元々、バサラ村には昔からずっと魔力が かかっておったのじゃよ。だから事故が起きたりした。しかしかけた魔女が死に、次代の魔女……それが今のオババじゃな。の、頃には。魔力はだいぶ時間を経て弱まっていた。その隙に冒険者に見つかってしまったという運びじゃな」

「どうして隠すのかしら……その村」

私は腕を組んで考え込む。

「うーむ。それが よく わからんがな。きつと何か秘密があるんじゃないって」

「そうかあ……」

秘密。

何てワクワクする響きだろうか。

普通は聞いたたらそうかもしれないけれど……今の私にはちょっとノリが悪い。

「とっても参考になりました。ありがとうございます、おじいさん」

私はペコリとお辞儀する。すると おじいさんはニコニコと、手を振りながら笑ってくれた。

「はっはっは。なあに。それより、本当に行くのかの？ ワシも噂を聞いただけで今は村や海が安全か どうかは わからぬ。そんな危険かもしれぬ所へわざわざ娘っ子さんが一人で……」

「大丈夫だと……思い、ます……」

「心配じゃのう」

「……」

私は胸を張ってみる。「大丈夫です！ エヘン」

鼻息荒く。それを見て おじいさんが笑ってくれたのが ありがたかった。

本調子じゃない。今の私は。

こりゃだいぶへコたれてるなあと時々ため息をつく。おじいさんと別れた後、通路を歩きながら私は ため息をまた一つ。はあ。

「後で、船長さん達に お礼言わなくちゃね。バサラ村まで遠回りしてくれただし」

そう。

この船は本当はコンサイド大陸・トルベイ港へスナリ行くはずだった。だけど私の必死の『お願いコール』で、苦笑いだったけれど船長さんは行くついでだし、まあ、という事で遠回りになるバサラ村まで寄り道してくれる事に なったのだった。

ヤッタ、船長さんナイス恰幅。

私は大喜びで手を叩いたんだった。パチパチパチ。

「本当に行きだけでいいのか？ 帰りは どうするんだ？ そこに船があるという保障は ないぞ？」

と、船長さんとの話の後すぐに心配そうに船員の一人が聞いてきてくれたけれど。

「いいんです、たぶん……もう」

と、私は表情のない顔のまま下を見つつ目を伏せるだけだった。

「俺は知らねえからな。どうなっても」

そう言い捨ておいて去って行く。残された私は呟く。

「帰らないかもしれない……から」

私の呟きは、誰も聞いてはいないけれど。

私は帰る。自分の居た世界に。

それが普通でしょ？

「お姉ちゃん。すごく悲しそう顔しているね」

そう声がして振り向く。今から船長さんの所へ行ってもう一度お礼を言ってこようと通路を歩いていた時に。声をかけたのは私の目線よりも下方だった。なので、見下ろす。

小さな少年。オーバーオールを着て髪がクルンと巻き毛の明るそうな男の子だった。

深くキャップを被っていて、でも奥から覗き見えるクリクリした目がとても可愛い。

「コレあげる」

「えっ……？」

少年に言われ片手グーを突き出された私は、つい手を出してソレを受け取ってしまう。

ソレは、鈴。ベルだった。手の平の上にチョココンと のっている。そしてチリンチリンと音が、触ると鳴る。

「コレは？ と私が目で聞くと、少年はニッコリ笑って後ろに数歩下がった。」

「僕、ベル売りなの。それはサービス。きっと何かの役に立つよ」

「は、はあ。ありがとう」

「いいって事さー。へへっ」

軽快にクルツと回るようにして、走り去っていった。

去り行く少年と手の平にのせられたベルとを交互に見ながら。

私の中に何か温かいものが、とつても久しぶりに吹いたような気がした。

不思議少年よ……ありがとう。

かくして私は ついに。ラグダッドと呼ばれる地域 魔の三角地帯 にある、“バサラ村”に降り立った。

とは言っても。こんな大きな船が直接行ったわけではなく。おじいさんが教えてくれた通り島周辺を包み込む……“光の護円陣”とやらがあるために、ある程度は島に近寄ってから私は小船で村へと向かった。小船は親切にも船長さんが貸してくれて、船員の一人が私をのせて漕いで行ってくれた。

そんな経路を辿り、私をのせた小船は難なく岸に着く。危険だというニオイをさせていた割には簡単に着いたので、拍子抜けした思っていた。「ふう……」

私が船から降りると、船員が声をかける。まだ若い私より年はずっと上だ。

「何か顔色 悪くねえか。見てる こっちがハラハラしそうだぜ」
よく考えたら私は病み上がりだった。熱が下がって すぐこっちへ向かって動いていたんだもの。船に乗り込んで掃除などの雑用を任された時からずっと、私はあまり休んでいなかった。

心配ご無用。

私は少し微笑んで「大丈夫です」と言い張った。

本当は頭の中に何かが巣を作っているみたいに、モヤモヤしていたりするのだけれどもね。

「そうかよ……ま、無茶すんなよな。言っただけで聞きやしねえガンコめ」

あゝあ、とでも言いたげに肩を動かした。「じゃ、行くけど」船員は私の目を真剣に見る。

「本当に、帰りは いいんだな？」

真に迫って聞いたもので私の中に緊張が走ったけれど。

「船長に言つて、用が済むまで待つていて やつてもいいんだぜ。」

帰りの船がココにあるとは限らない。どんな村かは俺も知らないが

……ちきしょう、やっぱり俺も行こうか」

なんと少し目を潤ませているその船員。何で……。

「ありがとう」

私は苦笑いするしかない。いい人だなあ、もー。

「いいですって。本当に。船長さん達にも言つておいて下さい。こ

んな私のために色々とありがとうございました。あなたも……

ありがとう」

私が そう言つた途端。

「ちきしょー！ 俺は どうなつても知らないぞおおおー！」

……。

叫びながら小船で、船員は去つて行つた。だいぶ岸から遠ざかつて、
「達者でなあああー！」と、私に向かって叫んでいた。

本当に いい人だ。こんな私なんかのために。

「さつてと……」

私は歩き出した。

砂浜を歩いて しばらく経つと人がチラホラと見え始めてくる。

忙しく海仕事をする人、走り回っている子供の姿、休憩している

おじさん……色んな人が見え始めた。

うわー……見た目、私の居た世界の人と変わらない。島での生活って こんなんなんだろうなあ。

少し冷たい潮風や、けたたましく鳴く海鳥。

何て のどか。気持ちがいいんだろう。

「つと……こんな事してる場合じゃなかったわ」

もつと辺りを観察したい所だったけれど、そんなに時間も ない。これから私が どのなるかも わかんないし。宿とか、食べ物とか 帰る方法だって まだ わかって ないんだから。

キヨロキヨロと高台の方まで周囲に目を配り、さてどうしようかと考えを張り巡らせていると。

高台の奥まった付近にある、頭だけしかココからでは見えない白い建物が目に入った。古ぼけている感じが、ココからでも感じられる。

私は すぐ、そちらに向かって歩き出した。何でか自分でも わからないけれど……神秘的な雰囲気魅かれて、といたらいいかも しれないな。

ただ私が そうやって歩いて行くと、後ろから年のいった おばあさんの声で叫ばれた。

「あすこは立ち入り禁止だ！ 近寄っちゃなんね」

びっくりして振り返った私は、すぐに聞いた。

「アレ、何ですか？」

声をかけたのは、海女さんの格好をしたおばあさんだった。

「おめさ、ヨソ者だんな？ よくこんなトコ来ただけんど、すぐ出て行けえ。この島の者は、ヨソ者さ嫌う」

そんな事を言っ私を睨んだ。一瞬、慣れない なまり言葉にも たじろいだけれど、私は頑張っって負けずに聞き直す。

「……………ココの島について詳しい人知りませんか？ 昔の事とか……………」

おばあさんは訝しい目で私を一睨みした後、私が行こうとしていたのとは違う所の方向を指さして言った。

「んだら、オババ様に聞いたらええ。オババ様なら何でも知ってな
さる」

言って捨てる、プイと立ち行ってしまった。

「あたしがオババだよ。もう今年で125歳になるねえ。早いもんだよ」

暖かそうな毛皮の服と、真っ赤で派手なスカーフ。腰を曲げて歩く姿が頼りないけれど……まあ、125歳だつていうし、当たり前かあ。

「で、何の用だい？」

私が あんまりジロジロと見ているものだから、オババさんはちよつと機嫌を悪くしたようだ。慌てて私は謝る。

「あ……すみません。何かココに来て……何ていうかこう、新鮮な感じがして気持ちよくて……ああ何言つてんだろ、私」と、頭を自分でグシャグシャと掻きむしった。

私は海女のおばあさんが教えてくれた、オババさんの家を訪ねた。いきなりの訪問だったはずなのに、オババさんは何処か落ち着いていて私をスンナリと出迎えてくれた。

私は、木造りのテーブルとイスのある明るい部屋に通され、腰を落ちつける。窓からはポカポカと太陽が見えて陽気さを演出していた。

出された紅茶（たぶん）を、私は美味しそうに飲んでた。

「なんだい。緊張しているのかえ？ ホホホ……救世主らしくない娘だこと」

「！」

ブハツと、少し飲みかけていた紅茶を吹き出しそうになる。

私が……バレバレ！？

「私の事、ご存知だったんですか？」

「ホホホ」

上品そうに私に笑いかける オババさん。

「その格好……そんな変わった服を着て。少女で。この島へ来て、私を訪ねて来る……」

ギョロツと、眼球の飛び出しそうな目で私を面白そうに見た。

「元の世界へ帰りたいんだらう？ 娘」

まるで何もかも お見通しみたいだ。何だか怖いっ、怖っ。

「あたしの前の代の魔女……その前の魔女……彼女らは、色んな書物を書き残してくれたもんでね。もちろん全部 読んだ。彼女らは語っていた……この島の“セイント・ブリッジ聖なる架け橋”を頼ってくる少女が現れると。決まって彼女らは重い使命を背負った……“救世主”である。まさか本当にその通りに なるとはね。しかし早いこと……青龍が復活すると噂は あったが、そんなはずが ないと思っていた。あと500年は先の事だと思っていたのにねえ」

一気に話し終えたオババさんは手元の紅茶を飲んだ。そして飲んだ後、フー……と、窓の外の景色を眺めた。

そつと わかれば話は早い。私は そんな風に思い、気兼ねする事なく気持ちを素直に ぶつけた。

「青龍復活の理由は……いいんです、今は。私は、元の世界へ帰りたい。さっき言った“セイント・ブリッジ聖なる架け橋”……つてやつ。それが どのなののか知らないけど。とにかく、それで帰れるんですよね？ 元の世界に」

私の顔も声の調子も固かった。失礼だったかもしれない。でも気は楽だった。

オババさんは黙ってずっと窓の外を見ている。

「お願いします。教えて下さい。私、元の世界へ帰りたいんです。完全に使命から逃げ出そうとしているけれど……それでも いい。私はココに、居たくないんです」

言ってしまった後、胸が苦しくなってしまった。

まさか私……嘘を言っている？ いや、そんなはずは ないわよね。これが私の本心なんだから。

「……まあよい。教えてやろう」

パツと、私は明るい顔をしてオババさんを見た。オババさんは今まで座っていたイスから立ち上がり、窓の外を指さした。

「あそこじゃ。あの、奥の白い建物。由緒正しき神殿だつた所だ」

そこは……私が最初に行こうと気になっていた場所だった。

頭だけしか見えなかった、海に面して高台に なった所の もつと奥の奥の所。白い建物。あそこ、神殿だつたんだ。神秘的だと感じたのも頷ける。

「その昔、神が住んでいたという言い伝えがある。一般民は立ち入り禁止になっているから、コッソリ夜にでも行くがいい」

神が住んでいた？ …… 天神の事だろうか。だとしたら天神は

この世界の何処かへ移動したという事になる。何故か？ ……

きつと この島に冒険者とかが昔、出入りするようになったからかな。

そういえば前、鵜ウが言っていた。レイが天神に仕えていた所……人間が普通に行ける所じゃなかったって。その時すでにココを捨てて、そこへ移動したってわけね。

“聖なる架け橋”セイント・ブリッジ かあ……。またそんな珍妙なものを。

私は先が見えたからか少しづつ元気が出てきていた。「よしっ！」
両の手を握り締める。

「ありがとうございます！ さっそく今夜に行ってみます。お世話になりました！」

勢い余って立ち上がった私は、お辞儀を。するとヒジをついていて無表情なオババさんは変な事を言う。……言った。

「そんな心構えでは“聖なる架け橋”セイント・ブリッジ なんぞ、見つける事もできんわ。まあ、じっくり考える事じゃな。それまで この家に居てもよいぞ。あたしは もう寝る……勝手にせい」

そうして、本当にサツサと奥の部屋に引っ込んでしまった。後に残された私は、妙にその言葉に引っかかってしまう。

(じつくり……何を考えるの?)
わからなかった。

テーブルでウトウトと居眠りしていると、あっという間に夜になってしまった。

「じゃ……お世話になりました!」

と、私がニコニコと。手を挙げて笑っていると、

「あたしゃ何もお世話しとらん」

言い返されてしまった。うう、冷たい。

私はオババさんと別れ、夜道を歩いて行った。辺りでは虫の音や、遠くの空では微かに鳥の声が聞こえた。

立ち入り禁止と聞いてコソコソ気味に。見える白い建物をめざし、そこまで繋がっていると思われる長そうで緩やかな傾斜の坂を上り始めた。

しかし長そうな坂だな……傾斜 何度くらいなんだろう。どうでもいい事を考えながら、懸命に ひたすら歩いた。

「なんの、根性!」

時々、意味不明でも言葉を叫んだり。

そうでもないかと、疲れてしまっんじゃないかと思って。

夜だしね、今。

「ふいー……」

てっぺんに着く頃には、足がへトへトになっていた。

しばらく黙って うずくまり、ガクガクする足を押さえた。ゼーゼーと息を整え、後ろを見ると坂の下が見渡せて、村の家明かりがポツポツと螢が飛んでいるかのようでキレイだった。

ふう、と息をつき薄っすら かいた汗を手で拭くと、「んしょっ

と！」と立ち上がる。

再び前方を見ると、古い白い建物は もうすぐ そこに現れていた。

かつて神の居た神殿……今は廃墟と化し、もの寂しい。

「そういえば摩利支天の塔も、こんな感じだったな……」

様相は似ていた。建物の一部分が崩れたガレキの山。白い壁、柱と、床は大理石で できていそうだった。誰も居ない、もの寂しさが空間を作っているかのようで。生物の存在すら感じない一つの世界がココに でき上がっている。

私が一歩足を踏み入れると、沈黙の空気が私を出迎えている。

（セナと2人で塔に踏み込んだっけな……蛍は敵で……でも、そこで仲間になったんだよね）

つい最近の事なのに もうずっと前の事のように感じた。

「何だろな……コレ」

呟きの音は大きく響く。自分の胸元を、服と一緒に掴んで俯いた私の胸を締めつけるもの……コレって何なのだろうか。切なくて、

悲しくて……息苦しい。

「オババさんも変な事を言っていたし……私も何か変。……まったくもー」

と、勇み足でブンブン腕を振り上げていたわけだけれど。

急にハタと歩みを止めた。

「まさか魔物が出るんじゃない……」

自分で言っつて、背筋が凍る。

思い出されるは摩利支天の塔のゾンビ達だった。

……ゾンビ！

「ひいひいっ」

私は声を上げて肩がすくむ。手に汗がベツトリだ。

まさか……オババさんが言っつた「見つける事も できない」っ

て、そういう意味だったり？ すっごい凶悪最強な魔物が居たり……し、て？

「嘘うそ！ 嘘ったら嘘よ！ ねえ！？」

と、誰に向かつて言っているのか……後で自分にツッコんでいた。

しかし考えられない可能性じゃない……非常に、まずいんでは

「だ、だめ。早く“セント・ブリッジ聖なる架け橋”を見つけるのよ！ だだ大丈夫

！ 私にはコレが……」

と、右手に はめられた指輪を見た。

はあ……と、ため息は指輪に当たる。そして小さな安心感で私は

包まれた。

また、指輪の存在に お世話に なってしまったな。

(私…… 本当は帰りたくない……の、か、な？)

よく わからない。

私は引き続き神殿内を歩き進めてみる。上から見ると、丸い回廊が中心を取り囲んでいるような建物の造りで、でも壁や柱なんかは何処も かしこも剥げ、崩れ、かなり傷んでいる。大きな亀裂を含んでいる所も。いつ崩れても おかしくは ない。

幸いな事は、危惧していたような魔物の姿は ない事だ。油断はできないけれどね。

「奥に あるのかなあ」

私は“セント・ブリッジ聖なる架け橋”を探し続けた。しかし見つからない。思い切り『橋』を想像していたんだけど。『橋』だろうが『箸』だろうがユキオだろうが見当たらない。それらしき気配も何も なかった。ただ静寂なガレキの佇まいが あるのみで。

やがて私は、そのガレキの石の上に腰を下ろして休んだ。「ふう」ため息ばかりだ。

「疲れる事ばかりかし。やんなっちゃうなあ……もう」

でも元の世界に帰ったら、こんな風に疲れる事も なくなる。あったかいお湯にでも浸かって後はグッスリふかふかベッドで眠るだけ。朝起きたら、見慣れた天井。着慣れた制服。お兄ちゃんの顔。

できたてラーメン……。

ぐっ……。

ありゃ。

ラーメン、って思ったら お腹が鳴った。さっきオババさんの所で ごちそうに なったのに。まあ、想像するに妖しげな食卓だったけれど。本当に美味しかった。

マフィアの料理も美味しかったなあ。中華料理と あんまり変わりなくて。ラーメンの味もピカイチだった。いつも お兄ちゃんの味で慣らされている私としては、見方は厳しいけれど。評価は高い。行列が あつたら私も並ぶだろうな。

お兄ちゃんと並んで、一緒にマフィアが働いてくれたらって思う。マフィアは優しい（たまにキツイけど）。孤児の子供達の面倒をよく見ていた。私の家で本当に働いてくれたら、きつと上手く やっていけると思うよ。

面倒見が いいのはカイトもだ。妹思いのカイト。ちょっと変な人だけれど、人形作りにかける情熱には びつくりよね。そうそ、ちよこつとメノウちゃんに聞いたけれど。メノウちゃんとカイトが 2人でキャンプに行った時。

カイトは自分の背中が燃えている事に気がつかずに人形作りに没頭し過ぎてたんだって。

ほんとーに、変な人！ メノウちゃんも大変だ（火を消したのはメノウちゃんらしいよ）。

大変と言えば、紫も大変だ。わがままな蛭ちゃんに ずっと付きっぱなしで。本人、何考えてるのかが わからないけれど。

何考えているのかが わからない……レイやハルカさんも そう

よ。いくら復讐のためだからって、関係のない人達まで巻き込んで……私やセナが、どれだけ辛い思いをした事か！

「あ……」

つい声を漏らしてしまった後、ドキリと胸が鳴った。

セナ……。

……とつてもキレイで女の人みたいで、そう言つと怒るんだけど。とつても強くて、とつても優しく。私のそばにいつも居てくれた。時々、バカやっていたけれど……。

あんな人、見た事ない。一緒に居て あんなに安心できる人って居ない。

今、元気で いるだろうか。

きつと怒っているだろうなあ。勝手に私、出て行っちゃったから。そう言えば私が この世界に来た時に初めて会ったんだっけ。初対面からセナは私に とびきり優しくかった。私の話す信じられない話も すぐに信じてくれた。

襲いかかる魔物から、いつも助けてくれた。勝てそうにない紫とかが相手でも、立ち向かって行った。私が さらわれた時も、マフイアと一緒に心配して すぐに助け出してくれていた……。

強くて、カツコよくて、いつでも私のヒーローだった。

だった……今は もう、過去の事。もう会えない。二度と会えない。

「そんなの……」

思った途端、言葉が出た。

「いやだ……」

視界が歪む。たまらなく胸が苦しくなる。

私は おかしな事を言っているのだろうか。無理な事を言っているのだろうか……？

究極の わがままなのかもしれない。

元の世界に帰りたい。でもセナとは離れたくないなんて。

(私……)

気が ついた。

(まだ、迷っているんだ。帰るかどうかを。オババさんは それを見抜いたのよ……だから、だから私には橋は見つけられないって……)

「セナに会いたい……」

それが素直な……私の本音だった。

その時。

ジリリリリリ!

「!?!」

凄まじい音が何処か近くで鳴り響く。「え!? コレ!?!」

そう、その けたたましい音の正体は。

ポケットに入れておいた、船で会った不思議少年に もらった鈴。よく中を覗き込んでも、スイッチなんて何処にも ない。勝手に鳴っているんだ。どういう構造なんだろう。

慌てふためいてオロオロしている。

「勇 気 …… ?」

背後から声がした。

振り返ると、そこには。

「セナ……?」

……こっちも驚かすには
いられなかった。

《第22話へ続く》

第21話（精神不安定）（後書き）

【あとがき】

主人公の元気が無いと作者の元気も無いですね（シュン……）。
次話でテンションは上がるかも（サテ？）。

ブログ第21話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog-entry-63.html>

ありがとうございました。

第22話（聖なる架け橋）

神様って居るんだろうか。

居るんだとしたら、コレって神様の気まぐれ？

『会いたい』って言ったなら、会わせてくれるだなんて……。

「勇気……?」

「セナ……」

しばらく私もセナも、ぼつと突っ立って相手を見ていた。

「本物!？」

声を揃えて そう言い合った後。再び お互いを見て、あははは……と笑いあった。

だが、笑うでは済まなかった。

「ちよつと待て。今、お前……」

と、セナが こっちに近づこうとした時。セナと私の間に見えない透明の『壁』があった。

バンと ぶつかつたセナは鼻を押さえながら、壁を叩いて怒る。

「おい、コレ、どうなつてんだ!？」

「セナこそ、そこ、何処？ キースの街に居るんじゃ……」

ドンドン！ と見えない壁をいくら激しく叩いても無駄で、ついに諦めたセナ。

フー……と一息ついた後、落ち着いて話し始めた。

「ああ。お前が どっかに行った……って蛭が言うもんで、まさかと思っただけ。とりあえず帰ってくるかもしれないから、ココに

しばらく居ましょってマフィアが。キースの街の診療所の所に待機してる」

そうなの？

じゃあ……セナの姿はココにあるけど、実際セナは診療所に居るんだ？

「そっか……私達、姿だけで お互いに違う場所に居るんだね」
私の話を聞いてか聞かずか、セナは話し続けていた。

「こっちはケガ人が山ほど居るもんで、退屈しないぜ……おい、それより」

私は次に来る言葉を予想して、ドキリとした。

「何で勝手に どっか行っちゃまうんだよ！ 俺だけじゃなく、皆心配してたんだぞ！」

予想通りの言葉を聞いて、胸が ますますチクチクし始めた。

「ごめん、セナ」

「謝って済むかバカヤロー！」

バ、バカヤローって……そんなあ。

……でも仕方ない事よね。誰だって怒るに決まっている。

「だいたいなあ！ 無理しすぎなんだよ！ 疲れたなら疲れたって言えよ！ 言わなきゃわかんないだろ、そーいう事は！」

腕を組み 目を閉じ 眉を吊り上げ 怒りをあらわにするセナを前に、私は何も言い返す事ができない。

「……うん。そだね」

「バカみてーに“何でも ないよ”って言われたら、こっちも気のせいかって思うだろ!？」

「うん」

「シヤンとしろ、シヤンと！」

「うん……わかってる」

「わかってねえよ！ お前は いつも」

「そんな事ないって」

「いや、口だけだ！ わかったフリして絶対わかってない。お前は一人で何でもかんでも抱え込みすぎるんだよ。何でも隠したがるから、こつちだつて推測でアレコレ考えるしかない。皆も俺もお前を理解したいのに、それが できない。いつもそうだ。今回もそうだ。お前、いつまでコレを繰り返すつもりだ。いい加減にしろよ！」

……それを言われ、私はクルリとセナに背を向けた。

ちよつと、シヨックだつたんだ。そんな風に人に言われた事がなかった。そして今、言われて初めて気がついたんだ。

私って、皆と壁を作っていたのかもしれない。他人に深入りしない……ううん、したくても何処か退けてしまふ。それは、自分の所に他人が入って来るのが嫌だからかもしれない。……要するに、プライバシー？ 他人の心に侵入しない代わりに自分の心にも他人をいれない……。

自分の身が大事だから。

誰にも知られたくないから……だ。

私は学校で いじめにあっていた事を、セナ達にも お兄ちゃんにさえ話していない。話す気なんて全く なかつたんだ、最初から。そうやって、自分の身を守っていた。

知られたら、嫌われるかもしれない そんな恐怖感からだつた。セナやマフィア、蛭でさえ、自分の事を色々と語ってくれたのに。私自身の事について話した事は、ほとんど ない。あつても、楽しかった事とか思わず笑つてしまふような事とか、そういうのだけ。私、怖かつたんだ……話す事が。

「勇気！」

しばらくの沈黙の後、急に呼ばれて びっくりする私。

「早く帰って来いよ。皆 待ってる」

そうセナは優しく語りかける。

とても優しく……優しく。思わず涙が こみ上げる。

セナに背を向けたまま、首を振る私。

「私が居なくなつて青龍は封印できるよ。七神の力で きっと。もしたら私は必要ない。元々、無理だつたんだよ。だつて私、なんも できない。ただの人間だもん。セナみたいに力も ないし、マフィアみたいに強くない。カイトみたいに一つに集中できないし。自分がピンチの時は いつもセナ、お兄ちゃん助けてつて、叫んでる。…… コレが天神に選ばれた者？ コレが救世主？ …… お笑いよ。こんな邪魔者。どうせ私は こっちの世界でも元の世界でも邪魔扱い。セナだつて呆れたでしょ？ 世界の命運を、こんな奴にかけるのかー！？ つて」

空を手で仰ぐ。でも、相変わらずセナに背を向けたまま。

セナは黙つたまま何も言わなかった。

「だから お望み通り、居なくなるのよ。こつちだつて清々するわ。救世主なんて肩書きから解放されてね。向こうの世界へ帰つて、ゆつくり羽を伸ばすんだから」
と、腕を思い切り伸ばした。

セナは静かに口を開く。

「だから帰る……と。どうせココに居ても邪魔だから……と」

セナが悲しそうに言つても、私は振り向こうとは しなかった。
夜風が何処からか吹き抜ける。冷たさが心地 良かった。

今度の沈黙は長かった。破つてくれたのはセナの方だった。

「……じゃあ何で泣いているんだ……？」

……。

……言われて、私は この時初めてセナに振り向いた。私の両目からはボロボロと、涙が後から後から こぼれていた。

何か悔し……泣いてたのが、バレバレだったみたいだ。

ヒク、と しゃくり上げながら黙って俯うつむいていた。眉間にシワを寄せて。

一回そうなつてくると、なかなか止まりそうに ない。

「あのさあ……」

と、頭を掻きながら。セナは天井の方を見ながら、言いくそうに話し出した。

「確かに最初は意外だったさ。こんな小娘が、世界をどーにかしよ
うだなんて。たぶんマフィア達だって そう思ってたと思う」

ハッキリ言ってくれる。セナは淡々と話しづらそうでも話してく
れた。

「俺、正直いつて嫌だった。七神の一人なんて肩書き。俺には人
はない力が あることあるけど、それで世界をどうにかするなん
て全然 信じられなかったし。お前が現れた時、“嘘だろ!?” っ
て……思ってた。ホント、勇気を恨んだ事も少しあったよ」

今度は下を見る。

「でもさ……俺、勇気に会えて変わったと思う。なんつーかな
あ……毎日が楽しいというか……満たされてたような気がするんだ。
不思議と、さ」

私は黙って聞いていた。

「勇気に俺、救われたと思う。色々。だから、そのうち……こい
つと、世界変えてみるのも面白いつて思い始めたんだよ。なのに
その矢先、居なくなっちゃって。ガツクリ……何だそれ、って感じ」

と少し笑ってみせた。

「勇気、自分には必要ないって。ずっとそう思い込んでたんだな。一人だって。邪魔だって。もし俺が今 言った事をもっと早く言っていたら、こんな状態にはならなかったんだろうな。一人で何でも抱え込むなって さつき言っただけど、人の事は言えないかもな。俺だって本音 隠してたわけだし」

そう言っただけで自分の頭を叩く……私は泣きながら、少し呆れていた。私は涙声を我慢して、頑張って話し返した。

「私…… キツイ事 言っちゃったね。清々する、なんてさ」

そう言っただけで顔を上げた時、セナの優しい顔がニヤッと笑った。

「今のが本音なんだろ？ OK、OK。誰にも言わねえし、俺は怒らねーよ。それに だって本音を言う時は言葉遣いが汚くなるもんだ。俺だって“世界を変えてみるのも面白い”なんつーシヤレにならない事を言っちまったもんね。コレ、内緒だぞ」と、人差し指を立てた。

私はクス、と笑ってしまった。

「勇気の本音は わかったけど。でもやっぱり、勇気には こっちの世界に居てほしい。皆も俺も、そう思ってる。……ダメか……？」

セナは真剣な顔で私を正面から見た。私の胸の内がチクと、音を立てる。

力なく私は……。

……。

…… 微笑んだ。

「それは…… すごく嬉しい言葉だよ。ありがと……でも、でもね！」
セナの顔を見上げた。

「私、一度 帰って、言わなきゃいけない人が居るの！」

途端、セナの片方の眉が上がる。私は少し慌てた。

「お兄ちゃん、学校の皆……私、決着^{ケリ}をつけなくちゃ。さよならって言って……そうしたら、また こっちの世界に戻って来るから！」

絶対よ！」

セナは まだ難しい顔を崩さない。

「本当か？」

私は大きく首をタテに振った。「うん！」

「絶対だな？ すぐ帰ってくるんだな？」

「うん！！」

セナは やっと、安心しきった顔で少し笑った。

「わかった。絶対、帰って来てくれ。皆で待つてる、勇気」

見えない壁に手をつけて再び優しく微笑みかけるもんだから、私はドキドキバクバクしていた。

で、そんなすごくいい雰^{ムネ}囲^{トク}気^キに なった時。私の背後に、すさまじく輝く光が出現した。

振り返ってみると、強い光の中心から薄っすら道のようなものが伸びてきて。眩しいので見えにくかったけれど、目を凝らして見たそれは……光の“穴”へと。次元を超えて、向こうへと続いていくかに思える。そして まるで私を誘っているかような、橋のような……あ。

「セイント・ブリッジ 聖なる架け橋”だよ、お姉ちゃん”」

すぐ真横の方から、声が聞こえた。子供が居た……。

「あなたは……」

その子供とは。

船の中で私に鈴を渡して去った、不思議少年。その子だった。

「ベル売りの」

「ベル売り？」

セナが首を傾げている。

「僕？ 僕はチリン。ベル売りのチリンだよ。この鈴、どう？ “通信鈴” っていうんだよ。役に立ったでしょ」

そう言っただけが、ずつと握り締めていた鈴を指さし、ニッと笑ったので私も、つられて笑ってみた。

何だか笑ってしまった。ただ何となく。

「自分の“会いたい” と思った人と交信しあう事が、できるんだ」
チリン少年は得意そうに、へへ、と鼻の下をこすった。
「そうだったの！」

私は、びつくりしてセナをふと、見た。会いたいと思った人……。私の中で恥ずかしさのような、こそばゆいような、奇妙な感覚が走る。私もセナも、何も言えない。

「さ。早くココを渡って行きなよ。せつかく“橋” がお姉ちゃんの通行を許可したんだ。この先は、お姉ちゃんの居た世界。怖くないよ」

チリン少年が私の服の袖を引っ張って言った。何で知っているんだろうと、ちよつと目をパチパチしていたただけだ。

「……そうね。行こうかな」
返事をした後…… ツンとまた鼻の奥が刺激されていた。

セナに微笑みを向ける。涙が出るほどでもないけれど……でも。足を踏み出す度胸や勇気がいった。

元の世界に帰ったら

セナや皆に会えなくなる

でも、いつか帰ってくる。必ず、帰ってくる。

セナとの約束を必ず果たしに。

「バイバイ。セナ……」

サツと目を伏せ、私は思い切って光の中へと駆け出した。笑顔のまま。

一回も、振り返らずに。

「早く帰って来いよ！ お前は一人なんかじゃない！ ましてや邪魔なんかじゃ絶対ないからな！ 皆が待ってるから！ だから、だから」

セナの声は私にとって、段々と小さくなっていく。でも私の歩みは止まる事は無い。ただひたすらに、前だけを見て。私には走る事しか頭に無い。ないから、だから。転ばないように。決心が鈍らないように、真っ直ぐ……。

……好きだよ……セナ……。

私の中の誰かが、呟く。とてもとても小さな声だった。

「頑張つてね……救世主のお姉ちゃん……」

と、チリン少年は帽子を被り直して、去って行った。

「帰って……来いよな……」

セナは診療所の部屋に居た。見えない壁にドンと、最後の一殴りをする。

すると徐々に橋も光も壁も消え、普通の状態に戻っていった。

たまたま部屋の前を通りがかり、話し声がしたからと数センチ開けたドアの隙間から様子を覗いてみた人物が2名。蛍とメノウだった。

セナがガツクリと正座し うなだれている様子だけを見て、コソコソと2人は話し合っていた。

「……セナ、重病ね」

“セイント・ブリッジ聖なる架け橋”は姿を消し、静けさの戻った元神殿。勇気が落と
していった鈴を拾い上げる。

勇気達が去った後……夜に紛れ、ココに訪れた者。それは、オバ
バだった。

「救世主は また……元の世界へと帰っていったか。これで何人目
だろうねえ……元の世界へ帰った救世主は……」

拾い上げた鈴は、風にさらされオババの手の上でサラサラと砂
のように崩れ散っていった。チリ……ンと最後の音を出し役目を終
えた鈴は、やがて砂となって風化した。

「面白いのは、一回 元の世界へ帰った救世主は また必ずこつち
の世界へ戻ってくる事だな。はてさて、今回も かのう……」
と、上着と下に着ているローブの裾が風で めくれそうなのを押さ
え、立ち去り出した。

「救世主なんて……誰が言い出したんだろうな。四神封印の際……
死んでしまおうというのに」

そう言い残し、空虚と化した神殿を後にした。
寒い風は、中を走り駆け回る。

夢を見た。

何処かの世界の、昔話らしかった。

『或る日 天地開闢かいびやくの時 神は まず 闇を鎮めなさった』

神様が居る。美しく誇らしく、強く透き通りそんな神様の姿だ
た。

そんな神が地上に巣くう勝手 気ままな闇達を、神の その力を
持つて従えた。

『闇の精霊の王は 闇神となりて 闇を司る』

神は やがて、闇の長を任命し、その長に指揮をとらせる事にし
た。

その長とは闇神である。他の闇を従え、闇の神となった。

『或る日 闇神の腹の中 神が弑に 一攫^{つか}みの火を放ちなさった』

次に神は、火を作った。そして闇神と共に生きさせようと試みた
のだった。

『炎の精霊の王は 炎神となりて 炎を司る』

闇の中で生まれた火は、仲間の火を増やし、他の火を従え、火の
神となった。

『或る日 弑神の間で 神の知らぬ間に 輝く光が生まれた』

神の知らないうちに、闇神と炎神は互いに愛し合ってしまった。
そして弑神の間に子が生まれた。

『光の精霊の王は 光神となりて 光を司る』

子は光として、仲間を増やし、光の神となった。

『或る日 怒り狂った 神の策略で 風を吹きなされた』

光という存在を知り、腹を立てた神は、参神もろとも吹き飛ばそうとした。

『風の精霊の王は 風神となりて 風を司る』

そうして生まれた風は、仲間を増やし、風神となって、闇・炎・光を吹き飛ばそうとした。

『或る日 力を使ひて 神に逆らひて 大地を造りなされた』

闇神は炎神を庇おうとした。神に逆らうても、炎神を護ろうとし、闇のその力で大地を造り、飛ばされそうな炎神を受け止めようとした。

『地の精霊の王は 地神となりて 地を司る』

そうして生まれた地は、仲間を増やし、地神となりて炎神を護った。

『或る日 力を失くした 神の涙が 水となりて流れた』

持てる力を全て使い、疲れ果てた神は、あまりの悲しさに一粒の涙をこぼした。

『水の精霊の王は 水神となりて 水を司る』

一粒の涙は分裂し、水が生まれた。仲間を増やし、水神として現

れた。

『或る日 見かねた姿に 神の為にとて 木を育てなさった』

力を使い果たし泣きに泣く神に、闇と炎は嘆き、仲直りの為に木を作り出し、

神に捧げた。神は許し、木を育てた。

『木の精霊の王は 木神となりて 木を司る』

こうして育てられた木は、仲間を増やし、木の神となった。

……

神が闇を鎮め、炎を作り、光のせいで、風を吹き、地があったから、水を流し、木をもらう話。

聞いた事が ない神話。

悲しい物語。

だけど温かいストーリー！。

何処か懐かしくて、切ない話。

そうだ、七神創話だ。

七神創話の………

……

……それって、何だっけ……？

あれ……？

……？

目を開けた。

見慣れた……懐かしい天井。

時折 吹く風が涼しい。

(あ……れ？ ココは……？)

ゆっくりと起き上がり、辺りを見渡した。

ボーっとして、まだ何だか意識がハッキリしない。すると ちょ

うど、ガチャリとドアを開けて人が入って来た。

「ゆ……勇氣！」

そう言つと彼は、持っていた鍵を落とした。

「気づいたのか！ 気づいたんだな！？ お兄ちゃんだぞ、わかる

か!?!」

急いで私の そばへ走り寄り、まだボーっとしている私の肩を掴んだ。軽く揺さぶられ、私は段々と……意識を取り戻していった。

「お兄ちゃん？ ……私……？」

言つと、真っ赤になって全身で喜んで、しわくちやの顔で泣きながら私の髪をグチャグチャと掻き混ぜる。

「お前が行方不明になって、警察や近所の人と一緒に捜しまわって

……本当に この一ヶ月間、死ぬ思いだったんだぞ！」

「一ヶ月……？」

「ああ！ で、一週間前、港遺跡で お前が倒れていたのを、そこ

の調査員の人が見つけて下さったんだ！ パジャマ姿でボロボロで、
一体この一ヶ月、何が あったんだ!？」

「遺跡……」

私の中でグルグルと、記憶を呼び起こそうと何かが渦巻く。

私は今、自分の部屋の自分のベッドの上に居る。ココは私の部屋
だ。それは そう。

寝ている前は……ええと、待って……思い出すから……。

だが しかし、抜け落ちたように思い出す事が出来ない。何故……
…?

えっと確か……家を飛び出したんだよね？ そう、遺跡に行った
んだわ。

それから……？

「無理するな。今、水でも持って来るよ。ゆっくり思い出せばいい
からな」

そう言っただけ涙を拭きながら、部屋を出て行った お兄ちゃん。私
は一生懸命、思い出そうとした。

でも いくら考えても、思い出せなかった。

「何……だっけ？ 何か、長い夢を見てた気がする……」

フワッ……。

ふいに、風が入って来る窓の外を見た。

飾られた風鈴が静かに鳴る。青い空に白い雲が浮かんでいる。

(私……どんな夢を見ていたんだろう……まあいいや。そのうち思
い出すわよね！)

そうやって元気を出して、思いきり伸びをした。

そつだ、明日から学校に行かなくちゃ……そつ思いながら。

《第23話へ続く》

第22話（聖なる架け橋）（後書き）

【あとがき】

何気に無茶な事を書いていた過去の私なんですが。

勇気は始め一人で船を漕いで行く予定でした。よく考えてみたら、13歳の女の子が病み上がりで、しかも本人が体力無いつて言ってるのに。それは無理だろ沈む、と。

そんなわけで船員が登場し大活躍。こうやってキャラクターは生まれるわけで。今後の登場予定は無いけど（はは……）。適当に名前をつけておいて下さい。

ブログ第22話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-64.html>

ありがとうございました。

第23話（記憶の断片）

この世に四神甦るとき 千年に一度 救世主 ここに來たれり
光の中より出で来て 七人の精霊の力 使ひて これを封印す
七人の精霊の力とは 転生されし七神鏡
これを集め 救世主 光へと導かれたり
満たされし四神獣は また千年の眠りにつく

「ふ……わあああ」

大あくびをしながら制服に着替える。そして黒のハイソックスを履いて、カバンを持って自分の部屋を後にする。トタトタと軽やかに階段を下りて一階へ行くと、やはり いつも通り。店の厨房でいい匂いをさせている我が兄。いい匂い……香ばしい、ラーメンの香り！

「おはよう勇氣。調子は どうだ？」

と、明るく微笑みかける兄。手には お玉を持って、スープの入った大鍋の端を叩いている。

「この、通り！」

私はガッツポーズをして、兄の前のカウンターに座った。兄は手際よく、どんぶりにラーメンの麺と具を盛り付け、スープをたっぷりと かけて箸と共に私の前に置いた。

朝からラーメン！ これが私の日課！

「あ、甘い……」

ゴホゴホと むせながら変な顔をした。

「ん？ そりゃそうだろ。勇氣が居ない間に研究し開発した、“特

製！ 勇ちゃんラーメン・パート2”だ！ 見た目は普通のラーメン。しかし その実体は……」

「ん？」

私は奇妙な物を箸で つついた。つまんで出してみると、それは

……。

「まさか……チョコレート？」

箸に つままれた茶黒い固体物の向こうで、兄がニツカリと笑った。

「あたり！ 超激甘！ チョコたっぷりラーメン」

「……ごちそうさま。私、もう行かないと」

と、箸をどんぶりの上に揃えて置きカバンを持った。水で口の中をすすぐ。

「行ってらっしゃい。気をつけてな」

と手を振った。

そう。私は これから、学校に行くんだ。

「行ってきます！」

手を振り返し、勢いよく引き戸を開けた。

パアア……と、朝の光が眩しい。

……と、思ったらだ。

「松波勇氣さんですね！？」

「これから学校ですか！？」

「一体一ヶ月も何をしていたんですか！？ 教えて下さいよ！」

「久々の登校はどうですか！？」

……。

……という、言葉が ぶつかってきた。

呆気に とられて見ると、私を取り囲むかのようにマイクだの力メラだのを持った取材陣が押しかけて来たのだ。さっきの朝の光だ

と思ったのは、カメラのフラッシュだった。

「す、すみませえん。通して下さい……」
と、人混みかき分け、前へ進んで行く。

ワイワイガヤガヤ……訳のわからない所に居るようだった。一体何で……。

それも そうか。

だって私、一ヶ月近くも行方不明だったんだもの。その間、兄は必死に私を捜していた。もちろん警察にも届けて、店も休みがちで店の前や中に私の写真付きのポスターを作りデカデカと貼って。“この子を見かけたら すぐに連絡を” って これまた大きく書いて色々、やってくれていたみたいだ。そこまでして本当に心配してくれていた。

それで、一週間くらい前。私はヒョッコリ現れた……というわけ。一ヶ月近くも行方知れずの少女が見つかった……と地元メディアやマスコミが聞きつけたのか他にネタがないのか。大騒ぎになっている。

「勇氣さーん！ 何か一言ーっ！」

「コメント下さいよーっ！」

せっかくの さわやかな朝も台なし。私は取材陣に追いかける。

でも、子供の足には敵わないさ！ チャツチャと まいてしまった。

「はー……これから毎日これかなあ……？」

まいた後。塀に手をつき ため息一つ。

学校に行くのって、疲れるう……。

「でも、ま、そのうち飽きて どっか行っちゃうわよね」

と、元気を出して歩き出した。

発見されて今日までの約一週間。私は病院へ通った。なんせ、一ヶ月近くの記憶がないもんだから。精密検査やら心理テストやら、

何でも やった。

ところが何も わからず。私の空白の時間は謎のままになってしまった。

で、しばらく安静に していた後。やっと日常に戻れたわけ。

日常、のほろほろ さつきみたいな報道陣に囲まれたりしちゃうとまだまだ本当の日常までには ほど遠いような気がするけれどね。

……そういえば。私、大事な事が抜けていた。

学校に行くという事は……教室に入る事だ。教室には、皆が居る。皆……私を畏に はめ込んだ お嬢、結果的に被害者に なってしまった新島さん、私から離れて行ったアッコ、私を無視し始めたクラスの皆……。

私は“イジメ”に遭っていた事。

何で こんな事をすっかり今まで忘れていたんだろうね？ 普通、こんな事 忘れっこない。やっぱり私ってバカなのかも。

教室の前で足が止まる。中からはワイワイと声が騒がしく聞こえる。今、8時30分。ほとんどの人が もう来ている時間帯だ。今、ココで私が このドアを開けたら、いつせいに皆こっちを見るだろう。

そうしたら……どうなるだろう？ 前みたいに無視されるのかな。それとも指さされて笑われたりするのかな？ それか……集団で私を責め立てて攻撃するんだろうか。もっと最悪なら、暴力 振るわれたりして。

怖い……ドアを開ける事が、こんなに怖いなんて。

ガラスと勢いよく開けて「おはよう！」って言えば済む事。なのに、なのに……。

……だめだ。足が震えてきた。手も冷たいし、顔も蒼白なんだろうな。今、呼吸しているんだっけ？ それすら わからない状態だ。

どろじよう……怖いよ……。

嫌な汗が浮かんでいる。手で拭っても浮き出てくる。

ああ、こんな所にいつまで居たって仕方ないのに。誰か……。

誰か、助けて！

……

……

フワッ

……？

廊下の開けられた窓から青空をすくうような暖かい一吹き風が、私に向かって吹き抜けた。

その風は……とっても優しく……。

「……」

私は包み込まれた感覚がした。

「あ……」

奇妙だった。

普通の、いつも肌で感じていた春風なのに。どうしてこんなに今日は敏感なんだろうか。こんなに、風を暖かいと感じるなんて。

こんなに、透き通った気持ちになるだなんて。

深呼吸、一つ。

不思議だ……まるで、さっきの風が私の悩みや不安を全部かき消してくれたようだ。こんなに落ち着いて、冷静になれるなんて。

私は、いつせーの、せ！ という心の掛け声と共に。ガラツとドアを開けた。そして同時に、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

教室中 全員が いっせいに、こっちに注目していた。それこそ無言の対話でも しているかのように しばらくお互いが黙り合っ
て見つめている。

しかし私には目を逸らしたりするような迷いなんて なかった。

予鈴のチャイムが鳴り終わつたと同時に誰かが「松波だ」と漏らした。そして堰をきつたかのように、皆がワツ！ と騒いだ。

私は びっくりして転びそうになる。

もう無視でも暴力でも何でも なかった。

皆が私の元に駆け寄り、「勇氣イ」「何処行つてたのよお！」「心配してたんだから！」と口々に言い合った。

私がポカンとしてしていると、いきなり私の頭をグチャグチャと掻き混ぜたのは……アッコだった。そして笑い泣きながら「おかえりなさい」と言った。

クシャクシャになった髪を直す事さえ忘れるほどボケつとしていた私。すると前に いつもと変わらないド派手な容姿の、お嬢が立ちはだかった。

気のせいか、皆が静まる。

そして、私と お嬢は睨み合うように見つめ合った。いや、睨まれたような気がしたから睨み返すように見た、といったトコだ。

その様子を見た少女……が、私と お嬢の間に入り込んで来た。その少女とは……何と、あの か弱い新島さん。素直で、おとなしいはずの女の子。あの、イジメの原因ともなった手紙を読んでシクシクと泣いていた子。

その子が今、お嬢を強く責め立てるかのように立ち、真っ直ぐに睨み返している。

「峰山さん。松波さんに言う事があるでしょ」

彼女の口は そう はっきりと言った。私はと いえば、まだポカンとしているばかり。

「……ごめんなさい」

お嬢は、今にも泣きそうな顔をして小さく言った。でも しばらく間を置いて「ごめんなさい！」と深く頭を下げて、感情を込めた声でハッキリと強く言った。

私の思考回路が ようやく正常に戻って来たようで、髪を整えた。「……一体、私の居ない間に何が あったの？」とそう聞くと、新島さんが ゆっくりと説明してくれた。

「松波さんが行方不明だつて知つて、私はアッコちゃんと松波さんの家に行ったの。そして そこで松波さんの家庭の事情を知つて。私達2人、考えたの。松波さんが あんな手紙を本当に書くのかどうか……」

実際の所、私が書いたわけじゃない。私が書いた事に“された”だけ。

お嬢の策略だ。

「だつて、おかしいわよね。普通あんな手紙を堂々と手渡しなんかするものなんだろうか……下駄箱でもソツと入れておけばいいじゃない。ねえ？」

視線を振られた先のアッコは、コクンと頷いた。

私の方へ向き直して、新島さんは話を続ける。

「で、不思議に思つて、皆で話し合つて。誰かが、『松波さんがあ
の時、峰山さんがコレ書いたんでしょつて言つてた』つて言い出し
て。結局、峰山さんに問いただして峰山さんが書いた事が判明した
の。筆跡も似ていたし……それで。私達、先生に今まで あつた事

を全部話して、反省会を開いたの。いまだ行方知らずの松波さんについて、私達が やってしまった事について……作文だって書く事になって」

何と、新島さんの目の端に涙が溜まっていた。

「ごめんなさい。私、悪い事をして。すごく辛かったですよ？ ごめんね……」

そして、泣き出した……。

それから皆も、次々と「ごめんね」「ごめん、勇気」と言い出した。

……。

私も、たまらなくなって涙が出てきていた。

何だか、今まで堪えてきたものが急にワツと。胸の内から水が溢れてくるみたいに押し寄せてきた。

もう、泣くしかない。

すると また。今度は教室の窓から、暖かさを持った風が吹いた。

“良かったな。勇気”

……？

風の声が、聞こえた気がした。

こうして私は無事イジメから解放され、普通の学校生活を送れるようになった。まだ取材で追っかけてくる人の姿もチラホラだったけれど、次第に彼らは居なくなり、消えていった。

ああ、私、幸せなんだな……。

そう思うようになっていた。すべてが、上手くいっているよう

に感じられた。

でも……。

「勇氣。いつも その指輪はめてるね。何処で買ったの？」

「え……ええと」

教室の中休みの時間で友達に ふいに聞かれて、返答に詰まってしまうた。

「さあ……何処で買ったんだっけな……」

と、手を広げてみせ、右手の中指に はめられていた指輪を見た。

キレイな、神秘の色。薄い紫のも見えるし、光の具合による。

「キレイよねー。ちよつと貸してもらって つけていい？」

友達が言い出して私の その指輪に触ろうとした。しかし私は何故か その時カツと感情的に なって、友達の手を勢いよくバシリと振り払ってしまった！

「！」

驚く友達。私も すぐにハツとなって我に返った。

「ご、ごごごゴメン！ 痛かった！？」

慌てて謝った。友達は少しホツとして微かに笑って「いいよ、いいよ」と言ってくれた。

「ごつちこそゴメン。指輪、大事なもんなのね」

(え……?)

そう言われて。私は改めて指輪を見ながら考えてしまった。

「大事なもの……？」

頭に引っかかる。指輪が……どうして私、こんなものをはめているんだらうか。

すべてが日常で。別に何も ないというのに。何も……私を困らせる事も ないはずなのに。

コレだけじゃない。もっと他にも、アレ？ と思うような事が度

々起こった。

お兄ちゃんのラーメンを食べながら「アレ？　こんな味だっけ？」と一瞬　戸惑う事がある。お兄ちゃんのラーメンの味には　すっかり慣れきっているはずなのに。何で　そんな事を思うんだろうか？　街を歩いていると商店がヒッソリと　たち並ぶ中で。出先で飾られたシヨウケースの中の日本刀だのを見て……気分が悪くなる。

課外授業中に行った山の森で、デジャビュとも言える感覚と懐かしさが　あった。

帰り道では、子供が人形を持って走り回っているのを見ると自然に目が　そこへ行ってしまう。子供が黒い服を着ているのも同じく。関心が何故か　そっちに行ってしまうのだ。

何かを思いだそうとするんだけど……。

よく、わからない。

もっと　よくわからない事は……風が吹く度に、胸を締めつけるような痛さが　あるっていう事。私、ひよっとして病気なのかもしれないと思うようになってきた。

今日も学校の渡り廊下を歩いている時、風がふいに流れ込んだ。勢い余って持っていたプリントを2・3枚　飛ばしてしまう。それを拾うために屈み込むと　また　その痛みが　やってくる。

（何だろ……コレ）

拾い終え、立ち上がって　また歩き出す。

（私……何かを忘れている？）

その勇気をジッと観察していた少女が2人居た。向かい側の校舎の屋上の手すりに座り、少し口元をニヤつかせながら。

夜。

店を閉めてしまっても、お兄ちゃんは まだ後片付けをしていた。私は お風呂から上がったばかりで、濡れた頭をタオルでゴシゴシと拭いていた……その時。電話が鳴った。

ちようど そばに居た私が電話に出る。

「はい。松波です」

「もしもし？ 小谷ですけど……お兄さん、おられますでしょうか？」

電話の相手はキレイな声の女の人だった。小谷なんて人、知らないけれど。だが私は声に聞き覚えがあった。そして、つい聞いてしまった。

「います……けど。あの、お兄ちゃんの……彼女さんですか？」

後から考えたら、馬鹿な事を聞いたもんだと思う。きつと相手も そう思ったに違いない。だから、私が そう聞いた時に一瞬 黙ってしまっただろうな。

間は空いたけれど、少し経ってから返事をくれた。

『……そうよ。知っていたのね。そちらでバイトしている小谷です。変な言い方だけど……改めまして、よろしくね』

「あ……こちらこそ。妹の勇気です」
緊張が走る。

ああ、汗かいてきた。背中にも額にも受話器を握る手にも。また妙な間隔の間が空いたので、私は慌てて言いかけた。

「あ、あのつ。えと。お兄ちゃんに代わりますね！」

用があるのは私には ない。その事を思い出す事が出来て、声が ひっくり返りそうになった。だけれど。

『あ……ちよつと待ってくれる？』

「え？」

呼び止められた受話器の向こうで、ガサガサと紙の擦れる音がした。そして紙の束をまさぐっているような気配と。何かを探しているのだろうか。やがて『あったあった』と声が返ってきた。

『あのね』

小谷とかいう人の説明が始まる。私に合わせて わかりやすいように、ゆっくり落ち着いた声色で坦々と話し始めた。

それは どうやら、学校の話。私の今後についての内容だった。

「学校……ですか？ 港学園って……」

名前くらいは聞いた事が ある所だ。今まで あまり興味は なかった。

『ええ。中等部と高等部が あって、寮があるの。市内だし、そんなに遠くは ないのだけど』

「……」

『どうかしら？』

……最初、何を言っているのかと思った。でも、段々と この人の魂胆が見えてきた。

つまりは こういう事だろう。

私に兄と別れて寮に入れ、と。そうしたら、この人は兄と一緒に なって暮らせる。要するに私を追い出そうというわけだ。

（勝手な人……）

悲しく思う。

「わかりました」

わかってたまるもんですか。

「兄と相談してみますね」

本当は そんな事したくない。

「それじゃどうも。さようなら」
消えちゃえ。

ガチャン。

……

……受話器を戻したまま、身は固まってしまった。髪の毛先から、ポタリポタリとしずくが落ちる。しばらく、そうやって俯いていると、スツとそばにあつて目に入ったスリッパの片方だけを手に取った。

そして床に激しく叩きつける。

バシツイイイ……！

廊下中に響き渡った。静まる廊下……だけれど、私の心の中は穏やかではなかった。まるで激しい波のようだ。

「何だ？ 何の音だ？ それと さっきの電話、誰から だったんだ？」

店の方から 丈の長い のれんをくぐって、お兄ちゃんが やつて来た。顔を見た途端、スツと波風は収まってくれた。

「ん、間違い電話！。ねえ それよりさ。ちよつと散歩 行ってきていい？」

と言つが、兄は「もう遅いだろ、明日にしろ」と言つて また店へ戻つてしまった。

「ちえ……」

と頭を掻きながら。私は裏の勝手口から、気がつかれないようにコソソリと外へ出て行つた。

散歩……家の近くならいいよね。

私は歩いた。とりあえず、あてもなく。気の向くままに。

住宅が並ぶ道を抜け、遠くで犬に吠えられながらも道路に出て、

歩道を歩く。

はあ……気が滅入る。凹んでいる気分……さっきの電話のせいなんだけどさ。

どうして人間って勝手なんだろ。あの お嬢だつて、ちよつと自分が気に入らないからってだけで私や新島さんを陥^{おとし}れて。まあ、誤解も解けて晴れて堂々と学校へ行けるんだだけどさ。結果 良ければ全て良しって？ …… 本当に そうかなあ。

「あ……」

サツと、夜空を横一直線、一つの星が流れて行った。流れ星……本当に一瞬の事だった。

「願い事……」

私の願い……望みって何なんだろ？

“ 幸せになりたい ” …… かなあ？ うーん、単純かつ漠然ね。

そうやって色々と考えているうちに、近所の公園へ来てしまった。もう遅い時間帯だ。もちろん こんな時間には誰も おらずで、ヒツソリと公園内の空気ごと静かに眠っているようだった。

無意識にブランコに手を伸ばしてみる。そういえば公園に来るなんて自体が久しぶりだった。

両親が亡くなって以来、来る事は ほとんど なくなった。行きたいと自分から思う事も少なくなった。

いや、なくなった、というべきかも しれないな。

「ふふ……ひっそりブランコ」
ブランコに座る。

誰も聞いては いない。読者以外は。

キーコ……キーコ……。

昔に よく聞いたブランコの鎖の、きしむ音。勢いよく こげばこぐほど風が気持ちよかった。

風……。

風、か……。

肌で感じるたび、胸が苦しくなる。最初、気のせいだと思っていた。でも、日が経つにつれて それは違う事に気がついていった。私は何か……そう、何か を忘れているの。きつと それは重大な事……一体、何だろう。うーん……。

突然だった。

「どつやら全部、忘れてしまっているみたいね」

……！？

空を見上げた。すると私の上に、空では なく黒い影が いつの間にか あった。

滑り台の上に誰かが居る。

私の上に……要するに、滑り台の上に居る何者かの影が月明かりのせいで細く長く伸び、私の頭上へと届いているのだ。

さっきまでは なかった影が。

しかも、人物は2人だ。月明かりの逆光で顔も姿も暗くハッキリと見えない、2人が。

一体、こんな時間に誰？

「あ、あなた達は……」

ブランコを止めて、私は立ち上がる。

びっくりした顔で、この異様な状況の中に居た。

第23話（記憶の断片）（後書き）

【あとがき】

勇気の兄の名前は考えていない。どうしようか。“勇”が付くのは間違いないんだけど。意表を突いた名前の方がいいだろうか。そもそも、地球人だろうかゴンザレスだろうか。“勇”は何処行つた。

ブログ第23話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-70.html>

ありがとうございます。
勇気がグレませんように。

第24話（救世主覚醒）

段々と目は慣れてきた。2つの影は姿を現し、私と同じくらいの年の頃の少女だとハッキリわかった。

「私は天神の使い、アジャラ」

アジャラと名のつた方は、髪の毛はサラサラで肩の辺りで切り揃えられていて、白く薄い前開きの七分袖シャツにサスペンダー付きのショートパンツスタイルだった。子供っぽいオテンバなイメージが勝手に つく。そして、片手には何やら怪しげな杖を。何だそれ。

「同じく、パパラヤ」

……。

一方、関西弁を話すパパラという少女は、暗い中で少し肌が色黒に見えた。隣に居るアジャラと比べてみると、それは明らかだ。くるくるパーマがかかった髪で、黒くないな。ちよつと明るめの茶色が、金髪にも近いと思う毛の色だ。

何だか、これからテニスでも始めそうなウェア姿だった。肩から黒めのショルダーバックをかけて持っている。何が入っているのか勝手に想像しちやいそうだけれど。まあいいや置いといて……あと、タレ目に見える。それで気さくな印象を受けたんだけれど。

ともかく私は目がテンになって、滑り台の上に立っている2人を見ていた。

「あなたを迎えに来たの。救世主^{メシア}」

……アジャラが持っていた変な杖で私の方を指した。

「救世……主？」

私は自分を指さし、アジヤラが言った、これまた変な言葉を繰り返した。

何なの何なの？ さっぱり意味がわからない。

はっ……もしかして、子供を使った新手の誘拐！？ 私、何だかんだ言われて人質にとられるんじゃない……！？ んで、お兄ちゃんのところへ身代金の要求ン千万円……！？

いや、新手は新手でも新手のチカンとか！ あの2人は ひよっとして男だったりして（いや それはさすがに ないか……）。何でも いい。こんな時間に あんな格好の2人。言っている事も変だし、怪しすぎる。ココは ひとまず逃げるんだ！

私は そう決めてすぐ、ダァッ！ っと公園の入り口めがけて走り出した。

2人は それを見て慌てて叫んでいる。

「あ、コラ待つんや！ 逃げるんじゃないッ！」

しかし私は待たずに逃げた。

「どーやら全つ部 忘れてるみたいよ、やっぱり」

「どーすんねんっ。全く……」

「どうする？ パパラ」

「仕方ないやん。連れて来いい言われとるし。追いかけてよか」

「はあーい」

私は走った。とにかく走りまくった。

心臓がバクバクとしているのは走っているだけのせいじゃない。

さっき聞いた言葉……。

『あなたを迎えに来たの。救世主』

救世主　メシア……そう、それ。

その言葉に、何だか動揺しちゃって……一体、私の身に何が起ったと いうのだろう。

近所の間じゆうを駆け抜け、少し人気のある街中へ。

「コラあく待ちなさい！」

と、後ろで声があったので走りつつ見ると、何と電柱や高い塀をヒョイヒョイと軽い身のこなしで飛び移って追っかけて来るじゃあ、ありませんかあ！

忍者か！？ それとも怪盗パルン！？（勝手に呼んだけれど）

ギョツとした拍子に、前のめりにコケそうになったのを何とか堪えて、なおも走り続けた。やだ、一体何処まで追いかけてくるつもりなの！？

「いつちよやるう！？」

「了解！ くれぐれも、救世主は傷つけちゃダメよ！」

なんて会話も丸聞こえだ。意味がわからない。

ずっと行き先 知らず走り続けて そろそろバテてきた頃。視界に学校が飛び込んできた。我が港中学校校舎！ …… そうだ、学校の中なら隠られるかもしれない！

そう思いついた。しかしだ。門は閉まっているんじゃないかと、考えがよぎるも。

……そうよ！ 思い出したけれど、裏門の横のフェンス。確か穴が開いていたんだ！ あそこなら小柄な私だし、入れるはず！ 私の頭の回転は早く、行動も素晴らしく切りかえられた。

私は裏門へ向かう。

「あ、あれ、救世主、何処や！？」

少し離れた所でパパラの声を聞く。何で そんな大声を……まあ私には都合いいけどさ。

そして振り返ってチラリと見る。真つ暗な歩道。

そうなんだ。この近辺は街灯が たまたま壊れていたから真つ暗闇。よっしゃ、ラッキー！

パパラが捜しまわっているうちに、私は穴の開いたフェンスを簡単に見つけて敷地内へ。やっぱり予想通り小柄なおかげでサツと入る事ができた。

もぐり込んだ後は茂みの中を、物音をあまり立てずに ゆっくりと進む。パパラは どうやら まだ私を見つけられずにいるみたいだ。調子に のった私は ゆっくりと立ち上がり、辿り着いた校舎内に何処か入れる所がないか……壁伝いで窓を確かめていった。そうしたら、またまたラッキィ！ 一階の廊下の窓が一つ、閉め忘れているのか鍵が、開いている窓を発見した。それと同時に後ろの遠くで声がする。

「パパラ！ ココ！ この穴！ ココから入ったのよ！」
「……のやるー！」
と……あら、怒って いらっしやる。

私は構うもんかとはかりに堂々と窓を開け、ヨイシヨと校舎内に侵入。そして素早く窓を閉め、鍵をかけた。

鍵をかけたので、ふう……これで ひと安心だと、私は暗く冷たい廊下に へたり込んだ。

ちよつと散歩するだけが、こんな事に なっちゃうなんて。あの身のこなし。ただ者じゃない。一体、天神とか救世主とか、どういう人達なんだろう！？

シンと静かに真っ直ぐと伸びる廊下。気のせいかな、昼間よりも長く見えるね。

……なんて。詩人ボエマーやっている。

ガ シャーンッ！ ……

……凄まじい破壊音がした。

「見イ つ け た でえええッ！」

すぐ、パパラの怒り狂った声がした。ココから20メートルくらい向こうの廊下のガラス窓を叩き割り、強引に侵入してきたのだ！そして、中へと着地した後はジリジリと私を睨みながら近寄ってくる。

立ち上がった私も、後ろに一步一步と後ずさる。

ガシャーんツ。

「おとなしくしなさいッ！」

！

ぎゃあ！

何と、私の数メートル先の背後でパパラと同じくガラス窓をブチ破り、アジャラが杖を振り回しながら登場した。

シュビ、と杖を構えるポーズを鮮やかに止めてキメて。

しまった！ 挟まれちゃったじゃないのお！

万事休す！？

「こ………来ないで変態！」

私が つい叫ぶと。

「誰が変態や / よー！」

ツツコミを2人同時に入れられ、ますます焦る私……。

2人が変態でも変質者でも どうでもいい。捕まりたくないよ！
何とかしないと！

……私は咄嗟の判断で自分の すぐ横の窓の鍵をサツと開けた。
自分でも賞賛と驚きの素早さで、ほぼ同時に開けた窓から外へジャ

ンプして飛び出る事が できた。着地は成功し、即座にダツシユ！
体操選手も手を叩くほどの俊敏かつ大胆な行動だ。

ハテ？ 何だか この華麗さも懐かしさを感じたけれど。まあ気のせいね？

「コラあ！ 待たんかあい！」

私は穴の開いたフェンスの方向をめざして ただひたすら真つ直ぐに駆け出す。待てと言われて待つわけないでしょー！ とか頭の中で言いながら。

2人とも慌てて、逃げる私の後を追いかけて来るんだろう。

それも わかっていたから振り向かず、ただ逃げる事だけを考えていた。

「きゃ！」

ドテツ。

そして前のめりに こける。いやあああん、もおお！

その隙に、詰め寄って来た2人。「観念せえい！」
パパラの手が私の腕へと伸びる。

(い……)

そして掴まれた。

(いやあ！)

鼓動が高鳴る。

(助けて！ 誰か！)

誰かって、お兄ちゃん？

「ジツとせえい！」

パパラの怒鳴り声。

暴れる私を取り押さえようとした。

(助けてっ！)

私は必死で抵抗していた。無我夢中だ。

(誰かーッ！)

叫びよ、誰かに届いてえッ……！

「救世主ッ！」

メシ……。

(……！)

思い出して。

私は。

ビュウウウ……ゴオオオツ！ ……

閃光が走った……私の中を。

パパラの一言をキツカケに私を中心として円を描き、風が竜巻になつて発生した。

「わあああッ！」

「きゃあ！」

パパラもアジャラも、弾き飛ばされる。

「これは……」

風の壁。私を護るまもるように、高速で風が螺旋状に渦を巻き空へと駆け巡る。触れると斬り刻まれてしまうような鋭さの刃で回り続けているのに、私の心の中は何故だか温かだった。

不思議現象だ……。この『風の護りの壁』。

「熱っ……」

急に、右手の中指にはめ込んだ指輪が熱くなった。

「風……」

指輪が光を放ち始める。そしてその光はどんどんと膨らんで

いった。

「天神……？ 救世主……？ 七神……風神……」

光が強く加速していくと、合わせて私の頭の中がスッキリとしてきて。徐々に思い出してきた。

思い出してきた……。

私は……あの日 遺跡へ行つて、異世界へワープした。そこにはとつてもカッコいい男の人……そう、『彼』が居たのだ。

私にとつても優しく、いつも『風』の力で護ってくれた彼……。

セナ。

「セナ！」

顔が思い出されてくる。怒ったり沈んだり笑ったりする顔の表情。どうして忘れてしまっていたの？ 決して忘れてはいけないのに。

ごめんなさい……ごめんなさい、セナ。

私は うずくまった。

風のバリアーが静まるまで……私は泣いた。

「忘れるなんて ひどいよ……私。何でセナの事……」

小つちやな子供みたいにグシユグシユと泣き崩れていた。風がおさまつて そんな私に歩み寄つた2人。アジャラとパパラ。

「どうやら思い出したようですね」

「良かったわー。こつちも焦つたでー」

と、2人は私に笑いかけた。さつきと違って とても優しく見える。

そうか、この2人……天神様に言われて私を迎えに来ただけなんだ。なのに私、ただ逃げてばかりで、話を聞こうと しなかった。

「……ごめんなさい。逃げたりして……」

私が立ち上がって涙を拭き、頭を下げると。2人とも首を振った。「ええねん。忘れとったんやし、しゃーない。それより……」

「日が出るまでに向こうの世界へ行かないと、向こうへ続く扉が閉まってしまう」

そんな事を言った。

ああ それで無理矢理にでも私を連れて行こうとしたのか。

私は……。

……。

顔を上げる。そして言った。

「わかったわ。でも……もう少し時間をくれる？ あと できるかわかんないけど、頼みがあるんだ」
迷いなんて なかった。

家へ帰って、荷物を詰める。

着替え、食料、筆記用具とかの実用品、薬……などなど必要かと思つものは全部 詰め込んだ。おかげでリュック、手提げのカバンは合わせて3つにも なってしまった。リュックは背負い、両手に2つのカバンを持つ。どれも非常に大きく重い。「なんの！」

気合いで立つ。

そして その格好のまま……自分の部屋から階段をゆっくりと下りて一階へ。

すると ちょうど、仕事の片付けを終えた兄とバッテリー廊下で出くわした。

もちろん、すごく驚く。

「何だ何だ！？ その格好は……何処かに行くのか!？」

「……」

返答に詰まる。でも頑張つて本当の事を告げた。

「私、行かなきゃいけない所があるの。そして そこは……とても

遠い所なの」

「はあ！？ と兄は息を出した。俯き加減な私の頭上から、さらに声は大きくなつていく。

「何言ってるんだ！？」

「ごめんなさい、お兄ちゃん」

さっぱり訳のわからない兄は自分の頭を掻きむしって、あくまでも冷静に詰め寄った。

「落ち着け。とにかく……お前、何処行くつもりなんだ？ 何をしに？ 何の ために？」

「ココとは違う世界の人々を救うために、家を出るの。もう時間が無い……門が閉まつてしまうの。急いで行かなくちゃ」

「頭が おかしいのか！？ 勇気……」

とても悲しい顔をしたのが私の判断を鈍らせる。でもギョツと身を固めて押しとどめた。信じてもらえない事なんて、わかっていたもの最初から。

「そこを通して。私が行かなくちゃ……世界は護れない。時間がないの」

しかし兄は激しく首を振った。

「バカな！ 何言ってるんだ……いいから明日、病院へ もう一度行こう。お前は どうかしてる。一ヶ月も何を……気が変になつたんだろう。俺には さっぱりお前の言う事が わからない！」

厳しい顔をしている。私の言う事が兄を苦しめている。

ダメね……やっぱり、わかってもらえない。

わかってもらおうとしても……諦めの方が勝つ。

兄から目を背けた。

「アジャラ、パパラ……お願い」

私は言った。

聞き届いた2つの影が、兄の背後に現れる。アジャラとパラダ。
「本当に いいのね？」

「君らは誰だ!？」
いきなり後ろに出現したもんだから、兄は動揺を隠せずパニックになる。

私は頷いた。

兄が私を再び見た時。アジャラの杖から出た煙が、兄を取り囲んでいった。

「うっ……」

苦しそうに胸と頭を押さえていたけれど、段々と……安らかな表情になって兄は……廊下にバタリと倒れ込んだ。そして気持ちよさそうな顔で眠ってしまった。

「これで……救世主に関する記憶だけを消去しました。言われた通り、この世界の人達の記憶も……これで、この世界には あなたは存在しない事になる」

「ちゃんと思いつくものは全部 消してきたでえ。ぬかりはあらへん」

そう。私は2人に頼んで、私の存在に関わる全てのものを消してきてもらった。そうする事で私が もうココへ戻りたいと思わないように。決して、思わないように。

自分から帰る場所を失ったのだ。

「これで……いいの。さ、行きましよう。連れてって」

私は そばにあった兄の上着を手に取ると兄の上になんかを被せ……。

一歩を踏み出した。

港遺跡。

ココが全ての始まりの場所だった。

あの時と同じように、七枚の鏡張りの部屋へ入った。

「それじゃ……行きましょう。好きな色の所を触れて下さい」
アジャラとパパラは、そう言うとサツサと鏡を通り抜けて お先に消えてしまった。

ポツンと。鏡張りの部屋に一人取り残される。

「ふう……」

深呼吸一つ。

目の前に彩る七色の鏡。

好きな色の鏡を……かぁ。

(もう決まってる……)

そして そこに触れる。

ザッ……

……

前と違って、通り抜ける感触があった。これは……風？

優しく、私を撫でるような神秘の風。

薄紫色の視界。

あの人と同じ、髪の色薄紫色。

綺麗だ……確かに そう感じた。

(セナ……)

私は静かに歩き出した。

《第25話へ続く》

第24話（救世主覚醒）（後書き）

【あとがき】

アジャラとパパラのイメージ元は、パイだったそうだ。

フィー……。若い子、知ってる……。か、な……。？

今はどうしているんだろうか。あの人は今。

ブログ第24話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-71.html>

ありがとうございました。

第25話（再会）

セナ……会いたい。

私、どうしてセナの事ばかり？

うん……どうでもいい。会いたい。それだけ！

光と風とのトンネルを抜けた……落ちた。

「きゃああっ！」

「うわっ！」

どっしりいいいんっ……！

……。

すごい衝撃が体全体を襲った。最初、訳がわからなかった。

「あたたたた……」

私は、私の下敷きになった人物と目がバッチリ合う。

「……！」

2人とも、完全に声を失っていた。そして あんぐりと口を開け、お互いを指さしていた。

「勇気……」

「セナ……」

どうやら私、セナが寝ていた所に落ちたみたい。ベッドの上で2人、身を起こし正座した。真っ暗で、顔がハッキリと見えるようになるには時間が かった。

セナも同じみたい。いきなり、寝ている所に私＋荷物×3の下敷きになったもんだから、当然 私よりダメージは大きい。ポケた頭で私……をジッと見ている。

しばらく見合っていたけれど、私は我に返って慌て出した。

「ええとホラ、約束通り帰ってきたよ！ ちゃんと向こうの世界に

サヨナラして……その……踏ん切りがつかないし、これからは全力投球で こっちの世界をね……」

無理矢理 会話を続けようと頑張ってみた。なので自分が何を言っているのかが よく わからない。

照れてしまう。何か言っただけじゃない。

あ、そうか。私、すごく変な顔してるかも！ 何も言ってくれないのは、ひよっとして それでセナ呆れてんじゃない？ ……
そう思ってチラリと彼の方を恐る恐る見上げる。

セナはボーっとしていた。

私は手を彼の目前にサカサカと振ってみせた。

首を90度まで傾げて様子を見たりしたが、全然 反応がない。
動かない。

私は どーしよーか……と思ったが、とりあえず。

「ただいま！」
とだけ言って、笑った。

するとだ。言った途端、セナがスウツと……強張っていた顔の筋肉が ほころび優しく表情を緩めていった。
そして。

「……お帰り」
とだけ言った。

私の中に じんわりとしたものが流れてくる。

(あつたかいな……)

ほろつと泣きそうにまで なってくる。

すると今度は私とセナが正座しているベッドの隣のベッドから、別の声が上がった。

「何だよ寝ぼけて……」

と、寝ぼけ眼をこすりながらムクリと起き上がったのはカイトだ。

のんびりと、こちら側を見た。私の姿を確認して、仰天する。「うおおー!？」

身を後ろに少し退いた。まるで物の怪でも遭遇したようなりアクションをとった。

「カイトおー！」

「ゆ……勇氣イ！？」

私はセナから離れ、スタツ！と床に降りて立ち仰々しく敬礼の構えで張り切って言った。

「松波勇氣、ただ今 戻りましたあー！」

隊長、とばかりに片手を頭の前に、気をつけの姿勢。笑顔だった。そんな私に つられてか、カイトもベッドの上で正座して私と同じように敬礼！ のポーズ。

「何なんだ、一体……！」

と、カイトが高速まばたき しながらパチクリしていると、部屋の入り口のドアが開いて外から団体がやって来た。

「どうしたの！？ 真夜中に すごい音……！」

先頭で やって来たのはマフィアだ。後ろにマフィアよりも背の低い人影の何人かが。きつとメノウちゃんや蛭だろう。今に気がついたけれど、セナの寝ていたベッドを越えて一番 端際のベッドには、紫が居た。あまり心配が なくて気が つかなかったのだ。私を見て、皆は驚きをあらわに次々と騒ぎ出した。

「勇氣……帰ってきたのね！？」

「勇氣！」

「お姉ちゃん！」

「皆 元気そーだね！ よかった」

と、私が言うとマフィアもメノウちゃんも。いっせいに私の所に飛びついた。

「寂しかったよおおー！」

とメノウちゃん。

「ほんと！ 一週間も！」

と、マフィアが。「え、一週間？」と私は聞き直す。

時間の流れは こっちも あっちも同じくらいなのかなあ。

「皆……ただいま！」

私は最後に特上の笑顔で大きな声を上げる。今が真夜中なんて事も気にせずに。

カーテンで閉められていた窓からは、隙間から朝の光が見え隠れしていた。

一日 完徹してしまっただけで、全然 眠くない。むしろ、パツチリと目が冴えていた。

感動の再会！ を終えた私は帰ってきてから眠る事が できず、夜も明けたので外へ出てみる事に した。外は まだ白っぽい空で、遠くで鳴く小鳥達の声が清々しさを引き立たせている。んー、朝！ っで感じた。

空気が私の居た世界のととは違う気がした。野や家屋の においが混じったような、新鮮な。つい深呼吸をゆっくり連発してしまいうな。無味無臭なはずの空気をおいしいと思うなんてね。

……なんて。ノンキにしていたんだけれど。

ココ……キースの街は。レイの襲撃に遭ってほぼ壊滅の大被害を受けた。今は街の様子を見渡すと、面影は充分に あるけれど あの時のような悲惨さは感じ取れなく なりつつある。

あの時は本当に凄まじい出で立ちで、思わず目を逸らしたくなる衝動が何度も あったと思う、皆。私は気絶してしまって ほとんどを寝て過ごしたりしたけれど、生き残った人やセナ達は ずっと救助や支援に回って大変だったはずだ。

街のあらゆる所に転がるように眠った死体の数は、多すぎて計りしれない。

聞く所によると、死体は まとめて街の外れで火葬したんだそうだ。

集団墓地が大掛かりで造られる事が決定したそうで、その同じ街隅で建設され始めている。

すでに外国から、知らせを聞いた事業家や国が援助資源や大金と一緒に花束が次々と贈られてきているそうだった。

何処かの国の王や村長などが人を率いて来る事が度々あった。暗い顔をして、積み重なるようにして火葬されるのを待っている死体の山を前に手を合わせていた。

彼らは きつと こう思っている……ウチの国、村や街でなくてよかった。でも いくつかココと同じ目に遭うかもしれない、と。

不安が絶えず重い空気を永遠のように作り出す。

痛々しいほどに伝わってきた。

……と、マフィアが さっき言っていた。

「不安なのは皆一緒……私達、これから どうするのかしらね？」と声に出して漏らしたマフィア言葉は、私に深く印象づけていた。

これから……とりあえず、今は。

「何してんだ？」

トタトタと私が救急箱を小脇に抱え廊下を走っていると、セナとバツタリ会った。私と箱を交互に見て少し何かを考えていた。

「ケガ人が まだまだ たくさん居るってマフィアに聞いたから。

しかも薬とか足らないって。だからホラ、私の世界から持ってきたやつ。少し足しになるかもって、思ってた」

私は張り切っている。背中にリュックを背負っていたんだけど、中には家に あった医学なんかの本が入っている。

何でもいい。役に立てば、とだけ思った。

「それじゃね、昼に戻るから！」

と言いつつ、去ろうとした私をセナが呼んだ。

「何？」

「あ、いや……頑張れよ」

「？ うん！」

セナが何を言いたかったのかは わからないけれど。私は笑って
頷いて、また前を見て走り出した。

セナは前髪を掻き上げ、

(あいつ……)

と少し心配そうに私の背中を見送ってくれていた。

私達が借りている家の主人である診療所の医者……名はハウス。
彼に薬と本を提供した。

泊めてくれた お礼がわりにしちゃ安いかしら……とも思ってい
ただけけどね。ハウス先生は薬を見て驚き、本をペラペラとめく
って見ては また驚いていた。

「こりゃ……凄じくないか。専門的な事が びっしりと……うう
ーん、でも。残念なのは、字が見た事も ない字で解読しないと
いけない。薬も……」

机に向かって座りながら渡された物をジックリ見て、考え込んだ
顔になった。

そうだった、私ったら忘れかけていた。私だってココの世界の字
は読めない。

「でも貴重だよ、とても。解読は しなくちゃいけないけど、大丈
夫。こんなのは よくある事だ。外国の本や専門書をよく読むし、
色付きで絵や図が多いみたいだから わかると思う。でもコレ、ど
うしたんだい？ 君の持ち物？」

ハウス先生は少し微笑みながら嬉しそうに聞いてきた。

「私の世界の……医学です。役に立てばと……」

言っと、ハウス先生は首を傾げた。

「世界？」

「私、異世界から来たんです」

「ええ!？」

イスごとハウス先生が私から飛びのいた。しかし すぐに戻って

来る。

「そうなのか……信じられないが。でも この本を見ていたら、どうやら本当っぽいなあ」

と、持っていた本を閉じ、深く礼をした。

「すまない。礼を言うよ……きっと すごく役に立つと思う。これでケガ人のケガが早く治るかもしれない。ありがとう」

急に そう言われたもんで、私は少し慌てた。

「いえ、そんな。本当に役に立てるかどうか。家をお借りしているんだもの。私達、お金も ないし…… 迷惑だらうなあって ずっと 思ってた」

「迷惑？ そんな事 思ってたないよ。君らの仲間さん達には色々お手伝って もらったからね。むしろ、こっちが迷惑かけてると思ってるよ」

そんな風に言って優しくそうにニコニコと笑う。

ハウス先生…… 笑うと凄く可愛らしい顔になる。でもカッコいい。まだ若いのに、テキパキと仕事をこなす。大人だなあ。女の子にモテるだろうなって思う。私だって結構、ドキドキするもの。

そんな事を考えている時、ガチャリとドアが開いて白衣を着た女の子がハウス先生を呼んだ。

「先生。診察の時間です」

「ああ。今行く」

女の子はミゼーと言って、これまた男にモテるでしょうねっていうほどの美人だ。スラリとして、歩き方が美しい。白衣がよく似合っていて決まっているし、長い紅色の髪を後ろで束ねている。少し化粧もしている。大人のお姉さんといった感じで、しっかりしていた。

彼女も医者だった。

「ふう…… まだまだ大変だよ。薬も到着が まだ だしね。僕の力で一体 何処まで できるだろう」

ミゼー先生が去った後、イスに どっかりと体を預けたような格

好になつてハウス先生は うなだれた。少し お疲れなんだろうか。だからか、よく口が動く。

「……医者が無傷で よかつたかな。街は あんな皆殺し状態だったっていうのに、たまたま僕とミゼー先生は他の村へ出張していてね。助かつたわけだけれど……でも、あんまり気持ちはよくない。助かつといて、こういう事を言うの、変かな」

口元は微かに微笑んでいるけれど、目を見ると寂しそうだった。私は……。

「……うん。変」

正直に言つた。ハウス先生は、ハハ、と苦笑いしてみせた。

「やっぱりそうだよな。助かつといてラッキーって思う方が」

「先生は優しすぎるんだよ。たまたま他の所へ行つていたのは、仕事でしょ？ 遊んでいたわけじゃ、ないじゃない。気負いする事なんて これっぽちも ないと思うよ。誰もが先生には むしろ感謝していると思うな」

と、少し偉そうだったかな？ と思いつつ、言つてしまった。ハウス先生は深く頷いて、またお礼を言つた。

「ありがとう。少し気が楽になつたよ」

そう言つて また微笑んで、部屋を出て行つた。

昼過ぎに皆の元へ戻つた私は、地図を広げて作戦を打ち明けた。作戦つて、つまりは ただの、これから何処へ行こうかつて話だけれど。

地図で現在地を指さして確認。現在地は、世界地図の東南に位置するマイ大陸の、ちょうど真ん中辺りにある、キースの街。

そこから つーつと南下すると、マイラ村がある。そこを通り、右の道の方を通ると。今度はマイ大陸南端、マーク国がある。

「明日の朝 出発。とりあえず この進路で、南のマーク国へと行こう。国単位なら、七神についての情報とかも入るかもしれない。

そこから こう、大陸を左回りに……コミ山道を通って北上して、サワ港へ。それから東のベルト大陸へ行こう」
と、私は思うがままに説明してみた。

私の言った進路に今の所、皆も引つかかりは なく頷いてくれていた。すると、違う事を言い出したのは蛍だ。

「レイ様達は、放っておくわけ？」
と、聞いた。

私も皆も一瞬 表情が固まった。でも私はキツパリと言った。

「レイの事を考えるの、止めにする」
と……。

意外さに驚き言い返したのはセナだった。

「どういう事だ？ まだまだ これから死人は増える……鏡も集まる。それでも、放っておくという事か？」

「レイの事になると、私達 何も できなくなるわ」
私は悲しげに そう言い切った。

「放っておくわけじゃない。手がかりが欲しいの。レイが一体 何を考えているのか……」

考え込んでいると、カイトも それに付け加えた。

「確かにね。彼の行動には少し疑問。まず、何で俺らの先回りをして襲うのか」

カイトの何気なしに言った一言が、私達をハツとさせた。

そうだ。レイは以前、ライホーン村で わざわざ鷓を使って私とセナを村から離れさせ襲っている。どうして？ 今回も そう。私達の先回りをしている。

「それから、何で襲う期間がこんなに開いているのか。まだ、2回目なんだから？」

「そうね……ライホーン村を襲ってから この街を襲うまで、だいぶ日が空いてる」

カイトとマフィアが地図を見ながら また考え込む。

「心理作戦よ」

と口を挟んだのは蛭だった。

「どういう事？」

私の方を黒い瞳の横目で見ながら続けて言った。

「レイ様は青龍復活と、天神への復讐も目的なんですよ？ きつと天神を苦しめるため、わざと間を置いているんだわ。ジワジワと… ゆっくりとね」

ゾワツ、と背筋に冷たいものが通った。

「確かに… 心理作戦はレイの奴の得意とする所だ。充分あり得る」
セナが そう言い終わると、長い長い沈黙が やって来た。

天神様は私達の側^{がわ}に居る。天神様を苦しめるという事は、私達を苦しめるといふ事… か。

「そうなのかな。本当に」

と、長い沈黙を破るのはカイト。

「あの人なら、もっと別のやり方で やると思うけど。何か納得い
かないんだよね」

また沈黙。

ええい、うつつうしいよ！

「ほらあ！ レイの事を考えると話が進まなくなる！ やめ、やめ

！ とりあえず明朝出発！ 全員ココに集合！ 以上、解散！」

と私はバアン！ とテールに手をつけて叫んだ。

ちよつと手が痛かった。

明朝出発。ハウス先生とミゼー先生が港まで見送りに来てくれた。
まだ朝日が顔を出してからは そんなに時間が経っておらず、空
気と自分の体温との差を感じた。ひんやりとして、まだ外は起きた
ばかりとでも言っているよう。

海の遠く彼方、灯台のような白い人工の細長い円柱が見える。地

平線に突き刺さっているようにも見える。海の表面は光り輝き、静かに波打つさまにも光が一つ一つ反射し、その反射の集合が地平線へと向かっている。昇りかけた太陽へと、ゴソゴソ集まって行っているみたいだ。

「じゃ……お元気で」

私が2人に向かってお辞儀する。ハウス先生は それを見て、いつものように微笑んだ。

「君達もね。絶対 生き延びてくれ。それと……救世主くん。本と薬、ありがとう。何のお礼も できなくて、申しわけないな」

そう言っつて弱った顔をされて、私は慌てて手を振った。

「いえ、そんな。お礼を期待してたわけじゃありませんし……それに、役立ってくれて、嬉しいです」

「でも驚いたよ。あの伝説の救世主とやらが君みたいな少女だったなんて」

「あはは……自分でも、あんま信じらんないんですけど。何かドジばっかだし……」

少しハウス先生の声のトーンが下がる。そして私の目を意味ありげに見つめた。

「いや、でもね。君は見かけよりも大人びた所がある。何て言うか……しっかり しているんだな。とても13歳には見えないよ。」

この前だつて、弱音を吐いてた僕にガツンと言っつてくれたしね」

「ガツンだなんて……すみません。時々、偉そうな事を言っつちゃうんですよね」

「偉そう？ そうかな。別に いいんじゃないかな。とにかく、僕は君の あの一言で だいぶ気が楽になったよ。感謝してる。ありがとう」

そう言っつてニッコリ。笑顔は いつも満点だ。

しかし……少し、ドキドキする。なーんてね。恋のドキドキじゃなくて、女の子としてのドキドキ。だつて、笑うとカッコいいんだもん、この人。私だつて お年頃。男の人ぐらい、意識しちゃうわ

よー。

「先生、そろそろ……」

と、ハウス先生の肩を軽く叩いたのはミゼー先生。少し離れた位置で、ジツと私との会話を聞いていたのだ。

「ああ、そうだね」

ハウス先生は私の方へ向き直り、また笑って手を振りながら、

「それじゃ……これだけは もう一度言っておくよ。絶対 生き延びてくれ。そして、またココへ来てくれ。遊びにね」

と言った。私は笑って「はい」と返事をした。

セナや皆は もう船に乗っている。私は急いで船中へ向かった。

途中 振り返ると、ハウス先生とミゼー先生は まだ こつちを見ていた。

私 思う。あの2人、美形同士だし、似合うんじゃないかなーと。何ていうか、理想のカップルって感じ？ うらやましいぞおー。

またココに来る事があった時、ひよつとしたら2人、結婚とかしてたりして。しかも、子供とか居たりして。

あっははー！ 気が早えやあ。

「何、ニヤニヤしてんだよ。気味 悪いぞ、かなり」

ハタ、と見るとセナが船中、手すりに掴まっていて こつちを見ていた。

嘘、顔に出た？ ……あちゃあ、こつぱずかすいー。

思い出し笑いする人ってエッチなんだって？ じゃ、顔に出ないように訓練しなきゃ。え、っていうか私って そうなの？ 自分で認めてた？

はははー……情けない。

「今度は何 沈んでんだ。ほんつと、見てて飽きねえ奴。早く上がって来い」

実は私達、2手に別れて行動する事にした。

私とセナと蛭と紫。この4人でシユガルツ港から右回りに大陸を南下し、サワ港へ。そこから もつと南へ進むと、カスタール村。もつと南に行くと、マーク国だ。船に乗らず、コミ山道を通って行けば いいんだけど、あいにく通行止め。何でも、巨大 モンスター 魔物が現れたんですって。

セナ達は強いけれど、わざわざ危険な目に遭いに行く事も ないでしょって事で。航路を選んだ。

一方、マフィアとカイトとメノウちゃんの3人は、キースの街を南下し、マイラ村を通してマーク国へ。こっちは陸路だ。

マーク国で落ち合いましたよって事で。それぞれ出発した。

もう船旅は慣れっこ だった。

カスタール村までは2日は かかる。その間、様々に暇を潰していたのだけれど。ふいに、セナと2人きりになった時があった。

しかも、夜の甲板で、誰も居ない。ムード満点。来るなら来いって感じで（やっぱりエッチ？）。

しばらくボーツと手すりに寄りかかって突っ立ったままの私達なんだけれど、やがてセナから話を切り出してくれた。

「元の世界では、どうだった？」

と……風で髪をなびかせ、普段より いっそう綺麗に見える、セナの姿。

「え、ええ？ どうって？」

だから ちよつとウロたえた。ドキドキが高なってきた。

「だって しばらく留守に していたんだろ？ 家族とか友達とか

……前 言ってた“学校”とか……」

「あ、ああ。うん。皆、元気そうだったよ」

緊張してるからか、上手く言えない。一瞬、会話が途切れた。

「んとね……私、両親、居ないんだ」

会話を続けるために、そう言い出した私。セナは少し驚いていた。

「へえ……俺と同じか」

私は続ける。

「7歳の時、交通事故で いっぺんに。だから家族っていったら、お兄ちゃん一人なんだ。2人で……暮らしていたの」

セナに対してというより、もっと別のドキドキが支配していた。前、セナと口論した時。私は気が ついたんだ。自分の本音を隠しているって。知られたら、嫌われるかもしれないから、とか、自分の身を守るために、とか……色んな事に気が ついた。

話そうと思う。自分の事を、もっと。皆に、ううん、セナに。もっと私の事を、理解してもらうために。

そうすれば きつと自分の中のモヤモヤしたものがスッキリと晴れると思うから。

それに。もう一つ気が ついた事……私が、セナに恋してるって事。

だから余計に、もっと自分の事 話したいって気に なったんだよ。

「私は まだ小さかったしさ……一人で生きていく力とか、そんなもの なかった。お兄ちゃんは当時、17歳……あはっ、セナと同じだね」

と少し苦笑いをして頭を掻いた。セナは黙って話を聞いてくれた。続きを おかげで安心して話す事が できる。

「17歳っていったら……私の居た世界じゃ、一番 大事で楽しい頃だと思うの。でも……お兄ちゃん、せつかく頑張って勉強して入った高校……学校をやめて、働かなくちゃならなくなった。生きていくために。私を育てるために。両親が やってた……ラーメン屋を、守るために」

ドキドキで苦しくなる。

緊張？ わからないけれど きつとそう。鼻の奥もツンと何か痛い。目も潤んで きていた。でも、泣く前に話そうと心に決めた。

「お兄ちゃんの後ろ姿に いつも謝ってた。“私のせいで ごめんね”って。小さい頃から今まで ずっと。両親が死んだのは事故だ

ったし、仕方ないかもしれないけど……とにかく、早く自立しよう
って思ってた。早く一人前になって、お兄ちゃんを楽にさせたが
ってた……でも」

涙が今にも溢れ出そうだった。言葉にも詰まる。でもセナは何も
言わず、手すりから夜の海を眺めていた。そうやって私の話す一言
一言を待っていてくれた。

「学校じゃクラス中に無視されてイジメられるし、お兄ちゃんは私
が居るから結婚できないって彼女から責められてケンカになっちゃ
うし……辛い事ばっかだよ。こんなんじゃ、一人で生きていけない
ね」

こぼれそうになった涙を拭きながら、ふー……と深呼吸を一つ。

「元の世界へ帰った時、大騒ぎだったんだよ。お兄ちゃんも、学校
の皆も。お兄ちゃんも顔クシャクシャにして喜んでくれたし、学校
じゃイジメもなくなった。前、あんなに帰りたくなかったのが嘘
みたいだった。あ、そうそう。私、記憶喪失だったんだよ？ 帰っ
た時」

「記憶喪失？」

「うん。こつちの世界の事、全部ブツ飛んできたの。でもさ、天神様
の お使いの人……アジャラとパラって いったかな。女の子2
人組が迎えに来てさ。びっくりしちゃって」

セナは自分の首筋を手で撫でながら頭を傾げた。

「へえ……で、記憶は今も？」

「ううん。記憶は戻ったの。コレのおかげでね」

と、右手をセナの前に掲げた。中指に、月光で光るセナにもらった
指輪。

「思い出せて よかった。おかげで私、こつちに戻って来たものね」
「そうか……」

セナは少し微笑んだ。

私はスウツ、と息を整えて目を伏せた後、お腹に力を入れて言葉
を続けた。

「私、決意を固めたの。こっちの世界を救うのよ、何たって私は救世主なんだから、って。もつと真剣に、深刻に。ゲームなんかじゃないんだって、理解するために……だから。アジャラ達に頼んで、お兄ちゃんや学校、思いつくまま全て。私に関わるもの全ての物や記憶、全部

消してもらったの」

「……！」

「後悔はしていない。これでいいんだ」

私は船の進み行く先を一心に見つめた。それが今の私の全てを表しているかのように。

前だけを見る。後ろを見ない。
もう迷わない。

私はココで生きていくんだと。
救世主として……命をかけて。

「勇気……」

セナの表情は暗く、私を見てはいたけれど。声のかけ方に戸惑ってしまったっているようだ。

夜風が、私とセナに優しく語りかける。ただ、何て言っているのかはわからない。

「やるべき事をやる。今の私のやる事は、青龍復活の阻止よ。今はそれだけを考える。だからセナ。頑張ろう！私に力を貸してね！」

と、私は片手でピース！を作り、ポーズを決めてみせた。

「ちよつと2人と。夕食まだでしょー？ 早く行きましょよ。お腹すいたじゃない」

と、ひよつこり螢が甲板に続く出入り口から出てきて私達に声をかけに来た。

「あ、はい。今行く！ セナ、行こ！」

私はスタコラとお先に駆け出していた。

波は穏やかで船が夜の帳の中を突き進んでいく。

セナはフウとため息をつき、私の後を追った。

《第26話へ続く》

第25話（再会）（後書き）

【あとがき】

マーク国という言葉に個人的にドキドキしています（フ……）。
いや、話には関係ないんですが。

ブログ第25話（挿絵入り）

今回は簡単にですが地図をちよびつと（見えにくいかな）。

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-74.html>

ありがとうございました。

第26話（苛立ちと不満）

勇気達がマーク国へ向かっていたと同じ頃。とある東の大陸のある地域がレイによって襲われていた。

ライホーン村、キースの街と同じ。あちこちに転がった死体の山と、崩れ滅びた家屋。レイの少し興奮気味の息づかいだけが静まった辺りの中で聞こえていた。

静かだった。

「レイ様……」

と、レイに。そばに居た さくらが白いハンカチをそつと差し出した。だがレイは それを邪険に振り払う。

景色 遠くを睨むレイ。山の向こうに墮ちかけた太陽が、赤々とレイの顔を照らしていた。

「何故だ……何故、見つからない……？」

手には固く握り締めた邪尾刀。刃先からは血が滴り落ちている……。

するとレイとさくらが並んで立つ背後に、腹に深手を負いながらも立ち上がって攻撃を仕掛けてきた者が居た。

「レイ様！」

先に気が ついた さくらが振り返って悲鳴を上げる……が、心配 御無用とばかり、レイは即座に邪尾刀で見事に、振り下ろした刀で相手を思い切りよく縦にブツ斬ってしまった。勢いのある返り血を容赦なく全身に浴びるレイ。服は構わず赤に染まる。

「……クソツタレが」

レイは悪態をついた。

（こいつも違う。四神鏡を持っていない。何故だ……救世主は着実

に七神を集めているというのに。あと、たったの3枚じゃないか）
レイの思いが胸中を駆け巡る。同時に燃えたぎる熱い血液が、血管を伝って全身に通い行き届く。

（襲った地はココで3つ目か。人口の多い場所を狙ってきた。……おかげで一枚は見つかった。だが……）

思考は加速する。止まるを知らず、感情と合わせていき叫びの音へと変えた。

「あと3枚もか！」

もう一度、遠く彼方、山のある方へと睨みをきかした。

（早く……早く！）

もはや苛立ちを抑えきれないでいるレイの様子を見ていて、さらには不安になる。さくらの長い絹のような黒髪は、砂の混じった風でなびく。

さくらは思う。

（このままではいけない。何とかしなくては……）
と……。

息を呑み、不安な片手を自分の胸へと押し当てた。

カスタール村は、のどかで平和な村だった。入り口に人は立つておらず、村にはほとんど人が居ない。見渡せば田畑が広がっている。数少ない村人達は、いきなりやって来た私達を歓迎してくれていた。

宿をとる。落ち着いてテーブルに ついてみると。ささやかだけれど差し入れたと言って幾つかの果物を村長さんが持ってきてくれた。そして村長さんは私達が食事している間、久々に外からの客人だと ずっと一方的に しゃべり続けていた。この村の歴史、世界

の事……そして何と！

「『七神創話伝』！？」

「本当ですか！？」

私達は目を丸くする。

丸いテーブルを囲んで野菜をたっぷりと煮込んだシチューや、私達のために宿屋の主人が わざわざ作って下さった焼きたてのパンを頂きながら。長々と おしゃべりをしている村長さんの話の中にその言葉が突然 登場してきたもんで、びっくりしてしまった。食べかけの熱いシチューが口から こぼれそうになった。

私と、私の向かいにセナ。その隣に蛍や紫と。箸やスプーンを持つ手を いったん止めて、皆で村長さんに注目した。

「すごい反応だな。何だ、何か あるというのか」

不思議そうな顔をする村長さん。まだ若いけれど、しっかりとした顔立ちと体格。まず私の顔を見た。

「あ、あの。興味あるんです。内容とか、ご存知なら ぜひに……」
私が両手を組んで お願いする。同じ場に居た宿屋の主人と村長は顔を見合わせたが、「おう。いいけどよ」と言った村長さんが嬉しそうに私達を見た。

「『或る日 天地開闢の……』って あたりくらいから、ちよこつとだけだけどな」と、言った。

反応をすぐに示したのは私だけだ。身を乗り出しそうになった。

「『或る日 天地開闢の』、ソレ！ 夢に出てきたわ！」

私が大声で言うつと、セナが「はあ？」といった顔をした。

「夢って？」

「元の世界に戻ろうとした時、頭の中に浮かんだの。不思議よね、コレって」

「全部 覚えてるか？」

「えと……」

セナに突っ込まれて。私はグツと息が詰まった。

「すごく長かったから……細かく覚えてないや。でも、七神ができた理由みたいな、昔話っぽかった気が……するんだけど」と、セナと私が話していると。宿屋の主人がオホンと一つ咳払いをし、言い出した。

「七神創話伝 第二章……“七精霊の誕生”だ。俺が教えてやる。とは、いつても、俺が知ってるのは第二章まで。なんだけどな」
「あ、ちょっと待って下さい」

私はリュックからシャーペンとメモ帳を取り出した。忘れる事がないように、メモっておこうと思って。まだまだ旅するにつれ、章は増えていきそうだしね。

「ついでに。第一章も書いておくよ」
そう言って私はサラサラとメモ帳に書き出した。

『この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主 ここに來たれり
光の中より出で来て 七人の精霊の力 使ひて これを封印す
七人の精霊の力とは 転生されし七神鏡
これを集め 救世主 光へと導かれたり
満たされし四神獣は また千年の眠りにつく』

……うん。だいたい、こんなもんだったよね。
「じゃ、いくよ。メモって」

宿屋の主人は得意げにスラスラと言いだした。

『 或る日 天地開闢の時 神は まず 闇を鎮めなさった
闇の精霊の王は 闇神となりて 闇を司る
或る日 闇神の腹の中 神が弑に 一攫^{つか}みの火を放ちなさった
炎の精霊の王は 炎神となりて 炎を司る
或る日 弑神の間で 神の知らぬ間に 輝く光が生まれた
光の精霊の王は 光神となりて 光を司る』

或る日 怒り狂った 神の策略で 風を吹きなされた
風の精霊の王は 風神となりて 風を司る
或る日 力を使ひて 神に逆らひて 大地を造りなされた
地の精霊の王は 地神となりて 地を司る
或る日 力を失くした 神の涙が 水となりて流れた
水の精霊の王は 水神となりて 水を司る
或る日 見かねた姿に 神の為にとて 木を育てなされた
木の精霊の王は 木神となりて 木を司る

このように七つの精霊の王 七神と なりえたが

闇は 神の悲しみによつて育てられた木を苦とし
木は 神の怒りを受けた炎を苦とし
炎は 神の落とした水を苦とし
水は 神の後悔の元となりし風を苦とし
風は 神に逆らひて造られたる地を苦とし
地は 神の子ではない光を かばうため光を苦とし
光は 神が最初に造りし闇を苦とし

ここに 七神円陣を 描く 』

「と、まあ、こんなトコだな」

一気に話し終えた主人は、そばの お茶を飲んで落ち着いた。

「七神円陣って何ですか？ 一体」

と私が聞くと、主人はチツチツチと指を立てて振った。

「今 言った事を図にしてみな」

そう言う。私は「ええ……？」と弱った顔をして、今 書いた文
をマジマジと見つめた。

闇、木、木、炎、炎、水、水、風……あ。

「もしかして これって。こういう事？」

と、私は図を描く。円状に、闇、木、炎、水、風、地、光……と字を並べた。

「闇は、木を苦とする……つまり、木が苦手って事？」

闇から木へ。矢印を引いた。そして後も同じように、矢印で線を引っぱっていく。

「木は炎に弱くて、炎は水に弱い……そういう事なんだ。で、これがその、七神円陣なのね！」

私が勝ち誇ったような顔を見ると、主人はパチパチパチと拍手してくれた。そして「お見事。花マル合格だね」と褒め称えた。

「へえー。結構 面白いな」

セナは私が描いた図を見て頷いた。

「いやあ、俺も この話が大好きでね。よく田舎の ばあちゃん
が子守唄がわりに枕元で歌ってくれたもんだよ。或る日イ〜天地〜
かいびやくノオオ〜」

突然 妙な節で歌い出したもんだから、私は飲みかけていた お
茶を吹き出してしまった。ムせて、ゴホゴホと。

「大丈夫か、勇氣？ 気をしっかり持てよ」

とセナが言ったので、私はムセながらも何とか頷いた。

テーブルから離れて行った主人は、まだ大声で歌っているし。段々ノリにノツてきたようで、リズムも何だか騒がしく うるさくなつてきた。

「アンタツ。夜中は客に迷惑だつて言っただろツ！？」

奥から、主人の歌をかき消すほどの怒鳴り声をした おかみさんが来た。

真夜中。皆が寝静まった頃だった。

突然、宿の外の方が人の声で騒がしくなったのだった。

私は「うるさいなあー」と、まだ夢うつつ。ベッドの上で寝返り

をうつつて夢の続きを……と思っていたら。

「ちよつと起きなさい！ ただ事じゃないみたいよ！」
と、蛭が突然、私をベッドから蹴り落とした。

思わぬ攻撃で私は見事に顔から床へ着地し、おかげで肩をも痛めた。

「……………っ！」

右肩に痛みが走る。しばらく動けないという。

「早く、勇気。セナ達 先に表に行ってる。私も行くから。紫、紫
ーっ！」

と、一足お先に部屋を出る蛭……まだ悶えてる私。

お兄ちゃん、ごめんなさい。ちよつと勇気は汚い言葉を使います。
……………せえの。

あんの …… クソ ア マああああア ーッ ……！！

しかし実際、それ所では なかった。

「何が あつたんですか！？」

と私が制服に着替えて肩を押さえながら、セナや村人達が集まっている外の輪の中に割り込んだ。皆、血相を変えてオロオロしている。

「それが……村の子供が2人ほど、コミ山道へ行っちまったよう
……………ひ、一人、ケガして帰って来たんです！」

村人Aが そこまで話すと、今度は村人Bが説明し出した。

「い、今、家の中で手当てしてやっているんですが……どうやら傷口から見て、魔物に遭遇しちまったみたいで。爪の痕あとが こう、くつきりと……」

2人とも顔面蒼白だった。ブルブルと肩や手が震えている。

「俺達、コミ山道は巨大魔物のせいで通行止めだって聞いたろ？」

どうやら子供2人が そこへ行って、運悪く襲われちまったらしい。

で、一人はケガして帰ってきたわけで。もう一人は まだ、山道に居るらしいぜ」

と、横で立っていたセナが補足した。

「って……大変じゃない！ すぐ助けに行かなきゃ！ こんなところで何 固まってるの!？」

私が言い出すと、セナが私をなだめた。

「魔物の正体はツキワノヒグマリオン。恐ろしく凶暴で、人間なら見境なしに襲ってくる奴だ。ハッキリ言って、普通の人間なら5秒で やられちまう」

「そんな事 言っただって……」

「村人達には無理だ。これまでの奴らと格が違う。これだけの人数が居ても、勝てっこない」

と……冷静に村人達を見回すセナ。村人達は すっかり沈み込み、誰も何も言わなくなった。

「それじゃ子供を見殺しにするっていうの!？ 私は行く！ 放っておけないもん!」

私が勇み足で山の方へ向かおうとすると、はっし！ と腕をセナに掴まれた。振り返ると、

「普通の人間なら、な」

と、ニツと笑うセナの顔が そこに あった。

「……ああやって脅しておけば、誰も ついて来なくなるだろ？」

「確かに そうだけどさ……」

小走りながら、私とセナは そんな事を言っていた。

ふと考える……私って、どうセナに思われてんのかなあ？ ツキワノヒゲマリネ……あれ？ そうだっけ？ まあいいや。とにかく そいつ、とんでもなく凶悪な魔物だって わかってんのに、私こうしてセナと肩を並べて山へ向かっている。後ろには無言で紫もついてきている。蛸は、自身に あまり力はないし、子供だしと

いう事で。だから、置いてきたんだけれど……私は？ 私、ひよつとして女の子だって事 忘れられてない？
「ね、ねえねえ。私なんかがついてきて、大丈夫なの？ 私、ツキワノヒゲマリルなんて。倒せないわよ？」
サツとセナが答える。

「ツキワノヒゲマリオン。大丈夫だろ？ その指輪が いざって時に護ってくれる。お前、そう言ってたじゃんか」

「そ、そうだけど……」

「大丈夫。お前、普通じゃないから」

……。

……どういう意味なんだ……。

さておき。山への道を道なりに辿りながら走って行くと、コミ山道の入り口に着いた。ゴクリと唾を飲み込み、ゆっくり辺りを見回しながら慎重に前へ歩く。

一体、奴は何処に居るんだろうか。

うつそうと茂った樹々の間は真つ暗闇。何も見えやしない。時折こちらに吹いてくる風が生ぬるくて。ひっじょーに、緊張している。私達、3人とも。

ツキワノヒゲマリラ……一体、どんな奴なのかしら。少なくとも和解できるよーな魔物では、ない！ という事は わかってんだけれどなあ。でも そんな凶暴ならさ、もう一人の子供なんてもう無事ではないんでないの……？ だって村に帰ってきた子供でさえケガを負ったっていうんでしょ？

それに。こんな深そうな樹々の中……さつきから見回しても何もなし。何か手掛かりとか、例えば足跡とか、何か ないんだろっか。

「あー！」

と私が声を上げると、セナと紫は いっせいに こっちを見た。

「な、何だ!？」

セナが驚いて私を見る。慌てて私は手を振った。

「あ……いや、何でもない」

と頭を掻きながら謝ると、セナは「ったく!」と舌打ちした。私は縮こまる。

実はね私、一つ思い出した事が あるんだ。

初めてセナと会った森……私、あそこで木の精霊と会話が できたのよね。そのおかげでセナは風が使えるようになったわけなんだけれど……。

もしかして今。それが できないだろうか、と。ふと、思ったのよね。

ずっと考えてても仕方ない。とりあえず、やってみようか。そんな上手くすぐ できるようには思えないけれど……。

スーッと息を吐き目の前の木に手を触れる。精神を集中させる。もしもし精霊さん、私の声、聞こえますか? と問いかける。

『おう。何か用か?』

わ……。

聞こえた!

やっぱり私、そういう力あったんだ!

『用がないならグッバイだぜ。どうなんだ』

あっさり そう言われた。

あわわわわ……ま、待って! あ、あのね。私、このコミ山道で

行方不明になった子供を捜してるの！ 知らない？

『ああ……そういや つい さつき。奴と一緒に居たな。子供2人と』

やっぱり！

奴って……ツキワノヒゲマキね！

『ツキワノヒゲマリオンだろ。ああ、そいつだ。奴が子供を襲ってたな。一人は からがら逃げて、一人は……』

もう一人は！？

『子供、気絶したらしくてよ。奴が巢に持ち帰ったみたいだな』

ええ！？

巢！？ 何処！？

『俺の横に斜めに伸びた細い木があるだろ？ その細い木の傾いた方角の さす方へ向かって真っ直ぐ行きな。洞穴があるはずだ。そこに居ると思うぜ』

わかったわ！

子供は無事かしら？

『……だろうと思うぜ。奴は そんなに悪い奴じゃねえ』

え？ どういう事？

『奴は……』

「勇気！ どうした？」

私が木と夢中に なって会話をしていると、少し先に行っていたセナが気が ついて戻ってきた。紫も後からセナを追いかけて。そして不審に思ったセナが私に話しかけた。

「ちよっと待って！ 今……」

何度その後に呼びかけてみても、木は もう何も言っでは くれなかつた。

「あ……あそこよ！ あの洞穴！」

木が教えてくれた通りに行くと、そこは見つかった。茂みや木に隠れて、ひっそりとあった。ぽっかりと空いた横穴の奥は深そうで、真っ暗だし何も見えない。

「とにかく行くか。木の精霊の言う事を信じて。俺が先に入る。勇氣、紫と続いてくれ」

セナに そう言われ、頷く私と紫。穴は とても大きく、人が横に5〜6人は並べられるんじゃないだろうか。

壁伝いにセナは奥へ進んで行った。後を追う形で私と紫が続く。

「あ……」

数分くらい息を潜めて進んで行ったが、急にセナが立ち止まったので。私はドン！ とセナに ぶつかってしまった。

「な、何！？ 急に……」

とセナを見上げると、セナが呆然として自分の目の前を指さした。ヒョイとセナの横から前を覗く。

……すると。

「……………はあ？」

拍子抜けしたというか、何というか。緊張が一気に抜けて肩を落とした。

だ、だってだって。

確かに薄暗い中、ツキワノヒゲゴジラは居る……わよ？ でも、でも……。

横に なって高いびきかいて、寝ちゃってんだもん！

しかも、その腕に行方不明の子供を抱いて！

「これがその魔物……」

仰天した。

さらに さらに何と。寝ている彼らの周りには。

酒ダルだ。バレーボールくらいに小さめなのが10〜20はある。全部 空っぽらしく、フタは されていない。そこらじゅうに転がっていた。こんなもの、一体 何処から調達したというのだろうか。「酒くさ……もしかして。酒飲んで寝てる……？」

と私が言うと、セナはショックを受けたのか。明らかにガツクリと肩を落とし土の壁に頭を押しつけた。

セナも よっぱど緊張していたんだろうなあ。

「どうやら彼は、酒乱のようですね」

冷静に目の前の状況を推測したのは紫だ。

「まさか…… 山道で村人達を襲ったりしたのも、お酒に酔った勢いでってやつ？ 嘘でしょお!？」

つい大声で言うと、ツキワノヒゲマンジュウは目を覚ました！

げげ！

隣に同じく横になって寝ていた子供も目を覚ましたようだった。しかーしだ。

彼らは目が すわっていて、子供の方は顔が赤かった。

真っ黒な熊のような風貌をし、額に三日月八ゲを作っていて鋭い目で こつちを睨む、魔物の そいつ。

「クマツた(困った)……」

ボソリとセナが言った。

「……」

「……」

とても笑える状況ではない。

宿屋にて。

食事する広間のテーブルに つき、マフィアと談笑していた。

「……で？ どうなったの？ 奴を倒したわけ？」
テーブルの上に組んだ両手の指を回しながら、マフィアが聞いてきた。

「うん。セナが容赦なく攻撃して、何とか。子供も奴もベロンベロンだったけど、奴は あっさり やっつけてさ。セナが おんぶして子供を連れ帰ってきた。子供は子供で。小さな変わった虫を探しに外に出たとか言ってた。真っ赤な顔して、またベロベロでさ」

「お笑いねえ。それって」

「んもー、大変だったよ」

全くだ。せつかくの張りつめていた緊張感も台なしで、コミカルだった。

強そうに見えても、セナの たったの一撃でスッパリやられてしまったし。白旗まで振ってたんだから、そいつ。

呆れてトドメは させなかつたよ……。

「始めから わかっていれば、近道できたのにねえ」

「全くだよ。はあゝあ」

私がテーブルに体を突っ伏すと、ちょうど向かいのテーブルで声が上がった。

イスから立ち上がった一人の男が興奮 気味に大きな声を張り上げる。

「何だと！？ 東のベルト大陸の、3分の1がほぼ壊滅！？」

ガシャンッ。

立ち上がった拍子にテーブルの隅に置かれていたガラスのコップが床に落ちて割れた。水とガラスの破片が飛び散り、一瞬だけ辺りがシーンと静まり返る。

しかし すぐ別のテーブルから男の声が上がった。

「また例の、メガネ野郎か！ 青髪の！」

そして また別の。

「マジかよ!? …… 商売できなくなるぜ!」

商売人らしき その男は座ったまま頭を抱えた。

どよどよと……場に居た人の騒ぐ声が徐々に広がっていった。

(メガネ……青髪)

「レイね」

マフィアが言葉を発した時、私はドキンと胸が高鳴った。

「拡大していつてる……レイ、焦っているのかもしれないわね」

焦り?

「マフィア……」

私が何とも言えないような顔になる。

「時機は今かもね。レイの所に のりこむのは」

ココはマーク国。マフィア一行と合流したが、お互い七神についてのヒントは得られなかった。

それは それで。次にマフィアはレイの所へ行こうか、と言い出したのだ。

「そういえばレイの奴、何処に居るんだ? 蛭、知らないか」

マーク国内の商店が たち並ぶストリートをテクテクと歩いていた。セナに聞かれ、蛭は答えた。

「レイ様は よく移動されるの。だから きつと今は別の場所に居ると思う」

「レイの奴、一つの所にジツとしているタイプじゃねーからな」と、そんな2人の会話がなされていたのを気に しながらも。私は2人から少し離れて行き、商店で品物の方に気をとられていった。木彫りの動物や、ガラス細工の花、鳥や爬虫類みたいな形をしている小物など。私は店頭に並べられた色とりどり種類たくさん民芸

品に目を奪われていた。そしてセナと螢は。私が立ち止まって商品に気をとられているのにも気がつかず、先へと行ってしまっていた。

「きれーい。この首飾り。先に鈴が付いてる」

私は ちょこつと、飾りの鈴に触れてみる。チリン、と小さな音がした。

そんなノンキに商品を見ながらだ。

(レイの場所かあ……ココから遠いのかな……)

なんて、考えていたりするんだ。

あんまり本当はレイの事は考えたくはなかった。考えるとどうしても気分が暗くなってしまう。レイを倒す……やっつける……ころ……。

(はぁ……)

それしか、ないのだろうか……。

ホラ、落ち込んでくる。それが わかっているから嫌なんだ。もう。

「ん？」

私がクルツと、後ろに振り向く。トントンと誰かに つつかれたような気が したからだ。

しかし誰も居なかった。

気のせいかな? と思った矢先。

「下だよ。お姉ちゃん」

と下方から声がした。言われた通りに下を見ると……。

「あなたは」

キャップを深く被り、オーバーオールポケットに手を突っ込んでいる、見覚えのある少年。確かこの子は……。

「チ、チリンくん!？」

「や。また会ったね。お姉ちゃん」

そう。私が元の世界に帰る時に お世話になった変な少年、チリンとかいう少年だった。変、っていうのは、彼には謎が多いから。

私の事をよく わかっているような口ぶりをする。

今だって そう。ニッコリ笑っては いるけれど。

「ぐ、偶然ね。また……ベルを売っているのね」

「まあね。今は休憩中ってトコ。それより、さ。お姉ちゃん、また何か悩んでるでしょ」

ニコニコした顔で陽気そうに聞かれ、「ええ……そうよ」と正直に答えると。いきなり笑顔が消えチリン少年は真顔になった。

「デタライト島だよ。閻神が居るのは。ココの大陸のちょうど真南。行っておいで」

「えっ……？」

するとチリン少年は またまたニカツと笑って、「じゃあね！
また会おう！」と言って走り去った。

「デタライト……島……？」

立ち尽くす私。ポカンとして しばらく固まったままだったと思
う。

(どうして……？ どうして知っている……の？)

ストリートの上を一吹き風が吹き抜けていった。

宿屋に戻った私。皆は もう広間のテーブルに ついていた。お
茶だけを宿屋の おかみさんに頼んで、何やら談笑していた時。帰
ってきた私は さっそくチリンくんに聞いた事を話した。

「デタライト島だって！？ あの魔の島！？」

色めきだったのはカイトだけ だった。驚いた顔をして、私の顔
を見た。

「そうか……うん、そうだな。レイがそこに居ても別に变じやないか……」

と何やらひとり言を言っている。

「変なのは お兄ちゃんだよ。何ブツブツ言ってるの?」

メノウちゃんが そうツツコむと、「いや……ひとり言」と言っ
て黙ってしまった。

「参ったわね。そこ、魔物の巣とも言われてる所よ。人は滅多に行かないし。いくら私達でも危険すぎるわ」

マフィアは考え込むようにイスに身を預けた。そして やはり黙
ってしまった。

「しかし よくわかったな。レイの居場所」

セナが そう言っ
て私を見たが、私は「うん……」と自信なさげ
だった。セナが おいおい、しつかりしてくれよというような顔を
したので、私は俯いてしまう。

「そこに居るって言ったのは……あのチリンっていう。セナ、覚え
てない? 元の世界に戻る時、私の そばに居た男の子」

セナは考えながら唸る。

「うーん。そっ
ういや居たけど……あんまり覚えてない。何者なんだ
? そいつ」

「知らない。と
ても、不思議な子……」

「まあいい。俺の勘
じゃ、たぶん味方なんだろう。そいつを信用す
る、か……」

腕を組んでいたのを解き、私達 全体を見渡したセナ。

「行くか行かないか……
だろ?」

と……視線を私でピタリと止める。

私は、キツパリと言った。

「もちろん、行くわ」

と。セナは見て、満足そうに頷いた。

「それじゃ……」

カイトがマフィアを見ると、マフィアも頷いてカイトを見た。

「明日。決行ね」
今度は全員で頷いた。

夕食を食べた後。同じ場所で話し合いは続いている。

デタライト島は、ココ　マイ大陸の真南。テナ海を南へ進めば
おのずと見えてくるのだけれど……。

問題なのは。

「どうやって行くかって事だな。船なんかねーし。何処かで船を借りるか」

「それなんだけど。試してみない？　カイト」

マフィアが意味ありげにカイトを見る。カイトは壁に体を　もたれさせていて指をいじっていたが、止めて顔を上げた。

「はあ？」

言ったのはカイトでは　なくセナだった。

「私とカイトの力で、よ。練習していた技のアレ。マーク国へ到着するまでの間に、だいぶバランスが　とれるようになったじゃない？　そうね……　4人くらいまでならイケるわ。勇気、セナ、カイトと私で行けば」

それを聞いて憤慨する蜚。ドン、とコブシをテーブルに打つ。

「私も行くわよ！　もちろん紫も！　置いてきぼりだなんて！」

マフィアの言葉に熱^いり立つ蜚。マフィアは困った顔をした。カイトが口を開く。

「なあ、マフィア。それって、アレだよな。『草鞋^{わい}』で木の葉の塊を作って、その上に乗って、海面上をスイスイ渡ろうという」

「そうよ」

「4人までなら、っていうのは君が『草鞋』の上に乗った場合の人数なんだろ？　水の上じゃ、木の精霊の力は弱くなる。限界が4人って事なんだよな？　って事はさ。木の精霊が　ふんだんに居る場所でなら、もっと人は乗せられるんじゃないかな？」

カイトが そんな風に言う。マフィアは片方の眉をひそめた。
「つまり？」

「って事はさ。俺と、勇気と、セナと、蛍と紫。この5人が行くんだよ。君は陸で遠隔操作してくれればいい。陸の方が精霊も多いし水面より楽だろうしな。たぶん俺らならできるはず。陸で、君はメノウの面倒を見てやってくれ」

陸に残って遠隔操作！

そんな事、思いつかなかったけれど。

でも そのやり方だと確かに行く事の できる人数は増やせるわけ……。

なんて私は考えていたが。

いつもは穏やかなマフィアが、この時ばかりはカツと顔が赤くなっ

た。
「私も行くわよ！ 相手はレイと四師衆！ 戦力は一人でも必要でしょう！ 家を出た日から、私はレイ達を倒すって決めてたんだから！」

それを聞いた今度は蛍がカチンとなる。

「レイ様を倒すなんて許さない！ 私はレイ様を倒すために行くんじゃないわ！」

両者の睨み合い。

思わぬ展開に なってしまった。雲行きが怪しくなってくる。

まだまだ、会議は終わりそうな気配を見せなかった。

第26話（苛立ちと不満）（後書き）

【あとがき】

『苛立ち』って『いらだち』と読むんだ。へー。

……。

作者、過去の自分に学ぶ。

ブログ第26話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-75.html>

ありがとうございました。

第27話（決裂会議）

険悪なムードは尚も続いている。

「青龍復活を望んでる彼は敵よ！ 救世主や私達 七神に とつてはね！」

マフィアは強い口調で怒り続けている。蚩も同じように言葉を返す。

「確かに私はレイ様から逃げてきたわ！ でも こっち側に居るのはレイ様を倒すためじゃない。レイ様の説得をするっていう勇氣について来ただけよ！」

「一体、あなたは どっちの味方なの！？」

「それは……」

そのまま、蚩は黙ってしまった。

「レイ様レイ様って！ 結局あなたも所詮は敵ね！ 私は今でもあなたを恨んでる！ もう少して、マザーが死ぬ所だったんだから！ 本来なら、あなたが居るべきトコはココじゃないのよ！」

……！

今のマフィアの言葉に、私はカツと熱くなった。

「言い過ぎよ！ マフィア！ 今の言葉は！」

するとマフィアはパイと そっぽを向いて、「頭冷やしてくるわ！」と広間から外の方へ出て行った。

後に残された私達は黙っていた。とつても後味が悪い。

「こりゃ、明日は無理だね」

カイトは そう言って背中を向けてどっかに行ってしまった。

夕方、宿屋で それが あった次の日。朝が来た。

マフィアは何処かへ消えていて、蚩は気分が悪いと言って宿屋に

残った。紫も蛭が心配なのでと宿屋に残る。

私、セナ、カイト、メノウちゃんの4人は、時間に近い食事をしに近くの料亭へ。行く途中だった。

「やれやれ。仲間割れしてる場合じゃないのになあ」

と、ため息 混じりにセナが言った。

「昨日の、彼女らしくなかったな。何か……変だった」

「カイトも そう思う……？ 私もなんだ」

ほんと、マフィア一体どうしたんだろう？ いつもは冷静で しっかりとした人なのに。昨日は やけに短気だった。しかも、蛭に 対して あんな事を言い出すなんて。考えられない。

「マフィア、どっか行っちゃったし……せつかくレイのトコに行く って決めたのに この先、どうなっちゃうんだろ。これから、協力 し合わなきゃいけないって時に。ひよっとして、七神やめるなんて 言わないかなあ……元々、マフィアはマザーや孤児の子達を置いて 来てくれたんだもの。無理に旅に参加する事、ないよね」

と、ひとり言のように呟くと、セナが いつものように私のオデコ にデコピンした。

アタ！

「ばーか。世界の一大事の方が大事だろ。それに それ、今さら何 だ！ マフィアの何処が無理してるって？ 散々世話になってるだ ろ、お前！ お前がシャンとしろ！ シャンと！」

さらにピコピコつつく。私が「ううう……」と唸る。

私とセナが そうやって話していると、いつの間にか横にいたはずの カイトが消えた。

「あ、あれ！？ カイトは！？ メノウちゃん！」

「何か、急用が できたって戻ってったよ。先に行つててくれて 梅ノウちゃんは目をクリクリさせて そう言った。「あ、そうか ……ふーん、わかった」と私は言って、とりあえず先に3人で料亭 へ向かった。

……一方、勇気達と別れたカイト。実は勇気とセナが話している間、人ごみに紛れて歩くマフィアの姿を見つけたのだった。

（あれ……？ 何処 行くんだ？ あっちは港の方向……まさか）
とにかく、一刻も早くマフィアを追いかけようとカイトは道中
駆け出した。

人ごみをかき分け、走る。

（何処 行った？）

キョロキョロと辺りを見回しながら、ついには港へ出てしまった。
人が少ないので、マフィアの姿は すぐに見つかった。

砂浜の方で一人、座って海を眺めていた。
とても……悲しそうな顔をして。

カイトが近づき肩を叩くと、ビクリとしてマフィアは振り返る。

「何だカイトか……」

少し顔を見てホツとして。また前の海の方を見つめた。カイトは
マフィアの隣に立ったまま、様子を窺っていた。

「こんな所で青春か？ ……いいねえ、若いモンは」
と、水平線が見える海に目をやりながら。日光に照らされ光輝く水
面を眩しそうに見ながら。時折 吹く冷やりとする風を受けて気持
ちいいと感じながら。

カイトにマフィアは、そつと言う。

「私、あんたより年上じゃなかったっけ……」

ザザー……ン。

沈黙の上に波の音が かぶった。

カイトは、なびく髪をかき上げた。

「ふっ……よくぞ見破った。確かに俺は18。あんた、一つ年上だ
ったっけ。で、セナが17でレイが18……げ、レイと同じかよ。」

今 明かされる真実。ジャジャーン」
と、指揮者のようにタクトを持って振る素振りをした。

ザザザーン……。
再び沈黙の上に、波の音が かぶる。

「あんたって……実は賢い？ いつもいいタイミングで、そうやって……いつかの時も そうよね。私と蛭が口論に なりそうだった時も、さりげなく違う話題 ふっかけて。あれ、わざとでしょ」
マフィアがチラリと横目で見える。

「何の事でしょう？」
と、ピュウと口笛の高い音が軽やかに響いた。マフィアはクスリと笑う。

「おつかしい奴。メノウちゃんも苦労してるらしいじゃない。本当、あなた達いいコンビ」
そこまで言ったマフィアは突然 顔を曇らせた。

「……今の私、どう思う……？」

不安気とも とれるようにマフィアがカイトに聞いてみた。
「言っでいいわけ？」

マフィアの問いに対し……あっけらかんとした口調でカイトはマフィアの横に「どっこらしょ」と言いながら腰を下ろした。あぐらをかいて、片ヒジをヒザの上につく。アゴを手にしたせて、顔は正面の海に向けていた。

軽く返されて ちょっとびっくりしたマフィアは……頷いた。

「いいわよ。言っでみて」
「そんじゃ」

コホン、と咳払いの後でカイトはスラスラと思うがままに言葉を言い並べていった。

「んーと。セナへの やきもち。七神としての責任感とプレッシャー。実家の心配。長旅の疲れ。孤独感。力の酷使…… “私、このままココに居ても いいのかしら？” …… そんなトコかな」

「……」
「勇気をとられたくないとか、護らなきゃ、とか…… 色んなものを抱えすぎて…… 要するに、お疲れ気味。心身ともに、そろそろ限界？」

と、ヒジをついたまま、顔と視線をマフィアに向けた。

「……あなた、天才ね。その通りよ……」

マフィアが段々と消え入りそんな声で返事をすると、カイトは“イエー！”とポーズを決めた。

ちよつと微妙な表情を浮かべ、ハー……と深く息をつく。

「人の心が読めるのかと思っちゃった。すごいわね」

「ついでに言うと。勇気の次の行動」

聞いてか聞かずか。合間を置かず、カイトは勢いで話し出した。

「マフィアを置いて、俺らだけでレイントコに のりこむね。メノウは宿の主人にでも頼んで。あんた、どうする？ 言われる前に言うてやれば？ ココで待ってるってさ」

「……」

言われて、思考をこらす。言い返す事は今のマフィアの状態からでは難しく思えた。

「……そうね…… 勇気は きつと そうする。仕方ないわよね…… 勇気にはセナが ついているし。私は別に必要ないわよね……」

ヒザを抱え、下を向く。黙り込んでしまふ。隠れて そこから落ちたもの……それは涙だった。

「よく頑張ってるな。俺、救世主よりも あんたが一番しんどいと思っよ」

マフィアは ずっと黙ったままだった。

「3人、て数。結構シビアなんだぜ。友達でも恋愛関係でも。人は普通、一人しか相手できないだろう。一人の質問にしか答えられない。口は一つしかないからな。って事は……一人が一人の相手をすると、一人余る。その余った一人は間には入れない……それが今のあなたの状況だな。セナと勇気の間に、割り込んで いけないもんな、直には。だから ついつい、強く出て言っちゃったりして自分の存在アピールしたりするんだ。今回の場合も、ちょっと それだな。力 使って海渡ろうなんて言い出したから。多少 無理しても」

静かにマフィアの顔を覗き込むカイト。まだ続けた。

「……というのは まあ、置いて。あなた、実家に一回 帰ったらどう？ うん。それが一番いい。しばらく何もかも忘れて、休んでこいよ」

両ヒザを固く抱え込んだまま、顔を その中に埋めたままのマフィアは、首を振った。それはできない……と意味していた。

「七神として……ってか？ でもなあ、俺そんな自覚サラサラ無いぜ？ 旅の目的も、ただ人形を売ってただけだし。ついでに力貸しましよか〜って程度。で、あの鷓とかいう奴。あいつをギャフンと言わせてえ！ って感じ？」

と、マフィアに聞いても答えは返って来なかった。

「責任感 強すぎ。そうやって自滅すんの。疲れてるって自覚あるうち、何とかした方がいいんでない？ あ、何だったら俺も一緒についてつちやるか」

やっと顔を上げたマフィアは「……結構」と小さく言って、晴れした顔で立ち上がった。

「……わかったわ。そうする。ありがと、カイト……やっぱり あ

「なた変人で、天才ね！」

と、ニコツと笑って、砂浜を走り去って行った。

残されたカイトは座ったままで、バタリと後ろに汚れも構わずに倒れてみた。

「うーみーはー広いーなー……」

そして、すぐ、お腹が鳴る。

「あう」

カイトも、お腹をさすりながら立ち上がり、砂浜を走り出して勇気達の居る料亭へ向かった。

青春である。

ほぼ同時刻。

カーテンを閉めきり、真っ暗にした宿屋の部屋の一室で一人、ベッドで、だるそうに横になっっていた蛸。

“一体、あなたは、どっちの味方なの!?”

エンドレスに響き渡るマフィアの怒り声。一晚、越えて今の今でも頭の中に残っている。

うつとうしかった。薄いシーツを激しく握りしめ、眉間にシワを寄せる。胸が痛むのだった。

（私は……レイ様に造られた4番目の影……にして、失敗作。成長しない子供の姿のまま、未熟な力のまま……）。

レイ様は優しくかった。私はレイ様のために技を覚え、紫苑の協力のもと、紫を造り、技を磨いた。あんなに、あんなに優しくかったレイ様……。たまに、ふっと暗い顔をなさるけれど。

でも、変わってしまった。冷たい瞳、氷つくような視線。邪尾

刀や四神鏡に心奪われて、すっかり様子も態度も変わってしまった。
私は……逃げた。レイ様を裏切っ……て。

裏切る？ ……いいえ、レイ様を慕う気持ちに変わりはない。
裏切ってなんか、ない。

じゃあ、どうしてココに居るの？

レイ様の敵である、救世主と共に。

訳がわからない。何故、自分は勇気の所へ来たのか。

わからない……わからないのよっ……！)

その時、トントンとドアのノックの音がした。ゆっくりとドアが開く。開けたのは紫だった。

「紫……帰って来たの」

紫は勇気達と料亭に向かっていているはずだった。

「蛭様が心配でしたので。気分は大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。全っ然。余計な心配よ」

と、パイと そっぽを向いた。

蛭に近寄りつつ、紫は いつになく話し出した。

「レイ様を倒しに行くのでも、説得しに行くわけでも ありません。帰るためです。元のレイ様の所へ。私達は、待つためにココに居るのです」

「待つ……？」

「時機が来たら帰りましょう。それまで、ココに居るんでしょう？」

救世主の そばに

「帰る……レイ様の所へ……」

(レイ様……私……)

“役立たずは……去れ”……それがレイと交わした最後の言葉。そして、あの恐ろしい顔つき。下僕か奴隷を見下しているかのような、

非情に満ちた表情。冷めた目つき……一寸でも笑う事のない口元。緊迫の場面……。

(私の頬を傷つけて、そう言ったのよ あの『男』は……)
蛍の感情が高まる。鼓動が全世界中に聞こえそうなほどだった。

「嫌……何なの この気持ち」

ガタガタと体が震える。寒気が走る。そんな蛍を、そつと後ろから手をまわし受け止めるのは、紫だった。何も言わず、ただギョツと、蛍の震える体を抱いていた。

「怖い……怖い紫。レイ様も……勇気も」

「おいしー！ このスープ！」

と、大きさに わめいてみせるのは私。何処かに消えていたカイトも戻って来て、セナとメノウちゃんと。4人で料亭に入り、テーブルについて料理を注文した。そして目の前に注文した おかずが、どんどこやって来ると、テーブルの上は お皿で埋められていく。そして食べる！

今は昼食の時間帯でも あるので、周囲は賑やかだ。店内の何処からか、時々笑い声が上がって盛り上がりを見せている。真つ昼間からお酒を飲んで、できあがっている おじさんが居たり。厨房からはフライパンか鍋で炒め物でも しているのか、野菜でも焦げついたような美味しそうな匂いが。

ますます食欲が湧き、箸が進む。

食べているスープの美味しさの感動を伝えようと素直な大声を。

ただ、大きな声で話さないと、近くでも聞こえにくい。

しかし私が妙にハイテンションで声を張り上げているのには、別の理由もあった。

私の隣の席に座っているセナ。

店に入って席に ついてから、ずっと だんまりだ。何も話してくれない。呼びかけても、気のない返事をするばかりで……。

料理をホソボソと摘むように食べているだけだった。

変だよな…… 様子が。どうしたんだろう？

「コレ、鳥？ 骨は それっばいけど……」

「ヤンポンタンのスープだって」

……なんて、向こうではカイトとメノウちゃんて話が進んでいた。

「へー。ヤンポンタンって何だろ」

と、私が絶賛したスープをまた一口すくって飲むと、「アホウ鳥の一種だってさ」とメノウちゃんが そばに あったメニューを読んだ。

思わずゴホッ！ っとムセ出す私。スープも少しだけテーブルの上に こぼして広げてしまった。

「っご、ごめ……」

と、ゴホゴホと。何とか息を落ち着かせようと するけれど、苦しくて。ああ何だか情けなくなってきた。

「大丈夫か？ ホラ」

セナがテーブルの上に置いてあった布巾を渡してくれ、私の背中を さすってくれた。その布巾でテーブルの上を拭きながら、「ありがと……」とお礼を言う。

「何も そんな驚く事ねーじゃん。大丈夫！ アホは これ以上アホには なんないぞ！」

いきなり そんな事を言ってくれて私にニコニコと笑うセナ……なので思わず私は いつもの調子でセナの足を思いつき踏んづけてやった。

「いってえ！」と苦しむセナ。

何よ、元気じゃない。心配して損した。

そう思い直した。

「あ、そういえばカイト。さっき、何処 行つてたの？ 何か、服に砂が いっぱい ついてるけど。もしかして海に？ 砂浜まで？」
改めまして食事を続けながら、カイトに話しかけた。カイトは皿に残ったパセリみたいなのをモシヤモシヤ食べながら、

「え？ ああ。実は、すんげー美人な お姉さんを見かけてさ。砂浜まで追っかけてナン……」

と、言い終わらないうちに「アテッ！」と悲鳴を上げる。今度は、メノウちゃんがカイトの足を踏んづけたようだった。

平和だ。うん。

料亭を出て、せつかくだから海でも見に行こーかあーという事で、カイトとメノウちゃんは並んで歩く私達の前を大はしゃぎで走り回っている。

「ねえ……セナ、どうしたの？」

ついに私は聞いた。はしゃぎ回っている2人は置いていて。やっぱり、黙ったままのセナに聞いてみる事にしたのだ。

「ああ……ちよつと考え事」

相変わらずポーツとしたまま。セナは私ではなく、空の方を見ている。空には雲がポツンポツンと浮かび、陽気そうな青空が広がっていた。

そして運んでくる風が、海の気配を私達に感じさせている。

「考え事って？ 船の事？ それともマフィアの事とか？ 蛭？」

レイ……とか？ ……それとも」

私がアレコレと考えていると。

「お前の事だよ」

と。

……。

……一瞬、私の動きが止まった。

セナの意外な言葉に、電源でも切られてしまったかのようにだった。

「へ……私？」

ちよつと又けた声で自分を指さした。

「気になつてたんだ。この前の話の事。船の上の……」

セナが言つた事を思い出していく。

この前……？ 船の上……？

ちよつとずつ思い出してきていた。

「あ……ああ。マーク国へ向かう途中に乗った船ね。うん、思い出した。で、気になつてゐるって？」

ようやく電源が入り直つた私。全く何を期待してたんでしよう。

やだなあ、顔、赤くない？

でも それでもセナは私の方を見ては くれなかった。

「勇気……青龍の事が全部 片づいたら……元の世界へ帰るんだろ
う？」

「え……う、うん」

ドギマギしながら私は心落ち着かせようと頑張る。次に何を言われるんだろつかとハラハラしながら。

「なら何で……向こうの世界で記憶を皆 消したんだ？ 元の世界に帰つた時、お前の帰る場所がない。お前、一人じゃないか」

「それは……」

真に迫ってくるようで、少しの緊張が やつて来た。

「ほ、ほら。また、アジャラとパパラに頼んで……」

私が少し慌てたように言つと、セナが言い返す。

「最後、どうなるか わかんないんだぞ？ 天神の気まぐれで突然
帰されたら？ 記憶が戻らなかつたら？ そもそも……皆、生き

ているのかどうか」

生き……。

私は興奮して叫んだ。

「生きてるよ！ きつと！」

「わからない。先の事なんて」

……！

やっぱりセナ、変だ。

何で突然そんな事を言うの！？

「例え青龍が蘇って、この世界が滅びる事に なっても。それでも

お前は帰るんだ。自分の世界へ。俺達が何としても そうする」

セナは真剣だった。その横顔が言っている。

「嫌よ！ 一人だけ逃げるなんて！ 私も皆と一緒に」

「ダメだ！」

「どうして!？」

そしてセナは私の顔を見る。

私達2人とも歩くのを止めて立ち止まった。

「お前は、こつち側の人間じゃないんだ。本当なら、今だってココ

に居るのは おかしいんだよ！」

そう叫ぶセナの顔は。

「でも七神創話伝には！」

「あんなモノに踊らされている事も おかしいんだよ！」

海の音が近く、優しく沈黙に重なる。

セナの瞳に私が映る。びっくりしたような、泣きそうな、私の顔が。

「……とにかく、勇気は元の世界に帰るのは絶対なんだ。アジャラとか いったか。今度 会ったら、もう一度 元の世界へ行つて、記憶を」

セナが言いかけたのを遮って、私は震える声も構わず訴えた。

「私は命捨てる覚悟をつくつただけよ！」……

手を握り締めて詰め寄った。

驚くのは、セナの番だった。大きく目を見開く。

私は今、自分が言った事を一瞬だけ忘れてしまったような奇妙な感覚を覚えた。

命捨てる……？

そんな事を……？ 何で。

「何よ……帰る帰るって。どうして そんな話するのよ！ 前、私が元の世界に帰ろうとした時は、あんなに優しくかったのに……ひどいよ！」

あの時セナは、また こっちの世界へ戻って来てくれなんて言うてた。なのに どうして今は私を。まるで邪魔扱いしてるみたいなのよ！」

「……」

また、電源が切れた。

思考と動作が停止する。

「？ 勇気？」

セナの顔が何だか よく見えなくなった。

(私……邪魔なの……？)

嫌な感覚と否応ナシに流れ込んでくる考えが止まらない。セナの顔が近くとも暗くて よく見えなくなっていた。

セナは、私をこの世界から追い出そうとしてるの？ だから、そんな風に言うの？ 何故？ 何のために そんな事を言うの？ 私なんか いらなくなつたって事？

ふいに、ハルカさんの顔が浮かんだ。

そして、夢の中の もう一人の私が言った事も。「よく見てごらん。3人とも、お互い誰を見てるのか」

レイはハルカさん。ハルカさんはレイを……見ていた。この2人は、お互いに好きあっているんだと思ってた。というか、それしか思わなかった。他の事なんて……。

じゃあ、セナは誰を見ていたの？

レイとハルカさんを見ていた。

もし……もしも。セナがハルカさんの事を好きだとしたら？ セナはハルカさんがレイを好きという事を知っていて。レイの気持ちも、知っていて。

私なんて元々、セナの眼中に なかったとしたら……？

「勇気……？」

心配そうなセナの顔。でも本当は、私の事が うっとうしくて うっとうしくて仕方なくなってる……。

……そう。お兄ちゃんの彼女の小谷とかいう人。あの人と同じ。

親切そうに ふるまって私を追い出そうとして。

「おい、勇気？」

セナが私の両肩を揺さぶった。あさつての方向を見ていた私だけ けれど、「嘘つき……」と呟いてセナの手を振り払った。

「さよなら……」

言った私は どんな顔をしたんだろう。作り笑いかな？ 泣き笑いかな？

私はセナの元から走り去った。セナが追って来る事は なく。

私は ひたすら走った。苦しくても走った。

(死ぬ覚悟で こっちの世界に来たんだ、って思ってた)

ズタボロの みつともない顔をしていたんじゃないかと思う。通

りすがりの人々は皆 変な目で私を見ていた。それには何も感じず、自分の事ばかりが身を支配していた。

(私が こっちに戻ってる間、お兄ちゃん達に心配かけたくなくて、いつその事、私の事を忘れてもらおうって思ったのよ)

街の中を駆け抜ける。

(あんなに必死な お兄ちゃんのために)

何処をどう走ったか わからないけれど走っていた。

(でも本当は……)

その足で宿へ帰って、自分のカバンを持ち出した。

(本当は、別の理由も あったかもしれない)

思いつくモノ全部入れて、リュックを背負う。そして大急ぎでタバタと また来た道に戻る。

(私、気が ついたから)

港へ向かう。

(セナの事、好きだって気が ついたから。だから)

港をひた走っていると、ちょっとボロだけれど丈夫そうな小船を見つけた。一人くらいしか乗れそうにないやつ。

(私は、自分の世界を捨てたのよ)

ヒョイと乗り込んで、オールで舟を こぎ出す。

静かな波にのって……南へ向かって。

《第28話へ続く》

第27話（決裂会議）（後書き）

【あとがき】

主人公、よく突っ走りますね。
作者、最近1メートルすら走っていません。

ブログ第27話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot.com/blog/entry-77.html>

ありがとうございました。

第28話（侵入）

世界で一番バカな女って私の事かもしれない。
今、痛切に そう思ってるんですけれど……。

「さ、寒い……」

オールを握り締め、あまりの寒さに凍えている私。海の上で、一人くらいしか乗れない小舟の上で。勢いだけで漕ぎ出したもんだから、陸は もう見えないほどに遠ざかり。一体 私は何をやってるのでしよう。今頃 段々と、やっと冷静に なってきていた。

無茶やってるなあ自分、と……。

「な、何か ないかな……」

と、リュックの中を探す。すると、セーターとカイロを見つけた。あと、昨日の残っていた お茶。水筒に入れてあるやつで、まだ冷えきっておらず、ぬるそうだ。

さっそくセーターを上から着て、カイロを全部 取り出し体中に貼っつけた。お茶も いいやと全て飲み干してしまった。

「はあ……。ようし、イケるわ！ 最初の頃より、だいぶ体力ついたんだから！」

本当、私 体力ついた。そりゃそうよ、ほとんど毎日 旅してたんだから。足腰も だいぶ鍛えられてきているはず。ココに来た当初は すぐに息切れしそうなもんだっただけけれど、今では だいぶマシになった。

デタライト島まで軽い軽い。天気も全然 良いし。まあ ちよつと寒くなつて霧も ちよつとあるけれど。何とか なるような妙な自信が あった。気を張っていなきゃすぐ滅入ってしまうかも。

「セナ達、やつぱり怒ってるよねー。……いや、呆れてるかも」

「全く呆れたやつだ！ 何 考えてるんだよ、一人で！」

勇気の予想通り、怒るセナ。勇気と勇気の荷物の一部が消えたので、慌てて捜してみたなら港の方へ向かったという目撃談があった。セナは すぐにピンと来てしまった。

「あいつ、一人でレイントコ行く気だ！」

「何だつてえ！？ そりゃまた突拍子の ない……。いや、無茶苦茶だ！」

「どうして そういう事に なるのよ！」

「勇気の奴、何 考えてるわけえ！？ 一人で のりこむなんて！ 宿屋では、セナ、カイト、マフィア、蛭達と。大騒ぎで 皆、思い思いを口にし騒ぎたて、難しい顔をした。

いったん空いた間を塞ぐかのように、勇気が居た部屋のドアを開けてメノウが飛び込んで来た。

「お兄ちゃん！ 船が あるって！ 4人が定員ですけどって！」

メノウの後ろに ついて来ていた、宿屋の主人に注目した。

「船、お借りできますか！？」

マフィアが前に出て主人に尋ねる。

「ええ。私の若い頃に使っていた物ですけど。小型のエンジンボートが一隻…… 4人くらいがギリギリの大きさですけどね」

宿屋の主人は そう言った。

「4人……」

「私は残るわ。あなた達で行ってきて」

セナの顔色を読み、サツと言うマフィア。最初 驚いたセナだったが、事が急だった。

「ああ。すまない」

と言った後、すぐさま準備をして宿を出た。

マフィアが宿の上の階、窓から下を見下ろす。

「皆！」

宿の玄関からゾロゾロと出てくるセナ、カイト、蛍と紫。いっせいに声のする方に振り返って見上げて、マフィアを見た。

心配そうな、でもそれを堪えているかのような顔で少し笑っていた。

「勇気の事……絶対よろしくね」

もちろん、と全員が頷いた。

「行くぞ。早く追いつくんだ」

セナの かけ声にも、皆が頷いた。

船の場所へと急ぎ進んで行く。会話は その間には なかった。

セナは焦りを抑えながら、頭の中で思考と感情が動いていた。

（つたくー……。あのバカ！ 何が“さよなら”だ！）

最後に見た、勇気の顔。無理に笑う子供の顔。今は その記憶が胸を締めつける。

（バカは……俺の方がもな。何を焦ったんだか。ただ……）

勇気が帰ってきた時の事を思い出す。

（勇気のために言ったのか。俺のために言っただけなんじゃないのか）

そう あの時。勇気が帰ってきて自分の目の前に現れた時の事だ。ホッと安堵するかのような安心感と嬉しさと……突然に芽生えたような不安感。

（俺……勇気の そばに、いつまで居るつもりなんだろうな？）

一度 芽生え気がついた感覚は いつまでも引つかかってしまう。決して消えなかった。

不安。セナの心中を支配していく。

私はデタライト島に一足先に到着する事ができた。途中、何度くじけそうになったか。

ただっ広い海が四方八方に広がって、そこにポツンと私の乗った小さな舟。ホント、何で無事に着けたんだろうかと思ったりする。陸のようなものが遠方に薄っすらと見えた時には、すごく心の中で飛び跳ねて喜んだ。え？アレがそう？マボロシじゃない？だまされてないよね？なんて ずっと着くまで誰かに聞いていた。時刻も もう夕方に入り、このまま海面で夜を過ごすんだと考えるたび、寒さの震えじゃない震えが私を襲い出していた。本当、自分の無茶というか無鉄砲さを呪い沈みそうだった。

でも、もう大丈夫！ 第一の関門は難なく突破したわ！

私は砂浜に舟をつかせ、落ち着いた後。島の全貌を見渡した。すぐ、森へと繋がっている。人工的な物は見つからなかった。島全体が森で固まっているんだろうか。この、先が見えそうになり森の中へと突き進んで行くしかなさそうだった。

これから夜に なっていくからか、森はシンと静かに存在だけしているかのように佇んでいる。

時々、木の葉が風でカサカサと騒いだり遠くの空で鳥の羽ばたく音が聞こえたりしている。

思い出すのは……マフィアの言葉。
魔物の巣だと言われて……る事を。

(あ、あははは……)

ますます背筋が凍った。今さら後悔しても遅い。

(だ、大丈夫よ、きつと。今まで、色んな強敵と戦ってきたんだし) 強敵とは、蛍や紫の事……何度か、ぶつかってきた。

(でも、魔物と戦った事って あったっけ?)
考える。

キライオンやゾンビ。その他、諸々。皆、セナやマフィア達が倒していた。ツキワノヒゲヒゲ何たらは酔っ払っていたけれど、結局セナが倒した。

そんな事を思い出した途端、サー……と青筋が顔面に広がる。

「だ、大丈夫！ 元気 元気！ 私にはコレがある！ それに、いつかみたいに不思議な力が出るかもしれないだもんね！」
「セント・ブリッジなる架け橋」とかだつて一人で行ってたし！ うん、悪運とかには強い方なのかも。きつと！」

と、右手に光る指輪を空に かざした。キラーン、と。誓いのように光る。

「そういえば…… “セント・ブリッジ 聖なる架け橋” の時も似たよーな事を言ってたなあ……」

一人で単独行動。で、いざ来てみて、自分の無茶さを自覚する。どんな凶悪 魔物が居るか わからない地で。こんな風に怯えては、セナから もらった指輪を見て安心する。

(結局 私、セナを頼りにしちゃってる……)
少し ため息をつく。

でも すぐにキツと前を見る。

「行こう」

前に広がる樹海。でも、この先にはレイ達が居る。

ココまで来てしまったからには引き返したくない。とにかく。

とにかく、行こう

そう心に決めて腹をくくった。そして、第一歩を踏み出した時。突風が吹き、森が騒がしく化した。

「……！」

ビュウウウウウ……

遠くから、バサバサ！ という音が聞こえてきて、一瞬だけ静かになったと思っただらだ。羽音みたいな音が何十にも重なった音になり、重なって重なって。それは次第に森の奥、遠方から近づいてきた。

ジツと、様子を見ていただけの私。下手に動く痛みを感じてしまいそうな臨場感。張りつめた場の空気だ。

森の奥、先から、何かが やってくる気配がした。
一つでは ない。

「わぶっ！」

気配の正体を知るべく目を凝らしていた私の顔に、何かが突進してきた。柔らかいもの。

あまりに突然だったため、ステンと尻もちをついて転んでしまう。

「な……何っ!？」

と、上半身だけをすぐに起こして辺りを窺う。それは。

コウモリ。

コウモリの集団だった。

集団で、私なんて無視して森から抜けて、空へと道を作るように波となって飛んでいった。

「ひえっ……んっ!？」

慌てふためきながら地面を触ると、今度も何だか柔らかいものに触れた。

ネズミ!？

「ぎゃあああ〜！」

悲鳴が響いた。空に気をとられてしまったけれど、地面ではネズミの大群が森から押し寄せてきていたのだ。

ドドドドド。

小叩く地面の音。私は一気に気分が悪くなった。

「一体、何が起るの……?」

嫌な予感か、前兆。

私の幸運が尽きない事をただ祈るだけだった。

「救世主は まもなく こっちへ来ますわ。あと……小1〜2時間と いった所ですわね」

「ふ…… やつと来たか。待ちくたびれた」

怪しげな陣の描かれた床。陣の中央に座る さくら。正座し、目を閉じ、勇気達を頭の中で視察していた。その さくらの術の光景を部屋の隅で立って見ているレイ。表情は2人とも無表情だった。

「レイ様。救世主を追ってセナ様や蛭達も こっちへ向かっていませわ」

その さくらの報告を鼻で笑うレイ。少し口元をニヤつかせる。

「来るが いい。セナ……お前に、八つ裂きにされた救世主を見せよやろう」

と、クツクツクツ……と笑い出す。

すると。フ……とその場に鵜が現れた。

「救世主には手を出しちゃいけないわけ？ つまんないなあ」

と伸びと あくびをしながらレイを見る。「鵜！ 口を慎みなさい

！」と さくらがピシヤリと言った。

「お前達には他の連中の相手をしてもらう」

そう言うレイは、その部屋を静かにドアから出て行った。

「了解」

そう言う鵜もすぐ姿を。空気に溶け込むように消えた。

そしてレイの向かった部屋はハルカの居る部屋。真つ暗に近い部屋。灯りも なく、暗闇の中でヒソソリと、キラキラと輝く全身大の大きさの氷塊の中にハルカは閉じ込められていた。見せかけの氷闇の魔法で作られた、嘘の氷。触れても温度はない。ただの見せ

かけの、氷に見えるだけの。
「……………」

部屋に照明の光が なくとも、この作られた闇の氷から光は放たれている。決して強い光では なかった。

ハルカは目を閉じ、眠っている。血色は よい。生きていると見てとれる。スラリと成長よく伸びた手足。昔から色あせなく変わらない金色の髪の少女。

「ハルカ……………」

レイが そう呟いても、答えが帰ってくる事は ない。彼女は、「動けない」のだから……………。

(レイ……………)

そして例え、ハルカがレイに心の中で話しかけたとしても、お互いの声は届かなかった。

奇跡かもしれない。

私は無事に魔物一匹出会わずに、レイの根城と思わしき場所へと着いた。

森の中を進んでいるうちに色々な事を考えていた。自分を取り巻く幸運を。普通、こんなにも全てが うまくいくのだろうか。事故もケガも なく、迷う事も なく、魔物も……………。

迷わなかったのは、進んで行くうちに建物の頭が見え出してきたからだった。

こんな、島が森だけで成しているかのような所の奥深くに、似合うんだか似合わないんだか わかりかねる謎めいた城の建物が。西洋風の古城っぽかった。ドラキュラでも住んでいそうな……………。

レイの城か どうかは わかんない。でも、そこにレイが居るよ

うな気がしてならなかった。ただの直感にしかすぎないというのは、わかつては いるんだけれど……。

自分の直感を信じよう。いいや、もうそれで。

そんな結論を出してしまった後。ちょうど城の門前へと着いたのだった。

門は私の身長のおよそ3倍くらいの高さ。城の壁は茶色いレンガ造りだったのだけれど、門は全体的に黒っぽかった。鉄の上に塗られた黒は、鈍い光沢と冷たさを放っている。ガツシリと格子が組まれた門。大きさも大きなので、とても私には容易に開けられそうじゃないなあと思つて門の向こうの城を恨めしそうに見ていたら。

ゴゴゴゴゴ。

勝手に門が中へ押しやられていき、開き始めたじゃないかあ！

(うわっ……)

砂煙をたて、やがて重々しい門は完全に開ききる。私の前に、城へと続く道が切り開けた。

第2関門、突破？

私、何の努力もしてない。いいのか こんなんでも……。

まあ、いいか。

私は、導かれるままに門を通つて城の玄関の前へ。

着いた途端に、これまた同じように勝手に両開きの、花か何かを形に彫つたような扉が開いていった。

開いた扉の向こうは奥まで続く真っ直ぐな廊下。暗いなあと思つていたら、いきなり廊下が明るくなり出した。廊下 両壁に点々と奥の方まで飾り備えつけられた燭台のロウソクが手前から順に次々と火が点されていった。ポツ、ポツ、ポツ。奥の奥まで、ある程度。それを見てついつい「おお」と声を上げてしまう私。

しかし こんなにも用意されているという事は。

(レイ……相手には こっちの事、筒抜けって事なのね)

面白いじゃあないの、と勇み足で私は歩き出した。私が迷う事なく今まで進めてきたのは、こんな風に導きがあるからだと確信していた。

きっと先にはレイが居るんだと。

私は腰に。スカートに小さく折りたたんだナイフを差し込んで持っていた。今、それが ちゃんとあるかどうかを触って確かめる。一応、丸腰というのわねと思って家の台所から頂戴してきた果物ナイフだった。かつて買って持っていたナイフは鷓にスラれてどっかいつちやっつたんだし。

そのうちまた何処かで買い直そうとは思っていたけれどね。

私は案内されるがまま、ロウソクの火を頼りに廊下を歩いていった。

しばらく進む。トタ、トタと私の足音が響いている。ツルツルした廊下は、冷えた空気をさらに いっそう冷たくしているんじゃないだろうか。白い息が出るとまでは いかないけれど。

いつでも腰のナイフを取り出せるよう心構えはしていた。油断しちゃダメよと、言い聞かせながら歩く。息にも気を使う。

すると、やがて廊下の道先は なくなり、壁になった……わけではない。突き当たりになって、ドアが一つ。廊下の片壁に あった。そこだけだ。他に部屋へと通じそうなドアがない。

ココしか、先には行けないんだと思って、ゆっくりとドアを開けていった。

ものすごく大きな部屋だった。そう感じたのは、家具と いったような物らしい物が いっさい置いていなくて、天井が高かったからだった。

床は大理石かな。廊下と同じくツルツルしていて冷たく硬そう。

私の影が映っている。

白っぽい壁に囲まれ、白い柱が両端に規則正しく並んでいた。何だろっ、この部屋。人が住む所や雰囲気じゃない。何も置いていないし。

「はー……何、ココ……」

私がほんのりとした明るさを頼りに部屋の隅の見える所まで目を泳がせていると、突然後ろで開きっぱなしにしておいたドアがうるさい音を立てて閉まってしまった。

バターン！

私は その音に すごく びっくりして振り返る。でも もう遅かった。

また静かになった辺りの中で。私は慌てる事は なく。冷静に、黙って立っていた。

(ドア、開くんだろうか……)

確認しに行くのも面倒な気さえした。開こうが開くまいが、この部屋からは まだ出るつもりも なく。

私は ただ、突っ立っている。

このドアを閉めたのは鵜だったなんて、部屋に居た私は気がつかなかった。

「ごゆっくりと」

と、笑いながら。

ドアを閉めた後は、すぐ姿を消した。

鵜達には別の なすべき仕事がある。

これから私を追いかけてくるであろう、セナ達を迎えるという、仕事だ。

それを全く知らない私は、ふと顔を上げた。

足音がする。

私の正面、向かい奥から、その音は段々と大きくなってくる。誰かが近づいてくるのは明らかだった。でも一体誰？

「……………」

さっきドアを閉められたせいで、部屋は暗く全然何も見えなくなってしまうていた。目は暗さに慣れてきていたけれど、それでも視界が悪すぎる。救いは、全くの暗闇ではない事だった。床が青く白く、床そのものがじんわりと光っているようだった。

ヒザ下くらいまでしかよく見えないけれど。

そして近づいてくる足音は、一つではなくなっていた。いや、足音は壁でアチコチに反響しているみたいだ。それで一つではなくなつて聞こえるだけ。

おかげで、その足音を出している人物と私との距離がわかりづらくなっている。

「ようこそ。我が城へ」

声が私の所から数メートル離れた所でした。聞き覚えがある男の声だった。

嫌になるくらいによく知っている…………彼の低い落ち着いた声。

「レイ…………ね」

顔がよく見えない。足元だけが、薄っすらと確認できた。私の真正面に姿を現し、ブラリと下がった手には何か長い物を持っているた。

「私に来る事…………とづくに知ってたみたいね」

私に緊張が素早く走る。直接、こうやって対面した事あったっけ？

自分の手を握り締め、レイの存在に圧倒されないように気をしっかり持とうと努めた。

「ウチには優秀な術師がいてね……それより、一人らしいが。よくセナや他の奴らが許したもんだな」

言いながら、手に持っていた物を前へと。あれは……。

邪尾刀だ。

「……勝手に来ただけよ。セナ達 抜きで あなたと話つけようと思っ
てね」

あくまでも冷静に、レイを睨みつけた。あつちも果たして こっ
ちが見えているのか どうかは知らないけれど。

レイの含み笑いが聞こえてきた。ククククク……と。

「何が可笑しいのよ？」

と私がかつと赤くなって言うが、レイは まだ笑っていた。そして
皮肉たつぷりに言う。

「叫んだらどうだ？ “誰か助けて” ってな……まあ、叫んでも無
駄だな」

ドキリ。

私の顔が また赤くなった。

(こいつ……私の心、見透かしてるツ。ま、負けるもんか！)

本当は怖い。怖かった。レイの その威圧感。そこに立っている
だけというのに、まるでトゲでも刺さってくるかのような痛みを伴
う雰囲気にもまれていた。私は、立って足腰で踏ん張るのが やっ
とだわ……。

レイの目には、そんな私が滑稽で愉快なんだろうね。ふんだ！

「よくも……罪の無い人達を殺しまくってくれたわね！ そんなに
四神鏡が欲しいの!?」

と、躍起になって言った。レイは冷静に「ああ」と返事をする。予
想通りの答えなだけに、少し悲しかった。

「どうして……もう充分 天神様は苦しんだわ。あなたの復讐は、もう とつくに済んでると思うけど！ ねえ、どうして人を殺して平気でいられるの!？」

「……」

私は構わず続けた。

「青龍が復活したら、私も あなたも きつと ただじゃすまない！ ハルカさんもセナも死んでしまつかもしれないのよ！」

「……」

何故か無言のレイだったけれど、私の口は止まらなかった。

「ハルカさんが好きなんでしょう!? だから……そばに置いているんでしょ……? なのに……どうして世界を滅ぼそうだなんて……」

「言う事は それだけか」

黙っていたレイは、邪尾刀を構えた。

ひよつとしたらハルカさんの名を言った事で、少し感情的になつてしまったかもしれないと思った。だが、もう遅い。

「かかって来い、救世主。俺は そのために お前をココに呼んだんだからな」

「あの、ココまで案内してくれたロウソクの仕掛けには感動したわ」と、私は少し強がりに笑ってみせた。本当は、ちつとも余裕なんてないけれどね。

（私はレイとケンカするために来たんじゃないもの。ナイフを持ったが最後ね。絶対に持つもんか！）

と、危うく触れそうだった、腰に差してあるナイフから手を離れた。しかしレイは私にとって意外な事を口にする。

「ロウソクの仕掛けだと？ フン……勘違いするな。俺が仕掛けた

ものは、そんなチヤチなものではない」

と……構えた邪尾刀の向こうで言った。

「え……どういう事よ……？」

私が要領を得ずに言っていると、また少し口元を歪ませた。

「俺が何故、お前達の行く先々の村や街を襲っていたと思う？」

レイが そう言った後、私の表情は固まった。

それはカイトも言っていた疑問だった。ライホーン村、キースの街。それから これから行こうとしていた東ベルト大陸。皆、私達が行こうとしていた所。

「まさか……何か意味が……？」

と、少し考えたが、やはり わからなかった。

「お前は何故、ココに来たんだ？」

「それは……レイを説得するために……レイが東のベルト大陸を襲ったって聞いて……マフィアが……」

それを言った後、少し何かが閃いた。何かが、わかりかけた気がした。

落ち着いて、今までの過程を振り返ってみる。

ライホーン村。私は そこで初めてレイを見たんだ。斬殺された村人と、血塗られた邪尾刀を持ったレイ。そして怒りを覚えた。それはセナも同じ。セナの旧友だったのに、2人は敵同士になったんだ。

キースの街。私はココで後悔をする。そしてレイの説得を一刻も早くと思うようになったのだ。

そして、東のベルト大陸の3分の1が やられたと聞いて、ついに決行する事にした。

レイの所へ行かねば、と……。

「都合よく単独でココへ来るとはな。一目、救世主の力とやらを見てみたかったぞ。お前も俺に会いたかったらう？ どうだった？ 目の前で人が死んでいくのを見るのは」

レイの言っている事が わからない。彼は何を言っているの？

「自分の無力さを認識したろう？ 呪っただろう？ ククク……ハハハハッ！」

レイの高らかに笑う声が耳についた。ボケた頭を叩き起こしてくれた。

「都合よく、つて。どういう事よ……？ まさかアンタ、私と一対一になるために……ううん、私をココへ連れてくるために……わざわざ私に死体を見せつけるために……あんな事をしたっていうの？」
最後の方は声が震えてた。でもレイの笑いは止まらない。楽しんでる。

「なあに。四神鏡を探すついでさ。それに、俺より先に四神鏡を見つけれたら困るしな。てっきり、すぐココへ来るだろうと思っていたが。案外ノンビリしたもんだと呆れている」

私はレイの言葉に敏感になって、手がワナワナと震え出して止まらない。

「探す…… ついで……？」

斬殺された村人を利用して、私はレイにおびき寄せられた。私
がレイを心底 憎むように。そして……。

「許せない……」

ナイフを抜き取って手に取る。そして構える。

“ナイフを持ったが最後”……。

彼とケンカする事になるだろう、と。

「許さないわ、レイ！」

私の顔が みるみる赤く染まっていく。

これはレイの罠だ。私にナイフを取らせるための挑発だ……そんな事は わかりきっていた。でも、それでも……私は胸に押し込んでいた怒りを抑えられない。

「殺す……レイ！」

ギラギラした目。我を失ったあの時と同じ。かつて丘で蛍ちゃんに向けた目と。

「お前のせいで……セナもマフィアも、皆、……皆、傷ついたんだ！」

セナ、マフィア、カイト、メノウちゃん……蛍、紫くん……村や街の人達。死んでいった皆……リカルくんの涙……皆、皆 傷だらけだった。

そして、私も。

「許さない……殺してやる！」

叫び、私は駆け出した。ナイフを突きたてた。だが、レイはアツサリと横に流すようにかわし、そして私の肩に そっ……と触れて近づき耳元で小さく囁いた。

「言っとくが、俺は女だからといって手加減はしない。死ぬ気で来い」

怒りで頭は回らない。熱い……体。

ただ、そんな状態でも……レイの言葉は私の背筋をゾクリとさせた。

《第29話へ続く》

第28話（侵入）（後書き）

【あとがき】

お茶は開封したらずぐ飲んじゃいましょう。1日以上放置したら危険です。お腹下します。実験済み（他人で笑）。

ブログ第28話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-78.html>

ありがとうございました。

第29話（攻防戦）

頑固者を説得するほど難しいものは ない。一つ事を決めれば、何が何でも やり通す。仮に それが、偽りの正義だったとしてもだ。

「どうした？ 手が震えてるぞ」

変わらない冷やかな声の調子で言うレイ。

私は、まんまと奴の策にハマッてしまったのだ。こいつの頭の中では、常に張り巡らされた策で いっぱいなのかも。セナだって何度が言ってた。レイは、頭が いいとか天才だって……冷静で徹底主義で、粗が ないって。その頭脳で、大人でさえ言いくるめてしまってる。

レイは私にココへ来るように仕向けた。一人で来たのは たまたまだったけれど、恐らくセナ達と一緒に入り口をくぐったとしても何らかの方法で結局 私を単独で行動させようとしたんだろう。私達の行く先々の村や街を襲っていたのも、そのため。私が、レイを心底 憎むように。そして、レイの元へ来るように、仕向けた。

悔しい。

悔しいわ！ 何で それぐらい気が つかなかったの！

いつかカイトが疑問に思って こぼした事はあった。何で、レイは私達の先回りをしているんだろう、って。少し頭には引っかかっては いたけれど。

レイは ただ闇雲に四神鏡を探しているのだと思っていた。なのに、そんな裏が あったなんて。結局 私はそんな深く考えていな

かった。

「どうして私と戦いたいの？ 私が“救世主”だから？」

怒りで震えているのを堪えて聞く。レイは私の最初の攻撃をかわして、私の背後に居た。

「お前の本当の力を見たい。蛭と戦った時の、あの“力”を……」

レイは言った。瞬間、私はドキリとする。

その事は、ずっと触れないで心の奥にしまっておいた事。蛭がまだ敵だった時、私と一対一で戦った。せつかくカイトからもらった人形をダメにしてしまい、カツとなって私が放った“攻撃”の事だ。あれで私、丘を一つ消してしまった。オボロゲにしか、覚えていないんだけど。私は てつきり、セナにもらった指輪のおかげなんだと思っていた。今も そう思っている。けれど……。

「私は一般人。何の力も持ちは しない。おあいにく様ね」

ニヤリと笑ってやった。本当は足も、ナイフを持つ手も震えているんだけれどね。何とか踏ん張って強がっている。怖いけれど、だけど……！

レイは顔色一つ変えず、いきなり指をパチンと鳴らした。すると私の背後にパツと何かが現れていった。

それは大きく、映写機とかで映されるスクリーンのようなもの。しかも横並びに3つ。パツ、パツ、パツ。

驚いたのは、中央のスクリーンには この城の入り口らしき映像が映し出されていて、セナ、カイト、蛭、紫の4人の姿が あったのだ。

「セ、セナ……皆。来てくれたの……」

ナイフを持つ手が緩んだ。あまりの感激に顔も ほころびた。

セナの真剣な顔……セナとは、ケンカ別れ風になってしまった。

てつきり怒っているんじゃないかと思っていた。でも、来てくれた……嬉しい。

ところが、私の そんな姿を見て、レイは また口元をニヤつかせた。

「何処を見ている救世主。セナ達は、ココへは来ないぞ」

「え……？」

一瞬だけレイの方を見て、またスクリーンの方を見た。するとどうだろう。セナ達の進む先には、3本の分かれ道が。おかしい、私が通ってきた廊下では分かれ道なんて なかったはずじゃ。どういう事なの？

とにかく、声は聞こえないんだけどセナ達は集まって少し話し合った後に。3手に分かれ、それぞれ道の先に向かって歩き出していった。セナは右の道に、カイトは中央の道へ、蛍と紫くんは左へと。それぞれが歩き出し、各スクリーンで個人を追うように映し出されていった。

まさか そのために用意されたスクリーン？

「救世主ともども。単純で楽だ。わざわざ別行動をとるとは。よっぽど救世主のおかげで焦っているのか、考えが足りない」

レイが愉快そうにスクリーンを見て一笑する。レイの言葉は私の胸にチクチクと針をさすよう。

単純で悪かったわね！ ああそうですよ、考えなしですよお！
私はアツカンベーでも してやるうかと思っただが、さらにバカさをアピールしてどうすんだと引っ込めた。

「あ……！」

気が ついた。それぞれの道先には。

敵が、立ちほだかる。

右の廊下を突き進んで、何処かの部屋へと入っていったセナの前には、鷓が。中央のスクリーンでは同じくして、何処かの部屋へと入っていったカイトの前には、さくらが。そして、左のスクリーン

に映し出された蛭と紫くんの前には……お坊さん？

「蛭が言ってた……紫苑、ね」

頭はツルピカ。毛は生えていない。無表情に見えるが、落ち着き払ってまるで存在が感じられない雰囲気。沈黙を肌を感じる奇妙さが伝わってきた。

それぞれが、それぞれに。対面していた。

「大事なゲスト達だ。最高のもてなしをしてやろう」

言ったレイは邪尾刀を叩きつけるようにブンツ！ っと下めがけて一振りした。

ビシイイッ！

軽く振っただけなのに、床に亀裂が走る。斬れ味、絶好調とでも言いたいんだろうか。風圧だけで硬そうな床に大きな傷が。

（殺される……）

嫌な汗が背中を伝う。ナイフを構えて体勢は とってはいるけれど、内心ビクビクしていた。さっきの怒りは。悔しさは、何処へ行ってしまったの？

どうする私……本当にレイと戦うの？ 確実に殺されると わかってて？

確実に……なんて言ってしまったけれど。勝てる自信がない。

そうじゃないのに。

こんな、武器で取りあうために来たんじゃないのに。

「どうした？ かかってこないのか？ なら、こっちから行くぞ」

ハッと、気がついた時は もう遅かった。

私の緊張と恐怖で固まった体は、瞬時には動いてくれるはずもない。

レイの刀は私の胸を刺した。

セナと鵜は睨み合っていた。いや、睨んでいたのはセナだけで、鵜はさも面白そうにセナを見ていただけだった。しばらく両者とも、相手の出方を窺っている。

「どいてくれ……つっても無駄だな」

「無駄だね」

そう即座に返す鵜の言葉にハア……と大げさなため息をついた。これまで、鵜にはえらい目に遭わされてきている。今回もそうなんですかと、セナはうなだれた。

しかし勇気の事もあつたので、セナは焦っていた。鵜には決して見破られたくはなかつたので、精一杯の余裕を見せるよう胸を張っていた。

「そっいや、お前とこうして戦うのは初めてじゃなかつたっけ」
などと話しかけたりした。

「そうかもね。僕、争いごとはあんまり好きじゃないんだ。大椅子にでも座って机上で空説だの理論だの、述べている方が好き。だって僕の役割は業師。今回のこの戦いの組み合わせは、僕が決めたんだよ。レイがどうしても救世主と戦いたいって言うからさ。ま、しょうがないって感じでね」

ステップを踏んだりしておどけてみせた。セナは眉をひそめる。
「レイが勇気と戦いたい？ 何故だ？」

セナの疑問に答えながら、首を回したりして準備体操を始めている。

「あの人は僕と違って戦いが好きなんだよ。救世主の行動を監視していて、大いに興味を持ったんだろうよ……ただの直感かな？ それとも」

「だから、襲う所の対象を俺達の目指す場所にしたんだな。俺らを誘ってやがったのかレイの奴……！」

軽く舌打ちをして齒を食いしばった。鵜を見ておらず、横目で部屋の白一色の壁を睨んでいた。

「レイにとつて、救世主なんてどうでもいいのさ。利用するだけ利用するつもりらしいけどね」

すると鵜は、おしゃべりは この辺で おしまいとでもいう風に手のひらをセナに見せるように前に広げた。

ボコ、ボコボコボ……コ。

床が見えない力で碎かれて、大石や小石へと割れていく。そうして なった破片や塊は、すう、つと個々 上昇し鵜を中心に。鵜を囲んで浮かんで いった。

その数は増えていく。浮かび ある程度に まで いったら静止して。増えて、増えて……。

「これはレイの技だよ。四師衆は皆、レイから技を教わったんだ」
段々と小石は また その数を増やしていく。

やがて堰をきったように鵜が呪文を唱えた。「飛礫^{つばい}」！
そう唱えると、浮かび上がった小石や破片は全てセナに向けて発射された。スピードが かなり かかっている。

だがセナは この技を知っていた。というより、話に聞いていた。レイが この技で、3人の人間を殺してしまった事を……だから予想できた分、護りが速かった。

「風車」！

鵜が先ほど攻撃したのと ほぼ同時ぐらいに、セナは呪文を唱え強風を起こした。強風は円や弧の形を描き、飛んできた無数の小石を残さず全て弾き返していった。弾き返された石は、鵜へと数個、数十個と当たっていく。

鵜が放ったよりも さらに倍以上のスピードをつけた石は弾丸と化し、幾つかは鵜の体をも貫いていった。

「つつ……！」

思いもよらない反撃に、ひるんだ鵜の隙を突いてセナが次の技を唱えた。

「剃刀^{かみそり}」！」

風が横一文字の無数の刃となって、鵜を襲う。

「うわあっ！」

容赦ないセナの攻撃に鵜は傷を全身に受けつけ、倒れた。ガックリと首を地面に打ちつけ意識を失う。

近寄り、なんと一つも呼吸を乱す事なく黙って鵜を見下ろした後、先を急ぐべく出口を探そうと周囲を見渡すセナ。

何よりも、勇気の事が心配で たまらなかった。

……レイに胸を刺された勇気。ところが、
刀は刺さっては いなかった。

「何だ それは」

レイは弾かれた刀を引っ込め、勇気の胸元をしかめっ面で注目した。勇気は“してやったり！”という顔で刺して破れた制服の布をめくり、見せてみた。

「私の お兄ちゃん愛用の まな板よ！ 全一然っ、気が つかなかったでしょ!?!」

そう。

勇気は、制服の下に いつの間にかセーターを脱いで まな板を仕込んでいた。まな板があるうが あるまいが、あまり変わらないという悲しい事実を利用した勇気の大機転であった。

見事に だまされたレイ。ひよっとしてレイ史上、初ではないだろうか。

「どうだ！ レイ！」

まるでネコのような顔で小バカにしてみせた。

「……」

レイは無言で、無表情だった。
そしてトドメに。

「地球っ子をナメんなよ！ 負けないんだから！」
と、ビシイッ！ とレイを思いっきり指さしてやったという。

中央の通路の行く道を阻む さくらの術で、金縛りにあっている
カイト。

「ぐわっ……！ あああっ……！」

ただの金縛りではない。高圧電流が まるで、弄ぶかのように
カイトの体を蝕むので あった。一步も、一挙一動も身動きがと
れないでいるカイト。さくらは、それを面白そうにウツトリと見つ
めていた。

「……諦めなさい。レイ様には会わせませんわ」

手に持った扇子を広げて顔の下半分を隠し、陰で口元が笑う。妖
艶めいた目つきで相手を見下すようで、カイトは それが とても
ムカついた。

（余裕綽々だな。女のくせに……やったら強え奴だな）

体に激烈な痛みを全身に感じながらも、カイトは今ココから ど
うすべきかを必死に考えていた。

（隙、だ……隙を作るんだ）

カイトの考慮など知らず、話し続ける さくら。

「レイ様は今、救世主と戦って いらっしやるの。きつと今頃……
救世主を なぶり殺しにしていっしやるわ。やっと会えたんです
もの。念願の……レイ様念願の、救世主との一対一の対決。ああ、
私も見とうございましたわ……レイ様の華麗な、あの動きを……」

「……ふっ」

「何が可笑しいんですの？」

「レイ様レイ様って。お前、奴の何なんだ？」

上目で さくらを嘲笑うかのように見た。さくらの整った眉がピ

クリと動く。カイトは それを見逃さなかった。

「親か兄妹か友達か……恋人か？」

電流に痺れ、意識が段々と遠くなっていきそうに なるのを堪えながら、さくらの出方を待った。

「レイ様は……私の……主ですわ。私は ただの下の者……」

薄れゆく視界の中、さくらの悲しげな顔が浮かぶ。

(こいつ……レイの事、好きみたいだな。ちよつち罪悪感もどき……
…なあんで、言ってもらえますかあ？ 人間、時には非情なり!)
隙あり！ と言わんばかりにカイトは最後の力を ふり絞って、
口にした。

「津波”^{つなみ}”！」

唱えた時、さくらとカイトの間に高い壁が できた。透き通る、水の壁。徐々に壁は高くなって、うねりを上げ、さくらに高波となつて襲いかかる。

「キヤアアアアッ！ レイ様アーツ!!」

声も波の轟音と共に かき消された。途端に全身の力が抜け、その場にカイトはバタリと倒れ込む。

「へへへ……ざまあみる……い」

重い まぶたを閉じる。さくらが どうなったか、今の自分が どうなつていくのか。全てを忘れ、疲れを身に預けて意識を失つていった。

「てあッ！」

カキン！

ナイフと邪尾刀の交戦の音。

すっかり調子を戻した勇気は、積極的にレイに食って かつた。

だが やはり、レイは強いのだろう。まるで大人と子供のよう。無駄な動き一つ なく、勇気の勢いにも動じないレイ。

(くうう……何か、手は ないのかしら……)

レイに攻撃しながら一生懸命に考える。充分わかっていた。自分は、レイの相手などには ならない事を。

「お前の力は こんなものか」

「こんなもんです！」

ガキンッ！

レイの邪尾刀が、勇気のナイフを飛ばした。ナイフは勇気の手から離れ空中回転して、遠くへと。どうやら床に叩き落ちてしまったようだ。武器を失くしてしまった勇気……その瞬間の虚を突いて、レイが攻撃する。

「つばくら燕”！」

邪尾刀を構えたと思ったら素早く呪文を唱え、剣道でいう『突き』を連発する。その速さが風を生み、勇気は何が何だか わからなくなつて、顔を護る体勢をとつた。風は肌に感じるが、痛みは なかつた。だが息つく間も ない豪風だつた。

その状態が約10秒ほど。風が止み、恐る恐る目を開けると同時にゴト、と重い物が床に落ちた……それはボツロボロの布になつた勇気の制服から落ちた、まな板であつた。

さっきの攻撃で、防御を失つたので ある。

そんな『制服ボロボロ事件』の さなか、左の通路で紫苑に行く道を阻まれている蛍と紫。ちょうど最悪の状況であつた。紫苑の作り出した“蜘蛛”の幾重ものの糸に絡められ、引つ張り吊り上げられている2人。まんまと紫苑の用意していた罠にハマッてしまった

らしかった。

「くっ……！ 紫苑……っ！」

と、蛭は悔しそうに紫苑を見下ろす。ただの糸ではなく、粘りつき、とても弾力性の ある糸だった。体の自由は利かない。しかも糸は、蛭の幻遊師としての力も吸いとってしまっていたのだった。

なすがままの どうにでもして状態とは このような時の事を言うのだろうが、人道的な紫苑は ただ、

「事が収まるまで、そうやって おとなしくしている。殺しはしない」

と、冷たい床に座禅を組んで そう言った。

「殺しは しない、ですって……？」

紫苑の その一言に気に食わない様子を見せる蛭。

「紫苑！ たとえ あなたが私の親代わりだとしても……今は生死を決する敵同士よ！ トドメを刺しなさいよ！」

「蛭様……」

紫が蛭の横で名を呼んだ時、「あっ……」と思わず漏らす蛭。

(今……私……紫苑を『敵』って言った……?)

紫苑が自分の敵なら、自然と自分はレイと対立する立場をとった事になる。勇気の元へ居るには居るが、決して『味方』になつたわけでは なかった。なのに、今自分はレイの敵になるという事を自分で認めてしまったのだ。

顔が赤くなつた。そして、俯いて黙ってしまった。

そんな蛭の隣から、ブチブチという歯切れのよい音が聞こえた。

え、と蛭が見ると最後の糸が切れ吊るされていた紫がスタッと下に降り立った。

「紫……」

体中に巻きついた糸を手で外しながら、ポツリポツリと口を開く。

「私の主は蛭様です。私の命は主と共に あります」

紫苑は黙って目を閉じて座っているだけだった。

「蛭様が あなたを敵とした以上、私は あなたを倒します」

そう紫が言った後、微かに紫苑は笑った。

「……面白い」

そう言うと、音もなく立ち上がった。手を前で合わせた。徐々に体の周りにボンヤリとしたオーラが見え始める。戦闘準備に入ったようである。

「売られたケンカは買えと、俗に言われているな」と、今度はニコリと笑った。

すると、なんと紫も、口元をニコリとさせた。

「行きますよ」

紫も戦闘の構えを。

（紫……！）

依然、吊られたままの螢は、そんな2人を少し悲しく見下ろした。（私のせいで……ごめんね、紫。私は……助けたいの！……あのバカを……）

くしゃみ一発。

「クシュン！」

制服をボロボロにされ武器と防御を失った私は、それでもレイを睨んでいた。

もう終わりだ、と思った。絶望だとも思った。

でも、負けたくなかった。

（負けない！）

キツと歯をガツチリと食いしばった時、指輪の力で風のバリアーが生まれた。あのおなじみの風だけれど、いつもより、いっそう風の壁は厚くなっていったような気がした。

（こんな奴に、負けてたまるか！）

風は私を中心にグルグルと暴れ回り、部屋中を吹き荒らす。当たってパラパラと、天井や柱の破片も落ちてくる。

レイは腕で顔を風から護る。

そんな風に、レイを威嚇してみた。しかしレイを睨んでいた私の目は、突然ギョツとした目が変わった。と、いうのも。レイの後ろの方の暗闇が、まるで壁の……黒い皮をめくるかのようにベリベリと はがれ落ちていったからだ。

そして はがれ落ちていく さらに その向こうに、キラキラと銀色に輝くクリスタルが現れた。

「ハルカ、さん……？」

氷の中でヒツソリと立つ美少女、それは夢で見たままの、ハルカさんの姿だった。

「驚いたか」

その美しさに みとれ驚く私にレイは冷たく言う。

「この部屋も この城全体も。俺のこの闇の力で作った空間だ。どうやら、風で闇の一部が飛ばされてしまったようだな」

闇の力で作った？ 城も……ああ、それで廊下が突然 分かれ道になっていたりしたんだ。レイの思うがままに……。

「こんな近くに……」

私に一筋の汗が流れた。見えづらいいとはいえ、気配も何も感じなかった。こんな近くに閉じ込められたハルカさんが居ただなんて。

思いも しなかった。

「ふ……置物にしては、見事だろう？ セナに見せてやるつもりだったんだがな。お前を倒した後で」

レイが嘲笑う。

「倒されるもんか！」

風のバリアーに包まれ、なおも意地を張る。レイは邪尾刀を構えて、ジツと私の出方を待っている。

どうすれば……なんて、ヒョイと考えた時。私の背後で声がした。

「勇気！」

思いがけない声の主に、私は振り返って　また驚く。

セナだ。鵜を倒したんだ！

ドアを開けて……無傷だった。

「セナ！　よかった、生きて……」

気が、少し緩んで、私を取り巻いていた風が少し弱まった隙を突いて。

ザシュッ！　……

何とも、気味の悪い音がした。

(えっ……)

頭の中が、真っ白になった。

向き直ると低姿勢なレイの顔が　すぐ近くに。

いつもみたいに、少し口元を歪ませて……。

気が遠ざかる。

私の心臓に、邪尾刀が、……刺さっている。レイの体に降りかかったものは……血だ。

私の……

私の……！

急激に全身の力が抜けて足腰が崩れて

倒れ……る。

「勇気イーーーーッッ！」
意識が薄れていく。今度こそ、本当に。

……ヤバイかもしれない。

《第30話へ続く》

第29話（攻防戦）（後書き）

【あとがき】

フライパンもあつたんですね。

身内とはいえ。あんまり持ち出したら兄、困るよ（同情）。

ブログ第29話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog-entry-82.html>

ありがとうございました。

第30話（脱出）

「勇気イイイーツ！」

セナが叫んでいる。

聞こえる。聞こえているんだよ？

なのに、体が動かない。指先も……口も……まばたき さえ、で
きない。

倒れているのに、床の冷たさも、溢れている血の感触も……。

何も、感じられないなんて。

バタバタと足音が聞こえる。段々、段々と近づいて……。

「しっかりしろ！ 死ぬな！ 俺だ、わかるか！？」

セナ……の声だ。私の そばに居るんだ。

（わかるよ、セナ。ちよつと待って……今、起きるから）

んしょつと……アレ？ やっぱり体が動かないってば。何で？

起きれないって？

「待ってる、今、止血を……ぐっ……！」

え？ 何？ カチャカチャ聞こえる。

あああつ、もおつ！？

何が、どうなっているのよおーっ！？

勇気に駆け寄ったセナ。だが首に鎖が絡みつき、息が満足に
できないでいた。後ろで鎖を絡めて引っ張っているのは、さっきセナ
が倒したはずの鷓ひたき。せっかくの全身 黒ずくめタイツもビリビリの

ズスタスタで、みすばらしくなっていた。

「悪いねレイ。僕とした事が、ご覧の通りさ」

言いながら鷓は、さらに鎖を引っ張り首を絞める。

「ぐっ……っ……」

もがき苦しむセナ。

「俺と同じ監獄 育ちだからな。そうそう簡単に やられは しないだろう」

セナの到着時に勇気から離れたレイは、冷ややかにいつもの調子で言った。手には勇気の血がベツトリとついた邪尾刀を持つ。頬についた血を手の甲で拭き、そして ゆっくりと視線を自分のそばの氷づけに なっているハルカに向けた。

「何だよソレ。こいつが強いつて事？ ははっ！ まさか！」

ギリギリ……と さらにキツく締めつける鷓。必死に両手で鎖を掴みとり、呼吸を確保しようと もがくセナ。

（ぐっ……ゆ……う……き……）

徐々に頭が働かなくなっていく。

「君が1だとしたら、僕は10くらいの力かな」

「ふ……数字なんて、しれてるだろう？」

レイと鷓の会話が遠い。セナには聞く余裕など ありは しなかった。

（もう……ダメ……なのか……？）

涙目の視界に 映るのは血だらけで倒れている勇気。

（死ぬな……お……れ……の……い……の……ち……く……ら……い……く……れ……て……や……る……か……ら……だ……か……ら……）

ポツ……と、涙が ひとしずく、こぼれた。勇気の頬に落ちて、流れていった。

（生……き……て……）

力が もう限界、という所で。

「氷柱^{ひょうじ}」！

この緊迫した場面に来客が現れた。カイトだった。

「！」

開け放されたままのドアから、カイトは姿を現して即座に呪文を唱える。

50センチほどの氷の槍が何本か、かざした片手から飛び出し鷓の手の甲に突き刺さっていった。そのおかげで鷓の手から鎖が離れた。鎖は首から外れ落ち、呼吸を一気に取り戻したセナは むせ返り うずくまった。

「カ……カイト……ゴホッ」

カイトを横目で見ながら、しばらくジツとして うずくまっていた。

青白い顔をして、少し頼りなく歩み寄るカイト……まだ、さくらとの一戦でのダメージが尾を引いていた。

だが そんな事おかまいなしに鷓とレイはカイトを見る。カイトは大げさな ため息をついて俯いた。

「へっ……最悪のパターンかよ……」

そして突然のカイトの攻撃、“津波”を おみまいした。先ほど さくらに食らわせたのと同じ、高い壁と化した波が姿を現し鷓とレイに襲いかかった。セナは風を起こしてバリアーを張り、倒れている勇氣と共に身を護る。

するとレイや鷓も同じように自身の周りに風圧でバリアーを生み出し、身をそれぞれ防いだ。

「何!？」

いとも簡単にアツサリと かわされ、少し ひるむ。

「お前がココに来たという事は……」

波が ひく。バリアーに包まれたまま、ゆっくりと顔を上げたレ

イ。

“不気味” そんな言葉がカイトの頭の中に浮かんだ。改めてレイの顔を見て、術など かけられていないはずなのに まるで金縛りにでも あったかのようなようだった。激しい寒気……とも とれる。

「陰陽師を倒したという事か」

レイの目が鋭く光った。陰陽師とは、さくらの事である。カイトが倒してきた四師衆の一人。

「何だ お前……」

レイの視線が突き刺さる。カイトは たじろぐ。

「こんな雑魚にヤラれるとは……ふ、まあいい」

微笑し、メガネを整え直した。そして邪尾刀を思いきり振り上げ、ビシリと手前に構えた。

「ココに来たからには生きて帰れると思うな」

声を出すと同時に刀を振った。

そしてレイの攻撃。それから続けて、何度も何度も斬りに かつてきた。

「硝子^{ガラス}」！

残り少ない力で必死に防御するカイト。全身大くらの大きな厚いガラスがカイトの前に作り出された。

「そんな玩具^{おもちゃ}が、この俺に通用すると思うのか？」

また、レイの一振り。ガキン！ と一度の凄まじい音をさせて、ガラスの防御壁は砕かれた。ガシャグシャ、パリンと……余音と共にガラスは割れていく。

レイがカイトへ斬りつける。何とかギリギリでレイの攻撃を避けるカイトだったが、全てを避けきる事が できない。瞬く間に服も肌もボロボロに なって赤く染まっていく。何度も何度も向かって来るレイの攻撃で、体力は削られていく……。

「カイト！」

セナが風を起こす。レイを包み込む、強靱な風の渦。

「“竜巻”！」

風がレイを中心にグルグルと巻きつくように旋回し、やがてその風は鋭い刃となってレイを見えなく隠すほどに層を作り出し渦巻いて……。

「ふんっ！」

光景を見ただけで凄まじいと思わせるセナの技の風だったが、レイが少し気合いを入れただけで全部が一瞬のうちに弾き飛ばされた。散った風の名残で ふわっ……とレイの髪を撫でるように なびかせるだけの そよ風に なってしまった。レイは さも心地よさそうにクスリと笑った後、手を天井へと上げた。

広げた手の平の上に、ボンヤリとした黒い『闇』の塊が浮き出た。そのまま手元に腕を下ろし微笑ましく見下ろすと、やがて塊は2個、さらに分裂し4個、8個、16個……と大きさは変えられず増えていった。そしてレイの元から広がって部屋中に いっぱいになり、次第にカイトとセナを取り囲んでいった。

「何だコレ……！」

と、つい。腕が ソレ に触れてしまう。触れた瞬間、ボンツ！と小規模でソレは爆発し、カイトの腕が少し焦げた。「ぎゃあっ！」

小さな衝撃も、疲れた体には大きく こたえる。

「んなっ……爆弾!？」

「動くな！」

焦る。セナが すぐカイトを制した。

身動き できない2人に向かい、レイは表情を変えず次の攻撃へと準備する。

指をさしたまま、セナとカイトに向かって腕を持ち上げ、声は部屋中に無数に浮かぶ黒い塊達 全てに隅々まで行き届くように発せ

られた。

「……………“独楽”！」

そう言った時。空中に浮かんでいた黒い塊は形状はつきりしない『闇』ではなく、黒い『独楽』の形になった……………！

独楽は、急速に自身を回転させ始めた。存在している塊、全てがだ。

回り始めて数十秒。規則に従っているのか、ある程度 回転した後独楽は それぞれ意志を持った従者のようにセナへ、カイトへと発射された。

触れたなら もちろん、爆発だ。

「うわああああああっ！」

「ぎゃああああああっ！」

悲鳴が飛ぶ。しかし、幾重にも度重なる爆発の衝撃は止まらない。肌や髪焦げる匂いが辺りに広がった。セナは風を、カイトは氷や水を出し防御しようとするが、連続 爆発の勢いで技を繰り出す暇も なかった。

地獄としか、言いようがない。

「まるで……………“死への踊り”だね……………」

と、レイの背後で腰を下ろして眺めていた鵜が言った。セナとの一戦での傷が、相当こたえているのだろう。自分で自分を治療し、見物しながら回復していた。

「休んでいる。ココは俺一人で充分だ。……………だが その前に、さくらを助けて来い」

「了解」

スツと立ち上がってフツと消えた鵜。と同時に、全ての独楽が爆発し終わった。プスプスと立つ煙が静まっていく。

レイの前に、倒れている2人……………セナとカイト。うずくまった格好で倒れ、痛みを苦しんでいた。

レイが近づく。セナの頭を片足で踏みつけた。片手をコートのポケットに突っ込み、グリグリと足でセナの髪をかき混ぜる。

地に這いつくばる2人を堂々と見下し、唾を床に吐いて捨てた。

「手応えがない……」

セリフも吐く。とても つまらなそうに ため息も。

肩をほぐすために首を回し、邪尾刀をかついだ。そして こう言った。

「一応、体内を調べさせてもらうか」

静かに、邪尾刀をセナの胸前へ狙いを定め構えた。このまま、一気に いつでも刺せると脅しを込めて。

「くっ……くそおお……！」

と、カイトがセナより2・3メートル離れた所で起き上がれずにありつただけの力で叫んだ。2人とも意識があっても、動ける力がない。

「悔しいか？ セナ……」

母親が子供に語りかけるくらいに優しい声で、屈み込んでセナの耳元で囁いた。「レ……イ……」と呻くセナ。床に沈められているその有様は、なんと無様な事かと。

だが そんなセナ達の醜態が、レイにとっては快感であり、悦びであつた。

「ははははははっ！」

声を大きくして嘲笑った。この、爽快な気分をゆったりと味わっていた。

だが。

「は……」

レイの動作がピタリと止まった。

信じ難い顔をして、ソロリと……後ろを見るため 振り向いた。

そして さらにまた、『信じられない』『まるで夢なのか』とい

う顔をさせた。レイの背中に突き刺さるナイフ……つう、と傷口から血液がこぼれ出し流れている。血はナイフの刃を伝いやがては離れてポタリ、ポタリと……。

床に赤の飛沫が重なっていく。

「何故……何故、お前が……？」

レイはそれを言った途端ゴフツ、と口から吐血した。そしてヨロヨロとよろめき後退して、溢れてくる止まらない血を手で受けながらワナワナと震え出した。

「まさか……お前が……」

目の前に居る人物を凄い形相でひと睨みし、「お前が！」と叫んだ後。ガクンとヒザを落とし前のめりで倒れてしまった。

「生きてる……？」

今度はカイトが驚いていた。セナが必死に上を見上げる。少し暗がりの中、見覚えのある顔を見た。

そしてセナも驚いて、目をパチパチさせた。

「勇気！……！！……？」

心配そうな顔でこちらを窺う、さつきレイに胸を刺され死んだはずの勇気の顔があった。

私はレイを刺した

あまり実感はない。人を刺したっていうのに。何故だか落ち着いている。

きつと、それどころではなかった。せいだろうと思うけれど……。

そして、それもあるけれど……心中は実に妙な感覚なんだ。

それも そのはず。死んだと思ったのに、現に こうして生きて
いるのだから。

「不思議なの。擦り傷とかカスリ傷とかは残っているんだけど……
胸の大きな傷だけはキレイさっぱり消えちゃったのよ！」

私が まだ半ばブーツとしたまま、セナ達に向かって声を上げた。
そんな私の顔を見て、セナとカイトの顔が段々と ほころびてい
った。

「何だよ……ボロボロだな、勇氣……」
と、クツクツクツと笑うセナ。つられて、カイトの方からも笑い声
が聞こえてきた。

私は自分の みすばらしくなった衣服を見て、プーと顔が膨れて
しまう。

「お互い様じゃない。そっちの方こそ、ボツロボロのズツタズタ。
ちよつと、立てる？」

駆け寄り、セナを起こそうとして頑張ってみた。肩を貸して、何
とかセナも立ち上がる。

「カイトは？ 立てる？」

「ああ……何とか……」
と、よろめきながら起き上がって立ってみていた。だが、すぐに力
ク、と足の力が抜けて跪くひざまず格好になった。「やっぱダメ、全然力が
な……」

パタリと。再び倒れてしまった。

「俺の力、分けてやるよ」

セナが そう言っつて、私の肩から離れ ゆっくりと近寄った後。
手の平をカイトの方へ広げた。少し淡い光がカイトをほのかに包み
込んだ。すると みるみるうちにカイトが少しずつ元気に なって
いった。立てるだけは できるくらいにまで。

「すげーな」

と、セナを褒めた。力を他人に分け与えられるなんて。私も初めて見
て、びっくりしたわ。

しかしおかげで今度はセナが立てなくなるといふ。

「大丈夫。少し休めば……」

なんて、言っちゃってるけど。セナの顔面は真っ青だ。

私は閃いた。

「私の力、あげる！ 送り込める力があるなら、逆に吸い込んでよ！」

と、適当な事を言ってみた。その割には いい考えだと後から思ったんだけど。

「じゃ、少しだけ」

セナが私の手を掴んで また光が。淡い光で包まれた私の体から、セナの体へと。光と共にエネルギーが流れていくようだった。……

やや回復した。

体力、3分割？

仲良く立てられればいいんじゃないかと、気楽に思う私だった。

「しっかし、妙な事も あるもんだぜ。絶対、死んだと思っていたのに」

「ねえ？」

セナと私がノンキに会話をしていると、カイトが倒れているレイを軽く一蹴りした。

「ざまあみろだけど……死んでるのかな？」

と、カイトがレイの顔を覗き込む。血だらけで倒れているレイの手に首に触れ、脈を診た。

「どうやら、微かに息は してるようだな。勇気のカじゃ致命傷とまでは いかなかったようだ。生きてるよ。どうする」

と、チラリと私とセナを見た。私達は困惑した。どうするって……。
「とりあえず連れて帰るか……」ココに置いといたら、本当に死んじまう」

セナが そう提案した時。

ピシィッ……

何かが弾けたような、それが亀裂が生じたかのような音がした。

「え？」

私が目線を遠くへ見やる。

「ハ……」

同時にセナが声を。そして音の した方を見ながら驚いた顔をした。「何だって？ 何だアレ……」カイトも。

ピシィ……ピシィ……パキッ……。

どうやら音は、部屋の奥に ある忘れられそうになっていた氷づけのハルカさんの方から聞こえてくる。しばらく3人も黙って様子を窺っていた。すると……。

ビキィッ！

最初は控えめに音を立てていた氷が、派手な音を出して大きな亀裂を生んだ。

「こ、ここ、氷が！」

驚いた私は素っ頓狂な声を発するしかなく、混乱する。

一体 何が起きているんだあ！？

それはセナもカイトも同じ気持ちだった。

パァンッ！

耐えきれないように、最大量の音を放った氷。

「わああ！」

「きゃあー！」

「痛い痛でっ！」

突然の衝撃で、思わず私達は自分で自分の身を護った。どうやら、砕かれ割れた氷のカケラの一部が勢いよく飛んできたらしい。瞬間的な事で、びっくりした私は、伏せた目を開け恐る恐る前を見た。

「……………」

衝撃が走る。

氷を内から砕き、立っている人形　いや。

ハルカさんだった。

「ハルカ……………」

セナが名前を呼ぶ。

金髪に　くつついていた氷の細かい破片のせいでキラキラと金色は　なお　いっそう　まばゆき、整った決して崩さない顔は　さらに気品を漂わせ……………ゆっくりと目を開いていった。

3人とも、目の前の美女に釘付けになる。

「どうしてココに……………？　レイの所に……………」

信じられない顔で、そう問うセナ。だが美女は何にも答えず細腕を上げて、何処かを指さした。

何処か、とは……………。

視線を指し示された方へと向けると、そこには血だらけで虫の息のレイが。

何だか私は嫌な予感がした。

やがて美女、もといハルカさんは口唇を動かして何か言った。しかし、聞き取れない。ゴクンと唾を飲み込みながら様子を見ていた。完全に魅了され、圧倒され続けていたのかもしれない。

「よくも……」

もう一度 口唇を動かした時、確かに そう聞きとれた。それと同じく。

ハルカさんの体から、遊糸が 糸のように細く白い煙が見え出していた。ハルカさんの肌に触れた空気が熱せられているのか。チラチラと体から立ち昇っている……もしや湯気だ。

「よくも、レイを……」

2度目に聞こえた言葉と共に、表情の なかった顔は形相を変えた。レイの冷やかな氷のような鋭さでは なく、こっちは まるで熱せられた鉄槍で刺すような鋭さの瞳。視線を熱いと感じるなんて……決して気持ちのよいもんではない。

放射線か熱線か、光線でも浴びているんじゃないだろうか。

もつと言つなら、“憎悪”の視線だ。

「許さない……レイを……レイを、よくも！」
手を広げ、ハアア……と思いきり息を吸い込んだ。えっ、何っ!?

「^{かえん} 火焰”!”」

ハルカさんの首に着けられているチョーカーの赤く丸い飾りが、赤々と輝き出す。ハルカさんの広げられた両手から、燃えさかる炎が出現した。

炎の塊は、2つに分かれ触手のように何メートルも伸ばして、私達へと襲ってきた。「きゃああ！」私が悲鳴を上げたと同じに、炎の触手は2つから『1つ』に繋がった。

つまり、炎のリング状となって私達を取り囲んだのだった。

取り囲んだ炎は勢いを増し、中に閉じ込められた私達3人を燃やそうとしている。

「あついいいい!!」

私は もうパニック。叫ぶしかなかった。

「小波」!

カイトが消火を試みたが、焼け石に水だった。「嘘だろ……!」
と愚痴るが もう遅く。炎は私達をリングで締めつけようと迫って
きた。

万事休す。

思った、その時。

「影絵」!

呪文が聞こえた。すると。

なんと炎は赤を黒に姿を変え、灰になり散り散りになって風化さ
れていった。

「!」

見ると、いつの間にか私の そばに人が立っていた。その人は…

…。

「し、紫苑……」

“さん” 付けを忘れてしまった。しかし細かい事は今は どうでも
よかった。

「法眼師! 邪魔する気が!」

少し離れた遠くでハルカさんが熱り立つ。

紫苑は冷静だった。落ち着いて、私達には背を向けながらハルカ
さんを正面から見据えていた。

信じられない。

紫苑、あなたは敵じゃ? …… 助けてくれたなんて!

しかも意外な事をさらに言った。

「蛍と紫は先に送った。お主らも去れ」

え?

紫苑の片手が、横に上がったと思っただらだ。
段々と、紫苑の背中が薄くなっていく。
いや、違う。

紫苑だけじゃなく、見える範囲の視界全てが薄くなって色あせていく！

「待つて、あなたは」
と私が一歩前に出ようとした時。

紫苑もハルカさんも姿を消してしまった……いや。
消えたのは こっちの方だったのかもしれない。だって、暗がりの部屋が いきなり。

見覚えのある街の景色へと変わってしまったのだから。……

「へ……」

朝焼けが見えた。

呆然と、キョトンと。3人も地面にへたり込んでいた。背中をそれぞれに合わせて、ただポカンと周囲の状況を見つめるばかりで。

一体ココは何処？ と自分でもなく他人でもなく、頭上に確かに存在してある本物の空に聞いていた。

「ココ……キースの街……」

見覚えがあるはずだ。

キースの街の、雑踏だったんだ。メインストリートのド真ん中。建物だけでなく、大勢の通行人が居る。皆、横を通りすぎながら変な目で私達を見ていた。

いきなりのワープで頭が混乱している。

「あの坊さんに助けられたみたいだな」

まだボーツとあさつての方向を見ていたカイトが言った。

サツと一吹き風の風。汗だくのボロボロの私達。ブル、と身震いを
してしまった。

「どうやら息は あるようだ。すぐ治る……」

レイのケガの具合を診て紫苑が言った。だがハルカの怒りはま
だ おさまってはいなかった。

「何故 逃がした！ レイを傷つけた奴ら……皆殺しにしてやる！
激しく口唇を噛み、怒り心頭で罵声や雑言を周囲に浴びせるハル
力。」

「頭を冷やせ。レイ殿のケガの治療の方が先だ」

「……」

レイ、という言葉で黙るハルカ……。

紫苑はレイと共に、何処かの場所へと瞬間移動した。

消えてしまい誰も居なくなった空間に取り残されたハルカは、落
ち着きを取り戻して碎かれた氷の残骸に目を向けた。

「やっと……やっと……出られたのね。レイ……あなたと触れ合う
ために……」

ハルカは満足気な顔をして、胸の前で手を合わせた。

《第31話へ続く》

第30話（脱出）（後書き）

【あとがき】

陰陽師……そうだった（ほー）。

ヒトガタとか使った方がそれっぽいんだろうか。

私は HKで やってた稲 ゴロさんの陰陽師が好きでしたが（
どーでもよい話）。

とりあえず勇気、最強。

ブログ第30話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-84.html>

ありがとうございました。

第31話（復活の女神「ハルカ」）

「やあ。また会えたね」

黒髪をサラサラとさせニッコリとカッコよく笑う、キースの街医者。ハウス先生。

その横には、紅い髪を以前と同じくポニーテールにしている女医、ミゼー先生。

ミゼー先生は黙々とイスに座って繕いものをしていた。

私が寝ていたベッドから起きてボケつとしていると、ハウス先生はポンポンと私の肩を叩いた。

「大丈夫かい？ ココは僕の診療所だよ。君は気を失って、セナ君達が運んできてくれたんだ」

キースの街の診療所……？ ああ そうか私……一人でレイの所にのりこんで……紫苑が助けてくれたんだっけ。私達、3人を……。

大丈夫。記憶は完璧に戻ったぞ。

「まあ いいか。じゃ、僕は仕事に戻るよ。セナ君達なら、たぶん向かいの飯店で お昼をとっていると思う。お腹すいてるかい？」

「あ……いいえ」

「そう。まあ、何か あつたらミゼー先生に言ってくれ。ミゼー先生、よろしく」

呼ばれたミゼー先生は、繕い物をしていた手を止めて顔を上げて私達を見る。

「わかったわ」

「じゃ、ゆっくり休養を」

バタン。

部屋に、私とミゼー先生を残してハウス先生はドアを閉めて去っ

た。

シーンと静まりかえった病室。ミゼー先生はチクチク縫い物をしているし、邪魔できない。

参ったなあ……と考えている時。

プツン、と糸を切つて縫っていた物を広げたミゼー先生。よく見ると、それは私の制服だった。

ボロボロだったはずが、元通りに なっている。

「こんなものでいいかしら」

「へっ……あ、え、あ、は、はい！ って、わざわざ直してくれたんですか！？ ソレ！」

つい背筋を伸ばして聞いてしまうと、ミゼー先生は首を傾げた。

そして表情を変えずに「余計だったかしら？」と言ったのが ちよつと怖かった。

「い、いえいえっ！ そんなめつそうもないっ」

慌てて首を振り、手を振った。

ミゼー先生が家庭的だったのが意外で、ちよつとびっくりしてしまつたので あります、ハイ！

だって。いつもはムスツと……いや、フン、って感じかな。とにかく そんなピリピリした雰囲気の人だったからさ。あんなにもボロボロの服を直してくれただなんて。

修繕された制服を受け取つて表、裏、前、後ろと返して見てみる。

……すごい。繋いだ跡が見えない。完璧だ。

素晴らしいわと しか言いようがない。なんて器用！

いやあ、こいつは感動でっせ。

「裁縫……ベリうまですね……ぶつたまげちゃいました」

「馬？ 豚が何ですって？ 動物と何かあつたの？」

……心に木枯らしが吹いた。ヒュルルル。

「……じゃ、なくて。ええと……裁縫、上手ですわって……」

「そう。ありがとう」

と、素っ気なく言った後。足元の紙袋から また別の繕い物を取り出した。トントンと肩を片方ずつ叩きながら、フウと息をついた。

「あと、あなたのスカートが まだね。それから彼らの服も。もう少し待っててもらえるかしら。今日中に終わらせるから」

何と。

それぐらい してあげて当然みたいな口振りのミゼー先生。

私は申し訳ない気持ちで いっぱいだった。ポリポリと、頭を掻くしかない。

「す、すみません。お仕事の邪魔しちゃって……」

ミゼー先生、初めて微かに笑った。しかしフツ、と少し笑う程度。「仕事はハウス先生が全部やってくれているから。私は あなた達の お世話を頼まれているのよ。だから気にしないで。それより、お腹が すいたでしょう」

「あ、はあ……」

ちょうどいいタイミングで、お腹がグウと鳴った。

「服は そこに置いてあるのを着てもらえる？ 私のだから少し大きいだけ……」

目線の先を見ると、ベッドに放りだしてある私の足の そばにきれいに たたまれていたワンピースが。

私は それを着て、診療所の前の飯店へ向かった。

シンプルなデザインの水色のワンピース。丈は長くて、大人っぽい。ノースリーブでハイネック。マフィアに でも なった気分だったけれど……。

所詮、私が着ても やはり お子チャマで ある。

大人っぽいのは服で あって私ではない。

それに しても……こっちの世界の服は。布の感触が、私の居た世界の物とは違う。ゴムみたいに伸びるし、手触りは紙の質感に近

いんじゃないだろうか。一体 何の素材を使っているのだろう。

飯店に入ると、すぐにセナ達を見つけた。奥の隅っこの方で、大きい丸テーブルを囲んでいる。ちょうど蛍とカイトの間が空席だったので、私は そこに腰かけた。

「ソレ、ミゼー先生の服？」

と、隣のカイトが聞いてきたので「うん。よく わかったね」と言い返すと、クンクン匂いを嗅ぎながら。

「やっぱりね。ミゼー先生の匂いが する」と言った。

「お前は犬かい」

と、カイトの隣に居たセナがカイトの頭にチョップした。

「お姉さん、追加っ！」

頭を押さえながらエプロンを身に着けていた店員の人に向けて拳手するカイト。追加 注文をとって少し落ち着いた後、セナが話を切り出した。

「……………で。全員揃った所で。現在の状況と、これからの事だけど」

「……………」

はあ……………さっそく その話ね。ま、仕方ないんだけど。

「ハルカが復活した」

目の前の食べ終わった皿を見ながら、一つずつ確認していく。

「レイも……………生きていたし、きつと復活するだろう。で……………レイとハルカは、たぶん……………」

「手を組むだろうね。恐らく」

手を組む……。

私も そう思う。

レイは別に そのつもりなくともハルカさんはレイを支持するに違いない。夢の中で『レイのやる事に邪魔は しない』なんちゆう事を堂々と言っていた。世界の破滅だろうが たとえ切腹だろうが、ハルカさんに とつてレイは絶対の存在。絶対神だ。レイが青龍を召喚しようとするなら、快く手を貸すんだろう。

カイトの指摘に皆が頷いた後、カイトは指を2本立ててみせた。

「これで敵が2人になつた……はつきり言つて厄介だ」

目線は皿から離さない。ずっと下を見つめたままだった。私は段々と緊張してくる。

「彼女……ハルカだつて。見ただろ、あの技」

カイトが思い出した事を口にした時、私はハッと気が ついて声に出す。

「あの技……何？ どうしてハルカさんが あんな技 使えたの！？」

私達3人は確かに目撃した。首の飾りが赤々と光り出し、同時に“火焰”なんていう技を使った事を。普通の人間には決して できない。

普通の人間には……。

「まさか……七神の一人……？」

「炎神か」

「すごい偶然」

「ちよつと。まずいんじゃないの、ソレって」

口々に言い合った後、螢の一言でピタリと空気が止まった。

「七神のうち、2人が敵になるんでしょ、勇気」

そうだった。

レイⅡ閻神と、ハルカⅡ炎神が あちら側に なる以上、どう頑張っても こっちには5人しか揃わないという事。

「ハルカさんが炎神だっていうの……間違いない？ 何かの…

…」

と私が反論してみても、賛同してくれる人は一人も居なかった。

「確信できるよ。七神アイテム、“七神鏡” だって持ってたんだから」

七神鏡……首の飾りの事ね。そうだ……確かに、アレが反応していたのを私も見たんだ。セナの指輪やマフィアのペンダントみたいに。七神で ある事の証だ。

シーン。

沈黙は店員さんが、注文した料理を運んできてくれるまで続いた。

「俺……先に帰ってる。どうせ診療所に泊まるんだよな？」

と、セナが立ち上がった。私が うん、と頷くと「じゃ、先に寝る。これからの事、考えておいてくれ」と。まるで捨てゼリフのように言った。そしてスタスタと早足で店を出て行ってしまった。

「セナ……勝手に行動した私を怒っているのかな……？」

ふいに思った事を口に出した。カイトが首を振る。

「いや、違うだろ。あの様子じゃ。別に放つといていいんじゃない？」

と ノンキに答えて。運ばれてきた料理の唐揚げをヒョイと口の中に放り込んだ。

「ま、勇気。今度から気をつけなよ。今回 皆 無事で よかったけど。次は、こっちは いかないかもしれない。自分勝手な行動は絶対に控えるよ」

厳しくカイトに注意された。当然と いえば当然の事なのだから、これ以上に落ち込む事は なかった。でもセナが一体今、何を考え
ているんだろうと思うと……辛くなった。

ハルカさんの事を考えてるんじゃないかって……。

「とりあえずマフィアとメノウのトコに行くか。……いや、こつち
に来てもらおう。手紙 出しゃ、5日も あれば合流できんだろ。
で……問題は そっからだけど」

「もう一度、レイ様の所へ のりこむ気？」

「うーんと……でもセナが あんな調子じゃあなあ……」

頭をポリポリと搔いて私の顔を見た。私の意見を求めているらし
い。

「確か東の……ベルト大陸って。3分の1が壊滅したって話だった
わよね。私とりあえず、様子を見てきたいんだけど。気に なるし
さ」

ポツポツと言った私の意見に、皆は「んじゃ、そうしよう」と賛
成した。

手紙を出して、5日後。夕方頃、マフィアとメノウちゃんは診療
所へ到着した。夕食と一緒に食べた後、私が全然 元気が ないの
を心配して、私を散歩に誘ったマフィア。

いつもの優しいマフィアだった。

「セナは どうしたの？ 姿が見えないようだけど」

薄暗くなりつつある街並を2人で並んで歩く。立ち並ぶ店々は
どんどん閉まっていく。

「バイトしてるらしいの。どっかの工事の……朝早くから夜遅くま
でだから、全然会えないの」

「そう。ケガしてたんでしょ。安静に でも してればねえ」

「うん……」

時化^{しけ}た会話だな、と思った。後が続かないから。私、あんまり話す気力がなかった。マフィアも、相当沈んでいる私を見て、黙っていたけれど、やっぱり話し出した。

「バイトだったって、出発まででしょ。すぐ会えるわよ。それより私、今すごく安心してのよ。勇気が無事で。皆も。何度も思ったわ。ああ、やっぱり私も行くべきだった……って」

「うん……私のせいで迷惑かけて、ごめんなさい」

「もういいわよ。結果よければ。それにしても、すごいわよ。レイをやっつけたんでしょ？ 勇気が！」

「レイは、まだ生きているだろうけど……ね」

「でも、すごいわよ！ 一矢を報いるって、こういうのを言うのよ！」

マフィアは必死に私を元気づけようとしている。でも、わかっても。頭の中はセナ、セナ、セナの事ばかり。突然のバイトも、セナは私を避けているんじゃないかと思えるもの。

セナはハルカさんの事が好きなのかもしれない。その不安が、私を落ち込ませる。セナは、どうして私に何も言っでは、くれないの？ 一体、何を考えているの？

本音が……いつか聞かせてくれたように、セナの本音が知りたい。「七神も一人、見つかった事だし。あと2人。きっと、すぐに見つかるわよ」

「うん……」

頼りなく笑う私。するとマフィアがいきなりバーン！ と私の背中を叩いた。

「しっかり、しなさいって！ せっかく助かった命、大事にしなさい。ああ！」

とニコニコ笑う。

「うん……！ そうね！」

私も、つい、つられて元気を取り戻した。

これから旅の再開。気分転換に、いいかも、しれない。新たなス

タートが切り開かれるんだもの……でも、きつと……もつと……もつと、今より厳しい旅に なるのだからうけれど。

「あ、そうそう。実はね、ホラ！」

マフィアが ずっと手に持っていた、白い封筒を私に見せた。

「マザー宛に手紙 書いたのよ！ 勇気達が留守の間だね。今から出そうと思って。いいアイディアでしょ？」

と言ってニッコリ微笑んだ。私もニコツと笑って「そうだね！ それっていいかも！」と頷く。

マフィアの おかげで元気 出た私。夕日が赤々と私達を照らし、黒い影が長く真っ直ぐ伸びていた。夕日の赤を見つめる時、胸の苦しさも あった。炎の赤……触れてもいないのに、熱い。

さくらが食事の用意を持ってハルカの元へ行った。何の飾り気もなく寒々とした部屋にポツンと置かれた白いベッドの上。そこにレイが寝ている。

明かりは燭台一つだけで、ベッドの そばでハルカとレイの顔を照らしている。ハルカは静かにレイの寝顔を見つめ、レイの片手上から重ねて握り、祈るようにベッドの そばに座り込んでいた。その光景を見て さくらは少し話しかけるのを戸惑ったが、持っていた お盆を床に そつと置いて落ち着いて話しかけた。

「レイ様のお加減は……？」

ハルカは振り向きもせず答える。

「だいぶいい。背中傷も すっかり治っている。さすが……四師衆だ。レイが造っただけ、あるな」

「そうですか……」

さくらは内心、チクリと胸が痛んだ。自分はレイの使い、下の者従者であって、それ以上はないという事を。今改めて認識したよくな気分に なったからだだった。

レイはハル力を愛している。それは、そばで ずっとレイの事を見てきているから知っている。そして、ハル力もレイを愛している……ただ ひたすらに、愛している。

この2人の間に、入り込む余地など ない。それは わかっている。わかつているから……痛むのだ。

「皆をココに集めてくれるか」

そんな さくらの心情を気にする事も なく、ハル力は さくらに そう命令した。

「わかりました。ハル力様」

そして、ただ黙って命令を受け取る さくら。

さくらが下がった後、ハル力はレイの手を そつと頭に当てる。

「レイ……あなたが目覚めた時。それまでに、必ず四神鏡を集めてみせるわ。それまで……ゆっくり休んでね……お休みなさい」

手の甲に口づけた。

数分後、さくらが鵜と紫苑を連れて再び部屋へ来た。

「紫苑と いったか。レイの治癒に ついては礼を言う。だが……」

奴らを逃がした事に ついて、どう思っているのだ？」

と、ハル力が紫苑に まず詰め寄った。奴らとは、もちろん勇氣達の事で ある。

「救世主を殺しては ならない」

「何だと？」

「その理由は……レイ殿に直接お聞きになるがいい」

紫苑は目を伏せたまま、抑揚の ない声で そう言った。

「……まあ、いい。それより、レイが目覚める前に、レイが集めていた四神鏡とやらを集めたいのだが。協力を願う」

と、さくらと鵜の方を向いて言う。

「わかりました」

「ま、はなから そのつもりだけどね」

2人とも同意する。紫苑は口を固く閉ざし、一人 沈黙の空気を作りだして寡黙なままで手を合わせていた。

「一人 一つの村か街を襲ってもらう。片っ端から調べるんだ！」
そう張り切って声を荒げるハルカに、鵜が両手を天秤のように上げ広げ釘を刺した。

「でも邪尾刀は一本しか ないんだよ？ 他の奴らは一人 一人調べてけて？ 嫌だね、面倒臭い。刀一本で世界中の人間が斬れると思ってるの？」

さあ どうするんだと言わんばかりに、ハルカを凝視する。しかしハルカは少し考えた後ニヤリと こつちを見た。

「確かに、骨の折れる作業だが……一つ、方法がある」
まるで悪戯いたずらっ子のように笑った。

作戦会議が終わり、廊下を歩き出す鵜と さくらと紫苑。

「レイが王に なるんなら、ハルカは さしずめ女王か……いや、女神って方がピッタリかもね」

と、一人で話している鵜。大あくびをしながら かつたるそくに歩いていった。

「でも……あんな事、私、考えつきませんでしたわ。レイ様は気がついておいでだったのかしら……？」

下の冷たい薄青の床に映る自分の顔を見ながら さくらが聞くと、
「さあね。レイの事だから考えては いたかもね。でも…… あ
い つ の今の体力で、できると思う？」

鵜は つまらなそうに首を軽く回した。

「……そうね。そういう事かしら」
「たぶんね。レイは甘いから」

そんな2人の会話を後ろで黙って聞いている紫苑の方へ振り向き、
「この作戦は僕より おたくの方が適任じゃないの？」

と鵜が眠そくに言うと、紫苑は視線を下に落とす。相変わらず寡黙に。

出発を明日に控え、私は荷物を再チェック。ひとしきり確認し終えた後、さあ寝ようかなと布団に入ろうとした時。部屋の外の廊下に行く階段の方で、誰かが上がって来る足音が聞こえた。

私は直感で わかった……セナだ。

バイトから帰って来たんだ。こんな夜遅くまで……朝早くから今まで。

そういえばココ数日。まともに顔をあわせていない。避けられているのか、たまたまなのか……わからないけれど。

会いたい……顔が見たい。

そう思ってドアの方へ。そしてドアのノブを掴もうとして、ためらう。

トントン……と、近づいて来る足音。でも何故だか、手も足もそれ以上前に出す事が できない。

ドアが……開けられない。

しばらく その場に立ち尽くす。

足音は やがて近づき、ドア一枚の向こうの廊下を歩き去る。

行ってしまっ……行ってしまっのに！

胸が苦しくて張り裂けそうだった。

「うっ……」

涙が こみ上げた。

後ろでマフィアと蛭が寝てるのなんて おかまいなしで。私は一人、小さく泣いた。

…… たった、たった一枚のドアなのに。こんなに距離を遠いと感じるなんて。

セナに会うのを怖いと思うなんて。

避けていたのは、私の方なの？

いつまで こんな状態、続くって……？

辛い気持ちが溢れ出してきて後押し していた。その時だ。

「勇気？」

と……小さな声がした。

えっ？ として声の した方を見る。声はドアの外から。

「勇気、そこに居るんだろ？ 出て来い」

声の主は確かにセナの声だ。ドアを挟んで向こうに居る。そして私を呼んでいる。

びっくりして一瞬、固まってしまったけれど。やがてドアを開けて目の前に立ちはだかる人物を見た。赤いトレーナーにジーンズのような生地のスボン。だけど あちこち泥や砂で汚れている。そりやそうだ。バイトから帰ってきたばかりなんだから。

「お風呂、入らないの？ 好きな時 使いなさいってハウス先生が言ってたし、入ってきたら？」

と、心なしか視線を逸らして言うと、セナは「そうだな」と言っ
て頷いた。

「とりあえず聞いておこうと思って。出発、明日だつてな？」

セナが そう言っ
て私の顔を見る。私は少し首を傾げて「そうだ
けど？」と聞くと、

「出発、昼に なんねえか？」

と聞き返してきた。

「へ……いいけど、何で？」

「バイト。本当は今日まで だったんだけど、明日も朝だけ来てく
れないかって頼まれてさ。まあ いいかと思っ
て。あそこ、すごく
給料が いいからなあ……明日 行けば、時給プラス だぜ？ オ
イシイと思わね？」

私は はあ？ という顔をして、深あーく ため息をついた。

「そうね。確かにオイシイ話だけど……セナ、張り切ってるね。何か、楽しそ」

「まーな。何か、久しぶりにノンビリしたからさ。だいぶ落ち着いてきた」

「そう。よかつたねー。動きまくってるけど、ケガは大丈夫？」

「おう。全然 平気。でもまあ、しんどい事は しんどいけどな。

バイト先の人達、優しいけど仕事には厳しくて。俺は何度 夜に枕を濡らした事か……くうう」

大げさに目頭を押さえた。

「お、何だ その顔は」

私が“へっ”という顔をしたのを見て、私の ほっぺたを つまみ上げた。

「いたひい……」

と、“痛い”を主張する。

「変な顔。親方に見せたい」

クツクツクツと含み笑いを漏らす。私はセナの手を はねのけ、しかめっ面をしながら思い切り切り足を踏んづけて やった。「痛つてえええ！」と言いながらピョンピョン跳ねている。

「明日もバイト行くんなら、早く寝なよ！ じゃあね！」
と、バタン！

夜中だが構わずドアを激しく閉めた。

全く……と。閉めたドアに もたれて一息つくくと、ドアの向こうで まだセナの気配が していた。

トン。

軽く、ドアに手でも当てたような音がした。セナが まだ、そこに居る。

「ごめん……」

そう聞こえた。

気配が消える。

(『ごめん』……?)

私がドアを開け隙間から外を見てみたが、もう誰も居なかった。誰も居なくなつた廊下が、そこに ある。

(前に口論しちゃつた時の事かな……? 謝らなきゃいけないのは私の方なのに。“さよなら”なんて言っちゃつたし……)

隙間風が何処からか通り抜けた。私は音も なくドアを閉めた。

次の日の昼。ハウス先生とミゼー先生と。私達は同じ場所で待機していた。旅に必要と思われる物は全部 揃えたし、昼食も とつた。ところが、いつまで経ってもセナが帰って来ないのだった。

(様子、見てこようかな……)

部屋の窓から外を見ていた。ずっと ぼおっと、流れゆく人波を見下ろしていた。すると、見覚えのある背格好の人物が セナだ。

「あ、やっと帰って来た！」

と声を上げると、皆 私の方を振り返つた。

「つたくもう。待ちくたびれたわよ」

マフィアが そう言つて私の横から身を乗り出す。

「ん……?’

奇妙な事に気が ついたのは、私も同じ。なんとセナの横には女の人が！

泥とホコリまみれの2人は、街中で目立っている。女の人というのは、髪型はショートヘアで、細い体だけれど筋肉が しっかりと ついていそうな体つきだ。眉も、キリツとしていて意志が強そう。肌が日焼けしていて色黒だ。そしてセナと並んで立つて楽しそうにしているではないか。

やがて手を振つて別れた。セナは その足で診療所に入つて行つた。

(な、何か まずいもの、見ちゃった……?)

私はドキドキと胸が高鳴る。それにムカムカ モヤモヤと。嫌な感じに襲われた。

何あれ!? 散々 人を待たせておいて…… あんな楽しそうに。

ああ、完全なる嫉妬じゃあ!

と、私がヤキモキしている間に、セナがドアを開けて入って来た。

「遅くなってわりー。さー、出発しようぜ」

と、笑顔で話しかけてきた。

「体、大丈夫? 出発、明日にしても いいのよ? 無理して疲れ

溜めたら……」

マフィアが心配そうに一応そう言ったが、セナは手を振った。

「平気だ。すぐ行こう 今 行こうレッツゴー!」

…… かなりのハイテンション。本当に大丈夫なんだろうか?

私達がテンションに ついていけないしていると、セナが いきなり私の顔を見てニコツと笑い出す。そして私の方へ歩み寄って来て何かを取り出し見せた。

「!?!」

私が驚いて目を見開くと、ハイと何かを渡された。

それは……。

「何、コレ…… ブレスレット?」

渡されたのは、光る小さな石が何個か連なっただけのブレスレツ

ト。石は透明で、キラキラ輝いていた。

「やる。さっき買った」

笑ったまま私の反応を楽しんでいるかのようだ。

私が よく わからずじまいな表情で いると、横からメノウちやんが走って来た。

「あー! ずるーい! メノウも欲しーい!」

と訴える。するとセナはズボンのポケットからゴソゴソと取り出して、私のと あまり変わらない石の連なったブレスレットを渡した。メノウちゃんのは、青い石だった。大喜びだ。

「わーいわーい！」

はしゃぎ回っている。

セナは、蛭とマフィアにも似たようなブレスレットを用意していたようだ。蛭には赤の、マフィアには緑の色の石の物を。最初言葉がなかった2人だったが、ちゃんとそれぞれ後で「ありがとう」とお礼をセナに言った。

「俺には ないわけか？」

と、カイトが口を尖らす。

「あるよ。せんべい もらったんだ。あ、ハウス先生とミゼー先生にも あります。今まで世話に なったんで、ほんの お礼です」「ええ！ いやあ、悪いね、お礼だ なんて。何も していないのに」

ハウス先生は苦笑いをしながら自分の首筋を撫でて、セナから袋に入った せんべいの詰め合わせを受け取った。

「せんべい、か……」

ちよつと悲しげにカイトが呟いた。少し離れた向こうでは、紫の口元が少し笑っている。

「どういう風の吹き回しかしらね」

「気まぐれ風のセナ君、つてか？」

カイトは言つてフン、と鼻を鳴らした。マフィアも肩を竦ませる。私はブレスレットを握りしめ、セナに違和感のようなものを感じ続けていた。

私達はキースの街を後にし、シュガルツ港から東のベルト大陸へ向かった。離れている大陸だから、到着までには一週間くらいかかる。

まあ、仕方ない。船以外の交通手段なんて ないわけで（飛行機なんて ないし）。一週間も！？ と つまらなさそうに諦めてい

たわけだけれど、そんな事ないみたい。今まで乗ってきていた客船と比べると、もっと大型で、人数も、かなり居た。

カジノコーナーといった娯楽場や談話室、ピアノが置いてあつて演奏できたり、といった設備が、それなりに揃つており、場によっては商人達が集まつて小さい店を、かまえ、武器や防具の売買の取引をしていたりする。

船上の街が出来あがつてんじゃないだろうか。

しかし業者ばかりでもない。富豪達も居るし、温かそうで平凡な家族や男女のカップル、明らかに民族っぽいような格好の人達。とにかく、色々な人が同じ船に乗つていた。

しかも皆、とおつても親切！

目が合つたりすると笑顔になつて話しかけてきてくれる。“何処から来たんですか？”とか“どちらへ？”とか、そういった事柄から始まつて、会話は段々と盛り上がってくる。船の上では何処からでも笑い声が聞こえてきていた。

何か、いいよね、こういうのって。

ま、私つたらウツカリ商人の一人に、つかまっちゃったりしてさ、何だかんだとホメ殺しにされた拳句、訳の、わからない民族、人形なんかを買つてしまつたりしちゃつたけれど（しかも、その後セナにバカーってデコピンされた……）。

でも、楽しい。

楽しいから、あつという間に4日が過ぎてしまった。

明日は、いよいよ5日目……という、夜。オープンテラスでセナとマフィアと私と。3人でドリンクを飲んでた。

「どーやらベルト大陸って、別名『民族大陸』って言われているらしいわね」

と、マフィアは注文した果実のミックスジュースを飲みながら話を打ちかけた。

「民族大陸？」

「うん。今日、買い物してたらさ。商人のおじさんが色々と教えてくれたのよ。そのおじさんは西南出身らしいけど、ベルト大陸は何度か商売に出かけているって。ベルト大陸は世界で一番大きな大陸で、独自の文明や文化を持った民族ばっかなんだって。そのせいで、民族 同士の対立が絶えないとか」

「民族 同士の対立……」

私は、学校の社会の授業を思い出していた。教科書に そんなよきな資料や記述が並んでいた気がする。日本には民族 紛争なんて事はないし、私は あまり関心が なかったけれど。
「戦争も たくさんあつたらしいわよ」

戦争。

戦争……。

ニュースで見た事があつた。

大好きなラーメンを食べて、ヒンヤリと おいしいジュースを飲みながら見ていたと思う。

「そついや昨日、変わった服を着た女の人教えてくれてたなあ」と、セナがグレイプジュースに近そつな物を飲みながら言った。

「何、ナンパでもしたの？」

マフィアがピシヤリと言つたのをセナは否定する。

「違う違う。向こうから話しかけてきたんだって」

「それって逆ナン……」

と、言いかけた私の頭を上から すかさずチョップするセナ。

「で？ 何て言つてたわけ？」

マフィアが話題を戻してくれた。

「これから行く所はリール港だけど、そばにタルナ民族の村があるわねって。そこはサツサと通過した方が いいわよ、って」
通過した方が いい？

「どづいつ事？」

「さあ……」

「さあ、って。何で肝心なトコ聞いてこないのよ」

「だって。知りたきゃ金くれって言うんだぜ？ 冗談じゃない」

と、ガラスコップの底に残ったグレープジュースもどきを全部飲み干した。

コロン、と氷の音がコップの底で鳴る。

「ふーむ。やっぱり……」 民族は集団 意識が強くて自分達の事は話したがらない”って噂、本当みたいね」

マフィアという言葉に少し共感。私も時々会った人とかに聞いてみても、なかなかコレといった素性の事は話してくれない。当たり障りのないような話ばかりだった。

怖いイメージが つく。

私の居た世界じゃ、民族のイメージといえば楽しそうにパレードなんかしちやったりするのかなと。サンバとか踊って、フェスティバルを開いたりと。

戦争とか、話だけで全然 身近に感じた事なんて ない。どう理解したらいいんだろうか。

「さてと。俺、もう寝よ。じゃあな」

セナは起立して、私達を置いて船室へ行ってしまった。

マフィアが私に だけ聞こえるくらいに近づいて耳元で尋ねた。

「ねえ、セナ、何かあったの？ 最近、やけに……」

私はドキリとした。マフィアも私と同じ事を思ったんだと。

「……わかんなくて。何かね、最近……セナの考えている事がわからないの……」

視線は私が飲みかけていた、味がアップルジュースもどきに。淡いピンクの液体に、私の顔が小さく映っていた。泣きそうな、悲しい顔を。

「変わったのは、レイとの戦いの後？ その時、何か変わった事あ

った？」

と、マフィアは私の顔を見た。

マフィアは知らない。セナとハルカさんの関係^{こた}。どうやらレイとの戦いの後カイトから。セナとレイとハルカさんは昔の知り合いらしいって事と、ハルカさんはレイの事が好きらしいって事を聞いたらしい。

でもマフィアは それ以上は知らないんだと思う。
マフィアだけじゃなく、カイトや蛭達も……。

3人の間で昔 何が あったのか。全然 知らないんだと思う。
ハルカさんが あそこに居た理由も、セナがハルカさんの事を好きかもしれないって事も。

話してしまった方が……いいのかもしれない。

でも、ごめんなさい、皆。

言うには私に、力が ないの。そんな勇気が ない。

今は……

今は、言うのが辛い

私が黙ってしまったのを見て、マフィアは もう何も言わなかった。

《第32話へ続く》

第31話（復活の女神「ハルカ」）（後書き）

【あとがき】

レーラムネというのを飲みました。

ワキ毛の味がした……（不味い……@）。

ブログ第31話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-85.html>

ありがとうございました。

第32話（船上の襲撃）

朝。地平線がスツキリ　クツキリ見える、清々しい朝が　やって来た。

明日の今頃には、やっと次の大陸に到着する。民族紛争の激しいと言われる、ベルト大陸。

気候は温暖らしい。比較的　少し寒かったマイ大陸だったので、ちよつと嬉しい事だわ。

「ふわ〜。おはよう、カイト。メノウちゃん……何やってんの？」

客室から表へ出て船首の方へと行くと、私に呼ばれた2人は並んでいて。どうやら、準備　運動らしきものをやっていた。肩を回し、腕を回し……屈伸したりして。

「見ての通り。汗が気持ちいいぜー？」

「特に今日は、天気も　いいしねえー」

と、張り切つて体中を動かして、汗を光らせている。

「……頑張つてね」

私は　それだけ言う中へ戻つた。今日は　たまたま違う通路を通つて外へと出てきたんだけど。もしや彼らは　いつも　ああやって毎朝　規則正しく（かどろかは謎）ラジオ体操みたいに体を動かしていたのだろうか。

……まあ、深く考えないでおこう。

私は食堂の方へ行つた。すると蛍と紫が朝食を先に　とっていた。私も　その横に座つて朝食をとる事に。

「いよいよ明日ね。あー、やっとかーって感じだわ」

と蛍が大きな　あくびをした。紫は黙々と柔らかそうなパンと一緒に

にハムエッグを食べている。

熱い牛乳をフーフーと息を吹きかけ冷ましながら、私は答えた。

「本当。でも、船旅でこんなに楽しかったのって初めて。色んな人が居て、色んな珍しい物を見てまわって……」

「どっかの誰かさんは何か買わされてたけどね」

蛸が意地悪っぽく反応した。

はいはい。私の事でしょ、どうせ。

蛸を見ると、その手元で何か光った。それはセナがあげたブレスレットだった。

「綺麗ー。さつそく着けてるねえ」

私に手元を指さされ、蛸はそのブレスレットを覗き込む。

「まあね。結構 綺麗だし丈夫そうだし。私、真っ黒だから たまにはね」

と、また すぐに食べかけのパンを取って食べ始める。

蛸つてばさ……嬉しいんなら嬉しいって言いなよねー。ほんっと素直じゃあないんだからさ。

私が呆れたまま隣を見ると、紫が蛸の方を見てニコリと口元を変えていた。

紫が……また、笑っている？

蛸は全く気がついていない様子で食べている。

私、何か信じられないものでも見ている気分だわ。貴重な場面を見てしまったのかも！ あの寡黙の紫が笑う、なんて！

何が あつてもニコリなんて しない人なのに……今したのは、他愛も ない会話だったのに。

そういえば……。

さつきの蛸との会話。こうして落ち着いて考えてみると、最初の頃とは随分 変わったんじゃないか……？ 蛸つて、ご覧の通り ちょっと皮肉っぽい……小生意気な感じ。でも それは ただ、不器用だから素直に なれないってだけなんだ。それは よく わか

っている。

でも、でもでもでも。あんなにセナとは相性が悪そうだったのに、セナからもらった物を着けて、しかも私が綺麗だねって言ってもそのまま受け入れて。いつも みたいに皮肉っぽく言わなかった。しかも、自分が真っ黒だ……なんて謙虚に まで。こんな事、今までには なかった。

2人とも、変化しているんだ……！

私は今すごく感動していた。目をキラキラと させていると、ギョツとして蛭が私から離れる仕草をした。

「な、何よ、その目。朝から、眩しいじゃない」

私は二カツと口元の両端を吊り上げてみた。ますます気味 悪がる蛭。

「蛭と紫くん、変わったね！ 何か、いい方向に！」
と、突然 私が言い出したので2人とも『はっ！？』と した顔になった。

「そっちの方が全然いいや。ふふふ」

蛭は しかめっ面で見える。

「まだ、寝ぼけてるのね、きつと」

蛭は紫に そう言うと、再びパンに手をつけた。けれど私の笑い は止まらなかった。

そして、朝食の後。

ふいに、蛭のトイレ待ちで紫と2人に なった。すると珍しく紫が話しかけてきた。

「さっきの事ですけど」

「え……あ、はい？」

虚を突かれて少し しどろもどろに なったけれど、少し落ち着く。

「変わったなと……自分でも驚いています。あなた達のおかげでしょう」

静かに、壁を向いて言っている。

「そう……かしら？」

と曖昧な返事になったが、紫は それでいいようにコクリと頷いた。そして視線を壁の下方に落としながら、坦々と抑揚のない口調で語り出す。

「自分は、無感情なままで よいと、納得していました。主君を護るためには、余計な感情など切り捨てるべきだと。でも……不思議です。不思議と、笑いが こみ上げてくる……豊かになれる それは きつと、蛭様も同じです」

「……」

「蛭様が昨日、仰っていました。『勇気のもとへ来てから、時間の感覚が なくなった』と……とても穏やかな表情でした」

「……そう」

何だか信じられない。

蛭の言葉も、今 目の前に突っ立っている人物の言う事も、思っただ。

「本当に不思議です……どうか、蛭様の事を よろしく お願いします。こんな事を言うのは、とても変なのですが……」

私は慌てて手を振った。

「うっん、変じゃないよ！」

するとトイレから蛭が戻って来た。

「んもう！ 先に戻っててって言ったでしょ！ トイレの前で待たなくてもいいわよ！」

と、少し赤くなって怒った後、ズンズカと乱暴な足取りで先に行ってしまった。

「では……」

紫は それを追う。

また見ちゃった。微かに、紫が少し笑っていたのを。

すっかり慣れた船の景色。賑やかな人達、風景。外の船首側の方では、船旅が最後に なる今日の日も変わらず商人達が小さく場所を個々 陣取って、小店を構えている。景気のよい顔で手を叩いたり辺りを見回したりしながら、元気のよさをアピールしているようだ。

「よう！ そのお嬢さん！ コレ、一杯どお！？ 安くしとくよ！」

近くを通りかかる度、商人達が話しかけてくる。私は会釈したり愛想笑いを こぼしながら、立ち止まって捕まらないようにと歩を進めた。

もう すっかり慣れたもんだい！

いつもドリンクを飲んだり日向ぼっこをしたりしているオープンテラスに行くと、セナとマフィアとカイト、メノウちゃんが揃ってくつろいでいた。私も中に入ってイスに腰かける。

通りがかったボーイさんに、記憶によればオレンジジュースみたいな色と味だった飲み物を注文した。すぐに入れてきてくれて、種みたいなツブツブが入っている記憶されていた物と同じオレンジ色の液体の物が運ばれてきた。

すごく、思っていたより甘かった。この種、食べても大丈夫なのかな〜と思って飲んでいると、セナの座っている向こう側のテーブルに目が とまった。

ジブシー風の衣を身に纏った少し大柄な女性だった。何も注文せずに、考え込んでいるのか とても難しい顔をしている。頭から派手な紫色の、ベイズリー柄に似た布を被って覆われているため、正面からでないと顔は よく見えない。

視線は はるか遠くの、海を見ているようだった。睨んでいるようにも見える。

「ねえ、セ……」

と、セナを呼ぼうとした時、腰のあたりを叩かれた。振り向くと、同じ目線で少年はいつもの笑顔を振りまいてこっちを見ていた。

「や。また会ったね」

「チ、チリンくん……!？」

何度か行く先々で会っている、謎の少年チリン。いつもと変わりのない、オーバーオールを着てキャップを少し深めに被った子供だ。びっくりして目を見開いていると、可愛らしく首を傾げた。

「七神 捜しは順調？ 難航？」

そんな事を聞いてくる。

答えに詰まっていると、横から様子を見ていたマフィアが口を出した。

「どっちでもない……かな」

チリン少年はフウンと言って、私達 全員を見渡した。

何なんだろうか!? 今日はい!

「あと、光神と土神でしょ？ 大丈夫、すぐ見つかるよ。近いうちに、あつちから やって来るだろうから」

と、訳のわからない事を言い出す。

セナが我慢しきれずに問いかけた。

「何で お前に そんな事が分かる？ 一体お前は何者だ？」

セナだけじゃない。皆が同じ事を思っていたはずだ。

私はチリンさんに、救世主で ある事や七神の事など、素性を一言も これまで説明した事は ない。ないはずだ。

なのに知っている。何故だか知り尽くしている!

変だ。さすがにノンキな私も、気味が悪くなってきた。

「僕？ 僕は ただの鈴売り。それより、“七神創話伝”は集めているかい？」

話をすり替えた。

セナも私も皆も、怪しげな目でチリン少年を。

“七神創話伝”の事まで言い出すなんて！ 本当に この子は一体……。

「集めてる……わよ。一応……それが何か？」

メモには、第二章までメモってあるはずだった。

「この船の商人に もっと聞きまわってごらんよ。きっと知っている人が居るよ。大丈夫、君は救世主なんだから」

ふふふ。

そう笑ってスキップしながら去って行った。

私達は啞然とするばかり。言いたい事だけ好きに言われて去られてしまつて、ポカンと開いた口が塞がらなかった。

不思議で奇妙な感覚が抜けず、皆は口々に思った事を言った。

「何なんだアイツ……いつつも気に かかるような事 言つてサツサと去りやがつて……」

「勇気の知り合い？」

「ううん。全然。今みたいな感じで いきなり現れて何度か会つただけで……」

「あつちは こつちをよく知っているみたいな口ぶりだな。どっかで もっと会つてるんじゃない？」

とカイトに言われても。私には わからない。

「預言者みたいね……」

とマフィアがボソリと言つたすぐ後だった。

ガタン！

テーブルをひっくり返す大きな音で皆、振り返つた。

見ると、先ほど私が見ていたジプシー風のお姉さんが勢いよく立ち上がった拍子にテーブルを倒し、イスまで驚いたように倒れ転

んでいた。

そんな激しく立ち上がり、皆の注目を一身に浴びた後。お姉さんは両手を震わせ叫び始めた。

「……来る！ 奴が来る！ 不吉な魔物、不吉な影！」

賑やかだった場は賑やかではなくなった。言葉を暗示するかのように、急に辺りが暗くなり始めていった。

空には黒い雲が集まり出し、雨や嵐を予感させていく。

雰囲気は、あつという間に暗転と化していた。

「来るって……？」

しばらく皆がジツと場を動かなかった。カイトが言葉を漏らした時には、海の波のうねりが大きくなってきたからか、船全体の揺れも大きくなっていった。

海の色も暗さのせいで黒く見える。メノウちゃんは船体の手すりの方へと近寄って、様子を見に行った。そして落ちないようにと組み立てた手すりとは手すりの隙間から水面を見下ろしていた後、何事かを叫び出した。

「何か、居るよ！」

声を聞いた人は全員、え！？ とメノウちゃんを、そして手すりのそばまで人が集まり出していった。

船は大きく揺れる。気持ちが悪くなってきそう。

セナも私も、横に並んで手すり越しに水面を見下ろした。

暗い色彩の水面に、とても大きな影が映っているではないか。

何かが居るのが明らか！

「こいつは……深海魚だ！」

と、ポンと軽く手を打った。

ノンキそうに。

「深海魚お？」

私は片方の眉を上げて『何だそりゃ』という顔をした。

「そういや、聞いた事ある。年に一度、海の底の深くから水面へ上がり、空気を吸い込む魔物」

「は？ 空気？」

セナとは反対側の、私の隣に居たカイトが言った事にも疑問を投げかける。

「普段はエラ呼吸だけど、年に一度 肺呼吸しに上がってくるんだ」

「はあ……」

コレが それだと？ まだ影だけで姿を見てないんだけど。

「年に一度だからな。結構、見ごたえがある」

セナが またノンキそうに。2人とも、落ち着いていた。

何だ、そんなに大事でもないんだろうか。だったらいいんだけど。

「へええ〜」

私も次第に落ち着いていった。周囲は まだ騒がしく、船員さん達が忙しく、慌てて走り回ったりしている。パニックに近かった。

すると。

ザッパ〜ンッ！

水面が突如 盛り上がり、中から やっと姿を現した。全長 何十メートルあるのか わからない巨大な丸々とした胴体で、首が太く長く。全身に並んだ明るい赤と黄の交じった派手なウロコを水しぶきと共に光らせ、エラと思われる箇所だけは青色で。白い細かめな仙人のようなヒゲを顔の部分 部分から絹のように滑らかに垂らしていた。魚というよりは、恐竜とでも言った方が近いかもしれない。

異様に大きい両目を持ち、その目でギロツと船を見下ろしていた。船上の誰もかれもがギクリとして背中を強張らせる。

「は、はいこきゅうするだけ　なななら、ががが害は　ないわよ……ね??」

私も目に圧倒されつつ、口をアワアワさせながら両隣に居るセナとカイトに確認をとった。とつてみた。

そつしたら、セナが言う。

「……は？　んなわけねえじゃん。だいたい　こついう魔物とか魚つて、身を護るために人間くらい平気で襲ってくるだろ」

「そつだよな。人間と魔物つて　そんなに仲良くは　なれないし」

カイトも話にのつてみた。

「ちよつとおおお！」

私は青ざめた。

同時に周囲の叫び声がクライマックスになった。「どつしゃあああゝつ！」

皆、船員も客も私も顔面蒼白だ。

ノンキなのはセナとカイトの2人だけ。

しかも、その深海魚とやらは鋭く両の目をシュキーンと光らせて、なんと船体に体当たりし出したじゃあないかあ！

ドカン！

「うわあああ！」

「ひえええええ！」

またドカカン！

「いやあああああッ〜！」

絶叫の嵐だ。船は揺れる、体当たりする度に直下型地震みたいに衝撃が体に伝わる！

皆、そばに ある物に何とか掴まるだけで精一杯。柱や壁にしがみつき、イスやテーブル、パラソルや旅行カバンといった持ち物など、全てが暴れまくり飛びまくり、滅茶苦茶だった。

私は反応が鈍くモロに衝撃を受けてしまつて体のバランスを失い転がる所をセナが腕を掴んでくれて助かった。セナは手すりにしっかりと掴まつて安定していたので、動じてない。

「あ、ありがとう……」

と、目を回しながら お礼を言うと、またガクン！ つと船が傾く。

「きゃああああ！」

「カイトお、セナ！ あんたら、何とかしなさいッ！」

マフィアが柱に しがみついて叫んだ。

呼ばれたカイトは、メノウちゃんを支えながら柱に しがみついていた。

「あいよおー！」

何で そんなノンキなんだと怒ってやりたかったが、私は ただセナの掴んでくれる手を信じているだけだ。

離されたら私は何処まで転がつてしまつんだらうか！？

「家鴨あひ鴨”！！」

カイトの通りのよい声が響き渡った。カイトは目を閉じて呪文を唱えた。片手は柱に くつつくようにしがみついて、もう片手はメノウちゃんの手を掴んでいて両手は使えない。

カイトの額から、儂い光が現れた。

やがて光は集まり固まって、上昇していく。
手にも届かず、ずっと ずっと空へと光は昇り、そして……。

弾けた。

パン！

頂点で粉々になった光の粉は広がり散らばって……ゆっくりと下降しながら、ドームを作るように落ちていった。そうやって、バリアーの形を作っていたのだ。

船体を包む、光のバリアーへと。

そして さらに、包まれた船が重さ関係なく浮かび出した。

「わああ……」

驚いた。船が空中に浮かぶなんて！

水面スレスレにピタリと止まったみたいだった。

乱暴な揺れも治まり、周囲から歓声が沸き起こった。しかし、今度は逆に、カイトが辛そうな顔を始める。

「こんな重い船、長く持たねええ！ セナ、マフィア、早くー！」
苦しそうに、汗いっぱいになって叫んだ。

「わかった！ ……ん？」

マフィアが素早く返事をしたものの、深海魚を再び見てギョツとした。

深海魚の大きく開けた口から、小さな小さな子分みたいなミニミニ深海魚が多数現れ、彼らは真っ直ぐにバリアーに包まれた船をめがけて攻撃を繰り返した。体当たり ばっかりだ。

「うげえっ！ く、くそお！ もたねえ……！」

カイトが苦しそうな声を上げる。続き止まない振動に翻弄されている。

「セナ！ 力を貸して！ 2人で併用 魔法の攻撃したら、たぶん……」

とマフィアがセナに呼びかける。セナは「ああ。そうだな」と言っ
て体勢を整えた。

「つつーと……何魔法だ？」

ハタと、セナがマフィアに聞いた。

「コレよ。“木の葉の舞”じゃなく……“木の葉もどきの舞”」

と、足元に落ちていた一冊の本を拾い上げ、ページの何枚かを引き
ちぎった。

「なるほど」

セナはニツと笑う。

「早くー！」

カイトが叫ぶ。

「一体、何の騒ぎよ……タタタ」

と、何とか立ち上がる蚩。船室に向かう途中の通路を歩いていた時
急に船が立て続けに2度3度と揺れ、蚩と紫は壁に激突する形で転
がった。起き上がってみると、廊下の向こうには同じく揺れで壁に
激突した母子が倒れていた。

「ちよつと、大丈夫？」

と、蚩が すぐ駆け寄り様子を見た。抱き起こしてやると母親は蚩
に子供の様子を尋ねた。

「私より子供を……子供は無事ですか？」

どうやら頭を打つたらしい。意識が朦朧もろもろとしていて、焦点が定ま
らない調子で蚩を見た。

「少し背中を打ったようですが、大丈夫です。折れてません。今は
気絶しています」

少し離れた所で紫が教えた。紫の手の中で女の子が一人、気絶し
倒れていた。

「そう、よかつた……」

母親は そう言つて安心した。

「とにかく、部屋は何処？ 送るから」

と、蛭は紫に頼み、母親と子供を担いでもらった。

「後で外の様子を見に行つてみましょう」

「そうね。たぶん勇氣達が居るし……」

と、母子を客室へ送つた後、2人並んで廊下の来た道に戻っていた。

すると、目の前にスツと いきなり人影が現れる。

2人はギョツとして、立ちはだかつた人物を見た。

「紫苑……！」

厳肅な僧の格好。鋭く厳しさを秘めた沈黙の瞳。かつての仲間。

育て親でもあつた。

腕の未熟な蛭を鍛え、技を教えた。紫を作る際、協力をしてくれた。

2人の親であり師でもある男……法眼師、紫苑。

「お前達を迎えにきた」

紫苑は そう言つた。

「何故……？ 今頃！？」

蛭は顔を曇らせ力なく答えた。

「ハルカ殿の命令だ。レイ殿も待つておられる」

紫苑の低い声に、ピクリと反応する。「レイ様も……？」

心が傾く。紫苑から視線を逸らすと、小窓から外が見えた。外で

は勇氣達が深海魚との戦いに夢中だった。

船体が大きく揺れる。

壁を支えにしたりしながら、必死に なつて考える。

(ダメ……紫苑が相手じゃ、皆に勝ち目は……)

下一点、床を見た。口唇を噛み締め、己の運命を激しく呪つた。

紫は何も言わない。黙つたままだった。

「……いいわ、行く。サツサと連れてって」
顔を上げず、紫苑の方へ歩み寄る。全てを諦めたかのように、身を運命に任せる事にした。紫も後に続き、やがて3人は音も なく消えた。

セナの手に精霊が集まる。意識を集中させる。

やがてマフィアが粉々に引き裂いた紙をバツ！ っと思い切りよく全て放り投げた。そして紙片の一つ一つ、操あやつりを試みる。

「行くぞ！」

「ええ！」

「木の葉（もどき）の舞”！」

紙片は鋭い剃刀かみそりとなり、風の軌道に沿って螺旋状らせんに散り、スパスパと小型の深海魚達を斬り刻んでいった。

その勢いの凄まじさは、思わず息を呑む。

「キイイエエイッ！」

「ピイイイッ！」

甲高い断末魔の叫びも風の音にかき散らされた。息も できないほどの風の圧力の後、私が目を恐る恐る開けると、ミニミニ深海魚達は粉々に なって海の中へ落ちて消えていった。

残された巨大深海魚は皮膚がボロボロになり、「キイイイ……」と弱々しい声を残し、水中へ潜っていったつきり、もう2度と浮上しては来なかった。

「ふいいい〜」

と、カイトが力を抜くと、船はバリアーを失ってドボン！ と……落ちた。

「わああっ！ そうつと下ろせ！」

セナが叫んだ。勢いよく水面に船体が打ちつけられたせいで、右の波が高く跳ね上がり、津波によく似た波が起きる。

叫ぶ事すらできないセナ以外の私達全員。客も転がり、私も自由に転んで、元居た場所から数メートル先まで行って やっと止まってくれた。

しばらく、頭の上で回転しながら追いかけてっことをしているヒヨコ数匹……。ピヨピヨ。

視界がグルグル面白く回って、再起するまで時間が かつた。

私が やつとこさ正気に戻ると、すでに他の一般人は「バンザイ！」と、両手を振り上げたり手を隣人同士で叩きあったりして喜び大笑いをしていた。

「あんたら、よくやってくれた！ 一時は どうなるかと思ったわい」

と恰幅のよい商人の おじさんが褒めてくれた、セナ達を。

それを機に、次々と お礼を言う人々がセナ達の前に殺到した。

場は大騒ぎになって収拾が つかなくなりそうだった。

……

蛍と紫が行方不明だと知ったのは、騒ぎが収まり夜が深まってからだった。

《第33話へ続く》

第32話（船上の襲撃）（後書き）

【あとがき】

チリン少年の前髪は大きな『巻き毛』なんです。

おいしそ。

ブログ第32話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-88.html>

ありがとうございました。

第33話（商人の街）

蛭と紫くんが消えた。

船中くまなく探したけれど、見つからなかった。

最後に2人を見たという人が居たので話を聞いてみたら、2人が昨日の深海魚との戦いの最中、お坊さんの格好をした男と共に居たのを見たという。

しかし、その後の事はわからなかった。2人は、何処へ行ってしまったのか。

お坊さんの格好をした男……たぶん、紫苑の事だ。紫苑がドサクサに紛れ、2人を連れ去ったんだ。

何で今頃？

早急に2人が必要になつた？ ……何のために？

ハルカさんの命令なの？ それとも……レイの？

蛭……今、あなたは何処に居るの。

「仕方ない事よ。とにかく明日、大陸へ着く。私達には私達のする事が あるんだから」

とマフィアは言った。

でもね、マフィア。蛭は本当に行きたくて行つたんだと思う？

私……蛭も紫くんも変わったなと思ってたんだよ？

すっかり仲間……って、思ってたんだよ？

それが何で こんな事に……。

落ち込んだまま目を閉じた。薄いシートの中で頭を隠してベッドの上で身を屈めて、色々と考えてしまふけれど。明日の朝、この船は大陸へ着く。民族の争いが絶えないという、ベルト大陸へ……そのために備えて、しっかりと寝ておかなくちゃね。

しばらく経ってスヤスヤと眠りに落ちた頃……何処か遠くで声が聞こえた気がした。

ごめんね 勇気

しっかりと聞こえた。間違いなく蛍の声だった。

ガバツ！ と勢いよく起き上がった。隣に寝ていたマフィアが驚いて目を覚まし、「どうしたの!?」と聞いてきた。私はドキドキする胸を押さえてマフィアに言った。

「蛍達は間違いなくハルカさんのトコに居る！ 私には わかる！」
妙だけれど、確信していた私。

そう……そんな気がする。そして蛍の身に何かが起こりそうな予感がする。

(ハルカさん……！ 一体、何を企んでいるの!?)

客室の小窓から覗き見える空は まだ暗くて、何も見えやしない。

……蛍は暗い部屋の一室で、邪尾刀を握りしめて黙って座っていた。

その様子を少し開いたドアの隙間から紫がチラと見て、そして去って行くようにした。するとすぐ、ドンと誰かに体が ぶつかつた。

ひたき
鷓鴣たきだった。

元通りに なった体と服。そしていつものような皮肉さを込めた言葉と表情。

「よく帰って来れたよね。蛍も あんたも……ま、いいや。同じ四師衆 同士だしね」

フン、とそっぽを向きながら鼻を あしらった。

「……………」

何の反応も示さない紫を見て、舌打ちした。

「ちえ、相変わらずブアイソ」

と、紫を思いきり真正面から蹴飛ばす。みぞおちあたりを蹴られた紫は、場から少し飛ばされ勢いよく倒れた。紫は少し顔をすりむき、頬を押さえながら上半身を起こす。でも、相変わらず無言のままだった。

「ムカつくんだよね……………あんたら。ハツ……………。ハルカの命令じゃなかったら、今すぐ殺してやるってのに。わかってるよね？ あんたら、ハルカに生かされてんだよ。ハルカが、あんたらを指名したんだ。その辺、わかれよな！ バーカ」

そう暴言を言い残し、サツサと去って行った。

紫は しばらく黙って座っていた……………すると背後にスツと、音もなく紫苑が現れた。

「紫苑様……………」

と、振り向き紫苑の顔を見上げた。紫苑は憐れみか同情を含んだ声で、紫を諭す。

「我慢して やってくれ。彼なりの出迎えなんだ」

「はい……………」

すでに理解しているかのように、少し俯き冷やかな床を見た。

……………

目ヲ ツムレバ楽シカッタ勇氣達トノ日々ガ 記憶ガ 蘇ッテク
ル

真つ黒な瞳が言う。

「あたしを殺して……………勇氣……………」

邪尾刀を抱きつぶすくらいに強く抱えたまま、小さな少女は心で

泣く。

ベルト大陸リール港。世界で一番 騒がしい港だという。

船を降りた瞬間、違う空気に おいを感じた。何処か胸がホツとする、懐かしい香り。民族が多種様々に居ると言うが、自然環境も様々で、その地方その地方 独特の花が咲いたり虫が居たり動物も居るといふ。

「争いなんて嘘みたいね。心が とつても和むもの。精霊達も とつても穏やかで元氣いっぱいだよ」

「ああ。風が くすぐりたい」

「近くにデカイ泉が あるのかな。息吹を感じるぜ」

と、マフィア、セナ、カイトは それぞれの感想を述べた。聞いているうちに私は思わず吹き出してしまふ。

「何が おかしいんだよ、こら」

セナが突っかかる。

「だって……すつかり『詩人』っぽいんだもん。知らない人から見たら何か おかしい」

と私はニヤニヤ笑いをしながら見る。「確かに……」と3人は それぞれ何かブツブツ言いながら照れた。

「心だぜ、心」

セナは笑う。あんたが一番 恥ずかしい事を言っていたと思うんですけどねと私は思いながら。

「しっかしデカイ港だよな。見るよ、船の中と変わんねえ。店がズラリと並んでいるし、変わった格好の奴らが多すぎる。本当に3分の1が壊滅したのか？ デマじゃねえの？」

セナが辺りを見回して言った。何か、とつてもワクワクした顔で目がキョロキョロとして、ついでにキラキラ瞳は輝いている。

何て忙しい奴なんですよ。ま、私もワクワクしてるからいいけれ

ど。

「ほんと。信じられない活気。心配するだけ損だったわね」

マフィアが言った。「そうね！ よかったよね！」と私もウンウンと頷く。

ココの土地の人達は もう元氣を取り戻しているんだ。よかった、本当に！

私達が それぞれ思い思いに言いまくっている通り港は港で『街』が出来上がっていて、祭りなんじゃないかと思わせるぐらいの活気に包まれていた。

太鼓や笛の音、陽気なおじさんの へたくそな大歌も離れた場所から聞こえてきて。

明るい赤や黄色や緑の色をした店々のテントが隙間なく並んで、緩やかな道を作っている。店の中では各店の主人や子供が店番をしたり。商品じゃないのかと思うタルをイスがわりにして色の剥げたエプロンを着た老人が座ってキセルを吹かしている。

「お姉ちゃん。宿があるって。あっち」

私の すぐ隣でメノウちゃんが私の制服の袖を引っぱった。どうやら私達が あれこれ ふけていた間に、近くの店の おじさんに宿の事を聞いたらしい。向かって左側の道を指して教えてくれた。「おお、べっぴんさん。どう？ この果物一つ。トッブルっていう、ココ南ラシー又国でしか ない物なんだ。おまけに ひとお一つ、付けとくよ！」

宿の事を教えてくれた おじさんが私達に話しかけてくる。

「買ってこっか。喉 渴いちゃったし。私が払うから」

というマフィアの提案に私も賛成。マフィアは おじさんに手の平を広げた。

「じゃ、おじさん。5つ！ 今 食べるから そのまま ちょうだい」

「へい、毎度あり！」

おじさんは上機嫌にトップルを私達に渡していく。

渡されたトップルとは赤く、見た目リンゴみたいに丸かった。でも触っても硬くはなく、少しプニプニしている。肉まんだが、そんな柔らかさ。ちぎって食べられるパンみたいだった。一口ちぎって食べてみると、やっぱりリンゴに近い味。でも、とっても甘い。それに水つぽい。喉が渴いている時なんかは特に美味しいんだろうな。「へえ、おいしー！ 変わってるー！」

と私達は感動の連続。

「あんたら、観光？」

美味しそうに食べていたら、店の おじさんが話しかけてきた。

「用事……ってどうか。旅をしているんです。人を捜して」

私がトップルを頬ばりながら説明。するとセナが割って入って来た。

「なあ おじさん。こう見えて救世主一行なんだ、俺ら。知ってるだろ？ “七神創話伝”！」

トップルの最後のひとかけらを口の中に入れてモグモグと。その間、おじさんの顔を窺った。

「救世主！？ 誰が！？ あんたかい！？ それとも あんた！？」
予想通り、というか やっぱり、おじさんは びっくりして私達の顔から下までジロジロと見回した。

「こいつです、こいつ」

カイトが私を後ろから。頭をつついた。

「へっ！？」

おじさんは さらに びっくりして目を丸くした。改めて私を見る。そして はあ……と感心しきった顔をした。

「この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度”……ってやつだろ？
へえ……あんたみたいな女の子がねえ……」

「……ねえ？」

と私はポリポリと頭を掻く。だって、自分でも信じられないものね。本当、何で私を選ばれたんだろー？

「そんでさ、その伝説に従ってだな、俺ら七神を捜して旅してると
てわけ。なあ、おじさん。この辺で妙な力を持った奴とかさ。さっ
き言った“七神創話伝”の内容とか、それに関するもん何でもいい
から、何か知らね？」

と、私の頭上でセナが聞いた。おじさんは真面目な顔になって考え
る人のポーズをとり、考え込む。

「そういえば……」

おじさんが　そう口を開いた瞬間。

「何っ!?!」

と、いつせいに私達が注目したもんで、ヒッ、とおじさんは声を上
げ身を引いた。

「い、いや、噂だけだよ……どっかの……たぶん、もつと大陸の
北だとは思っただけど……七神の……だと、思っただけど？」

私達は揃いも揃ってウンウン、と頷いた。

おじさんは続ける。

「言い伝えがあるとか　ないとか……コウジン、とか言ってたっけ
なあ……」

「コウジン？」

ニンジンじゃないわよね。

「ニンジンじゃねーよな」

と、セナ。……私と同じ事を……。

「オラああまり好きじゃなくてなあ、神とか、そういうの。悪いね」
そう言っって苦笑いをする　おじさん。慌てて手を横に振るセナと
私。

「いや、参考になったよ。サンキュー！」

「うん。有力な手掛かりだよ！　ありがとう！」

ニッコリ笑っって見せた。それを見た　おじさんは　また少しだけ

考え込む。

「……あんたら、北へ行くんだね？」

と、上目づかいに私達を見る。

「ええ。そのつもりです。ね！」

と私が後ろにふると、皆は頷いた。

「そうだろうな」

「そうね。重要な情報だもの」

マフィアもカイトも一致する。おじさんは「そうか」と軽く相づちを打った。

「ま、気をつけてな。またトップル食べに来てくれい」

「うん。ありがとう！」

私達は何も気にせず店を去り、宿の方へ向かって行った。

勇気達が去った後、店の奥で隠れていた小さな女の子がトコトコとおじさん、もとい店主の横へやって来て、目をクリクリさせて言う。

「今のが、めしあなの？ めしあ、がやって来たの？」

店主はジッと一点を見つめながら、怖い顔で「ああ……来ちまったらしい」と言った。

「さつきね、そこに兵隊の人が居たよ」

「！」

子供の言葉に、ビクツと肩を震わせた。

(見られた……?)

嫌な汗が頬を伝う……何も知らない子供は、悪気のない声で言う。

「めしあが来たよ、って知らせてい？」

店主は……。

……

……屈んだ。

子供を抱きしめて、か細い声で言った。

「いや、言わなくていい。ちゃんと後で言いに行くから……」

子供は、やはり何も わからないまま目をパチクリさせていた。

「パパ、すごい汗だよ」

宿をとった私達は、荷物を置いた後に屋内に ある食堂へと集まった。そして少し早めの昼食を。

私達の泊まった宿は割と大きくて、客も多い。賑やかな客の笑い声と、民族めいた歌なんか聞いてくる。忙しそうに宿の従業員らしき人達は止まる事なく動いていた。

「あのさー、相談なんだけど」

「何？」

セナが少し言いくそくに言う。

「少しバイトしていいか？ ココで」

「へ？」

急に そんな事を言われて。パチパチと まばたきが止まらない。

「実はさ。前に世話になったバイト先の親方さんがよう？ この港に知り合いが居て、手が足りていないらしいんだ。もし こっちに行くんだったら、少し手伝ってやってくんねーか、って言われて。ほんの2・3日で いいんだけど」

「2・3日？ 別にいいけど……」

と私は首を傾げた。するとサツと立って、

「よし。んじゃ、さっそく行ってくるわ。じゃー！」

とスタスタと行ってしまった。

残された私達は、はあ？ というような顔で お互いを見つめ合った。

「2・3日か……よし。んじゃ、俺も行く。メノウの事、よろしくと、カイトまで立ち上がった。私が慌てて「何処へ!？」と聞くと、「人形売りに。売れたら金になるよ」

とても さわやかに言つて軽い足取りで行ってしまった。

「うちの男どもは……なんてマイペースなのかしら!？」

マフィアが腰に手を当てて怒った。

私には、別の気になる事が あつて。そつちに気を取られてしまった。

セナ……バイトばかり。このまま、どんどん離れて行ってしまったら……私、気に しすぎなのかな。どうなのかな? ……

「メノウ、ジューズもらつてくる!」

と、メノウちゃんはコップを持って走り出した。

私とマフィアだけが昼食の済んだテーブルに取り残されて。私は、ぼおつと食べ終わった皿を見つめていた。

「忘れてたけど。セナと前、一緒に居た女の人ね」

マフィアが突然、話しかけてきた。

「へ? 何の事?」

「ほら。窓から見たでしょ。ブレスレット、もらつ前……」

…… ああ、あれか。私は思い出した。

今、自分のしている手元を見る。セナにもらつたブレスレット。

仕事帰りで泥とホコリまみれの2人が楽しそうに笑っていたのを窓から見たっけ。それを見て すごく胸がムカムカしちゃって。

「それが何?」

つい、思い出して眉をひそめてしまった。

「セナと同じバイトの子だったんですって」

マフィアは そう言うけれど、それは とつくに予想が ついていた。だって格好が。汚れ方が そっくりだったんだもの。

たぶん、あの日も たまたま帰り道が一緒だったとか、そんな所
だと思う。

「セナ、皆にプレゼントしたじゃない？ プレスレットとか せん
べいとか。あれ、どんな物がいいか選んでもらってたんですってよ。
最初、勇気だけに買おうかと思ってたらしいけど、それじゃ皆に悪
いかと思って……ですって」

え？

「……私だけに？」

「そうよ。ケンカっぽいのはちゃったんだって？」

「え……あ、うん」

「その お詫びみたいね」

思い出した。

私が自分の気持ちに気が ついた時。

セナにサヨナラを告げて走り去った、あの時。

セナは何を思っただろうか。

その後、レイを倒して。ハルカさんが復活して。私達は逃げて…

…セナはバイトだと言って、あんまり一緒に居なくなっ……でも、
あの日。ドア越しで謝ってくれた。悪いのは私の方なのに。

勝手に落ち込んだり行動したりして、いつも悪いのは私の方なの
に。

いつもと同じ素振りで変わってはいない。セナはセナだ。

出会った頃と同じ、優しさだ。

「ふえ……」

突然、涙が ぼろぼろと溢れ出した。マフィアが びっくりして
私を見た。

「勇気？」

「マフィア……あのね……私……」

マフィアに全部 話す事にした。

セナとハルカさんの事も、洗いざらい。

マフィアは黙って、聞き取りにくい私の言葉を聞いていた。

せつかくだから、残された私達も働く事にした。

とはいっても、宿の調理場。マフィアは料理の腕前がプロ級なので、宿屋の主人さんや雇われのコックさんと交じって炒めたり煮たり揚げたり盛り付けたり……と、忙しく補助をする。あまりに有能なので、すっかり任されている。で、私はいえ、料理の腕なんて たいした事ないわけで。

そうねえ……作れるものといったら せいぜい目玉焼きくらいのレベル……とりあえず、才能も ないし器用でもないわけで。皿洗い全般を任される事と なった。

ココの宿屋は結構デカいから、お客さんも大勢 居る。朝、昼、夜の食事タイムは もう、ものすごい忙しさ。おしゃべりなんてしてる間なんて もちろん なし。容赦なく運ばれてくる、客が食べ終わった皿、皿、皿の数の山。一皿5秒で磨きあげ、5秒で注ぎ洗い、横で皿拭きをしてくれるメノウちゃんへと渡していく。ハイ、ホイ、ホ！ というタイミングだ。

ドジな私はウツカリ手を滑らせて皿を割ってしまったー！ という事も……シクシク。

ああ、一体一枚いくら、バイト料から引かれるのかしら……もう 考えないでおこう。

気が張って、張りまくって、神経も体も もうクタクタ。仕事が終わって部屋へ戻った時、ベッドに そのまま突っ伏した。さん、にい、いちで夢の中へ……。

マファイアもセナ達も まだ帰って来ていない。お先にサヨナラ……だ。ぐう。

という日が3日続いた今日。

ちょうど昼食の時間帯が過ぎ、お客がチラホラ帰り始めた頃。休憩をとり、お客に交じって昼食をとっていた。お腹は もうペコペコで、手は3日前と比べるとガサガサ。後で家から持ってきたハンドクリームでも つけとこつかな、と思っていたら。

急に、隣の丸テーブルに着いていた中年男2人の会話が耳に飛び込んできた。

「おい。また、ピロタの泉をめぐってタルナとバリ民族の紛争だよ。小規模だったらしいが、決着は ついてねえってさ」

と、昼にも関わらず酔っ払っている騎士の格好の男が言った。酒をあり、顔を赤くしている。それは もう一人の中年男も同じ。もう一人の方は、大柄で白いヒゲを生やし、後ろで白髪を束ねている。これまた騎士の格好をしていた。2人とも、どうやら冒険家なのかな。

「バリ民族っていやあ……異民族の村だろ？ 中には、ワマ民族の混血も居るらしいじゃねえか。あーやだやだ。野蛮なワマ民族の血なんて流れてるから、こつも争いが起こるんだ」

受け答えた方は、そう言っておつまみを追加。すると もう一人の方が、今度は小声で言った。

「とつよりよ。ラシー又国王様が しっかりしてねえからだよなあ。こつも争いが多くちゃ、気が滅入つちまうぜ」

「おいおい。こんな所で言つなよ、んな事。誰か他に聞こえたらどつする？」

私が聞いていた。

話を整理すると……ラシーヌ国に、タルナとバリっていう民族が居る。で、バリ民族の中にはワマっていう民族との混血の人も居て……とにかく、紛争が絶えないんだ。

(民族紛争か……ニユースとかで見た事あったっけ……)
と、ぼんやり考えていた。

すると、ふいに後ろから肩を叩かれた。ドキッとして振り向くと、視界が真っ白になった。

というのも、私の視界を何か白い物が塞いだからだった。

「あんた、悪いけど使い頼んでいいかい？」

白い物とは、ただの封筒。ヒラヒラと私の目の前で持っているのはこの宿の主人。少し意地悪そうな目でギロツとこっちを睨んで、私の返事を待つ。

「あ、はい。コレですか？ 何処に？」

やっと現状が飲み込めた私は、白い封筒を受け取った。

「ココから北東に、タルナ民族の村がある。村の南端っこに白い軒家があるはずだ。風車があるからすぐわかるだろう。ミヤーリっていう女が住んでいるはずだ。そいつにそれを届けてくれ」

そう言っつて別の白い紙を渡す。紙には家までの地図が描かれていた。

「今から行けば夕方には帰って来れる。すぐ行って来てくれ、特別手当てを つけといてやるから」

タルナ民族の村は本当に すぐだった。方向音痴には前科があった私は内心「また迷っちゃったら……」と心配していたが、なんと村までは一本道で。しかも親切に案内看板が。道標なんて一本道で必要あるんだろうかと思っただけだ。

途中、人も行き交ってたし。念のため聞いてみたけれど、その人はちゃんと親切に「あつてますよ」と答えてくれた。

やっぱり人が多いからだろうか。こんなに案内板とか徹底しているのは。

そう思った。

で、徒歩で約2時間後。噂にも聞いた、タルナ民族の村へ到着した。石垣の塀に囲まれた、村。港とは空気や雰囲気が全然 違う。穏やかでは あるけれど何処か物寂しさを感じた。

石垣を超えてみると、まず一人の男が私に近づいて来た。

「変わった格好だな。村に何の用だ？」

まだ20代半ばと いった感じの男。手に槍を持ち、茶色い布製の鎧。兵か騎士か。

「あの……コレを届けに」

と、私がスカートのポケットから出した白い封筒を見せると、男はすぐに それを ぶんどった。

「ちよっ……」と私が言う前にビリビリと封を開け、中身を確認する。10秒ほど経った後、男は中身を封筒の中に戻し私に返した。

「ミヤーリは あそこの風車がある家だ。用が済んだら、すぐ村を出るよ」

言うだけ言って、去ってしまった。

「一体 何なの あの人の……」

と口を尖らせた後、教えられた家へ向かう。

白く造られた風車はノンビリと回る。近づくと、麦畑が見えてきた。寂しげな風が吹く。周囲には誰も居ない。数羽の小鳥が、可愛らしく飛ぶだけ。

白い煉瓦造りの家で、茶色い屋根。煙突からは、煙が立っている。木で できた扉をトントンと叩く。すると中から、パンの香りと共に一人の女性が出てきた。

銀杏ういぎすのような黄色で、長く後ろから肩に下げて編んだ三つ編みの髪。前髪は横に分け、くつきり細い眉が凛々しく たつ。まだ若い。白いブラウスに青のロングスカート。そして少し淡いブルーの瞳に

映る私の顔。

「どなた？」

「あ、あの。私、リール港町の宿屋の主人から手紙を届けに来たんですけど……」

ためらいがちに……手紙を渡した。一度 封を開けてしまっている手紙。中身は見えてはいないけれど、見たと思って怒られたらどうしようかと思っていた。しかし この人は何も言わず、「ああ。シルボさんね」と手紙を受け取って家の中へ私を招き入れてくれた。

「入り口で兵に捕まったりしなかったかしら？ シルボさんったらそれが嫌で、いつも違う人を使いよこすの」

言いながら、温かいミルクをコップに入れて私に渡してくれた。こじんまりとしたテーブルの前の小さなイスに座り、ゆっくりとミルクを口に入れていく。

ほどよい温かさが身に染みて、心が和んできた。

「あの人って……何なんですか？ いきなり尋問されて手紙もあつという間に とられちゃって……」

だいぶ落ち着いてきたので、聞いてみる事にした。

「そうね……あ、先に自己紹介、いいかしら。私はミヤーリといいまして、ココで一人で住んでいます。麦畑があつたでしょう？」

風車で麦をひいて粉にして、その粉を届けているのがシルボさんの所。あと、幾つかの店にも届けています。この手紙は粉の注文書です」

へえ〜。

私は そうかと納得して ずっと話を聞いていた。ミヤーリさんは そこで話を切った後キッチンの方へと行き、鉄板を両手に戻ってきた。

鉄板の上には、焼きたてのパンが何個か並んでいた。ふつくらと温かく、美味しそうな匂いが部屋中に広がっていく。皿を用意して、上に2個ほど丸いのと四角いのと。各種類のパンをのせて私の前に差し出した。

もちろん、私は大喜びで頂く！

匂いのおかげで お腹は正直にグウグウと答えてくれていた。

「ありがとうございます！ 頂きますっ
ぱくっ。」

パンの温かさが口にも いっぱいに広がって……。

「おいしい！」

と、思わず声に出してしまった。

ミヤーリさんは、満足そうに私の顔を見ている。

私ってば……パン食べてないで、自己紹介しなくちゃ、と思い出した。

「私は松波 勇気です。ちょっと訳ありで、世界中を連れと旅を
しています。宿で皿洗いのバイトをしていたんです」

「まあ……旅を？ それは大変ですわね。辛くなったりしませんか
？ 女の方なのに……」

「はは。まあ。ですけど、楽しい事も いっぱいなんですよ」

「素晴らしいですわね。世界中の色んな物を見て……うらやましい
です。私も、この村から抜け出せたら……」

視線を下へと落とした。私の前に座っているミヤーリさんの前
には、湯気のたつミルクの入ったコップが置いてある。私達の間
に沈黙が訪れたと思ったけれど、ミヤーリさんは意を決したように長
く語りだしていった。……

「見たでしょう？ 入り口の所で、兵を。村の入り口は全て、高台
から監視されているんです。まだ この辺りの監視は嚴重ではない
のですけれど。」

「ご存知でしょうか？ タルナ民族とバリ民族と、戦闘態勢の最中
だという事を。」

今、この村の男達は皆、兵で徴収されました。きつと今頃、北に

居るんでしょね。私の父は兵で昔、戦争中に。母は病気で倒れてしまつて、今年に亡くなりました。一人残された私は父の麦畑を守っているんです。

私達タルナ民族は花や植物を育てるのが得意な、穏やかな民族なんです。ですけど、何十年か前から北のバリ民族が攻め込んできて。私達が大切に育てあげた植物は皆、燃やされました……それ以来ずっと、睨み合い。

私達 女子供は ただ家や身を守る事で精一杯」

ミヤーリさんは……小窓から遠くに広がる麦畑を、悲しそうな表情で見つめた。

「この麦畑も いつか、燃やされて なくなってしまうかもしれない」

私を見た。でも、ニコツと笑いかけた。

「一体、何のために私達の生活は奪われるのでしょうか……」

私に言葉は浮かんでは来なかった。ミヤーリさんを見つめるばかりで、何も。

「すみません。こんな話……お客様が久しぶりでしたから ついと、頭を下げた。私は慌てて手を伸ばした。

「いえ。そんな！ 頭なんて下げないで下さい……こちらこそ、焼きたてのパンを ごちそうになっちゃって。ありがとうございます。それに、タルナ民族の事も よく わかりましたし。戦争の事も……私、どうしても実感が湧かなくて。でも、ミヤーリさんの気持ち は ようく伝わってきましたから！」

両の手を握りしめて、熱弁をふるった。ミヤーリさんの目の端に、

キラッと光るものが。

「勇氣さん……」

その時だ。

玄関のドアがノックされる音がして、話は中断された。

ミヤーリさんはパタパタと駆け、そちらへ。私は奥まった部屋で、少し身をひそめがちに息さえ気遣った。

チラと玄関の方を隠れ見える範囲で様子を窺っていると……。

突然の訪問者は、さっき村の入り口で会った兵の男だった

《第34話へ続く》

第33話（商人の街）（後書き）

【あとがき】

セナよバイトするな冒険しろと言われたらどないしましょ（汗）

ブログ第33話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-90.html>

ありがとうございました。

第34話（神）

「救世主……？ あの伝説の……？」

ミヤーリさんは玄関で兵の男としゃべっていた。そこで、今の言葉。私は身を乗り出しそうになりながら、ココに居る事が兵にバレないように物陰に隠れて聞く。

「そうです。あの“七神創話伝”に出てくる、ね。そこで、密告があります。あの大陸にやっ来て来たらしいのです」「まあ……」

という2人の会話を、私はギクギクしながら聞いていた。

（密告ですってえ……！？ まあいいや。それより救世主とこの村と何か関係でもあるのかしら？）

私の考えをよそに、2人は話を続ける。

「それはわかりましたけれど。でもそんなに慌てていらっしやって、何か都合が悪いのかしら？」

「ええ。リメイラ教というのは、ご存知ですね」

兵の男の問いに、ミヤーリさんは普通に答えていく。

「はい、知っています。私は教徒ではありませんけれど。でもタルナ民族にはたくさん居るそうですわ。でも、それが何か？」

「リメイラ教というのは、神をたて、信仰する宗教です。そのため、南ラシー又国王はリメイラ教を廃そうとしていました」

少しの間を置いて考え、ミヤーリさんはやがてわかった顔をした。

「絶対王政のこの国では、それが邪魔だ、と……？」

そう声に漏らすと、兵の男は頷いた。

「そうです。この国の神は国王です。ですから、それに従わないリメイラ教は王にとって邪魔な存在なのです」

「何て……」

ミヤーリさんは後の言葉を心の内に しまい込んだ。

「リメイラ教の神は天地創造の神、“七神創話伝”に出てくる、天神。つまり、天神に導かれ降り立つ救世主とは、王の敵という事です。お理解り頂けましたか」

ミヤーリさんは無言で頷く。兵の男は さらに続けて言う。

「国王は気に入らないながらも、弾圧とまでは行きませんでした。ですが、救世主が現れ、しかも この国に来た、という事で。それも言っただけならいなくなりました」

「禁止令を？」

「はい。国中に。他の似たような宗派も、全て徹底的に。ですから、あなたも十分に注意して下さい」

「ええ。わかりましたわ。充分 気をつけます」

「くれぐれも、救世主を見つけたら 我々に すぐ……抵抗するならば、殺しても構いません。それでは」

……。

兵の男は言うだけ言うと、去って行った。

私は その場に へたり込んだ。

無理も ないわよ。

抵抗するならば、殺しても構わない

そんな言葉を間近で聞いてしまったなら。

救世主は この国の敵？

邪魔な存在？ 弾圧ですって？

それが全て本当なら。

私達……

やばい。

宿に帰った頃には、陽は沈みかけていた。部屋に入ると、皆が揃っていた。

「やっと帰ってきたあ。何処 行ったのかと思っちゃったよ、お姉ちゃん！ そろそろ皿洗いの時間だよ」

と、いつも通りに元気なメノウちゃんが はしゃぎながら私に飛びついていた。

横に居たマフィアが私を見るなり驚いた。

「どうしたの？ 顔が真っ青。しかも そんなに息を切らして。何処 行つてたの？」

心配そうに顔を覗く。

そこで、私はミヤーリさんの家で聞いた事を全部 話した。セナやカイトも寄つて来て、私の話を聞いた。すると皆 素っ頓狂というか「えええええっ!？」と声を上げた。場は一気にパニックになり、好き勝手に悲鳴を上げる。

「それ、まずいじゃんか！」

「マジかよ、嘘だろ!？」

「で、でもでも！ 私達 普通の人と変わらないし……」

「若い奴らが固まつて、しかも子供連れで。旅してますって言つて信じてもらえるか？ 調べられた拳句、絶対にバレるね。勇気の持ち物だつて怪しいし」

と、カイトは私を見た。

そんな事 言われたつてえ！

「こつなつたら夜逃げか」

「ダメよ。余計に怪しまれる」

「とりあえず こんなトコ、早く出ようぜ」

と、最後にセナがキリをつけた。

突然の『救世主危機』に、皆も私も顔を青ざめる。

ああ天神様！　どうか私達を護って……！

朝早く。本当に朝早く、出発した。辺りはシンと夜と同じく静かに、佇んでいる。私達はコッソリ、港町を後にした。

昨日　私を通った一本道を歩く。人の行き交いは　ない。

そして、今日中に　この国を出るはずだった　が。そうも　い　かない事になってしまつのだった。

一本道を歩き続けて、2時間足らず。

陽も姿を見せ、朝になった。

村の入り口に近づいた所に、とある親子が居た。

遠かったし草がボウボウに生えていて邪魔をしていたから何をしているのかが　わからない。でも　よく見ると、母親と子供は座り込んでジツとしていて動かなかった。それは何かを必死に、祈っているかのよう。

少し近づいて行くと横並びの親子の前に、一つの像らしきものが置かれている。簡単な石造りのもので、人の形をしていた。

リメイラ教。　神々天神を信仰する宗教。

彼女らが　そうなんだという事は私達　皆に　わかった。

でも　こんな所で……もし兵にでも見つかったら。とんでもない目に遭うんでないか……？

そう思ったからこそ、私は親子に忠告しようとして　もっと近づこうとした。しかし、それをセナが制した。文句を言おうとすると横からマフィアが私の腕を引っ張り込み、草むらに隠れた。私達　全員、隠れている。

訳が　わからないでいると、やがて向こうで声がした。

「おい！　何してる！？」

辺りの静けさを吹き飛ばすかというほどの大きな声だった。私は驚いて目を伏せた。

でも声の対象は私達ではなく、あの親子だったみたいだ。恐る恐る草むらの陰から様子を見ようとして目を開けた、その時、恐ろしい光景が目飛び込んできた。……

ザシュ。

……。

……あの親子が いっぺんに、斬られた……！

倒れる母親と子供。一斬りにされた傷から暴れるように飛び散らす出血の量から見て、即死だろうと思われた。

薄く光る剣をブンと勢いよく振り、腰に据えつけられた柄へとおさめる兵の男。昨日 見たのとは違う。格好も。銀色の堅そうな鎧を纏っていた。そして顔は歪んでいるように見えた。

「ふん、こんな像を作りやがってコソコソと……見張ってて よかつたぜ。忌々しい救世主め！」

そして その歪んだ顔で、立ててあった赤く染まった像を蹴り飛ばした。像はモロく簡単に割れて、ゴロゴロと地面を転がった。血が涙のように流れていた。

私は震えていた……。

目が、その光景に釘付けになって。

マフィアが後ろから肩に手をかけ、支えてくれていた。

混乱する。

「どうして……どうして あの人達が殺されなければ ならないの！？」

親子を斬り殺した兵は何処かへ行ってしまった。私達は草むらからソロソロと出て、血だらけで倒れている その2人をジッと黙って見ていた。

トントンと、セナが肩を叩いて言った。

「……墓、造ってやるうな」

私はセナの方を見て、また親子の方を見た。

呆然と。

そしてガックリとヒザを落とした……「あんまりだ」。

私は呟いて、涙を手で覆い隠した。

殺される……殺される理由なんて ないのに。あなた達が死ぬ事はないのに。

そのセリフが、ずっと巡っていた。

人が死んでいく。

その墓穴を私達が掘る。

弔うために。

…… 一体いくつ掘れば、彼女らは救われる？

「勇気……辛いけど、しっかりして。あなたは今まで、人が死ぬ所を何回も見てきたでしょう……？」

ハツとして、マフィアを見上げた。マフィアは黙って私と死体を見下ろしていた。

そうか……。

私、何度も こんな場面に遭遇したね。

レイが……あの刀で……。

「シヨックなんだよ……レイ以外の人が人を殺すなんてさ……」
と、少し私は笑って立ち上がって涙を拭いた。

何が可笑しい？

そう自分に問いながら。

その場所から少し離れた荒地に、親子の墓を造った。花も何も
ない、ただ そこに あるだけの墓。大きい石を一つ置いて、それ
と わかるように。

私達は手を合わせ、並んだ。そして皆は黙ったまま、場を後に
した。

何とも言えない気まずい空間を遮ったのは、私でもセナでも誰で
も ない。また別の、兵の男だった。

「おい お前ら。見ていたぞ。何者だ。旅行者か」

さっきの兵と同じ、銀の鎧と剣。手を柄に かけ、私達を舐める
ようにジッと見た。すると今度は、また違う兵が2・3人と やっ
て来た。

彼らは集まってボソボソと話し始めた。気のせいかな、私の方をチ
ラチラと見ているようだった。

やがて そのうちの一人が私に向かって言った。

「おい、女。珍しい服を着ているな。何処から来た？」

私の代わりにマフィアが歩み出た。

「西の方から来た、ただの観光の者です。北の方に珍味と呼ばれる
食材が あると聞きました。この子は私の妹。服は西の方では普段
着と なっている物ですわ。彼らも同じ目的で一緒に なりました
の」

と、誤魔化そうとした。

すると別の、隣の男が言った。

「怪しいな。救世主一行の疑いが あるんでね……城まで来てもら
おうか」

城へ連行される私達。嚴重に囲まれた馬車の中で、セナが小声で言った。

「隙みて逃げようぜ」

しかし、私は首を振った。

セナが「何故？」というような顔で私を問い詰めた。

「国王に会いたいの。こんなバカな事、止めさせるために」

私の目は怒りで真剣だった。

セナは何も言わない。

馬車からは外が見えない。だから いつの間にか何処かに連れて来られていた。馬車から降りると命令され、降りて すぐ牢にブチ込まれた。あれよ あれよという間だったので、逃げようと思ったとしても たぶん無理だったと思う。

狭い寒い何も ない、ただの牢。

「さて……どうなるのかな、俺ら」

カイトが第一声。しかし誰も答えなかったので、カイトが一人でしゃべる。

「逃げようと思えばイケるとは思うけど。でも そうしたら“そうです。私が救世主です” って教えてるようなもんだよね。だからと行って このまま何されるか わからないままっていうのは なあ。俺、こういう時間って嫌なんだよねー。例えば、人形買いに来た客がお金を取りに家へ戻ってまた来る、なんて言っつてさ。その客を待ってる、その時間！ アレコレ考える。“やっぱり面倒臭いからやめた”なんて思ったら どうしようとか、実は俺を騙してたんじゃないかとか、人形が もう これきり売れなかったらとか、マフィアの三つ編みは あんな長えなげの編んで嫌に なんねえのかな

とか……思考っていうのは、尽きないわけよ」

誰か聞いているのか聞いていないのか、わからなかった。全くの無反応にカイトはガツクリした。そして また口を開きかけた時、牢の外に誰かが やって来た。

コツコツと響いた音をさせ、鉄格子の前に現れた男。30代くらいで、厳かな騎士の格好をしていた。銀の鎧や武器の上に、黒のマント。剣は2本。装飾をこしらえた、立派な剣だった。

「女を連れて来いとこの命令だ。そのこの2人、来てもらおうか……ん？」

彼はマフィアをジツと見て、顔が赤くなった。

ボツ。

顔に火が ついたようだった。

「サ、サンゴ將軍？」

隣に連れ添っていた兵の男が心配そうに見た。

サンゴ將軍と呼ばれた男……は、後ろを向き、

「好みだ」

と、ブツブツ唸っていた。兵の男が「はあ？」と変な顔をする、ゴホン！ と恭しく咳払いをし、兵の男に指示を出した。

「連れていけ！」

私とマフィアは国王に直接 会わされるらしい。

胸がドキドキする……自分で選んだ事ながら。

上手く言えるだろうか。民族間での争いの事、残された者達の生活の事、そして宗教迫害の事。

絶対王政ですって？ つまりは王の意思には絶対に服従って事ですよ。ココでは王が神であり、神で ある王が一番 偉い。

ふん！ たかが人間が神ですって!？

……天神様は人間なのかしら？ まあ、人間じゃないとして。

とにかく、王が神だなんて事、あるはず ないんだから！
よしつ、燃えてきたぞ！

このまま一気に王と激突なんだからね！

……と、マフィアの方を見る。すると、マフィアは嫌な顔で何処か遠くを見ていた。

「どうしたの、マフィア」

不思議に思つて聞くと、

「ちよつとね……後ろからの視線に寒気が」

と、小声で言つて うなだれた。

チラと後ろを見て、ギョツとした。

サンゴ將軍は すぐくニヤニヤした顔で、でろーんと鼻の下を伸ばしてマフィアの背中を見つめていた。私は何か見ては いけないものを見てしまった気持ちで青ざめた。

彼は こう思つてるに違いない。

（ああ……何て理想にピッタリの人だ。何てバラの花のように美しい人なんだろう！）
と……。

もう少しの辛抱だから、というような気持ちで、ポンとマフィアの肩を叩く私。

ココは西洋風の城なんだ。外観からは見てないんだけど、国王に呼ばれて向かつて行く途中、広い中庭や やけに豪華に彫られた柱や壁、扉、長い廊下を見て そう思った。

私とマフィアは赤い絨毯じゅうたんが敷かれた真っ直ぐの長い長い廊下を歩かされ、やっと国王の居ると思われる所へ着いた。床はピカピカの宝石のようで、窓はステンドグラス。天使や花の模様をして、両壁にある。ココは……王座というより、教会のようだった。マリア像とかは ないけれど。

赤い絨毯が、10段以上は軽くある階段の上にまでスツと続いて

いる。段の最上には、白いレースのカーテンが閉まっっていて、両脇に大きく立派に生けられた花が飾られていた。その花の壺の装飾も花に劣らず豪華絢爛で見事だった。

カーテンとカーテンの間……閉まっているけれど、人影が映っていた。彼が……国王に違いないのでは。

広大なベルト大陸の南半分を治める、南ラシーヌ国王。一体如何なる人物なのか、とても興味が沸く。しかしカーテンが開かれた時……。

私もマフィアも目をいつもより倍以上に見開いて驚いた。

不死鳥みたいなものが乗っている金色の王冠。自身も金や銀、赤といった色とりどりにこれまた不死鳥か何かそれらしきものを刺繍されたものを『着させ』られているかのように思える衣装を……。

周りに引けを取らずに自身も豪華な……小さな体。

子供……だった。

ほんの、7・8歳かそこらの……。

しかし体は子供でも、顔つきは大人らしく見える。キリツと整えられた眉、鋭く吊り上がった目つき。クスリとも笑いそうにない口元。レイでもそのまま子供にしたんじやないかと言えば、わかりやすいかも。堂々とし、落ち着き、私達を見下ろすというよりは見下すといった感じを受けさせる。

「どうした。相手が子供で、拍子抜けか」

端正な眉をピクリとも動かさず、私達にそう言った。声柄は子供だが、それが逆に怖い印象を与える。

「ふん。まあいい。救世主はどいつだ？」

この子、いや、王は、私とマフィアを交互に見た。

「私です」

と、私が名乗り出ると王は「ほう」と返す。

「お前か。では、証拠を見せよ」

「へっ!?!? 証拠!?!?」

急に証拠を見せると言われ、たじろぐ。予想もしていない事だった。

必死に考えた。

救世主で ある証拠……。

そんなもの、ない。

私が困って難しい顔を延々としてしていると、王は待っていられずか、無感情に言い放つ。

「何だ、ないのか。ならば用は ない。斬り捨てる」

王の言葉を聞き、階段下の壁際の方で控えていた兵達が2・3人、即座に動き出す。私だけを狙うように腰の剣を抜きながら歩み寄って来た。様子を見て慌てて私の前へと飛び出し庇う、マフィア……。マフィアは庇う体勢をとりながら、王に聞こえるように大きく叫んだ。

「この子は本物の救世主です！ 天神様から召喚され、私や牢に居る者で残りの七神を捜す旅をしているのです！」

マフィアの決死の叫びは ちよつとでも通じたのだろうか。王は反応してくれた。

「ほう、七神か」

マフィアは それに少しホツと安堵して、礼儀正しく お辞儀した。

私も つられて、真似た お辞儀をする。

「はい。私は七神の一人、木神。マフィア「レイク」オクトーヴァと申します。こちらが救世主、松波勇氣です。付き添い、旅をしております」

国王は その態度を見て、少し考えた後に結論に達した。

「ふん……あながち嘘でも ないようだな。まあいい……お前が救世主か。ユウキと言ったな」

名前を呼ばれて、「はい！」と返事する私。

「お前が救世主なら、一つ頼みがある」

「……」

返事をするタイミングを失った。頭の中、少し混乱気味に。

国王が私に頼み事？

一体 何？

もしや いい事かしら……？

なんて、淡い期待を抱いていた。

私の やや斜め後ろにスツと静かに人が立った。マフィアは気がついて まず その人を見上げる。私が数秒ほど遅れて振り向こうとした時に。

自分の首筋に冷たく硬い物が……触れた。

それが よく磨き上げられた剣だと理解するまで、また数十秒。

剣で私の首を狙っているのがサンゴ將軍だと理解するまで、さらに また数十秒と。

私と視線が合うと、ニヤリと楽しげな口元が変わっていった。

訳が わからない……。

これは何のパフォーマンス？ ふざけているの？ という麻痺した妙な感覚か余裕さで、もう一度 王座に座っている国王を見た。目は ちつとも笑っていない。

賤民でも相手しているかみたいに、完全に高みから見下している。

私は あの眼を知っているわ。

「国民の前で死ね」

言った。

王の言葉。

大きな声では なかったはずなのに、空間を支配し弾圧さを秘め

た抑揚のない声が屋内の隅々にまで響き渡った。

首元に置かれた剣。

全く身動きできない私とマフィア。

ただ命令するだけの国王。

……これは夢？ 夢なの？ 夢なら早く覚めて欲しい……。

そう、全てが夢なら。

あの親子も救われる。

私は救世主で なくなる。

でも、この剣の冷たさは、そうはさせては くれなйдらう。

あの、人を嘲り、射抜くような視線。

海も山も空も凍りつくような厳かな視線。

私は あの眼を知っている。

《第35話へ続く》

第34話(神)(後書き)

【あとがき】

救世主である証拠。何だろう。

まな板でも調べてもらったらどうだ？ と。ちょっと思ったりしましたが……(何となく思ったただけ)。

ブログ第34話(挿絵入り)

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-93.html>

ありがとうございました。

第35話（光頭刃の威力）

「死ね……ですって!？」

私の隣でヒザをついて、しゃがんでいたマフィアの声でハッと我に返った。マフィアは目前の人物を睨みつける。

赤い絨毯じゅうたんの先、階段上で、立派そうな大椅子に、どっかりと、その小さな体を包み込ませるように座す、国王と呼ばれる人物。

派手な装飾をこしらえた王冠。不死鳥を連想させるような服装。賢く、歪みのない整った顔立ち。

子供らしくない子供。

そばには大げさなくらい大きな白いファーが付いた扇を持った女の人が数人。国王に扇いでいる。慎ましく、国王の機嫌を窺いながら、こちらにも時々目を向けている。

国王の家来も、屋内をグルリと取り囲むように。姿勢よく背を伸ばし、私達の様子を真剣に見ていた。

兵でも將軍階級の、サンゴという男。彼は自分の腰の剣を抜き私の首元を狙って静止していた。そしてピクリとも動けず冷や汗を流している私の顔を面白そうに見ていた。

声も出せない。

だから、マフィアが買って出てくれた。

「……冗談でしょう？ 本気ですか」

すぐに国王が答えた。

「当たり前だ。大勢の前で私に殺されるがいい。そうすれば国民の目も覚める」

サンゴ將軍は剣をひいた。

しばらくぶりに解放された私は少し安堵した。

「何が救世主だ、神だ。神は私一人なのだ。その事をわからせる必

要があるのだ。よって、お前は私と民の前で首を晒せ^{さら}」

国王の言葉は私を奮い立たせた。

何て身勝手な言葉……！

こんな、こんな子供が！

私は頭にカツときて、階段下へ走り出た。「！」

「わかるもんか！」

階段 最上に座す国王を見上げ激しく睨んだ。国王は表情を微動だにしなかったが、私の態度には反応した。

「何だと？」

「確かに神は私じゃない。でも、あなたでも、ないわ！」

国王を通り越して、背後にはあの無残にも斬られてしまった親子の幻影が見えた。必死にすぎるように祈る母子の姿を。

彼らにも普通の生活があったろう。穏やかなタルナ民族……植物や作物を育て、額に汗し、一生懸命に働く。子供がお腹をすかせて家に走って帰って来る。遊びの疲れを振り切って。お母さんただいま、あのね……

……ただ、神を信じただけで。

どうしてあの人達があんな目に遭わなければならぬの。

怒りが頂点に近づく。激しい憎悪の両の目が、国王に向けられる。すると痺れをきらしたように、兵の一人が私に剣でかかって来た。「国王に向かって何という無礼か！」……剣が私を捕らえる所だった。

「うるさいッ！」

ビュオオオオオッ！ ……

「うわあっ！」

その兵士は、突然の豪風に吹っ飛んでいった。柱に強く吸いつけられたようにブチ当たる。

この風は……私から発せられた風は、私が着けている指輪の……。セナからもらった指輪の力。私を護る風の壁が、唸りを上げたんだ。私を中心に渦巻いて。

周囲の兵も下女も、大臣か臣下も、マフィアさえ。その迫力に圧倒されてしまつて。どよめき立った。

私は国王の座す目前にまで、階段を上り終え歩み寄り、再び同じ事を繰り返した。

「私は神じゃない」

国王は今度は何にも反応せず、風の影響を受け装飾や髪が乱れなびきながらも私を正面から黙つて見据えていた。

私は下口唇を噛み締めながら泣きそうな悲鳴めいた声で訴えかけた。

「でも あなたも違う……それが わからないの！」

風は いっそう強く私を。国王の周りに飾られていた鳥の羽や花びらが千切れ散り乱れる。国王は風圧に打たれても、ビクともしなかった。

私の体が固まる。悲しさが流れて私の身を縛つて、動けなくなる。感情は動かないのか、国王というものは……そんな残念な事を思った。

私が突っ立つて痺れた頭で思考だけを頑張つてアレコレと巡らせていると。国王は おもむろに椅子と自分との間に隠し持っていた長い刃身の刀をスルリと取り出した。私の前へと披露する。

「？」

柄の柄は龍が彫られているように見えた。赤い毛の束で鞘がくくられ、刀というよりは剣だった。変な事に、国王よりも感情的な質が備わっているように感じさせる存在で、普通の物ではない、と私にも わかる。その魅力に虜とまでは行かなくとも、みとれて目

が それに一心に向いてしまった。

国王が鞘から音と気配なく剣を抜き出し一時の間を置いた後。

スパツと……風の音に紛れて躊躇ちゅうちゅうする事なく私を斬りつけた。

(えっ)

油断。

まさに それだ。

油断していた。私を取り巻く風のバリアーは完全に私を護ってくれるのだと。

「……」

しかし。剣はアツサリと、バリアーごと平気で私を乾いた音で斬ってしまったのだった。

「勇気！」

突然の事に私の今まで湧き上がっていた怒りや悲しさが何処かへと消え失せてしまった。と同時に足の力までも抜けてしまい、フラリと体が言う事を利かなくなって倒れた。倒れたと思ったら今度はゆっくりと、10段以上もある階段からゴロ、ゴロと転がり落ちていった。

「勇気イイツ！」

さらに張り上げたのは、マフィアの声だと思った。バタバタと激しい音が床の振動と一緒に揺れる……私に近づいて来た。

私が恐らく中段上辺りで転がりを停止すると、誰かが マフィアだろう が そばで何度も私の名を呼んでいた。

斬られたと思った瞬間から両目は閉じ、続く倒れた衝撃に身を全て任せていたけれど。気だけは確かなようで、ああ私は階段の上から転がり落ちたんだと自覚していた。目を開けると、どうやら仰向けで、頭は少し打ったかも しれない。痛みは なくて、見える天井の豪華さにポカンとしていた。

「へええ。初耳。ハルカに報告しなきゃ」

ドガツ。

後ろから不意打ちをくらい、国王は前へ倒れた。どよめきと叫びの中、突然に現れた来客に視線は集中する。「！」

「お久しぶり、救世主。あれ？ 風神や水神は一緒じゃあないんだ」
辺りをキョロキョロと見回す。私の所へ目を止め、いつものようにニヤニヤ笑い。黒ずくめ全身タイツの奇妙な格好。毎度おなじみ四師衆の一人、業師の鷓ひたき。

「ひ、鷓……」

「何でココに……」
いきなりの登場に びっくりだ。なのに当人は気にせず、ひょうひょうとしている。

後ろから（何と！）どうやら蹴りをくらったらしい国王は身を起こし、パンパン、と服に付いたホコリを払い落とした。すっかり出遅れた家臣や家来が騒がしく急いで段上を駆け上がって来た。兵がズラリと私達や鷓を取り囲む。

「素敵な出迎え ご苦労。あれ、やだな。怖い顔しちゃって。何、僕とやるうってんの？」

見渡して、余裕をぶっこく。

（あ、あなたねえ……こんな大勢の兵とココで やるつもり！？）

鷓は自分の胸前に手を出した。するとフツ……と、その手に刀が出現し、握られた。

見慣れていた物だった。散々、目に焼きついている刀だ。邪尾刀

鋭く黒光りする刀身。巻かれた布。レイが これで何十人もの人々を襲ったんだ。レイが居ない今、預かっているという事か。

「先に言っとこ。この刀、斬れ味 良すぎるから、手加減してもダメなんだ。レイは、この刀で斬れないものは この世に存在しないなんて言ってたっけ。さぞかし人間の肉も よく斬れるんだろっねえ」

刀身を前に、薄目で兵を見た。“さあ、かかってきな”……光の無い漆黒の瞳が そう言っているのだ。

やがて、剣を構えた兵の一人が飛び出した。

気合いの声と共に、兵の長剣が鷓を狙って振り上げられた。

「ダメえーッ！」

私の声の方が遅かった。止めようとした時は もうすでに、兵は長剣ごと邪尾刀で体を……頭上から斬られた！「……！」

兜なんて関係なかった。身を護るための防具なんて全く役に立たなかったのだ。この刀の前では……。

一呼吸 置いて、「ひいひい！」「わああっ！」と悲鳴が あちこちで上がる。噴水のように血が飛沫せきを上げて絨毯じゅうたんの赤を もっと新鮮な赤で染めた。

だが、次の兵が鷓に飛びかかると、今度は つられて いっせいに兵達も斬りかかっていった。そうしてココは あっという間に戦場へと化する。

ワアアアアア……ッ！

渾身の声が城内に響き渡った。空気の震えを感じるほどの騒ぎに身が強張り動けなくなった。

「勇氣！ こっちへ！」

そんな縮こまった私の腕を掴んで引っ張って行ってくれたマフィア。頭や体が鎧を着た兵達に ぶつかって、すごい轟音と喧騒の中で、訳が わからなくなりそうになる。私達が去り行く後ろでは、

鵜が邪尾刀を存分に振り回しているようだ。カキン、とかいう武器同士がぶつかり合う音は あまり聞こえてこない。あの刀は本当によく斬れるのだ。普通の刀や剣じゃ相手にも ならない。きつと鵜やレイが本気で斬れば この城ごと斬る事も可能なんじゃないだろうか。

兵の集団が押し寄せる波に逆らって進む。私とマフィアは できるだけ巻き込まれないよう、遠く離れようとした。

すると急にマフィアが立ち止まった。手を引かれていた私は止まらず勢いよくマフィアの背中に ぶつかる。ぶつけた鼻を押さえて前を見ると、ある人物が私達の進行を妨げていた。

「蛍……」

マフィアの茫然自失とした声。私も同じだった。

私達の後ろでは何十か何百かは わからない兵と鵜が戦っているはずだ。その戦場の光景と音はテレビや映画で観たものと変わらない。そっくり同じだった。人々の波、空気の波、音の波。

だが。一瞬にして後ろにあるはずの それは消えてしまったかのように思えた。今、この空間が 存在が蛍と私達だけに思えた。

沈黙が、空気が、私達の本来の時間を止め、別の空間へと誘い支配している。

「死になさい。救世主」

やけに響く蛍の声。

「蛍……無事だったのね……」

蛍の言っている言葉の内容は最初 頭に入っては来なかった。

私が蛍の前に出ようとするとマフィアが制した。マフィアの顔を見上げると怖い顔をしていた。

「以前の あの子と違うわ」

私に言い聞かせる。マフィアの真剣な表情を見て、もう一度 蛍の方を。そうしたら蛍の背後にスツと、『影』が現れた。

人の形で、段々と色が ついてクッキリと輪郭を表したのは紫だった。手に、一本の刀を持って。

「あ……？」

私もマフィアも目を疑った。

紫の持っている その刀は、さっき鵜が持っていた物と同じ。刃こぼれもサビもない、斬れ味 抜群そうなの。その刀……。

不気味に光る刀身、まさしく邪尾刀そのもの。

「どうして…… 2本も あるのよ!？」

振り返って鵜を見た。兵が大勢 倒れている……!

ココからは若干 遠いが、鵜の手には確かに紫が持っている物と同じ物が握られている。

もし どちらかが偽物だと言うのなら、たぶん紫の持っている方だろうか。鵜の持っている刀は幾多の兵を なおも簡単に倒しているから。その斬れ味は、まさしく“本物”の邪尾刀に間違いない。

私は腰に着けていたナイフを、マフィアは腰を据え、お互いに戦闘のポーズをとった。

一応そうやって構えた姿勢をとったものの、全然 戦うつもりなんかなかった。だから しきりに話しかけた。

「無事で よかった。突然消えたから、すごく心配してたの。たぶんハルカさんの所に居るんだろうと思ってたわ……でも。それは蛍、あなたの意思なの？ 今ココで私達と戦うつもり?」「レイは……生きているわよね。レイの意思? それともハルカさんの? それとも独断?」「私、蛍達とは戦いたくないわ」……

蛍は ずっと黙って聞いていた。私が休みなく続けて言ったものだから、返事をする隙が なかったかもしれないけれど。

私は一度は構えたナイフを持った手を引つ込めた。マファイアも心なしか、体勢を緩ませる。戦う意思がこちらにはないんだという事をアピールしたかった。

「レイ様は眠っておられるわ……ずっと、ね……原因は不明だけど。それに、炎神の命令でココに来たわけじゃない。私の意思よ。それに、私達が あんた達の元を去ったのも自分で決めた事よ」

蛭は答えてくれた。

紫が、ぶらさげていた刀を横に持つて構えた。刀に私の顔が鮮明に映し出されていた。

「あんたら、勘違いしてんじゃないかしら？」
と、蛭がクスリと笑う。小バカにした顔は久々に見た。

すると、笑いが どんどんと膨らんできて屈み込むような姿勢で手で口を押さえながらクツクツクツと声に漏らし肩を動かせる。しまいには「アハハハハ！」と高らかに大笑いした。空を向いて笑った後、視線を再び私達へ戻す。

涙を指で こすり払い、歪んだ口元を変えず一歩 後退した。

「鷓の持つている方は邪尾刀モデル。この刀を複製したの。私の力でね」

と、腕を組んでアゴで紫の手元をさした。

「忘れてやしないかしら？ 私は四師衆の一人、幻遊師・蛭。物に魂を吹き込む力があるって事。詳しく説明すると、頭の中に描いたものを具現化したり操ったりするのよね。あんたらには少し難しかったかしら？ キャハハあんたら、私が敵だって事 忘れてたでしょ？ すっかり」

キャピキャピ笑いながら数歩 後退。紫の背後へ回った。

私には信じられなかった。

邪尾刀と、その複製刀……偽物のくせに、斬れ味は本物と同等じゃないか。邪尾刀が2本に なったという事と同じだ。しかも、そ

れに今の口ぶりから察するに私達と一緒に居たのは油断させたり情を持たせたりするためだつて事？

邪尾刀が2本になったのは事実だけれど、蛭が本当にレイやハルカさんに屈しているとは到底 思えない。私達と一緒に居た時間が嘘だつたなんて信じられない。信じたくないのかもしれない。

私達が固まっていると、後ろから向かつて来る兵を全て薙ぎ倒した鷓が呼びかけた。

「はい。試験 終わり」

と、息乱れる事なく刀をブンブンと振り回した後。ドツカリと肩に担いだ。足元にはホコリが立ち込めていたが、やがて地面に落ち着いていった。

床では数十人の兵士が呻き声を上げながら横たわり、中央に鷓が立っていた。

残った兵士は戦意を喪失し、腰を抜かしたり震えていたり、下女の人達と逃げたりしていた。ワーとかキヤーとかいう声が あちこちに飛び交った。

でも鷓には もうそれらは どうでも よいらしく、興味を示さなかった。向かつて来る者だけを斬ったようだ。逃げ惑つたりする人達は完全に無視していた。

「OKみたい。この、邪尾刀2」

と、刀を上に掲げた。刃先がキラリと光った。

「当然よ」

と、鷓の言葉にフンと鼻で笑い答えた蛭。

つまりは……ココへ来たのは、その複製刀の試し斬り……つて事なの？

「なるほど。試し斬りにココへ来たわけだ。わざわざ私達に見せるために？」

マフィアも同じ事を考えていた。

ニッコリと笑って蛭は「そうよ」と ぶりっ子っぽく答えた。
「信じないわ」

突然、キツパリと言い切ったマフィア。「何が？」というような目でマフィアを見た蚩。

「私達が あの時に船上で深海魚と戦っている隙に、炎神の……ハルカとかいう女に呼ばれたんでしよう？ 絶対、あなたの意思で私達の元を去ったんじゃないわ」

真っ直ぐにマフィアは蚩を見つめた。少し驚いたように蚩の表情が一瞬 強張った。

「だってほら。手が震えてる」

言われて、慌てて両手を隠した蚩。少し、足も震えていた。マフィアの言葉で、私は初めて それに気がついた。

「……我慢しないで。帰って来て。わかってるでしょ？ ハルカに利用されてるだけって事は！」

悲しそうな顔でマフィアは呼びかけた。

「帰って来て！ 今すぐにでも！ 蚩！」

私も必死に呼んだ。

でも蚩は顔を背けて私達の呼びかけを否定した。

「うるさい！」

と。

「私の君主はレイ様よ！ レイ様が絶対、レイ様が全て！ レイ様の意思が私の意思！ レイ様が望む事は、私が命を懸けて叶えるのよ！ 四神鏡 探し……あんだ達を殺す事もね！」

そして後ろから押すように、紫に声をかけた。

「行きなさい、紫！ 目障りな奴らを始末してしまっ！」

音も無く、紫は刀の先を私達に向けた。

そしてサツと素早く動き、マフィアを襲う。マフィアは避けるついでに、横に居た私を突き飛ばした。おかげで私も攻撃を避ける事ができたが鈍かった私は転んでしまう（ひえーん）。

マフィアは次の紫の攻撃を避けようと後退した所、鵜が攻撃してきた。

ザクツとした音が響く。

「マフィア！」

私は急いで立ち上がって駆け寄ろうとした。すると よろけたマフィアが斬られた左腕を押さえて「来ないで！」と叫んだ。

かろうじて さっきの鵜の攻撃をかわしたマフィアだったが、今度は紫からの攻撃。

「……くっ……」

高くジャンプして私の数メートル先に着地した。左腕からはドクドクと血流。かわしきれなかった攻撃でケガを負ったのだ。

「大丈夫。私が あなたを護る」

「マ……」

私からは擦れた声しか出なかった。

私の居る位置からではマフィアの表情が わからない。

マフィアは言った後、2人の敵へと向かって行った。「マフィア

あ！」

届かない私の手。伸ばしても届かない手……！

悔しい。もし この手が届いて、マフィアを止められたら！

ダメ、ダメだよ、マフィア！

このままじゃ。

このままじゃ、殺されてしまう！

「セナ、カイト、天神様っ……」

誰か。

誰でもいいの、お願い！

マフィアを助けて……！

……。

……。

私の叫びは届いたようだ。

突風が吹き荒れた。ある一定方向からの風の圧力を受けた鷓と紫はひるみ、数歩退く。

「2対1なんて卑怯じゃねえの？」

と……風の壁の向こう側から声がした。

セナ。

「女相手に男が2人だなんて。最悪！」

隣に居たのは、カイト。

2人とも、頼もしい正義のヒーローか何かに見えた。

「セナ！ カイト！」

「私は歓喜の声を上げる。

「間に合ってよかった」

何と。

セナとカイトの背後から別の声が……それはサンゴ將軍と国王だった！

ひよつとして あの混乱に紛れて、セナとカイトを呼びに行ったんじゃない？ だとしたら かなりの機転だ！

私は感謝の気持ちで いっぱいに なって目が潤んできてさえた。

ありがとう、国王、サンゴ將軍！ これで こっちの不利じゃなくなかった。

「お疲れ。とりあえず手当てしてこいよ。こっちは お任せ」

と、カイトがマフィアに近寄って頭を叩いてあげながら、そのまま鷓達の前に歩み出た。セナも後に続く。

マフィアは叩かれた頭を軽く押さえながらコクンと頷き、私の所

へと小走りで駆けて来た。国王とサンゴ將軍も私の所で落ち着いて、皆で成り行きを見守る事になった。

「奴らとは知り合いのようだな。聞いた事がある。四神が、蘇りつつある方向にあると」

と、国王の話しかける横でサンゴ將軍は自分の着ている服の片方の袖を破り、マフィアのケガしている箇所箇所に巻きつけ止血してくれていた。「ありがとう」とマフィアが言うと、「いやあ そんな」とまたデレっとして頭を掻いた。

そんな2人を横目で見つっ、私達は話す。

「噂通りです。奴ら……の背後にはレイといって、七神のうちの一人でもあり、青龍復活を企てている奴が居るの……」

自分で言っていて、悲しくなってきた。でも続けた。

「レイは あの2人が持っている刀……邪尾刀で、罪の無い人達を斬って……青龍復活のために必要である“四神鏡” 体内にあると言われている鏡 を探しているの」

私が簡単に説明する。国王は“邪尾刀”という言葉に反応した。

「邪尾刀”……あれが」

言いながら、鵜や紫の手元を見た。向こうではセナ達が攻防を続けていた。

かまいたち

「鎌融”！」

ささなみ

「小波”！」

彼らの おなじみの技が繰り出され、鵜も紫も手こずっているようだ。風や水の刃と化したような攻撃の散布を刀で受け止めながらも悪戦苦闘していた。

セナの出した風が渦巻く。

カイトの出した大量の水が広がって相手を飲み込んで行くこととする。

「くっ……」

牙のように鋭い風の先で何度も攻められ、鵜の黒いタイトな服はボロボロに なってきた。

おお……ひよつとして優勢か!?

私の お腹の底に気合いが入る。コブシに力が加わった。すると私の横で国王が ぼやきを。

「愚かな奴らだ……せつかくの刀が泣いているぞ」

そんな意味深な事を言った。

「え？」

私が国王の方へと目を離した隙に、紫がカイトの攻撃を避けセナに斬りかかった。

「ちっ！」

セナは すんでで一步後退した。そしたらば。

気をとられた時に、風圧から逃れた鷓が宙を飛び私達の方へとやって来たではないか。

「！」

「待て！」

奥、遠くで紫の相手をしているセナとカイトの声。だが鷓は素早かった。

こつちに突進して来るまま、国王を刀で狙う！

しかあーし！

「私が相手だあ！」

と、サンゴ將軍が国王の御前に出て立ちはだかり、剣を構え鷓を攻撃した。だが やはり邪尾刀の前では歯が立たない。剣ごとスパツと斬られてしまい、ザシュ！ とサンゴ將軍の額に血の筋が通った。「うわあっ！」

後ろに倒れ込んでしまった。

「国王、恨みは ないけど調べさせてもらうよ。四神鏡が体内にあるのかどうかをね」

鷓はニタリと笑う。私とマフィア、それから国王も鷓を睨んだ。

「……っざけんじゃないわよー！」

マフィアが背中に隠し持っていたムチで鷓に攻撃した。鷓はフワリと風に舞うように難なくかわし、せっかくのムチは空回りしてしまった。

「！」

刀ばかりに気をとられ、マフィアは鷓の足払いには気がつかなかった。完全に足に引っかけかり、前のめりに倒れてしまった。

「マフィア、危ない！」

鷓がマフィアに襲いかかろうとしていたのを見て咄嗟に私は叫んだ。驚き顔のマフィアに、鷓の構えた刀が振り下ろされようとしていた。

「邪魔者は失せなよ！」

「マフィアああ！」

私が駆け出す。鷓が刀を振り下ろす！

間に合わない！

「死ね！ 木神！」

「ダメえええええ！」

……………ッ！

ガキイイイインッ！

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ああ？」

沈黙を破る鷓の声。

無敵の刀・邪尾刀が思い切り振り下ろされた、その時。

この刀を、受け止めた者が居た。

いや、受け止めた『物』と言うべきかもしれない。

その『物』とは……神剣、“光頭刃”。

そしてマフィアを庇い、頭の中に残響音が まだするほどの金属音をさせて最強の邪尾刀を受けた剣を持つ者とは……

……国王。

さつき兵士達が束になっても敵わなかった、この刀を。その小さな体で受け止めたのだ！

邪尾刀 対 光頭刃。

ギリギリと……お互いに交えた武器は、両者一步も退かなかった。しばらく睨み合っていたかと思ったら、鷓の方が先にバツと勢いをつけて後ろへと下がった。

「神剣……“光頭刃”を、知っているか？」

剣の鋭く光る向こうで、鷓を威圧するかのように見る国王の凜々しい顔が そこに あった。

鷓は声も出なくて、ただ黙って見ている。

「話には聞いていた。この世に邪鬼により造られし魔刀“邪尾刀”が存在し古来より悪に仕えていたとな。2本もあるのは どういうわけか知らんが、所詮 一方は紛^{まが}い物。この剣には敵うはずもない」

国王が そう言った途端、鷓の手の邪尾刀2はポキン、と刃が折れ、下に落ちた。真つ二つになった邪尾刀2。やがてポロポロと砂に形を変え、風に さらわれて なくなっていた。……

「ふ……これで お前に勝ち目は ないな。何なら、試し斬りしてみようか。言っておくが、私は手加減が苦手だ。この剣は邪尾刀さえ凌ぐと言われている。地上や天界で、斬れぬものなど ない」

さすがの鷓も形勢不利だと思ったのか、少し焦っていた。無理も

ない。刀を失ってしまったし、こっちは謎の剣がある。

「覚えてなよね」

悔しそうな顔をして、フツと姿を消した。

途端、はあああ……と私は全身の力が抜けて座り込んだ。だがすぐマフィアの声でハツとした。

「勇気、まだ！ セナ達が！」

「あ……そうそう！」

セナ達の事なんてすっかり忘れていた。見ると、セナとカイト対 紫 の戦いは今もなお続いていた。

「セナ！ こっちは済んだわ！」

私とマフィアがセナ達に駆け寄る。紫は蛭の元へと後退した。

「蛭！ 帰って来て！」

私が そう言っても、蛭は何も言わなかった。

「蛭！」

もう一度呼んだ。でも答えてはくれなかった。

「引き上げるわよ。邪尾刀の造り直しね」

それだけを言い残して2人とも姿が薄くなって……消えた。

《第36話へ続く》

第35話（光頭刃の威力）（後書き）

【あとがき】

作者クイズ↓

マフィアのお相手さんはダ〜レだ？ とか言ってみる……。

誰にしよう（オイ）。

正解は最終回。

ブログ第35話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-94.html>

ありがとうございました。

第36話（繋がり・壱）

「私の体の中に四神鏡が存在するって、一体どういう事なの？」

戦いの後。私とマフィアは、さっき鶉達に邪魔されてしまって聞けなかった事をもう一度 聞き直した。

鶉に全滅させられた兵士達を、逃げていた家臣や下女達が戻ってきて別の場所へ運んだりケガの手当てをしたりしている。セナとカイトも手を貸して頑張っていた。私も最初 手伝っていたんだけど、先にマフィアと謎の剣“光頭刃”に ついて国王に聞いてみる事にした。

「見る、兵士達を。皆、負傷しているだろう？」

国王は、城内のあちこちで呻いている兵士達を見て指さして言った。

「皆、すごい斬り傷。さすが偽物とはいえ、“邪尾刀”よね」

と私が言うと、そばに居たマフィアもウン、と同意した。

「兵士達は普通の人間だから ああして大ケガを負ったのだ」

国王の表情は表立っては変わらないように見えたが、その目は少し悲しげに私には見えた。気のせいかもしれないけれど。

「……………」

私の頭上にクエスチョン・マークが浮かぶ。普通の人間だから？

…………… 普通の？

「さっぱり訳が わからないわ。ちゃんと教えて下さい」

マフィアに頼まれて、国王は坦々と語り出していった。……………

「『四神獣も一つずつ鏡を持つ。其の鏡 自らで水に溶け 風にさらされ土に腐り火で燃えたり。つまりは人間の体内に侵入し元の形を築き始め一枚の鏡となる。よって四枚の鏡 存在す。四枚で力

は最大と なりて四神獣の体を復活させる力と成りたり。なほ、其の鏡を所有する者の体 寿命 尽きるまで死することなく永遠の力 手に入れたるが鏡 失えば即死す』

“七神創話伝”の中の一部だ。父上が よく私に言い聞かせた。この世には、自分の体の中に鏡を持つ人間が4人居る、と。4人それぞれが持つ その鏡は、四神鏡。かつて、四神獣が所有していた力の鏡。四神獣は封印され、鏡は何処かへ行ってしまった。だが、鏡は まるで生きているかのように、なくなりしなかった。伝説のように自然の中で生き抜き、人間の中へ潜り込んだ。そうして自分の住み家と したんだ”

“七神創話伝”！

メモしなきゃ、と思ったけれど手元に持ち物が ないので今はいいや。後で忘れずにメモしておかなくちゃ！

「鏡が意志を持っているかのように、人間の中へ！？ それが……それが四神鏡！」

私は国王の言葉を頭の中で整理する。国王は目を伏せ、続けた。「そうだ。世界に4人居るのだ。彼らは、人間の体しびんに寿命が来るまで、その四神鏡に護られ、大ケガだろうと たちどころに治してしまふという」

「体内に鏡が ある限り、死なないって事ね……」

マフィアが そう言った時。私は ある事を思い出した。

キースの街。思い出すのもツライ惨状。

レイに襲われた街。

その街へ行く途中に出会ったりカルという女の子の双子の妹、ミクちゃんっていったっけ。ミクちゃんが殺された時……その時の状況を全て見ていた人が居て、変な事を言っていた。

『ミクは、一回 斬られて重傷を負ったはずだが、まるで生き返ったみたいだった』と。

それから、『何か白い物を取り出した』とも。

後で その白い物が四神鏡の一枚だったって わかったんだ。その時は、ついに四神鏡がレイの手に渡ってしまったってショックで、深く考えたりしなかった。

そうか……。

そういう事だったんだね……。

「次に、邪尾刀だが」

国王は私達が一つずつ納得して聞き入っているのを確かめながら、続けた。

「邪尾刀は魔の刀。あれで斬られると普通の傷より完治が遅い。あの刀で斬れないものはないと言われているが、それほどはある斬れ味だという事だ。だが、その邪尾刀の力をもつてしても、傷をすぐに治してしまう者が居る」

それは、すぐにピンときた。

「四神鏡の所有者ね」

マフィアが先に答える。「そうだ」と国王は、さらに付け加えた。「たとえば心臓を一突きに、されようと、10分以内には復活できるだろう」

だから、だからミクちゃんは生き返ったんだ。四神鏡を体内に持っていたから。レイは、すぐに生き返ったミクちゃんを見て確信したんだ。四神鏡を持つ者だ、と。

全てを斬る邪尾刀。その力さえも、はね飛ばしてしまう四神鏡の力。

「すごい力なのね……」

私は改めて感心してしまった。

「あ、でも。レイは人を襲う時、必ず邪尾刀一本で戦ってたよね？」

と、私はパツと思ひ浮かんだ事を口にした。

「それが？」

「それは どうして？ だつてさ。四神鏡を持つ者は、どんな大傷も すぐに治せるんでしょ？ だつたら体内に鏡が あるかどうか 普通の刀や攻撃で確かめてみたらいいじゃない？ そんな時間をいっぱい かけてさ。わざわざ邪尾刀一本で探すなんて。何か理由があるのかなあ？」

言いながら、何でだろう？ と首を傾げる。それはマフィアも同じで、隣で一緒に悩み出した。

「うーん……そういえば そうね……邪尾刀一本に こだわる理由 って……」

腕を組みつつ考えたが、やはり わからなかった。

国王も しばらく、負傷して運ばれている兵士達を目で追いながら考えていたみたいだけれども、ボソリと発言する。

「こちらに、そう思わせるため」

私とマフィアは え、と国王の横顔を見つめた。「どついう事ですか？」

「我々に、その者……レイとやらが、邪尾刀で なければ街や人を襲えないとも思わせておけば、何か都合が いいのではないのか と思つてな。例えば……」

ドキリと……そしてドクンドクンと、自分の心臓の音が大きく聞こえた気がした。

「その者は……お前達を待つてるんじゃないのか。時間をかけて……いたぶるように……とか」

「……」

心理作戦。私達を誘つように先回りを。そういえば前に私は誘われるようにレイの所へ のり込んだんだった。

私達が苦しむように……か。

「もしくは、傷の度合いを均一にするため、とかな」

もう一度、国王の顔を見る。目が合ったが、私はハテ？ と目で聞いた。

「ただの憶測だが。恐らく、そのレイとやらは、人間 皆 同じような深さと大きさの傷をつけていたのではないか。常に同じ武器を。それも強力な物を使う事で、鏡の有無を極端にしてみせたのだろう」
極端に？

「そっかー……。いつも違う武器を使っていたら、つける傷具合も毎度 違ってくるわけで。ひよっとしたら浅くなったりして、見分けが つきづらくなってしまふのかもね」
と、マフィアは国王の説明に納得を示したんだけど。私にはさっぱりと わからなかった。なので もう一度 聞いてみる。

「つまりね。ココにリンゴが数十個あるとします。それと、ナイフも違う斬れ味の物が何本か あります。リンゴに一本一本、ナイフを突き刺していくわけだけど。勇氣は、その突き刺した何十個かのリンゴを並べて見て、どれが一番 固いリンゴか、わかるかしらね？」

マフィアが投げかけた質問に私は考え込む。

「ええ？ わかんないよ。だって、一番 固いリンゴを一番よく斬れるナイフで斬ると、一番 柔らかいリンゴを全然 斬れないナイフで斬るとって同じ手応えになるんじゃない、ひよっとして。

どれが一番 固いリンゴかなんて聞かれても……答えようがないよ」
私の頭の中にはリンゴが いっぱい。混乱しそお。

「じゃあ、数十個のリンゴに一本のナイフじゃどう？ 勇氣」
頭を抱えている私にマフィアは少し微笑みながら。私は「うーんと……」と また悩む。

「そりゃあ…… 斬れ味は一緒なわけだから。どれが固いか わかる……そっか。なるほどー！」

「そっよ」

マフィアが今度は満足気に微笑んだ。

複数の武器を用いてもダメなんだ。レイは単独で……自ら一人で村や街を襲っていた。多人数を相手に単体で。部下には任せずに、レイ自身が。

強力な武器で、思い切って容赦なく傷をつける事で所有者の復活を極端に見る事ができて……。

「……………」

容赦なく、と思った所で背筋が凍り、手や額にジツトリと汗をかいてきた。嫌な汗。そして気分が悪くなる……。

「レイは……それを頭に入れて行動していたのかもしれないわね。いつも同じ邪尾刀を使う事で、リンゴ 人間のタフさ、治癒力。死んでいった人達の傷痕を見れば わかる事ね。皆につけられた傷は、情け容赦なかった……………」

眉間にシワを寄せ、悔しく悲しい表情をマフィアは浮かべた。どうしてレイの事を考えるといつも、辛くなってしまうんだろうね……。

私達が お通夜みたいに黙りこくってしまうと、国王が割って入ってきてくれた。

「話の筋が それてしまったな。まあいい。レイとやらにはレイとやらの複合的な考え方が あるんだろう。とりあえず、四神鏡を所有する者は無敵だという事は、わかっただろう？」

私達は頷いた。

「だが、無敵では なくなった。それがこの、“光頭刃”だと、腰の鞘に収まっている剣を見せる。

「サンゴ！ 手を！」

そして彼を呼んだ。

ケガ人のために指揮をとって走り回り忙しくしていたサンゴ將軍を呼びつけたのだった。

「はっ、国王。お呼びで」

「片手を出せ」

すぐに やって来たサンゴ將軍は言われた通り、国王の前に太い腕を出した。顔を見ると、チラチラと横目で見てマフィアを意識しているのがバレバレだ。キリツと引き締まったフリをしてはいるが、もっと よーくよーく観察すると口がモゴモゴと動いてニヤニヤ笑いを抑えている。

マフィアは見ないようにしていた。

「国王。何をなさるので？」

と、内心 嬉しそうにサンゴ將軍は国王を見た。すると国王は剣を抜き、さし出された片腕を掴み。何と突然スパツと手の甲を直線状に剣で斬りに かかった。

「ぎゃあっ!？」

機嫌の よかった表情が一変し、真っ青に なって悲鳴を上げた。まあ無理もない。

「こここ国王!? あんまりです!? 何をなさるので……」

私達も驚いて成り行きを見守っていたら。

「大丈夫だ。見る」

と、国王が冷静に落ち着きを促した。そして視線はサンゴ將軍の手の甲の方へ。

注目した。

すると どうだろう。

ついたと思った傷は、全く影も形も なかった。

これにはサンゴ將軍 自身も驚き、手を表裏と ひっくり返してみても「あれえ?」と首を捻った。

「ど、どうして……? 確かに今……!？」

とマフィアはサンゴ將軍を不思議そうに見つめた。マフィアに見つめられ、顔が真っ赤に なった彼は大汗をかきながら「しっ、失礼します!」と上ずった声で ぎこちなく去って行った。

「……彼は普通の人間だ。額に負っていた傷は、残っていただろう

「？」

「そ、そうよ……ね」

さっきの鵜とのバトルで勇敢に向かっていた彼は、邪尾刀でアツサリと斬られてしまっていたが、その時に ついた額の傷は そのまま残っていた。

「でも鵜のは偽物だったわけだし……」

「でも斬れ味は本物と変わりなかったわ」

私とマフィアが言い合っていた間に国王が入る。

「鏡を持っている者を斬る　それが、この剣だ。地上や天界で斬れぬものなど無いと言ったのは、生物以外のもの　のみで、鏡を持たない普通の人間は斬れないはずだ」

国王は手に持つ剣の先を天へと掲げた。答えたように剣はキラリと、神々しい輝きで　その存在が確かなように光った。

「鏡の所有者は斬れる……？」

と、私は私を指……さした。

思い出したんだ。自分の右腕。

今は軽めに包帯を巻いておいたんだけど、とつてみると浅く、一筋の傷が　ついている。国王の持つ“光頭刃”で斬られたものだが、治ってなんかいない。受けた傷、そのまんまだ。

「傷……治ってない」

確かに傷が存在する……　って事は事は！

「嘘でしょう！？　それじゃ勇気が四神鏡を持っているって事になるの！？」

マフィアの大声で、私に焦りが。

私って最強？　普通に傷をつけられても死なない体？　確かに、今まで受けたダメージは後に引きずる事もなく　いつの間にか治ってたって感じはしていたけれど。でも別に　おかしいと思った事なんて……。

……いや。レイに体を貫かれた時に復活したっけ。それってまさか まさか？

嫌な汗が流れる。

気持ちの悪いものの塊が、自分の中にあるようで。気持ちが悪い。

そんな中。国王は一度 掲げた剣を持ちかえると、片腕の袖をまくり上げ、私と同じように手の甲から腕に沿って10センチほどの傷をつー……と、剣で斬った。……」

しばらくの沈黙。

私達は さし出された腕をずっと見ていたが、治る気配もなく。ジンワリと血が にじみ出てきた。

そして何分か経った後。やっと国王は口を開いた。

「私も四神鏡の所有者だという事だ」

勇気達が居るベルト大陸をさらに北東へと行った先に孤島が存在していた。ただっ広い海面にポツカリ浮かぶ赤い島 火山島ではないのだが、何故か目の錯覚で外側から見ると島を囲む全体が赤々と輝いているように見える。そして異常に暑さを感じる。

「ハルカ殿の“気”のせいだろう」

何故この島が こんなにも赤く、そして蒸すように暑いかを、鶏は ふと紫苑に尋ねてみた。さっきの戦いで疲れた体に、紫苑の生体エネルギーを少し分けてあげていた。おかげで元気になった鶏は、座っていた丸椅子から立ち上がり腕をブンブンと振り回してみる。

「“気”ね……僕らのモノとは違うんだろっね」

と、今度はグツ、グツ、とコブシに力を入れてみた。

「私達の体はレイ殿の“闇”の生体エネルギーで造られている。従ってレイ殿が生きている限り私達は死ぬ事はないし、こうして私達が生きているという事はレイ殿が生きている証拠だ。そして今やつたように、私達 四師衆は己のエネルギーを四師衆内の誰にでも送り込む事が出来る」

「闇の者は闇どうし。僕ら四師衆の間なら、エネルギーの分割が出来るって事か」

と、今度はポキポキと指を折り鳴らす。

「闇のエネルギーを持つ者どうしは、闇の生体エネルギーを交換あるいは分割が可能だ。最も、私は『術』で、レイ殿達の持つ生命エネルギーを与えあう事が出来るがな」

「僕らが闇エネルギー体だとしたら、レイやハルカ達人間は光エネルギー体、って事か……」

と、そこまで考えて。妙な疑問が沸いた。

人間との空隙^{キョウク}。

そんな言葉が思い浮かんだ。

自分達は人間ではない……としたら。レイに造られた体だ。この体には恐らく、人間という、いや あるいは生物というものが持つ、臓器や骨といったものが無い。だが、さっきから動かしているように人間と同じく関節は曲がるし、疲れもする。無いはずの骨が見る限り外見からでは『ある』ように見える……。

これでは まるで、人間そのもの。

自分達が人間ではないとしたら、人の形をしている自分達は一体、何だというのか。

手の平を鷓は広げてみせる。汗は かいてはいない。

そういえば傷を受けた時。いつも血液は出ていたか。

汗や唾は出た事があっても。涙は……蛍が流していたのを知っている事が あっても。

血は……ない。

一体 何なのだ。この『体』は……。

そう思うと、不思議な感覚がして目を閉じた。

紫苑に聞いてみようか。それもいい。

だが、聞くのが恐ろしかった。何故だか聞いては ならないような、知らない方が身のためになるような気がしていた。

自分は、何なのだろう……。

“闇”で出来ていると一口では言っても、体からは一体 何が出てくるのだろうか……。

鵓は頭を軽く振った。

バカバカしい。そんな事、どうでもいいじゃないか。

そう結論づけて、思考を強制的にストップさせた。

気がつくと、自分の居る この部屋には もう誰も居なかった。

2つの丸椅子と、隅のテーブルに花が供えてあるだけの部屋。誰が置いたのか、また何処から摘んできたのが わからない。アネモネに似た花が寂しそうに見えた。この薄暗い部屋では、せつかくの明るいピンクも暗闇色に染まり、眠っているようであった。

……僕は眠る事は しない。疲れる事が あっても、放つときや回復するしね……花は、光合成とかいう生物としての重要な役割とかポストがあるけど、僕らには そんなものは ない。ただ、レイに仕えるだけ。レイに従うだけの存在。

それって、ただの人形みたいだな……ハ、人形。なるほど。人形か。確かに似てる。そうか、僕はピノキオだったわけか。嘘つくと鼻が伸びたりして。

最後にクッククツと笑ってみたりする鵓。
花は暗闇の中で佇んでいた。

別の一室では、ハルカがベッドの中で就寝していた。

身の回りの世話は、頼みもしないが さくらが ほとんどしてくれていた。白い洗いたてのシーツや毛布も、さくらが用意したものであった。

さくらが作った食事をとった後 入浴し、これまた さくらが用意したラベンダー香をほのかに漂わせる寝服に袖を通し、ベッドの中へと潜り込んでいた。

おかげで、グッスリと深く、深く……懐かしい思い出の夢の底へと落ちていった。……

細く、小さな体。パツチリと開いた赤い瞳。陽に当たると照り輝く髪。上品な、王族に ふさわしい立ち振る舞い、その気質。その容姿から、本当は誰もが羨望の眼差しを送るはずだった。

ある小国の王の城で産声を上げた。王には幾つかの妃が おり、子供も たくさん生まれていた。

ハルカは、王の15番目に生まれた子供。名は、母親が名づけた。名の由来は母親が すぐに病死してしまったため わからない。

幼いハルカは一人ぼっちだった。なんせ、母親が亡くなった後ずっと部屋に閉じ込められていたからだだった。しかも その部屋は、窓から国が一遍して見渡せるほど高い所に あった。城外で、楽しく笑いあい駆け回る子供達を見ては自分の立場を呪っていた。

まだ物心ついた年頃の頃は、「どうして私は外に出ちゃいけないの？」や「何で お母さんは死んでしまったの？」と毎日 同じ疑

問が浮かんでは、解答も無く消えていった。

だが、部屋に ずっと居てジツとしているわけでもない。ハルカは本が好きで記憶力も優れていたのも、一回 読んで学んだ事は絶対に忘れる事は なかった。

そのため、部屋で。昨夜 読んだ本に書かれていた魔法とやらを試してみた。もちろん、呪文は完璧で。始めハルカは どうせ出来るわけがないと思いついていたが、呪文を声で発していくうちに胸が高揚していくのを感じた。

そして唱え終えた後。ハルカの体全体を不思議な淡い光が包んだ。
(何だ、これは……)

確か この呪文は、物を動かす呪文だったはず。

ハルカは試しに部屋の中央、隅に置いてあった、到底一人で動かすのは無理な大きいクローゼットに向かって“動け”と念じてみた。すると どうだろう。

クローゼットは浮かび床の間に5センチほどの隙間を空け、スー

……と、右に一メートルほど移動した……。

「……」

魔法が自分には使えた……。

喜びが湧き上がる。確かな手応えだった。

よし、と納得した後クローゼットを元に戻そうと壁を見た時。

ハッと気がつく。

壁に黒い縦の筋が見えた……いや、筋は縦の線だけではない。どうやら四角を描くように筋が通っている。大きさは、人が通れるほどの高さの……ちょうどドアぐらいだった。

(まさか……)

抜け穴。

半信半疑で、近づぐ。

そつと白い壁に触れてみても、壁はビクともしなかった。ましてや自分は まだ子供。普通の子供の力では どれだけ頑張ってみても動かすには力の無駄だろう。

そう、普通 の力ならば……だ。

ハルカは もう一度、先ほど唱えたのと同じ呪文を唱えた。

すると やがて四角い その筋の壁部分は中央に軸を置いて、4分の1ほど回転した。つまり この壁は、反転するドアの からくり仕掛けに なっていたのだった。

ハルカは迷わず そこへ飛び込んだ。今は深夜。誰も部屋には来ないはず。最も、昼間でさえ滅多に人はハルカの部屋へ訪れたりしなかった。

ハルカを部屋へ閉じ込めておくくらい溺愛していた父である王で……さえも。

《第37話へ続く》

第36話（繋がり・吉）（後書き）

【あとがき】

鶏の中身はコーラかもよ（または醤油とか）。

ブログ第36話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-96.html>

ありがとうございました。

第37話（繋がり・弐）

クローゼットのどけられた、後ろの壁から発見された抜け穴。普通なら、見つかるはずはなかった。

ハルカは迷わず開いた先へと飛び込む。回転式となっていた壁の一部がドアとなり、開いた隙間を抜けて。この先に何が待ち受けていようとも、ハルカは全然考えもしていなかった。

この退屈な空間から脱出したかった。それだけだ。

入ってすぐハルカの前に、下る階段が現れた。10段程度の階段を冷たい石造りの壁につきながら一歩一歩と、まずは慎重に、足元と行く先を確かめて。部屋の明かりがまだ届いている。おかげもあって、少し先まで視界は行き届いていた。

そこでハルカは、いったん部屋へと戻り、粗末な燭台を一つ手に持って。明かりを頼りに再び、階段を同じくして下り歩いて行った。道は長そうだと思った。明かりがなければ、不便だっただろう……。

一度も分かれ道がなかったのが幸いし、手を壁につきながら、ハルカは道なりに進んで行った。そしてやがて進行方向に突如『壁』が出現する。

行き止まりかと思えば違った。上、ハルカの頭上にポツカリと『穴』が開いていた。

燭台を近づけて見てみると、穴の内側面には上へと真っ直ぐに伸びる錆びた鉄バシゴがあった。そこを上って行けと言わんばかりに。

ハルカはバシゴに手をかけた……届かなくとも、自分で自分に覚

えたての魔法をかけて。その おかげで難なくハシゴを上る事ができた。そして硬いなと思っただ出口の塞ぐ物をずり動かしてみるとそれは退ける事ができ、ハルカは何処かの地上へと頭を出す事ができた。

突っかかる事もなく障害に悩む事もなく。ハルカは自分の能力と幸運に感謝した。

地上に立つ……。

外だった。ヒンヤリとした夜風が吹き、ハルカの髪をさらう……。懐かしい、見覚えのある情景だと感じた。何故だろう、と。

ハルカは考える……。そう、きつと、うんと小さい頃。母親がまだ生きていてココに来たんだと。ハルカは そう納得させた。夜の中に野原が広がる。草木は静かに呼吸をし、寝息を立てて眠っているのだ。

風は草木とハルカをあやすだけの力で さ迷い、夜の中を駆け抜けていく。

ハルカは歩いた。ゆっくりと。城内の、あの部屋 以外の空気を吸ったのも久しぶりだった。

時折 吹く風を新鮮だと吸い、夜空を彩る天然の宝石である星々誘い込まれそうなほど輝く三日月。静かにヒツソリと立ち並ぶ遠めの家々には、明かりは ほとんど点いてはいない。

自分 以外には誰も この場に居ない。でも それで よかった。自分が王女だと わかってしまったら、どんな事を言われたりするか。わかっている。口では綺麗事を言いながら、心の中で妬み、身に覚えのない恨みを言うのだろうか。

ハルカは、ひとりぼっちだった。

自分は呪われているんだと思った。

そして まさに今も、その事を思い、歩いてきた。ずっと歩いて、歩いて……。無意識のうちに、野原の外へ行き着いてしまっていた。

茂みや、多くの木々に隠されて。ある建物が見えていた。

石で できているのだろう。その建物は古ぼけてはいるが、ヒビ割れや欠けなどは見られず、ハルカの首が90度上に傾ききってしまっほどの大きな建造物だった。夜だから明かりも少なく、静寂が余計に建物の存在を不気味がらせていた。

不気味。何故だか そう思えてしまった。

ハルカは近づく……高いフェンスが木々の向こう側で隙間なく立ち並んでいる。

それは どんな大男でも登れない高さで、フェンス全面に有刺鉄線が張り巡らされ、触る事すら拒否していた。しかも、首を伸ばした視線の先、フェンスの上部には時々ビリツと音が聞こえ、電流が流れている。

魔法を試してみようかとも思ったが、疲れていたので止めておいた。さあ もう帰るかと思って後ろに向こうとすると、微かだがフェンス越しの向こうから人の声がした。

見ると、誰かが建物から やって来た。しかも2人。暗がりの中、背丈からして子供だった。

コツソリと隠れるようにソロソロと こっちの方へ向かって来た。何やら、話しながら。

「……んとにドジだなセナは。そんなに大事なら、部屋に しまっておけよ」

「何言つてんだって。部屋なんか置いておいたら、誰かに盗まれるだろ」

「だったら俺に言えば、いい隠し場所が あったのに」

……と、仲のよさそうに少年2人がヒソヒソと会話をしていた。辺りの草むらの中を、キョロキョロと何かを探しているようにウロついていた。

「今日は月が あってよかった。鏡は反射するからな。たぶん見つ

かるだろ」

と、片方は言った。

ハルカは その時ちょうどフェンス越しのすぐそばに、キラッと光る物を見た。ペンダント状の、先に卵くらいの大きさで鏡がついていた。2人の会話から察するに探し物は これに違いないと確信した。

片方の少年がハルカの方に寄ってきた気配だったので、声をかけた。

「探し物はココだ」

2つの影は同時にピタッと動きが止まった。そして、近寄ってきた方の少年が疑わしそうに口を開いた。

「誰、だ……？」

と……。

その時。雲に半分 隠れていた月が、綺麗に その姿を現した。その光のせいで、自分と、その少年の顔が明るく照らされハツキリと見えるようになった。

フェンス越しに お互いを……見つめ合う。

その少年は自分より少し年上に見えて、泥で汚れた白い服に半ズボン姿。裸足に木で できた靴。髪は青色、目の色は……たぶん黒と。キリリと締まって意志が固く強そうである。

ハルカは初めて見る年の近い男の子に少し ためらったが、負けじとグツと怖さを引っ込めて いつももの調子で言う。

「ハルカ・ティーン・ヴァリア。……お前達は、何者だ？ 何故、ココに居る？」

すると もう一人の少年も近づいて来た。

こっちも年上らしいが、比べて子供っぽさがある。服の格好は2人とも同じで、薄紫な髪の色をしていた。

「ココは監獄だぜ。知らないのか？」

と、その少年が先に口を開いた。

「監獄？ お前達、何か しでかしたのか」

2人は顔をいっただん見合わせる。

「そんな事は どうでもいい。それより あんた……王女だろ？」

青髪の方が言った。ハルカはギクツとして視線を逸らした。

「知ってたか」

「ああ。ヴァリアっていつたら国王の名だ。それに その高価そうな服。こんな時間に こんな所へ、そっちこそ何で居るんだ。とつとと帰れ」

一気に責め立てるように青髪の少年は捲^{まく}し立てる。

「おい、レイ。少し言いすぎだろ」

そっぽを向く青髪の少年をレイと呼んだ少年は、そのまま続けて説明してくれた。

「俺が落とし物したんで、部屋を抜け出して探しに来たんだ。だから、すぐ戻らないと」

と言って、草むらで自分はココだ、ココに居ると主張しているかのように光る鏡のペンダントを拾い上げて、少年は愛想よく微笑んだ。「私も城を抜け出して来た。こんな所に監獄があるとは知らずに来た。……そうだな。私も帰るか。縁が あつたらまた会おう」と、フツと顔を曇らせて下を見た。そして「じゃあな」と言って立ち去ろうとした。

すると……。

「二度と来るな」

と……追い討ちをかけるように。青髪の少年は言った。

ハルカには、振り返る勇気が なかった。

それが 3人の出会い。

本当なら、再会など有り得なかっただろう、お互いの境遇。城内

に閉じ込められた少女と、監獄の中で過ごす少年達　だが、再会は　すぐに　また　やって来たのである。

ハルカは久しぶりに国王と面会した。いつものように日の当たる机に向かつて読書していると、国王が部屋を訪れた。厳かな国王は、ハルカを見る目だけは優しさを秘めていたように思われる。

向かいあう2人。しかしハルカはニコリとも笑わなかった。ただ、目の前の国王である父を真っ直ぐに見つめるだけ。やがて国王は口を開いた。

「毎日　退屈だろう。今日は庭にでも出て遊ぶといい。私は　これから出張だがな」

ハルカは顔色一つ変えない。

「体に気をつけてな」

国王は　そう言い残すと、伸ばした白い髭を触りながら部屋を出て行った。部屋の中に侍女と2人きりになった。

「珍しいですね。王様が突然あんな事を……」

侍女は　そう言って首を傾げた。ハルカはドアから視線を読みかけの本に戻した。

「新しい女でも見つけたんだろう。違う香水をつけていたみたいだしな。いよいよ私も　お払い箱というわけだ」

到底　子供の発言とは思えない　その口調に、侍女は少し顔をしかめた。

「それで、どうします？　せつかくああ言って下さったんですから、庭へ散歩でも。私が付き添いますけれど……」

「いい。私一人で行く。一人で散歩したい」

見渡す限り花畑。カランコエ、スイートピー、バラ、ハイビスカス、ビオラ……多種様々に咲き乱れる。花で埋め尽くされた中庭。中心には円状の、銀造りの噴水。女神が壺を肩に担ぐ像が　あり、

壺からはサーツと清い水が流れている。

国王の趣味で造られた この庭の手入れは雇われた技師・庭師がしている。おかげで、花はスクスクと健康に育ち その生命力を開花させている。

（人の手で形づくられたものなど、私には興味が ない）

ハルカは花に見向きも しなかった。歩いていくだけ。

するとシャクヤクの花が並ぶ前に、人が居た。長いオレンジ色のストレートヘアの、ハルカの3つ年上である姉。城内と一緒に住んでいるにも関わらず、あまり顔を合わさない。

ハルカが立ち止まると、向こうも こつちを振り返ってハタと目を合わせた。手には いっぱい、シャクヤクの花を持っていた。

「あら、あんたがココに来るなんて珍しい。こんな所、似合わないんじゃないの」

ハルカを見るなり、暴言を吐く姉。

この女だけではない……ハルカの兄姉達は皆、ハルカに対して中傷の言葉を浴びせる。上の14人達は皆 仲は いいが、ハルカだけは別の目で見ている。

何、あの髪の色。何、あの瞳。あの子、薄気味悪い。どうして

お父様は私達より、あんな子を可愛がるのかしら。私達には、あんな優しそうな目をして下さらないわ

シャクヤクを手に抱きかかえ、目が そう言っていた。万事が万事この調子だから、ハルカも もう慣れきっていた。

「この庭の花には触らないでくれます？ お父様の大事な、私達にとっても大事な場所ですもの。あんなんかに触られたら、せっかく咲いた花も台なし。あんななんて、一步も部屋から出なくてもいいのよ」

ハルカは姉の目をジッと見た。燃えるような、熱い瞳。姉は ますます それが気に食わなかったようだ。

「本当に気味の悪い子」

と捨てゼリフを言いハルカの横を通りすぎようとした時、わざとドンと体がぶつかった。ハルカは不意打ちを受け、デンと尻もちをついた。

「アラごめんなさい」

と、フンと鼻で笑いながら、スタスタと向こうへ行ってしまった。

座り込んだままのハルカは、しばらくずっと地面を見下ろしていた。レンガで造られた道。レンガの冷たさが体に伝わる。

動かなかった。怒りや悲しみというよりも、何も言い返したり反抗したりしない自分の冷静さが情けなく思えた。

物心ついた時にはもう、こんな事は日常茶飯事。自分は異母兄弟である人達に軽蔑されるがままで、無抵抗で、心の中で彼等かれらを蔑み、馬鹿扱いしている。

反抗しないのは、してもムダであり、馬鹿らしいからだと思っている。

数分ほど座っていた後、音もなく立ち上がった。パンパンとスカートに ついた砂を払う。そうすると……。

ガサ。

ハルカの背後、数メートルほど行った所の茂みの中から、何か動いている音がしていた。しかしハルカは どうせ犬か何かだろうと思ひ込み、落ち着き払っていた。最初 振り向く事も せずに、砂を払っていた。

そこに現れた『彼』には、気がつかずに。

「あれは お前の姉か？」

そこで初めて振り向くハルカ。ビクツ、と肩で反応して声のした方に勢いよく振り向いた。目を見開いて驚きの表情を示す。

そこに居たのは……つい この前、監獄のフェンス越しに出会っ

た少年 決して微笑んだりも しなかった、青髪のレイと呼ばれていた方の。一人、だった。

何でココで あなたと出くわすんだと言わんばかりに彼を見つめた。

彼はハルカの顔を見て、心中 察しているかのように言った。

「なあに、気まぐれだ。暇つぶし……と言ったらいいか」と、ふ、と笑う。

「どうやってココに入った？ 門には兵が居るし、塀は高くて見張りが大勢 居るはずだが……」

ハルカが動揺を隠せず冷や汗を流していると、彼 レイは自分の右手を胸前に出し、人指し指を立て両目を閉じた。そして精神を一点に集中させると、ものの数秒のうちに突然フツ……と。姿が消えてしまった。

ハルカは慌てて彼の居なくなった辺りを探した。すると「ココだ」と……ハルカの真後ろに現れた。

呆気に とられたハルカだったが……やがて閃く。

「瞬間移動……魔法か」

言つと、目が楽しげに笑ってレイは「そうだ」と答えた。

「人に教わった。セナも知らない。まあ……近距離しかできないし。たかが しれてる力だ、自慢できやしないさ。ココに来るには、充分な力だな」

と、フーと息をつき、噴水の前の石段に腰かけた。そしてハルカの後ろの方で咲いていた、真っ赤なバラの群集を見て、「まるで血のような色だな。見事だ。よく世話されているらしい」と声に漏らした。

ハルカは視線をバラに向けた後、またレイの方を見た。そして尋ねる。

「……さっきの一部始終、見ていたか」と、話を最初に戻した。

レイはヒザの上に両ヒジをつき、指を組んで口元を隠していた。

ハルカを見ている。

「ああ」

「私を憐れむか。それとも お前なら、他人事だと たいして気にも とめないか」

と、皮肉そうに笑って見せた。兄妹達に向けた目と同じ目をレイにも向けた。だがレイは気にする風でもなく。

「別に。憐れんでほしいなら、そう言え。そうじゃないなら どうでもいい……少し、気になったからな。あの時の、お前の表情……王族の暮らしとやらを見てみたくなった」

あの時とは、初めて2人が出会った晩だ。セナも居た。ハルカの態度と顔から、気にかかったとレイが言う。

「世間知らずの馬鹿お嬢様とは違うらしい。同年くらいで、セナ以外の理解力の ありそうな奴に会えたのは初めてだ。そうだ、クイズを出してやろうか」

と、ずっと気持ち楽しそうに話している。ハルカは黙って頷いた……。

「綺麗だが、近づくと攻撃する。何故なら、2つになると崩れてしまっからだ。さて、これは何か？」

レイは言った後、ハルカの様子を窺った。ハルカは少しだけ眉をひそめ、腕を組んで小声で繰り返した。

「綺麗で、近づくと攻撃して……2つになると崩れてしまうもの……」

何だ それは……ハルカは悩む。解いてやろうという気が あった。レイは言葉に付け足した。

「ヒント1。俺の言葉にヒントがある」

チラ、とレイを窺うと彼は考え込むハルカを愉快そうに見ている。さあ どうだ？ と その顔が言っている。こうなるとハルカも、

解けないまま降参したくはない。自分のプライドに かけて、思っていた。

とりあえず落ち着いて考えてみるに至る……。

ハルカは綺麗だと思ふもの、思われるものをピックアップしてみる事にした。

まず、花。そして装飾品、宝石。景色、絵画、光、言葉、女……。普段、綺麗だと思ふものなど そう周りにあるわけではない。だから、花、宝石あたりが妥当だと思ったが……とはいっても、両方も種類は多い。

……いや、待てよ？

ハルカは自分の頭の固さを馬鹿みたいだと思つた。

彼の言葉に だまされるな。近づくと攻撃する花だなんて……発想でピンと来ないか？ 何を真面目に考えていたんだろうと。

「まだヒントが ほしいか？」

レイが そう言うと、ハルカは慌てて首を振って制した。

「大丈夫。答えは わかつた」

ハルカは自分の後ろを見る。そして視点を集中させ、ソレを一本、ブチと手を使わずに見えない力で茎を千切つた。そのままスウッと自分の所へ運び手で持ち、レイの手前に さし出した。

「……正解だ」

冷静に装つてはいたが、驚きを浮かべていた。それは、問題が解けたという驚きではなく、手も使わずに摘んだ その『力』に対してのものである。レイは ソレを受け取ると、またハルカを見た。

「この力は初めて人に見せた」

「……」

無言に なるレイ。だが口元だけ、少し歪ませる。

「……………お互い、普通とは違う力を持つ者だったというわけか……………面白い。こんな面白い奴は貴重だ」

と、親指と人差し指で つまむように持ってクルクルと回して遊んだ。すると、指と指の間から、つー……………っと細く赤い血が流れた。

『綺麗だが、近づくと攻撃する。2つになると崩れてしまうもの』

レイの手に持っているのは、さっき彼が さりげなく褒めた真つ赤な『バラ』だった。クイズを出す前から、正解は呈示されていたのだった。

昔からバラは綺麗な女性に対して慣用され、“近づくと攻撃”するのはトゲのせい。2つになると崩れる……………というのは、崩れて『バラバラ』になってしまうという意味だろう。

難しく考える事など なかったのだ。ただの なぞなぞ だったのだから。

それでハルカは彼の思惑に添って、後ろに あったバラを一本摘み、渡してよこしたというわけだ。

「俺はレイ・シエアー・エイル。あの相棒はセナ・ジュライっていう奴だ。お前は……………何だっけ」

「ハルカ・ティーン・ヴァリア」

「悪いな。他人の名前など覚えられないクセがあるもんで。ハルカ、だな。俺はレイで いい」

レイは立ち上がった。軽く腰を回す。

「レイ」

「何だ？」

「……………いや、やっぱりいい」

「何なんだ。言いたい事が あるなら早く言え」

ハルカは間を置かず素直に。

「今、“また そっちに行ってもいいか”と聞こうとした。だが、

お前なら こう言うだろう。“来たければ来るがいい”と」

と……………言うと、レイは一笑した。

「ははは！ やはり貴重な奴だ。よく俺の心理が読めた事で。全くその通りだな」

ハルカは え？ と心中で呟いた。別に自分はレイの考えを読むつもりなど なかった。それが自分に できてしまった事に驚かされた……。

ひよっとして この人と居ると、もっとなんか発見できるのかもしれない。

「さて。そろそろセナが心配するな。セナは俺の力の事も知らないし、まさか監獄を抜け出しているとは思ってもいないだろうよ。帰るとするか」

と言いながら、さっきまで指と指の間で遊んでいたバラを手の平で包んで持ち、グツと握りつぶした。花弁は形を変え、整っていた形は失われ、グシャグシャと まるで使い古した紙を丸めたようになってしまった。茎ごと。

そのせいでトゲが容赦なく刺し、握り締めたコブシからはポタポタと血液が滴り落ち地面に降った。

「あいにく、もらっても仕方ないんでね。監獄では」と、パツと手の平を広げた。同時に、握りつぶされたバラは無残な『形』となり地に落ちた。

ハルカは落ちていくバラを見ていた。

バラ、バラ、バラ、……頭の中で、何かが引っかかっているような感じを覚えた。

「来るなら昼 前後か日没後に しろ。来た時、目印として……：そうだな、あそこが一番大きな木……：下から5メートルほどの上の所の枝に、白か黄色系の目立つ色の布でも巻いておけ。そしたら、俺らの部屋から が見れるだろう。それを合図として、俺が辺りを見回すから」

そう言い残して、レイは早足で歩き去って行った。

ハルカは見えなくなるまで、背中を目で追う。

……奴は何しに来たんだ……？

こんな所、気まぐれや暇つぶしで来れるような所では ない。だとしたら、何のために？ 私に会うために？ 何故？

この前の態度は あまりにも冷たいものだった。私の存在を邪魔扱にした。それが何故ココに来るといふ結果に なるのだ？？ ……と。

腑に落ちない。

レイの一挙一動、そして会話の内容は疑問ばかりだった。

「わからない」
呟いた。

瞬間、ビュウ、と ひと吹き風が吹き抜ける。冷たいレンガ造りの地面の上で おとなしく横たわっていたバラの残骸は、風にさらされ転がっていった。

……………バラ。

彼の意図は おそらくバラにある。

そんな気がして ならなかった。

《第38話へ続く》

第37話（繋がり・式）（後書き）

【あとがき】

1万文字を過ぎると作者、執筆中に焦る（かなり）。

『繋がり』昔と式を繋げたら軽く超えて1万7千文字ほど。

長すぎ！　そこで分割マジック！（てやあ〜）

ブログ第37話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-98.html>

ありがとうございました。

第38話（理想郷）

「光頭刃か……厄介なものだな」

ハルカは夢から完全に覚め、過去の思い出の余韻に浸るまでもなく現実に戻った。寝室で半身だけベッドから身を起こし、さくらからの報告を受けた。

せつかく蛭を呼び戻し造らせた邪尾刀は、光頭刃という新参者に
して やられてしまい、もう手元に ない。

再び邪尾刀は一本に なった。

「蛭に もう一本 造らせましょうか」

と、さくらは提案したが。ハルカは深い ため息をついて それは無理だろうと言った。

「一本 造るだけの時間と あの娘の体力から見ても、無理だろう…… 誰か、他に物を具現化できる能力を持つ者は居ないのか」

「紫苑なら…… いえ、やはり完璧な物となると、蛭以上の能力はあいにく。私達は持ち合わせておりませんわ。レイ様なら おできになるでしょうけど……」

と、さくらがレイ、という言葉を口に出したのが気に食わなかったようだ。ハルカは さくらを一瞥いちへつした。

「レイは眠っているのに、どうやって造り出すと言うんだ？」

そして、さくらを邪険に追い払った。

「もういい。出て行け」

さくらが しぶしぶ出て行くことになると、蛭が現れた。さくらと行き違いになり、ハルカのベッドの横へ進む。

「……何だ？」

と、ハルカは機嫌 悪そうにジロツと蛭を見た。

「さつき紫苑の術で救世主達の様子を見ていたんですけど、どうやら四神鏡が救世主と、南ラシー又国王の中に あるらしいという事がわかりました」

蛭は構わず用件を伝えた。

「2人の中に、だと……?」

「ええ。で、もちろん奪い取るつもりです。ですが、あつちには邪魔な剣があります。慎重に ならないといけないと思われます」

「で? どうしろと?」

「救世主は ひとまず置いといて、先に国王一人にターゲットを絞り込めばいいんじゃないかと……」

「鵜と お前達2人じゃ、上手く事は運ばなかった。今度は国王一人の命を狙って、四師衆が団結すればいいと?」

「はい。上手く作戦を練って」

ハル力は急に笑い出した。虚を突かれ、蛭は その場で立ちすくむ。高らかに笑った後、ハル力は軽蔑の目を蛭に浴びせた。

「あなた、救世主を庇(か)うつつもり?」

ピタリと笑いを止め、代わりに鋭い視線を投げかけた。蛭は それに異様に怯(おび)え、ハル力の目から逃れられなかった。

「そ……そんな……」

やっと出た言葉は それだけだった。

「ふん。わかつてるわよ。あなた、救世主の所へ帰りたいでしょ? レイを、裏切ってね!」

激しい中傷の言葉に、蛭は言い返す言葉の力が なかった。
「違う……違う……! 裏切ってなんか……」

レイと勇気、両方への後ろめたさから そう はっきり否定などできるわけがない。蛭は思わず後ずさった。そして何か障害物にあたると、ガクツと足の力が抜けた。

崩れた蛭を支えたのは、障害物では なく いつの間にか そこ

に居た紫だった。

「む……らさき」

紫はハル力を見ていた。

「何、あなた」

「私は、蛍様を護るために あります」

そう言つて のけた。だが、ハル力は気にも しない様子で さらに蛍に向かつて命令を下した。

「命令よ。救世主を殺せ。もし殺せなかったなら……」
痛い視線が蛍を刺す。

「あなたを殺す」

その頃、別の一室では。

レイが静かに、ヒッソリと眠り続けていた。

暗い闇の中で、ドク……ドク……と。レイの心臓の音だけが聞こえてくる……。

わたしたち
勇氣達の待遇は変わった。

「四神鏡を持つ者を殺すな 父の教えだ。鏡は体内で潜み、己自身を護っている。取り出してしまつては悪用されかねない。そう父は考えた。私の中に鏡が あると わかつて以来、父は執拗に私に様々な事を教えた。わずから才の私に、この剣を渡し、次期 国王として修行を積み」と

国王は あの後それだけを言つて、家臣達に呼ばれて去つて行った。

城内に安堵のため息が全体として ついた頃、私達は食事に呼ばれた。もはやそこは牢屋でも何でもなく。広い部屋の、ずうっと奥まで続く白い長いテーブルと規則正しく並べられた背もたれつきの豪華な椅子。そしてテーブルの上に、やはりきちんとズラリ並べられた皿などの食器類。処々に花も飾られていた。

完全なる、お客様扱い。^{ゲスト}

私達はいきなりの待遇に気圧^{けお}され、出された料理の半分も食べられなかった。まさか毒でも入ってんじゃないでしょうねと、全員が目が そう言っていた。

食事が終わった後、自由行動と なった。こう言つと、まるで修学旅行に でも来ているみたいだけれど。でも、ココじゃそう言つた言い方をする方がピッタリだ。

何となく、落ち着けないし、行動が制限されているように感じるから。

さて私は、外庭を見渡せる廊下を歩いて散歩する。ライオンに似た獣が彫られた丸柱が4・5メートルの間隔を置いて転々と立っていて、片壁には色鮮やかな装飾画がズラリと並んで飾つてある。一枚には、龍だろうか。赤い色合いで、見ているとこっちまで焦げそうになる迫力が あつた。歩くと、続いて今度は鳳凰の壮大な油絵だ……山々を下に見下ろし、大空を翔^かていく。

西洋と中、どっちも あるんだなあと絵を見ながら歩いていると、廊下に外庭に向かつて一人でベンチに座り、ちょうど真上に さしかかった月を見ている国王が居た。脇に光頭刃を添えて。

薄そうなローブを着ていた。部屋着かな？

「寒くない？ ココ」

と、私は話しかけた。国王はチラと私を見て「いや。大丈夫だ」と

言って また月を見た。

こつして見ると、あどけなさが あった。子供らしいと今 初めて思える。

「何してるの？」

再び聞く。すると今度は すぐに答えず、私の方も見なかった。

「隣、座っていい？」

すると「ああ」とだけ、返事が返ってきた。

改めて国王を見る。月に照らされた国王の その顔は、整っている。目元がキリツとして、威厳の雰囲気を作り出しているようだ。姿勢も背筋が真っ直ぐに近く見えて、いい方だった。

国王から視線を外し前を見ると暗い中、月の光に照らされ その生命を輝かせているように、花達が咲いていた。素直に綺麗だなあ……と考えた後、サツと そこに誰かが立っているような幻覚が見えた。

蛭だ。

黒い服を纏^{まと}う蛭。何故か悲しげに こつちを見ている。

そして私も悲しく その幻覚を見つめていた。

「あの娘の事を考えているのか」

ふいに、国王が そう切り出した。途端、視界から蛭は薄くなつて消えた。

「……うん」

深く ため息をつくくと、国王は私から視線を逸らした。

「どういう経緯かは知らんが、今は敵だ。敵で ある以上、甘えは許されないぞ」

「そんな！ 私には、蛭を殺す事なんて……」

国王の冷たい言葉に、私は首を振って熱^{いさ}り立った。

蛭を殺す事に否定は するけれども。心の中では迷っていた。蛭

は敵だ、元から敵だったじゃないか……そういつ自分と。何を言う、
蚩は実は そんなに根っから悪い奴じゃないんだ……という自分が、
激しく争っている。

長い沈黙が包んだ。

私と国王は、ジツとお互い黙っていた。私は それが迷いを激し
くさせるようで嫌だった。

すると そんな私の気持ちを察してか、国王は話し始めた。

「この剣。光頭刃は、今は亡き父から譲り受けたものだ」

言つて、私が座る反対側に置いてある、光頭刃を示した。

「私が5才の時、この剣を渡し、次期 国王として修行を積みと言
われた。厳しい父だった……だが、とても優しくかった。何も知らな
い私に、剣術、体術、何でも教えてくれた。もちろん、国王として
父は この国を治めていた。だが父は……北ラシー又国との抗争に
巻き込まれ、死んでしまった」

「……」

「そして母も、その すぐ後、民族紛争に巻き込まれ逝ってしまった。
取り残された私は、国王として この南ラシー又国を護らねば
ならない。ココには十万もの兵が居て、家臣達が居る。彼らは あ
の父を心から尊敬し、忠義を誓っていた。戦場では いつも父の足
となり働いてくれていた。父や母が亡くなった時、その幾万の兵
も皆 嘆き悲しみ、葬式には この城が埋め尽くされるほどの花が
贈られたのだぞ」

そう言つと、少し国王は笑った。何処か寂しげに……。

「そして、残った私を温かく出迎えてくれ、まだ政治に関して幼い
私に色々と援助し……そして、今があるのだ。今の私が あるの
は、彼らの おかげだ」

「へえ……みんな、いい人達だったんだね」

私も つられてか、微笑みかけた。

「ああ。彼らは父と共に理想郷……絶対王政の国を完璧なものにしようとした。私は父の意志を受け継ぎ、国を造り上げなければならぬ。かつて父が望んだ、王の支配する、豊かな国。民族を統一し、従え、強い国を。他の国に負けない力の持つ国を」

理想郷……？

私には何かピンと こない。王の支配する国が、本当に豊かな国なんだろうか。確か歴史で学んだ事も あった気がする。国民の誰もが王を神として、神、王のためならばと命を投げ出し争う……。現に これが、あなたのいう『豊かな国』なんだろうか。

見てきた この国の人達は、とても幸せそうでは なかった。

支配され、見張られ、自由に神を信じる事は できず、逆らえば殺されて……。

「本当に それは、あなたの望んでいる国なの？」

私は聞いた。国王は何の事かというような顔をした。

「国民を見てきたけど……この国には民族紛争が絶えないっていうね。皆、命は大事だっというのなら……何で争うんだらう。言っている事と やっている事が違う気がするの。どうして？ 私の居た世界の私の居る国と比べて、何て悲しい国なんだろうって……思う」

自信は ないけれど、言うだけは言ってみた。思う事を、そのままに。

国王は少しだけ考えて聞いてきた。

「お前の居た国？ そうか、お前は異世界から来たのだったな。それでは お前の居た国とは、どんな仕組みだったのだ？」

「……」

息詰まる。そんな深い知識も ないけれど、かといって黙っていたのでは。

そう思って、なけなしの知識を総動員して国王に答えた。とほほ。「大事な事は皆で決めるのよ。代表者が集まって、話し合いなんかでね」

「……？」

「何かを決めたり主張する時に、決して剣を持たない。王なんて居ない。まあ、天皇っていう国の象徴となる人は居るけどね。神様は自由に信じていい……お互いを助け合っていて、とても裕福な国。それが私の居た国よ……」

裕福な国。

テレビなんかで観た、外国 事情に比べたら私の居る国なんて、よっぽど……。

「政治を代表者の話し合いで決めるのか？ ふうん……時間がかかるな それは」

「うん……まあ。でも血を流すよりは いいんじゃないかなと思うし、それに……」

俯き加減に、片ヒザを抱えた。

夜風が寒いかなと思っただし、それに……。

自分の言っている事が正しいかどうかなんて わからない、怖さが あった。……

「あなた、さつき言ってたじゃない？ 今の自分が あるのは、彼らの おかげだって。国って、王が一人で動かすものじゃなく……民が。国民が、動かすものだと思うから」

私には それぐらいしか言う事は できないけれど。少しでも、王に伝わればいいなあと思いつながら。

国王はフンと鼻を鳴らして言った。

「偉そうに」

ギクリッ。

いや、わかっただけですけどね、もう。

私は素早く立ち上がり、胸を張って開き直った。直ってやった！「だって私の方が年上だもんねー！」

だから何だっというんだと自分の中から声がした。聞いてないフリをした。ぐっすん。

そんな風に、私が国王と時間を過ごしていた時。少し離れた向こうの方から凄まじい爆音がした。

「な、何！？ 爆発！？」

「行ってみるぞ！」

サツと、光頭刃を手に掴み素早く走り出した国王。私も慌ててついて行った。

走り着いた所から、煙がモウモウと立ち込めている。私達が居た中庭を出て、廊下を挟み違う大きな中庭に出た所だ。下の地面は土と砂。私はスリッパを履いてはいたが、国王は途中で放り投げて裸足に なっていた。

片手には光頭刃を持ち、顔は真剣だ。無理もない。煙の上がつている所の周りには幾人かの兵士がすでに倒れているし、よく見ると倒れている兵士の手には黒い玉が握られていたり。これはきつと爆弾だ。爆発したのは兵士が投げつけたから？ それよりやばい、もし これにも引火したら……！？ 立っていた残りの兵士も同じ事を考えたのか、すぐ近づき回収したりしていた。

私が光景を見て動きを停止していると、立ち上がる煙の中に2つの影が ある事に気が ついた。

小さな影と、比べて大きな影……蛍と紫だった。

恐らく目標物と なった彼女達……蛍と紫には、かすりも していないらしい。

「蛍……」

私が呟くと、ゆっくりと2人は私の顔を見た。

「今度は2人だけか。てつきり多人数で来るものかと思っていたがな」

国王が そう半ば楽しげに言った。
楽しいわけじゃないけれど。

「鵜達は城中よ。彼らは、七神達を引きとめてもらっているの」
蛭は無表情で私を指さした。

「おとなしく四神鏡を渡しなさい」

もはや余裕の笑みも なかった。これまでのような皮肉さも無邪気さも。何か彼女達を追い立てているようだった。表情のない顔は、もはや機械人間でしかないようにも思われた。

一瞬の間隙について、紫がサツと国王の前へ接近した。そして、国王が光頭刃を抜く前に紫が前から先に、光頭刃を奪い抜いた！

その一連の動きは、さながら鮮やかな芸術のよう。
あれよあれよという間に、奪いとった光頭刃で国王に襲いかかった。かわしきれず、国王の胸元をかする。

「国王！」

「国王！！」

数人の兵士と私の声が合わさった。

「この……！！」

何人かは飛びかかっていった。が、紫は さらに一人の倒れている兵士から剣を一本拾い、片手に持ち、そちらでも応戦する。どの兵士も紫には敵わない。光頭刃と剣とを持つ紫は、鬼に金棒2本だ。紫ではなく蛭に襲いかかる者も居たが、蛭がマバタキする事もなく素早く、紫が片っ端から剣で斬りまくった。剣を2本持ち、何人来ようが攻めは片手で事足りる、その余裕が見事だった。

その間、国王を介抱する私。

「くっ……しまったな。私とした事が」

国王は胸元を押さえて悔しそうに呻いた。血が胸元から流れている。止まらない。斬られた所が悪かったらしい。

「そうか、光頭刃で斬られたら……」

そうだった。四神鏡を体内に持つ者は、光頭刃で斬られてもすぐには治らない。普通の刀や剣でダメージを受けても、たちどころに治してしまうのに、光頭刃だけは、即ち、私も光頭刃で刺されたら終わりだという事だ。そして、それを、どうやら、蛭達も知っているわけ？ どうなんだろう。

蛭と紫の手に邪尾刀がないという事は、鷓達が持っているという事だろう。とすると、セナ達は今頃、苦戦しているはずだ。とても、こっちに助けに来る事は期待できそうにない。

「嫌よ……殺されてたまるもんですか！」

私は、そう言って、そばで倒れている兵士の握っていた剣をとった。

紫が兵士と戦っている中、蛭と私は睨み合う。

「無駄よ、その剣は。光頭刃とやりに、そんな並みの剣じゃ歯が立たない」

そんな百も承知な事を言って、私の神経をあおる蛭。私達は睨み合ったまま、ジリジリとゆっくり相手の出方を窺って。

「蛭……あなたは、もう……仲間だと思ってた。今も……そう。違うの!？」

何度目だろう。また私は、しつこくも諦めずに懇願する。

戻ってきて、蛭……と。

でも、やはり、蛭の態度は変わりを見せない。

「紫。救世主を殺して」

私の名前も呼んでくれない。もう。

「わかっているの？ 四神鏡を集めたら、どんな事になるのか」

我慢しても泣きそうだ。泣いたりしたくない。

「殺して」

繰り返し繰り返し。

繰り返すだけの口。

「滅ぶのよ、世界は！」

叫びよ届いて どうか。

「殺せ！」

今一度。

「蛍！」

蛍！

「早く！」

最後、蛍は ありったけの力を言葉に込めた。苦しさに表情が少し歪んでいる。

蛍が早くと促した時だ。

紫の剣が私を……貫いた。

《第39話へ続く》

第38話（理想郷）（後書き）

【あとがき】

えー、次回は恐らく茶番劇が繰り広げられるかと思いますが（力
ツトしようかとも思いましたが書きます 汗）、何て甘い奴らだと
そう思っておいて下さいまし。

ブログ第38話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog.fc2.com/blog-entry-100.html>

読了ありがとうございました。

第39話（心の開花）

「勇気！」

遠くで声がする。まだ息があつた。

あの声はマフィアだ。

「勇気！ しっかりして！」

「勇気！」

薄く、目を開けた。

心配そうな顔をしたマフィアが私を抱き起こした。後ろでセナの顔も あつた。

「蛍……！」

キッと、マフィアが蛍の方へ顔を向ける……私はボンヤリとした視覚の中で、蛍の方を見る。

途端、蛍はガツクリとヒザを落とし「う……うわあああッ……！」と泣き崩れて伏せた。マフィア達も私も驚いていた。何も かける言葉が なく、蛍の泣き声が皆の内に反響する。

すると しばらくして、蛍の斜め後ろにスツと鶺鴒ひたきが現れた。

「やったじゃない。蛍。さ、早く取り出せば。七神の連中なら僕らに任せてよ」

紫の横には紫苑が姿を現した。

たぶん、隙を見て こっちに来てくれたセナとマフィアを彼らは追いかけてきたんだらうけれど……。

「……」

蛍は顔を覆っていた両手を離し見つめ、苦々しい顔をした。涙でグツシヨリとなった顔と手の平を見た鶺鴒は、訝いぶかしい目を投げかける。そして言葉で叩きつけた。

「早くしなよ。こんな所で2つも鏡が手に入るんだ。ラッキーじゃない」

「……………」

「レイの復活も間近だしさ」

！？

その言葉に反応したのはセナだ。身を乗り出し、「何だと!?!」と大きな声を上げる。

「あれ? ご存知じゃない? レイは復活のために眠っているのさ。力を蓄えてね。いや…………力をつけてる、と言っべきかな」と、鷓は指で口先をいじくりながら意味深な事を言った。

「力をつけている? どういう事?」

マフィアの問いかけに、ニツコリと満足そうな笑い付きで鷓は答えた。

「レイは力を温存して、さらなるパワーアップをめざしてるって事さ。紫苑に頼んで その眠りに ついてるってわ・け。今は代わりにハルカが指揮をとって、それで動いてるんだよね」

腕を組み、足でリズムをとりながら小歩きをしてみせる。私達の真剣な顔が面白くてたまらないんだろうか。憎らしい。

「パワーアップって…………さらに強くなるって事か!?! 一体、何故!?!」

「さあ? 悔しかったんじゃない? 救世主に してやられたのが」それを聞いたセナは視線を逸らし、難しい顔をした。「ハルカの指揮……………」

「そう。ご愁傷様。昔の友達同士で戦ってるんだもんねえ。風神のセナ君?」

と、ク、ク、と笑いを漏らす…………。

セナは舌打ちした。

「蚩。早くしなよ」

鷓の手に、なかつたはずの邪尾刀が現れた。そして しっかりと片手に握った鷓はブンブンと刀を振り回し…………セナとの攻防が始

まる。

セナと鷓、マフィアと紫苑だ。それぞれを相手に、戦った。セナとマフィアは苦戦する。鷓は邪尾刀を使うが故に。紫苑は妙な技を使うが故に。

鈍い金属音と、風の音と。飛び交う中、蛭は ゆっくりと天を見上げた。涙は放ったらかしにされて……。

「勇氣は……敵で ある私に優しくしてくれた。殺そうとしたのに……」 『一緒に行こう』 だって。バツカみたい」

光る雫は頬を伝い流れ落ちて。横たわっている私 勇氣を見て、寂しげに微笑む力の ない少女。

優しそうに……優しそうに。

「勇氣は言った……裏切る、っていうのは、気持ちを180度 変えちゃう事だって……何も変わってない。私の心は……勇氣の事を好きだって……この気持ちは」

震えは声の中にも。

「 変わってないのオツ！ ……」

……

蛭の叫びが皆の動きを止めさせた。

蛭の小さな体から、心の中のを全て吐き出すかのように。ありったけの力と想いを込めて叫びへと変え、解き放たれる。……

動きを止めたセナ達や鷓達、見守っていた兵士達や国王も、風や音も。世界の あらゆるものが動作を止め幼き黒い少女に注目する。

(蛭……)

私の視界は滲^{にじ}んでいた。これは涙のせいだと、言わなくてもわかる。

私は心底 嬉しかった。嬉しい……それだけで身体が満たされる。そして熱く、熱くなってきた！……

「紫！」

急に紫を睨^にむ蚩。その向けられた目は憎しみでは ない。怒りだった。

「私を殺しなさいッ！」

命令を下した。

決意。怒りは紫ではなく、自分自身に向けたもの。

「なっ!？」「!」

その場に居た全員が仰天して動揺で どよめく。

「何だつて!？」

同じ反応を鵜は した。

鵜は信じられないものでも見た形相をして、刀を下ろして蚩を見た。ドサリ……と、腰を落として正座して、力無く顔を傾ける蚩。

とても疲れた顔をして、涙だけが忙しそうに流れている。その何かを悟りきった表情は、皆の胸を締めつけた。

「私は勇気達の進む道には邪魔に なるの……早く、紫。お願い」と、黒い瞳は何処か……紫では ない何処かへと泳いでいたのを見せた。

蚩は自分の両の手を組み、祈りを捧げる真似をする。

紫は眉一つ動かす事は なく、ジリ、と前に踏み出して片手で兵士の剣を構えた。……

「……お望みと あらば……」

紫の、トーンを下げた少年の声からは感情が ない。

紫は剣を握る手に本気の力を込めた。

「やめて！ 紫くん！」

今にも近づき蛭に斬りかかろうとした所を制したのは、……私だった。

ヒョイと手をついて起き上がり、難なく紫の方へと駆け出して。紫の手に掴みかかったという。

紫は呆然だった。当たり前だけれど。

おかげで優に紫を止める事ができた。

「勇気！」

「お前、平気なのか体は!？」

当然、マフィアもセナも そう呼ぶわけだけれど。こっちはそれに答えていく余裕はない。それどころではなかった。よって無視。

私は紫を押しとどめたまま、蛭に向かって叫んだ。

「どの世界にも、邪魔者なんて居ない! だから死なないで!」
必死だった。

どうか届いてと願いながら。

やがて蛭はキョトンとして呆れた顔を……涙を拭かず、コクンと頷き、微かに笑った顔に変えた。

私には それだけで満足だった。

蛭の言葉は私には嬉しかった。胸が熱くなったの。もう、それだけで充分よ……。

蛭は わんわん泣き出して、何と私の元へと やって来てくれた。胸の内に飛び込まれて! ……泣き続ける。

気がつくと、鷓や紫苑の姿が なかった。

しばらくの静けさの後……カイトが城内の廊下を懸命に走ってこちらに合流した。

「おい。どうなったんだ? 紫苑が突然 現れて、さくらと一緒に

消えちまった……け、ど？」

精一杯に走ってきたカイトの目に映る光景は、私の胸の中でただひたすら謝り泣き続ける蛍。カイトにしたら異様な光景だったろうと思う。ハテナ、という顔で首を傾げるばかり。

「ごめんね、ごめんね……」

「もういいよ。よく頑張ったね」

と、私は蛍の背中をさすってあげた。

同じくして。

マフィアが国王の元へと歩み出た。負傷し動けない国王を気遣い、「大丈夫ですか国王」と声をかけた。すると国王は息を整えて、こう言った。

「民主主義……民との話し合いか……悪くないな」

少し笑う。

何かが国王の心にも生まれたのだろうか。

私は国王の言葉を聞いて……優しく2人ともに微笑みかけたのだ。つた。

数日が過ぎた。

四神鏡を狙って また奴らが襲ってくるかもしれないと思われ、しばらく滞在していたけれど。あれ以来、全く そんな気配はなし。

そこで、私達はココで ずっとジツとしている訳にも いかない。と、そろそろ旅立ちの準備を始めていた。

国王は もう すっかり元気に なり、他に負傷していた家臣や兵士達を見舞っていた。滞っていた書類などの整理にも追われて休む暇も ないと思われていたが。何と私が呼び出される。

豪華すぎる国王の仕事部屋、というものを想像しまくっていたのだけれども。アテは外れて普通の、何処ぞの大きな家にも あり

そんな規模の書斎へと通される。

横に広く、書類や本、ファイルなどで埋め尽くされようとしている仕事机が窓際に。部屋の中央には丸いガラス製の小さなテーブルを囲むように2人掛け、1人掛けの高級そうなソファが。そして国王専用なのか特別仕様と思われる装飾のふんだんに施された、頑丈でゆつたりとした椅子に、国王は足を組み威勢よく堂々と座って私とは向かい合っていた。

私はソファに座って、出された紅茶を飲みながら。緊張しつつも、国王と対談していた。

対談……。

各国 首脳 会議じゃないんだから……。

国王の背後、壁際に召使いのような人が一人立って居るけれど。こちらの話と一緒に加わりませんか？ つまんないでしょ立ったままじゃと。

聞きたくなるくらい、緊張なんて飛んでいったくらい。私と国王は仲良くなっていた。

これぞ救世主の力なんだろうか……。

ただの世間話にも見える話の内容だったんだけどね。

「……とまあ、選挙というものが ありまして。その地区の代表を選ぶために投票してですねえ……」

とか かんとか。最初、見てきたココの街の様子や外観とかの話から始まって、話は私の居た世界での学校生活とか暮らしぶりなんてのになり恥をさらしつつ（もう暴露していいやと諦めてトホ）。流れは政治の方向へと。私の知っている限りになってしまっけれど、よく お兄ちゃんがテレビを見ながら言っていた好き勝手な暴言も参考にと……まあ、想像に お任せします。

私の拙い知識と言葉でも、国王には理解ができるらしく しきりに頷いていた。さすがだなあ……。

「ふうん……選挙して投票か。なかなか斬新だな。面白い」

お、面白いんですか、そうですね。

「いいな それは」

んん？

「さっそく私の国も……と言いたい所なんだがな」

ええ？

「問題がある」

国王は言うと、紅茶の入ったバラの絵の描かれたティーカップを持ち、静かに一口、もう一口と優雅に飲んだ。

問題？

私は国王の様子をずっと窺っている。国王の考えている事は掴みきれなかった。

「なあに？ 問題って……」

国王は紅茶に浮かぶバラの花びらを見て、そして同じく浮かんで映る自分の顔を見ているのか……それとも 何処も見なくて、考えに耽^{ふけ}っているだけなのか。しばらく黙っていたが、やがて口は動き出した。

「家臣や兵士、民を説得させたり仕組みを根底から変えるなどという事は、そう容易^{たやす}い事ではない。相応の覚悟も いるし、しかも今現在に起きている民族間の紛争なり戦争なりも止めなければいけない。何も聞いてはくれぬだろう」

「……」

いきなり気が重くなる。でも それも仕方がない事だ。そうだな……。

「そうだね……規模も規模。人数も人数だよ……」

そう言いながら、私は ちょっと引けてしまっていた。向かう先が大きすぎて、手に負えない気が勝ってしまった。ついつい、自分は救世主なんですけど？ って、忘れてしまいそうになる……世界を救おうとしている救世主の方が規模が大きいはずんだけどなあ

……あれえ？

国王の重そうな話は続く。

「今まで縛っていたものが、いきなり自由になどなって。きつと皆困惑するに違いない。そこでだ」

「へ？」

国王は私を見た。国王は意味ありげに私を見ているが、私は自分を指さして目をパチクリとしているだけだった。

「協力してほしい」

国王が言った『協力』……一体、何だと思う？

ははははは……まあ、いいから。

私達一行は、国王の命により民族紛争の起こっている ある地へと運ばれた。

ピロタの泉と呼ばれる、周りを堆積岩で囲まれた自然のままの泉。この泉を巡って、タルナとバリという民族が争っている。

私達が着いた所は、下一面に泉が一望できるほどの高さの崖のてっぺん。崖谷の底に ある泉が広がる風景は壮大だった。ところが、泉の周辺では民族がお互いを見張るためか矢倉や陣営がポツポツと見受けられ、小さく人間は多人数と見られた。

てっぺんから、彼らの居る下までは距離が だいぶある。岩肌はゴツゴツとしているが、なかなか登りきるのも骨だろう。

と、色々辺りを見渡して。私は下方の兵達を見下ろしながらドキドキしてきた鳴り止まない心臓を落ち着かせようと頑張っている。

「じゃ、始めようか勇氣」

ドッキーン。

セナに声をかけられ、私は逃げようかと体が傾く。

「こら、何処 行くんだ今さら」

私の頭をこづいたのはカイトだった。マフィア、蛍に紫、メノウちゃんと。皆が居てくれている。安心、してい、る、よ、一応……。
「大丈夫。この辺り一帯は、岩に囲まれている おかげで よく響くから。さぞかし声は通りまくると思うよ。拡声器も あるし」と、カイトは適当に設置され準備万端なさまを説明してくれる。そうやって私から緊張をとろつとしてくれるんだけれど……。

「もう！ やるわよお！」

ファイト一発。

私は『用意』された舞台へと上がった。舞台、即ち下が見渡せる岩の上へと。

私の今している服装は、国王が用意してくれた。ヒラヒラと薄く透き通った薄い桃色の羽衣を肩にかけ、下には原色に近い赤と金、白で織られたチマ・チヨゴリ、もしくは仙女を連想させるような格好だった。

頭には金色の王冠。化粧も少々。髪まで外ハネに、整えられている。私は誰だ。

「おい……！ あれは何だ!?!」

私の被っている王冠は よく太陽の光に反射して光っている。パアア……。

下で休んでいた兵士の一人が気が ついてくれて、私を指さして叫んでくれた。

おかげで、泉の周囲の人達は皆。何だ何だとドヤドヤ騒ぎ出した。

「人だ！」

「誰だ!?! 誰なんだ!?!」

次々と騒ぎは大きく、うるさいほどに広がっていった。

そろそろ いいかな？

私が横目で目配せすると、その場に居たセナが精神を集中しコソコソと呪文を唱え始める……。

大突風が巻き起こった。

ビュウウツッ！

「うわあああ！」

「ぎゃあああ！」

「剣が！」

「わああ〜！」

ビュアアアアアア……ッ！

目下では風が四方八方吹き荒れて。剣も鎧の一部も飛ばされる飛ばされる。兵士達は一挙に大混乱に陥った。身構えたり、そばの枯れ木につかまってみたりと。とにかく飛んでいかないうようにと大慌てだった。

別に それを愉快に思うわけじゃないよ。ただの演出だった。

私は、大きく深呼吸。そして大声で叫んだ。

『鎮まれえい！』

ぴた。

声と同時に、風も兵士達の騒ぎも止まった。ほんと、思っていたよりココは声が よく響き通るみたい。ちゃんと下まで聞こえているらしかった。

そうそう、私は自分の世界じゃ放送部員。発声練習は最近サボっているけれど、それなりに やってきていたもんね！

何だか自信が ついてきた！ これならイケるぞ！

『私は天神に召喚された救世主だ！ よく聞け、愚かな者ども！

私は醜い争いを終結させるため、この地へ来た！』……

間が空く。

兵士達は段々と また、騒ぎ出していった。

「救世主……だと？」 「あの噂の？」 「まさか！」 「嘘だろ、決まってる！」 ……

そんな言葉が飛び交った。

すると今度はカイトが私の背後で意識を集中し、ピロタの泉の水を盛り上げた。

ザパアアアン、グルグル、と。大きく盛り上がった水は回転して渦となり、竜巻となって暴れた。もちろん、兵士達はパニックだ。『黙れ、こわっぱが！』

私、野次に向けて言い放つ。ちょうど言った後に水が そんなもんになった訳だから、兵士は水が私の力で動いているのだと勘違いしてくれている。よしよし。

しかし“こわっぱ”って。言い過ぎたかなあ？ まあいいか。

『肌の色は違うけれども、髪の色は違うけれども、誰かのために護るといふ精神は同じもの。お互いが血に染めあっても、何も解決はしない。どの世界でも、平和を願う心は ひとつ。同じだ……』

シーン……と静まり返った戦場。気分は爽快だった。ノツてきた。『見るがいい』
と、サツと手を上げた。

次に。マファイアが気を集中させ、泉の周りに。たちどころに緑色の雄々しい木々を作り出した。映像を早回ししたように木々はみるみる生長し、岩肌の この場所は緑で囲まれた泉になってしまった。

どよめく現場…… 「神だ！」 「神の力だ！」 「奇跡だ、本物だ！」
と、兵士達の気迫は上がったようで、それぞれ顔を見合わせ今 目の前に起こった事を素直に認めていた。

『こんな血で濡れた所でも緑は育つ。その生き様は、まこと素晴ら

しいものだ。その生命力を前にし、くだらない争いをしている　うぬらを……恥ずかしいと思わんのか!』

シーン……

再び静かになった空気を、一人の兵士が一步前に出て打ち破った。

「それでは救世主様！　この泉は一体、誰のもののですか!」

私は答えた。

『全てだ』

……

……偶然にも、ちょうど雲と雲の隙間から。いつの間にか隠されていた太陽の光が、さす……。

全てが私の味方に　ついたみたいなきぶんになった。救世主ハイ?

こんなムード満点、ノリノリ状態　絶好調な私は、太陽を指さし笑いながら宣言した。

『この泉を開放する。今日をもって兵を退け。民族同士の争いの時代は終わりだ!』

……

……

……これまでにない長い長い沈黙の後。

先ほど発言した兵士から、パンパン……と拍手が。

そして　それを機に。右から、左から、と。拍手が沸き起こり、音は次第に大きく重なって、鳥が一斉に飛び立ったかのように響い

ていった。

それから。

「神様！」

「救世主様！」

「万歳つ、戦争が終わるんだ！」

「救世主様が来て下さった！ もう安心だ！」

「救世主様！」……

と、“救世主様”コールが何度でも何度でも沸き上がる。

私はいえば。

ジーン、と。達成感に酔いしれていたんだなあ。よかったあああ。

……

と、ココで。説明をしておこうと思う。

実は国王が言っていた、『協力』とは……。

“救世主”という私の立場を利用して、こうやって猿芝居をしてだ（何か そう見える）。神の存在をアピールする。国民は国王が神だと押しつけられていたわけだけでも。こうして神、救世主が実際に救いに来たという事で。国民を安心させるのだ。

それから日を置いて国王の演説だ。改めて、国民の前で救世主と共に国王 自らが平和宣言をするという。

『私の不甲斐なさで皆に迷惑をかけた。だが、今日から安心して暮らすがいい。そう、私は今この時をもって平和を宣言する。即ち戦争の禁止という法を成立させる。これから私は国民のための政治をする事を誓う。そのため、平和の宣言と共に民族の自由独立をも約束しよう。不安がる事は ない。何故なら我々には、神の使いが居て下さるのだ』

国王の演説の後。あの泉とは、比べものにならないほどの大歓

声が襲った。

私と国王とは、民の前で握手をする。

拍手と歓声と笑いと涙。全てがゴチャゴチャの、歴史にも残り得る演説は。こうして幕を閉じていった。

……

「しっかし凄かったなあ……あの人の数。俺、まだ耳鳴りが止まないぜえ？」

と、耳を押さえながらカイトは後で背伸びをした。

夕食をとった後、私達は部屋で寛くわんいでいる。

「うん……何だか感動しちゃったわね」

マフィアが しみじみと頷く。

「しっかし、笑えるよなあ……勇気の あの格好」

と、クククと小声で笑うセナの頭にポカリと一発くれてやる私。プ
ンと そっぽを向いてやった。

「国王様の提案だったのよ。仕方ないじゃない……ま、気分よかつたけどさ」

と、思い出してみた。仙女の格好をした私……やっぱり体型が子供だよなあ……あんまり似合ってたような気がする。シユン。

「何は ともあれ。これで旅の再開だつて事だな……あー、長い寄り道だったぜ。俺、本当、疲れたわ。もう寝る。どうせ出発は準備も あるし まだ少し先だろ？ 寝るぜ。じゃな」

と、勝手にブツブツ言いながらセナは部屋を出て行ってしまった。

カイトがポツリと言う。

「なーんか……変な感じ……」

私はドキリとした。何故だか不明。そしてカイトの言葉は聞こえなかった事に した。

あんまりセナの事を考えるのは よそう……。
そう思っていたかった。

それと。

だいぶ時間が経って皆は忘れてくれているのが幸いなんだけれど。
私の刺された傷。

今は違う部屋で過ごしているはずの蛍達。紫に剣で刺された傷……。

剣は光頭刃だった。私は覚えている。これが おかしいという事
にも気がついてい……る。

私は邪尾刀だろうが光頭刃だろうが、刺されても復活できるとい
う事実を目の当たりにした。する事が できた。

でも どうして？

……

誰も答えては くない。

私は救世主……。

改めて、自分が何者なんだろうかという不気味さを感じた。背筋
に寒気すら感じた。

そして それも胸の内へと しまい込む事に……した。

《第40話へ続く》

第39話（心の開花）（後書き）

【あとがき】

次回また分割な予感……という事は話数が増。増えるワカメ現象で最終は何話になるんだろうなあ。

まさか100話なんて事は。ははは！

ブログ第39話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-101.html>

ありがとうございました。

第40話（血戦の終結とその後・壱）

出発の日。まさに旅立ち日和とでもいった風に、快晴だった。

すっかり支度を終え、私達は いよいよ出発する事となり、城門で国王と最後の握手をした。相変わらずの無愛想で、国王は固く私の手を握った。

「世話に なったな。勇氣」

「こちらこそ。こんなに食料と お金もらっちゃって……」

……

そう。国王は私達の旅立ちを聞くと、すぐ、持ちきれただけの食料や防具その他 諸々の生活用品と、多額のお金を用意させ私達にくれた！

最初そんな お宝（！？）を目の前にして、色めきたった私達だつたけれど何だか上手い話……という事で気が引けてしまった。で、断ろうとしたんだけど。家臣や兵の人達が目をウルウルさせて懇願してきた。

「そんな遠慮しちゃいけませんよ！ これでも まだ足りないくらいだ！」

「そうです そうです！ 我々が こうして生きているのも、あなた達が あの恐ろしい黒い男達を追っ払って下さったからだ！」

黒い男とは、全身 黒づくめタイツを着ている鷓ひたきの事だろう。

「先に逝っちゃった奴らも これで浮かばれるってもんだ！ 恩にきるぜ！」

「しかも、平穩に民族紛争が止められた！ あなた達は俺達にとつちや本物の神様だぜ！」

「ああ！ 国王の機転と あんたらの活躍の おかげで、この国も

安泰だ！」

「民族紛争の　せいでオラあ、まだ新婚ホヤホヤだったつてのに
くう……！」

「でも　もう終わった！　これで村へ帰れる！」

「ああ！　久しぶりに　おっ母かあの所へ帰れるんだ！」

「帰れる！」

「ヒヤッホウ！」……

と、後は祭りのように賑やか。話に　すっかり花が咲き、どうにも
断る事が　できなくなってしまった。

「……まっ、いいんじゃないねえ？　買い出しに行く手間が省けたし」

「そうそう。これで　すぐに北へ向かう事が　できる」

「わーい！　北へ行くんだねっ！」

と、私の肩に手を置いてセナが、後に続けてカイトとメノウちゃん
がニコニコと　はしゃいでいるだけだ。私とマフィアは肩を竦
めるばかり。終いにや、「まっ、いつか」と口を揃えて言う始末。

私達が呆れていると、いつの間にか話は進み、何と本当に私達の
門出を讃えて大宴会を始めてしまったのだ。

セナとカイトとメノウちゃんは、夜遅くまで騒いでいて。ぐっす
りと寝入ってしまった。

おかげで、翌朝の早朝に出発の予定が。だいぶ日が高くに　なっ
て今に　なってしまった、という訳で。

……

「じゃ……もう行きます。お世話に　なりました。どうか　ご無事
で……」

と一礼して、国王と握手していた手を離れた私だった。すると国王
は、腰に着けていた光頭刃を外し私の前に出した。

「え？」

「私からのせんべつ餞別だ。持っていけ」

仰天する。

「な……そ、そんな訳には いきません！」

と、私は差し出された光頭刃を押し戻した。

「これが ないと、また奴らが国王の体の中の鏡を狙って来た時、歯が立たないじゃないですか！ もらう訳には いきませんよ！
いくら何でも！」

私は断固 拒否。私の後ろに居たマフィアも うん、と頷いた。
しかし国王は出した手を引っ込める事は ない。

「もう よいのだ。自分の身は自分で護る。私は今回、いかに自分が この剣に頼りすぎていたかが よく わかったのだ。それに……」

と、国王はチラ、と横に控えていたサンゴ將軍を見た。すると彼は「はい」と言つて、部下から何かを持って来させた。紫色の布に被り、小台の上に のせられていた物…… 金色の鉱物だった。

「これは……？」
見せられた物を見つめる。手の平に のるくらいの大きさの金の塊…… のようだけれど、よく見ると透けているような……。

「ピロタの泉の近くの鉱山で、これが採れるように なったのだ。この大陸一帯に伝わる昔話の中で出てくる幻の鉱物…… オリハルコン」

「オリハルコンだって!？」

オリハルコンと聞いて声を上げたのはカイトだった。身を乗り出し、間近で鉱物を眺める。その見る目も同じくらいに輝かせて。

「こ、こんな所で見える事が できるなんて……！ 感激だ！」
「一体、そのオリハルコンが どうなの？」

訳の わからないマフィアがイライラして聞く。するとカイトがキラキラした瞳でマフィアを見る。

「物の価値を知れい！ 話せば長くなるが これは昔、勇者アバド
ンが精霊王から祝福を受けた時に一緒に授かったという、光の剣の
だなあ……」

「そんな長い話は いいから、つまりは これが どういうものだって言うの!？」

眩しがっているマフィアが さらに厳しく言う。 おお怖ッ。

「自然界の中で、最も硬い鉱物だ。竜ドラゴンで さえ一撃で済まされるといい」

興奮しているカイトの代わりに国王が説明してくれた。なるほど。

「って事は……」

「つまり?」

「どついう事でしょう?」

国王は少し笑みを浮かべて言った。

「光頭刃ほどでもないだろうが、私は これで剣を大量に造り、皆に持たせるつもりだ。そして私自身も技と腕を磨く。お前達に持たせた武器なども、オリハルコン製なのだぞ」

そう言われ。私達は それぞれが持っていた武器を見た。紫くんは長剣で、その他の皆は短剣(マフィアはムチも)を一つずつ所持していた訳だけれど。よく見ると、刃の先までスッキリと その鉱物と同じ種類の物だった。

マジマジと見つめ、「しえー……」と ため息を漏らす。

「でも、これだけで充分じゃ? その上 光頭刃まで……」

恐る恐る聞き返す。しかし国王は首を振った。

「邪尾刀とやらを防ぐには、やはり、神の造りしものには神の剣で立ち向かわなければ。格好つかんだろう?」

そう言って、ガイと私の胸元に剣を無理矢理 渡した。

「……ありがとうございます……国王……何から何まで……ホント……」

感激の あまり涙が出そうに なった。

「あ、そうそう。それから」

と、国王はポケットの中へ手を突っ込んで、ゴソゴソと何かを取り出した。

私達 全員、「まだ何か出るのかっ!？」と身構えてしまう。

ノンキだったセナ達も顔が引きつっているのがわかる。おかげでびつくりして私の涙は引っ込んでしまったけれど。

「これを」

国王は一枚の紙切れを渡した。

そこには読めない字で10行ほど書かれていた。

「これは？」

「私のサイン入り通行 手形だ。これが ないと、国の関所は抜けられんだろう？」

と、聞かやいなや。私達は脱力。

そうそう、そんな事 考えてなかったわよねー。

「また……青龍を封印したら、立ち寄ってくれ。歓迎する」

国王は また、口元に微かな笑いを含み優しい目で私を見た。

「うん。絶対 見に来るよ。変わった……この国を」

短い間だったけれど、色んな事が あったね。

きつと……忘れない。あなた達の事。

「絶対 来て下さいね！ マフィアさん！」

と、急に横のサンゴ將軍が目の端に涙を溜めて、マフィアに向かって大声を出した。マフィアは苦笑いだった。

「それじゃー！」

「ああ」

「お達者でー！」

「生きて帰って来て下さーいっ！」

「絶対ですよー！」……

また お祭りに なりそうな雰囲気。

私達は いつまでも いつまでも こっちに手を振って笑いかけている国王や家臣、兵士達の姿が小さくなっていくのが少し寂しかった。何度か振り返っては、何度も笑った。

……さあ、行こう。

北へ。

旅の再開へ。

レイの元へ……そして、青龍の封印へ。

途中、ユリ砂漠で3日ほどキャンプし、『国境の壁』という所に辿り着いた。

『国境の壁』……何か大げさだなあと思う？

そうじゃない。前方 上方、見渡す限り『壁』なのよ！

つまり、どういう事かかっていうと。雲まで届く巨大な黄色いレンガ造りの壁がズラー……つと、左右にも広がっているわけ。そのあまりの巨大さと いったら。

「どうやって こんな造ったんだろ……」

カイトが首をほとんど直角に曲げて上を見上げていた。

ほんと。何のために こんな造ったんだろ？ やっぱり他の国から自分の国を護るため……だろうなあ。でも、それにしても費用も人手も かかりすぎるんじゃないの？ なんて気が してくる。「あれが関所なんじゃない？ ほら、馬車とか人が並んで……」と、マフィアが指さす方向を見ると、確かに一列に人や馬車なんか並んでいる。

壁にポツカリとトンネルが。この壁の巨大さからして ちつぽけな穴だけれど。4トンだろうが10トンだろうが、トラックでも易々と通れそうだった。

トンネルの前で兵の男が数十人居て、通ろうとして並んでいる人や荷物を入念にチェックしているようだ。一人に対して時間が結構かかっている。

「とにかく並んで待ちましようか……」

マフィアが並んでいる人数を眺めながら、仕方なさそうに言った。

それもそう。

蛇の道みたいに、結構な人数の人が並んでいるからだ。それこそ何十人居るってんだろうか。これを全部 荷物とか、身元とかを調べていくわけ？ 厳しいなあ。

列に並んでいる待ち人達はシートを敷いて座っていたり、はたまた寝転んで昼寝していたり。こんな所でも商売していたり、笛を吹いて音楽を楽しんだり歌ったりしている。

セナとカイトは眠たそうに あくびしているし。

私達は最後尾に並んだけれど、まだまだ これから時間が経過していく事を考えると……ゆうつつに なってきそうだった。

何か ないかなあ……と。私はキョロキョロと周囲を見回した。すると。

「ん？」

関所の辺りから、上へと続く階段らしきものが あるのを発見する。

何だろうか、と階段の先を目で辿っていくと……壁に沿って続く階段は、ある程度に上まで行くと折り返して また上へ。そしてまた折り返して上へ。ジグザグに見えた。

壁と一緒に、てっぺん は雲に隠れて見えなくなっている。

私はピンと閃いて、思わず走り出してしまった。

「えっ、おいつ。勇気、何処 行くんだよ!？」

後ろからセナが慌てて呼んでいる声が した。

しかし言う事を聞かず。というか聞いて おらず。私は列から外れて壁へと走って行ってしまっていた。

「セナ、あんた行ってきなよ。どうせココから動けないし。退屈だろつからね皆。私が並んでるから」

と、マフィアが言ってくれていた。

「すまない」

セナは それだけ言っただけ私の後を追いかける。

「俺らも居るし。メノウ、退屈だったら適当に遊んできてもいいぞ」
「うん、後で行く」

「暑いわねえ。テント張らない？ どっかで」

「向こうの日陰に張りましようか……」

と、カイト達や蛭達が相談したりしているのも全く知らず。

私は お先に関所に居る兵士に話しかけていたのだった。

「ねえ。ひよつとして、この階段……てっぺんまで行ったら、上から向こう側が見れるの!？」

いきなり袖を引つ張られて興奮気味に私に尋ねられた兵士の男は、びっくりした顔を私に向ける。やがて落ち着いて笑いながら言った。

「ああ。一応 展望できるよ。そうだなあ……ま、往復4時間はかかるかな。どんなに急いでも」

「4時間……」

腕を組みながら考える。

上まで行って帰ってくる時間と、検問での待ち時間。どっちが早いかなあ。でも空まで上つてみたいし。そこから見える景色なんて想像できない。せつかくのチャンスなんだけれどなあ。

諦めかけて残念がつっていると、背後からセナの声が した。

「行けるよ。てっぺんまで」

そんな事を言う。私は目を丸くしてセナを見た。

「へ!？ だつて4時間も かかるんだよ?」

腰に手をつけて、平然としているセナ。何その余裕。

「片道2時間だろ? まあ順番が来るのも そんなくらいだろ。OK、シャシャツと行って帰って来ようぜ」

シャシャ……つてアంత。

私は難しい顔をして「でも……」と尻込みしているけれど。

「おい! マフィア! ちょっと上まで行ってくる!」

大きな声でマフィアに呼びかけ、「さあ行こう」と私の手を引つ

張り出した。

階段を上り始める。

私はズルズルと、セナに腕を引っ張られて訳のわからぬまま連れて行かれてしまった。

「し、死ぬ……」

「ほら、さっきまでの元気は どうした？」

先に行くセナのスピードは、落ちる事は ない。私は必死になつて ついて行く。

そりゃあ最初は楽々と、調子に のつて2段も3段もピョンピョンと飛び跳ねながら上っていったりしたわよ？ でも段々と疲れてきて、一段一段 普通に歩くようになって、終いには無口になつてきて……で、今は この有り様。

何度も何度も「もうダメ」とか「しんどい！」とか弱音を吐きまくり。それで そのたびに先に行くセナが励ます。

「オメー、俺より若いくせに体力なさすぎなんじゃねえ？」

ぐわっつ。

こ、この野郎っ……。

「何よ！ 私、女の子なんだから！」

と、ない胸を張って答えてみた。

「調子いい奴ー。こういう時ばっか女だからって言いやがる。フン、マフィアを見習え！ マフィアをっ」

何とアツカンベーをしてスタコラサツサと前を向いて行ってしまった。

は、薄情な奴……出会ったばかりの頃の あの優しさは幻と消えたっちゅうんかいっ。

「あつ！」

セナを追いかけようとして、つまずいてしまった。ステンと前のめりに転ぶ……よかった、手で受けた おかげで段の角には顔が当たらなかつた。

その代わり、角に当たった手の平がヒリヒリする。

「つたあゝ……」

右ヒザも擦りむいたらしい。ちょっと皮が めくれていた。血は出ていないし、たいしたケガじゃないけれど……。

「……」

……何だか、情けなくなってきた。

さっきのセナの言った事が思い浮かぶ。

そりゃあね、マフィアは女なのに たくましいわよ。料理もできるし、初めて会った時、あの孤児院で子供達の面倒も看てた。マザーの看病も。それから、魔物や鷓達と戦う時だって、ひるまなかつた。それどころか自分から向かって行ったもの。

南ラシー又国で鷓と紫を相手に大ピンチに陥った時、マフィアは私に「大丈夫。私が あなたを護る」って言うてくれたっけ。私、あの時ドキンって したもん。女同士なのに（変な意味で なく）。私って足手まといだよなあ……助けられてばかりだもん。前にも こういう事で悩んでいたような気が する。その悩みが今また、復活しちゃったかな……。

とにかく、これ以上お荷物に なるのはゴメンだ。

今なら間に合うよね。ココから下へ戻ろう。せつかく一生懸命 上ってきたけれどさ。

だって これから次の所へ行くっていうのに、疲れちゃったら余計な迷惑かけちゃうもんね。何で もっと早く気が つかなくつたんだろう。

私ってホント、考えなし。レイの事、尊敬しちゃうわ……。

「何、そんな所で へたり込んでんだ。しかもボーツとしちゃって」

顔を上げると、セナが私の様子を窺っていた。

「……何でもない」

私は口を『へ』の字に曲げて立ち上がった。パンパンと服に付いた砂を落とすと、上ではなく下へ向かって下り始めた。セナが当然驚いて追いかける。

「おい。待て！ どっち行っただよ！」

と、私の腕をグイと引く張る。

「皆の所、戻る。下りは楽だし、それに私もう、疲れちゃったもの。私はセナと顔を合わせず、そう言っただよ。セナの掴む手を払いのけようとした。だがセナは さらに強く私の腕を掴んだ。

思わず「イタッ」と声を上げて見ると、セナは真剣な顔で睨んでいた。私は何も言えなくなった。

……怖い。

そう思った時だった。

ヒョイと私を抱っこして抱え上げ、階段を上って行くではないか。えええっ!?!?

「なっ……何すんのよ！ おろしてよ！」

私は真つ赤な顔をしてジタバタと暴れた。

「ジツとしてろ！」

セナは怒鳴ると、無言で階段を上って行く。

表情を見ると、何処か遠くを見ているような目。

私は もう逆らわず、ただセナに運ばれて行くだけだった。

着実に、上から見下ろす景色が遠くなってくる。マフィア達の姿も もう、判別が困難だ。離れて行った先には、私達が3日かけて横切ってきた砂漠が見渡せ広がっている。何て高い所まで上って来たんだらうと思っただ。

南ラシーヌの城も見える。ポツポツと村や街も。今居る場所からでも充分に風景を見て楽しむそうなんだけれどなあ。

息が苦しくなってきたのは気のせいなんだろうか。セナは疲れて

ないのかな……？ セナに抱っこされている おかげで色んな事を考えてしまっただけね。

あれ？ セナの腕って こんなに太かったっけ……？

私は、セナの腕に注目してみた。

今まで何度かセナに抱きかかえられた事が あったけれど、その時に比べて、だ。細い事は細い腕なだけけれど随分と筋肉が ついた気がする。

……あ、そっか。

やっと わかった。バイトの成果だ！ セナが合間に ちょこち

よこ やっていたバイト！

バイト……って、確か工事関係だったわけよね？ 完璧 肉体労

働じゃないかああ！

そうか……それで こんなに体力があるんだわ。そりゃ男だし、体力は元々ある方だとは思っていたけれど。一週間か そこの期間の働き詰めバイトで、さらに体力と筋肉が ついたのね！

うっわー、面白い！ たくましーい！

私は吹き出しそうになるのを堪えながら、セナの腕をツンツンと つついてみた。

「？ 何だ？」

私に好き放題に思われているのも全く知らず、セナは呼ばれたと思っただけを見た。

「え？ うっん。何でも なあい」

と、しきりにニヤニヤしている私の顔を見て不思議がっている。

セナには悪いけれど、おかげで悩みが どころに行っちゃったわ！ うふふふふ。

私という お荷物を抱え どれくらい時間が経過しただろう。
まだ着かないのかなあなんてノンキに考えていた私。するとず
っと黙っていたセナが話しかけてきた。

「お前さあ」

「え？」

表情からは何も読みとれない。でも何故か少し緊張して手に力が
入った。

「俺が居なくなったら……どうする」

「え……」

嫌な感覚が襲った。一瞬の事だったかもしれない。私は自分の心
臓の大きな音を聞いた。

どうして突然、そんな事を聞くんだろうか。

「どうする……って？ そんな事 聞かれても」

「だからまあ、もしも だよ。そんなに深く考えなくてもいい」

「そりゃまあ……嫌だけど……でも……」

セナとの会話を続けていくうち、言葉の先が見えなくて どうし
ようという焦りが生まれた。ハッキリ返事が できない。

「俺ナシでマフィア達と一緒に、レイを倒しに行ったり青龍を封印
しに行ったりとか、できるか？」

そんな事を言う。

「それは無理でしょ？ 『七神創話伝』でも七神は、救世主と共に
行かなくちゃいけないような事を言っていたじゃない」

「それは そうだけど、だから……もしもだよ。もし俺が七神の一
人じゃなくて普通の人間だったとしたら……勇氣は、一人で やっ
ていけるのかって。そういう事」

……？

よく、わからない。

「セナが普通の人間だったら……？ そりゃ、一人で頑張るわよ。早く七神を揃えて……」
と、答えてみるけれど。

「口で言うだけなら簡単だけどな。でも実際は違う」
そんな風に返されてしまった。

……。

セナは言った途端、険しい顔になった、また。そして私は何も言えなくなる。

繰り返したね。何だか。

セナは少し ため息をついて続けた。

「例えば、この階段」
「階段？」

私と話しながらも、セナが休む事なく一段ずつ上っていく階段だ。時々折り返すだけで、常に上へと伸びる階段。先は霧……雲の中で、階段が壁伝いで ある景色は どれだけ行っても変わらない。

「この階段の先にレイが待ち構えていたとしたら、どうする？」

私は素っ頓狂な声を上げた。「ええ！？ レイが！？」

「だから例えば だって。例えば、この道のりがレイに辿り着くまでの障害や困難だったとしたら、お前は さっきみたいに相談もなしに勝手に決めて引き返したりすんのか？」

「……」

「ちょっと つまずいたり疲れただけで止めちまうような、そんな生易しい旅は してないだろ、俺達は」

「……うん……」

「疲れたり悩んだり、しんどい思いをしてるのは勇気だけじゃないんだ。マフィアだって、ああ見えて重い体 引きずってんだぜ。カイトだって、俺らの知らない所で魔法の特訓したり人形 売ったり

して稼いだりしてるし、メノウも旅の疲れ隠して無理してる。蚩や紫だつて、レイに負い目を感じて苦しんでる。皆、辛いけど頑張ってるんだ」

「……」
「もちろん、勇気も頑張ってるよな。お前は お前なりに気を遣って。だから自分で やろうとするんだろう。」

でも、わかってほしい。誰に迷惑が とかは、あまり考えるな。迷惑なんて誰でも かかるに決まってる。じゃあ どうすれば最小限の迷惑で済ませられるのか 俺達に相談なり なんなりすればいいんだ。一人で落ち込まず、前向きに考えてくれ」

……。

……そっか。

私、自分の事しか結局 考えてなかったんだ。

何でも かんでも自分だけで決めちゃって。

この階段だつて最初に見た時、いきなり走り出さないうでマフィア達に相談すれば よかったんだ。それから、自分の体力の事をもっと考えるべきだった。早く気が ついてセナにも ちゃんと言ってみれば よかったんだ。……

セナの言うように……自分一人で考えていたってダメなんだ。一人で悩むより……誰かに聞いてみてからに すればいいんだよね。私の周りには、セナ達 皆が居てくれるんだしさ。

それに もつと周りの人達の事を考えてみたりしなくちゃ。マフィア達や蚩達……皆が それぞれ辛い思いをしてるんだって事、あまり考えた事が なかった。セナに だって、ヤキモチみたいなの やいちゃったりして。急に怒ったり落ち込んだりして……辛いの

は、セナに だってあるのに。レイの事、ハルカさんの事……私の知らない事でも、悩んでいるのかもしれない。

勝手に行動して皆に心配や面倒かけてばかりで。でも後からグチグチ悩んでいたたりしてさ。なんて進歩がないんだろうか。

私、子供だ。子供なんだ。今ようやくハッキリわかった。どれだけ背伸びしても。

大人には、なれない……なれないんだよ。人の手を借りるしかないんだ。……

「ごめんなさい……」

私は顔を埋めるようにして、泣きそうに謝った。

泣く？

ううん、泣いてたまるもんですか。

だって私は これから すっごい怖い青龍に向かって行くんだから！

救世主、なんだから！

セナの言う通り、前向きに頑張ろう！

ピタ。

「ん？」

セナの足が止まる。私は埋めていた顔を上げる。

セナは前方、そして地面の一点を見ている。

どうやら次の階段への折り返し地点なんだけれど、少し場が開けた所に出るみたいだ。

「どうしたの、セ……」

肩に手をついたまま、体をセナの視線の先へ。そこには。

「魔法陣だ……」

《第41話へ続く》

第40話（血戦の終結とその後・壱）（後書き）

【あとがき】

セナの抱っこに慣れたか勇氣。いいなあ軽くて（そっちかい）。

ブログ第40話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-104.html>

ありがとうございました。

第41話（血戦の終結とその後・貳）

セナは私を地面へと おろした。

ずっとずっと、折り返しながらも続いて上へ上へと繋がってきた階段。それなのに。

今、私達が居るのは次の折り返し地点で、少し開けた場所だったのだけだ。

「魔法……陣？」

私がセナの漏らした声に反応して、セナの見つめる先を見た時だ。確かに、前方の床には。そのまま踏んでも消えない白い絵の具が何かで描かれた円陣の紋様。字でも書いてあるのかなあ？

「『この先ひとつ飛び』……」

セナが またまた聞き取りにくい声で呟く。

「ひとつ飛びい？」

セナを見た。考え込んでいる様子で腕を組んでいる。

「って、魔法陣の中に書いてあるようなんだけど……」

チラ、と横目で壁側を見た。

折り返し地点の先の階段は、まだまだ続いているらしい。辺りは少しずつ霧が濃くなって、息も苦しくなってきた。セナは涼しい顔をしているけれど。しんどくはないのだろうか？

「勇気。頭が ポーっと したりとか、息苦しくないか？ 高い所だからな」

と、セナが私の顔色を窺ってきてくれた。言われてピョン！ と背中を伸ばす私。

そかそか。私がセナの事を心配するよりもだ。「ちょっと……」
と、私は正直に答えた。

「じゃ、そろそろコレの出番だな」

セナは言っと、ズボンのポケットから2つ。ゴソゴソと探っ

さい何かを取り出し見せてくれた。

「？ コレは？」

「ラクラクの実。体を膜で包む感じで、身を護ってくれるんだよ。高山に登る時なんかに重宝されているんだ。ちと苦いけど」

セナの渡した それは、指先ほどの大きさの黒っぽい赤い実だった。受け取った私は気兼ねなく口に入れた。

本当に苦い……。

く、薬みたいな味が する。

思わず顔に出てしまうと、セナの口元がフツフツと笑った。

セナも口にヒョイと一つ放り込むと、「さあて、行くか」と前に進み出る。

え？ 何処に？

「行くぞ。この中だ」

魔法陣の前に、私を手招きしている。私は慌てて ついて行き、セナの腕に掴まった。

置いて行かないで、と……ちょっと甘えてみました。

私は子供……ごども、ごども。

「ホイ。せえの」

私の肩を引き寄せ、一緒に魔法陣の中へ入っていった。するとだ。

ヒュン。

景色が一瞬で変わる。

まさに瞬間的だった。

痛みとかは なく……次に感じたのは、強い風だったのだ。

ビュオッ。

「わぶっ……」

突然の横からの風に、スカートが めくれそうに なりながら。髪を押さえて、目を閉じてしまった。

セナも同じだったようで、私よりも目を開けるのが早かった。

「すっ……………げえええ……………」

私から離れたセナの、驚きモモの木の声。とても はしゃいでいる声が聞こえた。

私が ゆっくりと目を開けると、そこは……………。

「……………」

落ちないようにとレンガで設けられた塀の向こう。先に走ったセナが、身を乗り出しそうになりながらも前方を興奮 気味に見渡している。

私も隣へと……………そして景觀に圧倒された。

「すっい……………」

遠方の地平線。青く連なる山々、山脈。それより こちらは薄い雲で地表が覆われている……………が、薄っすらと見えるのは、何色とも言えないけれど何色かが集まって混ざってできた集落が四方八方。恐らくは河と思わしき線を大河一箇所から幾十にも引っ張ってきているように伸びている。それも青く見えて。

緑のように見える色彩の広がり。きつと森ね。種類が違うのか、あの緑、この緑といった風に個性的な緑が集落と同じく地表で個々固まって……………。

「天上に居るみたいだ……………」

ココは空の上？ 私達は どれだけ天に昇って来たというのだろうか。

壮大すぎるスケールに打ちひしがられ、感動というものを身で知った思いだった。

「こんな……こんな」

涙さえ出てきそうだった。上手く人に伝えられない。

胸の高まりは抑える事が困難だ。それは きつとセナも。誰だつて。誰だつて、きつと……そうよ……。

自分が神様と なって世界を見下ろす。もしくは。

この大自然の前には、ひれ伏すしかない諦めるのか。どっちかに思えた。

「……」

風が私達を歓迎する。

とってもとっても優しい風……殴られたかと思った風じゃない、あやされているような温かい風が。

私達も自然の中に入れてほしくなる。

それとも、入れてくれているの？

「すっごーいーい!!」

「すっげえええ〜!!」

「やっほお〜!!」

「あほお〜」

「イチゴのシュークリーむっ〜」

「トンチキのミソあえ〜」

好き放題に叫んでいる。叫んでも叫んでも何も返っては来ないけれど。

「はあ……」

「気持ちいいな……」
体を思う存分に伸ばしたりヒザを曲げて屈伸したりしながら、
ごく爽快な気分になった。
もう今なら天に召されてもいいんじゃないか。背中から羽が生え
てきそうだった。

「なあ、あれ……何だろう……？」

ふと、セナが片腕だけを扉に かけて私を呼んだ。

「？」

呼ばれて私がセナの視線の先へと目を凝らして見るとだ。小さな丸くて黒い『点』が地表に見えたのだ。

本当に、ただの『点』。ドット。あれは何だろう？ 集落や川、森とは違う『点』。

黒く見えるけれど……？

「何だろ？ あの、『点』……村？ でも黒いつて？ ココから割と近そうに思えるけど……」

私が言ったとしても、セナだって悩んでいるだけだ。

「うーん。気になる。ちょっと行ってみねえ？ これから」

「うん、そだね。私も気になる」

と、意見は一致。当然だよな、といった顔をする。

しかし すぐにパツと私の表情は一変した。

セナの肩を揺する。

「ねえ！ 早く帰らなきゃ……！ っていうかもう、皆 関所 越えちゃったんじゃない！？ だって もう2時間なんて経ってるんじゃない。ど、どうするの！？ 手形はマフィアが持つてるから……あ、でもマフィア達の事だから待ってってくれるのかも。やだ、せっかく並んでくれてたのに、むざむざファイにするようなマネ……！」
私は顔面蒼白だった。

混乱してバタバタと行ったり来たりしている私をセナが落ち着け、

と　なだめた。

「まあ、そんな慌てなさんなって。言ったら、大丈夫だって」
セナは　そう言うと、私の肩に手を置いてニツと笑った。

「え？」

何故だか、セナの顔を見てゾツとした。

何、それ？

余裕？

訳が　わかりません。

「確かに。ココを普通に下って行くには、あと2時間は　かかる
計算。いや、疲れてるし、3時間かもな」

なんて、景色を見下ろしながら頭を掻いていたりして。

「そ……それじゃ、なおさらダメじゃん！」

私が泣きそうに訴える。しかしセナの余裕とも見れる態度は変わ
らない。何で！？

「誰が下ってくって？」

そんな事を。

「へ？」

いきなりセナは　んしょ、と私の体を軽々と持ち……上げた。
また？

「行くぞ！」

「へ？」

すぐ。

塀を乗り越える。

塀を……つて。

塀の向こうは空。

つて事は、つ、ま、り。……

……。

足元に地面が　ない。

「イチかバチか」

セナが真顔になる。それも あつてか急に、さらに怖さ倍増だ。
「どういう事よお!？」

半狂乱で泣き叫ぶ私……の体を引き寄せてきたセナだった。んん
!？

立った格好に なって、落ちながらも、しっかりと手は握つてく
れたまま。

「何を……?」

と心配そうにセナの顔を見上げた私に耽々と言った。

目が真剣に。

「地上……下から風を起こす。で、ブレイキをかける。凄い風が襲
うだろうから、しばらく息止めて歯あ食いしばって、目エつぶって
な」

アレコレと一気に注文づけた。

な、な、な、何て!？

下から風を起こしてブレイキ!？

ひええ!？

「行くぞ!」

……

慌てて私は混乱しがちな頭で言われた通り、固く身を縛って目を
つぶった。祈るように手を合わせ組み、セナに引き寄せられたまま
で 我、運命や如何に、と念じていた。

ジュ。

ひっ!？

ビュオオオオオオウツ！

風が下から吹き荒れた。「　　！　　！」

息なんて できないい！

台風でも直接 攻撃で訪れたんじゃないだろうか。

重力さえ理解が できなくなつた。どっちが下！？

飛んでいくううううう　　！

ビュオオオ……！

オオ……

……

……

時間 感覚も狂い、自分の存在すら危うく忘れそうになつた途端だ。

ぼすつ。

全身に、柔らかい感触と衝撃が伝わつた。柔らかいとは言つたけれど、突然の衝撃で硬いんだか柔らかいんだか、わからなかつた。

はへえ……？

私、どうなつたの……？

「勇気いいッ！」

私の名前でハツとした。

そつだ、私は勇気……そんな事は どうでもよくつて。

恐る恐る目を開けてみた……。

飼葉や木の葉が集まつた、固まりの上。相当 大きめな。

私とセナは、そこで転がっていた。

兵士や、おじさんやら おばさんやら……マフィア達が私達を取

り囲むようにして集まって来ていた。

半身を起き上がらせた私は、呆然としている。するしかない。

というより、腰が抜けていた。恥ずかしいと思う気持ちなんて湧き上がって来ないくらい思考力は飛んでしまっていて、マフィア達が言っている言葉の意味が全然理解できなかった。

「勇気！ セナ！ ……もおお！ どうなるかと思ったわよ！」

言葉の内容はわからなかったけれど……ああ……マフィアの声は、何だか とっても懐かしく響いていた。

「全く……こつちじゃ、大騒ぎだったんだから！」

と、プンスカと、マフィアは ずっと怒っていた。面白がって手を叩いているのはカイトとメノウちゃんだけだった。

並んでいた列でテントを張り、腰を落ち着けた後。やっと現実感を取り戻した私とセナに、マフィアの説教が降りかかる。

「ほんつと、あいつら遅えなあーって思ってたらさ。前列に並んでいた人達が上の方を見上げたり指さしたりして『おい、あれは何だ！？』『鳥か！？』『魔物か！？』『いや違う、人だ！ 人が落ちてくるぞおお！』って騒ぎ出して。まさかと思ったけど、やっぱり勇気達だったんだな」

「びつくりしちゃった。まさか落ちてくるなんて」

と、カイトとメノウちゃんはキヤピキヤピ喜んでいる。

「心臓 止まるかと思ったわよ！ セナ、あんた無茶すぎなの！

勇気に もし万が一 何か あったら、どうするつもり！？」

マフィアが物凄い形相でセナに詰め寄っていた。

「おいおい、俺の心配も してくれよ」

セナは苦笑い。マフィアはフン！ と そっぽを向いた。

「でも ちょうど木の葉が集まってて助かった。クッション代わりに なってくれたもの」

と、私が話を逸らそうと頑張ると、蛸が横から口を出した。

「マフィアが慌てて そばの荷馬車の荷台から、飼い葉とかを運んだのよ。素早く魔法でね」

私はハツと気がついて、マフィアに頭を下げる。

「そ、そうだったの。ごめん、マフィア……ありがとう……」

……そっか。そうだよね。この辺、草なんて生えていない。咄嗟の判断で こしらえて作ってくれたんだ、マフィア。すごい。ナイス行動力。

「それより、どうだった？ 上からの展望は？」

マフィアは気を取り直して笑顔で聞いてきた。

私とセナは、鼻息荒げに興奮しながらマフィアに詰め寄る。

「すごかった！」

「すごかったぜ！」

両手を握り締めブルブルと震えながら。「そ、そう……」と、完全に引いていたマフィアだったけれども。

「そうそ。この関所を抜けたら、ぜひ行きたい場所が見つかったんだ」

と、私が提案を持ちかけると、皆の関心が集まってきた。「え？

何処どこ!？」

私の代わりにセナが説明してくれた。

「あの、黒い『点』……上からじゃ遠すぎて『点』にしか見えなかったけど。たぶん あれ、『村』だと思う」

結構、真剣な顔つきで話していた。

「黒い……村」

皆で考え込む。それぞれ黙って黒の不思議を解明しようと思っていた。

すると、前に並んでシートを敷いて座っていた商人らしき おじさんが話に割り込んできた。

「そりゃ、真黒村の事だっぺよ」

形のいい あご髭を撫でながら、細い目をさらに細く。私が聞き返した。

「真黒村？ 何故 あんなに黒いのですか？」

「行った事は ないけどよお。真黒村っていうのは、そう、後から呼ばれるようになったつぺな。昔はイルサ民族の住む普通の民族村だったらしいつぺが……10年ほど前を境に、ご覧のような村になったつぺ」

さらに偶然に横を通りがかつた門兵が居て、話に参加してきた。

「ばか。あそこは村じゃない。廃村だ。人は住んでいないさ。魔物が棲んでるって噂だがな」

廃村？

「イルサ民族の……？ じゃあ、イルサ民族は何処へ？」

私が聞くと、門兵はポツリと言っただけだった。

「滅んだんだ。村と共にな」……

それ以上の情報は得られなかった。

国王の通行手形の おかげで、難なく関所を越えられた私達。

この大陸って、砂漠が本当に多い。南の方は緑が多かったのに、北へ来れば来るほど砂漠を歩いてばかりな気がする。『国境の壁』に来るまで、ユリ砂漠を横断するのに3日かかって来た。

そして今日も砂漠で野宿だった。テントを張って、マフィアが作った冷たいシチューみたいなのをキレイに平らげて。後は寝た。

これでキャンプ4日目。

関所の近くに店は あつたから、買い足して水には困らないけれど……それにしても、お風呂に入りたいなあと思う。砂漠や容赦なく照りつける日光の せいで肌は荒れ放題だし。髪も だいぶ痛んでる。濡れたタオルで体を拭くだけじゃ、体中に ついた砂は あ

んまり取れた気が しないし。

はあ、あ。

この問題って、どうにもなんないわよね。

トイレとかも そうだし……本当、困る！

「……あれじゃないのか？ 真黒村」

考え落ち込んでいた顔を上げて、カイトの声の した方を見る。

ひたすら昨日から、『国境の壁』寄りに真っ直ぐ右方向に歩いてきた私達。最初、関所を越えた時に3本の分かれ道が あって道しるべが立っていたのだけれど。『真黒村行き』というのは なかつた。

それで仕方なく。セナと私が見て覚えていた位置を信じて。右だ、とにかく右へ行ってみようという事になった。

最悪、村へ辿り着けなくても突き進めば海へ出るだろうとカイトが言っていた事も踏まえて。真っ直ぐ、真っ直ぐ……と歩いてきた っただけれど……。

「屋気楼……じゃないみたいだな。上空に鳥が居る」

セナが眩しそうに手で顔を隠しながら目を凝らしていた。サンサンと容赦なく照りつける太陽の せいで、見える物が実際に本当に存在するのかどうかをまず疑ってしまうからね！。

砂漠だし。

「本当だ。鳥が居るね」

「白っぽい建物が見えるんだけど、あれも本物かな？」

マフィアが言っているように。突き進んできた道の先より少し左へと逸れて。前方の地平線に建物らしき頭が幾つか連なり見えてきていた。しかし疑問が浮かぶ。

白っぽい……？

黒い点に見えたのに、と。

「休憩してもいいし。せつかく見えたんだから行ってみようか。他

には何も見えないしさ」

私が言つと、皆はウンと頷いて また歩き出す。

お風呂が あればいいなあなんて淡い夢を抱きながら、私も流れ
てくる汗と戦つて足を運んで行つた。

「げ……」

「何だ、ココの空間は」

先に着いたセナとカイトが唸りを上げた。残りの私達も有り様を
見て同じように声を出す羽目に なる。

蠟石ろうせきに見える礎石から積み重ねられて できた家や建物。独特の、
恐らくは植物や家畜といった自然的なものを描いた模様の かすれ
た壁塗りや、ボロと化して物干しに掛けられたままの布。木で で
きた粗末な玩具が地面に散らばり転がっている。

植物は生えていない。枯れた草の残骸が見れた所も あるが、コ
コで育つたものでは なく何処からか風で飛ばされてきたんだろう
と思う。

日に照らされて熱い土の地面。風で たつ砂埃。石で できた小
さな段差の階段が あつて、まだ先に道が続いているけれど。例え
先に行つたとしても人も生物すらも気配は感じない。そんな気が
した。

廃墟。至る所に模様を描いた壁などが見えるので、文化を持った
遺跡、と言つた方が それらしいかも。

……それだけで驚いたわけじゃない私達。

「影、が……」

影。そんな表現がピッタリだった。

まさに黒い『影』だ。

石造りの壁、屋根、階段、道、干された布。キャンバスとなりうる全てのものに、印でも付けられたみたいだ。『影』が付いている形は様々だけれど、人、木、鳥、犬、植物……そう、生物だ。ココでは生物ではなくて代わりに生物の『影』が存在する。

その数は多い。これを上の遠くから見たら、絶対 黒く塗りつぶされる。ココに来るまでに頭に あった疑問は、そうやって解けたんだ。

「何だか寒くなってくるわ……おかしいと思わない？」

マフィアが腕をさすりながら皆に向けて訴えた。

「うん……変だね。暑いはずなのに、見てると寒い……」

私達が寒い寒いと言っている横で、カイトが指摘した。

「おかしいはずだ。だって、見てると……生活していたまま、残されているじゃないか。見てみるよ、ホラ。あれ、洗濯物なんだろう？」

さっき私が物干しに布が掛けられたままだと思ったのを指して、カイトは言った。

言われて気が つく。

「！ そつか……！ まるで、人や動物だけが……突然 消えたみたいだ……！」

地面に転がる片付けられていない玩具。

放り出されたままの農具や容器。

もしかやと思つて建物の中を覗くと、包丁や鍋なんか調理途中で置かれていたりする。

一体、これは何。

それぞれ傷んでいたり風化しているけれど、『影』は まるで、まるで……。

「原爆……」

と、私が小さな声で漏らした。

「げんばく？」

と、聞き流さなかつたのはメノウちゃんだった。

しばらく、皆は黙つたままだった。

私は以前、学校の授業で本に掲載されていた写真を見た事があ
る。第二次世界大戦の日本　そんなタイトルだった。

人の影だけが階段に残されている。死体は　ない。残されたのは、
影、だけ。

原爆の強烈な放射能を浴びたからだ。

あの写真の影とソックリなんだ。この状況。

「人は居なさそうだけど……見回ってみる？　何か手がかりが
あるかも……」

と、マフィアが一步　前へ踏み出したのを、私は腕に　しがみつ
いて止めた。

「やめた方がいい！　……離れよう、今すぐ！」

私が叫ぶと、皆びっくりして私に注目した。

「でも手がかりが」

セナが　そう言うけれど。私は一刻も早くココから出たかった。

何ていうか……ココの空気、ひどくゾツとする。まるで悲しみが
うごめいているような……！

「お願い。もしココが放射線で汚染されているのなら……むやみに
触らない方が　いい」

専門知識なんてないけれど、恐ろしさは社会の先生が何度も何度
も熱弁していた。大人が言うんだもの。きっとココは相当な危険地
帯だ。

「放射……？　ま、よく　わかんないけど。そんなに言うなら……
ひとまず、ココを出るかい。で、これからの事を外で話すか……」
カイトが提案してくれて、私はホツと安心した。その時だった。

「お前達、何者だ！？」

村の入り口の方からだった。私達は振り返る。

一人の可愛らしい少年だった。飾りつきの薄い薄手の白い布の服に、短く茶色のズボン。右肩と左太ももと、右足首に違う柄の布を巻いている。腰に皮のベルト、服の隙間から見える腰に備えつけてあるのはナイフ。手には一本の長い槍を持って。

顔。少し鋭いけれど形のいい目。鼻の頭と頬に少し傷跡が見える。少年のあどけなさが伝わってくる。よく見ると、髪の毛先は真っ黒で、てっぺんに近い所では茶色。ツンツンとしている。

「怪しい奴だ。ココへ何しに来た！」

まだ声変わりはしていないらしい。子供らしい可愛い声が響いた。

「あ、あの。私達、旅をしまして……」

しどろもどろの私の前に、マフィアがスツと割って入ってきてくれた。

「ただの旅の者です。イルサ民族について調べてまして。ココへ来てみただけです」

少年より、マフィアの方が背が高い。よってマフィアの迫力に少年は圧倒されていた。

「……なら、ついて来い。ワマ民族の村長に会ってもらおう。村長なら、イルサについて詳しい」

少年はそう言って村を出た。私達は顔を見合わせ、後に続いて行く事にした。

後に ついて行きながら、私は その少年に聞いた。

「私は松波 勇気。勇気で いいよ。ねえ、あの村って どうしてあんな影ばかりなの？」

しばらく私の顔を見ていた彼は、ボソリと言った。

「光神様の光の せいさ」

妙な事を言い出した。

「コウジ……ン？」

私はセナ達の方を振り返った。セナもマフィアも、「ああ。間違いない」といった顔で私を見た。

光神……。

七神の一人。

ひよっとしたら、これから行く所に七神の一人が居るのかもしれない。

私は期待で胸が いっぱいになった。

《第42話へ続く》

第41話（血戦の終結とその後・貳）（後書き）

【あとがき】

カットしても1話が長い。昔、これを書いた時期の作者、何でこんな張り切って書いて中途で放つといたんだろうか。この頃何やってたんだろうか。

忘れたなあ……（遠い目）。

ブログ第41話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-105.html>

ありがとうございました。

第42話（真黒の村）

この地に光神が居るかもしれない

彼……少年。名をヒナタ、という。まだ少年なんだけれど、あどけなさを残して、すっかりとした顔つきと筋肉だ。私より年は上だろうと思われる。

私達が辿り着いた奇妙な村　人、動物、植物と　いった　あらゆる生物と　いわれるものが、一瞬で消されてしまったんじゃないかと思われるような残骸の跡地だった。

『影』だけを残し。姿は忽然と消えている。

これだけ太陽が照りつけた所でも、体が寒くなってしまった。

そんな場所で会った少年ヒナタ。

私達を見て怪しんだ彼は　ワマ民族の村へ来い、村長に会わせてやると言った。

そして　この村が　こうなってしまったのは、『コウジン』様の光の　せいだとも言っ……。

『コウジン』　光神。その言葉に当然の如く大いに興味を引かれる私達。期待に胸を膨らませながら、ヒナタに皆　ついて行ったのだった。

「着いたぞ。ココがワマ民族の村だ」……

先頭を一人きって歩いていたヒナタが、振り返らず前方を指さした。嚴重な背丈ほどの囲いと、知らない赤い文字で出入り口の所の垣根に掛けられた看板。後でマフィアに何て書いてあったのかを聞くと、『よそ者　立入禁止』って意味らしかった。

「入れ。なるべく静かにな」

と、ヒナタは私達を中へと入れた後。入り口の、木の柵で できていた扉を閉めた。

そして こちらを見ると険しい顔つきに なり、ズカズカと乱暴に歩いてきたのだった。

私達の横を通過し、しばらく進んで行って……立ち止まる。んん？

「またか……」

大きな ため息が聞こえた。私達は何だ何だと追い、ヒナタの目を背後から覗いてみる。

何かと何かが居るようだ。それは……。

少し道先の草木の生えた地面の上で。どうやら鶏にわとりと黒牛が、睨み合いをしているようだった。ブホッ、ブホッと牛の方は鼻息が荒く。コケッ、コケー！ と鶏は元気に。

……と、遠くから思い込んでいたのだけれど。実は違った。

何と、人間の言葉でケンカしていたのだ！ ええ！？

「いや、あんたが悪いのよ。私は ちゃんと いつも通り手紙を届けたわ。家に 居なかった あんたが悪いんじゃない」

「何を言う！ お前が不注意な せいだ！ 責任を取れ！ チキンにして食っちまうぞ！」

「こつちこそ、今夜は焼肉パーティーに しちまおうかねえ！？」

「何だと！？ もう許せねえ！」

と……こんな風に。

私達は身を乗り出し驚いて、目をまんまるに させていた。

ヒナタは やれやれ、と重い腰を上げるように その一羽と一頭の元へと近づく。

「やめるんだ！ みつともない！」

気が ついた一羽と一頭はピタリと口ゲンカを止め、ヒナタを睨みつけるように見た。

！

途端に、どう！？

鶏は女の人に。黒牛は男の人に！ みるみるうちに変わっていった。テレビとかで観る、物質の変化を早回しで見た感覚だった。人間になっちゃったけれど、ちゃんと双方とも服を着ていて男と女らしい格好をしていた。

「何よ、その人達。よそ者？」

「何 考えてる、ヒナタ。頭おかしくなったんじゃねえのか？ よそ者を村に入れるだなんて」

2人は こちらをそう非難した後。知らぬ存ぜぬとササツと何処かへ足早に去って行ってしまった。

私達は それまでに。「牛と鶏が しゃべってる……」「牛と鶏が人間に なった……」と、それぞれ思いをそのまま口に していた。ヒナタは若干 顔を緩めて、まあ当然だなと頭を掻いた。

「ワマ民族は変血 民族。感情が高ぶると、ご覧の通り動物に変身してしまっんだ」と、説明する。

「ははあ……そういう事なの。だから さっきの牛と鶏も、か。

「まさか あなたも……？」

と、横でマフィアが尋ねたが。それを無視して先を促すヒナタ。あれ？

「早く来い。村長の家は村の中央だ」

藁葺きで屋根が こしらえられた木造りの家。内装は2階とあるけれど、吹き抜けて上の階は壁際 外回り状の床で寝室だけだった。

一階の、囲炉裏を囲んで私達は座っている。上座に家主である、

村長が 座っていた。

「ほう……七神 探しの旅を……それは ようこそ我が村へ おいで なさった。だが……コホン」

わざとらしく咳払いを一つ。

「失礼の事とは お思いでしようが、我が村では よそ者を毛嫌い します。お早めに この村を出て行かれた方が、よろしいかと」

顔を白い毛のモジャモジャに させた小さな老人。この人が村の長老でも あり、村長でも ある。濃いモジャモジャの白毛のせいで表情は よく読めないが、豆粒ほどの小さな目の光が奥でキラリと光っている。

私は出された お茶を一口 飲むと、静かに置いた。そして……一番 聞きたい事を言った。

「隣の、イルサ民族 廃村の事ですけど」

「ブ厚い村長の眉の片方がピクンと動く。」

「何故あの村は滅びたんですか？ 一体、光神様の光って……何なんでしょう？」

私の質問に大きく反応する。

「何故それを？」

「すみません。俺が つい漏らしてしまいました」

私と村長の間、ヒナタが割って入ってきた。彼は あぐらをかいて、私の向かいに座っていた。

村長は、そうか……と。仕方なさそうに話し出した。

「数年前……まだココ最近の事ですが……ある日 突然、光神様が現れたのです」

「光神が!？」

「凄まじい光が、イルサ民族の村の上空で発生しました。それは、ワシらの村からも見えた……光が おさまり、村の者がイルサの村を訪ねると……今の ような状態に なってしまったのです」

今のようなの……？

「その光が原因で、村が あんな影張りに？」私は聞いた。
「そうです。そこに居るヒナタを残し、村は滅びたのです」

私達は驚いて いっせいにヒナタを見た。ヒナタは俯いて ずっと静かに していた。

……つまり、ヒナタは村の生き残り……？ ヒナタは、イルサ民族なの……？

「ヒナタは、イルサとワマの混血なのです。イルサに母親が。ワマには父親が住んでおりました。母親はその光のせいで死に、父親は病気で死にました。一人に なった こやつは、ワシの元へ仕えて暮らしておるのですよ」

「そうだったんですか……」

「あの光をワシらは光神様の災い、と呼んでおります。何故 突然 あんな事が起こったのか。ワシらにも わかりません。偶然あの場に居たヒナタに聞いても記憶を失くして わからない。ワシらは とりあえず、再び光が現れるのを恐れ、祠ほこひを作つて祀まつっているのです」

「ほこら？」

「もう少しココを出て村の奥へ行くと、湖が ありましてな。そこへ作らせたのです」

村長の話は、そこで終わりに なった。他に村長から聞き出せそうな事は もう、ない。私達は顔を見合わせながら、これから どうしよう？ と困ってしまった。

するとヒナタが立ち上がった。言った。

「救世主一行 様。とにかく そういうわけだ。今日は隣の俺の家 に泊まるといい。明日の朝一番に、この村を出て行ってくれ」
冷たい態度で。

彼だけじゃなく、村の雰囲気や人々、皆が。

よそ者 嫌いの村。謎の光に怯える村……。

私には、かわいそうに思えて仕方が なかった。

私達がヒナタの家に泊まる代わりに村長の家でヒナタは泊まる事にして。同じく木造りの、よく似た構造のヒナタの家の一階で。私達は床に並び、毛布だけを借りて雑魚寝する事に した。

寒くはないし、これで充分。荷物を室内の端に固めて置き、私の横にマフィア、蛭、メノウちゃんと女子グループ。少し離れて男子グループだ。それぞれ分かれて休んでいた。

寝る前に、これからの事を相談している。

「……………で、どうする？」

と、まず話を切り出してきたのはセナ。床に うつ伏せに転がってヒジをつきながら。

「どうするも こうするも。明日、村を出て行くしかないんだぜ。 たった一晩で光神だの何だのって、謎が解けると思うか？」

「そんな事 言ったってさカイト。別に私達は謎を解きに来たわけじゃないんだから。光神さえ見つければいいのよ……………ノーヒントだ けど」

「ねえ、マフィア」

と、私はツンツンとマフィアの肩を突いた。

「なあに勇氣」

「ずっと引っかかってただんだけど……………その、災いの時。ヒナタ は、イルサの村に居た、のよね？」

それを言うと、起き上がったカイトがポンとヒザに手を打った。

「そう。それだよ。何で あいつだけ無事だったんだ。その場に居 たんなら、奴も影だけに なって消失するはずだろ？」

カイトの その ひと言で、皆が騒ぐ。

「それが無事って事は……………」

「何？ あの子が今回に關係してるって事なの？」

「でも。ヒナタは その時の記憶を失くしてるって。聞いてもムダ なんじゃない？」

マフィアに そう答えると。皆 行き詰ってしまったようで、急に静かに なった。埒が明かないからとセナが締めくくる。

「お手上げたな。カイトの言うように、一晩じゃ何も できやしない。とりあえず、朝にココを出よう。で、イルサの村に もう一度 行くか……それとも、他の村に行くか、だな。周辺には まだ、ええと……トリ村がカイ村だが、あつたしな」……

旅の疲れも あって皆はグツスリと後、寝入ってしまった。

時々、イビキも聞こえてくる。寝言も。皆は相当お疲れみたいだった。

私も そう。そのはずだ。

なのに……。

おかしい。

砂漠を ずうっと歩いてきて、ヘトヘトな はずだったのにだ！
何故だか目をつぶっていても、一向に眠れない私だった。

試しに目を開けてみた。パツチリと。まあ美しいクリアな視界。
はああ……この分じゃ、朝、寝不足なんだろうな……ぐっすん。

(ん……?)

……ふと。外に気配を感じた。

ココの壁は薄いからだろう。微かだけど、誰かが外を歩いている
ような気配を感じた。

寝ている皆を起こさないようにして、私は起きてソツと小窓に寄
る。外を覗き込んだ。

誰かは暗くて わからないけれど、確かに何者かが村の奥へ奥へ
と移動していた。

(村の人……? ひよっとしてヒナタさん?)

私は とにかく、後をついて行ってみる事に した。どうせ眠れないしと。

家を出て、人影を追った。もう何処かへと消えてしまっていて、私は見失った方角へと突き進んでいった。辺りは真つ暗に ほぼ近く、家の明かりが点いている所は一つも なかった。

村の奥へ。村長の話だと、奥には湖が あるって言ってなかったっけかな……。

そのうち、岩がゴロゴロと転がっている所へと出た。もっと進むと、岩山が そびえ立つ。

湿気を含んだ空気の一オイが する。もしかして この向こうが。「あ……」

岩山と岩山の隙間から顔を覗き込ませる。見えたのは湖だった。やはり。

「うわあ…… 大きな湖！ これかあ……」
どうにか岩山の小さな所を見つけて、手をかけ足をかけ飛び越えて、湖の ほとりへと近づく事が できた。ふう。

風がヒンヤリと、汗を乾かしながら吹いてくれている。雲や月を映す水面。キラキラと、遠く水平では光り輝いて とってもロマンチックだった。

「あ、あれ？ あんなとこに穴が……」
水平線を目で辿っていくと、やがて洞窟らしきものを発見した。

ココからなら岩の上を右回りに水際に沿って行けば、辿り着けそうだった。

さらに私はピンと一つ思い出す。

「あそこに祠が あるんじゃない!？」

と。村長の話を記憶の底から掘り起こしたのだった。

張り切って さっそく私は向かう。大きな岩が連なったり積み重ねられている地面を転ばないように気をつけながら、足場を確認しながらだ。

しかあーし。

もう あと わずか、という所でだ。ツル！ つと足を滑らせて、ドボン！ つと派手に湖へと落ちてしまったのだった。

しかも。

足が つかないと きた！

(…………グガボボオゴボツ…………)

一瞬パニックに陥りかけたけれど、ゴンと手に硬いものが触れて、それが岩だと わかった途端に急いで掴んで這い上がる事が できた。

無我夢中だった。

はあはあと、少し飲みかけた水を吐き硬い地面の上で空気を吸う。呼吸を取り戻し、さっき自分が落ちた後ろの水面を見た。

…………あれ？ ココ、階段に なってる？

地面は削られて整えられた石造りの階段に なっている。それが水の中にまで続いているみたいだった。つまり、階段の下部が湖に沈んでいると…………はあ。

なるほど。私が掴んだのは階段だったのね。もし落ちた所が悪かったら、石に ぶつけて割れていたかも頭。危ない危ない。

階段の先に続いているのが例の洞窟だ。何とか辿り着けたわね。

私は びしょ濡れに なった服を一回 脱いでから、ぎゅうつと絞った後に再び着た。帰ってから着替えて乾かそうつと。今は我慢しておいて、せっかく来たんだから ひと目 祠を拝んで帰ろうと思っただ。

人が2・3人は一緒に入れそうな大きさの洞窟に入る。

すぐに行き止まりだった…………けれど。

そこには祠なんて なかったのだ。

「あつ……?」

代わりに『居た』のは、人間だった。予想外の展開に戸惑う。

居たのは女性。目を閉じて正座だ。黒髪の長髪で、長いまつ毛。日本人形みたいで端正な顔立ちだ。巫女みたいな格好をし、背筋が伸びて姿勢が いい。

女性の たもとは手の平に のるくらいのおおきさでロウソクの灯りが点いて置いてある。時折 炎は揺らめきながらも消えずに女性の姿を照らし続けていた。

ゆつくりと、目を開ける……。

私は緊張して近寄れず身が固まったままだった。

沈黙。

光に照らされた顔と、背後で炎の揺らめきに添って動く女性の大きくなつた影。

私はゴクリと息を呑んだ。

すると、女性は突如 笑顔になつた。んん!?

「初めまして。私、ソピアっていうの。よろしくね!」

と、私にオイデ オイデと手招きした。

「まあ こつちに来なさいな。何も取つて食おうなんてしないんだからさ。あれっ、ひよっとして濡れてるの? ははあ、さてはさつききの音! 湖に落ちたんでしょ!」

と、言われ。私は ひとまず隣へと腰かけた。

ソピアと名乗つた女性の口は、まだまだ止まらず。

「ごめんなさいねえ。ココには何にも なくて。火も起こせやしなのよ。灯り程度しかね。ま、あつたかいから大丈夫よね。ところで あなた見かけない顔。名前は? ココへは どうして?」

明るい顔で、ニコニコと笑う。私は頬を掻きながらも答えを探した。

「ええと、私は松波 勇気で……実は、コレコレシカジカ」

そうしたら。急に声を張り上げ興奮し出した彼女……ソピアさん。

「救世主!? あの千年に一度やって来るっていう!?!」

私をジイツと見つめた。て、照れる。

「えっ、じゃあ今! 七神 捜し やってるってわけなんだ! わああっ、勇気ちゃん、すごい! あなたが あの伝説の救世主だなんてっ! 感謝 感激アメラレよね! うわあ、どうしよう!? サインちょうだい! ああ でも、書くものがないわ! 何て事なのお〜!」

ソピアさんは……立ってチヨコマカと動き回り、ガツテム! と頭を抱え、キラン! と目を光らせ、ガシツ! と私の手を両手で掴んだ。

動作の多い人だった。

落ち着かないかなあ……。

「せめて……せめて握手だけでも……!」
と、息を荒げて握った手をブルブルと震わせている。私は勢いに圧倒されて「はいイイイイツ!」と言いながら顔が青ざめていた。掴んでいた手をいったん離すと、今度は握手へと切り替える。しつかりと手を握られ、ブンブンと上下に振られて私は頭がクラクラとめまいを起こしそうだった。「くうう……! 涙が出るぜ……!」
とソピアさんは言っつて、やっと手を離してくれた。

「ありがと。ごめんね、あまりの嬉しさで、つい……ね。くふ……
…つふふふふ」

私は少し背筋に冷たいものが通った。隣に居るのは危険なんじゃないだろうか。アニメシヨップに通いつめる ちよっとオタクな人とかと同じ電波を感じる。気のせいなんだろうか。

「ふう。怖がらせちゃって ごめんなさいね。私、すぐ熱くなっちゃうから……村の子と小さい頃、オニゴッコとか するじゃない? 私がオニに になると、皆 嫌な顔するのよね。で、やっぱり違う遊びしようって事になっただり。かくれんぼ、高オニ、色オニ、

警ドロ、ポコペン、田んぼ、あやとり、折り紙、ケンケンパ、縄跳び、ゴム跳び、だるまさんが転んだ、花いちもんめ、かごめかごめ、ドッチボール、トランプ、カルタ、花札、ドンジャラ、五目並べ……えーっと えーっと……」

「いや、もう それ以上は」
「そう、そうね。とまあ、違う遊びしてもよ？ 私がオ二に なったり順番が回ってきたりすると、何故か その場の空気が変わったりするのよね。何故かしら……って考えてみると」

ソピアさんは腕を組みつつ難しそうな顔をしていた。

「たぶん、私が あまりにも真剣に なりすぎるんじゃないかと……」

まだ難しい顔をしている。

「そんなに？」

私が聞くと、はあ……と深あくため息をついた。

「色々と思い出すわ。オ二に なって、追いかけるじゃない？ 追いかけられた子で泣き出す子が居たしね……それに縄跳びなんて夜まで延々と跳び続けたわ。最高 記録、前跳びで2万3692回……でも あれは長老が止めたからよね。本当は もっと伸びたはず……すごい。」

「折り紙は紙が もうボロボロに なったっけね。ドッチボールはケガ人が出るし。カルタも。警ドロでも、お前は警察官に向いている、って大人に褒められたっけ……って、あれ？ 何の話をしてたっけ？」

「すぐ熱くなっちゃうって話じゃなかったっけ」

「そうそう。そうなのよ」

しかし まあ、居る居る。そういう人も。周りとの温度差が激しい人。運動会とか、イベントもので結構 居そう。あんまり熱すぎると、周りの人は かえって困ったり……ね。

……でも。今の話を想像してみると、笑える。追いかけられた子の気持ち。怖かったんだろうなあ……物すごい形相でオ二が追いか

けてきたらと思うと。

それに、ボロボロに なった折り紙も かわいそう。いや、そこまで遊んでくれて折り紙としての使命を果たせたんだから いいのかな？

「それにしても旅か……いいねえ」

と、フツ……と顔を曇らせたソピアさん。

私は やつとこさ聞きたい事を聞いた。

「どうして、あなたは こんな所に居るの？」

ソピアさんの豪速球のような話で聞けなかった質問を今やっと。
はあ。

……でも。ソピアさんは相変わらず下を向いたまま。

あれれ？ 元気は何処へ行ってしまったんだろうか……？

私が出方を待っている、やがて顔を上げて口を開いた。

「お願い、勇氣さん……ヒナタを」

「え!？」

思いも よらない人物の名前が出て驚く。ソピアさんは私の手を
また強く握って懇願した。

「ヒナタを……ヒナタを救って!」

容赦なく熱を放射して燃える太陽。日の光に焼けつく乾いた地面。
ココだけ、亜空間なんじゃないかって思ってしまう。とても不気
味で異質的世界。その存在。

イルサ民族 廃村。

すっかり廃墟と化した村の外れに。手入れの ない風化されつつ
ある崩れかけた茶色い土造りの家が ある。

外壁に、くつきりと残された人と木の影。

影の通りに細い木が かつて そこに立っていて、そばで誰かが
立っていたんだろう……。

影の ついた壁の下に、供えられたばかりの花束と、一人の少年が居る

少年……ヒナタが屈み込み、手を合わせていた。

彼は毎日ココに来て、こうやって拜んでいるのだ。そう……自分の母親を。

「その影が あなたの お母さん？」

ヒナタはハツとして振り返った。

居たのは、私達。私、セナ、マフィア、カイトとメノウちゃんに、蛭と紫くん。

ヒナタは私達が近づいていた事に全く気がつかず、ずっと屈んで熱心に前しか見ていなかったみたいだった。

朝に村で見送ったはずの私達 救世主一行を見て、少し安堵して返事をした。

「……そうだ」

ヒナタは視線を落とし、壁の方を向いた……悲しそうに。

「行きましょう。私達と一緒に」

私は一歩前に出て、片手を出して誘う。

「何故……？」

当然の如く そう聞いてくるヒナタ。でも振り返ったりしなかった。

私は ひと呼吸だけ置いて、再度 語りかける。

「だって あなたは光神だから」

《第43話へ続く》

第42話（真黒の村）（後書き）

【あとがき】

ポコペンで相手をつつき過ぎるといっつのはぶつでしよう。よい刺
激に……（無理？）

ブログ第42話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog-entry-107.html>

ありがとうございました。

第43話（禁断の光「ちから」）

ヒュウウウウ。

秋風のように、寂しい風が吹き抜ける。何処か懐かしいような物悲しく切ないような、風が。

だが太陽は相変わらずサンサンと地上を焦がすように降り注ぎ、何処からか運ばれてきたチリやホコリをその寂しい風が地面の上からさらっていく。静かに。

イルサ民族 廃村。生きる者を廃された村。

生き物が居ないというだけで、この空間だけ時間が止まってしまったんじやと錯覚する。遠くの雲さえ止まって見える……不思議だ。

「誰に聞いた……?」

ヒナタは立って私を見ていた。

「ソピアさんよ」

私が返事すると、苦い顔をする。

「あの おしゃべり」

「あなたの事、すごく心配していたわ。知ってるんでしょ?」

「……」

それからヒナタは下を向いて黙ってしまった。必死に何かを考えているように思えた。

私は全て聞いたんだ……昨日。ソピアさんは語ってくれた。

……泣きながら。

お願いヒナタを救って

昨夜。辿り着いた洞窟の奥で。彼女、ソピアさんは そう訴えた。私は突然の彼女の変わり様に びっくりしてしまった。

「光神の災いの原因は、ヒナタよ……」

ソピアさんは言った。もちろん驚いたが、心中では“ああ やっぱりな”と納得してしまった自分が居た。その後、彼女は坦々と語り出す……。

「……ヒナタはね、かわいそうな子なの。異種間で生まれた子だからね。イルサにもワマにも認めてもらえない。小さい頃、父親の元で育ったんだけど……ひどい暴力でね。見たでしょ、顔の傷跡。あれは父親につけられた傷。それで……ヒナタは毎日、家から逃げるようにイルサ村へと遊びに来た。でも歓迎は されなかったひとりぼっちだった」

彼女、ソピアさんの目に涙が溜まる。話は続いた。

「ある日、私はヒナタをつけて行った。ヒナタはイルサ村の、お母さんの家へ行ったわ。でも家の中へは入ろうとせず、ただ物陰から見てるだけ。ジツと、ただ ずっと。私、たまんなくなっちゃって……ヒナタに声をかけた。帰ろう、そんで一緒に遊ぼう、って。その日から、私達はワマの村で遊ぶようになった……でも、あの日。あの日よ」

ソピアさんの目に憎しみの情が こもる。口唇を噛み締め、手を震わせた。

「珍しく黒雲が広がって、雷も鳴っていたわ。嫌な予感が した……案の上、いつもの時間にヒナタの家に行ってもヒナタは居ない。ヒナタの身に何か起きたんだと思ったわ。私は急いでイルサの村へ向かおうとして走り出した。その時よ！ あの突然の光が現れたのは……」

ガタガタと肩を震わせるのを手で掴んだ。

「私、走った。死にそうなくらいに。そして やつとイルサの村に着いた時……村は もう、変わり果てた姿に なっていた。ただ一人、ヒナタがブーツと突っ立っててね。私、事情を飲み込んだ。あヒナタが やったんだ……って」

両手で顔を覆う。

「ヒナタはボンヤリしていたわ。私が駆け寄ると、倒れた。“僕は何処へ行けばいいの”……そう言い残してね」

僕八 何処ニ イケバ イイノ？

あの日の少年は そう言った。それだけを言い残して。そして。

ソピアさんはヒナタを庇った。あの災いは、自分が引き起こしたものだ。長老の前に買って出て……命じられたのは。

一生涯をココ……洞窟の中で過ごせという。

「ひどい……！ そんな！」

「長老の せめてもの優しさよ。本当なら、死刑にでも なる所だったんですもの。それは それで いいの。私は生かされた事に感謝しているんだから。それより……ヒナタよ」

「？ ヒナタさんは どうなったの？ その後」

「……わからない」

ソピアさんの隠した顔から手を伝って涙が流れる。声はくぐもり、私は聞き取ろうと少し近寄った。

彼女の語りは私の胸の内に浸透し、喉から熱いものが込み上げてくる。

「わからない……？」

私の目も潤いで視界が滲んでくる。

「あの子から笑顔は消えた。いいえ……何にも本音を言わなくなつた。私の前では普通に、お互い言いたい事を気兼ねなく言えて、や

りたい事を一緒に精一杯やってた。でも、今は もう……ヒナタの事が、わからない。何を考えているのかが」

ソピアさんの苦しみが私の目に涙となつて一つ。

「私の存在が……ヒナタを苦しめているのかも しれない。何度もそう思った。でも私、死ぬのは嫌。死ぬのは、怖い……死ぬないそれより。生きているうちにヒナタを救いたい。でも、私はココから動けないのよ……！ だから、だから お願いよ勇氣さん！ ヒナタを……ヒナタを救って！ ヒナタが七神の一人なら、連れて行って！ 伝説の通りに！ あの子に、笑顔を 取り 戻 さ せて……！」

ソピアさんは私に すがりつくように うずくまった。

肩に手で小叩きながら、私はソピアさんを抱き締めていた。

あなたも彼も、こんなに苦しんでいる……私は。

私は……あなた達を救いたい。あなたが、ヒナタを救いたいように。

今、私達に できる事は何なのだろう。

「あの日……」

ヒナタは私達に背を向けてしまつて、表情が見えなくなった。

「あの日、親父に全部バレたんだ。俺が母さんの所に行っている事。それで、親父はカンカンに怒つて。出て行け、って言われた。だから俺、母さんの所へ行つたんだ。行ってみたけど……」

少し戸惑いがちに ひと呼吸 置いた。

「……近所の子供達と楽しそうに笑つて遊んでた……」

思い浮かぶ あの日の記憶。ヒナタは全てをとつくに思い出していたのだ。

自分は あの日、大胆な行動に出た。いつもは隠れて見ているだけ……でも違った。母親の前に姿を現し、それを見た近所の子供達は怖がったりして いっせいに去って行ったのだった。

そしてヒナタと母親は見つめ合い……。

永遠のような時間、お互いが お互いを見ていた。

しかし、母親の方から先に目を逸らしてしまった。

「ココは あなたの居る所じゃない。早く お帰りなさい」……
それだけを言った。

充分だった。

何が？

「あ……あああ……」

ヒナタは涙声で意味の わからない奇声を上げる。

「わあ ああ あっ！」

頭を乱暴に掻きむしり、背を向けて走り出した。何処かへと。

「ヒナタッ！」

遠くになっていく母の自分の呼ぶ声。

ヒナタの足は止まらなかつた。

叫びが言葉に成り得ないまま叫びたいように叫ばれ、滅茶苦茶に走りまくる。

お母さん！

お母さん！

お母さん なんてイナイ。

歯車が狂ったかのように頭の中で高熱のものが何かを溶かしながら目まぐるしく回っている。そうやって熱された水が全身から汗と

なつて飛び出している。

熱い！

自分が、溶ける！

いつの間にか、暗雲が立ち込めている。雷鳴が鳴り響く。
やっと立ち止まったかと思うとヒナタは、今度は　うずくまって
全身を抱えた。

苦しい……苦しい。何だ　この鼓動は動悸は心臓は　まるで何か
が生まれるみたいだ

しかし

「う　が　ああ　あ　ああッー！ー！」
全身が発光し、何と体は宙に浮かんだ。ある程度　上昇したと思
ったら、音が　なく静かだったが凄まじい光線の爆発が村中の隅々
に　まで及んだ。

「あ」

光線がヒナタから発せられ貫き浴びせられた村人達は、声もろと
も　かき消されていった。

……

影だけを残し。

ヒナタの七神としての力の発動だった。初めての。

無論 祝い劇では……なかつた。

僕八 何処二 行ケバ イイノ？

……

あの日の少年はココに居る。

ソピアさんが追放され、父親は死に、村長に仕え……毎日、ただ月日に流されて流されてココに来て花を添える……。

繰り返し繰り返し。

もう、うんざりだったに違いない。

「俺は。何処へも……行きたくないのに、何処かの遠くから誰かが言うんだ。行け、行けって。行くあてなんか ないのに。死ぬ事もできない。生きる事も できない……俺は すぐくワガママなのかも しれない」

ソピアさんも似たような事を言っていたっけ。死ぬ事が できない……生きる事も。

人って、贅沢な生き物なのかな。死ぬのは嫌なくせに、生きる事を拒こほんでいる。

生きる事を選ぶ事しか できないくせに、つまらない事で悩んでいる。

つまらない……そうだよ。

「それは、自分の声よ」

気が つくと、口が勝手に動き出していた。セナ達もヒナタも、私が言い出したので注目していた。

「本当は行きたいのよ。抜け出したいのよ。でも つまんない事でグチグチ悩んで、そんな本当の自分を覆い隠しているんだわ。ええ、人間ってワガママよ。皆、そうよ。でもねえ。ワガママな方がマシ

よ！ 自分に正直なんだから！」

ヒナタは私をジッと見つめた。

私も逸らさずに、見た。

しばらく黙ったままだったけれど……。

「その通り。いい事 言うねえ。救世主」

場をブチ壊す抜けた声が割って入ってきた。

「鵓ひたき！」

螢が叫んだ。皆の視線は全て そちらへ。

私とヒナタが向かい合っている左方向、数メートルに。腕を組み、こつちを面白そうに見て、ニヤニヤ笑っている。全身 黒くろずくめのタイツを着こなし奇術師みたいな格好の、業師の鵓だ！ いつも何もない所から現れて私達の気持ちをかき乱し、後味 悪く去る。

いつも失礼で とおーっても嫌な奴！

「何の用だ！？ 勇気を殺しに来たのか！」

セナがサツと私の前に立ちはだかる。マフィアもムチを手にとった。

皆が戦闘 体勢に入り、私も腰のナイフに手をかけた。

「おっと。まあ待ってよ。どう見ても僕の方が不利だろ？」

と、鵓は空を仰いだ。

「それじゃ、何しに来たんだ？」

セナが再び聞く。

「んんー……また、今度に しょっかなあ、やっぱり」

考えるポーズをしらじらしく とり、そしてニーツコリ！ と笑った。

「いやあ、しばらく様子 見てたらさあ。何となくチョツカイ出しくたくなっちゃってねー。んー、どうしよう？」

と……ブリブリブリっとブリツ子に振る舞うもんだから。

「お前と戦ってるヒマなんてない！ 消えろ！」

と、当然の如く癩しやくに障ってセナは、おなじみの技“鎌かまいたち融”で風の刃を起こし鷓に攻撃。

しかし それを軽く大きく空中ジャンプして避けてしまった。

私達の方へ。

避けながら。鷓は不敵の笑みを浮かべていた。

そして。

「ああ！」

ヒナタが悲鳴を上げる。

鷓はジャンプした後、崩れて屋根のない壁の上に着地したのだけれど。そして さらに そこからジャンプして横っ跳びしたら……。跳んだ時、着地した壁をガラガラと崩してしまった。

そう、着地した その『壁』には。ヒナタの母が残した『影』があつた。

崩されたせいで壁は なくなり、ガレキの山になる。

「母さん！」

ヒナタが すぐに山に駆ける。一つ一つの崩れた残骸で ある土壁の破片や石を手に とって探し始めた。

母の影を。

「母さんっ……！」

「鷓！ あなた、わざと！」

私がセナの横から飛び出して詰め寄ろうとするのを、マフィアが腕を引つ張って止めた。

鷓は少し離れた所でチツチツチツと得意そうに指を振る。

「これ、性分なんだよね。あんた言ったじゃない？ ワガママなのは、正直なんだってね。要するに本心。素直。やりたいからやる。

これも そう。僕のワ・ガ・マ・マ！」

なんつー事を！

頭にカーッ！ っと血が のぼった。

悔しい！

「消える！」

「ハイハイ。バイー！」

フツと消えた。跡形もなく。

ムキーツ！……なんとも腹の立つ奴なのよおおつ！

セナも同じ気持ちらしく、すっごい怖い顔をしていた。皆もそう。

怒りを抑え、私は怖々とヒナタの方に振り向いた。

「……！」

信じられない光景を見たのだった。

私は……ツンツン、と。マフィアを突いた。マフィアも気がついた。皆も 振り返る。

最後にセナも気が つく。

しばらく呆然として見守っていた。

崩れ落ちた壁のガレキを一つ一つ。探して探して、確かめるように一つ、一つ……。泣きながら、拾っては投げ捨て、拾っては投げ捨てた。

彼 ヒナタ……いいえ。

彼、じゃない。

そこに居たのは ソピア！

長い髪の少女！

服装はヒナタのままだった。「これは……どういう事なの！？」

私の頭の中は混乱していた。困惑して、頭を抱える。一歩 後ずさった私の体をマフィアが支えてくれた。

「しっかりして勇氣。これは……」

そついうマフィアも後の言葉が続かない。

すると離れて、閃いたのか蛭が口を挟んだ。

「ワマ民族のアレ、なんじゃないの？」

と。
私とマフィアが「え……？」と眉をひそめて考える。ワマの……。

ワマ民族は変血民族。感情が高ぶると

「なるほど？ 男が女に、か……」

横でカイトが納得していった。

そ、そんな？ それじゃ、ソピアさんが言ってた事は どうなるわけ？

「ソピアさん……？」

私は、何とか背に話しかけた。ソピアさんは……。

砂まみれの手を止めて、座ったまま振り向きもせず……うなだれた。

「ごめんなさい勇氣さん……少し私、嘘をついた。私はソピアであって、ソピアじゃない。ヒナタ。ヒナタ＝ノーベン。ワマ民族の血をひくせいで、こんな体質を持ってしまったの。感情が制御できない ある一定の基準を超えると……男と女が入れ代わってしまう。黙っていて ごめんなさい」

力なく、いつそう小柄に見えた。これ以上 問い詰めたら、壊れてしまいそうだった。

彼女……は、ゆっくりと私を見た。

とっても愛らしい素振りに、女の私でもドキンと きてしまう。

細い肩……長く濡れているような潤いの麗しい髪。涙が幾筋も伝う頬。

完璧なる可愛い女の子だった。

「男のヒナタと私は体は一つ。でも、心は違う。全くの別人なの。そうね……区別した方が いいわ。私の時はソピアと呼んでくれた

らしい。今、ヒナタは精神の奥深くに閉じこもってる。この分だと、当分は……」

「2重人格、って解釈したら わかりやすいのかしら？」

マフィアが言うと、ソピアさんは頷いた。

「そうね。そうかもしれない。とにかく、今はソピア。力を発動させ、イルサの村を滅ぼしてしまったのはヒナタよ。村が変わり果て、気が ついたら私に なってた。ヒナタの罪を被って追放されたのは本当。ソピアの姿で村に現れるな、なりそうに なったなら身を隠せてね。知っているのは長老だけなの。村の皆は……知らないのよ」

涙を拭いて立ち上がった。でも目は まだ沈みがちだった。

「勇氣さん……あの時 言った事も本当よ。ヒナタを救ってほしいの。あの子は荒っぽいけど、とても傷つきやすくモロい子なの。誰も相手に してくれなかった幼い頃に、私達は心の中で語りあった。でも、今は あの子の気持ち が わからない。お願い……ヒナタ、彼を……」

絞り出すような声で最後に……言った。

「この村から連れ出して……！」

そのまま、ソピアさんはバタリと倒れた。「おい！」と、セナが慌てて走り寄って体を受けとめた。

「まさか こんな事に なるなんて」

と蛭がハア……と ため息をつく。

「ワマの村に戻りましょう。村長さんに全てを話して……それから
よ」

マフィアはセナと、セナに支えられているソピアさんを見た。セナは「ああ」と言ってソピアさんを抱え上げる。

光神。

念願の七神の一人が見つかったというのに。嬉しいはずなのに。

気分は晴れない。

ワマの村へと戻った。隠れるようにして村長に会いに行き、これまでの事を全て話した。最初から終わりまで、村長の顔（毛モジヤなせいでよく見えないけど）は変わらず。時折 頷くだけだった。ひとしきり話し終えた後、村長は考えた。

そして、結論を出す。

「構いしません。どうぞ連れて行ってやって下さい」

村長は そう言って、ソピアさんの寝顔を見守る。ココは村長の家で、布団に寝かされているソピアさんを囲むように私達は座っていた。

「ヒナタよ……お前はココに長く居すぎた。この地は、お前には合わんのじゃろう。ココに居ては、お前を苦しめるばかり。ワシの事は心配せんでいい。この方々と一緒に、旅に出なさい。そして自分の居るべき場所……それを、見つけるといい。きっと見つかるはずだ。見つけて……また、顔を見せに一度は村に戻って来い。ワシはそれを楽しみに待つとしよう」

村長は優しく語りかけていた。きっと、見えないけれど優しい目をしているんじゃないだろうか。

「七神の一人として旅立つのは恐らくは今以上に辛いのかもしれんな。でも大丈夫……お前には、仲間がある。昔とは違う。きっと、上手くやっていけるじゃろうて」

そっ……と、ソピアさんの頭を撫でた。

「信じておる……」

最後に そう言った時。

ソピアの目からポロリ、と一つ。涙が こぼれた。でも彼女は
まだ気を失ったままだ。起きてはいない。

これはヒナタの涙なんだろうか。

ヒナタに村長の思いが通じて？

ヒナタは……目を覚ましてくれるだろうか……？

きつと……。

素晴らしい目覚めが待っている。待っているはずだ。

そんな気が する。

結局。 勇気達はワマ民族の村にて もう一泊する事と なった。

セナ、カイト、紫の男子グループは村長の家、女子グループは未
だ眠ったままのソピアとヒナタの家へ泊まる事と なった。

昨晩は眠気の起きなかった勇気だったが、今晚はグッスリと朝ま
で目を開く事も なく眠っているようだった。

ふと、ソピアは起きる。

半身を起こして辺りの様子を見回すと、安心して ひと息をつい
た。そして静かに立ち上がると、外へと足は向かった。

完全に出て行ってしまった後に続き。もう一人……ソピアが出て
行った事に気が ついた『誰か』は起き上がる。

追いかけた。……

ソピアは何処へも行かなかった。ただ、外へ出て夜空いっぱい
散りばめられた星々と、堂々と輝く月を見上げていただけだった。

物悲しそうに……月には、魅せられて。佇んでいた。

「綺麗ね」

ハッと我に返り、後ろを振り返るソピア。マフィアが温かく微笑

んで、ソピアの返事を待っていた。

「ええ……とても素敵な夜……」

「違うわ。あなたの事よ」

マフィアが言うと、ソピアは顔を赤らめた。両手で慌てて顔を隠しながら、指と指の隙間からチラと覗いてマフィアを見た。「そんな風に言ってくれるなんて……初めて」

照れながら、まだ顔を隠している。

「あなたの中の彼は まだ出てこない？」

マフィアは視線を空の月に移し、聞いた。手を下げて俯き加減に、すまなさそうに首をタテに振るソピアを見て、マフィアは軽くため息をつく。

「そっか。どうして、そんな悩んでしまうのかしらね。人間って」
「……」

少し間が空く。ソピアは思った事を口に した。

「人間だから……悩むんじゃないかな……」

マフィアは月とソピアとを交互に見ながら……月にも、温かいまなざしをおくった。

「そうね……魔物や動物達は人間みたく悩んだりしない。人間だけよね。考えたり、言葉を使ったりするのって」

ソピアも。黒い空に浮かぶ月を愛おしいくらいに優しく見守っていた。

月は、そこに あるだけだけれども。

だが しかし。次にソピアから放たれていく言葉は、決して放り投げていい言葉では なかった。重く……静かな辺りに融けていく言葉……想い。

時々鳴る虫の音も、2人の肌に感じる涼しい風も。

夜という世界に融け込んでいくのだった。

「人間だけに与えられた特権……逆に、ハンデになるのかもしれない、かな。人間だけ……死にたい生きていたくないと……思うの

は

2人の足元の土は、チリと なって風に さらわれる。

「私は眠りながら考えていた……勇氣さんの言った事を。人は、誰でも一度は死にたいと思う時がある。でも それは、きつと嘘。勇氣さんの言う通り、本当は生きたい……行きたいって思っているのに、死にたい、なんて思うの。死にたくない、死ねないくせに……死にたい、と思ってしまうの……。人は、誰だって傲慢で、ワガママで。子供とか欲張りな人とか……その人達は自分に素直なだけ。自分の気持ちに正直に生きているだけなのよ」

輝く星の光は変わらない。

月と共に、2人を明るく照らし続ける。

「ヒナタ……？」

ソピアは、ヒナタへと。

姿を変え、落ち着いていて月の光に照らされて。光を、心地よさそうに感じていた。

「俺……行くよ。あんた達に ついて行く。青龍とやらを拝みにね」
澄んだ瞳は一度 閉じられた。

「俺は全てが怖かっただけだった。母さんの裏切り。ソピアの罰。父親の暴力。いつか狂い果ててしまうんじゃないかと思う自分の心と……コントロールできない見えない力。全てに怯えてた。外へ出て行く事も、死ぬ事も。生きていく事さえも いずれは、きつと……」

ヒナタの目には、過去に暴走した自分の姿が映っていた。

自分を中心に上下左右斜めの空間に無数に伸びた直線の光。やがて徐々に光の帯は広がって、村全体に行き渡り。

光は人や木、動物など全てを蝕み、消した。影だけを残して消し

去った。

「俺の罪は消えない」

ヒナタの涙は浮かび流れて。

「一生、背負ってくんだ」

声に悲しみが力と なって震えを加える。

「俺に できる償いは、青龍を何とかする事ぐらいだ」

と、無理にでも笑ってみせていた。

マフィアは、一步を踏み出す。ヒナタに向かって。そして……。

「……」

ヒナタを抱き締めていた。「……!!」

マフィアの方が身長は高い。よって、マフィアの腕の中にヒナタはスッポリと埋まってしまふ。

震わせた肩と手で、ギュッと、しっかりと、強く抱き締める。強すぎて、それが居心地いいとヒナタは……思っていた。

母親に抱かれた記憶は ないが、こうだったのかもしれないとも思っていた。

「私達の使命よ」

マフィアの視界も揺れた。

固く、動かないものが心の中に あり。それはヒナタにも ある

……いや、七神 全員に あるのかもしれない。しかし それは表には出ない。出る事は ない。

七神に課せられた、使命という名の塊よ

《第44話へ続く》

第43話（禁断の光「ちから」）（後書き）

【あとがき】

この後の展開を書くのが怖い……。
しかし顔はほころんでいる。何故だ。

ブログ第43話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog/108.html>

ありがとうございました。

第44話(誘)いざな「われた風神」

「13歳っ!?!」

「私と同年!?!」

と、しよっぱなから驚いているのはマフィアと私だ。いやいや、大げさに声を上げてしまったのはマフィアと私だけだが、セナやカイト達も顔は驚いている。

「そうだけど。何か変?」

ヒナタがムツとして こっちを見る。私とマフィアは慌てて手を振った。

「もっと年下だと思って」

「もっと年上だと思ったの」

と、マフィアと私は同時に逆の事を言った。

「下」

「上」

あれ、もう一回とも。

マフィアはヒナタが もっと年が下だと。私は上だと思ったみたいね。

「俺は上かと思っただぜ」

「いや俺は下だな」

セナとカイトが加わって来る。

「メノウは上ー!」

「フン、下よ」

と、メノウちゃんや蛍まで便乗した。紫はノーコメントだった。

「上でも下でも どっちでも ええつつつの! とにかく俺は13歳! 何なら証拠 見せたるかオラあ!」

と、フンがああ! と怒鳴るヒナタ。

(どんな証拠だ……)

皆の顔は そう言っている。

コホン、と咳払いを一つして、改めて自己紹介を始めた。

「ヒナタ」ノーベン。年は13歳。ワマとイルサの混血で、感情が理性で制御できなくなる限界に達すると性別が変わってしまう……ちよつと不便な体質。女バージョンではソピアと名のっているけど……ヒナタの方が、本名だから。ま、ややこしいなら女の時はソピアで」

「ヒナタ、な。よろしく、仲間！」

と、ヒナタの肩後ろをバンバン！ っとブツ叩くカイト。強すぎたのか、少しヒナタは むせた。

「これで6人目。ついに……ついに、あと、一人なのね！」

私は意気込んだ。顔を上げると皆コツクリ頷いた。

……そう。光神で あるヒナタさんが見つかった事で。七神は残り一人と なった訳であるからして。あと一人見つければ、そうしたら、ついに……。

「青龍、ね」

マフィアが、言う。

「そうだね」

緊張気味に私は言った。

「それじゃそろそろ出発するとするか！ 準備は いいよなあ？」
荷物を確認し、セナは辺りを見渡した。「ぬかりなし！」と元氣よく皆が答えると。

「よし！ 行くぞ！ 北へ！」

「おっつ！」

セナの かけ声で、皆は立ち上がった。

村長とは、アツサリとした別れを告げ村を後にした。

ヒナタには「気をつけてな」のひと声だけをかけた村長。でも、遠く小さくなっていくヒナタの背をずっとずっと真剣に見守っていてくれたようだった。ヒナタも、それには感謝しているみたいだった。

目指すは北のルマ山脈。ココを越えないと、北の村へは行けない。この山脈はとっても険しいらしく、厳しいらしいので、それ相應の用意が必要……なので、ルマ山脈に突撃する前に少し買い物しようという事になった。

ちょうど街道があつたので、そこで各自買う物を買に行く事に。

私はマフィアと一緒に雑貨屋に行った。特に買う物なんてないけれど、こういうのって見るだけでも楽しいしね。

「ココ押すと水が出るんだって。変な玩具おもちゃ」

とマフィアが手に持っているのは木彫りで作つてある猫。右の耳を押すと猫の口から水が出てきた。反対の耳を押すと今度はぬるめのお湯が出てきた。携帯ポットみたいね。

「あ、髪どめだ。可愛い」

私が陳列された所から手にとつたのは、小さな赤い花が一つずつ付いた髪どめが2つ入っている袋。

「ぶ……セナに着けてみる？ セナもそろそろ髪が伸びてきたもんねえ。後ろ縛つとくと楽かもよ」

マフィアが意地悪そうに笑いながら勧めている。

セナに髪どめ……ヘアーゴム……化粧……女装……？

「いかん いかん！」

慌てて首を振った。

危なかった。変な所にさ迷い突つ走る所だった。

「そこまで拒否しなくても……いいじゃない。似合うと思うけどな」
だなんて。マフィアは他のヘアークセサリーをつまみながらブツクサ言っている。

「あ……」

ヒョイと目先を変えるとピアスコーナーがあった。色も種類も割と豊富に。シンプルな球型から、星とかハートとか。やけに凝った装飾の施された物とか。どれもこれも可愛いしカッコいい。

「ピアスならセナ、着けてくれるかも」

と、並ぶ商品を大雑把に目を通していく。あんまり凝った物はセンスわからないし。シンプルの方がいいかな、と思っただ。

一つ、目を引いた色でシンプルに、真珠みたいで光沢のあるピアスが あった。

薄紫。

セナの髪の色。

セナの あの整った顔立ちに、一本一本が細く強く柔らかく肩より伸びた薄紫色の綺麗な髪。そして済んだブルーアイ。薄くキリッと引き締まっている口元。

セナは綺麗で、見る者を圧倒させる気品が備わっている。本人は女顔扱いされたりすると激怒しちゃうけれど。耳に さりげなく着けたピアスとかが、いっそう気品を際立たせているんだ。改めて見ると思わず ため息をついてしまう。

きつと。

髪の毛と同じ、この色のピアスなら。すごく似合うような気がしてきた！

ますます思い込みは加速していきそう。

なので。

「これ、下さいー！」

ルマ山脈は噂通りで、長く険しい道のりが続いている。

土砂の道なただけれど、それが坂道で緩やかに延々と先まで のびているんだ。両横に草木や樹木を挟んで道がある。

私なんて へろい奴は、皆より すぐ息が上がってしまって。足元が おぼつかなくなってきた。

「大丈夫？ 勇気……」

と、後ろのマフィアが心配そうに言った。

「へ、平気 平気。まだまだイケるよ！」

私は口をへの字に曲げて歩を進めた。少し つまずきそうになりながら。

でも。始め たいした事の なかった疲労も、段々と大きくなってくる……。

「なあ、勇気」

ふと。私の前を歩いていたセナが振り返った。

「何？」

呼ばれて、返事をする。

「何か、歌え」

「は？」

突然の言葉に。私はチンプンカンプンと いった顔でセナを見た。「何か、元気の出るようなやつ。前に月夜祭で歌ったやつみたいにさ、明るい楽しいのを頼むわ」

「は、はああ!？」

確かに以前、『インライト伝説』とか調子こいて歌ったりしたけれどさ。いきなり、今ココで、なんて！

「恥ずかしいよお！」

私は叫んだ。セナをふくれっ面で睨みながら。

「いいから歌え。何でもいいから。でないと……」
少し考える。

「でないと？」

私はゴク、と息を飲んだ。

「……俺の おしおきフルコースが待っている」

おしおき……。

様々な『おしおき』が脳裏に浮かんだ。嫌だ、それは。またスカイダイビングされたりするのは恐ろしい。

「仕方ないなあ。んーっと……」

と、歌う歌を考えてみる。実は歌唱力には自信は あったりして！よし、と決めて。前奏を想像で流し始めて指先でリズムをとった。

「『ンンマン』、行きます！」

張り切って歌い始めた私だった。

私は愉快地熱唱する。歌詞が頼りなかったけれど、気持ちを込めまして。

愛と勇気オンリーな歌を。腕を振りながらノリノリで歌った。

一番しか知らないから、すぐに終わったけれどね。

「いい歌だな。愛と勇気だけが友達なのかとツッコみたくなるが」と、セナが笑いながら。

照れと歌いきった！ という満足感で顔の蒸気が上がったままの私は、それを見て嬉しくなって はしゃいだ。

「うん！ 素朴だけど温かいよね！ もひとつ、勇気の鈴がリンリン鳴る歌が あったりするんだけどね！」

頭を掻きながら二ヒ！ と白い歯を見せると蛍が茶々を入れた。

「変なの！ “勇気”の鈴、ですってよ！ 騒がしそ！」

クスクスとマフィアの笑い声も聞こえた。

「何よお、いいじゃん！」

私がペロつと舌を出しながら文句を言うと、「確かに。やかましそうだよな」だなんて歌わせたセナまで言い出すし。

何それ、私一人だけが騒がし娘みたいじゃないかあ！

「こうなったら、もう一曲歌ってやるう！」

勢い任せで次なる歌へ。バイクに乗っていないライダーの歌を力強く歌い始めた。

夜も更けた。

もちろん……野宿だった。

さっきの私のシヨウの後、ルマ山脈も半分近く歩いてきたらしく日も暮れてきたので、とりあえず道の隅に落ち着いた。交代で火の番をする事とし、セナが まず役に当たった。

皆がスヤスヤと眠りに着いた頃。私は ふと目を開ける。

火の光に照らされている、セナの横顔が見えた。表情は なく、炎を一心に見ているようだった。

(綺麗……ほんつと何て美しい人なんだろなあ……)

何度でも、落ち着いて見るたびに ほればれしてしまうんだ。

(私……こーんな素敵な人の そばに居るんだな……一緒に笑ったり冗談 言ったりしてるんだ……)

今日なんて。また調子こいて歌ってしまった。その恥ずかしさを今に なって やつと感じた。

(しかも私、この人に恋してるし……)

恥ずかしさとは違うドキドキ感が、心臓を伝ってやって来る。

すると まだセナに渡していない買ったピアスの事を思い出した。(喜んで受け取って……く、れ、る、よね?)

昼間のセナの微笑みが まぶたの裏で蘇る。「お前は しょーがねえな!」とか「やれやれ」とか言いながらだった、とても優しい笑み。

(笑って……セナ)

閉じた まぶたの奥で。このままだと いい夢が見られそうだな、なんて思い描いていく。セナと2人で海か草原か。花畑か何処かでクルクルと踊って回って歌って明るく楽しそうに……笑いあっている、幸せな、夢が。

あと どのくらいの距離なんだろう。そこへ行けるのは……。

セナ、と……。

セナが、そばに……。

そばに……。

……。

……しかし、突然セナが立ち上がった。

(……?)

薄っぺらい意識の中で目を開けたら。

セナは立ち上がって。

(あれ……?)

そして。

一人……音も なく静かに立ち去って行った。

茂みをかき分け、道では ない離れた場所へと。

私は夢か現実か。わからない まどろみの中で必死に どっちかを考えていたけれど。

「セナッ!？」

現実の私の声のはずだった。

セナは別に勇氣達を置いて旅立ったわけでは ない。

勇氣達が寝ている場所から数十メートルは離れただけだった。少し大きな岩が あり地面が石でデコボコと盛り上がっているのが目立つ地へと出た。

水音が するのは、岩場の岩と岩の隙間から水がチヨロチヨロと零れ落ちているからである。

セナは、その岩場の前へと歩いてきた後……上を見上げた。

輝く夜の月を眺めにか……いや、そうではない。

セナは、風の音で呼ばれたのだった。

風神という名のもとに仕える者の、その敏感な感覚が、微かだった音を感じとつたに、すぎない。

「お晩です。ご機嫌イカガ？」

頭上の声。セナに降り注ぐ。

細い足を組んで座り、岩場の高みからセナを見下ろしていた。手を振って、大きな黒の両の目で。

肌に張りついた全身の黒タイツは、夜の暗さに溶け込んでしまっていた。

「ひたき
鴉鴉」

セナの少し擦れがちな声が、無言の風に、さらわれて流されていた。

「……何だ？」

セナは鴉に、隙を与えないよう慎重に視線を向けていた。これまで相手にしてきた経緯を思うと、油断はできないと。緊迫感がセナを包む。

セナが、どうであれ。鴉には気に、する事でも何でも、なかった。いつもの通りのマイペースでセナをアゴの下で見下している。

「先日、言いそびれた伝言文を伝えに來ただけさ」

と、余裕綽々で鴉は答えた。そんな態度でもセナは今さら腹を立てたりなどは、しない。

「伝言？ ……俺に？」

眉をひそめる。

相手の真意が、わかりかねていた。

「ハルカからの、ね」

鴉がクスリと笑って口元を歪ませた。

「……！」

心中、騒がしく顔には出さないセナ。ひと呼吸し、動揺を空気と

一緒に飲み込んだ後、会話を続けた。

「ハルカが、俺に何の用なんだ」

2人の言い合いは続いていく。

「君は邪魔なんだよ。僕らにとってはね」

「何言ってる。邪魔なのはそっちだろう」

「救世主のそばに君が居る限り、救世主を殺す事ができないでいた。君は強いからね」

振り返って首を回してみたりする鵜。

「敵に褒められるなんて光栄だな。……でも勇気だつて弱いわけじゃない。いや……」

言いながら……少し張り詰めていた糸が緩んだセナは、視線を落とし下を見た。トカゲのような小さな動物が這いずるように地面の上を横切つていったのが見えていた。

「強いさ……俺なんかより、ずっと。それに、本人にも自覚できていない妙な力も ある……」

呟きのように聞こえた。

鵜は聞いてか聞かずか。真顔になり、言葉を吐く。

「妙な力。そうさ。僕らは以前、それにしこたまやられた。偶然だったかもしれない。けど、そんな事はレイも紫苑も……たぶんだけハルカも知っていたさ。邪魔なのは、その力じゃない」

「どういう事だ？」

もう一度セナは上を見上げた。鵜と見つめあい視線は正面でぶつかる。

「邪魔なのは、君だ」

再度、繰り返した。「だから……」

また話を戻すのかというような顔を向ける。

「君が居るせいで、レイもハルカも救世主に手が出せないんだよねえ」

セナには さっぱり わからなかった。

「何故……？ 俺が居るせいで……？」

疑問が渦巻いて気持ちが悪くさえなってくる。

「ハルカに直接 聞いてみる事だね。僕の伝言は、君をハルカの元へ連れて行く事。ま、そういう訳なんだよ。で、どうする？」

「……」

セナは黙ってしまった。

面白げに笑いながら、黒の目は鋭く見下すのをやめないでいる…

… 鷓。

「会いたくないわけ？ 昔…… 好きだった女に」

聞いた途端だった。

セナはカツと…… 顔が赤くなる。

いきなり自分の奥底に あって沈んでいた感情を豪快なシヨベルカーで掘り当てられたかのように。外部からの衝撃を弾き返して隠し覆いきる事が できなかつたのだった。

セナは首を振り、動揺を落ち着かせようと試みる。

そのさまが高みの見物と洒落こんでいた鷓には どうしようもなく たまらない。

痛快だった。

「あはははは！」

初めて声を出して この場で鷓は笑った。すぐに「おっと」とわざとらしく口を塞ぎ、「悪い悪い」と言いながら涙目になった目尻を拭いた。

「君が来ないと、ワマ民族の村に総攻撃を仕掛ける、なんて物騒な事を言ってたんだけどね？」

「なっ……！！」

「どうする？ ゆっくり考える時間くらい あげるよ？ いつ帰れるか、わかんないしねええ？」

セナの心は揺れた。思考が止まらないで進むばかりだった。……

……行くか？ ハルカの所へ。昔 好きだった……あいつの所へ？
勇気を置いて。

奴の話が本当ならば、俺は勇気の そばを離れる訳には。
それに……勇気を……

勇気を、一人には させたく ない……！

セナの真剣な瞳は向かう焦点が定まらず、夜の間をさ迷って飛んでいた。

勇気と村。どちらを取るのか。

選択は、セナを容赦なしに責めたてている。

「俺は……」

言っではみたものの。答えが見つからない。迷いは、晴れない。
目に浮かんだのは勇気ではなく、ハルカとの思い出だった。ハルカとの、あの幼き日々の微笑みの顔が美しく、花びらの散るを想像し酔わせ それでいて儂く……年月を経て美化された懐古の心が、とても大切に手離す事など できそうに なかった。

「……」

無言でしか居られない時間が悲しく過ぎていく。

小さくとも吹く風は、セナに何も答えも導きも示さない。

セナが自力で選べば よいのだと……囁きは優しくは ない。

「ハル、カ……」

苦しく漏らした声は想い人の名前……呼んでも、実体の ない思
い出の中だけのハルカは屈託なく笑っただけだった。

綺麗なままの……。

「行かないよね!? セナ!」

……!

浮かんだはずの人物は、思ってもみなかった人物へと姿を変えた。
勇気。

振り返ると、存在 確かな勇気の。泣きそうな、怖い顔がセナを
捉えていた。

勇気はセナの あとを追って、茂みの陰に隠れて一部始終をしつ
かりと見ていたのだった。

セナと勇気の視線と視線が絡みあう。

「行かないで!」……

セナが、ハルカさんの所へ!?

心臓が激しく、大きくなる。不安が いっぱいに広がって、抑え
きれない……!

「嫌だ! セナが、行っちゃうなんて!」

私の叫びが辺りに響く。構う事じゃない。もしココに居ないマフ
ィア達に聞こえたって、そんな事は どうでも よかった。

私は首を振って。セナは驚いた顔をしたままで……。

そのうちに、ため息をついた。

疲れたように……セナ。

「……聞いてたのか」

言つて、私に背を向けた。私は　ますます怖くなる。

「セナがハルカさんの事を……っていうのは、何となく感じてたよ。でも、そんな事どうだっていい。今、セナは私の近くに居てくれるもの……！」

不安の　せいで焦りが生じる。セナは「落ち着け……」と力のない微笑みを作っていた。

セナが逸らしてからは、まるで私から逃げているようで　こちらに目を合わせようとは　しなかった。

私の中に焦りと……これは恐怖だ。

怖い。そう、……怖い……！

「私……私、私……！」

顔が熱く。赤くなつてきたみたいで、息が苦しくなってきた。すごく苦しがつている私を見てセナが気遣つて声をかけた。

「大丈夫か？　勇気」

いつものセナの顔だった。当たり前にも　なった、セナの優しい顔は。私をいつも喜ばせていた。

けれど今は　ちつとも嬉しくなんかない。

私は混乱した頭で、言わなければいけない言葉を必死に探した。探して探して。乱暴に掴んで放り込む。

「セナが好き！」

バサ！　バサバサバサ……！！

私達を取り囲む黒い世界で、これまでに隠れて見えていなかった遠くの野鳥の群れは飛び立つ。

休める所を求めて丸い月へと向かい、羽を広げた。

セナの強張つた表情は固まってしまっていた。

「セナが好き……だから行かないで……」

語尾に なるほど聞こえにくく。

「……行かないで……」

繰り返す言葉は、頼りなかった。

赤い顔は月の光に さらされて きつと よく映えているに違いない。はあ、……と吐息をつくと少しだけ楽になれた気が した。

でも それはセナの次の ひと言で打破される。

「さよなら、勇気」

私は忘れない。

きつと一生、これから ずっとだ。きつと ずっと、この瞬間を。

セナに渡すはずだったピアスの包みが、私の手の中からスルリと抜けて土の地面の上へと落ちていった。

《第45話へ続く》

第44話(誘)いざな「われた風神」(後書き)

【あとがき】

誘われた風神……何て怪しいタイトルなんだろうか(次回も……)

ブログ第44話(挿絵入り)

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog/1110.html>

ありがとうございました。

第45話（捕われの風神）

セナが好き

だから行かないで

……その私の願いは、無残にも打ち砕かれてしまった。
別れに よって。

「セナ……？」

呼んだって。返事なんて来ない。

静かな森の間に、空しく響くだけだ。

だって あなたは行ってしまったのだから。

さつきまで、そこに。鷓たじと深刻な話をしていたって……。

ココには気温がないのかな。

暑くも寒くも ない……自分の体温さえ感じられない。たとえココに あなたの微かな温もりが残っていたと したって、きつと今の私には……感じ取る事は できないんでしょうね だって今の私には感覚というものが存在しないような神経に なって どうするの どうなるの ああ わからない どうしよう 頭の中が混乱するグチャグチャだ誰か助けて助けて助けて たすけ……

「……」

……。

「……本当に行っちゃった……の……？」

やっと、声が出せた。

今の私の精一杯の声。涙声だった。

「う……」

精一杯。

「う……あ、う……」

精、いっぱい、い……だ。

「……うわあああああーん……！」

格好なんて どうでも よかった。子供っぽく、泣く。

五感が ないって？ 嘘。

だって今は頭が かち割れそうなほど痛い。

痛いんだってば……。

「勇気！ しっかりして！ 私よ、わかるわよね！？」

もはや涙でベチョベチョに なった目を開くと、私の肩を掴むマフィアの心配そうな顔が覗いていた。

「セナは！？ セナが居ないの！？」

私の肩を揺すってマフィアが血相を変えている。

私は、目も充分に開けていられないほど 涙を後から後から流し、ついにはマフィアの肩を掴んで顔を伏せた。掴んだ手はブルブルと震え、肉を引きちぎりそうなほど握り締めた。最初、顔をしかめたマフィアだったが次に私が力なくヒザをついた時、何かを悟ったように驚きを見せた。

「セナは……」

マフィアは恐る恐る口を開いた。

「ハルカさんの所へ……鵜と一緒に……」

私は うなだれたまま そう言うのが やつとの状態。でもマフ

イアには それで充分だった。

「何て事なの……！ 嘘でしょう……！？」

私を抱き締めた体勢のまま、苦痛の表情で空を仰いだ。

さよなら、勇気

セナ、行か、ない、で。

……一方。

ハルカやレイ、四師衆が拠点とする城。鷓に連れられて来たセナは、小さな部屋に隔離されて ても いるかのような勢いで容れられた。コンクリートのような硬い部屋の床は酷く底冷えがして、セナはヒザを立てて光の当たりにくい目立たない角隅に座っている。コツ、コツ……と遠くから軽く響く足音に、セナは顔を上げた。そして立ち上がって、近づいてくる足音の する方へ。入り口のドアは鉄格子で できていた。

人物が、姿を現す。

格子を挟み2人は しばらく向かいあっていた。しばらく……。

セナでは ない、相手の方から話しかける。

「しばらくぶりだったなセナ。やっと落ち着いて会えた」

品の よい美声。誇り高い眼差し。

優雅さではセナと同等か、いや、それ以上かもしれない。

「ハルカ……」

威嚇と懐かしさをたっぷりと込めた声を出すセナ。それと、ほんの少しばかりの愛おしさも こもっていたように感じられた。

「久しぶりだ」

しかし それら全てを無視するかのよう。ピシヤリとハルカは はねのけた。

「レイにも会ってほしかったけどな」
付け足して、少し口元で笑う。

「レイは……」

「生きている。私と陰陽師の力で。今は……眠っているだけだ」

「そうなのか……」

聞いたセナは複雑だった。

これは素直に喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか……悩む所だった。

旧友として喜び、敵として、悲しむ……。

「生きて……」

呟いてみるとだ。

「レイは死なない!」

ハルカはセナをキツ、と睨むと。ファイと そっぽを向いた。手で、
金髪の髪をサラツと かきあげて。

その仕草一つ一つが、セナには たまらなく魅せられてしまう。

(俺は ずっと小さい頃から……)

幼い頃、レイとハルカと自分と。3人は一緒に居た。

懐古の念がセナを取り巻く。

(お前がレイの事しか見ていなかったのは知っている)

それでも よかった。一緒に居られるだけで、それで、と。セナ
は無理矢理に納得させる。させてきた。

(俺はレイの事も、本当は……)

今は互いに敵同士だけれども、とレイを思う。

(大事……なんだ。2人ともが。2人とも)

2人とも大事……失いたくなんか、ないのだと。

沈む気持ちのセナの頭の中に一人の少女の影が ちらついた。

それは やがて光に なる。優しく笑って無邪気にはしゃぎま
わる、初夏に輝く生き生きとした若葉のように元気で子供らしい、
確かな存在に なる。それは。

……勇氣。

『セナが好き！ だから行かないで！』……

記憶の中の勇氣は必死だった。言葉で自分に すがりついてきた。吐き捨てたセリフで払いのけてしまった。さよなら勇氣、と。本当ならセナは迷ったままで答えを見出だす事が できなかつただろう。一步も動けなかつたはずだった。

しかしセナはココに来た。ココに堂々と居座っている。

セナは勇氣を選ばなかつた。

もし村の ためだつたんだと言い訳しても、それは嘘だった。セナは村も勇氣も選ばない。

選んだのは。セナが自ら選んだのは。

「よく来てくれた」

ハルカは、セナに微笑んでいる。旧友との再会を喜ぶ素の顔だと見てとれた。だからかセナの顔も自然と ほころんでいく。お互いの再会を素直に喜びあっていた。

しかし それは一時の間だけ。ハルカは すぐに後ろを向いてしまった。

「お前には しばらくココに居てもらおう……だが、安心しろ。別に拷問に かけるわけでもなく、不自由も させるつもりもない。ただ、ココに居てもらうだけだ」

ハルカは何故か遠回しな言い方をする。

「人質つて事だろ。要するに」

セナの問いかけに微かに反応し頷くハルカ。

「……ま、そういう事だな」

「一つ、聞きたい事が ある」

セナは真剣に問いかけた。

「何だ？」

「鵜は、俺が勇気の……救世主のそばに居るせいで、レイやお前は救世主に手が出せない、と言った。一体、どういう事だ？ 何故、俺が邪魔に なる？」

ずっと気になつていた事だった。セナは しつこくも こだわ
り、答えを求め。

ひと間をおいて……ハルカは答えてあげた。

「……好きだからさ」

ポツリと仕方なさそうに。

「セナの事が好きなんだ……私も、レイも、な。……だから、お前
を巻き込みたくなかった。それだけ、だった……」

今ハルカはセナを見ていない。何処か遠くを見ていた。

恐らくは、3人で過ごした過去だろうか。それはハルカ本人に
しか わからない。

「何……」

どう返事をしていいのかが。セナは戸惑った。

そんな事をしている間に、ハルカは話を切り替える。

「これから、鵜と さくらに救世主 殺害を命令する。お前は そ
こに、居ろ」

聞いた途端に、セナは大きく体を開けた。

「何だと！」

ガンツ！

2人の中の鉄格子を勢いよく掴み、ハルカに食つてかかろうとす
る。

「やめろ！ 勇気に手を出すな！」

思いきり叫んだ。しかしハルカは無言のまま、特に反応は ない。

「……！」

セナはヒザを地面に落とし、歯を食いしばった。

思いが馳せる。来るんじゃないかった、来ては いけなかった……

そついう事なのか？ と自分を責めずには いられない。

「やめるおお……！」

セナの叫びは、何処にも届きは しなかった。

……セナがハルカさんの所へ行ってしまった。

私の思考回路は鈍く絶望的な働きの状態が続く。食べ物も食べたい気が しないし、眠くも ない……ココが何処だったかさえ、思いつく事が頼りない。

ルマ山脈を歩いて越えようとしていた。私はマフィアに手を引かれ、先を進んでいた。

セナが去って。マフィアに すがった、あの後……どうにか落ちて着いた私は、朝を待つて。そして……日の出と ともに歩き出した。次の目的地へと行くために。私達は先を急がなければ いけない。私は救世主……足を止めては、いけないんだ。いけないよ。

他の皆は、と言つと。

マフィアから事情を聞いて。表情が沈み無言だった。私の泣きはらしてボロボロに なった変な顔を見ても、誰も何も言わない。笑いもせず、怒りもしない……なあんにも。

私はセナが好き。でもセナは……。

ザクザク……ザクザク。

歩を進ませる皆の足音だけが並んで、何だか おかしかった。誰か、何か話せばいいのに……つて。……思う。

バサッ！ ……

近くの木の陰で、鳥の飛び立った音が した。

やや緩やかな登り山道を歩く私達一行、皆が いっせいに驚き反応する。それまで あまりに静かだったから、とても敏感だったんだ。何処かの木から、鳥は飛び出して空高く消えて行く。

それを機に、ぼうつとしてマフィアに手を引かれていた私の頭の中は弾かれて働き出したようだった。でも、思い浮かぶのは、一つだけ。

セナが、ハルカさんの所へ と。

現実の私の体がグラリと揺れる。大きく傾き、転びそうにも なった。

「勇気!?!」

マフィアが私の体を支えた。

「しっかりして! 勇気!」

何度でも私の名前を呼んでくれる。何度も何度も。変だな。

答えられそうに ない。お腹から力が出ないの。

ごめんね、マフィア……。

しかも、意識が薄らいでいく。これは。

これは、気絶ね。

まぶたが重くて沈みそうだ……った。

(何……この感覚……私が一人、消えていくみたい)

私は目を閉じ、体は重力の なすがままに預けていった。

「勇気!」

「お姉ちゃん!」

私は倒れた。

意識を少しだけ残しながら。体は、支えてくれるマフィアに任せ
て。「勇気い!」

カイトもメノウちゃんも蛭達もヒナタも、皆が集まって私を呼ん

でいる。

きつと私を囲んで皆は心配してくれているんだろっけれど、
起き上がる事は できない。ごめん……。

……。

「別に放っておいて いいんじゃない。すぐに楽に して あげる
じゃ」

!?

馬鹿みたく明るい声が、遠く高くから聞こえた。

私は倒れたままだったけれど。皆は振り返って頭上を睨む。そこ
に居たのは。

鵜。

私は事の成り行きを僅かな意識で見守っていた……。

勇氣から皆の視線を一点に集めた声の主は、勇氣の判断通り鵜だ
った。

空へと ほぼ真っ直ぐに立ち、周囲より抜きんでて高く目立つ頑
丈な一本の木が生えていた。

太く しなやかに伸びた枝の上に偉そうに立っている鵜と、もう
一人。

さくら、だった。

予断を許さないような顔つきをしている。

「お前らは……！」

先に口を開いたのはカイトだった。倒れマフィアに抱えられてい
る勇氣の そばから立ち上がって前へ。

「色々想像しちやってる？ セナ君がハルカと今頃 何してるの
か」

ふふん と鼻で笑いながら地上を見下した。

「下世話な言い方は止めなさい！」

激怒しマフィアも立ち上がってカイトの隣に並ぶ。

本気で鷓を憎らしく睨んでいた。

（こんな奴らに……勇気を玩具おもちゃに されてたまるもんですか！）

マフィアは勇気をメノウ達に頼み、自分は戦う姿勢をとった。

「何しに来たの、あんた達」

まずは聞く。武器を手に とるのは それからだ。

鷓は指をポキポキと鳴らしながら余裕だったが、マフィアには答えなかった。

「手加減なしね」

「わかってるわよ」

鷓と さくら。顔も見ず、言葉だけの やりとりをしている。

明らかに戦う気で いると踏んだマフィア達は「ケンカしに来たわけ……ね」とムチを取り出し、カイトと並び改めて戦う体勢を整えた。

カイトも。隙を作らないように相手を見据える。

続く道の先方より風が嵐と なって吹いてくる。枯れた葉やチリ、ホコリ、緊迫感を運んでくる。何処かの鳥達は それに耐え難く飛んで去る。

朝日は少し高く昇ったはずだが乱層雲が覆っている空では姿が見えず。雲は雨か雪かを知らせに広がり次第に辺りを暗さに染める。

「ハルカ様とレイ様の ために……殺す！」

さくらの発した声は低かった。よく響く。

寒さを感じたのは季候の せいでは ない事が よく……皆、わ

かっていた。

《第46話へ続く》

第45話（捕われの風神）（後書き）

【あとがき】

実は今回で書きためたノートが終わりです。次回から、今の私が残された設定資料と睨みつつ進行する事になります。うわー。

ブログ第45話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog-entry-1111.html>

ありがとうございました。

第46話（自暴自棄）

「救世主を、殺す！」

物騒な言葉を吐くのは、さくらだった。鵜の隣に立っていた木の枝の上からいきなり歩き出すが落ちる事はなくそのまま空中に浮かぶ事ができ、ピタリと歩みを止めて勇気達一行を見下ろしていた。そこから少し離れた木の陰で、気を失い倒れている勇気と。そばで勇気を見守るメノウと蛭。勇気達を庇うために取り囲んで、戦闘態勢をとるマフィア、カイト、ヒナタ、紫。

冷たい風が吹きすさぶ。それがいつそう緊迫感をあおるようだった。

やがてチラホラと、空から雪の粉が舞いだした。

「蛭とメノウちゃんは勇気を護っていてね。お願いよ」

マフィアは後ろの蛭達には振り向かず、言葉だけでそう言った。

「さくら。救世主の方を頼むよ。僕は他の雑魚を引き受けるからさ」
鵜はペロリと口唇を舐めながら、目下を吟味するように見渡した。
殺される。

全員に、体全体や足先まで凍てつくような緊張が走っている。

「行くよ！」

最初、先陣をきって飛び出していったのは鵜だった。高みからマフィアに向かって真っ直ぐ向かってきた。

（勇気。しっかりしなさいよ！ 私達が居るからね！）

マフィアは思いきり、持っていたムチで迫り来る敵……鵜に襲いかかっていった。

その頃。

底冷えの酷い部屋から、場所を移されたセナ。歩いてどうぞと移動したわけではない。紫苑の術で、いきなり『移動させられ』ただ。

暗室だった。周囲は暗く、隅四方、壁すらも見えない。

何処だココは……と数歩だけ進んでみると、ガン！　　と何かにぶつかってしまった。

一体 何に ぶつかつたんだ？　と見ても何も、と……周囲に慎重に注意を行き届かせていると、どうやら透明の『壁』が自分の前に存在している事にセナは気がついた。

セナは この空間全体を把握し、悟る。ココは、この場所は。

四角い透明のガラスケースの中に、自分が居るのだと。

まさか一瞬で こんな所に？　とセナは壁に触れる。この壁の素材がガラスかどうかは不明だが、壁を伝っていつでも途切れている気配はなく。ドアも窓もなく。要するに逃げられない出て行けないという事だった。

暗く、遠くが見えない見通しの悪さの中。セナは天井まで　　どうやらフタをされた四角い透明のガラスケースの中に閉じ込められているのである。

（手の出しようがない……か。奴らの手の内だしな）

セナは諦めて、元居た地点へと戻り床にあぐらをかいて座った。ヒジをヒザの上につきながら、退屈しのぎか目を閉じたり首をまわしたりしながら考え事を始めていった。

そうしていると。コツ……コツ……と、ヒールのような足音が段々と近づいてやって来る。

間違はなくハルカだと、セナは確信していた。

セナは動じず、相手が声を発するまでジツと黙って待っていた。

「どうだ？　　気分は？」

やがてセナの正面から声が聞こえた。相変わらず暗かったが、ボンヤリとハルカの姿が浮かぶように現れていた。

「最悪」

セナが答える。

「このケース内の温度は一定のはずだが。前の所は寒かっただろう？ 息苦しさもないはずだし、快適さはマシになったと思ったが」

ハルカは小首を傾げてセナの様子を見ていた。

「そういう意味じゃない。この扱い方だよ」

セナは重いため息をつく。「窮屈な事で」と、つまらなそうにも

「大丈夫…… もうすぐ、そこから出してあげるから」

少し微笑みながらハルカは言った。

一体、何の含み笑いだっただのか。セナが顔を上げると同時に、辺りが変わる。

突然に眩しい光が2人を囲むように、空中の箇所箇所にと適当な位置で出現した。始めセナは驚いて目を瞑る。恐る恐る ゆっくりと開くと、光に慣れた視界に信じ難いものが飛び込んできたのだ。た。

「……！」

大人の身長くらいはある高さ大きさのスクリーン。現れたものはそれだった。画面には、映像が映し出されている。かつてレイとの戦いの時も、こうしたスクリーン越しで別の場所を見た覚えがある。同じだった。

セナは映し出された映像を見て、驚愕する。

「皆……！」

少し懐かしさもある山道の景色の中、知ったメンバーが揃っていた。マフィア、カイト……仲間と。敵の鵜と、さくら。

すぐに予想される。

「見ての通り。まさに今、鵜とさくらで救世主を抹殺しようとして……戦闘に入る所」

ハルカが説明してくれた。セナの耳に入っているのかどうかはわ

からない。

そんな事はひとまずおいてだと、セナはスクリーンを一つ一つ目で追っていた。

「勇気は何処だ!? 姿が見えないが……」

透明の壁を苛立ちながら叩く。熱のこもったコブシから、汗がジツトリと湧き出ていた。嫌な汗は、額にも浮かんでいる。

勇気は何処だ。無事なのか……。

セナの不安は膨れ上がる。いつの間にか立ち上がって必死に勇気を探す。映像の、隅から隅まで順番に。

鶺鴒とマフィア、鶺鴒とカイト、さくらと紫、さくらとヒナタ。時折2対1、2対2となつて。両者、互角の凄まじい技と技との攻防が、休む事なく繰り返り広げられて……いた。

「津波!」

「散華!」

“散華”とは、花びらや草などを刃のように鋭利なものに素早く変え、攻撃するマフィアの技である。

「積木!」

これはヒナタの技。光の塊を造り出し、雨のように敵の上に降らせている。

さくらも鶺鴒も、時々相手の技を受けるが直撃は少ない。やはり、強かった。大したダメージも与えられず、2対4にも関わらず……マフィア達は苦戦している。

「時間の問題だな」

腕組みをして、ハルカは楽しみに光景を眺めていた。

「勇気は……」

痛い思いで勇気を探し続けた。すると、やっとの事で勇気を発見する事ができた。木の陰で見えにくいのは仕方がないが、倒れて寝ている勇気をハッキリと目で確認する。

「勇気! どうしたんだ!」

セナは壁を叩く。壁はビクともしないが、何度でも構わず叩いた。

大人しく、何の反応も示さない様子の勇気を目の当たりにして。セナの胸の内に、動揺が広がっていった。

ハルカはスクリーンを見ながら、横目でセナをチラリと見た。

「セナと別れたのが、よっぽどショックだったんだろう。よく見る、生気が薄い」

ハルカに悪意はなくとも、セナの心臓をえぐるような物言いだつた。

「んなつ……！」

「見る。今……さくらが救世主の方へ近づいて行く……」

セナは思い出していた。思い出してしまった。

いつか、勇気はレイに邪尾刀で一突きにされ倒れた事を。された瞬間を。

忘れる事のできない、恐ろしい現実を、光景を。

セナの全身は……震え出していた。

一番先に倒れたのは、まだ技も戦った経験も乏しく幼いヒナタだった。さくらの持つ特有の扇子で一振りすれば、たちまち烈風が発生して向かってくる。ほぼ至近距離から それを受けてしまったヒナタは胸に打撃を受けて吹っ飛び、遠く飛ばされ木に直撃してしまつた。

体を強く打ちつけてしまい、そのまま立ち上がる事なく気絶する。同じく風を受けそうになった紫は空中で瞬間移動をして何とか攻撃を免れたものの。助けられなかったヒナタを苦い顔で見るしかなかった。

その一瞬の躊躇ちゆうちゆうとよそ見が油断となる。紫が感づいた時にはもう遅かった。

同じく至近距離にまで瞬間移動した、さくら。何と、顔と顔がぶつかりそうなくらいに接近し、長い髪の香の漂う中で紫は扇子から

放たれた殴るような風の直撃を受け飛ばされて行った。空中で食らった攻撃のせいで、紫は地上に向かって隕石並みのスピードで落下する。

風を受けた後は落下の際の衝撃だった。地面に深い穴が空き、紫は全身を砕かれながらも原型はとどめて、土に埋もれた。

そして動かない。沈黙が襲った。

相手が強かった。

事實は、見せつけられる。

敵を先に片づけた さくらは、鵜を見、次に勇気の方へと目を向けていった。

「お、お姉ちゃ……」

震える声を出したのはメノウ。横には、蛍。「紫……!」

勇気のそばに立って、さくら達の攻防を見ていた。思っていたより短時間で戦いが済んでしまった事にも、恐怖を感じた。

遠目には、鵜が一人でマフィアやカイトと戦っている。しかしさくらの関心は鵜の援助ではなく、勇気の方へと向けられている。

「ひっ……!」

さくらが、空から飛んでやって来る。扇子が手から消えた。

そして、着地した……メノウと蛍の前に。「さくら……!」

「救世主の息の根を止めれば、終わりよ」

さくらの紅を塗った口唇は、囁きを邪魔しない。黒髪は、自然になびく。雪の粉は、すぐに水となり乾いて跡を残さない。……

「どきなさい、2人とも」

静かに命令は空気に融ける。言われた2人は恐怖のあまり声が出なかった。

蛍は、勇気の手荷物を見て一つ抵抗を試みた。勇気のそばに荷物と一緒に置かれていたのは 光頭刃。

聞く所によると。四神鏡の所有者は斬れるが、この世にある生物以外の物で斬れないものはないらしい。確か この剣で複製だった邪尾刀をも滅ぼしたはずだった。

蛭は しゃがんで剣を手を取った。素手でも技でも。とても敵うはずがない事はとうに知っていた。ならば、せめて武器で対抗しようという考えが蛭に行動を起こさせたのだった。

さくらにとっては蛭の一動二動など、可愛らしいとしか見えてはいない。

「ならば……」

先ほど扇子を消したさくらの手から、今度は 邪尾刀を出した。本物である。

始めからそのつもりだったのか、すぐに使えるように手入れはされている。錆もなく曇りもなく、艶光りは褪せてはおらず。斬れ味は過去に十分に証明されているのを全く記憶に消せず覚えている。

さくらの確実な殺意は、蛭を負のどん底へと突き落とす。恐れは震えをまた恐れで助長するだけだった。「いやあああ！」

それでも、蛭は剣で斬りつけていった。たとえ、無駄だとわかっていても。

「無駄ね」

言葉通りに。さくらは直接 斬りつけるわけではなく、横一線に刀を振るう。そうして空を斬った風は圧力が かかり蛭へと面つぶつかつていった。「きゃあああ！」

悲鳴と蛭は、遠くへと飛ばされる。草の生い茂った場所へと擦り転がってしまった。

そしてついに。

「死になさい」

さくらの沈んだ声は対象へと……傍目では呼吸をしているのかさえ不明な勇氣へと。

握られた刀が光る。「終わりよ」

すでに腰が抜けて立てなくなっていたメノウの目の前で。

勇氣は刀で斬りつけられようとしていた。「お、お、お姉ちゃん！」

メノウの泣きと叫びは聞き入れられない。「死ね！」

刀に劣らず眼光は妖しく光り、勇気の体に刀は、ついに、振り落とされる。

現実から退散していた勇気は、心の奥で静かに目を開けた。

（静かだなあ……ココ、何処だっけ……）

水に浮かんでいた。水力で水面に浮かんでいる。力を感じてそれが気持ちいいと思っていた。揺りかごに揺れていた昔を想像させている。

（何処でもいいけどね……）

勇気は起き上がる。すると不思議な事に水面はなくなり、ただの地面になった。しかし最初から自分の所在している空間自体は、真つ暗闇だった。

温度はない。「はは……」

何度か来たような覚えがあった。それを思うと乾いた笑いが自然と出てしまう。

（ん？）

ふと、横の。数メートル行った先に人を見つけた。白い服を着ているおかげで、目立っていた。

「お兄ちゃん！」

白い服とは、そう。ラーメン屋でいつも着ている作業着とエプロン姿。よく知っている顔。勇気のたった一人の兄だった。

「ど、ど、どうして!？」

驚いた顔で、立ち上がって走る。兄の近くへと。

兄は笑って挨拶した。

「勇気。久しぶりだな」

「！」

久しぶり。その言葉に反応して少し考えた。

（お兄ちゃんの事、最近は考えてなかったな……）

前はよく兄を呼んで頼っていた勇氣。いつからだろう、呼ばなくなつたのは……と、急に訪れた疑問に戸惑って俯いてしまった。

兄は そんな勇氣を責める事はなく、肩に優しく手を置いた。

「何故だと思う？」

「それは……」

わからなかった。

「勇氣には、俺より大事な人が居たからさ」

勇氣が顔を上げると。兄の背後より もっと後ろの遠方から、大きな声が幾つも重なって聞こえてきた。

「勇氣ー！」

「勇氣、おおい！」

「お姉ちゃん！」

マフィア、カイト、セナ、メノウ、蛭に紫。それから……今までに会った事がある村や街の皆が勇氣に手を振ったりして呼んでいた。その中でセナを見つけた時だけ、勇氣の心は大きく揺れ動く。「セナ……！」

温かく見守っていた。常時、あんな顔をしている いつも通りの顔だった。

何故か今は胸が痛かった。

「どうした？ ……行けよ。何を怖がってるんだ勇氣」

兄は たきつける。勇氣を応援しているつもりが、意地悪に見えるた。「だって……」

忘れていない。セナは今居ないのだ。

忘れる事ができない。

「セナはハルカさんの所へ行っちゃったもの……きつと今頃は……」
嫌な想像しか浮かばない頭を、両手でガンガンと叩いた。その痛み
のせいではない、涙がジンワリと溢れてくる。

「私はもう、いらぬの！」

勇氣は自分を追いつめていく。

……

信じたものは何だっけ？

私は何で、何のためにココにいるの？

もはやセナという後ろ楯を失くした反動からくるものなのか、勇気は混乱する。セナの裏切りは、小さな勇気の心臓には、よほど応えて耐えられなかった。関係のない悩みまで巻き込んで、勇気は頭を抱え込む。その先には

(セナッ……！)

夢の最後の叫びは、……小さすぎた。

光頭刃は、眠る勇気のそばに落ちていた。そう。勇気の、手元に。

「死ね！」

さくらの振るった邪尾刀は、勇気へと。一直線に落とされた。しかした。

ガシイインッ！

金属と金属のぶつかり合う音が響く。刃と刃が対立していた。邪尾刀と、光頭刃。

「何！？」

驚いている さくらの瞳には光頭刃を握る人間の姿が。それは、その人物は。無論。

救世主……勇気。「……」

顔は、下の地面を見て眉を八の字にさせている。泣きそうで、泣けない表情をしていた。

手元に触れた光頭刃という最強の武器で、迫り来る邪尾刀を瞬間的に受け止めた。鞘も蛍のおかげで外されていたので、刃身と刃身

が真っ向から 打ち合う結果となった。

(わからない……)

ググ、と刀と剣はジリジリと引けをとらずにブルブルと震えている。動揺の広がる さくらに対して勇気の方は慌ててはおらず、むしろ落ち着いていた。

少しの間だけ、両者の互いの様子見の時間が流れていたが、やがて立って俯いたままの勇気の体から、温かい風が発生した。

「……？」

さくらは、また仰天したような顔で勇気の様子を窺う。一体、何が起きようとしているのかと興味をそそられた。

生ぬるい風は少しずつ大きくなり、勇気を取り囲んでいく。

その中で勇気はゆっくりと……顔を上げていた。

とても悲しい顔をして。涙は見られず。「……」

そして勇気は剣で 邪尾刀の刀身を弾いてしまった。「……！」

さくらは後ろに下がる。その刹那。

勇気は さくらの胸中めがけて斬りつけた。「……！」

ピシ。

きれいな、横線がさくらに服の上から斬りこまれる。とても細く長いラインを。

刀を弾かれて後ろに振り返っただけだった。その束の間の出来事。さくらは何が自分の身に起きたのかさえ理解するのに時間をかなり要してしまった。

半ば呆然とした さくらの次を待たずに、勇気は再び襲いかかる。

「くっ……！」

剣が、さくらを斬りつける。キインツ。ガシンツ。

金属音を繰り返している。

繰り返し、繰り返す。

勇気が攻めてくる。全く退かない。一つ一つの一撃に迷いはなく決して軽いものでもなかった。

さくらに反撃する暇を与えなかった。

(何なの、この力……これが、まさか、これが救世主の真の……)
小さな少女。誰がどう見ても、普通の少女。

圧倒的な強さなど素直に信じてしまいたくはなかった。

「くっ……！」

カァンッ……！ さくらの手から、邪尾刀が飛んだ。刀は空中で
転回して遠くへと飛んでいってしまった。ザクリと、土の地面に突
き刺さる。

「はっ……！」

さくらの油断を見過ごすわけはなかった。勇氣は憚る事もなく、
さくらの心臓めがけて突き刺した。ザシュッ……

「勇氣っ……！」

マフィアか、蚩か。カイトなのか。勇氣を見ていた者はその衝撃
的な一連の状況に、叫ばずにはいられなかった。

「あれは、“捨鉢すてはちの舞”です」

紫苑は言った。

セナの閉じ込められている部屋には紫苑も影なく現れて、適当な
空間の位置で静止し映像を映し出している幾つものスクリーンを眺
めていた。紫苑の目と好奇は、勇氣に向けられている。

「何だ、それは」

隣のハルカが聞いた。同じく、勇氣の映るスクリーンに関心を寄
せている。

「救世主の理性が取り払われ、まさに“本能”で身が“動かされ”
ているのです。ハルカ殿……これで満足致しましたかな」

特に表情を変える事はなく、驚く風でもなく。紫苑は静かに、見
守っているだけだった。

ハルカもだった。「たかが小娘一匹ごときで……」

顔は崩さず、悔しそうなセリフを吐いた。それを後ろで透明のケ
ースの部屋に入っているセナにもすっかりと聞こえていた。

「勇気……」

セナは何と言えればいいのかを考えながら、勇気を目で追っていた。
紫苑の説明を噛み締めながら。

本能のままだ、と。

紫苑の重圧がかかった声は、誰の胸の内にもものしかかってしまっ
て消えそうにはなかった。

「彼女は名の通り、ただ者ではない。よい機会でもある、とくとこ
覧になれるがいい……ハルカ殿も薄々と感じておられたのでしょ
う？ レイ殿が救世主に興味を持たれた、その理由を」

もうひと言。

「レイ殿が本気で殺せなかった理由を……」

勇気の死んだような目には……薄っすらと涙が浮かんでいた。

《第47話へ続く》

第46話（自暴自棄）（後書き）

【あとがき】

コメディないなあ……と思いつながら。よく考えたらシリアスだったんですよね、この小説。作者ウツカリ。そしてグツタリ@……時にまったり。

ブログ第46話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-112.html>

ありがとうございました。

第47話（私を返して）

勇氣は、本能のままに動いていた。さくらを光頭刃で一突きにする……。

（私は……何を……）
目に生氣はない。生ける屍。その形容が ぴったりだった。

（もうどうでも、いい……）
さくらと勇氣は停止している。勇氣の剣が、さくらの心臓を貫いたまま……。

血は一滴も出てはいなかった。さくらを含む四師衆は、人間のよう
に血が通っているわけではない。レイの闇のエネルギーで体が造
られてきている。汗や涙は見た目にはかく事はできるらしいが、果
たして本物がどうか恐らくは謎だった。

「な……」
驚きを通り越し、救いを懇願する声色で さくらは言った。

「何なのよ、この娘……」
さくらは、刀身を素手のまま掴んだ。無論、さくらの手の内に刃
は食い込まれて皮膚が裂けて。血は出ないが痛々しく傷が斬り刻ま
れていった。

掴んだ後は、……抜く。
自分の臍から突き放すように剣をはねのけた。

「……」
フラ、と一歩引き下がる。体が傾くさくら。
光頭刃は、生物にはダメージを与えない。ないはずだった。「く

……」
持ちこたえる。しかし苦痛の表情を浮かべていた。

「ひ、鵜ひたき……」
やがては、ヒザを地面についた。穴の空いた心臓のあたりを服の

上で わしづかみにしながら。

勇氣は、立ったまま振り向いて空を見上げた。

上空、少し遠くの空の中では一人でマフィアとカイトの2人を相手に戦っている鷓の姿が見えた。勇氣は鷓を見やると、すぐに行動に出る。

行動、即ち空を飛んだ。風を自分の周囲に起こしながら。「！」
さくらだけではない。恐怖のあまり身動き一つできなかったメノウや、勇氣達を気にはしていたが鷓の妨害のせいで助けに行けないマフィア達まで。皆、勇氣の行動に注目していたのだった。

勇氣は怖気づく事も全くなく、竜巻のような螺旋状の風に包まれて。助走をつけて、ピョーン……と軽く速く。まるで みずみずしい子馬のように、元気とさえ見えるほどに軽やかに飛んだ。

風の力のせいも、空中に浮かんでいる。

そして鷓の面前へ。

足のついている地上から事の成り行きを見上げていたマフィアとカイトは、思わぬ助っ人にどうしていいのかわからない。

「勇氣イ！」

マフィアは叫ぶ。

しかし、勇氣の耳に届いているのかどうか。勇氣には何の反応もなかった。

（もっ……）

とても疲れた声は、自分の声。ただ漏らす。

（滅茶苦茶ね……）

剣を横に構えた。

剣の刃と、勇氣の鋭い視線は平行に並ぶ。「ヒッ……！」睨まれた鷓は素直な声を出した。

勇氣の短い髪は逆立ち、制服の襟もろとも風に煽られ、下方から

上方へ。それは炎の子にも見えた。

瞳は死にながらも、敵を敵だと認識し。光はなくとも、目は一向に相手から離さずおかしな事かとそれは意志を持っていた。これは感情ではなく『本能』。勇氣は自然のように剣をふるう。

「う、うわ……」

鵜が寒気を感じたのと同時に、勇氣からの攻撃を食らった。刃先は届かなかったが、鵜の喉元をかすめた。

次に、剣を両手で持ちかえて全身を縦斬りにする。

「ぎやあああああ！」

ザツクリと大きな傷が入った。真つ2つと体別れにはならなかったが、深い傷跡となった。

鵜もさくらと同様、血は出なかった。

下へと落ちる。

大ダメージを受けた鵜は落下する。

勇氣の表情に光はない。

「素晴らしいな、勇氣……」

驚嘆と喜びの声を上げたのはハルカだった。勇氣達とは別の場所に居て、透明のガラスケースに入ったセナと自分の隣に居る紫苑の前で。湧き上がった高揚を隠せずにはいられない。

「レイにもぜひ見せたかった……圧倒的な力の差。四師衆、それ以上。レイには及ばないかもしれないが。レイ、あなたの予想はどうだったの……？ フフ」

ゾクゾクしている腕をさすりながらハルカは嬉しそうに言った。それには理解が不能だったセナは、震える両手をさらにキツく握り締めた。「……！」

観ているスクリーンの状況は、とても楽しめたものではない。セナは苦しさを堪えるのに必死になる。ずっと自分を責め続けて。ハルカは紫苑に命令した。

「向こうの奴らに指示を出す。繋げてくれ」

紫苑は人指し指と中指を口元につき立てて、呪文を唱えていった。紫苑が準備をしている間、ハルカの輝いた瞳はセナに向けられた。「セナ。勇気に会わせてやる。少しだけな」

それを聞いたセナの顔と手の筋肉が緩み、目は見開く。「どういう事だ？」

「見てればわかる」

ハルカのそばへ一つ。斜め上方にあったスクリーンは勝手に動き出し、近づいた。

勇気を映し出しているが、勇気の背景に上から見下ろした山々の景色が見えるほどカメラは引いている。勇気は、しばらく停止状態が続いたが再び動き出していた。

落ちていった鷓鴣を追いかけて。

狙った獲物を逃がさないのか。

そうやって地上へと降りた2人を迎えて、待っていたと飛べないマフィアとカイトは走り寄る。しかし……。

ビュウウウウ……

勇気を囲む風の壁に圧倒されて、尻込みするマフィア達2人。近づけない。

こちらを向かない勇気の背中に威圧感を感じた。異質、違和……決して触れてはならぬもの。2人の足の歩みは、完全に止まった。痺れたように動けなくなった。

土の地面の上に力なく倒れている鷓鴣の近くへ。剣を片手にぶら提げ、命令を遂行するヒトに似て形を成す人形か。意識は何処へ。ざっくりと深く傷の印を刻まれた鷓鴣の元へと赴いて勇気というヒトの形は……とどめをさそうと剣を再び構えて格好をつけた。

「……………」

「ゆ、……」

かける言葉が上手く出てこなかったマフィアとカイト。ただ呆然とする。

完全に勇気に支配された空間を打ち破ってくれたのは場の者ではない。外部からの『侵入者』だった。

「それまで。ご苦労だったな、さくらと鷓。戻って来い」

何も無い所から声だけが聞こえた。ピクリ、と反応し構えて静止したままの勇氣。

勇氣の正面、離れて待機していたマフィア達にも把握できるほどの距離に、上半身のハルカの姿が映ったスクリーンが出現した。命令を下したのはハルカだった。

「紫苑。奴らを連れて行け。ダメージが酷い」

言われた通り、見えないが紫苑は術を使った。証拠に、地に沈んでいた鷓の体が消えた……。

恐らくはさくらも連れて帰ったと思われる。

依然、剣を構えて固まったままの勇氣を指してハルカは言った。

「素晴らしい」

と……。

目に強い意志があり、少し口元に余裕を持たせて。それは疑いが自信か確信へと移行したためかもしれないかった。

「今まで隠れていて正体を掴みかねていたもので。お前の真実が少しだけ見れて嬉しいぞ……救世主。しかし……お前は何者なんだろうな。ますますわからなくなっただけなのかもしれないがな。フ」

とても楽しげに。勇氣には、ハルカがどう言おうと関係はなかった。

だが、次のハルカの高言には大きく反応を示す。

「忘れるな。こっちは、人質がいるという事をな」

ハルカの背後から叫び声がした。「勇氣！」

と同時に。パツと切り替わり声の主が映像に現れる。懐かしい顔だった。

「セナ……？」

勇氣も懐かしい生の声を出した。相変わらず剣を構えたままで、映像の中の人物の名前を呼ぶ。

セナは壁に手をつけていて、どうやら閉じ込められているらしいと気がつく。外傷もなく、特に別れた時と変わりが見つからない事から無事だという事が確認できた。

しかしセナの顔は暗く、眉間のシワは くつきりと見える。

「馬鹿やろう……」

出てきた言葉はそれだった。小さく、勇氣に向けられる。

「しつかりしろよ！ 自分を見失うんじゃない！ 俺だ、わかるか！？」

セナに言われて。勇氣は頭の中に水音を聞いた。

ピチヨン。ほんの可愛らしい音と、中心に広がる波紋。そして蘇る記憶。

セナは別れを告げた。そして去った。

セナは居ない。ハルカの元に居る。昔の想い人だったハルカの元へ。

セナは閉じ込められている。勇氣を呼んでいる。そこに居る。

思い出されるは、セナに関する事ばかり。

「私は……」

セナは言う。

「すまねえ、心配すんな……そのうち、帰るから。約束する」

曇った顔ではあったが、真剣に勇氣に伝えた。背の低い勇氣を半ば見下ろして。かける言葉を選んでるようにも見えながら。自分に負い目を感じながら。「だから……」

「セナ……？」

勇氣の両目から涙がこぼれた。構えた剣ごと震えている。

(私を返して……返して……)

「私は……」

(返して)

「私って……」

(そうよ、私よ！)

「私を……」

混乱は混乱を呼ぶ。すぐに止めてくれたのはセナだった。

「元のお前に戻れ！ 本能なんかにはすぎるんじゃない！」

そして。

「お前は お前だ！」

セナはそう最後に叫んだ。勇気は言い換える。

「私は私……」

その時。マフィアとカイトの重なった声が大きく勇気の名前を呼んだ。

「勇気ーっ！」

しっかりと勇気の中にまで届き響く。「皆……」

自分の中に存在する自分の声もほぼ自覚を持って復活した。

(そうよ……皆よ！ 思い出して……思い出してええ！)

途端に、激しい頭痛が勇気を襲う。「！」

剣を手から放り投げ、苦痛の顔で頭を抱えた。

「あうっっ！」

鈍器でガツンと殴られたような痛みが走る。全身が痺れて、立てなくなりうずくまった。

「勇気ー！」

「勇気ー！」

セナもマフィア達も全員が勇気のそばへ。セナは壁のせいでそれ以上は近づけず見守るだけだった。心配一色で事のさまを眺めていた。

「……苦しめ。勇気……」

ハルカの声がしたと思えば、スクリーンは一瞬で消えてなくなつた。あつた風も散つてしまつて、後はホコリ被つた地面が残つてい
るだけで。辺りはシンと静かになつてしまつた。

次に目を覚ますと、勇氣は小さなベッドの上に寝かされていた。

少し湿気臭いを感じながら、勇氣は上半身を起こして辺りを探
る。カイトが椅子に座つてベッドの脇に居て、勇氣が起きるなりニ
コツと笑つて読んでいた本をパタンと閉じた。

「はよ。……夜だけど。具合、大丈夫か？」

勇氣は髪をクシャリと乱し、頭を押さえて「痛……」と呟いた。

「ここはミルカ村の宿。お前、3日間も眠つてたんだ。今、水でも
もらつてくるから待つてな」

そう言つてカイトは立ち上がり部屋を出て行つた。一人になつた
勇氣は、明るい窓の外の方に関心が向く。月が朧おぼろに出ている、それ
でも外の世界を明るく照らしてくれていた。

（私の中に もう一人の私が居るのよ ）

勇氣には今回の事で得たものがあつた。

（強すぎて、私の理性じゃ敵わないんだわ……）

ハルカが言つていた。真実が少しだけ見られたんだ、と。勇氣の
中にある『本能』は行動に出され、勇氣自身を苦しめていたのだ、
と。

「セナが居ないだけで、こんなにも おかしくなつちゃうなんて…
…」

驚きだ。勇氣は身震いした。

（今までいつだつてセナが居てくれた。いつから？ あの、サーク
の森で会つてから？ こんなに、好きになるなんて。セナは……ハ
ルカさんの事が好きなのに）

気分は落ち込む方向へと。勇氣はベッドから立って、窓際へ身を

寄せた。月明かりに照らされて、勇気の顔はいつそう青白くなる。

(セナが居ないとダメなんだ)

苦しくてたまらなかった。握った手を窓に押しつける。顔は伏せていて、何も見たくはなかった。内から湧き起こる煮えたぎった感情を抑えられない。

嫉妬、怒り。拒否。勇気の小さい体に、嫌な現実が押し寄せる。

「いやあ！」

ガシャン！

パリーンンツ……

破壊音は部屋を抜けて、外にも充分に聞こえた。

「どうしたの！……勇気！」

今度は激しくドタドタと足音が聞こえてきてドアが開いた。開けたのは、慌てて飛んできたマフィアだった。

「勇気！」

マフィアはゴク、と息を呑み一瞬だけ考えて。状況を受け入れた。勇気が、窓ガラスを叩き割って正座している。割った片手からは血が流れ、内側にも少数、ガラスの破片が散らばった床に飛沫がポタポタと赤く落ちていた。

首と肩をダラリと下げて。

放心している状態だった。

「勇気……？」

マフィアは勇気の頭に そつと手を置いた。もうかれこれ、勇気の変貌ぶりを見せつけられてから3日経っていたのがよかった幸いだったとマフィアは思った。時間を置いて冷静になって。勇気を以前の勇気と変わらなく接する事ができると安心した。

しかし勇気は弱りきった顔でマフィアを見ていた。

「マフィア……私、ダメ……セナが居なきや……何にも……」

泣きそうな顔。誰かにすがりたくて耐えられない顔。あまりにも情けない表情に、マフィアの手思わず力が入っていた。

「なあんにも……できない」

言い終わらぬうちだった。

マフィアはピシヤリと勇気の頬を叩く。「！」

勇気は叩かれた頬に触れて、マフィアを見た。

「いつまで甘ったれてるの！」

マフィアは怒り、勇気を睨んでいた。

瞳の奥に、悲壮感が漂う。

「セナは……帰るって言ってたでしょう！ 約束だつて！ それを

……」

口唇を噛みながら、続けた。

「勇気は、セナの言う事が信じられないっていうのね？」

「！」

「見たでしょう？ セナは、閉じ込められていた。ハルカに監禁されてるのよ！ それに。ハルカ達は四神鏡を探している……もし放っておいたなら、セナは永遠に帰って来られないじゃない！ 違う？」

「あ……」

自分がこうしている間にも。ハルカ達は、レイの復活を願いながら四神鏡を探して世界の何処かへと駆けまわっている。

自分がこうしている間にも。

時は関係なく過ぎていく。

「ハルカを止めるのよ、勇気」

マフィアが勇気を見つめる真剣な目は、セナと重なって幻の声を蘇らせた。

元のお前に戻れ 本能なんかに すぎるんじゃない

すぐにマフィアの切実な叫びとも重なった。

「勇気が居なきゃ……セナもこの世界も救えない……救えないの……」

……」

マフィアの思いによって絞り出された声は、強いはずが強くはな

く小さく聞き取りにくくなっていった。

「お願いよ……元のあなたに戻って……」

マフィアは泣いていた。俯きながら……。

「……」

黙って、勇氣はそれを見ていた。見ていて、勇氣の全身に新しい風が吹き起こる。

（私……また……）

心の中で囁きとなつて。勇氣は風にのっていた。

（自分の事ばかり考えてしまったんだね……マフィアをこんなに苦しめて……私のせいで……）

情けなさと同時に、勇氣の中で何か弾けた。それは始め小さくとも やがては花咲き大きく成長していく兆し。

勇氣に微笑みが新しく自然に浮かんだ。

「ごめんマフィア……私、弱気になってたみたい。そうだね、セナは戻って来るって言った……ううん、助けに行かなくちゃ！」

おまけに、立ち上がる。

「ごめんね。もう大丈夫だからさ！」

満面の笑みになった。開き直った清々しさで、胸を張っていた。

「勇氣……！」

マフィアも涙を拭いて、立ち上がって笑った。そして「そうね！」と力強く一緒になって頷く。

（私は……ハルカさんに負けない。負けるもんか！）

勇氣の決心は鈍らず劣らず、次なる方向へと道を指し示していた。

……

月は平等に日の光を照らし地上へと降り注ぐ。

闇に浮かぶ背景。南ラシー又国、城内では。

激戦の傷跡が無残にも永遠の時を刻み込み、惨状は訪問客を地獄の近場へと案内する。

かつて勇気達と宴を催した事もあった。
勇気と談話し意見し合った事もあった。
今はもう全てが思い出。

南ラシーヌ国王は、ハルカによって息を引きとった。

ハルカの片手には、白い卵のような形のも物が握られている。

「あと2枚……」

炎が、そこらじゅうに。戦火が気温を上昇させて、火は獲物という獲物を全部焼き尽くそうと襲いにかかる。焼けただれた兵士の皮膚の焦げつく臭いは、魔物を呼んだ。

ハルカは嘲笑う。「あはははは」

瞳の色は赤。生まれつきの赤……何も、おかしくは……ない。

……

同時刻。

レイが寝ている静まり返った部屋。レイの脈打つ音が聞こえてき
そうなほどの沈黙の部屋だった。

ドックン。

ドックン。

ドックン。

レイの心臓が、動いている。

《第48話へ続く》

第47話（私を返して）（後書き）

【あとがき】

あんまり普段しません、補足です。

四師衆は、人間ではないです。と、いう事は。光頭刃で刺される
と、生物扱いしてくれません。えー。

ブログ第47話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-113.html>

ありがとうございました。

第48話（ミルカ村騒動）

深い小谷。溪谷の集落である、ミルカ村。人口は数十人と少なく、日照が行き届いてはいるけれど凄く暗い。そう聞いたわけなんだけれど、人が住んでいる方が珍しいんじゃないだろうか。

朝に起きて私は、外の様子を見ようと一階にまず下りてみた。広間にお客は誰も居なければ、厨房……台所だけれど、そこにも誰も居なかった。宿屋の主人は何処かしら。

「おはよう勇氣。何か食べる？ 作ってあげよっか」

私の中から階段を下りてきたのはマフィアだった。

「え？ マフィアが作るの？」

と、私が疑問をそのまま口にする。「何よ、悪い？」というような顔をして腰に手をついた。

「あ、じゃなくなってさ。宿の人が作るんじゃないのかなって」

「ああ、夜しか作ってくれないの。どうやら村全体が夜行性みたいで。朝昼は、家の中に皆は閉じこもっているらしいわ。私達は3日前、たまたま夜にココを訪れたから泊まれたみたい」

マフィアが説明し終わると、ヒナタやカイト、メノウちゃんが下りてきた。同じく話にのっけてきて。

「不思議が多い村なんだよな。今は寝てるのかもしれないけど、ココの主人のおっさんも白い顔しながらさ。『昼は……人は出歩かないよう……』とか言ってたんだぜえ。どういっこつちゃかと、頭をポリポリと搔いたカイト。

夜しか出歩いちゃダメだって？ 何でだろうか。変な村だなあ。

「とはいつてもさ。勇氣も目を覚ました事だし。早々にココから出ようぜと思うけど。……あー、腹へった！」

お腹をさすりながら、マフィアを見た。

「はいはい。簡単なものでよければ。蛭達もそろそろ来る頃かしら

ね。皆の分作っちゃう」

とマフィアは台所の方へと消えていった。

マフィアが朝食に取り掛かっている間に、残された私達は顔を見合わせる。

「どうする？ 暇だな」

とヒナタが聞いてきた。聞かれてもなあというような顔をする私。

「ずっと中に居たから、外へ行きたい気分なんだよね……ちよっとくらいなら、ダメかなあ」

すると、階段から蛍と紫が下りてきた。蛍は私の顔を見つけるなり「おはよう。素晴らしくよく眠れたようね。相変わらずの変な顔」と鼻で笑った。

はいはい、どうもね。

「何で昼の外出禁止なんだろう。魔物でも出るのかな。だとしたら、一人で出歩かなきゃとりあえず少しくらいならいいんじゃないか。

俺も付き合うし」

と、カイトが言ってくれる。

「図書館っていうほどじゃないけど、書庫が村にあるらしいの。主人が言ってた。暇つぶしに行ってみようかと思っただけ。七神の手がかりがあるかもしれないし」

意外に協力的な事を蛍に言われ、私は少し驚いた。蛍は「何よ」と口を尖がらせる。いや、だってえー。

「いいんじゃないの。でもマフィアの朝食を食べてからになるけどな。人数固まつてりゃ何とかなるだろ。今それじゃ、出発後の行き先の確認でもしようか。地図広げてくれ」

カイトがそう言って取りまとめてくれていた。

ハルカはセナが監禁されている部屋に居た。ガラスに四方八方を囲まれた中に居続けるセナ。ガラスの壁の前に、スクリーンが一つ……。ハルカは横で、花装飾がこしらえられた背もたれ付きの椅子

に腰かけて画面を眺めている。

画面では、テーブルを囲み朝食を食べている勇気達。観て頼杖をつきながら、ハルカはのんびりと言った。

「あらあら。どうやら『紅い村』に入ってしまったようだな」

あか、という単語にセナは反応する。「紅い……？」

ハルカはフフン、と笑いながら髪の手をいじり出した。

「旅人は2度と訪れないだろう。知る人にしか知らない閉鎖された村だ。とても変わった村……北の谷の何処かにあるとは、本で読んだ事がある。ミルカ村……別名『紅い村』。なあ、セナ」

ひとり言は、セナに問いかけた。セナは無言で返す。

「紅い……赤い色をどう思う？」

ハルカの瞳はセナに話しかける。セナは返答に詰まってしまつて答えられなかった。

ハルカにとつてそれは予想通り。だからか特にガツカリした様子はなく、ひとり言は続けられる。

「目立つ色なのは確かだ」

ハルカの綺麗な赤い瞳は、画面の中へと戻っていった。

マフィアとメノウちゃんは皿洗い。カイトと私は散歩しに、他メンバー達はあると聞いた書庫へと調べ物をしに出かけていった。外へ出かける際は用心にとそれぞれ肌身に武器を持つ。私は腰に光頭刃を提げていた。

そついやカイトと2人きりというのも珍しいなとか思いながら。

だつてカイトとメノウちゃんつていつも一緒に、セツトつて感じなんだもん。今ならもれなくメノウちゃんが付いてくる、みたいなさ。はは。

草木は少なく、木が点々と大地から生えてはいるが皆枯れ木だった。少し厚めの防寒着を着ているけれどそれが気候にはちょうどいいみたい。吐いた白い息は微かに手を温かく感じさせた。

「四神鏡をこつちが早く見つけられる事ができればなあ」

と、隣を歩いていったカイトが言い出した。私はハツとして気がつく。「そうだね……」

言われて考えてみたけれど、何も方法は思い浮かばない。レイのように邪尾刀を持っていても、人を斬りまくるなんてとんでもなかった。

腰にある光頭刃だってそうだった。これで斬られた生物はケガをしないとはいってもだ。いきなり初対面でこんにはとブスリ。できるわけないじゃないか。ねえ。

「剣や刀なんかは頼らなくて、何かもつと他に探せる方法でもあったらいいのに……あ、でもそれだと簡単にレイ達に見つけられちゃうかな。はあー」

手を肩の後ろに回しながら、ため息をつくしかなかった。

「色々今まで考えてきたけど……複雑に。整理したいから、ちよつと見解を述べていい？」

カイトがそんな事を言い出した。私は最初「ええ〜？」と、複雑と聞いて身構えたけれど。カイトが真剣な……というより表情もななく言ったので。仕方なく付き合う事にする。一体何の話なんだろう。熱き人形への想いとか延々と聞き続けるのは重いなあ気が。そんな事を思っていた。

カイトは話し始めた……。

「満足できそうな答えに行き着くには、かなりの時間と労力があるって事がよくわかったよ。謎ばかりだ。推測だけど」

「？」

「俺にはどうしてもわからない奴が4人いる。レイと、勇氣。お前と、もう2人」

2人？

カイトが言う『わからない奴』の中に私が入っている事も気にかかるけれど。それはそれとしてよ。

誰の事を言っているのだろうか？

「天神と、……セナ」

「！ ええ！？」

素っ頓狂な声を上げてしまった。だって。

「意外か？ 勇気も同じように感じてると思ったけど」

「そ、それは……。」

私は何とも言えなくなってしまった。確かに、セナの考えている事なんてわからないって悩んでましたとも……それはそうですとも。うーん、と唸りながら困った顔でカイトを見ていた。

ちようど、私達の前に小さな湖が見えてくる。手前まで進んで行き、私達は立ち止まって立ち話となった。

「……俺はさ、まずレイが何であんなに青龍に固執するのかわからない。ただの好奇心なのか？ 何で白虎でも玄武でも朱雀でもなくて青龍なんだ。順序も違う。考えすぎか？ それに非道だ。まあ、トチ狂った奴の考えている事なんてと思うかもしれないが。どうも、何か……」

カイトはチラ、と横目で私に視線を向けた。何だかちょっと怖い、その視線。私はアゴを引いてカイトを上目づかいに見た。

「……奴は勇気を気にしている。最初からだ。気にしてないようで気にしてる。俺にはそう思えてならないんだ。殺すと言って引き上げる。殺さない。……変だ」

「……」

全身に寒気を感じてしまった。これは何？
でも。

「そ、それは。天神様を苦しめるためでしょう？ 私イコール天神様を苦しめるって事なんじゃ」

「だと……表向きではそう見える」

私の心臓がドキドキと高鳴ってきていた。ああこれは何。何なのだろうか。

カイトは真剣に私を見て言った。怖い顔で。

「本当にそうなのか」

じり、と何処かで音を聞いた。遠くで鳥がさえずった音だったの
だろうか。それとも、私の焦りの音だったのだろうか。
今、私の脳裏にこんな言葉が浮かんだ。

カイトが、私を疑っている。

息を呑んだ。腰の光頭刃に手が当たる。

とんでもない事だと思った。思えば思うほど、ますます気持ち
焦ってきてしまう。「……！」

話題をかわしたかったけれど、上手い言葉も見つからない。私は
弱った顔をして黙っているしかなかった。カイトは怖い顔を崩す事
はなく。

「……ごめん」

と、謝ってくれた。

「勇気を疑ってかかるつもりじゃなかったんだが……ただ、今言っ
た、この4人がどうにか絡んでいるんじゃないか。そう思えてくる
んだ。もちろん、ただの推測だ。実際は単に偶然が偶然を呼んだ結
果だったのかもしれないから」

話に区切りをつけてしまおうとしたみたい。でも何とも言えない
わだかまりが残ってしまった。私の方こそ、妙な疑いをかけて
しまう……。

カイト、あなたは本当に味方？

そんな事は思いたくはなかった。今にしてみれば。

私と、一緒に旅をしている七神の皆は。すっかり信じきってしま
っているけれど。

本当に仲間なんだろうか。

「……」

……やめて。

つまらない事を考えてしまう頭。もう何処かにいってほしい。

私は頭を振った。カイトは「？」と変に思ったのか首を傾げている。私は胸を張って見た。

「信じて。 私は、私」

迷わない。セナの言葉を借りたんだ。信じてもらおう、それしかなかった。

「ああ。悪かったな、変な事を言い出して。それと何だが……もう一つある。鏡の事なんだが」

と、カイトが言いかけた時だった。

私が「鏡？」と聞き返す前に、違う声が割って入ってくる。

「おいこらあ。 昼間は出歩くなんてえ、いかん聞いとらんけえのお」

私とカイトが湖の前で突っ立っていた背後からだ。見ると、下駄履きに白いタオルを肩にかけて腹巻をした、麦わら帽子を被った一人のおじいさんが居た。あまり周囲の環境や気温にそぐわないんじゃないかと思えた、涼しそうな格好をしている。

「あ、すみません。 ちょっと散歩したくなっちゃって……」

と、私はおじいさんに言い訳をした。おじいさんは村人……だよな。「家の中あ居たらお前さん方の姿が見えたもんでえ、注意しにきたと。この村は、夜しか外へ出ちゃならんね。 昼間は、危ないきに……」

……ん？」

突然、おじいさんは何かに気がついて私の手元を覗く。私が視線を追うと、光頭刃を珍しそうに見ている事がわかった。

「これですか？」

とても興味津々だった。私が手にとって前に出すと、おじいさんは「ほおー」とため息をつく。そして。

「すまんが、よく見せてくれんかの……あいにく、目が見づらくてえの」

「え、あ。はあ。どうぞ」

と、私は剣を手渡す。おじいさんは剣をジイイッと睨むように細

い目で見ただ後、ひっくり返したりして確かめていた。何なのだろう？
「ふむう……何とも神々しい光じゃの……もしかお主ら、天神の使
いかね」

「！」
「何！」

私とカイトが大きく反応してしまった。しかしおじいさんは動じ
る事はなく。自分の気の向くままに話し出している。

「天神……懐かしいのお、その名を口にするのは。昔に……今では
遠い昔に。旅人がこの村を訪れて、聞かしてくれた事がある……。
歌のようになあ」

歌？

「『七神が誕生した後のこと。生命は進化を遂げたり。或る所では
魚が生まれ、川を泳ぎ。或る所では鳥が生まれ、空を飛びて。或る
所では人間が生まれ、世界を支配す。人間は精霊とともにこの世で
生きる道を選びたり。しかし人間と成ることのできなかった者、存
在す。これが獣なり』……後は、忘れたのお。七神創話、じゃっ
たか……」

危うく大声を出しそうになった私。だだだだっ！

「七神創話伝」！ すみませんっ、もう一回教えて下さい！」

私は身を乗り出して勢い任せに頼んでみた。

「ううん？ 何て言ったかのう？」

おじいさんは聞こえてるんだかいらないんだかわからない素振りを
見せた。そ、そんなあ。覚えられなかつたよお。

するとカイトが横から口を出して私の肩に手を置いた。

「大丈夫。暗記したから。帰ってメモしといて。内容は……四神獣
の事かな」

サラッと凄い事を言っただけのけるカイト。い、今の暗記できたの！

？……凄い。

「それより、ご老人。ちょっと聞きたいんだが……この村は、どう
して昼間は外出禁止なんですか？」

カイトが尋ねた。うん、私も気になっていた事だ。わかるだろうか。

やがておじいさんは、ふうむ、と頷いて私達を見回す。そして言った。

「何もおかしい事はない……言われんかったかいのう？ この村では、人、は。出歩いてはいかんと……」

何やら雲行きが怪しくなってくる。んん？

「勇気！」

「え？」

私はカイトに腕を引っ張られた。ステンと、後ろに転んでしまう。

「あたたた……」

すぐに起き上がって何が起こったんだろうと理解に努めた。でもすぐにわかる。

何と、おじいさんが。私の光頭刃を持ったまま、振り下ろしていたのだ。ええ！？

もしカイトが手を引っ張ってくれなかったら、私はアツサリと斬られていた。間違いなく。

「な……」

私がノンキに口をポカンと開けていると、カイトが怒鳴った。「立て！ 勇気！」

私は格好悪くもジタバタとしながら何とか立ち上がって、逃げた。でも光頭刃はとられたままだ。どうしよう！？

おじいさんは剣を構えて私達を笑った。

「ひやはははは……惜しいのお、惜しいのお……。若いモンの血が見れるかと思ったのにお……」

と、眼球を飛び出そうなほど目は開いて歯はむき出しにした。いい！？

「マファイア達が危ない……」

カイトがボソリと小さく言った。私の背中に冷たい汗が。そうだ、こうしちゃいられない。

私は意を決して、前へ出た。「！」
驚いたのはカイトだった。護られるべき立場の私が自ら進み出たからだろう。

「その剣、返して！」
と、私はおじいさんに飛びかかる。何と真正面からだった。実は何も考えていない。

「馬鹿か小娘……無防備で」

おじいさんは私のお腹に斬りつけた。ザシユ。「勇気ッ！」

カイトが叫ぶ。攻撃を食らった私。お腹から血を流して一歩退いたが、後ろに倒れる事はなく踏ん張れた。自分でも無茶だなあと思っただけ……でも。

私には『確信』があつたんだ。

「返せ！」

私はすぐに再び、おじいさんの剣を持つ手に掴みかかった。「な、何をおおっ！」

おじいさんと私は剣の取り合いで揉みくちゃになる。

「返せ！」

私が尚も同じ事を繰り返して叫ぶ。そして。

ビュワッ。

私から突風が飛び出した。「ひゃあ！」

おじいさんが思わぬ風にひるんだ隙に、私は剣を奪い取る。とても上手くいった。

「“小波”！」

カイトが呪文を唱えた。すると、そばの湖から波がザワザワと立ち、水の塊が飛んできておじいさんにぶつけられていく。

「ぎゃああああ！」

おじいさんは全てを体で受けて、少し離れた所へと飛んだ。倒れたまま動かなくなった。

倒した？

「勇気！……ケガが！」

カイトがすぐに駆け寄って来てくれて私のお腹の傷を見ようとしてくれた。でも。

「……………」
愕然としたように見えた。傷がない。

確かに大きなダメージを受けたはずなのに…………と。

「…………… どういう事なんだ。いや……………」

いったんは私から離れ、少し頭を悩ませていたカイト。私は申し訳ないなあなんて思いながら見ていた。

「ご覧の通り…………… 私って不死身。少々の無鉄砲さも許して、カイト」と、私はペロツと舌を出してみた。しかしカイトは厳しい目や口を崩さなかった。おまけに。

「ますます信用できんわい！」
と喝かつを入れてきた。それもそうだと私は苦笑いする。

だつてさ。もう自分で認めなくちゃいけないって思うもの。

私は救世主。皆とは違う。人間だけど、ご覧の通りだ。邪尾刀で刺されようが光頭刃で刺されようが、私はたちどころに傷を治してしまう。いや、いっそ受けないのか。弾き返してしまうようだ。私の中に四神鏡とは違う、何かがあるとでも言いたげだ。一体何が。カイトが言いかけた事が浮かぶ。

鏡。

…………… まさか……………。

「急ぐぞ、マフィア達が心配だ」

カイトが追い立てた。私は先を行こうとするカイトの後に続くように、走り出そうとした。

その時だ。

「待ていやああああ……………」
汚い声が出た。

倒れたはずのおじいさんだった。

猫背になって立ち上がっていたものの、左右に体を揺らしている。両肩を盛り上げて、関節に折った先の両手の平はダラリと重力のかかる方に向けて。酔っ払いみたいだ。いや。

ゾンビかもしれない？

とにかく、気持ちが悪かった。「お、おじいさん？」

その目は死んでいる。「げひいひい……」

人間じゃなかった。

「血を……血をくれええ……赤い、赤い……」

数歩私とカイトは引き下がる。

途端にだ。おじいさんはピタリと動作を停止した。

「お前さん、はよう逃げなせえ……この村は皆、血に飢えておる……獣」

え？

「“小波”！」

カイトの一声でまた先ほどと同じ攻撃がおじいさんに向けられる。ドカドカと水の塊を受けたおじいさんは倒れてまたまた動かなくなった。

「キリがない。行くぞ、勇氣！」

「う、うん……」

今度こそ、走り出した。おじいさんが後々どうなったか、もう知らない。

走りながら、おじいさんの言った事が頭の中をグルグル回る。獣、と。

（“七神創話伝”にもあった……獣。けもの）
忘れそうで忘れていなかった単語。妙に頭に引っかかる。

人間と成ることのできなかつた者、存在す。これが獣なり

四神獣。

彼らが、そう。
でも、どうして？ 胸を。

胸を締めつける。人ではないと、もしも言われて。
「あれは……マフィア達だ！」
カイトの大声に顔を上げた。カイトの肩越しに走っていた前を見
るとだ。

「勇気ー！」
「救世主！」

家屋や枯れ木などに挟まれた土の地面を並んで駆けて来る。先頭
にはマフィア、と。それから。

意外だった人物がいた。意外すぎて信じられなかった。
私の事を救世主と呼んだ人物……達。2人の女の子だ。

「ア……」

そう。いつか、私が自分の世界へ帰った時にお世話になった、ア
ジャラとパパラ！

「アジャラ！ パパラ！」

私は足の速度を上げて。やっと合流する。

しばらくゼーゼーと息を整える事に必死だったりする。ヒザに手
をつきながら。

「ど、どうして……」

アジャラ。肩で切り揃えられた真っ直ぐな髪。白い七分袖シャツ
を上に着て、サスペンダーを付けた短いズボンを履いている少年風
だが可愛く年の近い女の子だ。手には変なデザインの杖。

パパラの方は、金髪に近い毛質のパーマ髪で、スポーツウェアみ
たいな服を着ている。ショルダーのバッグを肩からいつも……提げ
ているのかな。タレた目で、軽いノリで関西弁を話した。同じく年
は近いだろうと思う。

2人とも、天神様の使いだ。私がこっちの世界に帰って来る時に
協力してくれたんだった。

「ご報告に参りました。無事でよかったです」

「ほんまやでー。間に合つて何より。今、村のモンは皆。催眠波で眠つてもろてんねん。用心のためやけどな。はよこの村出るでえ。吸血人間の巣くう村」

！

私は、最後のパパラが言った事に敏感になつた。吸血……人間。

「この村の人達が……？」

パパラの顔を見る。パパラは当然、といった顔をしていた。

「そやで。一部じゃ有名や。実際何人も血を抜かれ発見された旅人がいたりすんねん。血を欲して止まない体質を持った、可哀想な集団や。それも運命。しゃーないんやけどな」

さつきのおじいさんを思い出された。

『はよう逃げなせえ……この村は皆、血に飢えておる……獣』と。

本性を現しながら、理性は残っていたのかそう告げて。普通の人間じゃない体とまともな人間である頭を抱えていた。

彼らが獣だと。人に成りきれなかったなら、別物だと……？
考えると、切ない。

おじいさんは……生きているのだろうか。攻撃してしまつたけれど。
ど。

「報告つて？」

私は気を取り直して聞いた。今度はアジャラが答える。

「落ち着いて聞いて下さい」

ゆっくりと、私に言った。

「南ラシー又国が壊滅致しました」

！

私は青ざめた。めまいが、全身を襲う。「大丈夫、勇気」

ヒナタが呼びかける。しかし声は遠くだ。聞き取りにくくなつていきそうだった。

アジャラは続ける。

「炎神……ハルカの手によつてです。数は大国で初の時よりも減つていたとはいえ、お見事ともいうべき有様でした。戦火恐ろしく、言葉には言い表せません。それより」

緊迫感が漂い、誰も何も口にする事を拒まれた今。事実の報告は、あまりにも残忍でどうしようもない。

「これで2つ目の四神鏡を手中に収めたハルカは、あと2枚を躍起になつてさらにまた探し出そうと奔走するでしょう……閻神の代わりに。そう、閻神はもうすぐ」

閻神とは、レイの事だ……彼が何？

「レイは じきに、復活するでしょう」

空気が張りつめる。

ピンと張った、氷のようだ。軽く突いただけでヒビを作ってしまういそうな。脆くも怖い緊張が走る。

全員が、固唾を呑んだ。

《第49話へ続く》

第48話（ミルカ村騒動）（後書き）

【あとがき】

カイトって賢かったんだよね。忘れてた。

ブログ第48話（挿絵入り）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-114.html>

ありがとうございました。

第49話（最後の七神）

“七神創話伝”

世界を統治し 運命を見守る神 天神といふ
始まりは孤独 そして種だった
種は精霊をつくり 生きる者全てを生んだ
しかし天神は 癒されることは無かった

第六章 “天神” より

アジャラとパパラの催眠波とやらによって、ミルカ村の住民達は眠らされ。その隙に荷物を取りに戻った私達一行は急いで村を後にした。

ミルカ村を出てすぐに、ナニワの森という所へと入って行く。ナニワの森は地図で確認してみてもとても広大な森で北の地方めいっぱい、横這いに広がっていた。迷わずにしても通り抜けるには、一週間かそこらはかかるんじゃないかとカイトが言っていた。

森に入りかけた時に。私だけが立ち止まる。もちろん、急に歩みを止めた私に皆は注目して、気がついた順に同じく足を止めていった。

「どうしたの？ 勇気」

まずはマフィアだ。それから後ろに続いていた蛍達やヒナタ、先頭に行くアジャラ達とメノウちゃんとカイト。皆がいつせいにこっちを見た。

私は俯いた暗い顔のまま、吐いたため息と一緒に言葉に出した。
「南ラシー又国に戻りたいの……」

皆が無言になる。

私とカイトがアジャラやマフィア達と合流した時に受けた報告は、私に衝撃を与えた。

かつて訪れ、語り合い協力し合い……まだ記憶に新しい思い出。ううん、まだ思い出なんかにするには早すぎる。まるで昨日の事のようにだった。

南ラシー又国。絶対王政から民主の国へ。きっとこれから民が国王の元へ集まり、未来への新しい道が開けるだろうという兆しが見えていた矢先だった。

国は滅びた……。

まだ、見た訳ではないので わからない。

国が何処まで壊滅させられたのが。規模も状況も、アジャラとパパラに話を聞いただけで、さっぱり想像もつかなかった。想像……これまでに通過してきたキースの街などが思い浮かぶ。思い出すのに抵抗もあった。

でも、気になって仕方がない。国王、サンゴ將軍……宴の時に肩を組んだり大騒ぎしたりして弾けていたノリノリの兵士達。彼らが、死んだなんて。もう 居ないなんて！

聞いただけでは信じられるはずがなかった。

私の体は震えている。

今まで、一刻も早くミルカ村を出なくちゃと気を張って我慢していたけれど。もう限界だ。

ここまで来たらもういいよねと……私の視界は涙で歪んでいた。

「戻って……どうするの？」

姿勢のいいマフィアは、真っ直ぐ私を見つめていた。見上げた私の顔は少し驚く。

慰めてほしかった訳じゃない。覚悟はしていた。

マフィアは言う。

「私達には、戻っている暇はない。一度行ってしまったらたぶん、

しばらくそこから離れられなくなる。苦しんでいる人達を置いて行く事は……中途半端に手を貸すくらいなら、もう」
マフィアの重い口調は、続かなかつた。言わなくても充分に飲み込める。

行ってはいけない。

頭では わかっていても……私は苦しかった。

「ごめんなさい……マフィア、皆……わかってる。わかってるの……」

涙を喉の奥へと閉じ込める。泣く訳にはいかないと。皆の前で気張る。

カイトがやって来た。

「？」

私が見上げようとすると、頭の上にポンと手を置かれてしまった。

「勇気」

あまり感情のわからない声でカイトは私に話しかけた。何だろう？
「言いな。そしたらスッキリする。次に俺達がどうすべきか。指針を示してくれ」

少し笑いかける。その立ち姿はとても落ち着いていて、安心感を私に与えてくれていた。

次の……。

もう……決まっている。

「私達は、このまま七神を捜します」

私の声も落ち着いていた。

「四神鏡はあと2枚。七神と四神鏡。揃わせるのはどちらが先なのか。それを考えて、私達は先に進みます」

と、私はカイトの向こうに居るアジャラとパパラに向かって言ったつもりだった。

カイトが言ってくれた通りにして、形にならずためて渦巻いていたものが吐き出されたみたいで。スッキリと心が軽くなったようだった。決意が固まった、と言っべきか……。

「そうね」

と、蛍が口唇の両端をニツと吊り上げて同意する。

「いつまでもフラフラしてんじゃないわよ。でないと、私達あなたを見捨ててレイ様の所に戻るわよ？ 救・世主さん」

得意げな眼差しで意地悪そうに言った。私達というのは、蛍と……紫の事だろう。

レイ側に味方が増えるのも困るけれど。それ以前に、蛍が行ってしまふのを寂しく感じた。見捨てられる、というのよね。

私には蛍の悪態が少しだけ嬉しかった。

おかげで、元氣を取り戻す。

「うん。もう決めた。決めてるの！」

と、私は明るく笑ってみせた。するとそれが広がっていくように、皆の顔がほころんで和やかな雰囲気になっていった。

前に進み出たアジャラが安心して私に話しかける。

「ならば。私達は世界の何処かにいるはずのハルカやレイ達の居場所を捜しましょう。隠れていると思われませんが……見つけ次第、連絡をとるように致します。そちらも、七神が揃い次第。空に向かって呼びかけて下さい。すぐに飛んで来ますのでね」

アジャラとパパラは、去って行った。空の中へと消えて。

私達は、私達のする事がある。七神を捜して揃える事だ。まずそれだ。七神は……残り、一人。まだ訪れていない地の何処かに、きっと居るに違いない。

見つけた後は……。

頭が重くなるけれど。レイの元へ行くんだらうな。説得しに。も

しくは……。

……。

……倒す。

見渡す限り、樹齡何年なんだろうかと思わせる古くたくましい樹が並び、道は何処だと言わせるくらい密集していたり。何とか抜けて行くと、繁みが生い茂って足元を傷だらけにしてくれる。

あまり人は立ち入らない場所なんだなと思いつながらの通行だった。道を作りながら進む感じだ。なかなか一向に進まない。カイトは一週間と言っていたけれど、絶対もつと時間をかけそうだった。私やメノウちゃんが疲れを見せ始める。

「ほら。シャンとして。もう少し行ったら休憩しよ」

と、ヒナタが呼びかけてくれた。若いつていいわね……と思いつながら。私も若いじゃないかと自分で自分を落ち込ませる。うっ。

「ちよつと楽してみる？ お二人さん」

と、マフィアが言い出した。何だあ？

私が何の事やらと見守っていると、マフィアはブツブツと何かを唱えながら目を閉じた。

「“百日紅”！」

聞いた事のない呪文を唱えた。何が起きるかただ。

「うおおおう！？」

私が声を上げる……と同時に、何と。

ツルリ、と。足が滑って危うく転びそうになって踏ん張りどどまっただったのだった！

「きゃああああ〜」

どうやら私とメノウちゃんにだけ、かけられたようだ。足の裏がツルツルと地面の上を滑ってしまっ、上手く歩けなくなっってしまった。「ひいやああ〜」

情けない悲鳴が飛んだ。カイトやヒナタが目を真ん丸にして見ている。蛭は嫌そうに、私が滑りながら近づくと「来ないで！」と邪険にして手で振り払った。ドンと押されて紫の方にアワアワしながら体が当たると。

「大丈夫ですか。落ち着いて……」

と、すっかり受け止めてくれていた。うう、優しい。

「お姉ちゃん、見て見て！ こうすればいいんだよ！」

と、メノウちゃんの陽気な声がした。見ると、メノウちゃんは行く先々にスイ〜スイ〜と。片足ずつを前に前にと出して、逆八の字を描きながら滑っていった。これはこれは……。

アイススケートの要領だった。「なるほど……ようし」

私も、見よう見真似というやつで格好つけてみる。スイ〜スイ〜と。カイトの横を通りすぎるまで一気に行ってみた。

おお。上手くなっている。どうにかコツを呑み込んだみたいだった。いや、若いからと言ってほしい。

「面白〜い。楽しみだからか、楽チンね」

私は大喜びで先頭を走っていった。

「おいおい。先に行くな！ 魔物が現れたらどうすんだ」と、後ろからカイトが早歩きで追いかけてきたり。

「は〜い」「皆早く〜」

と、私とメノウちゃんは張りきっていた。

そうして魔法の効果がきれた頃。私とメノウちゃんは足がクタクタになって、背中合わせになって地面にズルズルと沈んだ。

「ま、休憩しましょうね〜」

優しさをた〜っぷり込めてマフィアが私達の頭上から声をふりかけていた。

日が沈んでいく。晴れ渡っていて雲のある青かった空は赤く、遠くから太陽の光の筋や色を運んでくる。手前は樹の密集した森のおかげで暗さしかわからないけれど、空を見上げて遠くを意識したらそれは、大自然だった。筆で絵に描いたらどんなにいいのだろう。

その中で。私達は焚き火と鍋を囲んで夕食を食べていた。作ったのは意表もつかず当然マフィアで、山菜やキノコを煮込んだ雑炊だった。熱くてフウフウ言いながら、取り分けられた具の入ったお茶碗を持ってゆっくりと食べる。

箸とレンゲを進めていると、マフィアが話を持ってきた。

「ねえ勇氣。後でもいいんだけど、ちよつと見てくれない」

「え？ 何を？」

急に話題をふられて、すくつた雑炊をこぼしそうになる。

「ミルカの村だね。書庫から頂戴してきちゃった本があるの。何と“七神創話伝”の一節！」

そう言われて。私は雑炊から目を逸らしマフィアに聞き返した。

「ど、ど、どんな!？」

びっくりしたので、声が上がっている。マフィアは「うーんと…

…」と、人指し指を立てて考えていた。

「えーつと……ちよつと待って……」

マフィアが荷物の中から本をとって来た。ブ厚くも薄くもない、少し古びた本だった。パラパラとページをめくり、やがて見つける。マフィアがスラスラと読み始めた。

「『七神が誕生した後のこと。生命は進化を遂げたり。或る所では魚が生まれ、川を泳ぎて。或る所では鳥が生まれ、空を飛びて。或る所では人間が生まれ、世界を支配す。人間は精霊とともに、この世で生きる道を選びたり。しかし、人間と成ることのできなかった者、存在す。これが獣なり。世界の北を司る獣、玄武。世界の南を司る獣、朱雀。世界の東を司る獣、青龍。世界の西を司る獣、白虎。この者たちは、四神獣と呼ばれたり。四神獣、万物を惑わし必ずや破壊を導く。恐るべき獣なり』この部分だけみたい」

私はメモ帳とシャーペンを持ってきて、書き込んでいった。書き終わってから改めて内容を見ている。

どつやら、ミルカ村でおじいさんが教えてくれたものの続きのよくな気がするんだけど。

「獣……」

何度でも目につき頭の中で復活するフレーズだった。

恐るべき獣なり

「獣、か……」

あの、私やカイトを襲ってきたおじいさんの姿は獣という言葉にしがみつき連動して、私の心の隙間に木枯らし風を与えていた。

「人に成れなかったら、どうなってしまうんだろうか……」

咳かすにはいられない。彼らだつてなりたくてなつた訳じゃない。人ではないと、自分を認めなくてはならない時　悔しさか葛藤をし、ついには自分の身を死にたくなるほど呪うんじゃないだろうか。そんな気がした。

悲しかった。

「全てが終わつたら……南ラシー又に行こうね。勇気」

マフィアが言うのと、私はメモ帳から顔を上げた。

マフィアは温かい目で私を見ていた。国に戻るべきじゃない、と自分が言ってしまった事をずっと気にしていたのかなど。だとしたら私のせいで申し訳なかった。

「うん！……」

何とか笑つてみたけれど。心中頼りなく。でも無理矢理にでも元気よく声を上げていた。

ナニワの森の出口は、きつともうすぐ。

暗くなりかけている遠くの空を……見つめていた。

遠く空を挟み、違う所では。

セナは少しやつれていた。特段何も変わっていない境遇。ガラスケースの箱の中にいれられた、窮屈な空間。食事の用意は運ばれて、術か何かで壁を通り抜け床に置かれるけれど。セナは手をつけなかった。

「食欲ないのか。食べないと身が持たないぞ。安心しろ、毒なんて入っていない」

ハルカは来た時にそう告げている。しかしセナは無視して黙ったままだった。

「言つとくけど、もし逃げようと思っっているのだったら無駄だぞ、それは……まあいい。監獄暮らしを知っているお前には、これくらい平気なはずだな」

言い捨てて去ったハルカ。セナは思う。

(逃げたりしねえよ……)

チラ、と横目でガラスケースの外を見た。一本足の小さなテーブルの上に、布に包まれ丁寧に扱われて一つ一つと並べられている物。それは。

四神鏡である。

「……」

2枚。カケラ……が2つ、にも見えた。鈍く、光っている。

セナはこれが四神鏡であると言われずとも、扱かわれ方や状態などから確信はしていた。

(いつまでもココに居座るつもりはないが……約束したしな、勇気と……)

ダランと首をだらしなく楽にしながら、無言の時間は過ぎていくばかり。思考する時間は永遠に続きセナを時に苦しめる事がある。

……リン。

(ん……?)

深い沈黙の中から。音が波紋のように広がってセナの耳にまで届く。

ほんの僅かな響きだったはずなのだが、残響がいつまでも自分の耳に残っている感覚に襲われた。

辺りを探してみるセナは、やがて見つける。

小さい鈴が一つ、身近にコロんと。しかも今自分があぐらをかいて座っているケースの空間内で。可愛らしく、幻ではなく。ちゃんとそこに、ある。

「……？ これは」

ヒョイと摘み上げた。よく調べてみても、ただの鈴。

しかしセナには見覚えがあった。そう、これは。この物は。

チリンの、通信鈴である。

数日か、数十日か。やっと、やっとだ。

私達はナニワの森を無事に抜け出した。本当にご苦労様って感じで、肩の荷でも下りたみたいだった。

森を抜けると、そこは海！ 海！ 海！ へばっていた私はともかく、メノウちゃんだけが大はしゃぎで砂浜を駆け回っていた。何その元気。

「わああーい！ やつと出れたねえ」

なんて、喜び！ を体で前面に出しながら。手を上げたり、飛び跳ねている。う、うらやましいその清々しさ、だった。

ババくさい私はもうどうでもいいとして。森を抜けると、海。そして地平線へと目を向けたらだ。

島が見えた。距離的に、比較的にもココから近そうな一つの島。

「あれくらいなら、私達の力で行けそうじゃない？」
と、マフィアが提案した。

力とは。七神の魔力による技……しかも私達、ときた。マフィアの真意は読み取れる。

使うのは併用魔法だ。恐らくは、マフィアの木神としての力と、カイトの水神の力、かな。

前にチャレンジした時は、4人くらいが定員で限界だったと思う。でもあれからマフィアもカイトもだいぶ力をつけた。私、カイト、メノウちゃん、マフィア、ヒナタ、蛍に紫。7人かあ。ギリギリ、イケるかも。私は大きく頷いた。

「やってみる。たぶん行けると思うわ」

自信はあるみたいで、マフィアは大きく深呼吸。

さっそくだったけれど。私達は葉という葉を集めてきて、ちゃんと人数分は乗れるようにと葉っぱでこしらえられた乗り物。船を造り上げた。マフィアの“草鞋”^{わらじ}によるもの。見た目フカフカの木の葉のベッドにも見えたりして。

「それじゃ、行きますかあー」

全く違う性質同士の併用魔法はお互いのバランスが常に大事。そのための中力と訓練は日頃から必ず鍛錬しとかなないと絶対にできっこないのだ。力加減、微細な調節が物を言う。

「皆、乗ったあ？」

続けてマフィアが呼びかけるに対して。「おっけー、行ってえええ」

適当な返事を。

「じゃあ行くわよ、カイト」

「おっしやー」

息を合わせ、2人ともは　まず精神統一。目を閉じて、立てた指先一点に力の全てを注ぎ込む。

全然心配してないし、完全に安心しきっていた私を含め他メンバー。

証明できた。難なくスピードにのって海を渡る事ができたのだ。た。いえーい、やったね！

しかし陸が見えて間もなく。次なる衝撃は私達にやってくる。

到着した島は、確かキタ島という名前の所だった。私達は船に乗ったままで、波打ち際の辺りで浮いていた。

そこに立ちはだかった大男。岩鉄！ なイメージを持たせそうな頑丈な鎧やしつかり刈られた頭。おじさんだった。腰に太い剣がさしてある。

彼は何？

皆がそう思ったに違いないとしばらく男の出方を窺っていたらだつた。

男の口からその衝撃は放たれる。

「おう！ 待ってたぜ、救世主一行よう！ 俺が七神のうち
の一人だ！」

……。

へ？

私は開いた口が塞がらなかった。身が固まったまま……そして！
ばっしゃん！

船はバランスを失い……落ちた。

「……」

全員、水の上に落ちてびしょ濡れになる。集まり固まっていた葉っぱは散り散りに。原形はなくなった。浅瀬だったのでお尻に受けたダメージはほとんどないが。そんな事よりもだ。

……誰だつて？

啞然、愕然、衝撃というより襲撃じゃないだろうか。私達を襲つ。

「な、何で私達が救世主だと……」

目の前のおじさんは言った。

「ん？ 魔法使つて来たし？」

突きつけられた現実を受け入れようと、私達は必死に立ち上がるうとしていた。

少しの時間をもらって。私達は やつと自力で再起して立ち上がり、おじさんとマトモに会話できるようになった。あまりにも拍子抜けしすぎると、こんな事態に陥るんだねと何かを学んだような気がしつつ。私が代表して前に出た。

「こんにちは……」

とはいえ。相手は30代くらいの大柄な男。岩鉄とは言ったが、よく見るとそんなに怖い顔はしていない。眉毛は濃く太いし、貫禄があるが、気難しさはなく温和そうに思えた。

ちよつとずつ慣れたのか安堵しながら、ご機嫌を窺う。

男はニツと口を吊り上げ片方の頬にえくぼを作り、白い丈夫そうな歯を見せて突然クイズを出した。

「さて、何神でしょう？」

し、七神クイズ？

「ええと……」

一瞬面を食らったけれど、すぐに過去チリン少年だったか……が、言っていた事を思い出した。『あと、光神と土神でしょ？ 大丈夫、すぐ見つかるよ。近いうちに、あっちから やって来るだろうから』
そんな事を。

「土……神？」

おずおずと。ないようである自信を込めて言ってみた。

男はいきなり私の背中をバンバンと叩き出したからたまらない。

「！」

痛かった。

「正解だ！ お前やるなあ」

のんびりとした口調が返ってくる。お、大当たりですか。痛くてあんまり嬉しくない。

男は満面の笑みで私達全員を歓迎してくれた。

「今日は俺ん家へ泊まれよ！ リカルも待ってる」

(！)

驚きウロたえたのは私だけだ。すぐさま緊張が私の中で血流にのって走り流れた。

リカル、その名前に。

「話が上手すぎねーか？」

私の胸中をよそに、背後で頭の後ろに手を組みながらカイトが言っていた。

男の名は、ゲイン。ゲイン＝ジャーニ＝ワイド。27歳（！？）。そしてリカルというのは、奥さんの名前だった。まさか結婚していたとは。いや変でもないか。まあいいや。

どうぞ呼び捨てで構わないと言っていた。ゲインの家へと招かれる。

行く道の先々で島の人達に挨拶され、ゲインはニコニコしながら愛想よく答えていた。それから家に到着。玄関のドアを開けると、優しいような若い女の人が出迎えてくれていた。

「いらっしやいませ。どうぞ」

声も落ち着いていて安らぎを感じる。どうやらこの人が奥さんのようだ。長い柔らかな黒い髪を後ろでシンプルにまとめ垂らしていた。口元のほくろが色っぽい。

「さあ上がれ上がれ！ 荷物は部屋に運んどくぞお！ わっはっはっ」

大声で笑いながらリカルさんの横を通りすぎた。リカルさんはゲインを見てクスクス笑う。

「ゲインったら子供みたいに はしゃいじゃって……」

何とも微笑ましい風景なんだろうか。つつい私達もニヤけてしまった。

私達は言葉にどんどん甘えて、リカルさんの手料理をご馳走になる事になった。

粗末ではなく、とてもシンプルな献立。2、3種類の野菜とお肉を混ぜて煮込んだだけのものや、パンプキン風の温かいスープ。ポテトサラダ。自家製で淹れて下さったホットティー。じいいんと体が芯から温まるような食卓だった。とても家庭的なスタイル。お手本にしたいくらいだと思った。

これまでの旅のうち、かいつまんだ話をした。風神、セナと出会った事から始まり、レイという闇神と敵対している事。ハルカという炎神も向こう側についてしまって、セナは捕らえられているという事。四神鏡や天神、邪尾刀と光頭刃の関係……それくらいかな。あんまり詳しく話し込むと、長すぎて夜遅くまでかかっちゃいそうだから。ほどほどに。

「すげえ事になってんだな。んじゃ、これからその敵の……兄ちゃんところに行くって訳か。聞いてると、一筋縄じゃいかない相手みたいだな」

と、食事を終えてお茶を飲みながらゲインは言った。

そうなんだよね、と私は気が重く。ため息が出してしまった。

「考えてたって仕方ねえよなあ。思いつくうちの、やれる事はやってみないと……さっ、今日は早く寝ちまいな。おおいリカル、布団は敷いたか」

ゲインは、台所に居るだろうリカルさんに大きな声で呼びかけた。そのうち、「はいはい。ただ今」と返事をしながらトタトタと。リカルさんは居間を通り抜けて2階へと続く階段にと上っていった。

私も手伝おうかなと。リカルさんの後を追った。

2階の客間では、リカルさんがすでに布団を出し始めている。

「ごめんなさい。布団の数は足りないから、狭いですけど詰めて寝て下さいね」

と、私に優しく微笑みかける。

「あ、いえ。そんな。いきなり大所帯で押しかけたんですもん。こちらこそ、お気遣いすみません」

私が頭を下げると、リカルさんは私の所にやって来て。何故だか片肩に片手を置いた。

それから、顔を上げた私の目をジッと見ている。何だろう？

「……リカル、という名前が気に障るのですしたら、どうぞルイ、とお呼び下さいな。リカル＝ルイ＝ワイドと申しますので。好きに呼んで下さって構わないんですよ」

と、不思議な事を言った。

「……？」

私はすぐに理解ができなかった。名前？ リカル？

「私は何となくですけど、人の考えている事が読めるのです。だから。あなたはリカル、という女の子……かしら。思い出したくない過去がおりのようなのでしたから。おせっかいかもしれませんでしたけども」

私は手を休めず動かし続けているリカルさんを……すごいを通り越して感動してしまっていた。

夜になって。

私以外の皆は布団の上に並んで雑魚寝だった。私は眠れなくて、起きて外へと出かける。

昔から眠れない夜はよく散歩していた。成長してもこれはずっと変わらないのかなあ私。

建物を出て、少しの気分だけで一方向を目指した……。

「ん？」

海の方へ向かって真っ直ぐ。それから、波打ち際に沿って歩いていたらだ。

崖の方で騒がしい音が聞こえてきた。ドカン、ドカンと。

何だろうと思ってそちらへ。ジャングルみたいになった森林を通

って、奥にある崖のそばへと近づいていった。

崖の下には、見覚えのある人物が。ゲインだった。

鎧も他に防具もつけてなくて、剣だけが傍らに置いてあった。本人は何してるのかと言うと。大きな岩を見つけてしがみつき、持ち上げて砕いたりしている。ひよっとして。

「修行してるの？ ゲイン。こんな所で」

私が声をかけるとゲインはすぐに気がついてくれた。「よう」

汗を拭きながら休憩に入ったみたいだった。「まあ座れよ」

崖にもたれて、私とゲインは並んで座った。

ゲインは話をするのが好きで楽しいらしく、ネタがいつぱいで尽きない。島で獲れた魚とか、天候のせいで遭難した事とか。何とリカルさんとの馴れ初め話まで。

リカルさんとは、ココの崖で出会ったんだそう。崖の下で足をくじいて動けなくなっていたリカルさんを家までおんぶして送っていったのがキツカケ。次の日から。ゲインがココでよく修行をしているとリカルさんが現れて、そのままトントン拍子に結婚までいっちゃったんだそう。

いいなあ、2人を見ていると幸せ全開オーラが眩しすぎるよ。もうっ。

そんな事を思っていた訳だけれど。ふと疑問が沸き起こった。

今後の事。

ゲインは、どうするのだろうか……。

「ゲイン。ゲインは、これからどうするの？ リカルさんを置いて、私達と……行くの？」

嫌な役目だなあと知りながらも、聞かなくちゃダメだった。とても大事な事だから。

ゲインはしばらく無言だった。

その間、砂ボコリをたてた風がサツと私の横を吹き抜ける。居心地の悪さを取っ払いたかった。

ゲインに動きがあった。自分の胸元から、一枚の紙切れを取り出

し。私に渡した。

「……………」

奇妙で、ずっとだんまりなゲインに、これまでとは違う感じを感じた。

私は渡された紙切れを広げてみて、あ、と声に漏らした。内容が。

『 第四章 “十二神鏡” 』

精霊の力をもって生まれし人間

即ち七人は 必ず鏡を持って 転生す

これを七神鏡と呼び 四神獣封印の際 用ゐる

救世主 七神の力を集め 一枚の鏡を造る

吸収した鏡 救世主とともに 四神獣を満たす道具となる

さて 四神獣も 一つずつ鏡を持つ

其の鏡 自らで水に溶け 風に さらされ 土に腐り 火で燃え

たり

つまりは 人間の体内に侵入し 元の形を築き始め 一枚の鏡と成る

よって 四枚の鏡 存在す

四枚で力は最大と なりて 四神獣の体を復活させる力と成りたり

なほ、其の鏡を所有する者の体 寿命 尽きるまで死することなく

永遠の力 手に入れたるが鏡 失えば即死す

合はせて 十二神鏡である 』

……

こんな。これは。

“七神創話伝”だ！

私は紙切れを持つ手をブルブルと震わせて、ゲインを大きく見開いた目で見た。ゲインは少し眉尻を下げながら、ちゃんと説明してくれた。

「俺が七神の一人である事は、ばあちゃんから教えてもらった。それで、ばあちゃんからそれを聞いて書きとめて、大事にココにしまっておいたんだ。肌身離さず」
「と、ゲインは自分の胸元を叩いてみせた。

「いつ救世主が来ても、俺が七神だと証明できるように。力を貸せるように。俺はあんたらが来るのをずっと……待っていた」

月に照らされたゲインの青光る顔は、純真だと思った。嘘偽りのない、本当の意志。それが固く、根づいているんだ。曲がらない、一貫した信念なんだろう……。

話は続いた。

「その語りを見る限り、この世界を救う救世主は俺達七神の……それぞれが持つ『鏡』が必要となってくるんじゃないか、と思われるいや、まだわからないが……俺の鏡は今、手元にはなくて隠してあるが、それを持ってあんたらと一緒に四神獣の復活を防ぐために行かねばならない……覚悟の上だ。もちろん、リカルを連れてはいけない、置いていく。何より……」

少し言いくそうに頭を掻いた。照れている？

「もし生きて帰ってきた時に……帰って来れる場所がほしい」

それで話は終わりになった。

ゲイン……。

私は胸が仄かに熱くなる。

自分や……セナの事を思った。セナの帰って来る場所。もし、もし私がそれならばと。

セナや皆に、安らぎを与える存在になりたいと。

それが、私の願いになる。

……願いよ、叶えて……

両の手を組み合わせた時。右手にはめていた指輪が、突然赤く光り出した。

「！」

「何だ!？」

そして大きな地面からの叫び……地響きが発生する。ゴゴゴゴゴ、と。

「きゃあ！」

「動かずジツとしてるんだ！」

ゲインに言われ、うずくまって時がすぎるのを待った。とても長い時間。

地震は、そのうちに治まってくれた。同時に赤い光も。

「何だったの、今の……」

わからない。でも。

すごく……嫌な予感がしてそれは取り巻き、私を決して離さなかつた。

大地が揺れ動き出す……まさか青龍？

まるでそれは脈動のように。

《第50話へ続く》

第49話（最後の七神）（後書き）

【あとがき】

ゲインは違う名前でした。3段階を経て今の名前に。そしておっさん。平均年齢上がりますなあ。はっはっはっ。

ブログ第49話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog-entry-1116.html>

ありがとうございました。

第50話（火城へ）

こんな地震は体験した事がなかった。

立っているのが困難だ。身を屈めて、縮こまって治まるのを祈るしかない。

「もう……大丈夫みたいだな」

ゲインが言った。私の固まって恐怖で縛られた体は、ほどかれる。「どうやら……青龍が寝返りでもうつたんじゃないか。ははは」

なんてゲインは笑ってみせるけれど。私はとてもそのノリにはのれなかった。ごめん、ゲイン。

（四神鏡が2枚……揃い始めたからなんじゃ）

不安が消えない。いつまでも。

ゲインの家へ帰ってきて、私は床につく。夜も深い。ちゃんと寝ておかなくちゃと少々焦り。

難なく眠りの淵へ。夢の中へ、スルスルと。疲れは忘れて別世界への境を越えて。誘われるがままに……いらっしやいませどうぞだった。

「ん……？」

寝言のようにも思えたけれど、違った。意識は夢の中にあった。白っぽい視界には水面がある。

とても透明感のある水質だった。下に揺らぐ水草が見えている……が、ただの私が描いたイメージなんだろうか。ハッキリしない。ちよつと曖昧なだけけれど、夢なんだから……ま、いつか！と思いつく事にした。

そんな美しい水面の上に私は立っている……のだろうか。重力を

感じなければ、実感もないし、残念ながら私自身の姿は私の目には見えないのでわからない。しかし下には自分の足元だけが見える。やっぱり立っているんだな。

微かだが、水面に私の姿が映っている。足を少しでも動かせば、波紋が一点から揺り描き出されて広がる。何処までも広がっていく。

「あ……？」

目で追っていったら、正面に誰かが居るのがわかった。水面から水が蒸発して雲か、それともガスでも発生しているのかどうか。白い湯気が大きくなった。誰か、を覆い隠してしまっている。

「誰なの？」

私の呼びかけに答えてくれるのだろうか。答えてくれなかったらどうしようと一抹の不安があった。

でも払拭される。

「俺だ」

なじみのある男の声だった。私は。

「セ……」

後が続かない。

「よお」

全てを知っているかのような笑みを浮かべていた。霧が晴れて、正体は明らかになる。

「セナ！」

走った。

バシャバシャと……鳴ってよいはずの水を撥ねる音はない。全くない。していない。

響くのは声だけだった。

夢という名の異次元。

「やっと落ち着いて会えたな。すげー懐かしい感じがする……」

と、セナ……目を細めていた。セナのそばで私は。「セ……」興奮を抑えにかかる。

セナ。細身の体。薄紫色の、肩の後ろに伸びた細く長めの真っ直ぐな髪。長いまつ毛、女みtainな顔。言うと怒る……。

「ぶ」

怒る、と想像して少し吹き出してしまった。「何がおかしい」

セナは肩を竦めた。

「ごめんごめん……あはははは」

私はおかしくなって笑った。セナがますます変な顔をする。それも何だかおかしかった。

どうやら私の頭のネジがどっかに飛んで行っちゃったんじゃないだろうかな。

「は……」

発作的な笑いが下火に落ち着いてきた後。代わって静けさがやってきた。

「……」

沈黙が降りる。時間を忘れて。

「……」

セナも沈んでいて黙っていて。

私達の間、不思議が訪れて居座っている空気が流れた。

少し……遠慮しがちに。セナがこそりと口に出す。

「チリンの鈴……」

と、片方の手を出して私の前に手の平を広げて見せてくれた。握っていたのは、小さな何の変哲もないただの鈴。でも私は知っていた。

「チリンの……“通信鈴”……？」

そうだ。思い出した。

チリンくんが私にくれた事があるんだ。元の世界に帰る前だった。確か……自分の“会いたい”と思った人と交信しあう事ができる、というもの。だから……。

「私に会いに来てくれたの？ セナ」

セナは鈴を固く握り締める。自分の胸元に置いて。そして。
「まあな」

と真剣なまなざしで私を見据えた。とても真剣に。「……………」
少し緊張して怖くなっただけだ。

セナは何かを言おうとしている。聞くのも何だか躊躇ためらいわれた。

「会いたかった……………」

少し擦れた。聞き間違えたかと思った。

「会いたかったんだ」

もう一度。同じ言葉は繰り返される。

「セ……………」

まただ。

私の言葉は何度でも続かないんだ。途切れてしまって。「セナ！」
飛んだ。

羽が生えた訳じゃない。

私が自分の『意志』で、飛んだのだ。いや。

セナの胸に飛び込んだ。

セナの腕が私を迎えてくれる。すっぽりと入っていった。

私はいつの間にか泣き出していて。止まりそうにない。後から後からとめどなく涙が溢れてきて、肺は苦しいし全身が熱い。汗は冷たくなって、鼻の奥は詰まりかけていた。はっきりいつて……………みつともない。

「ひぐつ……………」

しゃっくりが止まらない。頭は埋めたままだったけれど、とてもセナの前で上げる度胸はなかった……………どうしよう。

セナはしばらく何にも言わなかった。ずっと私を抱き締めていてくれて。私がどんな情けない醜態を見せた所で全部何もかもがお見通しで。そして……………全てを受け流すか受け止めてくれるような。力の強さを感じていた。

私はまた自分という脆さを知った。今まで何回泣いてきたのだろうか、と。もう随分と長い間、この世界で過ごしてきたような気がする。でもやっぱり短い期間でもあったような。そんな事を考えてしまっけれど、別にお別れをするんじゃない。

私が言いたいのは。

こんな短期間なのにいっぱい泣いたなあって事。

「ごめんなさ……」

必死に出したものの、謝る事しか頭になかった。

「何で謝る……勇氣、何かしたか？ 謝らなければならぬのは俺の方だろ……」

セナの言葉は私の耳元で囁かれる。

「セナ、こんなにやつれて……だって……私、一人じゃ全然頼りなくて……皆に心配ばかりかけまくってる……」

切れ切れで、聞き取りにくい声をセナはちゃんと拾ってくれていた。

「先に心配かけた俺が悪い。気にすんな」

「う……」

気にするなと言われても。どうしても気にしてしまうんだけれども……。

もう少し時間が経つてくると、私はだいぶ冷静になってきていた。もう大丈夫と思って、セナから離れてみる。久しぶりに見たセナの顔は、やっぱり綺麗だった。

「セナは、ハルカさんの所に居るんだよね？ 今」

聞いてみた。

「ああ」

セナは帰って来れた訳じゃない。実体は、まだ監禁されたままなんだ。

ならばだ。

「私達、これからそっちにのり込むつもりだよ！ 最後の七神も見つかったし！」

セナはびつくりして私を見た。

「見つかったのか！ 七神」

「うん！ だから……」

私は固く自分の手を握った。勢いづかせて叫ぶくらいに大音量で言い放つ。

「絶対あなたを助け出す……！」

引き締まった顔は、決心を表していた。

「だって私はセナの事が好きだもの！ セナだけじゃない、マフィアも、皆の事も。だから……帰ってきて！」

セナは。

少し、顔を背けて。「ありがとう……勇氣」と悲しげに告げた。

「？」

私はそれが受け入れ難く。どうしてそんな顔をするのか謎だった。セナが次に私を横目で見た時には、平常心に戻っていたみたいだけれど。

「俺、お前に告白された時。すげー嬉しかった。単純に。俺も、勇気の事が好きなんだろうと思った。でも……でもだ」

好きと言われ嬉しくて胸が弾みそうになった。でもすぐに消える……すぐに。」

「俺、忘れられない人が居る」

私は即座に「ハルカさん……？」と勝手に口がそう言ってしまった。セナは驚きもせず、ゆっくりと頷き水面に映った自分の顔へ一言一言を確かめて。伝えようと言葉を吐いていった。

「ハルカが……好きだった。今もきつと……愛してる。あいつがレイの事を好きなのは、子供ガキん時からとつくに知ってた。でもそれも良かった。だから 追いかけた」

「……」

「レイと別れた後。国王の娘であるハルカの失踪を耳にした。何の

旅の目的もなかった俺は、ハルカを捜しに旅に出ていた。それこそ世界中を。まさかレイの所であんな風になっているとは、夢にも思わなかったぜ」

セナの本音は私にとって苦痛となるもの。できれば、聞きたくはない内容でもある。

でも、でもでも。

私の中は……セナが本心を包み隠さず一生懸命に伝えようとしていてくれる事の方が、たまらなく幸せに感じた。だから、怒りなんてしない。

これが……『セナを受け入れる』って事なんじゃないか。

私は、私を感じたままに従う。

(セナが旅していた目的……私に出会うまでは、そうだったのね……)

さらにセナはトドメの一撃を私に食らわした。

「だから……お前の告白は受け入れられない。ごめんな、勇氣……」
悲しかった。

でも、ダメージなんてないように感じられた。何でだろう。苦しきなんて何処かへと置いてきたみたいだ。私は自然と明るく笑っていた。

「わかったよ、セナ。もうわかった」

私は突然胸を張る。ない胸を。何が。

「で・も・ねー！ それとこれとは別に。セナ、早く戻って来なさいよ！ 皆も私も心配してるんだから。いよいよこれからが本番なんだからね！」

と、鼻息荒くニンマリと口元を吊り上げて笑うと、セナもつられてくれて調子にのった。

「ああ。必ず戻る。ハルカが何人居ようとこんな狭つちい所はおさらばだ。勝手に人質になつてて戦いに参加できずに悪いな！ 勇氣に皆 “火の島” で待つてるぜ！」

火の島？

私が聞き返そうと思った時。朝日が視界の端から乱入してきた。

夢は、覚めてしまっていた。

……パジエナ村。村人人口250人ほど。

もし勇気達がミルカ村を後にし。ナニワの森を抜ける前に進路方向を変えていたなら、訪れていただろう小さき村。

農作物を何処の民家でも育てていて、牛飼いの多い村だったが……

見る影もなく。

平和は、赤で塗りたくられた。

「これで3枚目……」

さくらの手には、卵に似た湿った物体。艶光りする。割ってはいないが、中には恐らく。

「あと1枚となりましたわ……レイ様、ハルカ様……」

目の奥が光る。妖しい光を生み出している。さくらの髪にこびりついて離れない血は固まって塊となっている。気にしていない。後で洗えば済む事だと、高をくくっている。

片手には見慣れなじんだ刀。こちらにも血が……数滴、滴り落ちている。

「ふふ……あはははは……」

宵の闇が、もうすぐに。一刻一刻と迫っている。

さくらの狂気か狂喜の音が暖かく湿った風にのって、乾いた髪とともになびき運ばれていった。肌に付着する長い髪が煩わしいと。

グ……ゴゴ……ゴゴゴ。

地面から雄たけびが聞こえる。足の下からだった。

それをも かゆいとさくらは思っていた。

セナは“火の島”に居る。

私は空に向かってアジャラとパパラを呼んだ。朝が来て、今後の事を相談し終わった後で。

セナにヒントを教えてもらって、テーブルの上に丸まっていた地図を広げたんだ。隅から隅まで、それらしき名前の場所がないかを目を皿にして探したんだった。

ポツンと孤島で、あった。地図によると、東の方角……ベルト大陸よりもっと北東に。海に浮かんだ、“火の島”だ。私達は丸まった海老の尻尾みたいになって北に伸びていたベルト大陸を横断してきたけれど、また戻って行かなければならない事になる。

「アジャラー！ パパラー！ 来てえー！」

砂浜で。海に叫んでいた私。遠く沖合では、海面から頭だけを見せている岩の向こうで漁業を営んでいる船がゆっくりと進行していた。のどかな風景ではあったんだけど。

すぐに飛んで来ますとアジャラは言っていた。本当に来るんだろうかと疑りを入れていたら。

「はいはい」

「なんや〜」

と。「!?!」

振り返れば2人が現れていた。私はズッコケて砂の地面の上に腰砕ける。「……」

ミニスカートの腰に手を当ててパパラは、私の顔を覗き見る格好になった。

「そない驚く事ないやん。瞬間移動テレポートくらいわけないで。慣れてしま
い」

「限界はありますけど。パパラも居ますし、多人数でもできますよ」と、2人はニコニコ顔だった。は、はあ。瞬間移動ですか、便利です
ね……。

「で……」

パパラが私の横に並んで様子を見守っている、マフィア達全員を一人ずつ目で追った。最後尾に居た、ゲインに目が向いて止まる。

「見つかったんか、最後の七神」

パパラの表情が硬くなつた。私は手や服に付いた砂を払いながら立ち上がってコクンと頷く。そうか、とパパラはアジャラへと視線を送った。アジャラも頷きで返した。

「では、いよいよとなりますね。ハルカとレイの居場所なんです。それを聞いて私は先に、「火の島」です」と口を出した。

でも2人とも、すでにそれは承知していたみたいだった。

「ええ。自分の質に合った場所を見つけたみたいですね。希ごうな場所です。今現在は、島全体が炎に囲まれています」

炎に!?

「生物は滅多に近寄らないでしょう……ハルカ達はどうかやら島の中心に。空からはわかりませんでしたので、地下に潜っているかもしれませんね」

「アジャラとやら。そこは火山地帯なのか。地下は蒸し風呂になってやしないか。そんな所に奴らが居るのか？」

と、横槍をカイトが入れる。

パパラが補足した。

「火山島ではないねん。そこに生える植物や岩石、鉱石の影響あつてか、目の錯覚で島全体が赤く見えるし異常に気温が高いつちゆう。前はなかったはずの炎に取り囲まれてるつちゆうのは、ハルカが持ち出してきた炎のせいなんとちゃうかて、思う……それにハルカの周りには四師衆がついているんや。奴らは術を使う。レイと擬似した闇の魔法……温度を通さない空間を造る事くらいできるんとかやうかな」

そう推測した。ふうむ。

「実際に見てみないと何とも言えないけど……」

マフィアも考えて。私は「それじゃ」と手立てを考える事にした。

アジャラの言う通り、ハルカ達が地下に潜伏しているとすると、島までは、アジャラ達の瞬間移動で行けるとして、それからだ。地下がどのような形状になっているかもわからないし、恐らくはこちらの動向なんて相手には筒抜けなんだろう。それって悔しい。どうぞ畏にお嵌まりは下さいとでも言われているようだ。

レイとの一戦を思い出す。生きて帰れたのがラッキーだった。

もうあんな目には遭いたくないし、無茶もしたくない。邪尾刀で刺されたり……。

「刀……かたな 剣。光頭刃なら、邪尾刀に立ち向かえる」

私は不死身だった。それは立証されている。軽いダメージを光頭刃で受けた事はあったが、あれもとくに治ってしまった。たぶんだけれど、重いダメージほど治りが早いってんじゃないだろうか。とにかく私は両方ともに最強だった。

「邪尾刀を持っている人物の相手は私ね。不死身だからって調子にのって、私は剣で戦えるわ。任せて」

ドンと自分の胸を叩く。「でも」とマフィアは心配そうだった。

「大丈夫よ、マフィア！ 私は嬉しいの。いつも護られてばかりだった自分でも戦えるんだもん！ ね！」

願っていた事だ。マフィアは少し渋々だけれど大人しくなっただめ息をついていた。私は続ける。

「メノウちゃんは、リカルさんの家で待機ね。いい？」

急に話をふられて。メノウちゃんはびっくりしたけれど、聞き分けよく黙って頷いた。前はどうしてもカイトについていくー！ つてダダをこねていたのに。ちょっと大人になったんだろうか？ なんて思ってしまう。

微笑みながら、次へ。

「私は決断をしなければいけないと思う。レイの……説得が無理と判断した場合。その時……は」
今。

セナが近くに居なくてよかったと……心底そう思う。

私の口から飛び出す言葉は、残酷なものだ。でも。

言わなければいけない。避けられない。いつまでもいつまでも。私が逃げているからだ。皆は、私の……救世主としての、決断を待っているのに。なのに。

甘えは許されない。覚悟を決めなければいけない。今がその時だ。私は言った。もう2度と言わせないと願う。言った。

「レイを、倒します」

凍りついたのは自分の心臓だった。私の目は死んではいない。生きていた。

「ああ」

「わかってるわ」

「全力を尽くす」「了解だ……これが最後だ」

皆の反応で、少しは救われた気がした。ただ……蛍と紫だけは無言を繰り返していた。

きっと迷いが払いきれていないか、私の言葉が脳中を駆け巡っているんだろう。私は決意を変えない。蛍達の問題だから。私は何も言わないよ。

「邪尾刀の相手は、勇気に任せるとして。残りを俺達が総出で相手する訳だな。四師衆を。ハルカと」

ヒナタに続いてカイトが言った。

「たぶん、レイが邪尾刀を持つんじゃないかな。レイと邪尾刀さえなければ、俺達の頑張りで押さえとくくらいは何とかな。ハルカも居るけど……ああ、前は俺の水の力じゃ敵わなかったからな。シヨボン」

「ゲイン、あなた土神でしょ。火に土。火に水で。2人なら何とかできそうじゃないかしらね」
とマフィアがフォローする。

「おお、任せとけ！ 肉弾戦でも構わんぞ！ うりゃ！」

ゲインはたくましい筋肉の腕を見せた。

「さくらと紫苑と鵜ひたきと。ヒナタとマフィアだけで相手するにはちょっとキツイかもしれないから。できるだけ1対1で戦ってほしいかな……アジャラとパパラ。蛭と紫くん。あなた達はどうか？」

と、私は名前を出した4人を順に呼びかけた。それぞれは、それぞれに。

「戦います。パパラも同様、戦闘向きではないですが。術を駆使し、精一杯に」

「ああ。そやな。どっちかっていうと、アジャラとのコンビネーションの方が上手いきそうなきがするでえ、2人で今挙げたうちの一人くらいは相手したるわ。任せとき」

アジャラとパパラはそう言ってくれたけれど。蛭達は……。

「私達で紫苑を相手するわ。たぶんそれが一番いい」と、言ってくれた。

私は喜びでいっぱいになる。協力してくれるんだと、安心感で満たされたから。

これで、本当に決心はついた。

私達は動き出す。

「蛭達で紫苑、カイトとゲインでハルカさん。アジャラ達で……術同士だからさくらが相手かな。マフィアとヒナタで鵜。私は……レイもしくは、邪尾刀」

私を取りまとめる。「この後に準備して、すぐに発つ」そしてもうひと声だった。

「セナを助けるんだ」

私は戦う。最強の武器 “光頭刀”で。

恐らくはレイが所有するだろう、“邪尾刀”に。

仲間とともに。これが最後の決戦。血戦になるだろう。腹をく
くれ、躊躇するな。甘えは、滅びだ。突き進め。
今度こそ逃げずに。迷わずに。

レイを倒すんだと。

「準備できたな」

カイトが私に呼びかける。先ほどの砂浜での立ち話……いや、作
戦会議を終えた後。荷物を整理してまとめ、それなりに予測できる
範囲で準備をした。途中、道中で買った“縮小自在ポケット”なん
かにも物を詰め込みながら。セナとの出会いの頃を思い出してしま
いながら。

腰に短剣をくくりつけ、光頭刃を片手に私は皆と待ち合わせてい
た砂浜へと再び戻って集合した。長い時間がかかっていたのか、皆
の方が先に来ていて待っていた。

リカルさんやメノウちゃんが並んで事の成り行きを見守ってくれ
ている。

もう、私が出る前に別れの挨拶は済ませたのかな……？

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい！」

何と、リカルさんとメノウちゃんの顔はとても明るく。不安なん
て微塵もなかった。

ああ、そうだね。

きっとすぐ……ココに帰ってくるんだからね。

私は笑った。ふと見上げ方向を変えると。カイトやゲインも同じ
ようにして笑っていた。

きっと。絶対。

待っていてほしい。

ココが、私達の帰る場所なんだと。

「では……行きます。いいですか」

アジャラが変なデザインの杖を高く掲げる。「はい！」
私達は皆で一ヶ所に固まって、目の前に広がる昼の海を眺めた。

空の、羽の長い鳥は高い声で鳴いている。太陽の光は海面と陸を輝かせている。風は。心地を洗う。

さあ、行こう。

「では」

決心が鈍らないうちに。……行け。

聞いた通りの島だった。

第一声は、『暑い』。それもそのはず。

遠く、海岸に沿っては。

炎が道を描き海岸線で燃えさかっている。今さら思っけれど。炎にグルリと島を囲まれていたんじゃ、何処からどうやって出入りをするんだろうか。魔物でも容易くないんじゃないだろうか。私は着ていた制服の長袖を捲り上げた。汗を手で拭いたりしているのは、皆も一緒だった。

本当だ。視界はボンヤリとだけけれど赤がかかっている。少し物が歪んでも見える。

「あちらが、中心部です」

と、アジャラが海とは反対側を指さした。そこは。

石と岩の地面の上に土が積もりに積もった大きな山ができていた。周囲に木すらない。土煙が至る所に舞い上がっていた。時々、ドドドドと地響きが聞こえてくる。地震だろうか？

「上空からは見たんです。何もなかった。ですから、山の周囲に何かがあるはずですよ。探してみましょ」

アジャラの提案で、だいたい2手に別れて山の麓ふもとに沿って調べて

みた。私はマフィアと下を見ながら歩いていただけだ。特に何も見当たらなかった。

「変ねえ……隠し階段とか抜け穴とか。ないのかしら……」
腕を組みながら考えてみても。何も出てはこなかった。

おかしいおかしいと喚いていたらだ。カイトやヒナタが居る、私達から数メートルは離れていた向こうから、声が上がった。

「おい。隠し扉みたいな切れ目を見つけたぞ！」

それを聞いて私とマフィアは顔を見合わせる。

「行こ、勇氣」

「うん！」

マフィアが駆け出して、私が後についていくはずだった。

いきなり。

「きゃ！」

足を引つ張られて、前に転んだ。ズべっと。

「！」

すぐさま後ろを見ると。

地面から生えたような土の『手』が、私の足首を掴んでいる！

「いやあああ！」

私の大声を聞いてマフィアが振り返った。「勇氣！」

私はズルズルと高速で引きずられ、爪を立てて地面を引っかいてみても止まらない。どんどんと『手』は後退していった。「くう！」

終いには、後退する先に大きな『穴』が空いている事に気がついて、滅茶苦茶に焦った。

「勇氣イ！」

マフィアが戻ってきてくれて私の手を掴む。しかしだ。それでも私の足首を引つ張る方が強かった。マフィアまで引きずられてしまっ
う。

「うくっ……！」

このままでは。

私は崖になった所まで引きずられ、崖に手をかけて抵抗した。

(助けて！ カイト！ ヒナタ！ ゲイン……！)
誰でもいいから気がついてほしかった。でももう間に合わない！
ザクツ。

私は気を後ろにとられすぎていて、マフィアの背後には全く気が
つかなかった。

私の手を懸命に掴み、マフィアも気がついていなかった。

私は光景を目の当たりにする。

マフィアが……背中を刺されている。

地面に突き立てるようにして、杖で。一突きだ。

「うああッ……！」

マフィアの悲鳴は、私の脳天まで直撃していた。「マフィアアッ
！」

そして。

私は引きずられ、落ちていく。

マフィアの繋がっていた手は攻撃を受けた反動が放されてしまっ
ていた。

穴に、私は落ちていく。暗くて底の見えていない穴へと落ちてい
く。

(マフィアッ……どうしてッ……？)

どうして？

その疑問は、落ちていく時の混乱で紛れてしまった。どうして

マフィアを杖で襲った人物達……2人。

アジャラとパパラだった。

無表情で。

私の意識は薄れて、落下しながら穴の底の闇へと溶け込んでいっ

た。

《第51話へ続く》

第50話（火城へ）（後書き）

【あとがき】

いよいよか……。

ブログ第50話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-118.html>

ありがとうございました。

第51話（四神鏡、揃う）

沈黙で闇の部屋から。

レイは音もなくまぶたを開けた。

目覚めの時。それが今。

静かに身を起こす。

他に生物のいない暗闇の中で。レイの耳や感覚は、機能を試そうにも何も無い。

ここは何処なんだと普通は思うはずだった。でもレイは。最初から全てを知っている。

「ふ……」

喉の渴いた奥から、すり抜けた声が聴覚を刺激した。してくれた。「どいつもこいつも……俺を笑わせる……」

正確に発音される。咽頭は衰えてはいない。声も通る。確かめた。だからか、レイは次に大声を。「ハハハハハ！」

暗く見えない天井へと向かい激しく体をベッドの上で上下させて踊り狂う。ダン、ダン！ と自分のヒザの上に固く握られた手は押し叩かれ、目尻からは面白すぎたのか涙がこぼれた。

何が可笑しいと指摘をもし受けても返さない。レイはベッドから降り立ち上がる。

さあこれから。

「いよいよ……」

夢を見ている子供のように目を輝かせていた。

「実現する」

レイの夢は。……もうすぐ。

私は仰向けで倒れていた。床が冷たくて目が覚める。目を開けても暗闇。閉じても真っ暗。光がほしいなって思うんだ。いつもいつも。

私は新たな疑問を一つ増やして思った。私がセナと会ったり、いつかはハルカさんとも対面した都合のいい夢。いつもフィルターがかっているみたく灰色っぽく色の少ない視界、水面の上に居る事が多くて。上を歩いているんだけれど何故足は沈まないのかという、それは。

私の足元がいつもおぼつかない。心が不安定だから“水の”上なんじゃ？ そうか、そうなんだ。私がフラフラ決心がつかないでいるからなんだ、いつまでも。

と……ここまでを、起き上がりもせずにぼうつと考えていた。すると、頭上からだった。

「勇気……」

誰かが私の名を。私の名前を知っている者。

男の声で。「セナ！」私は跳ね起きる。

セナと叫んだのは私だ。声質ですぐにわかる。好きな人の声。

黒の物質が沈殿された闇の部屋の中で、浮かび上がる顔、姿形。間違いなくセナだった。夢の中で私を抱き締めてくれたまんまの。変だ。もう遠い昔の事みたいだった。

私は駆け寄る……でも『壁』にぶつかってしまった。

「何これ……見えなかった」

鼻を押さえながら、固い物……透明だったガラスの壁に手を触れた。どうやら、ガラスを伝っていつても終わりがなく。囲んで、『部屋』になってしまっているようだった。

そしてその中。壁を挟んで向こう側にセナが弱った顔をして私を見ている。セナの力でも脱出は不可能だったんだ。まあ、それもそう。だから逃げられずにココにいるんだしね！。

「そうだ……これなら」

私は腰の鞘に手をかけた。そして、利き手の右手で剣を抜く。そう。

“光頭刃”だった。

「斬れない物はないはず……よ」

ゴク、と息を呑む。まさか剣が折れやしないでしょうねと刀身を見た。切っ先まで睨んだ後、思い切り振りかぶってみる。セナは壁のそばから2歩3歩と後退した。様子を見ていてくれているらしい。果たして私の力で何処まで。「せえ……のっ！」

ガァン！

手が痺れた。「……」

勢いよく割りにかかったが……ガラスは平然と構えていた。やはり私の非力さではダメなのかな。

そう思っていたらだ。

ピキ……ピキ、ピキ、ピ、キ……

ヒビ割れが生じた。「……！」

体が動かない。それはセナもだ。ガラスがどうなるのかを私達は見守った。

やがて……パンツ。

私が直撃を食らわした箇所を中心に、細かくヒビ割れは蜘蛛の巣を描くように割れ目を作り上げていき、終いには弾けて破片を四方に飛ばした。

衝撃に一瞬ササツと避けたが、すぐに見直してみると。ガラスの壁にポツカリと穴が空いているじゃないか！

「やった……！」

見たか。“光頭刃”の威力。鼻が高くなる。

「やったな、勇氣！ スゲーよ！」

セナが穴をくぐって私に近寄って来る。私も走り寄ってセナの手を取ろうと余韻で残る手の痺れを我慢して頑張った。「セナ……！」

ああやつと会えた。触れ……。

……なんて喜ぼうと顔をほころばせた直後だ。

「そこまでよ」

ピタリと静止した。ギチャリ、と。私の足の下で踏まれたガラスの細かな破片達が音を立てる。敵だと察知しセナには背を向けた。

私とセナで敵と思われた相手を見据え……そうよ。今は敵の声。あなたは。

「さくら」

私は名前を呼んだ。はいという返事ではなく「救世主、久しぶりですわね。忘れもしませんわ」と返していた。

さくらとは前に戦って 覚えている。私はさくらにこつ酷い目を味あわせたんだった。正直、あんまり記憶にない。ちよつと私が変なハイ状態だったもんだから。

さくらがこんな所に居るといふ事は……？

「あなたは不思議ですわ……本当に、『何か』に導かれるようにココまで……おかげでおびき寄せる手間が省けて。あなたは、何者なんでしょうね。まあ、もうどうでもよろしいでしょうけれど」
と、さくらは奇妙な事を言った。奇妙なのは私という存在の方？
気分のよい言い回しじゃなかった。

そういえば、何で崖から落ちてこんな所に来たんだろう。始めから崖はあったのだろうか？ あの手は、魔物？ 引きずられて……
そして気がついたらココに。ココは、ちょうど地下だったのだろうか？

上を見上げる。

天井に穴が空いていたんだろうか。暗くて見えないからハッキリしない。

それともブラックホールに落ちたとか？ それはないか。

まあいい。考えたってわかりようがないなら、いつそ放棄する。それよりも……。

さくらは、艶っぽい口唇をひと舐めした後、片手を高々と掲げた。

何？

術だ。さくらの上方、頭上に近く。後ろに何面かのスクリーンが出現した。もう知っている。ココではない遠くの状態を映すスクリーンだった。映画じゃない。何処かで実際に起こっている事が映し出される。

暗い部屋で発光めき、目は吸い寄せられて息を呑む。

それは何処かの戦闘シーンだった。いや、映画なんかじゃない。始めに見つけたのはカイトだ。

その次にヒナタ。隣にゲイン。短剣や魔法を使い、敵と戦っている。

相手は鷓鴣ひたきや紫苑。それから。

「げ……」

セナが嫌な声を出す。「あれは……！」

私は全身に寒気が走った。さっきの体験を思い出したからだ。足首を掴まれた。

鷓鴣だけが敵じゃなかった。あれは魔物だ。ええと、泥人形？

「ゴーレムだ」

セナが教えてくれた。そうだ。ゴーレム。本を読んで知っていた。彼らを作りし者の命令にだけ遂行する、いわば土や石でできたロボットか。現に泥で塗り固められた体をしていて、カイト達に襲いかかっているではないか。

人間と同じくらいの身長だけれど服も着ず全身が泥だ。顔もなく、動きはトロいが倒しても倒しても起き上がってきてしつこくキリがない。

しかもその数が多すぎる。カイト達はどうかやら苦戦しているようだ？

「マフィアは何処！？ 蛭達も！」

映っているスクリーンには、私が言ったメンバーは姿がなかった。何処！？

特にマフィアだ。だってマフィアは。

「マフィアあ！」

私は画面の前まで駆け出す。さくらなんか今はどうでもよかった。マフィアは私が崖から落ちる前、背後から杖で攻撃されたのだ。一突きに……。

そしてそれを実行したのは。

ああわからない。

私は自分の目で見たものがまだ受け入れられないでいる。マフィアを襲った人物……達が。

アジャラとパパラだったなんて。

「！」

画面の端にチラリと見えた。マフィアの、赤いチャイナの服が。でも。

一人ではない。蛭と紫くんも一緒に居て。取り囲んでマフィアをサポートしているように思えた。きつと……。

見ると、マフィアの背中から痛々しい傷跡が。破れた服の隙間から、血の滲んだ服の奥から。杖で刺されたんだ。でも立って、戦っている。「いや……！」

血は止まっているのだろうか。手当てなんてしている余裕はなかったんじゃないだろうか。このままでは、マフィアが。

一度私は顔を背ける。私が何故一人、ココに居るのだと責めたい衝動に駆られそうになる。何のために神の剣を持っているんだ。せつかくの不死身の体を棒に振るようだった。

そしてピンと弾かれたように思い出す。ココにもそこにも居ないレイではない人物の事を。

「ハルカさんは!？」

「ハルカはどうした!？」

同じ事を思ったセナと声が重なった。

「ハルカ様はレイ様に付きつきりですね。会いたいですの? お2方」

とさくらは冷ややかにつまらなそうな顔をした。

「ああ。レイにもだ。会って、こんなバカな事を止めさせる。あいつらにだって想像くらいつくだろう。四神鏡を揃えて青龍を呼び出したら世界はどうなると天神、もしくは神子みこは言っていた？ 何故わからない。何故止めない。そんなにレイは天神がまだ憎いか。もう充分だろう……？ 天神は充分に苦しんだ……もういいじゃないかよ！」

最後は叫びになったセナ。セナの精一杯の訴えは、私には痛いほどよく伝わる。

セナの言う通り、どうして……！

何が彼らをそうさせ動かしているというの。

休む間もなく戦闘が続き映りだされるスクリーンを背景にして、『泥沼』という陳腐な劇が繰り広げられているんだと思った。しかし終わりが見通せない。

そして。

どれだけ訴えた所で、肝心のレイ達本人が居ないと話にならなかつた。

さくらに言っても。

「私に言ってもムダですわ。私はレイ様の仰る事が全てですもの……いい事を教えて差し上げる。四神鏡はすでに今。3枚を揃えてますのよ」

さくらはとんでもない事をサラリと言ってしまった。

「！」

「何ですって!?!」

「あと1枚。あとたったの……1枚なのですわ。ああ、4枚目が姿を現した瞬間。ついに……ついに、青龍が……!」

あはは、と笑いながらさくらは自らの言いように酔いしれる。ついでのように地震が起こった。

ゴト……ゴト……

さらに鼻につく笑いを披露するさくら。長く麗しい髪も何だか台なしだ。全てが下品に見えて仕方がない。

そんな事にも自覚がなくさくらは口元に手を当てて、オホホ……と上品そうに笑う。

「青龍ですわ。いまかいまかとお待ちのよう……そういえば、ご存知だったのかしら？」

ココですよ、青龍の眠る地は！」

私達には信じたくない事実ばかり。もういつそ慣れてしまえばどんなに楽か。

さくらの耳につく嘲笑がいつまでも私とセナを苦しめていく。もうやめて、うんざりだ。

とにかくレイに。
会いたかった。

「あはは……はははははは」

戦闘では、ヒナタがゴーレムに羽交い絞めにされ、カイトが助けに敵の背後にまわる。カイトは技を繰り出すが、どうやら度重なる技の連続使用でいつものキレがないように感じられた。疲労は残酷だ。ゆっくりと身体を蝕んでいく。

私達は、何とか弱い生き物なんだろうか。

どうすればいい。どうしたらいい。

教えて……！ 天神様……！

「は……」

愉快だったさくらの顔が急に引き締まった。スウツと、吊りあがっていた頬の筋肉が大人しく引つ込む。

……？ 何が起きた？ 「……」

さくらは黙ってしまっていた。代わりのように、強張った顔を下方へと下げる。

さくらの……。

さくらの、お腹から刃先が10センチほど突き出ていた。

「え……」

生の声を出せたのは私だけだった。驚きで何も出ない。

「さく……」
再び。でも誰も何の反応もな……い。

レイがさくらを刺している。

後ろから刀を。邪尾刀だった。勢いあつたか、思いきりにと……
一突き……だ。

一体いつの間に、そして。何故……？

レイとは相棒のようによく似合っている禍々しい邪尾刀からも、
さくらの体からも。血液は一滴も出てはいなかった。さくらは呆然
とする。それから。

穏やかな顔になった。

それも何故。

「レイ様……」

さくらのヒザはゆっくりと沈む。ヒザをついた後、斜めに傾けた
体は静止する。濡れたような髪は長く垂れ流して後ろに。背中
は反り気味に。刀が刺さったままで。後ろに居る攻撃者は、まず
はと挨拶をする。

「ご苦労。さくら。お前達の功績は高く評価しよう。お疲れだ」

刀を抜く。ズブリ……。

ただ刺してみましたの遊びのようだった。あまりにも無慈悲な。
忘れてはならないとの確認でもある。レイは……残酷な奴だっ
たじゃないか。

刀を抜かれたさくらの体はグラリと前に倒れかけ、やがて持ち直
して傷跡を確かめようとした。

しかしすぐに。今度はレイの『手』自らが、さくらの背中からズ
ブリと入れられた。

「ヒッ」

思わず短い悲鳴を上げた私は手で口を押さえて。何とかこみ上げてきた吐き気を我慢した。ぐちゃり、ぐちゃりと肉の中に手を入れてかき混ぜる、聞きたくもない耳障りな音が。

目を離せばいいのに凄まじい光景から神経が麻痺して拷問のように動けなくなった。

これが現実？ 嘘だ。

だって血は出ていないじゃないか。

「俺は嬉しいぞさくら。起きたら……」

と、レイはさくらの体から艶ある白く丸い物を掴み取り出した。それは、……卵？

まさか。

取り出されたさくらはドン、と軽く突き出される。ほんの軽く押しただけなのに、さくらは力を失いほぼ抜け殻だった。長い髪が前に垂れて表情が飲み込めない。さっき見せた穏やかな顔をしたままなのだろうか。

レイは知ってか知らずか満足に笑う。

「四神鏡が 4 枚、揃ったのだからな」

さらなる衝撃が私達を混沌へと導く。

「4 枚!？」

叫んだのは私だ。

さくらはやつとの事で息を吐けたくらいで、小さな声だったが話した。

「ずっと……疑問はございました。自分の体の事ですもの……人でもなく、鶉達のような造り物とも何かが違う……そう、何かが。異物が……私の中にある事を」

レイの手に握られたそれは、湿り光っている。生まれたての卵に似て。むいたゆで卵みたいに、ぐにぐにと弾力もある。

「最後の1枚が私の中に……この目で確かめるまでは僅かにですが

否定しておりました。申し訳ございません……」

頼りなく両の手を胸に。……泣いている？
俯いている。

「ずっとご存知だったのですね……レイ様、私は……」
顔を上げた。

泣いて……涙をツウと一筋ずつ流し、でも顔はとても。

優しかった。

「……おそばに居られて。幸せでした……」

さくらは倒れた。

「さく……」

私が声をかけようとした時だ。

もう一人の来客がスツと現れレイの隣につく。

何処から登場できたのか、彼女は。

ハルカさん。

倒れ顔をこちらに向けていたさくらは、ハルカさんを見ていた。

レイの隣にはハルカさん。さくらには、一番見たくもない光景^{もの}。私の知らないさくらの感情がさくらの中で蠢いて。でも出る言葉に嘘はないんだろつ。

「お幸せ……に……」

事切れる。

ハルカさんは眉をひそめ、レイに問う。

「四師衆が……死ぬ？」

レイは目を伏せ、答えた。

「俺が死ねと命を下せば、死ぬ。入れ物……さくらは用済みだ。それだけの事」

……！

私の全身がワナワナと震え出す。これがレイだった。あんまりだ。

冷たくて 冷たすぎる！

私の足が飛び出そうとするよりも先に、セナが飛び出していた。

「どこまで腐りきってやがんだ！ レイイイツ……！」

怒り狂ったセナが攻撃する。

セナは穏やかではなかった。今までに見た事のない、物凄く恐い鬼の形相をしていた。足を片方一步下げ、重心は前寄りに。引き構えた両手の中から渦巻く風の塊。

ビュオオオオ！

セナが気合いを込めて溜めた風は厳しい音を立てている。

「風穴^{かさあな}」！

セナの前に手は突き出され、奥で凝縮された風のエネルギーは敵と書いてレイに容赦なく向けられる。

風穴、とは、風の大砲。風エネルギーは弾丸のようにレイへ発射された。

「ムダだ……！」

微かにレイがそう言ったように聞こえた。

ドオオオオンッ……！！

レイとそばに居たハルカさんもろとも、白い煙で隠されていく。爆撃とともに。姿が完全に見えなくなっていた。

オオオオオオ……

残響音だけだ。頭にグワングワンとこもる、うるさい音。そして。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ。

「きゃああああッ！」

「伏せる！」

地面が唸りを上げ、私達は立てなくなった。頭を抱えて屈む。屈んでもダメだった。セナもそうだ、滅茶苦茶な方向にそれぞれ転がっていった。「セツ……」ナ、と呼びそうになって舌を噛みそうになる。もはや何もできない！

(助けて！)

地震が私達を襲う。ゴゴゴ。鳴り止まない止まらない。もう一度でも何度でも言う。

滅茶苦茶だ。

何処から響いてくるの。下なの上なのどっちなの。震源は 私は転がって上下が定まらない中、必死に何かにすがろうと手をバタバタとして宙をかいていた。

ココですよ、青龍の眠る地は。

さくらの声だ。蘇る。

酷くゾツとした。さくらがもうこの世にいないからじゃない。これは気配だ。私の中の危険信号が激しく瞬いて、点滅し警告している。

危険だ、回避せよ。

無理だ。足が地面に着かない。

何て事だ、地面を探さなければならぬなんて。

……

フワ。

体が宙に浮いていた。「……………!?!?」

重力とは、違う力を感じたのだ。何か私に絡みつき、引っ張る

力を。

「…………！」

白い煙と鋭い風が錯綜している中、暗い視界は視界のままだったが、遠ざかっていくように感じられた。段々と、離れていく。

私の体の方が離れていく？

ココは暗い部屋だったんじゃないかった？

やはり天井に穴でも開いていたんだろうか。そしてそこから外へ？

「勇気……こっち向け」

セナの声が。私のすぐ近くで？

おかしいなと思って振り返ってみたらだ。見た途端ギョツと目の玉がひっくり返りそうになった。だってだって！

「セ、セナ？」

私の体を抱っこ……格好からしてタイ ニックの男女みたいなポーズになっているんだけれど。私を抱えていた。

空の中でだ。ココは地の上じゃない、空中だ。

「いい！？」

セナに驚いた訳ではなく。セナも、肩を掴まれて持ち上げられていたのだった。

巨大な怪獣みたいな鳥に。

「くええええ！」

奇声が聞こえる。何なんだ！？

「勇気！ セナ！ 大丈夫か」

もっと遠くから親しげな声が。こちらからは声の主が確認しにくい。あの声と面影は。

「カイトお！」

少しだけ覗かせた頭は、確かにカイトだった。

「全員無事だ！ ちょっと負傷者が出てるけど、皆生きてる……ここ一つのおかげだ」

頑張ってカイトが居るあたりを細めた目で見上げた。鳥の背に乗っているカイト……他メンバーも居るらしく、声も聞こえて人が何人か同じ鳥の背に乗っているんだとわかった。

「ギャオース！」

鳥は私とセナに挨拶しているのか上機嫌なのがわからない。薄い水色の皮膚をしていて、怪獣と言ったが羽のついたドラゴンに近いんじゃないか。長い尾っぽ、少し緑を混ぜたたてがみ。太めの前足で、セナを掴んでいた。

どうなってるんだああ！？

すると、カイトの隣からヒョッコリと顔を出した人物が居た。小柄なその子。

「お姉ちゃん。久しぶりだねー」

と、明るく、日なたの匂いでもしてきそうなほど素朴で温かそうな男の子。特徴であるクルリとした巻き毛の前髪。そのオーバーオールを着た子供とは。

「チ、チリンくん！？」

「やあー」

ニコニコと笑っていた。どうしてココに！？

「もしかしてこの怪獣……」

チリンくんが簡単に説明してくれた。

「手なずけてきたんだー。僕らに協力してくれるよー。いよいよだからって、助けにきたんだ僕ー。お役立ちー！」

と、片手でピースサインを作っていた。離れている私に聞こえるようにそれを言うつとさらに。

「お姉ちゃん、崖から落ちたでしょー」

と言ってくる。え、と私はマバタキを繰り返していた。何でこの子がそれを？

「地下に落ちて、上手い具合に風神の居る場所へと行けたみたいだけどー。気をつけてー。それはねー」

と、そこまで言いかけた時だった。

グガアアアアアアアア……

地表に轟く雷鳴のような叫び。金切りだった要素も含まれ、背筋を凍らせる。

空中に浮かぶ私達からでは下の四方に見える景色。火の島。表面上では変わったものは特にない。中央に山ができ、囲むように岩や小山が並んでいる。

一見、無人島だった。建物らしい建物がなく、人の気配は感じられない。人なんていやしないだろうと思う。

ゴゴゴ……

地鳴りは止まらない。島を含む世界全体が揺れているよう。火山ではないと聞いていた山は。

「！」

「山が……！」

山の中から突如それは現れる。中から、内からだ。びっくり箱から飛び出した仕掛けなんかを思い出す。ピョーン、と山の中央を崩し『生まれた』生き物。

それが。「せ……」

私は今度こそ夢だと思った。思いたかった。だって。

グルルルル……

飛び出してきたのは。

青龍
！

第51話（四神鏡、揃う）（後書き）

【あとがき】

火の鳥と間違えそう。

ブログ第51話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-122.html>

ありがとうございました。

第52話（青龍復活）

私とセナを迎えにチリンくんは、空竜に乗ってやって来た。曇天の空の中で大きな羽を広げてあおぎ、バツサバツサと豪快な音を立てている。薄い水色で触るとぼこぼこしている皮膚をした体は重くはないのかなと思ったりした。空竜、スカイラール。チリンくんが名づけたのかそう呼ばれていた。

胴体から生えた太くたくましい前足でガツチリと肩を掴まれているセナ。そしてそんなセナに抱きかかえられていた私、という構図。いつまでもそんな態勢のままにいる訳にもいかないので、私とセナは彼の羽の生えた背に引き上げられた。両翼の間でカイト、マフィア、ヒナタ、ゲイン、蛍に紫と。おなじみ懐かしいメンバーが揃って私達を出迎えてくれた。

「勇気！ セナ、無事だったか！」

と、カイトが嬉しそうに身を乗り出しセナの肩をバンバンと叩いた。私を見る目も喜びで溢れて。

マフィアも。他のメンバーも、だった。ホッと安堵感に浸って温かい空気に包まれる。「おかえりい〜」「セナ、おかえりなさい」

「ああ。ただいまだ。ありがとう」

しばらくはそんな『ただいま』『おかえり』『コールの嵐』だったのだけれどね。

「……………」

急に嫌な沈黙時間が流れた。

当たり前なんだけれど。

だって今。

「ひえええ……………」

なんてノンキな声を上げるしかできない私。だって　だってだ
って！

「青龍だ！」

セナが叫んでくれた。そうなんです。

あああ、受け入れたくないけれどこれが現実。ついに。

青龍が地上に現れてしまったんだった。

青龍……見たままからそう呼ばれているのだろう。全体的に青い
体で熱気なのか、その身からは湯気なのかホコリなのかわからな
いが白くボンヤリと立っていた。もしココに造建築物があったりし
たら物の見事に破壊されまくってしまっただろう……。『青龍』は、
ココ、火の島のちょうど中心にある山の頂上の土を溶かし、中から
弾かれたように飛び出してきたように見えた。

するすると蛇のように穴から長い体は伸びてきて、先に出てきた
体は空を旋回する。

一度伸びてみた体は縮み、やがて時間をかけて全貌を明らかにし
た。

青く艶光りする体躯。長い体に沿って攻撃から防御する役目のウ
ロコが規則正しく幾何模様に描き並ぶ。

顔がよく見えない。体の方に目が行ってしまっな。

しばらく呆然と皆で見続けるしかなかった。

「青龍……」

風の囁きと混じった声を出す私。ゲインも後ろでぼやいた。

「奴が……」

「レイが……」

セナがレイと名を出した事で、チリンくんが皆にもわかるように
説明してくれた。

「レイが、卵みたいなの形状のものを取り出したんだろう？ ……中
身は、ご存知の通り『四神鏡』の一部だ。これが4枚集まると、四
神獣は復活する訳で。レイは始めから青龍を呼び出すつもりだった
んだね。だからこの地で鏡を解放した……応えて青龍は、無邪気に

も復活してしまつたみたいだけれど」

「解放……された」

「そう。お姉ちゃん。レイが卵みたいなのを割った事によって、外気に晒された4枚の鏡は己の力が完全体になつたんだ。真の力は晒されて初めて効果を発揮する……青龍は蘇つた」

チリンくんの真剣な顔が怖かった。子供だからか、余計にだ。悪夢でも見ている恐怖がひしひしと伝わってくる。

我、鏡に呼ばれ。復活なり

「鏡は何処……」

またまた風に混じる。泣きそうな声音でもあった。

鏡の行方もレイ達の行方もわからない。鏡は、レイが所有しているのか。それとも混乱の中で失せたのか。

鏡をもし見つけられたなら、壊してしまえばとか……色んな考えがグルグルと回る。

「鏡はきつと何処かにはある。だけど復活してしまつた後では、見つけた所でどうなんだという疑問がある。闇雲に探している時間も惜しいよ。それよりもだ」

チリンくんの厳しい意見。今、私達にできる事って。

「お姉ちゃん。しっかりと見て」

チリンくんが言った。私に。

「あれが青龍なんだ」

「……」

青龍は動いている。空の中を自由に。泳いで。楽しそう……に。

何百年と過ごしてきた窮屈が時を経て光を浴びて。人ではないけれど本人にとつたら悦びこの上ない事なんだろう。それはわかる……わかりたいけれど、でもそれは。

許されない事なんだ。

「復活したって……嘘でしょう……？」

目の端に涙が溜まってきていた。この先どうなっていくのかが見当もつかない不安と恐れと八方塞がり……絶望感。私は段々と頭ではなく身に染みてきていた。おかげで全身は震えてしまう。

「落ち着け勇氣。落ち着くんだけ……それよりマフィア、皆に。聞きたい事が幾つかあるんだけど、まずアジャラとパパラはどうした？ 何処行った？ こんな時に」

と、セナは尋ねた。

今のこの現場に、彼女達は居ない。セナは捕まっていた時に私達の様子でも見ていてくれていたんだろうか。だとしたら私だけではなく、セナも知っているの？ アジャラとパパラは。

「それが消えちまったんだよ。勇氣とマフィア、お前達を遠くから呼んでも来ないから、おかしいなと思って捜しに行ってみたら。マフィアだけが倒れてて」

とカイトがマフィアの方を横目に見やる。

マフィアは私が穴の中へと引きずられていくのを阻止しようと追いかけた時に。背後からの『攻撃者』の杖によって背中を貫かれた。反動で手を離されてしまった私はそのまま穴の中へと落ちたみたいだったけれど、負傷したマフィアはどうなってしまったのか。

マフィアは今、服の下に包帯を巻いた格好になっている。

「応急的に僕が持ってた聖水を飲んでもらったんだ。少しは回復できたと思う。でも無茶はしないで。完全に治った訳じゃないからさと、チリンくんはウインクした。うーん、可愛い。」

マフィアはどうやら予断は許さず安静にせよという事ね。できるんだろうかこれから。自信はないけれど。

それにしてもだ。マフィアを襲った 2人。

アジャラとパパラ。

信じられない。時間が経った今でさえも。彼女らは、何なのか。天神様の使いじゃなかったの？ それとも偽者？

私は皆に、自分が確かに見たものを伝えた。予想通り、皆は私と同じ反応で信じられないと大騒ぎしている。

「信じすぎたんだ。何もかも」

カイトは言った。続けた。空を仰向いて。

「天神の所へ行こう。奴が全ての鍵を握っていると確信した。やはりな」

天神様の事を呼び捨てて、さらに天神様の事を奴呼ばわりした。それがカイトの確信、というよりは怒り具合を表していた。

やはりな……奴が。

全ての。

「皆、聞いて」

チリンくんが私達の方に向く。とても意味ありげだった。

「今、スカイラールはこの先の“魔窟の海”に向かっていつてもらっている。そう、その“光の輪”の内側に天神様の居る神殿があるんだ。僕らはそこへ行く。行って、その目で確かめてほしい。だけど」

いきなり元気を失くすチリンくんだった。どうしたんだろう？

思えば。チリンくんだった。

怪しすぎる存在でもある。まるで何もかもがお見通しのような。

聞いてみた方がいいのだろうか。それも何だか怖い。

私が戸惑っていると、ゲインが声を上げた。

「危ねえ！」

チリンくんの話は中断される。ゲインの力強い声とともに私達はゲインに押し倒されていった。ドミノ倒しの如く次々と順番になぎ

倒されて。

「きゃあああ！」

「うわ！」

悲鳴が飛ぶ。間一髪だった。

遠くで旋回してこちらには関心がないと思われていた青龍は、私達を見て追いかけてきたのか、すぐそこまで来ていたではないか。何と後ろから黄色い息を吐いていた。

一発目は届かなかったようで、私達はその臭そうな息を直接浴びる事はなかった。伏せられたおかげで、空気に混じった息からも回避できた。

しかし次発目からはわからない。こうしてもいられない。

「あの息は猛毒だ。息は止めて伏せてて！」

チリンくんだけが立ち上がりうとしていた。一体何を！？

スカイラールの背を後方へと伝っていく。両横から受ける風圧と戦いながら、確実に追いかけてくる青龍へと向かって行った。

「何をするの、チリンくん！」

私が叫んでも風のせいかわかっているか聞いていなさそうだった。私達は事の成り行きを見守るだけで身動きが全くできない。

「ハアアア……」

チリンくんの小さな体に似つかわしくないほど、しわがれて溜まった声を出した。

「食らえっ！」

気合いのようなものを込めていたのだろうか。視界が私からではハッキリしていないのが悔しいけれど、溜めた気合いを青龍に向けてぶっ放したらしい。放った一撃は、閃光と一緒に青龍へ襲いかかった。

ドオオオオンッ……！！

光神の光が見られたら、これとソックリなんじゃないだろうかと思っただ。一点から伸びる無数の光の筋が世界の隅々へと鋭く射抜く強烈さで走り抜けていく。爆音と、爆撃、爆風。目は眩しさと風当

たりで痛くてとても開けてはいられない。

少し時が経って辺りは治まったかと思われた頃合に見えた光景は、思わぬ反撃を食らい数十メートルは後退していった青龍と、手前には力を持って疲れたように片ヒザを立てしゃがんでいるチリンくんの姿があった。

「だ、大丈夫？ しつかり……」

私が慌てて駆け寄ろうとジタバタと手足を動かしながら這う。「へへ……ちよつとバテた……」

追いついた時にチリンくんは息を整えながら弱々しく声を漏らした。

チリンくんの体を支えたら、チリンくんは私の手をとる。何かを伝えようとして。

何だろう？

「お姉ちゃん、本当に……倒さな……きやいけないの……は……」
言葉を待っていた。すると。「うう！」

突然に胸のあたりを押さえて苦しみ出したチリンくんは 体が薄くなり始めた。「！」

そして消える。

私の手元になった。チリンくんはもう居ない。何処にも。空気を掴み私は叫んだ。

「チリンくーーん！」

……。

空に大きく響いた後はそれも消える。

残されたのは中途半端な道しるべだった。チリンくんは最後まで、何かを伝えたかったのだ。だけれど。

気持ち悪さしか残らない。

「一体何者なんだ奴も……」

セナが呟く。

私達に示された道は本当に正しいのだろうか。
思えば私達……いや『私』は。私という人間は、見えない何かに
導かれてきただけなのかもしれない。
信じたものは何だったのだろうか。

チリンくんのおかげで青龍を突き放せた私達一行は、チリンくん
が示していた“光の輪”の中へと飛び込む事に。
ずっと、目下に広がる海原の上をスカイラールに乗って方向任せ
て飛んでいた。何処から何処までが言われている“魔窟の海”とい
う所なんだろう。もうすでに踏み込んでいただろうけれど。

「なるほど、“光の輪”か……」

カイトが感心した声を出した。私達はその情景を見る。

光の輪……輪が、海面から空へと浮かんでいる。とても大きな『
輪』。輪と海面の間には、光でできたカーテンだ。包まれてまるで
中のものを護っているかのように輝いている。黄色かと思えば緑に
緑かと思えば意外な赤に。定まった色調を持たず、揺れ動いている
光の壁。とても美しく、果たしてこれは通り抜ける事が可能なのか
を考えていた。

しかし考えていてもスカイラールは気にする事もなく。

一秒と待たずに、未知なる懐へと自身は飛び込んでいった。即ち、
背に乗った私達も同じくして。「……！」

全員、カーテンをくぐった瞬間には息を止め身を縮こませ固まっ
ていた。

何も起こらなかった？ と目を開けて確認するまで、続く。

「どうやら無事みたいだな……全くよう、心臓が幾つあっても足ん
ねえぞ」

カイトの嘆きには皆も同感しているに違いなかった。

安心する隙や暇がない。

光の輪を通り抜けると、別世界だった。

温度が違う。とても暖かく迎えてくれる。一羽の小さな鳥が横切つて。鳥は、休まる憩いの場を探して羽ばたき飛んでいくんだ。

鳥があつた。

孤立しているその鳥は、地となった上に木を育み緑をのせている。一羽だけではない鳥達は、島を中心に弧や円を大きく描きながら遊びか餌を求めて飛んでいる。

鳥は浮かんでいた。

海水に沈んではない。浮遊しているのだ。だから、『孤立』している」と直感で言ってしまった。

「あれが……天神様の居る……」

マフィアだけでなく、全員が心を掴まれていた。一度捕えられたら離れられず、私達はこうしている時にも目前へと近づいてくる島の存在に圧倒されてしまったままだった。

なんて寂しいんだろう。そう感じる。見ているだけなのにと。

誰もがそう思っているんじゃないかという妙な確信が沸いていた。鳥という生物や木という植物が共存しているというのに。何故か鳥だけが、ただ一つのような気がして。

孤独感……それはただの儂き想像というやつなんだろうか。

「キイイイ……」

スカイラールは私達を気遣うように島へ降り立ってくれた。

着いた所は、草木のない少し空き地となった場。空からは何処を見渡し探しても開けた場所を見つけられそうになかったけれど、はやる気持ちを抑えながらもスカイラールは我慢強く懸命に探してくれて。おかげで私達は地に足を無事着く事ができた。

ココまで案内してくれたスカイラールと、消えて行方知れずの謎の少年チリンくん……感謝した。

「さてと……」

一番先に降りたカイトが、腰に手を当てて肩を回し体をほぐしていた。続いてセナ、ゲイン、私やヒナタもと。マフィアは安静にという事で紫くんに補助されながら。蛭は先に降りて様子を見守りながら。

「ありがとう。紫くん、蛭……スカイラルも」
「ピイ」

と、甲高い返事をしたスカイラル。マフィアが体をナデナデと撫でると、とても嬉しそうな表情をマフィアに見せていた。

降り立ってお礼を言ってマフィアは、準備運動や辺りを偵察し始めた私達とは違って。一人鬱蒼うつそうと茂った森の方へと歩く。木に触れて、対話を試みようとしていた。しかし上手く会話する事ができなかったのか、諦めてマフィアは私達と合流した。

辺りの様子を観察し終わった後、私達は集まってこれからに悩む。今に至るまでずつと慎重だったカイトは、真剣に私達に言い聞かせた。

「油断はするな。何が待ち受けているのかさっぱり予想がつかない。誰を信じていいのかも。天神も……仲間さえも」

カイトだけじゃない。私もだった。仲間を疑いたくはないという気持ちと、ひよつとしたら……という気持ちと。いつ何処でどうなってひっくり返るかわからないんだ。カイトみたいに慎重であるべきだ。私はそう思う。だからだ。

私はキツと顔を強張らせ、皆に提案を持ちかけた。

「皆、“七神鏡”は持つてる？ 出して」

セナは指輪を着けた手の甲を。マフィアは、服の奥に垂れ提げていたペンダントを。

カイト、ヒナタ、ゲインは手荷物の中から。それぞれが前に差し出し見せてくれた。私も右手の中指にはめていた、セナからもらった指輪を見せる。

皆、鏡の大きさや形状はまちまちだったけれど、生命のような輝

きは甲乙なく純粹に見えた。紫、緑、青、黄、茶。色具合が反射の角度によって変わる。こうやって一ヶ所に集めてみた機会は初めてだったはずなんだけれど妙に懐かしいと思った。

ああそうか……遺跡で見た、鏡張りの部屋。あれのせいね……。

「私は……」

右手を私は突き出した。

「私の力と……皆の力を、信じている」

導かれて皆も。鏡を持つ手を、私の手の上に重ねていつてくれた。何を持たない蛍や紫くんの手も。高く積まれていつて、私の一番下になった手に重みが増していく。

それが皆の『力』なんだと……思った。「エイエイオオッ！」

私が叫ぶと、皆も叫んだ。上手く重なって一つになって。

「エイエイ……オオ！」

心に刻み込むんだ。これまでの事も。私は私。決して見失わないように。信じるのは。

私と、ココに居る皆だという事を。

私達は私達の『誓い』を終えると、空から目星を予めつけていた白い建物に向かって歩き出していた。白い建物とは。

頭だけしか見えなかった、装飾のつけられた壁やテラスの……そう、恐らくは『神殿』という名前がふさわしい造形の建築物。

私は見覚えがあった。それはすぐにわかった。私は知っているのだ。ココは。

かつて“時の門番”で見た天神様の神殿。セナも知っているはずだった。

森の中を突き進んで行くと、記憶通りの建物が現れる。

逃げもせず待っていてくれたのね、私達がココに辿り着くまでと。そんな気持ちだった。

やっと来られた。長い日を過ごして。

さあ来たのよ……。

天神様に会わせて。

私の期待に応えましてだった。

私達が無言に近いだんまりで森の中を歩いていたらだ。

誰かが、正面からこちらへとやって来る。誰かとはすぐにわかった。

そして……それを言うのが自然のように口を開いて出迎える。

「ご苦労様です。救世主、そして七神よ。待っていた……揃う、この日を……」

少し悲しみが浮いていたその人物。悲しみは、当然……だって七神は揃ってはいない。七神のうち、2人は敵なんだ。悲しい事実が、言葉の裏に隠されていて。さらに青龍が蘇ったという事も、私達を気ままずくさせるんだ。

「天神の神子様……」

私と呼んで沈黙を破る。言いながら、カイトの言葉が重くのしかかってきた。

油断するな。

何処までを尋ねたらいいのだろう。少し混乱気味な頭では、上手い言葉も発音もできそうにない。

神子様は薄めの衣を纏い、それは地面で引きずりそうなくらいなまでの長さをしていた。

「本当に苦勞をかけましたね。よくぞ無事で……私の不甲斐なさを、どうかお許し在らしめん事を」

乞うような目で私を見ていた。労わるようにも……そして憔悴しきったようにもと。

とても嘘をついているとは思えなかった。

神子様は続けて私に告げた。

「救世主、勇氣」

「はい」

「青龍が、復活しました。今頃は世界中を飛び回り、食欲を満たすため人などを喰い散らかしに行っている事でしょう。もはや破壊、破滅。種という種は喰い滅ぼされ、吐かれた息の猛毒は植物を枯らし根を絶やし。生を失った大地は赤く色を変え水を毒と変え、空にも影響し青い空も赤く。やがて世界は終わりとともに青龍自らも身を滅ぼす事となるでしょう」

神子様の語りは坦々と私の胸の内をえぐっていく。

事態は連鎖する。皮肉だ。青龍が世界の秩序を乱した代償は、青龍自らが払うに返ってくるだなんてね。

皆が滅ぶ。

とんでもない事だった。

「教えて下さい！ 七神は……揃っていないなくても。望みはきつとあるんです！ どうか……どうか、天神様に会わせて下さい！ 私は……私は……」

「真実が知りたいんです！」

何故、アジャラとパパラが裏切ったのか。疑いたくなかったけれど突然に訪れたどうしようもない現実。ああ私は夢か幻と間違えたんだと何度も思ったかった。

チリンくん。あなたは言い残して消えた。あなたは言った。その目で確かめるんだと。そして 本当に倒さなきゃいけないのは、

と。

天神様が全てを知っている。

私の必死の訴えに神子様は難い顔で指示をした。

「わかりました勇氣。では……」

チラ、と私の後ろで控えている他の皆を見て、また私へと視線を戻した。

「あなた一人だけ来なさい」

！

私は驚いてゴクリと唾を飲む。すぐにセナが前に出てきて言った。

「ダメだ。一人では行かせられない」と。

カイトやマフィアも同じ返事をする。

「俺かセナがつく。勇氣一人では行かせられない」

「同感よ。一人にはさせないわ」

私は凄く嬉しくて涙が出てきそうになった。神子様は困った渋い顔を見ると、また乞うようにもう一度言う。

「天神様にお会いできるのは選ばれた者のみ。そして一人ずつだ。

特例はない。わかってほしい……許せ」

悲痛だった。私はいたたまれなくなつて……決心する。

「わかりました」

どよ、と動揺しどよめきだつ皆を尻目に、それでも言った事を変えるつもりはなかった。「何でだ！」……セナがグイと私の腕を強引に引つ張る。

セナの顔を見上げた。凄く悲しい目をセナはしていて、私は危うく心が揺らぎそうになった。

でも覆さない。曲げない。

「私一人でも大丈夫だよ。決まりなんだもの……しよーがないじゃん！」

と、私はニコツと笑っていた。

バカだって思われたっていいくらい。笑顔で言った。

「では。ついて来なさい……私の後に」

神子様は歩き出していく。私もすぐに追おうと、歩き出そうとした。

「勇気！」

マフィアが私を呼んで制する。

けれど私は笑ってマフィアに言い訳のように言うんだ。

「ごめんマフィア。行かせて。大丈夫だしさ！」

ついでに腰の剣もピールしながら。マフィアは腰に提げてある“光頭刃”を見てハツとして黙ってしまった。

もう誰も何も言わなかった。再び私がニッコリと微笑む。

「だあーいじょおぶだつてば！ 私最強！」

クルツと回転して拳手までしてみせた。「じゃね！」手を振って小走り出す。

振り返らなかつたからわからなかつたけれど、皆はきつと私が無理しているのなんてバレバレだったと思う。

とても怖い……怖いんだよ。でもね。

私、覚悟はできているつもりだ。

……

勇気が去った後。

ぬるい風が地面をさらい、静けさの中で森林はサワサワと騒ぎ自然音楽を奏で出す。

セナは、「じゃ……俺、行ってくるわ」と背伸びをし出していた。

「ああ」

「よろしくね。セナ。あなたも充分気をつけて」

……。

カイトとマフィアが知っていた事のような返事をしていると、他

のメンバーは啞然として3人を見つめた。

「何じゃお主ら。始めからセナ殿はそのつもりだったのか。やけにアツサリと行かせたなと呆れたものだったが」

と、ゲインは呆れたポーズ、と両手を高く上に上げていた。すると後ろから。

「油断するなという誓いは何だったんだと思っちゃったよ。なあんだ」

ヒナタも腰に手を当ててため息をつく。吹き出したのは虫だった。「ま、ね。勇気のバカはたぶん知らないだろうけど。セナがコツソリついてくるなんてね」

紫も微かに笑っていた。

「ほらほら。サツサと行きな。俺らのはあの空竜とココで待機してる。見失っちゃまうぞ」

ゲインに言われ、セナは「ああ」と素早く身で空を切り勇気の後を追いかけていった。勇気、今行く、一人にはさせない……セナはそう思っていた。誰よりも強く。

自分の命に代えてでも。

セナも……覚悟ができていた。

……

勇気と神子が神殿内に入って行くのを木の陰で見送るセナ。2人が古びた白い建物の奥へと入って行き姿を消した後。セナは寸分で追いかけたつもりだった。

見失うなど微塵にも思っではいなかった。しかしだ。「あ、れ……?」

2人は居ない。何処かへと消えてしまっていた。

何処を伝っていても長く続きそうな廊下が十字方向にある。廊

下の壁に沿って備えつけられた燭台があり、灯されたロウソクの明かりで見える範囲の何処を捜しても2人の姿はない。捉えようのない奇妙さがセナを包む。

道があるのに、道を失った感覚に襲われていた。自分はどっちに行けばいいのだと。

「くそっ……」

舌打ちをする。しても何にもならない事にも腹を立てた。

こんな事をしている場合ではないと焦る。ココから、右か左か前なのか。道の一つを選択しなければならなかった。

「こつちか？ ……」

仕方がなく、右の道を。廊下を。とにかく時間が惜しかった。

セナは走る。音をできるだけ立てないようにと石造りの壁と壁の間を、そして冷やされた空気を突き抜けて行った。

先は暗くて見えない、果てしなく続く廊下なのではと感じるほど長く。何処までも何処までも。走り続けてやがて飽きが来ようとした矢先に、廊下の突き当たりが出現した。

右にドアがある。草花の装飾が施された茶色い木製のドア。

ドアはノブをゆっくり捻ると簡単に開いた。セナは易々と部屋に入れた事にも違和を感じた。神殿に来てから、奇妙さは依然として消えずむしろ増していく……セナはそれに耐えるのにも神経を使っていた。

開けた部屋の中は暗室だが、ドアから差し込んでいた光のおかげで中の様子が窺えそうである。

「な……」

つい声を小さくも上げてしまった。

セナは立ち竦む。しばらく考えていた。本当は、大声を上げてもよかった。

何故ならば。

部屋の中に居たのは、アジャラとパパラ 2人。

ただし、両手足を頑丈そうな鉄鎖で繋がれ気を失い、全身がダラ

りと人形のように壁に背をもたれさせていた。

セナの中で奇妙さはピークを迎える。電撃を浴びたような衝撃に痺れ全身が麻痺し動けなくなる。

敵か味方が不明だった2人に答えを求めてもムダな事は承知している。しかし聞かずにはいられなかった。「何故、何故だ？ 何故…… 2人はいつから」

何故を繰り返し、焦りはセナの心臓を早鐘のように打ち出した。危険だ。結論が出た。セナはバツ！ っと勢いよく誰も居ないはずの自分の背後を振り返った。

「勇気ツツ……！」

叫びが、廊下の空中を、矢を真似て突き抜け鋭く放たれる。

一方、勇気は。

神子に連れられて。神子の背中しか見えない事に退屈しながら足音の響きがよい廊下をずっと歩いている。あまり陽気になれる訳はないので、勇気は重いムードが段々と嫌になってきていた。

(……ダメだ……油断しちゃ……)
いつでも腰の剣をとれるよう、心構えは怠らなかった。今自分の前に居る神子にだって、隙を見せないように配慮する。敵とも味方とも、確かめられるまでは信用ならなかった。

(ん……?)

神子の進む先、突き当たって正面に。ドアがあった。
飾り気のない、木でこしらえただけの粗末なドアだった。

神子がドアを開ける。

部屋だとは思われる。明かりが点き出していた。壁面の燭台に立てられていたロウソクに勝手に火が点っていく。ドアの方から奥へ

とひとりでにポツポツと。部屋は最初は暗かったのだが、少しずつ視界が開けていった。

そうやって足元から天井まで見渡せたのだが、かなり広い部屋だったらしく、奥まった所は闇の吹き溜まりになっていて見えてはいなかった。

神子が入り、後ろから勇氣。ドアは自動で閉まってしまい、神子は気にせず奥へと向かった。勇氣も無論、神子の後について……顔を上げ真っ直ぐ前を見た。

奥では、何かが輝いていた。青い。

目を凝らしてみても、青いそれ。

近づくと正体は明らかになっていった。クリスタル……氷の結晶。勇氣の背丈ほどの大きさが、目の前に現れていった。「な……」

徐々に驚きは増していく。何から言えばいいのかを迷っていた。

勇氣はこれと同じ物を思い浮かべていた。ハルカ　レイの闇の魔法で閉じ込められていたクリスタル。その塊自らが発光し青く、中の者は腐る事はなく時は存在するが生身は保存され　中の者は

人が入っていた。

長く、床に悠々と到達している白い髪。アゴの尖った細い顔。まつ毛の、直線に近くシャープに伸びたそれは閉じられた両の目の代わりに目立って。薄いけれどキリリと引き締まり紫に見えた口唇。

鼻はスツと筋が通って美しく高く、意志の強さをと眉は描いたように形作られ、広く聞き取れやすそうな大きな耳を持つ。軽装に施された戦闘服仕立てともみれる中華式の服装。醸し出す気品とは相性がよいだろう。

勇氣は、下手に触ると火傷をしてしまうと思ひ込んだ。それほど、鬼気迫る圧迫感で支配されていたのだった。

もしかこの方が。

勇氣は震える声を出すのが精一杯だった。

「こ、この方……が？」

名前を口にするのに抵抗が恐れがあった。

天神。

しかし勇気は疑問に思う。何故

「どうしてこんなお姿に……？」

と、言いかけた時だった。

ドンと、背中を押されて前につんのめった。「わっ」

2歩3歩……と、危うく転びそうになってどうにかとどまる。

慌てて振り返ると、居たのは神子だった。いつの間にか勇気の隣から後ろへ。勇気はクリスタルに夢中で気がつかなかった。

「み、神子さま……？」

その時に。

神子の表情は一変した。

口がニマリと歪み吊り上って、声を隙間から漏らして面白く笑い出した。誰もが気持ち悪くなるほどの。「うふふふ」

ドアが完全に閉まり閉鎖と化した部屋の隅々にまで行き通る音で、神子はずっと笑い続けていた。

「くくく。ははははは。驚いてる驚いてる。いいよお、その顔。待ってましたあ」

何がそんなに楽しいのかが勇気にはわからなかった。理解はできないが、不快にはなる。そもそも勇気には、わかる事の方が少なかったのだが。

神子は全くと喋っていいほど違うキャラクターを演じ、潤んでいた尻手を手でなぞった。

「まだわかんないのお。ノンキっていうかあ、超鈍感」
勇気の胸中を巡る

違う。神子じゃない。

威厳さも、真剣さも。これまでに見てきた悲愴も、何もかもが。

一瞬で消されてしまっていた。

「あなたは誰なの」

睨んで、相手を見据えた勇氣。腰の剣にも手を近づける。

緊迫し喉を鳴らす余裕を与えない時間は過ぎる。顔と姿形が神子
のままです別人だった相手は、観念ではなく仕方がなさそうにため息
をついた。

神子のはのんびりと変身していった。加工されたスローモーション。
脳に穏やかな刺激を与えあくびが出そうなほどゆったりとした時間
で。

神子が……空間を捻じ曲げたように姿を変えた後。

勇氣は声を失った。

《第53話へ続く》

第52話（青龍復活）（後書き）

【あとがき】

字数が多い……ああごめんなさい。

ブログ第52話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-123.html>

ありがとうございました。

第53話（割れた心）

終わりは始まり。そんな言葉を何処かで耳にした記憶がある。

私が最後、本当の意味を知りたいと渴望し、その『真実』を手に入れた時。何が待ち受けていようと、何とかなるはずさという軽い気持ちは簡単にどうにかなるものではない。

私は受け入れなければならぬんだ。目の前に起こった、起こる事を、全部。

自分の都合のいい事にしてしまわないで。
しっかりと見つめて。

誰かが言っていたでしょう？

『これは、ゲームなんかじゃない』と……。

「私……」

凍てついた霧^{ムト}気が流れた。知らない所でピシッ、と。ヒビ割れたような音がする。

私をこの場へと連れてきた天神の神子様は、私を天神様に会わせてくれた。

天神様が閉じ込められているクリスタルの檻。眠っているのか、死んでいるのか……？ それを覗き込んで確かめる前に、事態は急変する。

私の前で神子様は変貌していったのだ。

道化……に？ いや、違う。

ぐにやりと自身に触れている空間をも巻き込んで、すっかりと見た目を変えてしまい私を震撼させていった、その姿。その形。

私は対面する。私と。そう……。

私なのだ。

「どうして……？」

頭の中がパニックだ。完全に呆けてしまっている。

力を失い口をだらしなくポカンと開け、目が乾ききってしまいそうなほどマバタキを忘れて見入っている私を、『私』は嘲笑っていた。「あはははは、そうよ、『勇氣』」大口を開けて楽しそうに。

私が着ているのと同じ制服、同じ靴下に同じ靴。何と腰の短剣まで同じだった。そっくりだ。しかし“光頭刃”だけは持つてはいない。

「夢の中で会ったでしょ……忘れちゃってんの？」

呆れた、と肩を竦ませ両の手の平を広げた。夢……って、まさかそんな。

私が自分の殻に閉じこもってしまった時に聞いていた声。強引ともとれた手口。ハルカさんと対面したり、レイとハルカさんの過去へ見に行ってみたり……あの時は、これは夢なんだから。私は誘われ見たものを素直に受けて多少、無理矢理と思いつつも。いつの間にもやらそれが真実なんだと信じ決め込んでいた。

私は、思い込んでいたにすぎない。

「全ての始まりは……鏡よ、勇氣。あなたが遺跡で真つ2つにした鏡 “透心鏡”」

新しい鏡の名前を聞いた。何だった？ “透心鏡”？ ……何だそれ。

もう一人の『私』は、目の前を行ったり来たりしながら教えてくれる。

「人の奥底に隠された心を映し出す鏡だった……なのに、あの日。鏡は2つに割れてしまつ。それが始まり。まるでこう言つと宇宙のビッグバンみたいね。ふふ」

クス、クスと漏らす笑い声がよく辺りに響いている。私は黙つて

いた。『私』は私の方をたまに見るけれど、すぐに何処か違う所を見つめている。

「薄々感づいてたでしょ？ やけにこの世界は“鏡”が多いなあ、つてさ。ヒントを与えていたつもりだったのに」

やれやれ仕方がないと肩を上下に揺らし素振りを見せる。

「まあいいや……どうでも。この世界も、どの世界も。滅茶苦茶になっちゃえばいいのよ……勇氣、あんたココに来る前にそう思ってたんでしょ？ 皆、自分勝手さあ……人に嫌な事を押しつけたり、苛めたり、罵ったり……だったらさあ。私も、自分勝手でいいよね？」

と、『私』の目が光る。とても力強く、不気味な視線だったために私の背筋は冷えてしまった。

「壊してやる。どの世界も。まずはこちらの世界から。青龍を使つて……」

興奮してくる胸の内を手で押さえ込んで息を弾ませた。

「破壊してやる」

意志がこもる。とても強い意志の塊。

何か言わないと、と思つて即座に私は反論に出た。

「な、何言つてるの！ 世界を壊したいなんてもう思つてないわ！ ココにも私の居た世界にも皆は生きていて、ただ平和に暮らしている。た、確かに前は、クラスメイトに苛められたり……お兄ちゃんの彼女さんに別居を勧められたりして嫌な事が続いていたけど。でももうそんなのとつくにどうでもよくなつてる。今の私は、誰も恨んでなんかいないのよ！」

一歩前に出て吠える私を、『私』は冷ややかに見つめて。

やがて片手を挙げてパチンと指を鳴らした。

するとどうだ。私の真横にハルカさんが現れ、間を置かず私の背から腕を絡みつけてきた。

「ハ、ハルカさん！？」

ハルカさんの綺麗な赤い瞳を覗くが何の反応もない。私は羽交い

絞めにされた。無言で私を押さえつけた。「離して！」声だけで抵抗を試みる。

ハルカさんは生きていた。レイは？ レイは、どうなったんだろ
うか。

「……あなたがハルカさんを操っているの？」

もう一人の『私』を睨む。フン、と笑って軽蔑の意を示す『私』。
「今のあなたがどうであれ、『私』はあなたから生まれた。倒せる
もんなら倒してみなさいよ？ そのご自慢の剣とやらでさあ……ウ
フフフフ、あはははは……ま、無理でしょうけどね。どう考えても
だって……」

クイ、とアゴでハルカさんに指図した。ハルカさんは、締める腕
の力をもっと強めて私が顔を歪ませるまで締め上げていった。「あ
ああ！」

私の悲鳴を、とっても心地よい響きを聞いたように反応する。

「いいわあ……勇気の悲鳴。勇気、知ってた？ あなたが苦しめば
苦しむほど、私は悦ぶの……たまらなく」

ウツトリと手で首筋を撫でていた。「もっと叫んで」

私は気持ち悪くなってきていた。さらにハルカさんは力を込めて
いく。「……！」

苦しみ歪む顔から、汗が何滴も辿って下へと落ちていく。苦しい、
嫌だ、助けて。

私は暴れたが、ちっとも動じない。女なのにハルカさんは私なん
かよりよっぽど力が上だった。考えてみたら、カイトだって敵わな
かったんだ。その事を思い出してしまった。

「レイは青龍に喰われたのかしら。もう知らないけど」
と、『私』はボソリと言った。

私にとっては幸運だった。何とハルカさんの力が“レイ”という
言葉に反応したのか一瞬だけ力が緩む。

すかさず、私は渾身の力でハルカさんの手を振りほどいた。それ
は成功し、私はハルカさんの呪縛から解放される。押さえつけら

れていた腕を労わりながら、ハルカさんと『私』からある程度に離れて。ハアハアと息をついた。ハルカさんは追いかけては来なかった。

変な間が空く。

ハルカさんの呟きが、かすれて響く。

「レイは……？」

とてもとても小さな弱い声。迷子の子供がママを呼ぶように消えそうな声だった。

「レイは何処なの……？」

『私』はああそうね、と思い出して私を再び見た。

「私の代わりに動いてくれた彼に感謝しないとね。勝手に神殿に来て勝手に修行して勝手に暴走、それから自滅してさ。なあんだか可哀想だから、かまって利用させてもらっただけ。よかつたんじゃない？ 青龍が好きみたいだったし、見られて本望でしょ……せつかく面倒見てあげてたんだし」

神子に化けていた『私』。『私』は、レイも意のままに操っていた。レイが、天神様を憎むように仕向けた……？ いや、ただの偶然だったのかもしれない。結果として、レイは天神様と神子を憎み世界を滅ぼそうと目論見る。

私なんかよりよっぽど賢いレイだ。青龍を呼び出せば、どうなるかくらい想像できたはず。追いつめられ、本人にしかわからない支離滅裂になったレイは、身も世も破壊へ。

その流れを作ったのは 『私』だ。「何て事……！」

私が。

私が、全ての元凶。

私が、始め世界を憎んだばかりに。

「邪尾刀も贈^{プレゼントした}ったし、青龍の居場所も勇気達の動向も。全部教えてあげたのに。毎晩、枕元で囁いてあげたのに……子守唄みたいだね。

『青龍よ……あなたの好きな青龍が待っている……早く“四神鏡”を集めて火の島へ……憎いでしょう？ 自分をこんなにズタボロに

した天神や神子、人間達が憎いでしょう？ レイ……あなたは何も悪くないのに。今に見てなさい、目にももの見せてくれる。さあまずは救世主 あいつで遊べ』」

レイの意識はすり替えられる。レイが『私』で『私』がレイで。全てが、悪い方へと。

こつこつと悪は生み出される。いや 広がる。

「やめてええ！」

私は泣くのを堪えようと耳を塞ぎまぶたで目を塞ぎ。流れってくる悲しみをせき止めようともがいた。

「苦しみなさい。とことんまで付き合つてあげる。あなたの苦しみが『私』には悦びの上なくなたまらないの。全身が、こそばゆい、おかしくてたまらない……」

血流が沸騰している。悦びあらわにしていた『私』の一动が突然ピタリと治まった。

「あなたがうらやましかった。純粹でひたむきで一生懸命で。セナや皆に愛されて……どうしてこんなに差があるのか……同じ『私』のくせに！」

『私』の目がカツと見開いた。そうしたらいきなり、私とハルカさんが立っている床からザクリザクリと氷の矢が上に向かって突き刺すように出現する。数は複数で数えられない。

「きゃああー！」

直接は刺さらなかった。ハルカさんも。身を庇う姿勢で固まってしまっていた。

少しだけ私は肩をかすめた。ジンワリと、破れた服の隙間にできたり傷から血がにじみ出る。軽傷だけれど、心臓は破裂しそうなほど苦しくなつて息がしづらい。

「苦しめ！ 勇気！ 殺しはしない。苦しめ！」

憎しみの目が向けられる。本能でも悟る……本気で『私』は私を憎んでいるのだと。髪が逆立ち、顔は歪み、汗は蒸発し、視線は私を貫こうとしている。

次の攻撃が、来る！

私はどうしたらいいのかわからず混乱したまま、何処からか聞こえてくる音に耳を傾けた。

『人間と成ることのできなかった者 存在す これが獣なり』

“七神創話伝”の一部だった。私の記憶から蘇った一節の切れ端。人間と成ることのできなかった者 不完全 獣。

2つにわかれてしまった私達。互いに不完全な状態の私達。私は……私は。

ドドドドド。

地響きとともに地面が揺らぐ。「わあああ！」転んで、横向けに倒れてしまった。

ハルカさんも。『私』は……平然と立っていた。天井を見上げている。

「気分がいい……」

ほのかに笑うその顔は、至福に満ちていた。その時だった。

「勇気！」

予想もしていなかった方向から、男の声があった。「セナ！」

呼んだ通り、部屋のドアを強引に蹴破り侵入してきたのはセナだった。髪が汗で濡れている。よほど走ってきたに違いない。

「悲鳴が聞こえたんだ。おかげでココが……だけど？」

駆け寄ってきたセナが立ち止まる。私とハルカさんともう一人の『私』と。

ゴゴゴ……。

震動が一定ではない地面に酔いそうになりバランスをとりながらセナは混乱しそうになる頭を整理しようとしている。私はすぐにそれを察知して、セナに伝えた。

「こいつが……こいつが、黒幕よ！ こいつが……」

私も混乱していた。涙目になってヤケになって。恥ずかしさと、

自嘲で。

訳がわからない。

「どうなってるんだ……」

セナは迷っていた。資格好の同じ私の一体どちらが本物なのか。見定めようとしていた。

私が本物よ！ セナ！

だけれど悲しいかな、証明するものが。

ある。

私は閃き、とにかく腰に手を伸ばした。

そして鞘から剣を抜き “光頭刃” を構えた。ブルブルと、手は震えている。

「こ、“光頭刃”は、持ってないようね？ 偽者さん！」

必死に睨んで相手を威嚇していた。偽者、と言ってしまった私をまた軽蔑した目で『私』を見た。

ガチガチと歯の鳴る音は止まらない。

「やああああ！」

私は飛びかかった。がむしゃらに剣を『私』に向けて振り下ろす！しかし難なくかわされてしまった。横っ飛びする。

「苦しむがいい……」

私のそばで、私にしか聞こえない音量で『私』は言った。すると後ろで。

「レイを返してえええ！」

金切り声が出た。

また、ドドドと岩を激しく叩く音。重なり合いぶつかり合って太

鼓に似た地響きはいつまでも。

ハルカさんは叫び、両の手の平を合わせた腕が高く掲げられた。手の平からは赤い光が生まれ放ち、それは炎へと変わっていく。

炎に包まれた手と手は離れ円を描く動きで左右へと広げられ振り下ろされた。

炎がリング状となり形造られ……中心から爆発した。

私やセナは、軽く吹っ飛ばされる。

どうか頭は打たないでと、祈っていた。

《第54話へ続く》

第53話（割れた心）（後書き）

【あとがき】

字数を気にしていたら今話。

少なっ！

どゆこと。

ブログ第53話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-124.html>

ありがとうございました。

第54話（逃亡、そして）

空に浮かぶ島は、崩壊の危機を迎えていた。

レイを失ったと思い込んで気が動転していたハルカは、誰に向けて放ったのかわからない火の塊を爆発させる。ハルカ自身をも巻き込んだのかと思えたそれは、凄まじいエネルギー波で薄暗かった部屋を隅から隅まで明るく照らし……部屋という箱を破壊した。

勇気もセナも、最初の爆風で投げ飛ばされる。幸い、爆発の中心から離されて距離を置いたおかげで、直接火のエネルギーを浴びる事も食らう事もなく。壁に打ちつけられそうになったものの、勇気もセナも咄嗟の機転をきかせてそれぞれに身を護るための風のバリヤーを張った。

幸が幸を呼んだ。飛ばされ、護られ。重いダメージは2人にはほとんどない。

部屋は壁が崩れ、無残だった。ガラガラと……激しい音を立てている。パラパラと……細かい砂は、軽い音で転がっていく。

砂とホコリや瓦礫の山で惨状が外へと明るみになった。2人の上を、赤く薄く染まった空が覆っていた。

ゴゴ、と地鳴りが唸り響く音が断続的で、止まない。

落ちて着ける場所を失いつつある2人は、何とか立ち上がって意識を保とうとしている。

「セ、セナ……」

「地面に手をついてる……しっかりするんだ。そのうちにアジャラとパラが」

風も渦巻く中で、セナは勇気にそう言った。え、アジャラ達が？と首を傾げたくなる勇気だったが、ひとまず置いておき。身を護る事だけを考えていた。

どうなるの、と。

不安に襲われる。

やがて、遠くから。甲高く聞こえた『声』がした。

「ほうら！ 追いかけてきたわ……！！ においを嗅ぎつけて！ 勇氣！ あんたをよ！ おいしそうな異世界の人間をねえ！」

それは、もう一人の『勇氣』の声。耳と胸を劈つんかれる勇氣。聞こえるたびに、目頭が熱くなり恥ずかしさで隠れたくなくなっていく。

あれが私。私の分身。私が最初に抱いた本性……誰にも見せられるものではないと。

勇氣は両手で顔を覆いながら、指と指の隙間からセナを見る。セナは落ち着き、声のする方へ目を細めていた。途端にまた一度引っ込みかけた恥ずかしさがおかえりと戻ってきて胸を締めつける。

悪循環だと自分を嘲あはうしかなかった。

その『勇氣』が言った通りになる。

島全体が、弾かれたようにドシン、ドシンと攻撃を受けてか直下型の地震へと変わった。

「きゃあ！」

勇氣の悲鳴。ガラガラと、不安定に積まれていた瓦礫のまた崩れていく音と。一緒になって騒然となる。「奴が消えた！」

間にセナがそう叫んだ。奴とは、もう一人の勇氣の事らしかった。勇氣は、居たと思われるもう一人の『勇氣』を目視で確認しようとしたが、見つからない。空や地面を捜しても見つからなかった。セナの言葉通り何処かへと行ってしまったのか。しかし勇氣達には考えている余裕はあまりない。度重なる衝撃に耐えていた。

「ちくしょお……！！」

セナは、歩み出す。

「？」

勇氣のそばへとやって来ていた。「ちよつと貸してくれ」

勇氣のそばに落とされて転がっていた“光頭刃”を拾い上げた。

剣を片手に、足を地面の震動にとられながらも、セナが向かった先とは。

天神の元。

クリスタルに閉じ込められたままの。

やがて辿り着く事ができたセナは、剣を振り下ろす。

クリスタルを砕くために。

ガシャン！

思惑通りに、クリスタルは砕け散った。

そして中からは。「天神……」

天神。

砕かれたクリスタルの檻から、支えを失ったように体を倒してきた。セナはすかさず受けとめる。

「アジャラとパラが、この島を操縦しに向かったはずだ……あいつらは助けた。もうあんたも呪縛から解かれたんだぜ……目を覚ましてくれ」

勇気には聞こえていない小さな擦れた声で、セナは天神を抱きとめ支えながら耳元で言った。安心しろと……目を閉じたままの天神に向かつて囁きかけた。

反応はない。

その時、セナや勇気達の頭上を、サツと大きな影が横切っていた。

「勇気……！」

「今、そっちに行くからな！」

元気な声が、幾つか聞こえてきていた。それは、頼もしい仲間達の声。

「ピィ……！」

口笛のような高い鳴き声が響く。空竜。スカイラールだった。

勇氣達の頭上を旋回して飛んでいる。迎えに来たと声を上げて。
「皆あー！」

勇氣は足がフラフラとなりながらも立ち上がり、大きく手を振り回して空の中を舞うスカイラールを目で追っていった。

スカイラールの背中中は満員となった。

引き上げられた勇氣、セナと抱えられた天神を始め、仲間達。マフィア、カイト、ヒナタ、蛍と紫、ゲインと。それから 倒れていた所を発見され回収された……ハルカ。

天神もハルカも、眠りについていた。

勇氣達と合流した瞬間には、安堵と喜びで顔をしわくちやにして代わりばんこに肩を叩き声をかけ合い、涙し抱き合いながら騒いでいたが。先に横になって寝ていたハルカに勇氣が気がつくと、次第に無言になって皆で並ぶ2人を囲み、様子を窺ってみているようになった。

見守っていると、セナがボソツと話を切り出すに至る。

「勇氣の所に駆けつける前、アジャラとパパラが捕まっていた部屋に出くわしたんだ。偶然に」

カイトが張り上げた声を出してセナの横顔を見た。「奴らが!？」
仰天したカイトは、セナが頷くと額にかかっていた髪をかき上げて冷静さを取り戻しにため息をつく。

セナは視線を天神に落としながら、説明していった。

「だから助けた……訳がわからなくなりそうだったけど。こうは考えられないか。俺達の前に現れていたアジャラとパパラは、分身かまたは……操られていたんだと。捕まっていたのがその証拠……つまり彼女らは……俺らの味方だ」

鎖に繋がれていたアジャラ達を見てセナは瞬時に悟ったのだ。裏で何者かが自分達を誘導している。その何者かは、アジャラ達を捕らえた……敵は天神か、あるいは。

天神の近くに居る者。

セナは焦ったのだ。勇気の身が危ないと。何故なら……。

天神の神子は。

「俺は、アジャラとパラを助けた。目を覚ましてくれて、話を急ぎながらだったけど聞いた……思った通り、彼女らは俺らの味方だったぜ。どうやら完全に今までずっと操られていたみたいだったな。俺達の事なんて初対面みたいで何も知らなかった……笑うぜ」

勇気はそんな、と小さく落胆していた。かつて自分の世界へと帰っていった時に世話になり、再会した時には完璧に信じきってしまった事、口唇をかみ締めて自分を責めた。

「それで、2人はどうしたの？ 何処に行ったの？」

ヒナタにセナが答えた。「島の何処かに操縦部分があるらしい。

そこへ行つた」

「操縦？」

「ああ。神殿の……何処かだろうと思う。崩れちまって半壊してるけど。地下かもしれないし、もう任せてるよ。ああ、ほら」

と、セナが周囲を見渡すと。ちょうど、地震の地響きとは違う質の揺れで島自体が動いたようだった。穏やかに揺れながら、雲や鳥が後退している。そう……海面から浮かんでいた島は、自身が動き始め……船が水の中を漕ぐように空中を飛び一方向へと進み出したのだ。勇気達を乗せたスカイラールは後を追っていく。

「せ、青龍じゃない！？ あれ……」

突然に慌てた声を出したのは蛍だった。後退していく景色を指さして皆に教えている。指された方角を一齐に注目してみると、確かに青い蛇状のものが空中を波のようになくなり、泳いでいた。

遠ざかり、見えにくくなっていく。

「追いついてきたのか……」

「さっきからの大きな地震って、あいつが島に体当たりしていたんだわ」

と、カイトや螢が目を細めながら息を呑む。

「あ……！」

勇氣はギョツとした。漏らした声をしまったとばかりに手で塞ぐ。

「どうした？」

「う、ううん。何でもない」

セナが聞いても、勇氣は言う事ができなかった。勇氣は見てしまったのだ。

青龍のたてがみに隠れ、『自分』が居たのを……

もう一人の『勇氣』。勇氣には有難い事が、誰もその事には気がついてはいない。

もしや青龍を手なずけた……？

勇氣はその考えに行き当たり、冷たい汗をかく。それを悟られないようにと黙っていたのだった。

「追いかけては来ないようね……何でかしら……気味の悪い」

マフィアの言葉を勇氣は聞かなかった事にした。勇氣にのしかかる暗い感情は、消える気配は無論なく。むしろ氣遣っていないと爆発を起こしてしまいかねない……勇氣は突っ立ったまま、耐え忍んでいた。

やがて青龍が彼方に、ほぼ見えない距離になった時に。スカイラールは震動が止み、大人しくなった島の地へと降り立ち勇氣達皆を自分の背から降ろした。安定した地面を懐かしく思いながらも、皆はやつと落ち着けたと軽く笑いながら口々に言い合っていた。

天神、ハルカも地面の上へ。少し雑草が生え散らばった上へと寝かせて様子を見ていた。

先に起きたのは天神だった。

そつとまぶたを開け、何かを考えているのか、すぐには何のアク

シヨンも起こさなかった。

少し虚ろではあったが、正気はある。上半身を起こして、正面の方向に居たセナやカイトに気がつき真っ直ぐに見ていた。

「私を解放してくれたのは風神……あなたですね。感謝します……
ありがとうございます……」

線の細そうな声質と、繊細さを表したような微笑みで。セナとカイトは『これが天神？』と顔を見合わせていたが、気を取り直して聞いてみた。

「俺が風神だという事はもう知っておいですか。カイトも、……
救世主も」

と、思いつくままに言ってみていた。セナに限らず、こうして天神と対面するのが皆は初めてとなる。緊張と、質問攻めにした気持ちと不満だらけをさらしたい欲求があるものの、なかなかどれも言い切り出せず尻込みしている一同だった。セナが代表するように一歩前へ出て、天神の背丈に合わせて屈み込み話し出した。

それは、また一つの核心をつく答えとなる。

「……あなたは、チリンか？」

場の皆は全員、ハッとする。天神への集中や関心が最高潮に高まった瞬間でもあった。

セナの鋭い指摘はもうひと押しを見せた。

「わかったんだ……あの子供が。何もかもを見透かした感じが……
あんたしか考えられない。俺らに無条件で手を貸してくれる奴なんてさ……違うか……？」

自信はないように思われたが。

沈黙を破り、重そうなまぶたの下の瞳の先は下に落として、細い声の音は塊のように吐き出した。「そうだ……」

天神は語る。これまでの事を。

すでに陽は落ち、これから夕闇の果てへとなりずる時。島は一方

へと突き進み、発生している風だけは肌に感じていた。森や木々も静かに高くから見下ろして。天神は……語る。

「私はあの女に閉じ込められ、何日もかけて、かろうじてやっと搾り出せた考や力を使い……チリンという、子供を生み出しました。分身と言った方が理解しやすいかもしれませんが。そうして救世主や七神。あなた達を回りくどくも、助太刀致しておりました」

「やっぱり……か」

セナの落ち着きとは反対に、カイトが言い放った。

「どうしてチリンにクリスタルを破壊させなかったんだ？俺達に素性を明かしたっていい。真実を隠して。おかげで、俺達とはんだ回り道を……！」

天神の口はキツ、と固く横一線に結ばれた。「恐ろしい」目に小さな信念を浮かばせて。「あの女は」カイトを見上げた。「あの女は恐ろしく頭がよいのだ」神経を走らせる。

あの『女』？

天神の口から時折飛び出る『女』という言葉に、皆には話が見えにくかった。それもそうだった。『女』を見て知っているのは勇気と、セナだけだったからである。だがセナはまだ正体については疑問符が残っている。

セナはコツソリと勇気を盗み見ていた。勇気が先ほどから黙っているままなのにも不審感を抱いていた。勇気が先ほどから黙っている

「あの女は私の及ばない支配力を持っている……何だつてできるのか。底知れない力。広範囲に至る視野。空間など簡単に捻じ曲げる。何処からでもやって来る。下手にこちらが動けばすぐに見つかる、私はいつでも殺される……息をもつけぬほどの恐怖だ。私の死は、この世界の滅び……私は死ぬ事など、許されていないというのに」

途端に、ぜーぜーと呼吸が乱れた。天神の背中をセナがさすりに入る。苦しげな天神の息は絶え絶えで、目はひんむきそうなほど開

いていった。

「あの女が……襲うのだ。この私を……」

何度でも恐怖は繰り返された。

「魔性か……あの女……闇神も毒され続け……狂っ」

カクカクと下アゴが動いている。

「その『女』っていうのは、誰の事なんだ」

じらされて我慢できず、カイトが苛立ちながら天神に詰め寄った。

「それは」

次の言葉が出なかった時だった。

「もおッ、やめ てえええッッ！」

声を荒げたのは。

「勇気……」

盛り上げた両肩をブルブルと震わせて全力で制する勇気の、小さな体が立つ。決死に見えた表情は、赤かった。何をそんなにと、一同は思う だが。

セナだけは、違っていた。

「どうした……」

勇気の名を呼び、状態を確かめようとした。

寸歩、近づいて。「来ないでえッ……！」

涙混じりの声は、悲愴さをいつそう際立たせていた。「何……」

やがて勇気は耐え切れなく、走り逃げ出した。

「勇気！」

「勇気いい！」

マフィア、カイト達も同時に叫ぶが、勇気は森の中へと駆けて行ってしまった。

誰も追いかけて、ただ茫然として森の中間を見つめていた。「おい」

セナが、天神の何と胸ぐらを掴む。

「一体どういう事なんだ。説明しろよ！」

慌てたマフィアがセナを押さえにいった。「待つて！……どう
いう事なんですか」

天神は震えている。苦しまぎれな声色は、こう言った。

「あの『女』とは……救世主なのだ」

もうみんなバレた。私がいつか抱いた醜い心。世界なんて滅べばいい。滅茶苦茶になったっていい。私は知るもんか。私を苛めた奴らも、私を追い出そうとする人も 皆みんな、消えちゃえばいいんだ。 そうだ 消えちゃええ！

……

あの時の勇氣。腹痛を訴えるほど神経をすり減らしていた毎日。日常。勇氣には、一人で打破する事ができなかった。親は居ない。兄に迷惑をかけたくない。相談する友達も味方も居ない。誰も何もしてくれない。

絶望。いい考えが浮かばない。明日は終わりとさえ思う。思い込んでしまう。眠れない。

誰か、助けて欲しい。見つけて欲しい。勇氣は走る。雨の中を遺跡へ向かって。

鏡と出会う。

価値のありそうな鏡。

手に持てる方は割ってしまい、部屋になって張られていた方はくぐり抜けて。

勇気は 一つの『世界』を手に入れた。

自分の思い通りにできる世界。素晴らしい世界。

勇気は気がつかなかった。そんな、夢のような世界に来たなどと気がつかなかった勇気は旅に出た。それは、とても重く切なく、
純粹な旅。

途中に苦しくとも、励まされ、助けられ、護られて。

ココまで来た。

勇気は見つけていく。

自分というものを。

そして今まさに審判は下されようと潜み近づく。

勇気は、崖つぶちに立たされる

「私が……」

涙は止まらなかった。勇気は陽が沈んでしまっている水平線の向こう側を睨んでいた。見える訳のない向こう側を。まるで、自分の未来のように。

黒い景色だった。崖の足場は、いつ崩れてもおかしくはない。崖の先端に立ち、吹く風は非常に冷たく、勇気の心臓を凍らせてしま
いそくに荒ぶ。

月は見当たらない。だから黒い空。星もない。雲に隠れてしまっ
ているのか。だから暗い空。

森は眠る。見渡す限りは木の先端の集まった濃緑ばかり。勇気が
見下ろす下には、魔物も眠っているか、獲物を探してさ迷っている
のだろう。ウオオーン、と。狼に似た咆哮が聞こえる事がある。

少しずつ安心してきた勇気。誰も追いかけては来ない。今はたっ
た一人。一人であるから……気が楽になれる。

「う……」

しかしそれも束の間の事。

勇気を過去と想像が襲うのだった。「うう………！」

対面したもう一人の『私』の残像。そして今頃はきつと、天神によつて何もかもが暴露されているという事と。「う、ううう………！」

せつかく乾いた涙の跡の上から、新たな涙が生産されていく。嗚咽にも支配され、頭の中はガンガンと打ち響き、気分は優れず、最悪なままで時間は冷ややかに過ぎていく。

私が殺した。

私が皆を巻き込んだ。

一人で芝居をしていたみたいで恥ずかしい。

勇気の狭くなった頭の中は、その様々な感情がいっぱいだった。崖の上から、下界の森を見下ろした……。

(何処行くの………?)

心で話しかけた。

(ねえ、何処行くの………?)

誰も居ない相手に。

(ねえ………)

風が当たる。

厳しいとも思わない風が。

勇気の体が揺れた。

前方へ　そこは底閻。

ふ、と。

意識も真つ逆さまへ落ちようとした。しかし。

「バカ野郎！」

勇氣の腕は引つ張られた。かなりの強さだった。勢い余って転がる勇氣に……罵声が飛ぶ。「何考えてんだ！飛び降りて、死ぬ気かバカ野郎がッ！」憎しみすらこもった激しい怒りで。

追いかけてきたセナ。が、転がる勇氣の腕を乱暴に掴み上げ、引っ張り起こしていた。「痛い！」そして、「放して！」と。

腕を引きちぎっても構わないくらいに抵抗したが、セナの力の方が上だった。手は絶対に離される事はなく。「落ち着け！」セナは勇氣を睨み威圧する。

普段なら、恐れおののくだろう。ひるむだろう。たじろいで、大人しくなってしまうのに違いない。だが、今の勇氣に怖いものはないように感じられた。セナの怒りさえ、軽く見えるほどに。気が動転してしまっている。

それはセナの目から見ても明らかで、どうしようもなかった。

セナは天神から全てを聞いてきた。

勇氣が始め、2人に分かれた事を。

世界を破壊しようとする企み動かしていた真の支配者は、救世主、勇氣の……『心』だった事を。

セナは初めて勇氣の片割れを目撃してからは、薄々と感じていたのかもしれない。だが、まさかと。自分もまた、疑いを晴らそうとはしなかった。しようと思わなかった。

そんな少しだけの罪悪感がセナにあった。もっと早くに聞いてやればと後悔して。

それは、今の勇氣を、見れば見るほど大きく膨らんで。

「落ち着け……」

セナは勇氣を抱き締めてあげた。何処までも暴れ狂おうとしていた勇氣だったが、次第にそれは小さくなり無抵抗になっていった。

最後は諦め、はあと、セナの胸内で息を吐く。「落ち着いて……」
2つの腕は勇気の背中にしっかりと回し、ベルトを締めるようにギユウと渾身の力を込めた。それが精一杯にできる事だとセナは思った。と同時に、この手の中の少女は何と小さな事かと思ひ知る事にもなる。

これまで、同じように勇気はたかだか小さな存在にしかすぎないと何度でも思ってきた。まだ13歳でもある……セナは昔、監獄で育った。今にして思えば、幸運だったと思う事もできる。親に見捨てられた子供など数えきれないぐらい居る。生き延びられなかった子供も多く居る事だろう。たった一切れのパンに出会う事さえ困難な状況の中で、セナは監獄という名で『保護』されていた。まさに幸運。おかげで死なずにすんでいる。健康で、真つ当な精神で自分の足で歩く事ができる……出所したての頃は、目的もなくブラブラと道を探して迷子になっていた。目的を探す事が目的なんだと時々笑いながら。

皆が迷う。道がないからだ。

道は自分で作らなければならない。それを、現実には教えてくれる。厳しさと、騙さない誇りを持って。現実……嘘をつかない。

「よく頑張ったよな……お前。凄いよ……」

心の底からセナは、勇気という壊れやすい人間を大事に思った。壊れやすいと言ったが、壊れないし屈しない。いつでも真つ直ぐだったと過去を振り返る。

時々、壊れかける。逃げようとする。足搔く。苦しむ。わがままを言う。そんなものは当たり前前の事だ。何故なら人間、人間のだから。

でもちゃんと真つ直ぐ、真実まで辿り着いたではないか。

セナは褒め称える……少し身を離し勇気顔を見るようにした。

勇気は酷い顔をしている。絶望にこつ酷く打ちひしがれた可哀想な顔を。セナはわかっている。いつかも言った……『本音』をさらす事が、いかに大変なのかを。

セナは思うままに身を任せる事にした。

口唇に触れる。

覆っていた雲は、薄くなり途切れて。

大きな月は臙げではなく隙間から顔を覗かせている。2人の重なった影は伸びて。時は、瞬間に過ぎていった。

軽いキス。しかし長い。

月は光で2人に祝福を照らしている……

……

勇気の中で何かが溶け出していった。

だから涙が出るのかなと……勇気はそんな事を思う。

セナが作り出した空間は、温かだった。抱き締められて、諭してくれる。落ち着けと……勇気にも理解できるように、足りない言葉の代わりにキスを贈る。勇気には、充分に理解できた事だった。初めて自分を労わる言葉を見つけ出す。

御苦労さま

自分の中にいつまでも滞在していたしこりは、溶け出してなくなっ
ていった……。

時は経過する。崖の上の2人は、互いを見守っていた。

「未来に絶望してるなら、一つ未来をやるっ」

セナが後で思いつきを口に出す。

「え？ 何？ 未来？」

勇気は顔を上げて、目をパチクリさせた。セナはクスクスとおかしそうに笑ってはいいたが、目つきは真剣に満を持して言う。

「青龍の事が片付いたら……こっちで一緒に暮らそうか。勇気」

《第55話へ続く》

第54話(逃亡、そして)(後書き)

【あとがき】

色々忘れそうになる(泣)。

ブログ第54話(挿絵入り)

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-126.html>

ありがとうございました。

第55話（青龍、封印とその法）

私は普通の夢を見た。疲れた体を癒す時間に見る、普通の夢を。

悪い私もそこには出てはこないし、見た事もないお化けや有り得ない状況も出てはこない。ただの……昔を思い出した夢だった。

一つじゃなかったけれど。

セナの言葉だ。

『ちよつとつまずいたり疲れただけで止めちまうような、そんな生易しい旅はしてないだろ、俺達は』とか。

『例えば、この道のりがレイに辿り着くまでの障害や困難だったとしたら』とか。

私が歩むこの、選択して運任せな道を『階段』に見立てていた。引き返さない。上りきらなくちゃ。途中で休んでもいいんだ。諦めちゃ、本当にそこで終わりなんだ……それをセナが教えてくれた。まだ子供な私にセナは……。

ありがとう、セナ……。

こんな頼りない泣き虫な私に尽くしてくれる、皆。

ありがとう。

ありがとう。

あれどうしよう？ 変だな。同じ言葉を繰り返してばっかりだ……。

暫くの休眠をとる七神と勇氣、天神達。海に浮かぶ島は、夜闇の中でこちらも活動を停止して静かに休息をとっていた。醜き野心を持った『勇氣』の方は、青龍とともに居たのを勇氣は目撃している。

逃げようと島ごと空を走り出したにも関わらず、何故か青龍らは追いかけては来なかった。一体何故

激戦でくたびれ果てていた体を少しでも回復しておこうと意見は一致し、皆は野原に敷かれたシートの上で適当に横並びですぐに寝静まっていった。カイトやゲイン、ヒナタは大音量のいびきを面白くかき、マフィアも蚩や紫、セナも。目を覚ます事なくぐつすりと寝入ってしまった。

もちろん、並んだ中で勇気も。怖くはない夢の中で、“ありがとう”を繰り返していた。

この時に起き出していたのは、天神と、アジャラとパパラ。3人ともは、見るからに崩れかかった神殿の真下の地下、奥に居たのだ。

一応に僅か数十分の睡眠をとった後に天神は、島の操縦室と思われる一室へと向かい。部屋の中では交代に島の外を見張っていたアジャラ達に声を掛けたのだった。

それにびつくりしたアジャラとパパラは冴えた目をさらにいつそう冴えさせて、訪れた天神へと振り返った。

「お疲れ様です……アジャラ、そしてパパラ。私の及ばぬ力のせいで迷惑を散々にかけてしまい、酷く申し訳ない……すまない。そして……ありがとう……」

天神は首を前に垂れ、痛そうに顔をしかめていた。涙目になったのは天神ではなくアジャラやパパラの方で、パパラは駆けて天神に抱きつき、うああ、と声を荒げて大振りで一拳に泣き叫び出した。

「嫌や……！ 謝らんとしてや天神様！ わてらが……天神様をお護りできんかったばかりに……堪忍してやあ……！」

嗚咽も兼ねて素直なパパラに、天神は感激していた。

「パパラ……」

天神の口元は緩み、瞳に安心が浮かんだ。傍のアジャラは手でにじみ出た涙を振り払っている。

3人を取り囲むように暗室の室内には、立体的な風景が映し出されていた。いかにもそこに存在するかに見せかけた立体映像。物体が実際にそこにある訳ではない。

映し出されているのは、地上何処かの町並みだった。家屋や商店などが並んでいる。人は。

「よくぞ2人ともは無事で。私もです。もはや、私にはそれだけです……命ある事に、これほど感謝した事などない。アジャラ、パパラ。喜びましょう……我に、命、残された事を」

人という人は、一人も取りこぼす事なく全員が倒されている。

家屋の壁に背をもたれかけさせて絶している者。道にうつ伏せて倒れている者。井戸に身を投げ入れる真似をするように寄りかかっている者。

母と子と抱き締め合う形で椅子に腰掛け眠っているように息を引き取っている者達。同じく眠るようにベッドで安らかにしている者達。晩酌の途中でテーブルに突っ伏したまま意識を失い返っては来ない者達。苦しそくに胸を押さえて床でうずくまっている者達……。

数えが困難な者達の末路。皆はどうした、何があつたのかと。

聞かずとも、天神達は……知っている。

これが 復活の。

「気が狂い朽ち果てたか、龍の体からの異臭にやられたか。毒の息か。風の悪戯いたずら。何と惨い……幾百年経ち、この光景をまた見る事になるうとは。神獣め……神獣めええ！」

ダンッ！ と、天神のコブシは床に吸いつくように振り下ろされた。その勢いで屈み込んだまま、苦虫を噛みつぶしたような顔で穴も開かない平然とした床を激しく憎んだ。

「気を確かに……！ 落ち着き下さい！ 天神様！」

アジャラが駆け寄った。パパラも心配そうに肩を震わせる。

「ああ……すまない、大丈夫なんだが……大丈夫だ。それより……」

チラ、と一方を見た。視線の先には、別の映像で勇気達が休んでいる光景が映し出されていた。

天神は、一旦は目を逸らす。勇気達のこれまでと我が身の不甲斐無さを思うと悔しくて悔しくて堪らなかった。よくも、よくも我が子 人間達を、と。

息ためた息を大きく吐き、天神は意を決してアジヤラ達に指図した。

「……後30分後でいい。皆を起こせ。これから青龍の所へ戻り向かう」

神殿から少し離れて。スカイラールもスヤスヤと骨と羽を丸めて地面の上でうずくまり寝息を立てて過ごしていた。

スカイラールに護られて。毛布を敷いた地面の上でハルカは、カイトとマフィアの持っていた上着を上に着せられていまだ目を覚まさないでいた。

夢のようで、夢ではない夢を見ていた。登場する人物は誰もおらず、それはハルカの願望にしかすぎなかった。

(レイ……)

少しの肌寒さが、ハルカには応えていた。レイの行方は知れず……セナからの攻撃と、レイが手に持っていた卵に似た物の殻を握り潰す瞬間を見たのとは同時だった。衝撃を受けた後、ハルカの内に棲みついていた黒い“影”は混乱に紛れて言ったのだ。愉^{たの}しげな、可愛らしい女の子の声で……。

『レイは 死 んだ よ』

レイが死んだ？ 有り得ないと。内から湧いてくる物から逃れられない。ハルカは何者かに支配されていた。もはや自分を突き動か

しているものは何なのか。頭も意思も働かず、何故か体だけは動いているようだ？ ……何だこれはおかしすぎると、浮かぶ小さき疑問も徐々に消されていった。

(レイは生きているわ……)

ハルカの心は夢に取り残されて。表は人の形と書き『人形』と化していく。

「ピユイ……」

スカイラールは鳴いた。誰の何を思ってたか。笛の音色のように響いていた。

月は銀色に姿を変えて皆の頭上を照らす。光が行き届いても地表は冷たく温かさはなかった。

ね、眠い。

外の野原へとやって来た天神様達は、私達を順に起こして地べたに正座したまま待つてくれていた。全員が起きるのを。両隣にアジヤラとパパラも正座していた。

「勇気。“七神創話”は、何処まで知っているのですか」

と、天神様は私達、いや私に聞いてきた。ムニヤムニヤと口の中の渴きを潤している私。

まだ完全に目が覚めきっていない私を含め皆だったけれど。何とかヨイシヨと疲れの取れきっていない重い体を動かし始めている。両目をこすりながら。

「ええと……」

数秒ほど天神様の言葉を頭の中で回転させつつ。意味を理解していった私は、すぐにメモ帳を取り出しに荷物の所へ向かって行った。帰ってきた後にそのメモを広げて声に出して読んでみる。

『この世に四神獣 蘇るとき……』から始まる各章を順に読み上げていった。そして『世界を統治し……』と読みかけた所で。天神様からストップの声が突然にかかる。

「第五章を飛ばしましたね。何という偶然なのか……つい故意では、と疑ってしまう事よ」

と、そんな事を言つて眉間にシワを作る天神様。一体どういう事なんだろうか。よくわからない。少し寝ぼけているせいもある。

「いいですか勇氣、第五章を告げる前に。そもそも、“七神創話伝”とは何だったのかをお教えします。“七神創話伝”とは、私があのクリスタルに閉じ込められていた時に立てた苦肉の伝達手段だったのです。チリンを生む前に」

私が『え?』とした顔で見ると、天神様は続けた。

「どうか届いて下さいと願いを込めて。時間魔法という僅かな力を使って、過去のあらゆる所へと飛んでいったはずです。勇氣、あなたに伝わればいいと信じて」

そんな事を聞いた。私は驚く。「そんな事だったのですか……」

もしか呪文ではないか。もしかこれが旅のヒントに?

そんな事を考えていた。当たらずとも遠からずといった所じゃないだろうか。私や皆、文章に織り込まれた言葉に様々な思いを馳せていた……ああじゃないかこうじゃないかと。

私も獣とか、鏡とか……色んな事を思っていた。

でも。ちゃんと私の元へと届いている。素晴らしい事だ。

「あの『もう一人の救世主』は、時空さえ支配できるかもしれないからね……全て私のしてきた事は、賭けでもあったのです。チリンもそう。いえ、時すでに。チリンという存在はバレていたのかもしれない。あなたが一度元の世界へ戻った時に、チリンは姿を現わしていますから」

私は「ん? そういえば……」と思ひ出す。

というのは。私が元の世界に帰るように仕向けたのって……夢の中の『私』じゃなかったかしらつて事。確か“セイント・ブリッジ聖なる架け橋”の在

り処をわざわざ教えてくれたのは、『私』だったはずでは……？

「何で私を元の世界に帰そうとしてくれたのかしら……だって帰って来ないかもしれないなかったのに。第一、記憶がなかったし」

すると天神様は「記憶を消したのは私です」と言い出した。

「ええ！？ 何で、いつの間に!？」

私一人で盛り上がっている。セナやカイト達も私の隣や後ろに居ただけけれど、天神様との会話を一切妨げずに聞くに徹していた。

「帰って来ないようにと、チリンの力であなたに術をかけました。

あなたにも気がつかないくらいに成功したのでしょうか。あの『もう一人の救世主』にバレたら、一巻の終わりですからね。きっと記憶

を持ったままだと、あなたはいずれまたこちらの世界に来てしまう……私は過去、あなたのような救世主を数多く見てきました。だから確信を持って言っています」

私は頷いてしまっていた。

もし、記憶があつたままで本当の私の世界で一生を過ごせたかという……あまり自信はなかった。だって。

横目でセナを見る。そして顔を赤らめてしまった私。

「何だよ？」

私の視線に気がついたセナは、何でもない顔をしていた。「いや、別に……」

私が天神様の方へ向き直すと、微かに天神様の口元が吊り上がって微笑んでいるような気がして私は赤苦い顔をした。

話を続けましょう。そうしましょう。

「あの『救世主』は、私の部下のアジャラとパパラを洗脳してあなたの世界へと送り、連れ戻させたようですね。そんな事をする事態になったのも、私がああなたの記憶を消したせいでしょう。記憶を消さなければ、勇気、あなたは自然と戻って来たはずだ 私と同じく、向こうにも確信があつたという事なんでしょうね。いいですか

勇氣。あの『救世主』は……あなたで遊んでいる……苦しめばいいんですよ、あなたが。あいつは。あなたは、帰りたい。元の世界へ。あの時。そういう心境だったでしょう……？」

私は天神様の言葉の一つ一つに頷いていった。確かそうだった……私は、あの時にどうしても突きつけられた現実から逃げ出したい、帰る事にしたんだ。逃げる、なんてセナ達を裏切る行為。今から言えば、あいつ……『もう一人の私』にしてみれば、しめたものだと思っただろう。そういう事だ。

私の苦しみが悦びなんだと……言っていた。
私が苦しむためなら、何だってする。

遊んでいる……私達で。苦しめば苦しむほど……ああ……。
「チリン君の存在が……『もう一人の私』の誤算だった訳か……」
悲しくて、何だかたまらなかった。

「それでは、第五章です」
顔を上げた。お腹に力が入る。天神様はそう言うと、一つ咳払いをして私の顔を真っ直ぐに見直した。惹き込まれる瞳……強い引力だった。私の目を捉えて決して離さない、決意や真のこもった瞳。そしてそのまま天神様は息継ぎとともに、ポツポツと言葉を坦々に語り綴っていった……。

「『第五章 “救世主”……」

或る時 玄武が降り立ちて 地に死という名の雪を降らしたり

其の時 救世主という名の人間 自らの血と肉をもって 玄武を
奥深くへと 封印す

また或る時 朱雀が降り立ちて 地に死という名の光線を浴びせ
たり

其の時 救世主という名の人間 自らの血と肉をもって 朱雀を

奥深くへと 封印す

また或る時 青龍が降り立ちて 地に死という名の風を吹きあらしたり

其の時 救世主という名の人間 自らの血と肉をもって 青龍を奥深くへと 封印す

また或る時 白虎が降り立ちて 地に死という名の毒をまき散らしたり

其の時 救世主という名の人間 自らの血と肉をもって 白虎を奥深くへと 封印す

救世主は自らを生け贄として捧げ 四神獣の腹を満たし生涯を遂げるものとす

満たされた四神獣は 封印という名の眠りに陥りたり』」

……そこで途切れた。

……。

……。

辺りは、シーンと静まり返っている……。

「……死という名の……」

ヒナタが私の背後で言った。私は振り返る……何も考えずに。

それからヒナタと目が合ったけれど特に何もお互い返す事はなく。私は前に向き直した。そして皆の反応を待って……でも。誰もが固まってしまっているようで、動き出そうという雰囲気は暫くなかった。

「生涯を……」

マフィアが声に漏らす……それが堰を切った。

「救世主を……」

「生け贄……?」

「生涯を遂げるだ……?!」

皆が皆でまくし立てる。ざわめきが激しく私の背後で口々に暴言を交えて飛んでいった。

「……どういう事だ! 勇気が死ぬとも言うのか!」

「説明して下さい。納得がいきません!」

「……ふざけんな! ……畜生!」

皆は怒っている。本気で言っているのがわかる。それぞれが地面を叩き、手が震え、目は血走っていた。沸々と、心の底から感情が沸いているのがひと目でわかる。

でも天神様は落ち着いてそれらを見守っていた。何も言わずとも落ち着いて。

私は……。

私だけは……メンバーの中で、私だけは……。
黙っていた。

「勇気! わかってんのか!? ……お前、死ぬんだぞ!」

誰かが私の両肩をぐいと引っ張る。私を向けさせたのはカイトだ。カイトの顔が私の真正面にあつた。怖い顔をして。

私は相変わらず何とも言えない顔をして。無反応な顔をして……。
他人事だと思っていたかった。

天神様の言葉を思い返した……

『生涯を遂げるものとす』

いきなり。どしんと、重くのしかかってきた。何かが私の中に。

それでも何も言葉も感情も出ては来なかった。

「神獣……青龍は、異世界の少女の肉が好物なのだ。そこで、七神

の力のエネルギーを凝縮させ、それを持って救世主 即ち『生け贄』は、青龍の体内に侵入する。それからエネルギーを解放し、内側から青龍を攻撃するのだ」

天神様は続けた。

「しかし、それでも青龍は倒せない。だが青龍を体内から刺激する事で、睡眠作用が働き数百年余りの眠りにつく事ができるのだ」

それが青龍を大人しくさせる法。手段。私が皆の、七神として集めたエネルギーを持って青龍の中へ入って。そして、解き放つ。そうすれば青龍は

「生き残れた救世主は……」

セナが呟いた。まだ夜の暗い周囲の中、小さい声のはずがよく響いてこだまさえ聞こえた。

生き残れた救世主は……

天神様は首を振った。

「ゼロだ」

一同は金縛りに襲われる。

「一度体内に入った者は、二度と出ては来られない。青龍とともに封印され 朽ちていく」

朽ちていく……。

私の中に植えつけられたモノ 死。今まで散々と頑張ってきたというのに、結局行き着く所とは……私の未来とは……ねえ……？ 誰の顔も見られない。

「何とかならないわけ……ちょっと！ そんな顔しないで、何とかならないの！？ あんた、神様のくせに！」

一番後ろに居た蛭が興奮して叫んでいた。紫が落ち着いてと両肩に手を置いている。皆は一斉に後ろを振り返っていたけれど、また

前の天神様の方に向いた。そして。

お通夜の最中みたく、だんまりとした時間を過ごして。やっと私は口を開いた。でもそれは……皆を笑わせるものでは断じてない。私は……自分の頬にカツ入れし、しばく思いで天神様の面前で公言する。

ハッキリと言った。

「わかりました。私、やります」

当たり前のように周りは騒ぐ。「勇氣……！」

固まった表情をした私は崩す事はなく、鬼にでもなったつもりで言葉を吐いた。

「私が生み出し招いた事です。責任をとります」

セキニン、なんて滅多に使いたくないなと思いながら。思いが伝わればいいと思った……思う。

(私が鏡を割らなければ……あんなものは生まれなかったんだ、か……ら)

そう思う事で悲しさがまぎれるような気がした。現にそう。妙に心の中がスカツとしてきていた。ああこれが……『けじめ』って奴かもしれないよね。うん。

うん、何だ。簡単な事だったじゃないか。私が死ねば、済む事だ……何をそんなに悩む事があるんだろうか……。

変なの。皆が悲しそうな顔をしている。何で。

こんなに楽なのに……。楽なの。に。変なのお……。

「似ています……あなたも」

天神様は目に影を落とし、私を見据えていた。何？

「代々の救世主　白虎の救世主、氷上も。同じ瞳をしていました。私は、救世主には毎回。元の世界へ帰ってもらっていたのです。もうこの世界には戻ってくるなど言いつけて。それでも彼女らは帰ってきた。……今のあなたと同じ瞳をして」

私と同じ瞳を？……自分じゃわからないけれど。どんな瞳をし

てるんだらう？

辺りを見回してみても、皆の沈んだ顔しか見えなかった。

私一人だけが置いてきぼりみたいだ。どうしてこんな風にしか思う事ができないんだらう。私は……私は……。

私は！

その時だ。そばで誰かが立ち上がる。

セナだった。

あまり音も立てずに、手をついて立ち上がる。

天神様に、いや、誰に向けてでもなく突然に言い切った。

「青龍を倒す」

私を含め皆が呆気にとられて、立ち姿が締まるセナを見上げていた。突然何を、とでも言いたげな皆の注目を一身に浴びて、セナは段々と感情的になって声を荒げていった。

「救世主一人に全てを負わせない。ココは俺達の世界なんだ。黙って見過ごすか！ ……俺の命くらい賭けてやる。責任は、一緒にとる。何度でも同じ事言っぞ……」

俺の命くらい、く れ て や る 」

そんな事を言い放ったセナだった。「セ……」私の震えた声が出かかった。

今度はマフィアが立ち上がった。

「そうね……そうよ！ 私の命くらい、あげるわ！ 一人にはさせない」

そうしたら今度はヒナタだ。

「無駄死にはゴメンだ。青龍を倒すために、俺も命を賭けるよ！」
次はゲイン。

「おうよお！ 辛気臭い顔をしょってからに。戦わずしてどうなる

うか！ 自分の命くらい賭けられないでどうする！？ おなごをみすみす死なせるなんざな！」

「どうせなら戦って死にたいさ。ココまで来たならカ、カイト。」

「同意です」

「七神じゃないからって、のけ者にしないでよ！」

忘れちゃいけない紫螢のコンビ。

全員、立ち上がった。いつの間にか。

正座していた私は、立ちあがった皆に囲まれている。一体いつの間にか？ ああ……。

あたたかかった。

セナが、ニツと口元で笑う。

「決まりだ」

私と、天神様を見下ろしていた。呆れている私達を面白そうに見ている……呆れた。

上手い言葉が見つからないじゃないか。全く

「ありが……とう……」

いざって時に言葉って使えないものだったんだね。だって顔が熱くってさ。

涙が邪魔してるんだから……。

《第56話へ続く》

第55話（青龍、封印とその法）（後書き）

【あとがき】

変な力が入ってしまふ。あてててて。

ブログ第55話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-127.html>

ありがとうございました。

第56話（快樂と苦しみ）

「いい子ね、青龍。私の言う事は何でも聞いてくれるの？」

と、青龍の大きな頭の上、両角の狭間に乗っていた『もう一人の勇氣』は優しく微笑みかけた。少しの意地悪さを込めて。真意は分からない。

青龍は無反応だった。聞いているのかいないのか……返事は期待できそうにはなかったようだ。

『もう一人の勇氣』　勇氣から生み出され形成されたもの。何もかも全く知らなかった勇氣とは違い、最初から世界の事はほとんど見通していたという。

自分は勇氣の影の部分だと。光のある所は好まない、裏で生きる。勇氣には悟られずに隠れて……。

……　本当は気がついてほしかったのかもしれなかった。だからか、徹底して隠れていた訳ではなかった。夢の中を伝って転々と……。

「青龍、あなたを復活させたのが私だったって事、分かっているみたい。利口ね……」

この『勇氣』が、害となす青龍の体から放たれる異臭にも毒素にも耐えられて平気でいられるのには、青龍の施しがあったからだった。それはこの『勇氣』全体を薄く丈夫に包んでくれている膜の張ったバリアー。何故、青龍が護ってくれていたのかは不明である。

この『勇氣』は、広大で黒く混沌とした下界を見下ろしながら、青龍に乗って。もうすぐ訪れるだろう朝日と、勇氣達に。大あくびをした。

「倒せるものなら、倒してみせなさいよ……勇氣」

勇氣達や天神達を乗せた空飛ぶ島は、青龍の居る方向へと狙いを定めてそちらへと雲の中を駆け抜けていた。一度は青龍から逃げてきたもので、逆戻りをする事になる。

これから何が起きる、起ころうとするのか。勇氣には皆目見当がつかなかった。

しかし内から湧きおこる不安や恐怖といったものは。セナ達のおかげで今の勇氣にはあまりない。セナ達が言ってくれた決意　青龍を倒す。救世主一人に全てを負わせない　それが。

勇氣は、嬉しかった。

決意が固まる。

さあ行こう。青龍と、『もう一人の私』の元へ　と。

「レイは何処に行つたんだろうな……」

セナがぼやいた。勇氣とセナは座り並び、スカイラールのそばでまだ眠り続けているハルカとともに居た。遠く森の中から肉を焼き焦がしたにおいが、深緑のにおいと混じって風に乗る勇氣達の所へと運ばれてくる。

マフィアや虫達が朝食の用意をしているらしかった。

横になってハルカが寝ている傍らには勇氣とセナと。ハルカを挟み対してカイトやゲインが居た。ヒナタはマフィアの手伝いに行っている。

天神達は操縦室へ。下界や青龍達の様子、動向がとても気になつてしまふのだろう。腹わたの煮えくり返りそうになる思いを噛み締めながら、偵察していると思われた。

青龍の所に辿り着くまで腹ごしらえをしておこうという提案の後、マフィア達が用意している間、勇氣達は手持ちぶさたになり、セナがいきなりにも問いかけてみた。

レイの所在を。

レイは、青龍を復活させるための“四神鏡”の、最後の一つだった卵らしき物の形を割って力を解放させた後。爆発か衝撃に消され

て何処へ行ったのか行方知れずになってしまった。

死んでいるのか、生きているのか。

天神にさえ分からないのだろうか。何ともレイの存在は宙に浮いたままの状態になっていた。

「レイが居ないと、封印もできないよね……」

勇気がそうセナに返す。分かりきっていた事ではあったが、つい言ってしまった。封印は、七神が揃って初めて可能となる処置のはず。一人でも欠けた場合、封印は不完全になってしまうのだろうか……。

ほんの束の間でも、青龍の破壊行為を止める事ができるなら、それでもいいのではないか。

勇気は空を見上げて、そんな事を思う。

『四神獣 万物を惑わし 必ずや破壊を導く 恐るべき獣なり』

ブルブルと、勇気は首を左右に激しく振った。良くない考えを払拭する。

考えすぎるなど……自分を戒めた。

「心配するなつて。何とかならあ……倒せばいいんだ、倒せばさ」と、セナはノンキそうに笑っていた。

勇気も少し笑いながら「そうだよね！」と前を見直した。ハルカが寝ている前を。

島は止まる事はなく、朝日の光で色の染まっていく空を走り続けた。

到着前に朝ご飯が待っている。

「う……」

『もう一人の勇気』は苦しみ、胸のあたりを強く押さえた。押さえ

て掴んだ制服にできたシワは、無数にも及ぶ。むず痒い苦しさが、『勇氣』を襲った。「うう……」

青龍の頭上で暫く身を固めうずくまって過ごした後、少しずつ楽になっていった。時々、こうなる……『勇氣』は、もう何度目になるのかが知れない苦しさの狂想曲にうんざりを覚えていた。そしてつい思っままに言ってしまう。

「ふ……勇氣……いいわねあなたはそうやって皆に愛されて。護られて……」

心の中も同様。言葉だけでは足りない“気持ち”は、『勇氣』の全体を支配している。

(あんたが笑うたびに、傷が一つずつ増えていくのよ……)

誰も聞いてはくれないけれど、と。『勇氣』は言葉を吐き出す。やり場のない思い。行く所のない苦しさを。……吐く。

「あんたの影なんて……なりたくなかった」

回想をする。勇氣の見てきたもの、聞いてきたもの。『勇氣』は全てを知っていた。

月夜祭。セナに指輪をもらった時。

摩利支天の塔。蛭が仲間になった時。

“セント・ブリッジ聖なる架け橋”でセナと話した時。

元の世界から戻ってきた時。

魔物と戦った時。街で買い物をした時。

南ラシー又国王と話した時。

最後の七神を見つけた時。

セナと再会できた時。

仲間とともに過ごして誓いを立てた時……。

思い出す。勇氣の笑顔。

とても嬉しそうに。子供らしく笑って。

辛い事など、その時は忘れて。
幸せそうだった。

なのに何故。

『勇氣』には、それを苦痛にしか味わう事ができない。

勇氣が笑い喜びで満たされれば満たされるほど、『勇氣』には苦痛でしかない。

そんなカラクリが、“勇氣”という合わせて一人の身にお互い起こっているのだ……そしてそれを知っているのも『勇氣』だけ。勇氣は知らない。

負の部分を負う。

『勇氣』は青龍に這いつくばりながら、何もかもが憎らしくて体が沸騰しそうに熱を帯びていた。

(どうして……どうして私ばかりが苦しまなければならないのよ……
…おかしいわ)

その代わりに。

勇氣が苦しめば苦しむほど、『勇氣』は悦を得る。それを知っていた。

(もっと……もっと苦しめ。そしたらもっと私は……)

楽になるのよ、と。声に出さずに飲み込んだ。

やがて上半身だけを起こした『勇氣』は、青龍に命令する。

「青龍。勇氣達を追いかけて」

ウオオオオオ……

金物のような響きと合わせた唸りを青龍は上げた。同時に、自由気ままに空を浮遊していた体はそのうちに進行方向を一方に定め、進んでいった。ユラリユラリと長い全長はくねらせ、動いたびに皮膚からこぼれ落ちた毒の粉は地上に降りかかる。

「いい子ね……あなただけよ。私の気持ちを理解してくれるのは……」
青龍とともに進行方向を見つめていた。風切る中を、時々目を細めながら。

この先に勇気が居る……勇気をもつと苦しめてやればいい。もっと近くに居れば居るほどいいに違いない。きっと楽になれると。

この苦しみから逃れる事ができると。

『勇気』は信じた……

『人間は精霊とともに この世で生きる道を選びたり
しかし 人間と成ることのできなかつた者 存在す
これが獣なり 』

第三章、“四神獣”の章の一部が『勇気』の脳裏に蘇った。獣、
とは

『人間と成ることのできなかつた者』

「……私も、勇気から生まれた出来損ないなの……」
何と、『勇気』の目から一滴の涙ひとしずくが流れ落ちていった。

そんな、勇気と『勇気』の気持ちが交錯する中。島と青龍はやがて対峙する事になるだろう。距離は確実に縮まっていった。

天神は考える。青龍の封印を。

問題は一つ。レイ……闇神。七神の一人が欠けている事だ。

封印は、不完全でも成るものなのか。

天神には分からなかった。試してみた事は無論ない。

しかし、もしできるなら。やってみる価値はあるのでは、と。

天神は決心し、勇気達が集まるキャンプ地へと赴いた。

「封印を……ですか？」

茶碗を持ちながら、勇気は天神が座する手前をボンヤリと見つめた。

森の入口付近で。マフィアが作った鍋の中の雑炊を茶碗に移して食べている。獅子の子供に似た小動物をヒナタが捕まえてきたので、さばいた肉を焼き火で焼く。後は味を付けて、それぞれは焼き火を囲んでお腹を満たしていた。

持ちかけられた『封印』という法。勇気達は忘れていた訳ではないが、レイが居ない以上、考えには入れていなかった。

「こちらの動きが気がつかれているのかどうだかは不明だが、青龍のあちら側は我々の方へ近づいて来ているらしい。このままだといつか衝突する事にはなるが。青龍を倒すと言った……その熱意は買おう。だが、やはりどう考えても無理だ。無謀すぎるとしか言いようがないのだ……四神獣を倒すなどと」

と、天神は頭を抱えていた。白く長い、艶で光る絹のような髪は、これ以上に白くはならない。しかし顔は青ざめている。

「お主達の力では、奴は倒せん。それが分かりきっているからこそ、代々救世主を呼び、生け贄として捧げてきたというもの。奴を倒すなどと……甘く考えるな！」

最後、語尾を強めて言った。はち切れんばかりといった風に……途端に辺りはシンと静まり、パチパチと火の粉は上がっている。

セナの、怒りを込めた重厚な声が響く。

「……勇氣はまだ13歳なんだぞ……まだまだ生きられるじゃねーか。どうして……」

箸を茶碗の上に置き、睨んでいた。

「何が救世主だよ。そんなの、こっちの世界の都合だろう……？」
本当は叫びたいだろう、セナの叫びのような気が全員にしていた。だが黙ったままで、箸を進めている。

勇氣も、セナと同様に空となった茶碗を下に置き、箸を上へと置いて揃えた。

勇氣は、ありがとう、と心の中で呟き。セナの思いを断ち切った。
「もういいよ、セナ。私、やるだけはやってみるから。封印も、倒すのも」

勇氣は、持ち前の元気よさで皆の前にさらす……天神も皆も、それに救われていった。

「方法を教えて下さい、天神様。私……青龍を封印してみますから」
焚き火の火は、赤々と消える事なく燃えている。

食事もう終わろうとしている。

全員が……固唾を呑んで押し黙っていた。

日は昇った。さあこれからという時が来る。

勇氣達を乗せた浮かぶ島の正面から、青龍はその姿を現す。

記憶にも新しい龍の、滑らかな曲線を描くその体躯。蛇のようにぬるりと長く、見るに湿り気を帯び、よじらせて暴れていそうで……

…日に反射して青くウロコは光る。

先についた頭は大きく、伸びた鬚は枝垂れ風しだにあおられ横へと流され。ギョロリとした眼の奥は、色がついてはいるが遠目にはわからないでいた。

頭にはざくり、ざくりと突き刺さったような角が2本……体毛は荒々しく、もじゃりと白っぽく生えて後ろへと流れている。

頬を切り裂かれたかに見える大口から、牙や白黒のいびつな歯が見え隠れしていた。

呼吸の隙に黄色い息を吐く事があるようだ。浴びると猛毒だろう、臭そうな息……顔の正面から攻める事など、不可能に思えた。

「私が七神、あなた達をサポートしましょう……飛べるようにします。そして、全身に防護の膜を張りましょう……それで精一杯。健闘を祈ります　それぐらいしか、できないが……」

と、天神は申し訳なさそうに言った。

勇気達はとんでもない、充分ですと全員が一致し、大きく頷いている。

「天神様をお護りします。それと、操縦と。こちらにそれらはお任せ下さい　ご無事で」

天神の影でアジャラとパパラは言った。

武器を持つ。

セナ、カイト、紫、ヒナタの腰には短剣を持つ。ゲインは長剣、マフィアはムチを持っていた。そして持つ全ての武器は、最高峰と言われている鉱物“オリハルコン”製だった。竜をも斬れると評判を受けてはいるが……目で確かめた事のある者はココには居ない。

各自、武器を持つが主体はそれではない。魔法、肉弾戦など、それぞれの得意とする分野で活躍するつもりである。セナやカイトは魔法を、マフィアは魔法と武器のムチを。ヒナタやゲインは体を張った格闘戦で、紫は武器の長剣と格闘で。

それらを頭に置いていた。戦い向きではない蛍は天神の元で待機し、いざという時のために備えるという形をとる事にした。

残るは勇氣。手には“光頭刃”を構え、青龍ではなく……体毛に隠れ潜んでいる『敵』に向かって目を鋭く光らせていた。

準備はでき上がっている。

戦闘が始まるうとして時が迫ってくる……

勇氣達は並んで広がり、しっかりと落ち着いていた。

天神はすでに勇氣達の護衛に取りかかっている……防護された服の上から、シユウシユウと煙が細白く立ちのぼり、身を護る。

軽くジャンプすれば飛べるのだらうと予想されるほど、身の体重を軽く感じていた。

(いよいよ始まるのね……緊張しちゃうな……)

勇氣は列の真ん中から、一步出た。島の岬になった崖で、神剣“光頭刃”を突き出す。

ちようど太陽の光が当たりキラリと輝いた。神の剣。神に選ばれし者が持つにふさわしいであらう、究極の剣。人は斬れないと言うが……？

(青龍もあの『私』も、斬れるような気がする)

妙な確信が勇氣にあった。どうせすぐに証明されるべき事だろうと思ひ意気揚々だった。

不思議と、怖くなくなっていく……緊張は、ほどかれる。

勇氣は叫んだ。

「『もう一人の私』……聞こえてる！？ 私よ、勇氣よ！ あなたの片割れ。私達は青龍を倒しに来たの……倒せなくても。封印してみせる……！」

大音量は、めいっばい空に響いていった。勇氣はもう一度繰り返す。

「倒す……封印する！」

それはとても気持ちのよいものだった。思わず、『勇氣』が顔をしかめてしまうほどの爽快感。胸のあたりがチクチクと、棘刺す痛みに襲われた。

歯を食いしばり、歯ぎしりもした。

「倒す……封印するですって……？」

嫌な汗がたぎる。激情した感情を抑えていきたかった。

握り締めた手はワナワナと震え、『勇氣』は我慢の限界を感じていった。

「許さない……させないわ……倒されるのも封印されるのも。そんな事を……」

できる訳がないと高をくくって。鼻で笑った。

「させるもんですか！」

『勇氣』は立ち上がって堂々としてみせた。

さあやってみると挑戦的に胸を張って正面へ。青龍は吠えた。

「グガアアア……ッ！」

幾人かは、武器のある腰に手を当てた。セナやカイト、マフィアは魔法のために精神を集中の域へと達しさせる。

足を片方、一歩だけ下がりがりやや後ろに体重をかけた。

来い！ ……もしくは、来る！

勇氣は。まず、と。我先にと島の土を蹴った。

《第57話へ続く》

第56話（快樂と苦しみ）（後書き）

【あとがき】

あと5話（ボン）。

ブログ第56話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-128.html>

ありがとうございました。

第57話（接近戦）

一人で食べるお弁当。誰も来ない授業参観。運動会、卒業式……話しかけられても無視されて、陰でクスクス笑われる。

足を引っかけられた事もあった。転んだ事もあった。トイレに閉じ込められた事だって。その上から、水をかけられた事も。

色んな事を思ったよ。死にたいとか、世界が滅べばいいとか。店にかまけて来られないお兄ちゃんなんて嫌いとか……お母さんと手を繋いで楽しそうに笑うあの子が羨ましくて、恨んだ事もあったと思う。そういう“裏”の部分は、いつも心の奥隅にしまい込まれていた。“表”の“良い私”がいつも私を支配していた。

どんなに苦しくても、人前では笑って。今わかったね。

笑う数が増えるたび、奥隅の“裏の部分”が大きくなっていったって事。私は、無理をしていた。し過ぎてた。

……

私は光頭刃を片手に、空へと舞い上がった。空は自由に自分の意思で飛べた。天神様がそうできるようにして下さったからだ。後は飛び上がる度胸……そんなもの、今さら気にもかけない。自分の目の前に居る、この置かれた自分の状況を思えば。たいして怖くもなかった。

青龍。 奴も空中を飛んでいる……くねりながら、止まる事はない。気流にでもなびいているのか。ちっともジツとしていなかった。

私はまだ距離にして青龍から遠くに居るも、高さが大体同じ位置あたりまで浮く。

するとだ。私の背後から、セナやマフィア達も浮き上がってきていた。さっきまで島の地面に足を着いていた訳だけれど、もう地面はない。重力は感じるから逆さまになってしまっなんて事はないのだけれど、少しでも気を緩めたら海に落ちてしまいそうな不安定感がある。

空を飛ぶ、ってアレかなあ。気の持ちようなもの？

（『私』は……）

離れていた青龍を遠目に見てはいるが、『私』が小さくて表情までがとも見えない。

とにかくあそこまで近づかなくちゃ。

私は空の中を進んでいった。

みるみる、『目標物』が近づいてきて……やがて、もう一人の『私』の姿がハッキリと確かめられる程度にまで近寄っていった。

先行く私の背後から、セナ達も追いかけて。私一人だけが青龍の背まで進み。

私は『私』と正面から向き合う形となった……。

……。

暫く、見つめ合う。

薄気味悪くて鳥肌が立ちそうだった。だって自分と全く姿形が同じとっていいほど、そっくりな人物が目の前に居るんだからさ。

「その武器で私を倒すの？」

「！」

私の前に居る人物は、口を開いて何を言うのかと思えば。私が片手にぶらさげている光頭刃を指さした。「……そう」

私が頷き返すよりも早く。相手は先に受け入れてしまっていた。

仕方なしにと冷えた目で私を見ている。私に少しだけれど動揺が走った。

すぐにそれを振り払い、私は言った。

「青龍を倒すのを邪魔するのなら、私があなただを倒すわ」

剣の先を相手に向けて言った。迷ってはいけないと何度でも繰り返す。

「そうね……」

『私』はそう言うと、両手を自分の前に出した……何か落ちてくるものを受け取るうという仕草で、大きく息を吸っている。

そうすると光に包まれた細長い物が、突き出した両の手の上に浮かんできていた。

あれは……。

「剣……」

それは光頭刃じゃない。ただの、細長い、剣と思わしき形だけの物だった。柄があり鍔があり、光輝いているけれど剣先までしっかりと伸びている。刃渡り50センチはあるのだろうか。

『私』は片手にそれを持つ。

「その神の何とやらをこれで果たして受け止められるのかしらね……まっ、試してみるけど？」

と、『私』は冗談っぽく笑っていた。私より目が吊り上がって見えるのだけれど、気のせいかなあ？ ……なんちゃって。

「勇氣。青龍の事は俺らに任しとけ。……お前はあいつを、頼む」

セナが言っていた。

私は後ろを振り向かず、唾を飲み込みながらコクリと頷いた。

わかっている。セナ達には、『私』を相手に戦うなんてきつとしばらく……ううん、できないって事。あれだけ私にそっくりだからね。戦うのは私だけで充分だ。私は不死身の体だし。

『私』も、青龍の背から独立して。私と空中で向き合った……青龍は、周りでうねりながら泳いでいる。無関心を装いながら、近く

遠くと。

「来なさいよ」

私から睨^{けしか}けた。私は剣を横に高く持つて、目線を刃に合わせる。

「それじゃ」

『私』も、ゆっくりと時間をかけて黄金に光る剣を横に持った。そして一回だけ、ピョンと軽くジャンプしたかと思っただらだ。

タタタタツ。

まるで地面がそこにあるかのように、素早く速球に走ってやって

来た　　そして！

キーンッ！

金属と金属のぶつかり合う音。間一髪というか。私はあつという間に接近されたのを、何とか剣で受け止める。クロスになった私と『私』のお互いの剣……相手はグイグイ押しつけてきていた。「なあに？　びっくりした顔しちゃって。来いっていつから来てやったのに」

にいつと余裕で口元が笑っていた。私はといえば押さえつけられて必死だった。「くっ……！」

全身の体重をかけて私の上に乗っかっているみたいで、重い。剣がもしや折れやしないわよねと心配になってくる。でも私の剣は神の剣で、最強なはずだ……折れてたまるかと信じている。

「まさかまだこれが遊びだなんて思っていないでしょうね？　ここまで来といて。甘えっ子の勇気ちゃん？」

私の顔に顔を近づけて私を挑発している。歯を食いしばって耐えている私に対し、息一つも乱れていないさまが憎らしいつたらない。「キレてくれないかなあ……いつかみたいは無意識に暴れまくつてさ。でないと手ごたえなさそうでちつとも面白くないんだけどお…

…」

と、『私』は……横目で青龍の方を見て何かを考えていた。

勇気が『勇氣』と一対一で戦い始めたのと同時間。『勇氣』を下ろし身を軽くした青龍は、全身の体毛を進行する流れに沿わせて雲の中を飛び泳ぎまわっている。

青龍とは……落ち着きのない身のものなのか。動きを止めたり、何処かの地へと降り立つ様子は見せなかった。それは子供のようで、自由でもある。

勇気を置いてきた一同は、青龍の方を追って少しの打ち合わせをしておく事にした。一度戦闘が始まってしまつと、もう集まる機会を得る事が少なくなるだろうと予想していた。

「かさばな風花”、という技がある。奴の周囲の温度を下げて、雪風を作り出す技だ。空中なら使用するには絶好の場だと思う。カイトは？」
セナは青龍を睨みながら集中力を高めていた。それは他のメンバーもだった。

「俺は最初、“つなみ津波”だな。攻撃系の技で手持ちの種類が少ない。その代わりこれまでに段階を経て強化してきたけどな」

カイトは目下に広がる海を見下ろして言っている。ポキポキと指を鳴らしていた。

「サボテン霸王樹”という技を初めて使わせて頂くわ。針千本攻撃……痛いわよ。かなりね」

マフィアはムチを張り構えて気合いを入れていた。存分に暴れまわるつもりだった。

技の使用には慣れている3人とは一歩ほど違い、他のメンバー、ゲインやヒナタは顔を見合わせて少し考えていた。魔法を持たない紫は、短剣を持ってそれらを眺めている。

「じゃあ……“東雲”^{しのめ}を使ってみようかな。光線を刃みたいに変えるんだけど。それに、光の塊を作る“積木”^{つみき}で。この2つを使うよ」
「ふうむ。空中では、使える技というものが限られてしまうかな。まあ、適当にサポートしつつ体を武器に戦うかな」と、ヒナタとゲインが一応、と付け加えて言っている。

「よし。最初は四方から攻めるか……空中戦だから、マフィアやゲインには精霊扱いが困難だとは思う……だからサポートか、他の武器で戦ってくれ。紫も。逆に風、水、日がある時はヒナタも。俺達には有利だ。存分にフル活用しようぜ」

セナはまとめて、楽しげに笑っていた。やる気を十分に……それは他の皆にも移っている。

「了解。その後は臨機応変に。いつもの如く」

「了解ね。各自の判断に任せるわ……信じてるからね」

「青龍を倒す事。それだけだ」

「了解」

「あとそれと」

「何？ カイト……」

カイトの提案が一つだけ。小さな声で、それは皆の耳に触れた。

「……了解」

マフィアの頷きにつき、皆は同意を示して頷いていった……。

「行くぞ！ 青龍！」

セナのかけ声が始まりで各自は一斉に散らばった。四方、または八方。青龍を取り囲む陣で最初は動き出す。

日は高く迫り、天気は良好だった。連なり、白い綿菓子のような丸まった雲。間に筋ついた雲もあるが、春頃に見られるポカポカとしていそうな陽気な青空が広がっていた。これから戦いだと言われ、ても、恐らくは疑ってしまうだろう。

下の海面は光と青で揺れている……たまに、腹を見せた魚の集団やゴミが一緒になって見かけられた。場所を変えれば、赤い海や緑の海が見られるのかもしれないと言っておく。

戦いの火ぶたは切って落とされる。

まずはマフィアの技である。“霸王樹”。背を反らせ大きく息を吸い込み、ムチを持ったままの腕と腕を広げて胸を晒した体勢となったマフィアは、思い切りよく叫んだ。

精霊は、見える粒子となって陸から浮上している……マフィアの命により、無数の精霊達は従って空へ。青龍を中心に数を増やし困んでいった。

青龍は輝く銀色のカーテンの中に閉じ込められてしまったようである。それは惑わしのイリュージョンの世界にでも入り込んだようで美しい光景でもあった。だが。

「霸王樹」!

カツ、と。マフィアの見開いた目からは鋭い視線が飛び出し刺さる。息を叫びとともに大きく吐いていた。

声と同時に。粒子だった精霊は、主に従順あつじだった。

幻想感を漂わせていた空気は一変する。粒子の微細は鋭さに化した。即ち、針と化す。

一つ一つは細かく小さな針だった。しかしそれが粒子の数だけあるとなると。数え切るには、よほど気の遠い話になり神経の参る事は必至となるだろう。

砲弾の針は標的となった青龍に方を定めて向かい、一斉集中発射された。

「東雲」!

ヒナタが、合い間をかくぐって自らの技を繰り出していた。“

東雲” 太陽からの光線が、触れられるだろう直線の刃に変化し伸びてきた。赤から紫へと、虹色に波変わる刃の数はこれもまた、数え知れない。

青龍に向かって突き刺さりに線は走る。

「グガアッ！」

2つの攻めを全て青龍は受けていった。短き針と長き刃を。どちらも突き刺さる。しかし。

プシューウウツ……！ 青龍の凸凹した肌からは、白いガスが発生した。そして始め大人しくたなびいていたガスはそのうちに上空へと昇り、薄くなって消えていった。「あ……」

マフィア達は苦い顔をする、それは無理もなかった。青龍は無傷だったからである。

ちゃんと目でマフィアもヒナタも刺さる所は見たはずではあるが、青龍はガスをまき散らしはしたものの平然と構えていた。針も具現した光線も、溶けてしまったかのように跡形も無くなっている。

2人とも下口唇を噛み締めた。

「津波」！

休む暇など与えない。次は早くも用意していたカイトの攻撃が始まる。海が激しくざわついて、波うねりは猛威をふるった……高波は、天へ手よ届けと伸ばすかのように周囲の海面を押さえつけて飛び出してくる。壁となった。

青龍を高見から包み覆った。だがしかし。

水の壁はザパンと轟く音を立てていながらも、大した事でもなかったかに振舞う青龍だった。水の壁に青龍は動じる様子もなくすり抜けただけに終わったようだった。

「そんなバカなよお！」

カイトは悔しがった。これまでに積んできた鍛練を全否定されたと思えた。

青龍には堪えていない。「最強……何じゃそら」

ハン、と悔しまぎれにカイトは鼻で笑うしかなかった。

苦戦なのは当たり前だと思っていた。勇気も、天神達も、七神も。

だからといって諦めない……最初から負けなど認めるものではないと、全員が誓った。

勇気も、絶対に諦めたりはしなかった。たとえ、力に圧倒されていても……。

「でやああああ！」

「チヨロいわね、勇気！ 剣技なんて教わってないんでしょ！」

それが最もだった。セナに格闘の技を一度教えてもらった事はあったが、戦いには不慣れな勇気は『勇気』に振り回されるしかない。不利は不利で、勇気は焦燥で限界を感じている。

キーン、と金属音は弾き鳴る。せつかくの素晴らしい剣でも、相手からの攻撃を勇気は受け止めるだけで精一杯だった。

（また“あの状態”になれば、きっと……）

『勇気』の先ほどの発言で、ある事を勇気は思い出していた。我意がない状態に陥った時の事を。セナを失った悲しさから現れた勇気の。トランス状態にも見える状態だった。仲間の声すら聞く耳がない危険さではあったが、戦いぶりに関しては攻守ともに最強だった。

今一度、あの時の興奮状態にでもなれば。

危険だという事を押しのけて、その少しの期待が勇気の中に膨らみを見せていた。

はあ、はあと喘ぎながら肩を上下させ、勇気は『敵』からいったん離れて間合いをとる。

このままでは確実にやられてしまう、どうすればと。勇気はつい、よそ見をしてしまった。青龍と戦っている仲間達の方へと。目をやっつて、混乱している頭を落ち着かせようと頑張った。

（ん……？）

勇気は気がつく……『勇気』も、青龍の方を見ている事を。不自然に思えた。

注視していると、やがて『勇気』が勇気の視線に反応し言葉を投

げた。

「あんたを本気にさせるには、やっぱり仲間の一人くらい死ねばいいのよね」

そんな最悪な事を言った。「なっ……」

耳を疑う。しかし聞き間違えではなかった。

「誰がいい？ ……セナ？」

見下し冷笑を浮かべた『勇氣』だが、言っている事の内容が嘘か真かはわからなかった。

まさか

「やめて！」

ググ、と剣を握る手に力がこもった。勇氣の目に真剣味が増したようで、それを見た『勇氣』は声を立てて一笑した。

「あははは。そうこなくっちゃ。別に私が手を下さずとも可愛い青龍があんな連中、簡単に殺してくれちゃうわよ……バカね、攻撃ばかりで。敵意もむき出しで……ああ、ホラ」

と、アゴで方向を指し示した。先には、青龍が居る……。

まるで歯が立たなかった魔法戦を終えてセナ達は、接近戦へともつれ込んでいたようだった。

「どの技もまるで効かないなんて……」

落胆の声を吐き出したのは蛭だった。島の陸上から、遠く彼方を見つめている。そばには天神と……スカイラールの横に寝かされたままのハルカが居た。

天神は両の手を組み目を閉じて、祈りを捧げていた。蛭は不謹慎だと思いついながらも、つい言ってしまう。「神様が、誰に祈ってるのよ」と。

まぶたの中の天神の瞳には、遣り切れない辛さがあった。しかし微笑みが出る。

「本当ですね……誰に願いを乞おうとしていたんでしょう。神、即ち自分にでしうか」

それは自嘲だった。まさかこの神様、死にはしないでしうねと毒舌の蛭は心の中だけで思った。

そんな2人のやりとりの中。気がつかない所で動きがあつた。ハル力である。

目を覚まし、半身だけを起こして蛭達の目先を追つていた。夢の呪縛からの生還に、迎えている者は誰も居ないのかと思えば、そつでもない。

ハル力のすぐ脇横で、スカイラールはほんの小さく鳴いていた。「ピーー……」

紫とゲインは、それぞれが持つ短剣や長剣で青龍に戦いを挑んだ。空は難なく飛べるので、上下左右のバランスを保つコツを掴んでしまえば済みそつな事だった。地面の上で足を着いているのと同じ感覚をもつて、すぐに慣れて助走もかけられるようにはなる。

足でステップを踏みトントンと跳ね続け、青龍の背に乗る事に成功した紫は短剣で青龍の体に突き刺した……が。

「……硬い……」
刃先は肉の中に沈まなかつた。それどころか、なんとオリハルコンでできていたはずの短剣の方が折れ曲がつてしまつていた。

「……」
紫は無言で剣を見る。それほどまでに頑丈であるのだと見せつけられた青龍の皮膚。僅か数ミリ単位の穴も開かなかつたようだった。ゲインも同様である。

彼の場合は長剣で、青龍の胴体部分に勇敢に斬りかかつていつた。しかし、かすつた程度の事だったようつで。青龍にこれといった刺激も変化もなかつた。

青龍は暴れ出した。「ゴオアアアア……」

耳をつんざく雄叫びを上げた後、無茶苦茶に体をよじらせ、長い尻尾の部分が迫ってきてゲイン達に襲いかかる。しかもそれにゲイン達は気がつくのが遅れてしまった。

バシィッ。紫とゲインは勢いよく叩き払われて。大ダメージを受けて下へと真つ逆さまだった。落ちていく。「紫!」「ゲインン!」悲鳴があちこちで上がっている。

「くそっ……俺達は併用魔法だ、いくぞ、カイト!」
セナが呼んだ。「おう!」

次の攻撃態勢は整っている。

「風花”!”」

セナの攻撃。気を極限にまで高めて、精霊達に命を出した。カイトの水の精霊の力と合わせてセナの風は変化をもたらししていく。

青龍を中心に周囲の気温がみるみるうちに下がっていき……零度はとうに超えて。吹き荒れ出した風の中に氷の粒が発生していく。雪風となった風は青龍を襲った。カイトの“津波”を受けて濡れている青龍の体には、相乗に身を凍えさす効果を期待していた。

青龍は渦巻く竜巻の中に閉じ込められて極寒の地獄を味わう。やがて風が治まっていくと、姿を再び現した青龍は氷づけとなっていた。

それを見てセナもカイトも素直に喜ぼうとした矢先。

ピシッ。

青龍の氷に大きな亀裂が走った。すぐに。

パリッ。

氷は砕け散った。物見事にも、砕かれた氷の欠片はヒラヒラと儂く花弁に見えて。下へと落ちていった。

青龍は怒りを見せ始めていた。それもそうで、連続する自身への攻撃にさすがに機嫌を損ねてきたのだらう……青龍は、自分の周りに居るセナ達を敵であると完全に見なしたようで、次々と攻撃に目

を光らせていった。

マフィアも、得意とするムチで立ち向かう。セナは、少し強力さには欠けるが“鎌鼬”や“風車”などで応戦する。カイトも“津波”“小波”と続き連発していた。

一方、攻撃を食らって海に落ちてしまったと思われた紫とゲインだったが、紫は海に落ちる直前に意識を取り戻す事ができ付近の陸地へとゲインを背に抱えて降り立った。

ゲインは血まみれだったが、意識はハッキリとしていて大丈夫そうに見えた、が……。

「鼓膜が破れたな……ワツハツハツ。さすが青龍殿、なかなかやるおる」

顔に付いた血を拭う。陽気さは紫を唾然とさせたが、ゲインの豪快な大笑いにつられて紫の口元は次第にほころびて。終いには一緒になって笑ってしまった。

「さて追いつくぞ。まだまだこれからだ」

ゲインと紫は宙に浮かび、空へと。戻って行った。

ヒナタは魔法攻撃の連続には体が堪えるようで、肉弾戦を試みている。武器となる短剣を振るい、果敢にも立ち向かうが全く相手にされていなかった。体当たりを受けたり、かわしきれず爪で引っ掻かれてしまったりで……ヒナタの服に付着する赤い血は少しずつ増えていく。

ココに居る七神、全員が思い始めている……疲労というもの積み重なり支配を強めていつていた。

青龍は強すぎる。

身に染みてきていた。天神が、今まで散々に言ってきた事でもあった。なのに今さら咳く事でもないと。皆がそれを承知していた。

青龍は容赦なく、体で攻撃、反撃をしてセナ達を苦しめていった。

血だらけになっていきながら。

マフィアは戦う前から背中傷を負っていたが、それもだいぶ先から傷口が開いてしまい、チャイナの服は赤く鮮明な色が付いてしまっている。

赤、赤、赤。

暴れた青龍は毒息を吐く。黄色い不味そうな色をした息は、ちょうど手前に居たカイトに浴びかかった。

「ぎゃああああ……！」

苦しく絞め上げた声を出し、カイトは身を庇う格好になったまま落下していった。「カイト……！」驚いたセナが慌てて追いかけて、油断した。その時だった。

ザシュ。

セナの間だらけになっていた背中を青龍の鋭く尖った爪が襲った

……。

2人ともが落ちていく。

「カイト殿！ ……セナ殿おお！」

ゲインは鍛え上げた自らの肉体を武器にも、戦っていた。諦めなご眼中にもない。

青龍に攻め入り、赤に染められていく惨状を。勇氣は見るに耐え切れなくなっていた。

（力よ……！）

天を仰いだ。

無力な自分を呪った。何も答えをくれない天を憎み、自分を責めた。

だが、青い空に人の顔が浮かぶ……それは、自分が勝手に視界に映し出したただけだろうセナの叫びの顔だった。弱気になるなバカ野郎。もしココにセナが居たら、きつと勇氣にはそう言って叱る

に違いないと思っている。

勇氣は自分の想像力に少し微笑んでしまっていた。

「何笑ってんだか……不快だわ……気でもふれた？」

『勇氣』は無表情で勇氣を見ていた。

「あなたにはわからない」

勇氣も見返す。「一人ぼっちのあなたには……決して」

強気にと、勇氣の内部に変化があった。諦めかけても諦めかけても、不思議とまた這い上がって来れる。それは、仲間の言葉。信頼。それがあつて、生まれ湧いた勇氣のおかげだと。

「あなたに私は殺せない」

『勇氣』を曇りない目で一心に見ていた勇氣は自信を持って言った。ただの開き直りかと思っていた『勇氣』は、勇氣の堂々と真っ直ぐな瞳に何故か拭いきれない畏怖を感じた。

「フン……何を根拠にそんな夢めいた事を……」

だが、『勇氣』の方の内部にも。多少の変化の兆しがあった。

いつからか。『勇氣』から、快樂の　　楽、は……なくなってきた。

「殺せないですって……？　いいわ、殺してあげるわよッ！」

剣を振り上げ　　勇氣に頭の上から振り落とす！

……

勇氣は微動だにしなかった。目は閉じていた。

そのせいで、振り落とされたはずの剣は勇氣の頭上でピタリと止まってしまった。

静止したままの2人に、奇妙な時間が流れる。

「どっして……？」

カタカタと。『勇氣』の剣を持つ手は大きく震えている。何故、

動きを止めたのか。それは『勇氣』自身にもわかっていない事だった。

「何で……？」

少しの混乱が生まれ、徐々に『勇氣』の内に広がっていく。疑問を投げかけた所で、答えなど返ってくるはずはなかった。しかし。

「教えてやろうか？」

2人は振り返る。とても懐かしい声が出た、その主とは。

2人もよく知っている人物。

切り揃えのある青い髪、銀の鎖が耳元にまで繋がった飾り眼鏡。

白の長いコート、革靴、不似合いな手編みの赤いマフラー、手には……引つ提げた“邪尾刀”。

生死を問われていた。七神のうちの一人である閻神、その人。そう、彼の名は。

レイ。

《第58話へ続く》

第57話（接近戦）（後書き）

【あとがき】

切羽詰まっているのは主人公だけではないぞ！
あともう少しで終わりだというのに……（泣）。

ブログ第57話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot.com/blog/130.html>

ありがとうございました。

第58話（「私」の告白）

思わぬ来客が出現し、緊迫していた雰囲気はおかしな方向へと流れていくみたいに思えた。

「レ、レイい!？」

「久し振りだな。救世主……」

素っ頓狂な声を私は上げてしまう。レイの目が、眼鏡の奥で光っていた。私と『私』が向かい合っていたさなか、それより横のやや上空で。私達を見下ろすレイの立ち姿が現れていた。鈍く光る邪尾刀を携えている。

ほ、本物のレイだ!？」

「い、いきなりこんな所に……」

私は見た目も頭の中もパニックになっている。「お前らの悠長さに、ほとほとウンザリしているだけだ」

突然のレイの登場。セナの攻撃を受け、四神鏡を解放してから行方知れずになっていたのに。一体今まで何処でなりを潜めていたのだろうか!？」

「教えてやる、ですって? ……」

『私』は睨んでいる。私に向けられていた剣は引っ込めて、レイの目の奥をジツと見据えてガンを飛ばしているようだった。

レイは嘲笑う。鼻で笑って、今度は『私』の方へと向き直り悪態をついていた。

「救世主の言う通り、お前は救世主を殺せない。何故だかわかるか?」

わかるはずもないと、『私』は黙ったままでレイを見続けていた。

私にも何の事やらと、事の成り行きを見守るくらいしか思い浮かばず。黙っていた。

「……本気でわかってないんだな。簡単な事だ。お前は、救世主が羨ましかったのではない。救世主を独り占めしたかっただけだ」

独り占め……？

レイの、『私』に向けられた言葉がグルグルと頭の中を巡る。何だつて？ 『私』が私を独り占めしたかったつて？ どういう事なの？

私とは違つて『私』は、神妙な面持ちで身が固まっていた。

レイはトドメの言葉を発した。

「救世主を、愛していたからだ」

……

空に浮かぶ島の陸の上では。

青龍の毒の息をまともに浴びて受けてしまい、虫の息である状態にと成り果てたカイトが横たわっていた。そばには天神、蛩と。セナが居た。セナは背中に青龍からの攻撃を受け、爪の跡がクツキリと痛々しくも残っている……天神の聖水を少しばかり与えられ、応急的な処置を受けたおかげで瀕死となる所を救われていた。落ちた場所が幸いだったとも言える。天神と蛩の救助によつて、2人は島まで運ばれていた。

カイトは苦しい声を出している。「う、うっ……」

一度体内に侵入してしまった毒が、カイトを蝕み血管や神経を伝つて臓器、脳を侵していった。天神の聖水の効能では回復までにはなかなか追いつけないようで、肌は全身、赤紫にと色を変えてしま

つていた……大量の汗をかき、息も絶え絶えに。触れると火傷をしそうなくらいに血液が煮えたぎり熱すぎていた。

「しっかりしろよ……！……死ぬな！」

セナの声も今のカイトには遠く。返事は無論なかった。

それがセナに焦りを生み出し、地面に手をつけて必死に何かを堪えていた。そうでなければ出てくるものは、疲労感、絶望感、嘆き、悲しみ、弱気……よくもないものだという事がセナにはわかりきっている。出そうになるのを我慢するしかなかった。

嗚咽を漏らしそうになるのを耐えている顔でいると、背後から誰かが忍び寄ってやって来る……それは天神でも蚩でもない。違う、別の者。

ハルカだった。

「死ぬのか、そいつ……」

ハルカの声に、ビクリと体を起こさせた。慌てたように振り返ってみたセナの顔は赤く硬く、見えないものに怯えているに窺えた。

ハルカはハツ、と短く息を吐いた。

「セナ、お前は優しすぎるな。いつ見てもそうだ。人などいずれば死ぬ……今、お前はこんな所に居る場合じゃないんだろう？」

感情を出さず、ハルカの坦々とした口調がセナに刺さる。人などいずれば　セナには、許しがたい事だった。「わかってる……」

セナは立ち上がった……カイトを真下に見下ろし、それから天を見上げた。

青空は、爽やかな風をくれるはず……セナの張った肩や筋は、少し緩んだ。苦しみ続けていくカイトをまた目下に見下ろして、やがては決断のキツカケを自らが作る。

セナに下された、与えられた使命があったのだ。

それは、カイトが言い出した事柄。提案。

今こそ実行に移すべきだとセナは判断する。

「もし仲間の一人でも、瀕死の状態に陥った時は」……」

青龍と対峙する直前に、勇気を除き仲間内だけで決めた約束事。それを思い返して復唱していった。

「青龍を封印するに行動を切り換えよ」……」

七神のうち、一人でも欠ければ効果は不完全になってしまっただろうからとカイトは補足を込めていた。もし万が一にでも死ぬ前に手を打て、と……。

「実行するのは、その時一番近くに居る者が請け負い、行動せよ」…… 俺 だ」

青龍封印の法。

天神によつて、それは皆に教えられていた。その法とは。

“七神鏡の放棄”である。

救世主は、七神の力の源であるこの“七神鏡”を一ヶ所に集め、放棄された各精霊達のエネルギーを取り出し一つの塊を造り出す。それを持って、青龍の腹の中へと飛び込み果てるのだ。

“七神鏡”とは、セナ達にとってはなくてはならぬ物。世に生を受けた時から生涯ともにあり、僅かにでも鏡に傷を負えばたちまち全身に痛みが走る。そんな神経の繋がった大事な鏡を、“放棄”する事でセナ達精霊使いは精霊とは断絶となり、力を失い常人との差異はなくなってしまうという。普通の『人』として余生を過ごすという事になるのだ。

だがそれは、七神達にとっては辛い事でもある。片時も離れず過ごしてきた友、親や兄弟との別れに似るとでも言っておこう。

責務を背負う役目となったセナは、仲間からそれぞれ“七神鏡”

を回収しに回らねばならないのだった。

「しなければ……カイト」

セナはカイトに呼びかけた。頼む聞こえてほしいと願いながら。
「カイトとやら……聞こえるか。鏡は何処だ？ セナに渡せ」

と、ハルカがセナの真横で同じに呼びかけている。セナはハルカをチラリと横目で見た……ハルカは特に気にもせず、カイトの様子を見守っていた。

するとだ。

カイトの左手がゆっくりと動き出している。

ゴソゴソと、ズボンのポケットをまさぐっていた。

「じ……」

くぐもった声でカイトはセナへと伝えようとしていた。『これだ』
と言いたかったらしく、握り締められたコブシを突き出していた。

セナが手の中の物を受け取り確認をする。コロン、と転がる小さな石の形をしていた。それこそが真正正銘の。

「確かに受け取ったぞ……カイト。お前の“七神鏡”……絶対に失くさないからな」

セナは大事にそれを握り包んだ。一度、皆の七神鏡を見せ合った事があり。それは確かにカイトが出していた物と相違ないと思った。

「『水、よ……我、の、力を、……放棄、す……る』」

途切れ途切れだったがそう言えて。カイトは、せつかく持ち上げた片手を力尽きたように地面へと激しく打ち下ろしてしまった。

「カイト！」

思わずセナが叫んでしまったが。

「安心しろ。まだ息がある。気絶したただけだ」

「休ませてあげなさい。聖水が効き始めたのかもしれない」

と、ハルカ、天神がセナを宥^{なだ}めに入っていた。「そう……だな……」

セナは自分に言い聞かせ、手に握られた鏡をさらに強く握った。

「行ってくる」

セナは素早く空中を勢いよく飛んだ……また、青龍の元へ。

これから、決め事の通りに七神鏡を集め回らねばならない。一刻も早くである。急がなければ、苦戦を強いられている仲間達はカイトの二の舞になりかねないと。急ぎセナは空の中を全力で飛行して消えていった。

一吹き of 風が吹く。とても生ぬるい風だった。ふいに蛍がある疑問を口にした。セナが飛び去った後を目で追っていて、それは突然に閃き湧き出した素朴な問いだった。

「もし……レイ様が七神鏡を放棄して、力を失くし普通の人間に成り下がってしまったとしたら……」

蛍は、即座に自分で解答を見つけ出してしまう……あまり認めたくない可能性の答えでもあったのだが。

「レイ様の闇の力で私達が存在しているのなら、闇の力を失ってしまったら私達は」

ジツトリと嫌な汗で衣服を濡らしながら寝ているカイトを見た。

……微妙に口元を蛍は崩していた。

「……消える……のね……」

小さな呟きに。ハルカは答えていた。

「……だろっな」

……

救世主を愛していたからだ

私の頭には、ガンと。トンカチで殴られたみたいな衝撃を受け

た。それは見るからに。『私』も、同じだったと思う。

「『私』が、勇気を……愛しているから、だと……？」

やはり凄くショックにやられたみたいで。笑いもしないしこれまでの余裕もないようだった、もう一人の『私』……明らかに動揺が見えていた。

「そんなバカな！」

振り払うように否定をする。

それをも見通していた事なんだろうか。レイは動じず、またバカらしく笑っているじゃないか！

「そうか？　なら、何故躊躇ちゅうちゆしている？　救世主をサツサと始末できない？　今に始まった事でもない。これまでの行動、全てに言える事だ。俺やハルカまでをも惑わし、救世主を殺せと唆そそしておきながら最期に踏み切れない……俺は別に、救世主など生死はどうでもよかった。いつでも殺せたが……」

天神様を閉じ込め、アジャラとパパラを洗脳し、自分は神子に化けて、レイやハルカさんを背後から操っていたかと思われる『私』の所業。こうして並べてみれば、それだけ手の込んだ事をしておきながら。結局『私』のしたかった事って何だったつけと考えてしま

う。

世界の破壊。それだったよね？

私という片割れで遊びながら。

レイの言う事もわかってきた気がした。何で私に固執して構うんだらうか？

いつそ……とんでもない事だけれど、天神様を始末してしまえば世界の破滅も手っ取り早かったんじゃないだらうか？

レイの話聞きながら、そんな事を私は思っていた。

「確かにお前は救世主で遊んでいたな？　自分に気がついてほしくて堪らなかつたんだらうが、残念ながら救世主はかなり鈍かつたよ

うで」

ぐさつ。私の胸に見えない槍が刺さった。

レイに鈍いと言われ、そうかも、と納得しきっている自分がある情けない。

だって『私』が堂々と私の夢に出てきた所で、私つてば全一然気がつかなかったもんね……あれえ、何なんだろうみたいなき事しか思わなかったこのノンキさ。罪作りな鈍さだと思う。

レイは楽しんでるんじゃないかというくらい、流暢にツラツラと話し続けていった。

「青龍復活の直前には、わざわざ救世主だけを自分の元へと来るようにまで大げさに仕向けていたというのにな……よほど救世主に会いたかったんだと強く見えるが。よかつたな、無事に対面できて。これでわかつたろう？ ……俺も最初はわからず、お前らの正体を探るために殺さず半端な事をしてきたが。やっと納得できた訳だ……結論。お前ら2人は、同一であるという事だ。お互いがお互いを大事にしているんだろう。愛、と言ったのはただの冗談だ」

ははは、と声を立ててレイは笑っていた。乾いてはいるけれど、楽しそうな笑い方。

……あんまりこっちは愉快じゃないんだけれど……。

……愛、が冗談でアンタ……。

そついやレイに言われて思い出したけれど。火の島で崖から転落した時だって……あの時の事をレイは言っているのだろうか。落ちた先が、見事に何故かセナの幽閉されていた場所。暗がりだったけれど、天井はどうなってるんだろうかとかかなり謎に思っていたっけ。あれつて、『私』が強引に私を招いた罫でもあつたんだ。あつさり引つ掛かってしまった割にはただの不思議っていうだけで特に確かめようともせず、やはり私は鈍感だったと言える。トホホ、本当に

『私』には申し訳なさでいっばいだよ。

それで怖々と。『私』の方を見ればだ。『私』は、レイに随分と好き放題に言われっ放しで肩や手が震えて。こめかみの辺りがピクピクと反応しているのがわかる。言い当てられているのが、悔しいのだろうか。いつもの調子なら何か言い返せそうなんだけれどなあ？
レイの前では、何だか可愛らしく見えてきてしまう……変な感じが抜けない。

私は、はあ、とため息をついた……

「あのさ……ちょっといいかな？」

私は落ち着いてきたのをいい事に、思いを晒してみようと……試みた。持っていた光頭刃は腰の鞘にしまつて。レイも『私』も。私の顔を黙って見ていてくれていた。少し有難かった。

「あなたは……私の影、なんだよね。私がやる事なす事の裏で思っていた心が……あなたを生み出したんだとしたら。なら、あなたはきつと悪くない……私が悪いんだ。私が……ちゃんと合わないから」

嫌な事が嫌だつて言えない自分が嫌だった。ココの世界に来るまでは少なくとも。

「この世界に来て、セナやマフィア達と出会つて。皆が一生懸命に生きているんだつて事が旅をしてきて段々とわかつてきたんだ。皆、死にたくなくて。たとえしょーもないちっぽけな事でも真剣に悩んで。時には、国のためを考えたり、身近で、好きな人の事を思つたり……どれも皆、自分に正直だった。だから、人は行動を起こす……隠したつてダメなんだ。自分に真つ向から見つめ合わなくちゃ」

上手く言いたい事がまとまらない頭を、頑張って整理しながら私はたどたどしく続けていた。

「何度か、旅の途中で私は逃げ出していた。逃げる事で、身を護ろうとしていた。何度繰り返すんだろう……そう思う。きっと……私
が、『私』と真に向き合うまで。そう。あなたと、こうして正面からぶつかり合う時まで。そして。あなたという者の存在を認めるまで、きつと『逃げ』は、永遠に続くんだわ」

やっと辿り着いた。長い旅だった。

そして私は手に入れる。……真実を。

「正直、ホント恥ずかしかつたよ……私の裏側を、人前でさらけ出しちゃったんだから。こんな悪い奴だったんですかって。堂々とさ……でもね。こうやって、あなたを目で見れた事で、自分の悪い所もハッキリとわかって。感謝もしてるんだ。それで思っちゃう。あ、やっぱり私は私なんだなあーって、さ……」

ポリポリと頭を掻きながら。顔が熱くなってきていた。

「もう……今なら。あなたにどんな悪い所があったとしてもよ。自分なんだなって。仕方ないかなあーって。何でも、受け入れられちゃう気がするんだ。そんな風に、最初の頃とは変わったんだよね。だから、さ……もう、仲違いは止めにして。一人に戻らない？」

そうまとめた。

私は変わったんだ。仲間のおかげで。強くなっていったと。

セナやカイト、マフィアに叱られながら。歩き上り続けてきた階段を、何度足を踏み外しかけ。戻ろうと思ってきた事か。

それでもちゃんと頂上に辿り着いたという事が、大きな自信になつたんだ。

もう昔の自分じゃない。私は私だけれど、過去の自分じゃない。だから、私はあなたを受け入れる。その用意くらい出来る余裕と自信がある。

ああ、わかった。自信なんだ。

あなたに私は殺せない。

「いや……」

『私』の手元から、光り輝いていた剣はスウツと音もなく消えた。空いた両手で顔を包み隠している。

……泣いているの？ まさか。

私はドキドキと心臓が高鳴ってきていた。泣かせてしまったんだろうかと。

でも顔を上げた時にそれは違うとわかった。

『私』の顔は表情がなく、涙を流してはいない。

「私は……わた、し、は……」

ガチガチと、寒がつているように歯を鳴らしていた。それは怒りなのか、悲しさから来るものだったのか。しばらく様子を見ていたら。

「私は！」

いきなり思い立ったように、私に飛びかかってきたのだった！

「……！」

ガシリと、首を絞められる。「憎いのよ！ あんたが！」

私は抵抗した。掴みかかってきた手を解ほどこうと、必死になって暴れた。突然でびっくりして、反射的だった。『私』の力は物凄く強くて、とても振り解けない。

どうしたらいいの、と思った時だった。

「やめろ！」

何処かで大声が空じゅうに響いた。レイじゃない別の男の人の制する声。

聞こえた途端に、私はまるで奇跡を感じたのと同等の力を感じていた。

(セ……)

薄目で、前方を見る……。

大事な人。

私にとって、一番の大切な人になったんだった。

(セナ……！)

首を絞めている『私』の背後には、幻かと思われた背高いセナの姿が映っていた。

「その手を離せ！」

セナがすぐに『私』を私から引き離す。乱暴に扱われたせいで、離された『私』は少し離れた所で転んでしまいかけたが、空中で停止していた。

ユラリと傾いた私の体をセナが受け止めてくれる。私は、むせた後に正気を取り戻す事ができて安堵した。

「よく頑張ったな。お待たせ」

セナが軽く笑ったので、私もピース付きで「へへへ」と調子よく笑ってしまった。

その間、助けも何にもしてくれなかったレイが『私』の首元に邪尾刀を当てていて。

「どつする？」

と、聞いていた。

「やめてよー！」

思わず、私はレイに叫んでしまっていた。

「……………」

『私』は観念でもしているのだろうか。うずくまっただけで、苦しげな顔をしている。

「勇気……よく聞いてくれ。それとこれを見る」

セナが私の手をとった。そして広げていた私の手の平の上に、セナが持っていた物を幾つかのせる……それは、石のような物、首飾り、ただのガラスの破片のような……どれも私には見覚えのある物だったのですぐに驚いて声を上げた。

「これは……“七神鏡”！」

セナが大きく頷いた。「そうだな」

いち、にい、さん……3つ。カイト、マフィア、ヒナタが持っていた物だ。確か。

と、いう事は？

「あと、ゲインのが」

と、セナは片手を自分が着けていた腕輪にかざし、その“縮小自在ポケット”から少しばかり大きめの鏡を取り出していた。

これで……4つ。

「俺とお前の指輪とを合わせて5つになる。集めてきたんだ。……これから奴を。倒せなかった、あいつを……」

悔しさと、悲しさを浮かべて。セナは言った。

私は、遠く向こうで小さくその姿を確認できる、“奴”を……見た。

青龍

「もう時間がない……向こうで戦ってくれている皆には、精霊の力がもつ無いんだ。武器と、体当たりで時間を稼いでくれる……」

だから、勇気……」

セナの語尾は、微かに震えていた。

セナが言いたい事は、私にはわかっている。
時間がない。だから。

封印 即ち、救世主の死

……

ついにその時が。

私の最後の……お仕事。

「うん……」

私は、“七神鏡”をそれぞれ両手の上に預かる。セナの指輪も。

一つずつ、外してもらって。

持ちきれないかなと、そんな事を思いながらだった。すると。

「私のも忘れないようにな、救世主」

すぐそばで。声がしたので振り返るとだ。

「ハルカさんが居たじゃないか。」「ハルカ……さん」

セナも驚いて見ている。レイとハルカさんに関してはいつも瞬間移動で現れるものだから、本当にびっくりしてしまうね。

「受け取るがいい」

私達の驚きなんて面も食らわず。ハルカさんは首にいつもつけていた黒いチョーカーのシルバー飾りから、赤く光っていた宝石を取

り外して私に差し出してきていた。

「それが……」

前に。ハルカさんが技を繰り出した時に、煌々としていた代物だった。だからきつと思ひ込んでいる。

「私の“七神鏡”だ……“放棄する”」

サッパリと、言つてのけた。私はいいのかなと不安そうにそれを受け取った。

途端。

ハルカさんは、まるで地面を失つて。空から真つ逆さまへと落ちていってしまった！

「ハルカさん！」

海に落ちた。水しぶきが立ち、姿が見えなくなった。そんな！？力を、失ったからだというの！？

そうしたら今度は、だ。

「受け取れ、救世主」

また振り返る。違う場所からの声……レイだった。

レイへと目を向けたと同時に、何かが私の方へと飛んできた。私が慌ててしまっていたからかセナが代わりにキャッチしてくれた黒っぽいそれは、まさしく。

「鏡……」

黒い光沢のある鏡。手の平サイズで、他の鏡と違って重量感があった。

「レイの……鏡。『閻神の鏡』なんだね、これが」

少し感動さえ覚える。だって、レイが私にこれを投げ渡してくれたという事は？

「閻の力よ……“放棄する”」

レイの重い、底から低音で響いている声が私にしっかりと届いた。
「レイ……!!」

涙が出そうになった。胸が熱くなってくる。

レイの考えている事なんてわからないし、どうしても今まで説得なんて諦めに近く、辛かった。だけれど。

信じて、いいのだろうか？ 裏切りではないだろうか？

レイの表情を探ってみたって全然わからない。

レイは余裕綽々しゃくしゃくで周りを見渡しているだけだった。

「ありがとう……!!」

私は手に持っているだけの鏡を力いっぱい抱き締めてお礼を言った。それから、私の手の中にレイの鏡を受け取って。私の腕かかえの中には、鏡で溢れてしまいそうになった。

これで“七神鏡”は、7枚全て揃った事になる。

「じゃあな……」

レイも。

海へと、支えを失ったように 落ちていってしまった。

「は……」

腑抜けた声を私は漏らしてしまった。何故ならば。「うわっ……」
レイが落ちていくのを見届けた後だ。

ポツ、ポツと。鏡のそれぞれから、別々の色で淡く光を放ち出したのだ……!!

「眩し……!!」

ひと抱えにしている格好のため、両腕を自由に使う事ができないでいた。目をきつく閉じて光を直視しないようにして固まった。

赤、黒、緑、黄、青、紫、茶……七色の、光……。

……

どれくらいの時間が経過したというのだろうか。

恐る恐る目を開いたら、鏡は全部なくなっていた

「!?!」

一気に背中が凍りついてしまった。私はもしやまずい事をしでかしたんだと思った矢先。

私の額の辺りで、光と温かさを感じた。

「……………」

白い……光の塊があった。淡い、優しい色彩を持っている。自然で、見ていると分け隔てなく癒してくれる効果を期待してしまいそうだった。なんて壊れそうで儂く、威厳に満ち溢れている光なんだろう。私はそれに触れてもいいんだろうか。おこがましいんじゃない気が先に引けてしま……

「勇気……大丈夫だ。俺も一緒に行くから」

「え?」

……………?

光の塊を受けようかどうかと迷っていると、セナがそう言った。

聞き間違い? と。私はパチパチとマバタキをしてセナを見ている。「だから」

セナは私に近づいて、肩の上に手を置いた。「俺も一緒に、奴の中に」

再度、言う。

「へ？」

私ときたら、やっぱりわかっていない。「だーかーら！」
イライラしてきたのか、セナがバンバンと私の背を叩くじゃないか。

「一緒に青龍に食われるんだっての！」

口を尖らせていたのに、次に見たら吊り上がってニッコリと笑っていた。

「そ……」

そんな、と言いかけて。セナは「行くぞ、時間がないからな」と聞かずに私の肩を押し出した。

な、なんて無茶な。そんな事！

「ダメだよ！ 死ぬのは、私だけで……」

と、私が言い返してみるけれど。
「いやだ」

と、一点張りで聞きはしなかった。こんな所でわがままぶりを発揮されても私は弱い。人間、正直がいいとはさっきも思っていましたよ、言いましたとも。ええ、ええそうですとも。ええ！

参ったなあ……でも。

(嬉しいよ……嬉しい……)

……泣いていると、またせつつかれそうだなと思って。私は一歩とセナとともに空の地面を前進して行った……仕方ないよね？
セナが強情なんだから。もう……。

皆の、思いの詰まった鏡の 精霊の光よ、ココに。

これを持っていくんだね。青龍の体内へと。そして封印する。封印できる。

それで全てが終わる。終わるんだ。長かった時が、やっと。

平和がやって来る。

皆が望んで、望んで、望んでいた、平和が。やっと……。

待ち望んでいた平和が。

我が身を捧げて……私の一生と、引き換えに

「……させないわ」

私の気が緩む。すっかり油断していた。

さつきレイに刀で押さえられ、大人しくしていたもう一人の『私』だ。最後の抵抗だった。

「勇氣……あんたが、“死んでもいい”なんて。そんな事させない。私は嫌よ。絶対に嫌！」

立ち上がっていた『私』は、混乱していたようだ。私とセナの前に飛ぶようにして駆けてきた。

「あ！」

光の塊を奪われてしまう。

「思い通りにさせるもんですか！ 勇氣、あんたは私の」
「いとも簡単に光の塊を奪い取った『私』は、サツと姿を消してしまった。」

「待て！」

「待ってえ！」

一体どういうつもりなのか。跡形もなく消えて私達は残されて。

私とセナは、青龍と激戦になっている大事な仲間達の所へと急いで飛んでいった。

《第59話へ続く》

第58話)「私」の告白(後書き)

【あとがき】

レイとハルカは天神の加護がないやと思ってドボン。ま、しゃーない。

ブログ第58話(挿絵入り)

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-131.html>

ありがとうございました。

第59話（最後の夜）

青龍は、ヒナタ、ゲイン、マフィア、紫と。複数を相手に戦っていた。

七神の持っていた精霊の力は鏡の放棄により、失ってしまった。与えられているのは、天神の加護による防御の覆いと、空を浮かぶ事のできる力。そのみ。

あとは自力で。

最高峰と言われたオリハルコン製の武器は、紫の一撃で折り曲げてしまい。使えない事がわかっている。

自らの肉体を張って時間を稼ぐしかない。皆の理解は一致している。

時間を持たせる。救世主が、戻ってくる時まで。

青龍封印をするべく集めた鏡の力を持って、戻ってくる時までである。

「うわああっ！」

ヒナタは、青龍の腕のひと振るいの際に発生した風圧だけで吹っ飛んでしまった。

何処かの陸地へと下って行ってしまふ。「ヒナタ殿ー！」

ゲインが叫んでも、下降は止まらなかった。陸の、森の中へと消えてしまった。

一瞬の隙が命取りにもなる。

ゲインが傍らを気にしたために、次の青龍の攻撃は避けられなかった。青龍のくねった体から流れ続いていた尾の先は、ゲインを攻撃する……これも風圧程度で、体と体がぶつかり合う直接攻撃ではないものの。ゲインは悲鳴を上げて海へと飛ばされてしまった。

そしてマフィアでもある。背中に大傷、比べて小さな傷は体中に

ついでに、肌の色は赤く熱を帯びていた。息は苦しく、攻撃のたびに小休憩をとる間隔は増えて長くなっていきつつある。ついに限界がきて、少し遠めの陸地で倒れ込んでいた。

紫は……。

一人、残された紫は。

ただぼうつと空で停止し青龍を正面から見つめていた。

紫の、闇の力と木でできたような造りの体は見るからに傷みを表している。皮膚は服と一緒にになってポロポロと剥がれかけており、血は出ていなかった。普通の人間なら臓器や肉、骨などが飛び出さるだろうが、蜚の力で造られた紫の体の中は黒い空間……闇が、集まっただけでいるらしい。神経が通っているのかどうかは、紫の表情からでは不明である。もしや紫自身、痛みを感じていたとしても、それは単なる思い込みによる痛みなのかもしれない。

ともかく……紫の体は、崩れかけていた。

それと言うならば、天神の加護など、気休め程度にしかならないという事である。

(これまででしょうか……)

諦めに近く。紫の表情に翳^{かげ}りが生まれた。息の調子は変わらないが、ひとり、ひとりと七神が海に落ちていくのを見ているうちに、喪失感が大きくなっていく。

それは自分の体から失っていく支えだった。

恐らく、最後に残ったものは。

(死ねますか……?)

自分は人間ではない。では、どのように自分は果ててしまうのだろうか。考えた所で想像などできない……いつそ早く見てみたいものだ。紫は思っていた。

青龍の眼光が強さを増していく。

爆弾の放射能を浴びる静かな恐怖、をこれから体感でもする心境だった。どう防御していいのかわからないでいる。

しかし攻撃は眼からではなく、その下にある大口からの毒吐息だった。

「……………」

無防備だった紫を、青龍は容赦なく襲った。青龍にとっては口ウソクの火を吹き消すくらい規模なものだったに違いなく。簡単にそれを紫は食らってしまったという。

(……………)

目を閉じて。紫は落下していった……………左腕一本が、同時に割れ離れていってしまった。

紫の、迎える死というものは 誰が決定するのだろうか。

海に落ちる。

泡を激しく、海中で紫は囲まれていた。体が、いったんは重く沈み、緩やかに底へと近づこうとする。

なすがままだった。楽をしようと。もがく事もなく、水中に身を預けている紫。

できたらこのままで深海へと進み、眠りたいという……………欲求が紫の中に本当ならば、人らしかったらだろうか。

(蛍様……………)

戻ろう、と。紫は目を開けていた……………。

人形の性^{さが}か。自我というものは、あれど最優先に押しやられる。

(戻らねば……………蛍様の意思、自分への命^{めい}、だ、……………か、ら……………戻らね……………ば……………)

途切れ途切れの意識は、途絶えない。

もしや体の組織がすべてなくなるまで、紫に死は訪れないのかもしれなかった。

少年の体つきをしてはいるが、無論。年は取らない。

(……?)

意思強い力を突如に感じた紫。グイ、と。体ごと、上から引っ張られるような感覚がした。釈迦のとてつもなく大きな手で、紫の小さな体が掴まれてしまっているような感覚が。

紫は見えない力で海の上へと強引に引っ張り上げられる。

そしてなんと宙にまで浮いた体は、ある方向へと移動させられていた。

天神や蛭達が居る島へと。距離にしてはすぐそこにあつた。数キロで済み、紫は降り立つ。

「蛭様……」

紫のか細い声は、小さかった。宙を浮いてぶら下がっていた足は地面に辿り着いていて。水が紫の髪や衣服から滴っていた。天神と蛭はグツタリとして寝ているカイトを看ていながら、七神の戦いをきちんと見守っていたのだった。

「御苦労様、紫。お疲れ様……」

島へと天神により引き上げられた紫を、蛭が出迎えていた。ゴミ箱に捨てられた人形が動いているくらいに奇妙で、割れた木やヒビの入った顔、と壊れかけている紫の体を。蛭は言葉で労わった。目は、潤いを含んでいる……紫の目に蛭の顔が映っていた。

「どうされて……?」

紫は自分の身の事より、蛭を心配していた……蛭は、紫の傷んだ体に胸を痛める。お互いが、お互いの事を思っている。

蛭には、もう一つ。胸を傷める理由がある。

それは先ほどに生まれたばかりの問いだった。

いや、……答えだつたかもしれない。

サワリ、と。空気が動き微風が発生した。

蛭と紫のそばに、出現した者が居たからである。

鶯うぐいすと、隣に紫苑むらさきだつた。いつもと変わらない服装と口振りで、まずは再会の挨拶をする。

「や。蛭とブアイソ。酷い格好だね。無様」

腰に手を当てている鶯は持ち前の皮肉で鼻にかけて笑っていた。

黒い瞳はやはり黒い。全身もタイツと、真っ黒である。

紫苑は坊の服装で、頭に毛は生やしていない。裸足だつた。これが2人のいつもの容姿。蛭と紫は、懐かしさと驚きで満たされていた。

「もう……終わりはすぐそこまで」

紫苑の落ち着き払つた口調は同時に静けさをも呼ぶ。蛭に湧いた驚きは、治まつた。紫苑の語る言葉は、ちょうど蛭の持つ疑と答に触る。「やっぱり……」

横分けした髪がそよ吹く風に揺れて……蛭は肩を落としていた。

鶯が、何を思つてかハハハと声を立てて笑い出した。

「僕らはどうせ用済みじゃない。鏡をもう集めなくていい。レイのお望み通りに、青龍は復活。僕らの残された使命って何？ さくらは、レイの用が済んで消えた。僕らはまだ生かされているけど、そのうちレイが消してくれるよ。……あー、やっと終わるんだ、全てが。ご苦労サン」

首を回したり、手足を屈伸したり。深呼吸をしている。紫苑が補足した。

「レイ殿の指示があるまで待機に徹していたが……皆に、言いおいておかねばならない事柄があるな。鶯、蛭、紫。我ら四師衆の末路を」

蛭の口唇がきゅっと締まる。聞く覚悟は整えた。

紫苑の底重い声の発するは、続いていた。

「レイ殿が精霊の加護を放棄するにあたり……我々は闇を失い鵜の言う通り、消失するだろう。それは変えようがない事実。我々は、まもなくだ。まもなく……この破壊されつつある世から、姿を消す。だが、覚えておいてほしい。レイ殿は……」

森で小鳥のさえずりが聞こえた。

まだ世界は滅んではない。こうして、生きているものがまだ少くない。

光ある限り。

「世界の混沌を許し、自らのあらゆる闇を捨て去りたいと思っただけなのだ……」

レイが、抱えてきたもの。

それは、ひと言ふた言では言い表し尽くせない。短時間ではとても。

紫苑にもそれが充分にわかっていた。わかつてはいるが、時間の足りないもどかしさが苛立ちと焦りを伴って紫苑を支配しようとしている。

懸命に、顔には出さないように紫苑は務めた。

やがて、視界の空気が薄くなる。

そろそろと、終いは近づいてきたようだった。景色は色を変えて、存在を弱く儚く。徐々に『終わり』を見せ始める……

四師衆4名。彼らの存在が、希薄になりつつあるためにそう見えていくのであった。決して世界が消えるのではない。消えるのは……彼らの方だった。

「じゃ、お先に」

鶉の、バカのように明るい声が。先陣を切つて。「バイ」

片手の2本指を立てて頭の上へとかざしながら……笑顔で消えた。

「無に還る」

同じく薄くなりつつある紫苑も、後を追う。

「蛭。紫……レイ殿、皆よ……そして……」

目を細め、数分前に小鳥が鳴いた方向へと顔を向けていた。

紫苑がこの世に生を受け、愛してきたもの。万物、自然……存在するもの。ありとあらゆるものに対して、感謝の意を込めていた。

「ありがとう」

……

空気に混じり、溶けたようになくなった。

「さらば……」

今まで黙っていた天神が、初めて口を開く。言つに声かける言葉が見当たらず、やっと出せるに至った声だった。

蛭と紫は、お互いの顔を見合わせて。次は、と少しだけ笑つていた。

「今まで……私のために。こんなに傷ついてくれて……ありがとう、紫」

蛭は無邪気に笑つて、子供らしくはしゃいでみたりした。紫は残された片方の腕、右腕を差し出す……蛭の手をとろうとしていた。

急いで蛭が紫の手をとつた直後。

「はい……」

四師衆は消えた。

一人残った天神は、空を仰ぎ呟く。

「静かな時を……」

消えゆく命に向けてのせめてもの祈りを。安らかに、と。
捧げていた。

「勇氣とセナは、焦りに焦ってもう一人の『勇氣』の行方を血眼になつて捜していた。」

「何処よ!? 何処に行つたのよおお!」

勇氣は泣き叫ぶ。

セナが必死になつて仲間から集めてきただろ七神の鏡による“光の塊”を、いとも簡単に奪われてしまったからである。奪つた『勇氣』は、サツと鮮やかに消えてしまつていた。

このままでは、時間を稼ぎ勇氣を今か今かと待ちわびて、傷ついていつている仲間にし訳が立たなかつた。

ウツカリとしていた己の気の緩さ甘さを痛感している勇氣。セナはそんな勇氣を励ましながらも、視野を広げて空中と、目下の地表を隈なく捜して目を奔走させていた。

「居た! 勇氣、あそこだ!」

空中で、割と簡単に見つける事ができた。セナはすぐさま勇氣を呼ぶ。

「何処どこ!?」

「青龍の 正面だ! …… 奴は何を考えてるんだ!」

セナが指さした方向には、言った通りに青龍が居た。大きく口を開けて……正面に浮いている『勇氣』らしき人物を、飲み込もうとしていた。光が一点に見えるのが、奪われた“光の塊”に違いないと思われる。

勇気とセナ、2人には訳がわからない。これから何が起きようとしているのか。

セナは勇気を突然手で抱え出し、「行くぞ、早く！」と慌てて飛び出していた。

奪われた“光の塊” その行く先とは。

青龍と向き合っている『勇気』。七神は全員海か陸に落とし、四師衆はすでに消え。攻撃や邪魔をする者が居なくなつた青龍は、身が軽くなつたと喜んでるのだろうか。鼓動に合わせて動きを活発に見せながらも、飛び回りを止めて空で大人しく場を動かないでいた。

『勇気』は、あるのかないのか、怖さなどおくびにも出さず青龍に尋ねている。

「どうして私を食べようと思わなかつたの？ 異世界の娘が好物なんじゃなかつたっけ？」

返事を待つが、青龍は攻も防もせず。『勇気』を見てはいるが、反応はしなかつた。

“光の塊”を持つ『勇気』は仕方なく、ため息混じりに自分で自分を納得させる。

「私が……そうね。所詮、勇気とは違って生身のない、実体のない者だからかしら？」
寂しげに言った。

勇気、から。分かれてきた身である『勇気』。いわば勇気という少女の影である。

レイに、ふざけではあつたが。痛い所を指摘されていた。自分が

勇気から離れられず意識は常に付きまとい、意地悪を　　底辺へと貶めてしまおうとするのは、愛だから……だと。

恐らくは愛という大げさなものにまでは行かないだろう。そんな事よりもである。

『勇気』は、勇気が好きなのだ。それに気がついて見方が変わる。

今までで『勇気』は、胸が張り裂けそうになってきた苦しみを解消するのは勇気への痛みだと思ってきていた。勇気が悩めば悩むほどに自分は楽になれるのだと思っていた。

実際、そうでもあっただろう。何故なら、もともとは一人の人間だったのだから。

しかしそう単純なものでもなく。苦しみの原因は、他にもあったという事だった。

……自分を大事に思う事なのだ、と……。

「わかった……私、わかったのよ……勇気、あんた達のおかげで……私は……」

勇気の方も、わかった顔をしていた。そして、『勇気』に向かって言ったのだ。

一人に戻るう

影である自分の存在を許し。排除しようというのではない。“受け”ようとしているのだった。

自分の非、逃げを認めて。仲間達のおかげで。

勇気は強くなった。

それを今度は『勇気』が、認める番なのだともいう風に。

『勇気』は、取り残されたようであらった。敗北感の方が勝ってしまったている。

勇気には、七神達が居る。けれど自分には誰も居ない。

『勇氣』が青龍に関わろうとするのは……。
「寂しいよ……」

その時だった。

寡黙の青龍が、語り出す。
くぐもった声質で、重層に響いていた。

『我は……太古なる昔に。始め人になるために生まれてきた……』

通じる言葉と発音だった。言葉も意味を含み、それは人と会話をしているのと差異はない。正直驚きだった『勇氣』は、畏縮してしまっただが話を聞いているうちに抵抗感はなくなっていった。

『だが人には形成されず、このような不便な体に……人と成れた者の、なんと羨ましき事なのか。人は我を姿と見で恐れるが、我も人を恐れようぞ……』

「あなたも怖いのか？ ……獣なのに」

聞く『勇氣』に悪気はなかった。青龍は獣、に反応を示している。『人に成れぬ、そのような者が4つ。四神獣なり。神獣、とは名ばかり。古代の天神の手によってではあるが、一度生まれし者は滅び以外に救いはあらず。死するも我、恐れによればこそ叶わぬものなり』

『勇氣』は、青龍の言いたい事が理解できた。要するに。

神獣も元は人である、人になるはずだった、と。

人と同じく恐れがある。死ぬ事は恐ろしくできない、と……そし

て。

『我は神にも見放され、……孤独である』

聞いた『勇氣』の脳裏に、“七神創話伝”の第六章がよぎった。

『第六章 “天神”

世界を統治し 運命を見守る神 天神といふ
始まりは孤独 そして種だった
種は精霊をつくり 生きる者全てを生んだ
しかし天神は 癒されることは無かった』

「天神もひとり。四神獣も。救世主の片割れも。ひとり、ひとり、ひとり。」

皆がひとり、孤独。孤独がある。

結果どうなったか。孤独は、闇を生む。

レイがそうであったように……。

「今さら一つには……戻れないのよ、勇氣……」
と、『勇氣』は“光の塊”を見て思っていた。一度分かれてしまったものは、再生できるとは思っていないかった。戻れた所で。新しく前向きに歩き出そうとしている明るい勇氣に、損、もしくは負担があっても得になるとは到底思えない……目はそう言う。

「さよなら……可愛い、もう一人の私……」

“光の塊”を持ったまま、『勇氣』は前進する。

向かう先は、青龍の開けている大口だった。

暗黙の了解が双方の間にある。そのための語りでもあった。青龍は死にたがってはいない。『勇氣』は勇氣に戻りたがっているわけではない。

残された道とは。

「待ってえええ！」

「おい、待て！　　おい！」

遠くから、少女と男の声……追いかけても間に合わない、制する
勇氣とセナの叫びの音がする。

（幸せに……どうか）

『勇氣』は、青龍の腹の中へと進み……後は。
伝説の通りである。

『この世に四神獣　蘇るとき　千年に一度　救世主ここに来たり
光の中より出で来て　七人の精霊の力　使ひて　これを封印す
七人の精霊の力とは　転生されし七神鏡
これを集め　救世主　光へと導かれたり
満たされし四神獣は　また千年の眠りにつく……』

救世主　光へと導かれたり。

満たされし四神獣は　また千年の眠りにつく。

……

空飛ぶ島は、進路を“魔窟の海”にある“光の輪”へと向けて飛

行っていた。

島の内陸奥深く、森に埋め隠し尽くされているように囲まれて建つ天神の神殿内。白い神殿の造りは半壊状態となってしまう危険地帯となつてはいるが、真下の地下に操縦室というものがあり、そこで島を船として操縦する事が可能となつている。

アジャラとパパラは、操縦全般を任されて。外部の見張りも兼ねてともに居た。

島は、元居た“光の輪”へと帰るだけなのだが、途中で寄り道をする事になつている。

寄る所　　ラグダッド。

かつて、勇気が元の世界へと帰るために訪れた地。バサラ村。

役目を終えた勇気は、自分の世界へと。“セイント・ブリッジ聖なる架け橋”を通つて帰る事になつていたのだった。

「よく……話の決着がつかしましたね。天神様。てつきり、もっともめるかなと思つてましたけど……」

と、操縦席に座つていたアジャラは後ろに立つている天神に尋ねた。天神は外部の様子を立体映像を通して眺めている。

外の景色は特段変わった様子はない。夜の海が広がっているだけだった。

「散々に言われました……鬼のようでしたね」

天神は苦笑いをこぼしている……パパラも、含み笑いで応じていた。

「すごかったなあ……特に風神や。救世主を元の世界に帰さなあかんで言い出したら、無茶苦茶な抗議の嵐。あとの七神達もぎゃあぎゃあ言つてたんやけど、結局。肝心の救世主本人が皆をなだめて話がまとまつたつちゅう。渦中の本人が一番冷静で。あー頭痛いで」
そんな風にパパラは肩を竦めていた。

「仕方ありません……秩序を守るためなのです。用が済みましたら、役目を終えた救世主は……帰すがよろしいと判断します。でない」と、

何処でどんな歪^{ひず}みが生じるのか。予想もつかない事です。事が起きてしまつてからでは、手遅れや悲劇となるのですよ」

天神の言葉は、重く皆の上へのしかかつてくる。

青龍は封印された。七神の“光の塊”を持った『勇氣』を腹に取り込んで。

安らかな眠りへと。再びに眠りへと……新しき床につく。

「なんや氣い抜けたわ……」

パパラは、アジャラの座る席の背もたれに寄りかかった。同感で、アジャラも深く息を吐きながら答えている。「本当にね……」

平和はやって来る。これからである。

その前に。

「明日、救世主を帰して。それから……」

操縦を窺いながらアジャラは考えていた。夜の中を島は駆けていく。時速はとても遅く、目的地到着までにはまだまだ時間がかかりそうだった。

遅いスピードで、どれだけ時間をかけたとしても。方向転換でもしない限りいつか必ず島は辿り着く。

救世主とは、別れなければならぬ。

どうしても。

「こうしたら……どうかしら」

突然アジャラが言い出した。「え？」

パパラが、アジャラに反応して振り返ってみると。アジャラの手には杖があった。いいとも悪いとも何とも言えない、珍妙なデザイン
の杖である。ほぼいつも手に持ち歩いている物だった。

「何を……」

アジャラの杖は、振り下ろされた……操縦部分を破壊する。

グワキッ。

ポーン。

金属破壊音と弾けた電子音が飛び出した。「あああ!？」

パパラは仰天した。天神も目を丸くして口をあんぐりと開き驚いている。

煙まで立っている壊れた操縦席に、アジャラはケラケラと笑いながら自分の大胆さを威張っていた。

「これで帰るのが延長しますね。早速修理の方を始めます」

皆の思う所は一つ。

勇気との別れが惜しいのだった。

勇気、セナ、マフィア、カイト、ヒナタ、ゲイン。

別れを告げてスカイラールは自分の巣へと飛び立ち、帰って行った。すでに居ない蛍達とはさよならを言えなかつたなど、天神から事情を聞いた勇気は悲しみ残念に思っている。

もう夜も更けていた。日が変わっている夜半。重くも軽くも負傷をしているメンバーは、それぞれに寛いでいた。一番にダメージを受けていたのはカイトである。体内に侵入した毒はなかなか抜け切れる事ができず、何度もカイトは生死をさ迷い皆を心配させていたが、様子見からやっと回復の見込みを見せ始めたようで、周囲は安堵に包まれていた。

傷の方はマフィアとセナが重く、包帯を何度か巻き直している。

ゲインも頭など、ヒナタも全身に。包帯が足りず、服を破つたりしながら協力して手当てに忙しく働いていた。

勇気も手伝いながら、「ごめん」を繰り返し皆に笑顔で返されていた。

「皆無事じゃないか。カイト殿も助かりそうだし。何を気負う事がある」

と、ゲインにカカカと豪快に笑われて。

「そうよ勇気。皆無事ならそれでいいじゃない」

マフィアにも励まされて。

「とにかく休ませて……怒ってないよグウ」

とヒナタはカイトの隣で倒れるように寝てしまった。

治療がひと通り終わると、勇氣は頑張って料理に挑戦してみた。

重傷のマフィアを気遣ったの試み。いつも兄や、マフィアが料理をしている所を見ていた勇氣は自信を持って……。

想像にお任せしよう。

食事を終えた一同は、早く寝て休もうかと用意をし始めた。もうすぐ勇氣とは別れが来るとは知ってはいても、全身が疲れて悲鳴をあげているのにはかなわない。休息が必要だった。

「勇氣。ちょっと」

「え？」

シートを敷いたり焚き木をまとめたり。作業をしていると、勇氣はセナに突如呼ばれて肩を叩かれた。「話がある」

首を傾げながらも、勇氣はセナに付いて行き。キャンプをしている地から離れて森の入口付近まで歩いていった。

繁みは涼しげな風に騒がしく揺れ、夜の暗さの中では騒がしさは騒がしいとは素直に思えず……静かだと感じるのは、心が落ち着いているからだと言いはれ、勇氣は詩人になつたつもりでいた。

セナが振り向き、まずは勇氣を見る。

勇氣は何て言われるんだろうと、呼ばれた時から歩いてくる道中ずっと考えていた。

治療の前に繰り広げられていた、天神との言い争いを思い出しながら。

「なーんか納得いかねえ。お前もそう思わないか？ 勇氣。お前が……帰っちゃうなんて」

激しい論争バトルだった。勇氣にはこの世界の秩序を守るためには帰ってもらった方がいいと、天神が言い出したために起きた、いざこざ。セナ達は抵抗した。言い返した。そんなもの、何かが起きた時に考えたらいいからと……必死になっていた。しかし天神は、一度決めた固い信念を曲げるつもりは毛頭なかったという。

結局、勇氣が最後に決着をつけていた。

「もう止めよう。会えなくなるのは淋しいけど……仕方ないじゃない！ 私も、帰った方がいいかなあーって思ってたし。それに。ひよつとしたら、どっかで会えるかもしれないじゃない」

パン、と。両手を合わせて叩いてみせたりした。話はこれまで、と言いたげに。

勇氣のそんな振舞いが思い出された。

今セナは腕を組みながら、難しい顔をして勇氣を見ている。勇氣は頭を掻きながら、申し訳なさそうに謝った。

「ごめんなさい……」

セナは、「いいけど……」と、顔を見た後に視線を下にと落とし、それから暫く、2人の間に無言の時間が訪れる。

勇氣には、どうしていいのかわからなくなった。わかるのは、唯一。

胸が痛む事だけ。

「離れたくない、けど……」

顔が上げられずに、勇氣は込み上げてくるものを我慢していた。

「本当は離れたくない。けどね……」

言葉の後が続かなかった。

勇氣が謝っているのを見てセナは、徐々に遣り切れなさがしぼんできたよう。急にグイと勇氣の身を片手でだけで引き寄せる。

勇氣の髪を掻き混ぜながら、「ちきしょう！」と残った怒りを吐

き出した。

セナにも、どうしていいのかわからなかった。心の整理がお互いつかないままに。

もっと 時間がほしいと、2人は……思った。

《第60話へ続く》

第59話（最後の夜）（後書き）

【あとがき】

最後の時間がないという2人は、作者もだよとか思う。切に思う。

ブログ第59話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-132.html>

ありがとうございました。

第60話（帰郷）

いつの頃からだっただろうか。

“闇”が、己を内から侵食し、支配を始めていったのは。

「ハルカ……」

枯れ草のはびこる土壌が一面にあった。そこから外れて、海にも近く。雑然とした石や砂、草木が広がる地面の上で、びしょ濡れのハルカは寝かされていた。

水滴が、眠るハルカの顔面に垂れ落ちていく。見守る方も、頭から足先まで全身が濡れているせいだった。

「目を覚ませ……もう、悪夢は終わった」

区切りをつける。底の深さも長さも大きさも、得体の知れない相手とは繋がっている鎖を断ち切りたかった。

恐らくは、それが本望。

『世界の混沌を許し、自らのあらゆる闇を捨て去りたいと思っただけなのだ』

世界に投下された闇。拭い去ろうとしても、力は及ばず。これが運命だと決めて諦めを繰り返しても、さらにまた次の新しい闇がやって来る。

打ち克つには、光だ。光がいる。

光さす方へ。

そこにも、闇という敵は形をつくり獲物を待っている。

光……力、知恵、運、意志。何でもよかった。武器となり対向できるものならば。

力がなくても知恵がある。知恵がなくても運がある。運がなくても……生き抜けと自らを叱る意志。闇も生き残ろうと必死だ。おかげで強大だった闇も身を削り弱まり大人しくしてくれる。『俺は、そんな闇が』。自分も闇の一部だ。それを認めてやらねばならない。闇を許し共存を選ぶ代わりに、ひとりになる事を選ぶ。闇を周囲にばら撒かないために。ひとりを選んだ。

それがレイだった。

今は『闇神』としての能力を失っているレイに、日光が空から明るく降り注いでいた。

数分間と待ち続けていても反応のないハルカ。レイは押し寄せてくる後悔という波に、浮かんでいた。どうして。

どうして……一緒に連れて歩いた？

氷づけにしてまで。

何が、自分をそうさせたのか。天神の所へと赴く前の話。まだ闇には触れるに浅い頃の話だった。天神という、はかり知れないものに憧れて。真っ直ぐに、前を見る。

天神の地から去り、やがて自分の“闇神”としての運命と世界を握る、影の存在と正体が明らかになった時。

レイは、意志を示した。行動を起こす。

ハルカを追いかけた。

“七神鏡”を放棄し海に落ちた……ハルカを追って落ちて、近くの陸にまで引つ張り上げてきた。

上空の彼方では救世主やセナ達が青龍と戦っているとは知りながら、この先、そちらには関与する気などは全くなく。青龍が封印できればそれでよし、できなければ世界の破滅という死。単純な未来だ、レイはそう割り切っている。

それよりも大事な事があるから関心はないのだ……レイの行動に深く関わっている。

「迷惑をかけてすまない……」

レイは自分の身勝手さも、言葉足らずで簡潔なものも承知していた。ハルカの思いも。自分と同じく、闇に支配されていく様子も。知りながら。とてもわかっていながら。

我慢するしかなかった。

だからか、氷づけにした事をずっと悔んでいる。すがりつき追いかけてくるハルカをもっと拒絶し……いっそ。手にかけてしまえばよかったのか、と……。

レイはハルカの手を取った。力を込めた、そのせいで震えながら再度謝る。

「すまない……」

目を閉じれば過去は蘇る。ハルカとの交流の始めから。長きに渡り、レイのまぶたの裏で思い出は印象に残るものほど鮮明に、華麗で優雅な演出を施されて展開していくのだった。ハルカが起きない時間には、相応しい演目で。

不安を誤魔化して……救われて。

それでも、時々是不安が膨れ上がる。

「レイ……」

レイは……ハルカを見た。

危うく記憶の回想の中で埋まってしまうのに気がつけず、聞き過ぎ所だった。耳は、確かにと小さな声を拾う。

ハルカは起きていた。レイを見つめて。

マバタキを繰り返しながら徐々に意識を呼び起こしてきていた。そして次にかけて言葉は。

「愛してる……」

闇の見張りである呪縛から解き放たれて。

2人は、やっと通じ合えるに至る。ココまでにあつた道は、例えるなら茨トゲの。棘トゲに刺されながらも、棘を避けながらも歩いてきた……時の道のり。

幼少の、バラが2人の未来を示唆していたのだと。ハル力は納得した証拠に笑みを浮かべていた。

残念な事に。花は一輪すら手元にはない。祝福もない。

レイがハル力を抱き寄せる。それだけで。

2人には満足だった。

「それじゃ……」

雲の隙間から、太陽が輝いている。門出を祝っているかのように私の頭上で明るくサンサンと……晴れているのは空であって、気分は曇りかもしれないなあ。

ためらいがちに別れを告げようとしてみるけれど。踏ん切りがつかないでいた。

島は先の目的地、ラグダッドに着いている。港や市場、外に人の姿が見えないのは、皆家に引きこもっているせいなんじゃないかな。青龍は封印されたけれど、本当の安心を手に入れるまでには時間がまだまだかかりそうだった。

私と、セナ達と、天神様と、アジャラ達。総動員でズラズラと列を成し、ある場所へと私が案内しつつ辿り着いた。廃墟と化した神殿。坂を上って、見えてくる。

古代ローマのコロシウムにそっくりな白の建造物。崩れ傷み、廃墟という名がぴったりで……歴史的な連想を呼ぶ。魔物が出てきた

つておかしくはないんだけど。一匹も、ココで遭遇した事はないんだよなあ。

「懐かしい香りがします……」

天神様は、そんな事を。

「昔、天神様はココに居たわけじゃないんですか？」

と、私は聞いていた。

天神様は、私の顔を横から見て力なく笑っていた。どうしたんだろっ？ 私にはわからないけれど。

「色々とありましてね……さ、道を開きますよ。準備はいいですか。救世主、七神……最後の別れを」

話題を変えて、天神様は促す……私は少し元気なく俯いてしまった。

準備つて……いつまでもこのままじゃ、整わない気がしてしまう。さよなら、つて。笑つて。天神様が開いてくれる、“セイント・ブリ聖なる架け橋”を渡って行けば、向こうの世界に帰れる……はず。わかつては、いるんだけれどね。

「勇気！」

私を呼んで前に出てきたのはマフィアだった。「マフィア……」涙を堪えているような、締まった顔つきだった。我慢ができなくて、飛び出してきた子供のよう。

私の手をとつて言った。

「いつかまた……会いましょうね！ 会うんだから……絶対よ！ 忘れないでね！」

涙で潤んでいる。

私の鼻の奥も、つられてかツンとしてきていた。途端に、内から感情が湧きおこってくる。

このまま皆ともお別れ。実感が、やっと遅くも出てきてくれたみ

たいだ。もの凄く帰る足に抵抗が生まれた。

マフィアの後ろから、ゲインが歩いてきた。

「勇気殿。達者でな……リカルにも、よく言っておく。皆に比べれば短い間だったが、ともに運命を歩く事ができてこのほど感動した事はない。皆に会えた事、天神殿をお目にかかれた事。生きて帰れる事に……感謝している」

私とは、握手をした。ゴツゴツとした、たくましい大きな手。体温がとても温かかった。

「俺の人生ごと変えてくれた救世主に……お礼を言わせてもらおうよ。ありがとう。また会えたらいいな。そう思う……いつか、また。何処かできっと」

と、ヒナタも寂しそうにこっちを見ていた。

ヒナタ……。

マフィアに、ゲインに、ヒナタ。

次々に、出会った時の事が目に浮かんでくる。マフィアとは、マフィアのお家である飲食店で出会ったんだ。ミキータっていう女の子に連れられて。店は、孤児院だったんだよね。店を切り盛りしている立場だったのに、私を追いかけて来てくれた。凄く料理が上手くて、ほっぺたが落ちそうになるほど美味しくて……こんなお姉さんがいたらいいなって。いつも思っていたんだ。

ゲインとは、最後に出会ったんだっけ。いきなり「俺が最後の七神だ」って迎えてくれて。いいのか、そんなアツサリと見つけてもって、苦笑いしちゃったなあ。

ヒナタとは、同じ年。けれど、辛い出来事があった。両親を早くに、訳があつて亡くしてしまつて……辛かったよね。私も両親は早くに亡くしているから、まるで自分の事のようにも思ってたんだ。苦しかった。

3人とも、名残惜しそうに私を見て涙が見え隠れしている。

困ったな。別れの言葉が……決心がつかないよ。

そうしていると。ゲインやヒナタの後ろから別の声が聞こえた。

「勇気……」

体を傾けて、ゲインの大きな体の後ろを覗くとだ。セナに肩を借りて、カイトがこちらに向かって歩いてきた。「カイト！」

思わず呼んでしまう。青龍の毒息のせいで、回復するために一晩ずっと寝ていたんだ。まだ青白い、血色の悪い顔なので今だって相当無理しているに違いない。

「ダメだよ、まだ寝てなくちゃ」

「だってこれでお別れなんだろう？ ……今、ちょっと楽にはなつたから、大丈夫だ。心配かけたな」

そう受け答えするカイトは、優しくかった。私の頭を撫でている。

「今まで、適当にキツイ事も言ってきたけど……」

と、私の顔を見下ろしていた。

「よく頑張ったな。偉い。向こうじゃ、待っていてくれる人が居るんだろう？ 勇気」

そう言われて。

私は、自信なく。「うん……」と曖昧になって控えてしまった。

天神様が聞いていたのか、横から口を出す。

「勇気。安心なさい。向こうに戻れば、向こうの神がリセットをかけてくれます」

「え？」

予想外の事に、私はどういう事なんだろうと腕を組んで考えてしまった。

「簡単に言えば、です。一度、勇気、あなたが向こうへ帰った時にあなたに関する記憶や情報をほぼ全て消してあなたはこちらへと戻ってきましたね。ですので、あなたが帰る際にはそれを全て解きま……すると、恐らくは。あちらで時は修正され、あなたが元通りに生活できるよう。向こうの神が、手配して下さるはずですよ」

修正。手配。

向こうの……私の居た世界の……神様が？

そ、そうなんですか……本当に？

じゃあ、元の世界に帰っても。私の帰る場所は……ちゃんとあるんだな。

そいつあ、安心だ。安心……。

「そっか……ありがとうございます」

私の事を考えてくれていたんだね。天神様だけじゃなく、皆も、色々と。

私って究極に幸せだ。そう思う。

カイトは気遣いながらか。私の頭をもう一回撫でた。

「じゃ、帰らなくちゃな。向こうで、勇気の帰りを待っている」

お兄ちゃん。

心の中で、私が叫んでいた。脳裏に姿がよぎる。

もし私が居なくなってしまったと思えば。一体どんな顔をするんだろうか。

それを思ったら。

「そう……だね。早く帰らなくちゃ……」

私に焦りが。カイトが付け加えた。

「そうだ。これをやる。前にあげたやつは、ダメにしちまったまままだったるう」

と、ゴソゴソとズボンのポケットから何かを取り出して私に渡した。それは。

「人形！」

「そうだ」

可愛らしい、三つ編みを左右に肩から前に垂れ下げた手縫いの女の子の人形だった。ひよっとしてこれって売り物だった物？

「これを……くれるの？ カイト」

カイトはうん、と首を縦に振った。

「嬉しい……ありがとう！ 絶対大事にするよ」

私は両手で握り締めて。とても喜んでいた。

「もつと時間があればなあ。門出祝いの席でも特別な贈り物でも何でも。用意できたのによ……」

最後に、カイトは意地悪っぽく。あゝあゝと腕を振り回しながら諦めていた。

天神様もタジタジだった。何も言い返せないみたいで。

他の皆も苦笑いで誤魔化している。私も、タハハととぼけるしかない。

「あ！ そっか……」

突然私はある事を思い出して。手荷物の中から、『ある物』を取り出した。

『ある物』とはね。

「セナがくれたこれ、向こうに行っても着けておくね！」

そう元氣にかざした……透明の小さな石が連なった、プレスレット。マフィアも似たようなのを持っていたと思うんだけど、セナが私達に買ってくれた物だった。

「あー、それな。そういえば、あったっけ。忘れてたけど」と、セナはポンと手を打つ。

「戦っている最中とか、落としたらと思って外してたりしてたけどね。ずっと着けておくから！」

今までは、セナにもらった“七神鏡”の一部でもあった指輪を着けていたんだけど、もうそれはなくなってしまって手元が寂しくなってしまったんだ。ちょうどいい。これからずっと、肌身離さず着けておこうと！

セナは「そっか。サンキュ」と嬉しそうに笑っていた。

「勇気！ 私のも、あげるわ。どうかもらってって」

「え？」

マフィアが、手荷物から探してきてハイ、と私に渡してくれた物。それはマフィアもセナにもらっていた、緑の石が連なっているブレス……私のとは石違いの物だった。けれど？

「い、いいの？ マフィア、セナ……」

受け取った私は、困りながらもマフィアとセナの両方の顔を見た。2人とも、ニコニコしちゃって全然いいみたいな顔をしている。

「わかった……うん、大事にするね！」

そんな風に、私が残された時間を過ごしている。その時だった。

ゴゴゴゴゴ、と。地面が揺れ始めた。「うわあ！」

びっくりして、身が固まってしまふ。まさかまた青龍が現れたとか！？

危険を感じたけれど、やがて治まった。

ホツとひと息ついて、辺りの様子へ関心を寄せたら、だ。

大きく輪に光り輝く物体が現れる。

パ……。

私達から少し離れて。天神様のかざす手の先に、光は神々しく出現したのだった。

「橋だ……」

あれが、とカイトは珍しそうに食い入っていた。皆もそうだった。注目を浴びた光の中から、橋が形造られできていく。伸びた先は、光のトンネルの中へと続き、眩しくて見えていない。

“セイント・ブリッジ 聖なる架け橋”。2度目の通行だ。

先には、私の居た世界が待っている。私の通行を許可してくれたから、現れてくれたんだろう……。

「では……」

天神様が、私を促していた。さあ、行きなさい。痛くはありません。何も問題ありません。用意は、万端ですから……何もかもを許すような優しさで、光は待っていた。

「はい」

確かな返事をする私。

足も、ゆつくりとだけれど、光に導かれるように進んで行った。

止まらないで。

振り返らない。

決心が鈍るからさ。

……。

私は、誰の顔も見なかった。

「勇気！ バイバイ！」

「元気でな！ 負けるなよ！ 何があっても！」

「達者で！ 勇気殿！」

「またなー！」

……。

声が、私を後押ししてくれていた。私は、光に吸いこまれていつて影が薄くなってきた。

「勇気……！」

最後に聞いたのは……セナだった。

「また逢おうな……！」

思えば、セナとは。光の中から現れ、光の中へと消えていくんだ。私は。

いきなり森に現れて、疑う事なく迷子同然の私を温かく受け入れてくれて。伝説の救世主じゃないか、って教えてくれたのもセナだった。

そつだ。よく考えたら。

私が冒険をする事になったのも。こんなに、成長させてくれたのも。

セナが、終わりまで見放さず導いてくれたからだ。

(セナ……)

危うく、決心が鈍りそうだったけれども。我慢して堪える。

セナは、優しくかった。時々厳しくて、でも優しくかった。

もう会えない。

でも。

私は一回だけ、皆の居る方へ向いた。

皆の動きが止まったのが見受けられたけれど、私は急いで言い放った。

「また逢おうねえー!!」

最大級の笑顔で、手を振ってみせた。

涙は流さず。

これが最後の私と、皆に覚えてもらえるようにと。

そして……。

私は、今度は前を向いて走り出していた。
遅れを取り戻そうと、一生懸命に走った。
息が切れても構わないほどに。
行き着く先は。

……

……

……

闇？

意識は一度、飛んでいてしまつて。

目が覚めたら、暗闇の中だったんだ。

ついでに、触っている下は冷たい。直に座り込んでいたんだけれど、どつどつやら地面は、岩や石みたいで……。

「ココは何処……」

……光から変わって暗い世界の中へ、ポーンと放り込まれたような怖さを感じた。魔物が、すぐそばで間合いをはかり。狙われているんじゃないだろうか、私。そんな事を思う。

とにかく怖いし、寒いや。

「あれ、出口じゃ……」

暗さに慣れてくると、光を見つけた。というより、元々はあったけれど、やっとそこにある事に気がつけたみたいだった。そこまでわかって、やっとココが何処なのかハッキリわかった。

見覚えのある場所。

うーんとね。

そう。

……港遺跡の、横穴の中だった。よく覚えているよ。

居場所が判明したからか、安心できて私が歩き出そうとすると。土や、いびつな石がゴロゴロと転がっていた暗い地面の中で、足元に光沢の光を見つめる。でも私は拾わず、それを見ているだけだった。何故なら。

見覚えのあった物。

私が拾うのを期待しているのか、そこにあった物、それは。

鏡だった。

丸く、額に特徴的な装飾が施されていて鏡の面を上に向けて落ちている、鏡。懐かしいとも、奇妙なとも言える感覚が入り混じって思えてしまう……今。

鏡は、真つ二つに割れてはいなかった。

確か、私がウツカリ割ってしまったはずの鏡なのに。

拾わず、鏡面を覗き込んで観察してみてもだ。真つ二つどころかヒビさえ入ってはいない……おかしいな。

もう一人の『私』が教えてくれたんだ……鏡の名前は、“透心鏡”で、『私』が言っていた。人の奥底に隠された心を映し出す鏡だったんだって。でも、鏡は2つに割れてしまう。実はそれが全ての始まりで。

私は、2つに分かれてしまったんだ。そこから私の旅は始まる。

始まったんだよ。なんだけれど。

割れていないという事は……一体どういふ事なんだろう？

「とにかく、家に帰ろう……」

疲れたような吐息を出して、私は歩き出した。外の……光が溢れている方へ。出口へと。そこは。

私の世界。

ああ、眩しいな。光って。

手を頭の上にかざしながら、精一杯に目に入ってくる眩しさを遮断して。

おかえり、勇氣。

きつとそう言ってくれているのかも……しれないねと思いながら。私は、遺跡を後にした。

このまま、家に帰るもんだと思い込んでいたんだけれどね。

ところが、そうじゃなかった。

何と、友達のアッコと遭遇する。

遺跡の穴を、出た直後だった。

「勇氣いいい！ 何処行つてたのよお!？」

甲高い声が辺りに響いた。「へ?」

アッコだけじゃない。後から後から、ドヤドヤとクラスメイト達がやって来る。中には男子も居るし、お嬢こと峰山さんだって居る。私への苛めのキツカケを作った帳本人。

私を取り囲み、凄い騒ぎようだった。何なんだ!?

あちこちで「よかったー」とか、「搜したのよお」とか。そんな声が聞こえてきたりで。

「あの一……一体、どういふ事?」

と、聞かずにはいられなかった。すると。

「おお！ 松波。無事だったか、捜したんだぞ！」

やって来たのは担任の先生だ。慌てている。

はあ……？ と、私は相変わらず首を傾げっ放しで。どうしたものが、迷っていたらだ。

先生のひと言に驚愕する。

先生は、私の顔色を見て心配そうな顔をした。

「発掘中、神隠しにでもあったのかと思って皆で捜していたんだぞ。見つかってよかった！」

発、掘、中……？

私の頭の中に謎という名の蜘蛛の巣を張ってしまったようだ。その後、先生が私を車で家に送ってくれている最中でもだ。

巣は、簡単には解けてくれそうになかった。

天神様の言葉が、思い出される。

『向こうの神が、手配して下さるはずです』

私が元の生活に戻るように……そう言っていた。

家に帰って寝た後に、もう日は暮れて夜になっていて。店のラーメン屋のカウンターには、お客さんが4、5人くらいバラバラと居た。

お兄ちゃんが一人、カウンターの向こう側で忙しく働いている。私が出てきてきてのれんをくぐると、明るい声でお兄ちゃんは笑いかけた。

「おう。起きたか、勇氣。よく寝てたなあ。昼は何処ぞに消えて皆に心配かけてたんだよ、全く」

と、お玉を片手に鍋の前にいた。大きな底の深い鍋には、湯気立つ

たスープが見える。

「ラーメン、食べるか？」

「え、あ、うん……そうだね」

スープから流れてくる匂いを嗅いだ途端、お腹がクーと鳴って空腹を知らせた。調理しながらも、手は休めていないお兄ちゃん。眺めていたら、お兄ちゃんが不思議な事を言い出した。

「なあ、勇気。もし暇があったらでいいんだけど」

「ん？ 何？」

「バイト募集、っていう。張り紙書いて貼っておいてくれないか」
ラーメンを運びながら、お兄ちゃんは言った。麺の上に山盛りのネギやモヤシ。チャーシューで飾られている。ネギは増量セルフサービスでカウンターの隅っこに置いてある。

お兄ちゃんラーメンは久し振りだった。思わず涙とよだれが同時に出てきそうになる。

「ばいふお、ぽひゅう？」

ハフハフ言いながら麺を口に入れて。『バイト募集？』って聞いていた。

そういえば、今日はお兄ちゃん一人？

バイトの……ええと、小谷とかいう人は休みなんだろうか？

私は気になっていた。

「やめちゃってさ。急で、人手がほしいんだよ。勇気、明日から手伝えな」

「へ……」

私は変な声を出す。だっただって。

小谷さんがやめちゃった？ 彼女じゃないの？ どういう事？

まさか。

「お兄ちゃん……小谷さんにフラレたの？」

私はズビシとストレートに聞いてしまった。言った後に後悔してももう遅い。

シマツタ、と焦って身を縮こませていたのだけれど。ザク、とい

う包丁の音の後。お兄ちゃんは、ネギを切っている手を止めて眉をひそめながら私を見た。

「はあ？ 何言ってるんだ？ 小谷さんとは別にそういう仲じゃないぞ。お兄ちゃんはな、い・そ・が・し・い・の！ 彼女つくってる暇なんかあるかつ」

怒ってしまったている。

「????」

小谷さんが、お兄ちゃんの彼女じゃない？ 何で？

私は、訳がわからなくなった。

段々と、今自分が置かれている状況が明らかになってきた。

私は、元の世界に帰ってきたものの。思っていたより、時が遡ってしまっているんだという事がわかってくる。今日は課外授業、港遺跡へ発掘に行った日になっている。

私は本来なら港遺跡の発掘中、鏡を割ってしまったてどうしようと思んだ拳句に隠してしまつて……。

小谷さんも、バイトをやめてなんかなかったはずだ。

おかしい。

私が知っている実際と違う。……もしかやこれが、神様の修正？

私は、苛めにこれから遭うのだろうか……？

日が開いて、平日の朝。

私は休みあけの学校に登校し、廊下を歩いていたら。そうすると。

峰山さん……お嬢とすれ違いそうになった。

「先週は、どちらに行つてたのかしらね？ 皆に散々迷惑かけて」

私は無視して過ぎ去ろうとしたのに、お嬢の方から話しかけてきたのだった。

何て答えたらいいのかわからず、黙ってお嬢を見ていたけれど、お嬢は好きに言いたい事を言いまくっていた。

「あなたが居ないからって、先生も大変だったんだから。私だって、昼から出掛ける用事があったのよ？ クラスの皆を巻き込んで、どうせキニンとるつもりなの？ ねえ？」

腰に手を当てて、私に詰め寄ってくる。何でそんな事を言うのだろうか。確かに、迷惑はかけちゃったかもしれないけどさ。

(そんな言い方ってないんじゃない!?)

私はカチンときて、何か言い返そうかと思いついた所だった。すぐそばから。

「ちょっと！ そんな言い方、ないんじゃない!?!」

廊下中に聞こえる声が返ってきた。何処からだを見ると、教室からじゃないか。私の居るクラスの、誰か……？

見て驚く。

何と、私とお嬢の間に割って入ってきたのは。

(えええ?)

制服姿。港中学校の生徒である事は間違いはない。女の子で、ショートカット。ボーイッシュな感じがするのは、日に少し肌が焼けているからかも。

「あら光月さん。あなただって、用事があつたって言ってたじゃない?」

と、お嬢は立ちはだかった。光月さん、と呼ばれた女の子。流暢に言い返す。

「クラスメイトの一大事に、用事なんて後回しでしょ！ 見つかってよかつたじゃないの。なーんでそんな意地が悪い言い方するんだか。呆れちゃう！ 最っ低!」

そこまで言っちゃった。

お嬢、キーと歯を見せながらかなり怒っている模様で。

私はといえば、ただ傍観している。

やがてお嬢は負けだと認めたのか、潔く去ってしまったのだった。

「酷かったわね、峰山さんって。大丈夫？ 松波さん」

「え、は、う、うん。大丈夫大丈夫……ははは」

私は笑いながら誤魔化した。うるたえをあまり見せないように。

「ありがとう……えと、光月さん？」

そしてお礼を言った。

私は、味方になって庇ってくれた嬉しさでいっぱいだった。これでもう、苛めにも遭う事はないんじゃないだろうかと思う。

それは安心するけれど……。

でも、だ。

おかしい事態が目に見えて明らかになってくる。

光月さん　　は、私に可愛い笑顔でこう言った。

「あら、光月さんだなんて。日向……ひなたヒナタ、でいいよ。そう呼んでね。じゃー！」

《第61話「最終話」へ続く》

第60話（帰郷）（後書き）

【あとがき】

次回、最終回です。年末ちよつきり終わりという。連載開始日が2007年11月6日。1年2か月ですか。やりましたな。でも次はどうしよう。悩む所です。

ブログ第60話（挿絵入り）

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-133.html>

ありがとうございました。

最終話（新たなる世界）

私の前に現れたのは、女子の制服姿の。

ヒナタだった。

男でも、ソピアさんでも、ない！

学校の教室で通常の授業が始まるうとしていた。誰かが「先生が来たぞー」と言い出し、クラス中が着席ムードに包まれていたらだ。私はあとちょっとで自分の席へ戻れる所だったのに、足を止めてしまった。

何故か。

入り口から姿を見せた先生が……。

「えー、今日から。出産のため休みに入った加藤先生に代わって、社会を教える事になりました。睦道むつみちです、よろしくな！」

教壇に立った、ガツシリとたくましい体格の男の先生はそう挨拶をして黒板に字を書いていた。『睦道元太』。先生の、名前だ。

（ゲイン！？）

私は悲鳴を上げそうになる。幽霊でも見たような。

おかしい。

おかしさは、まだ続く。

私は日向ヒナタに誘われ、お昼のお弁当を持って何処か広い場所へと求めて廊下を横並びで歩いていた。

すると、廊下の窓から外へ向けての盛り上がりを見せている生徒達の集まりがあった。ちょうど進行方向先にあって、私と日向も「何だろう？」と窓から外を見てみたんだ。

ココは3階だった。外の、下を見下ろす。校庭がよく見渡せた。驚いたのは、校門の所であった。

一台のフェラーリが我堂々と道の真ん中で停車している。居ないけれど、通行人が居たら絶対通れないし邪魔で、迷惑だと思える停め方。何だろっ誰だろっ？

やがて、年のそこそこいった男の運転手が降りてきて後部座席のドアを手で開けて。中の人が出てきたのだけれど……。

私は遠目だったせいもあって何度も目をこすってしまった。睨むように見て、目を疑う。

腰に手を当てて踏ん返り返っていたのは。その、小さなまだ幼い少女とは。

「真崎イ！ 出ていらっしやい！」

少女の甲高い声が校内にまで届いて響いている。学校中の関心の的だった。

「あの子、誰!?」「ほら、あの黒っぽい服の女の子。夏島企業の一人娘で……」

辺りでは、初めて聞いた情報が飛び交っている。

(……蛭ちゃ、ん……!?)

私だけが、全然違う方向に考えていたに違いない。だって。

横分けして上部に束ねた髪。真っ黒そうな服と瞳。威張ってそんな態度といい。

私が知っているまんまだ。違うと言えば、そばに……。

「あれ、夏島真崎先輩じゃない？」

廊下の人だかりの中から、生徒の誰かが声を上げた。私が名前に反応してまた外を見るとだ。校庭の真ん中を、急ぎ足で駆けて行く

少年の背中が見えた。

（あああ！）

私はまた心の中で懲りずに叫ぶ。これで揃った。

蛍と紫のコンビ。

校舎から出てきた少年とは、学生服を着ていたけれど。何と紫くんだった！

（蛍がお嬢様あ！？）

私の足元がヨロめくと、日向が噂に補足して……私はさらにヨロめいて壁にもたれかかり、すがつた。

「ああ、真崎先輩ね。あのワガママお嬢様の、義兄妹。有名でしょ陰じゃ」

私は知りません。私の顔がそう言っている。

そんな調子だ。

何でこんな展開になってくるんだろうか。信じられない。

日向が、放課後一緒に帰ろうと言ってきてくれた。すっかり親友になっていた私達。違和感は暫く残り続けてはいるけれど、何とかなりそうだった。慣れていきそうだった。

それで、今度は学校帰りに。部室までついてきてくれないかと言われる。

「部費、部長に渡しにいかなくちゃと思ってさ。悪いけど、ちょおつと付き合って」

日向は可愛らしく笑いながらウィンクしていた。うん、いいけどね、と。私、顔はニコニコと笑って返してはいるが、頭の片隅で『予感』していたんだよ。

部、長、ね……。

予感の中する。期待を裏切る事はなく。

日向は吹奏楽部に所属しているらしく。音楽準備室の引き戸を開

けた。

中に居たのは、2人。ただし一人は制服ではなくて、私服だった。落ち着いたセピアトーンのシャツを着に、ジーンズパンツの……高校生くらいに見える男の子。茶髪だ。

よく知っている顔が並んでいる。

2人とも。

「わあ水葉先輩。遊びに来たんですか？」

日向が茶髪の男の子の方を見て嬉しそうに駆け寄った。窓側の棚に腰掛けていた彼は、立って日向を迎える。

「よお、久しぶりじゃん。元氣そうだな部の奴ら。学校さぼってここに来てただけけど、あんま皆変わってねえ」

立つと、背が高かった。モデルみたいだ。格好つけているのかと思ったのに、微かに笑った顔は自然に大人びている。知性派に見えた。

水葉先輩と言われた彼　カイト。

「で、その手にある封筒。部費、持ってきたわけね。早くちょうだい」

横で髪をかき分けながら片手を差し出すのは、鷓ひたき。何だこのコンビ？

鷓はカイトと違って偉そうで、格好つけてるみたいに振舞う。まあ……これが彼の性格なんだと思えば特に不思議じゃない。知っているままで安心すら覚えるわ。

「勇気。紹介するわ、初めてでしょ？　OBの水葉快都先輩と、こっちは吹奏楽部長の花鳥鷓先輩。部長はフルート担当で、水葉先輩はピアノ担当だったんだ」

と、日向が私に紹介してくれた。

「今はドラム一色。一式買ったんだ。中古だけど」

カイト　水葉先輩は、腕を組みながら少しだけ口元で笑っている。

「へええ。カッコいい〜！ 器用ですよ〜！ 何でもこなせちゃう」

日向はとても素直に感動していた。それを見て思うんだけどまさか、水葉先輩の事が好きだとか日向。……ねえ？

私がどう反応しようかと考えているとだ。水葉先輩……こう呼ぶのには、抵抗があつて慣れないけれど。水葉先輩の辺りから、携帯の着信音のような音楽が流れてきた。ピロピロピロ……変わった軽快なベル音だ。

「おっと。芽野だ」

知らない名前を呼ぶ、水葉先輩。ポケットからau携帯を取り出してすぐに電話に出た。

「おう。はは、サボったのバレた？ 今帰る。じゃな」

それだけを言つて切る。芽野つて誰だ？ もしやカノ……。

私よりも、日向の視線の方が水葉先輩を鋭く突いていた。私達の注目を気にしてか、電話をしまいながらクスツと笑い。

「イトコ。バンド組んでるからさ。学校サボったの怒られた……というわけで帰るしー。鶏い、また来るわー。ギターの件、また考えといて。じゃな！」

「へいへい。僕はやる気ないけどね」

そんな会話をして去る。背中を見守りながら、寂しそうに口を尖らせている日向。……やっぱり？

「バンド活動、いいなあ。私がギター弾けたら、入れてもらえるんですか、先輩？」

と、日向が聞いてみると鶏はフフ、と含ませて日向を笑った。「さあ？」

真つ黒な瞳でからかっているみたい。あんま気持ちのいいもんでないけれど。「ちえ」

舌打ちしながら、日向は私の肩を叩いた。帰ろう、と促しながら。「うん」

帰り、校内道中、職員室前の廊下を通った時だ。

ゲイン 睦道先生が、女生徒数人に囲まれて困った顔をしていた。私達は通りすがら、様子を窺ってみていたら。

どうやら写真を落とした所を、生徒に拾われたらしい。その写真とは、奥さんの写真で……。新婚ホヤホヤ、新居ピカピカ、ラブラブ真っ最中らしかった睦道先生は、生徒達の尋問にあっている渦中というわけだった。

私達は……通りすぎる。

私の心臓は、鍛えられていった。もう何が起きても大丈夫だ。たいてい驚かなくなっている……どんな形で、皆が登場しようとも。

校門を出る時、ハルカさんとレイに遭遇する。

ハルカさんは制服姿で、レイは白衣にアルミケースを片手にぶらさげていた。髪の色は黒いが、ハルカさんは栗茶に見える。それはそうと……何だ何だあ？

白い普通車に乗り込もうと、レイは運転席側で。横に付き添うハルカさんに話しかけていた。

「明日、3時に検診だ。また迎えにくるから、無理はするな。わかったか」

厳しい表情のレイは、言い聞かせていた。ハルカさんは「……はい」と静かに頷いている。

2人の脇を通りすぎた後、日向がボソツと私にだけ聞こえるように言った。

「春香先輩、この前部活中に倒れちゃったんだって。医者がつくなんて、よっぱど悪いのかなあ体」

日向のおかげでわかったけれどね。レイは医者で（何歳になって

んだろう）、ハルカさんは……春香という、私達の先輩。そんなで体が弱いつて？ ふふうん。

部活とは、何部なんだろうか。その優雅さで茶道か華道が似合いそうな気がした。意外と将棋部だったりしたら、私は笑う。こんな世界。

「あ、ちょっとお参りしてこ。今度、弟がサッカーの試合でき。拜んできちやお」

帰路を歩いていたら。いきなり日向はそう言って、道すがら見えてきていた神社の境内にと走り出す。結構バタバタと慌ただしい性格なのか、人ともぶつかりそうになりながら。「あ、ごめんなさい！」
「いえ……」

日向に頭を下げられている女の人。杖を持ち歩いていたようで、落としかけたのを私が先に拾ってあげた。

「ありがとう」

微笑んだ優しい顔。お礼を言いながら、行く道を再び歩き出した……様子から盲目らしい、女の人。

トキだ。“時の門番”の。

懐かしい。

私は遠ざかっていく背中を目で追っていた。

……その後で気がついたんだけど……。

境内に入る前、鳥居のそばで竹のホウキを使い落ち葉やゴミを集めているのは……。

さくらだ。

巫女だった。整った顔立ちは、崩れそうにない。

拝み終わった日向と合流して道を歩くと、一人のお坊さんが立っていた。立ったまま、動かず目を閉じている。瞑想中なのかな？

お坊。そうです。

紫苑だった。

……

向こうの世界の住人で。もう会えないと思っていた人達が次々と現れていく。

慣れるって怖いかも。

たとえ家に帰ってからテレビをつけた時に、アジャラとパパラがデュエットで歌手デビューしていたのを目の当たりにしたとしても「へえー」……そんな軽い驚き程度で済んでいた。

デビューして一週目でオリコンチャート初登場一位。デビュー曲は『TENJIN SUMMER』。牛耳ポップビートが牛耳萌え素と上手くコラボし、若者プラス牛耳オタク魂に火をつけた。グッズ展開上でも牛耳は市場を牛耳っている。流行語大賞候補は『モウ！ スーン』で決まりだと世間では言われているようだ。どうでもいい。

どうなってんだらうか。この世界……へえー。

「勇気ー。ちよつと店に来ーい」

学校から帰ってきて着替えた後、部屋に居た私を一階からお兄ちゃんと呼んでいた。

「はいはい。今行くー」

と、私はせつかくつけたテレビの電源を消して、呼ばれている方へと階段を駆けおりにいった。そうそう、昨日。働き手が足りないからって店を手伝って言われてたっけな。それを思い出していた。

私あのれんをくぐって店に出ると、待ち受けていたのはお兄ちゃ

んだけではなかった。

「初めまして。菜木麻理亜です」

長い髪を後ろに束ねた、背が高めの女の人。スレンダー美女が居ただのた。

「マ……」

私の口が、『ま』の形で止まってしまっている。無理もない。

「どうした勇氣、知り合いか？」

何にも知らないお兄ちゃんは、ハテと変な顔をしていた。「い、いやあ、何でも」

手を振りながら笑って誤魔化す私。お兄ちゃんは気にせず、麻理亜さんの紹介を始めた。

「バイト募集の張り紙見て、来てくれたんだよ。明日からさっそく働いてもらうから、勇氣もわからない事とか聞いたり教えてあげたりしてくれ」

私は緊張しながら、まず自己紹介を簡単に。「勇氣です。よろしくお願いします」

愛想気持ちよく麻理亜さんは答えてくれた。「よろしくお願いしますね、勇氣さん」

本当のお姉さんができたみたいだった。とても心臓がドキドキして。

「じゃ、今日はこれで。明日からよろしく」

挨拶を済ませ、お兄ちゃんに出口まで送られて。麻理亜さんは帰っていった。

マフィア。

私は、心の中で見送る背中にそう呼びかけていた。

「じゃあ勇気。今日は、店、手伝ってくれな」

お兄ちゃんが言っただけで仕事に戻っていく。

後に残された私は頷いて、部屋へエプロンを取りに戻っていった。
(嬉しい……！ マフィアが、バイトに来てくれるなんて！)

夢じゃないよね？ と私の足が浮き足立つ。滑って転んでしまっ
たらどうすんだらうね。ふふ。

すっごくこれからが楽しみになった。マフィアが本当のお姉さん
だったらって、今まで何度思ってきた事だろうか。バイトになった
だけで、姉妹になった訳じゃないけれど。とにかく距離が近くて、
すっごく嬉しかった。

ああ、楽しみ。明日！

エプロンを探して、タンスを開けたり机の上に色々とのっかって
いる物をゴソゴソとまさぐっていた。昨日の今日だったから、物の
片付けがまだできていなかったりするんだけど。

そんな中。ヒラリ、と。

机の上から紙が数枚、続けて落ちてしまった。「おっと」

私は拾う……何の紙だったっけと見て気がついた。

“七神創話伝”

第一章 “序章”

この世に四神獣 蘇るとき 千年に一度 救世主ここに来たれり
光の中より出で来て……

……

旅の途中、メモってきた伝説。

今では、もう懐かしい思い出になってしまっただろうかな。私を成長させてくれた、変な言い方かもしれないけれど小っぼけな大冒険。

望みのままに、望みじゃない世界だった。

ううん。……私が望めば。

きっと新しい世界が、自分の手で造り出せる。

落ちたメモを拾い上げて。

書かれていた文を一つ一つ……大事そうに目で追っていた。すると。

「ん……？」

奇妙な事に気がついた。文が、足されている。「え？」

一瞬だけ、寒気すら感じた。書いた覚えのない文字が、最後に付け足されていたからだだった。

いつの間に……そして誰が？

「どうして……」

私は、読めるはずのない文字を見る。日本語でもない、英語でも中国語でもない、見た事もない字で書かれている。私には読めないはずだった。

しかし。

「わかる……」

何故だか、私はその書かれた文字や文章が読めたし、理解ができた。どうして？

とにかく、読んでみた。書かれていたのは“七神創話伝”、第七章の……章。

初めて聞いた、まるで付け足されたかのような内容でもあった。

『第七章 “新たなる世界”』

帰還した救世主 元の世界へと戻る
だがそこは新世界 救世主のもとに
新たな世界が 広がるだろう
』

「天神様……？」

涙が出そうだった。

天神様でも、こちらの世界の神様でもどちらでもいい。

ありがとう、会わせてくれて。私の寂しさを紛らわせてくれて。

皆、ひとりだね。神様も。

けれどひとりじゃないんだね。

皆が居る。

何だかんだで。おかげで、私は生け贄にもならず。こうして今も
生きているんだ。

生きているからこそ付け足された“第七章”……。

私は、メモを胸に抱き締めた。

「勇気ー！ 支度はまだかあ〜」

感動に浸っていると、遠くからお兄ちゃんの声が元気に聞こえて
きた。

「はああい、今行くー！」

私はエプロンをやっと見つけて、持って部屋を出ていった。

店では、夕方を過ぎると仕事合い間のおじさんや、常連さんでカ
ウンターがいっぱいになり騒がしかった。私は物を運んだり片付け
たり注文を取ったり奇跡的に落としかけた皿を割らずに済んだりと
忙しく、働いていた。

今まで、あまり手伝わなくていいから勉強してると、お兄ちゃん
に言われてきたけれども。

こつやって手伝える事ができる年齢にもなったんだろうか。成長したなって、認めてもらえたみたいで。少し嬉しかった。

「勇気。そろそろ閉めるから、のれん片付けてきて」

「はい」

お客さんで、最後の一人が帰っていった頃。厨房で始終忙しいお兄ちゃんに私は言われて玄関先へと小走った。

忙しかった今日という日も、これで終わる。終わりが近づいてきていた。

「……」

外へと出て、月が雲に隠れているのか暗い夜空を眺めて。

私は……何か大切な事を忘れているような感覚に包まれた。

(何だっけ……すごく大事な事だったと思うけど……)

暫く……立ったまま、思い出せと脳に指令を出してみる。しかしなかなか思い出せないでいた。

そんな気持ちのよくないまま、上部に掛けてあったのれんを外そうと手を伸ばした。すると、キラリと手元が光ったのを見て「あ」と声を上げる。

手元で光ったのは、セナにもらった石のブレス……ああ！

「セナ！ ……セナは!？」

焦ってつい大声を出してしまった。パラパラと、まばらに通りがかっていた人が見づらそうに私を見て過ぎ去っていく。通行人に気をかけている場合じゃなかった……セナは!？

ヒナタ、ゲイン、カイト、マフィア……他の、知っている皆には会った。でもセナは。

まだ会ってない。何で!？ どうして!？

肝心な人に出会ってないじゃないか……！

私は興奮して両手を握り締める。どうして忘れてしまっていたのと、自分を責めていた。

かなりの自己嫌悪に陥ってしまって、歯を食いしばって地面を見る……睨んで。そして……落ち着いた。「……」

穏やかさを取り戻した後。

私は、はあとため息を一つ。少しだけ白い吐き出した息は空気に溶け込んで。

言ってたって何にもならない空しさを、肌を感じていた。

セナ！

セナ……会いたい。

私は、両手を組んで祈った。

無駄かもしれないけれど、とにかく祈った。今すぐは無理でも、明日なら。明後日なら。

一週間後でもいい。皆と同じに、同じ世界で出会える事ができるなら。

こんなに素晴らしい事ってない。だから。

セナが好きなんだ。

会わせて下さい、どうか。

会わせて……！

……

……

……冷たい風が、吹きすさぶ。

「ハックション！」

私のくしゃみは、風で消された。「うっ……寒い」

小刻みに震え出した私は……肩を落とす。

「風邪ひいちゃうよね……中に入る」

のれんを持って、諦めを身に染み込ませる。

人気もなく、遠くで犬の吠える声が聞こえている以外は、静かだった。

せつかく月が雲の陰から輝き現れてくれたとしても。何の意味もない。そこにあるだけだ。

ありがとう、お月様。姿を現してくれて。

さ、店に戻らなくちゃ。中でお兄ちゃんが待っている。

私はドアに手をかける。お兄ちゃんの仕事を、手伝わなくっちゃ。そう思ってた。

……

音がする。

騒がしい、生活音だ。始めは小さかったけれど、段々と音は大きくなって何かが近づいてくる音。

車じゃない、乗り物の音だ。オートバイの音。オートバイだ。しかも。

一つじゃなかった。

「んん？」

ココは、所々商店があるけれど住宅が並んでいる地域だ。そう、騒音なんて発生しない。ましてや……。

夜に？

「うわっ」

ぼつっと見ていたらだ。店の前を、一台のスクーターが走ってい

った。若い男の人が乗っていたけれど、ヘルメットで顔はわからなかった。

風を切って行ってしまった。すぐ後にも。

2、3台めと続いて同じような小型のオートバイが通過していった。中には、一台のバイクに2人乗りしているのも。

バイカーの集団だったんだ。

(危ないなあ……向こうの大通りを通ればいいのに。こんな狭いトコ走っちゃって)

私は嫌な顔を見せないように、店の中へと入っていきこうとした。その時だった。

「危ねええ！」

「はっ!?!」

私が振り返ると、目の前に一台のオートバイがこっちに向かって飛び込んできた。

「きゃああああー！」

悲鳴。私は屈み込んで、キツく目を閉じ。うずくまったまま、耳を塞いだ。

……!

衝撃音が小さく聞こえた。耳を塞いでいたから、小さく。……い、一体何が……?

恐る恐る目を開けてみると……私が屈み込んでいたのとは僅か数メートル先向こうの家の垣根にて……突っ込んだオートバイが見えた。

「ひゃっ……」

小型だったけれど、前輪部分は垣根に突っ込み隠れて見えやしない。それより。

人は、何処いった?

「セーフ！」

何と、乗っていたと思われる人物は。私が釘付けになっていた才

「トバイとは違う、離れた所に居た。「????」私の方へと近づいてくる。」

半球型のヘルメットを被っていたのをとった。

暗がりで見えにくかった顔は、私の瞳に明らかになって映ってくる。

「あ……」

月の光が、感動を後押ししてくれているようだ。照らされた影が地に伸びて、人の姿形その存在を、確かなものにした。

端正な顔は、記憶の中とは変わらない。ヘルメットをとった時に微かになびいた髪は、女の人かと思った。品よく、ムダのない動きをしている。

本物だ。夢じゃない。

目は、真っ直ぐ私を見ている。見つめられると、こっちは熱く焦げてしまう。意志を持った視線。彼、は。

「セナ」

間違いなかった。

「上手くかわせたみたいだな。びっくりさせてごめん」

そう言つと、はー、と。重い息を吐いた。「もうダメだ。あのスクーター」

目に見えて激しく残念がっている。そんなガツカリしなくても、と私は苦笑いしていた。

「無事ならいいじゃん。バイクはまた、修理すればさ」

果たして修理で済むのかどうだかはわからないけれど。とにかくそう言つて励ましてみた。

彼は、私を横目で見ながら、何度も何度も顔を動かして難しい顔をしている。

「何だ何だ……事故か？」

ドヤドヤと、店の中からお兄ちゃんが登場。気がつけば、一人、また一人と。人が家の中から顔を覗かせたり、玄関から心配そうに

サンダル履きで出てきたりしていた。

「あゝあ……こんな狭い道走るから」

何処かのオヤジに野次られたりして。

聞いたセナ……彼は嫌だ嫌だと素振りを見せて、手を振っている。

「ちよつとブレーキが利かなかつただけだつっつの」

小声で不満を漏らしている。私には聞こえてしまった。また、苦笑い。

「さて、と……」

私は空を見上げた。相変わらず、暗い空。小さな星達と、雲のかがつていない月が浮かんでいる。

セナが会いに来てくれた。私の最後の願いが叶う。嬉しすぎる、この状況。

飛び上がった、わめいて、喜んでもいいのだろうか。

セナに飛びついてもいいんだろうか。本当にいいんだろうか。

「あ、そういえばよお。お前。さっき」

「え？」

人だかりができていく中で、彼に並んでいた私は顔を見上げた。

何だろう？

全然悪気のない態度な彼は、私に聞いていた。

「セナ、って。何で俺の名前が瀬名せなだって知ってたんだ？ エスパ

ー？」

……

私が今日見るだろう夢で、記憶の中のセナは言う。

『また逢おうな……！』

うん。

そうだね。

この世に四神獣、蘇るとき。

また私は旅に出るよ。

光を求めて。

待っていてね。どうか私を待っていて。
どの世界でも。

……

「また、逢おうねええー！！」

《END》

最終話（新たな世界）（後書き）

【あとがき】

滑り込みセーフの最終話となりました。危うく日が変わる所でした。これまで無遅刻無欠席な連載だったのに、最後の最後でこんな危なっかしい綱渡りをする羽目になるとは……いやもう、間に合わないかとほんとにハラハラしました（大げさです；）。

1年2か月くらいでしたが、ここまでお付き合い下さった温かい読者の皆様へ……ありがとうございます。とても自信に繋がったと思います。やればできんだあゝ。よ、っと。

語り尽くせないかも、な今作については。また、そのうちぐぐぐだとブログにでも書こうかと思えます。誰が見るんだろうかと思いつながら。

（ぐぐぐだ言っているブログ <http://ayumanjyu.u.blog116.fc2.com/blog-entry-136.html>）

絵も、最初と最後でだいぶ変わりましたね。はは。

感想など何処でもお気軽にどうぞ。作者、あんまり評価なんぞ細かいこと気にしませんので。

携帯版（本文分割・カット版）あります。長文が苦手な方にも。きつとどうぞです

<http://ncode.syosetu.com/n3678e/novel.html>

宣伝ですが、ブログハウス出版より共著本第2弾を出版しています（第1弾もあります）。

第2弾は、短編で2ページ掲載です。詳しくはブログにて。アマ

ソノ他書店でも小部数ですが販売中です（無いかもしれませんが…）。

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-119.html>

ブログコメントかメッセージでも頂けたら、サイン付きでお売りもしています（いらなかな 汗）。在庫も少ないですので、無い場合はどうぞご了承ください。

それでは、また何処かでお会いいたしましょう。

2008年12月30日 コタツにて あゆみかん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922c/>

七神創話

2010年10月8日10時50分発行